海漢文叢
晉劉生仿

昭和六年三月十五日印刷
昭和六年三月十八日發行

第二十回配本

昭和漢文叢書
莊子新釋
（卷下）

不許複製

著作者　坂井喚三
東京市神田區北神保町十一番地

發行者　辻本卯藏
東京市神田區今川小路二丁目一番地

印刷者　山縣精一

東京市神田區北神保町十一番地
發行所　弘道館
電話九段一三六八・一三六九番
振替口座東京八一一五番

印刷所　山縣製本印刷株式會社

いが、愈ゝ得意になつて之こそ古の道より貴いことだと曰ふのは危險思想だ。惠施は自己能力の擴充を以て滿足せず、精神を凡ての物に散亂して厭ふことなく、どこまでも雄辯を以て名を揚げようとして居る。惜いかな、彼は豐かなる才能を徒らに放散して得る所なく、物の末を逐うて本眞の性に立ち反ることを忘れて居る。これ響を止めようとして聲を張り上げ、影を避けようとして懸命に走るやうなもので、愈ゝ求めて愈ゝ得られない、誠に悲しむべきことではないか。

語釋 飾二人之心一(宣云ふ「飾は蔽なり」と。)　○易二人之意一(又云ふ「易は亂なり」と。)　○辯者之囿也 又云ふ「辯者その中に迷うて出づる能はず」と。　○此其抵也(兪樾によれば「猶は比其略也と云はんが如し、上文の卵有レ毛、雞三レ足以下皆是れなり」。焦竑は柢は本なりと解す。之によりて、日以二其知一云云するのが惠施の本領であると解するも可。宣穎も「惠施他の長所なし、故に辯士と奇異をなす、心を存すること此くの如きに過ぎず」と云ふ。)○存レ雄而無レ術(因に「雄を守るを道となす時は則ち雌を有するは道に非ざることと知る可し」とあり。上文に知二其雄一守二其雌一とある參照。)　○不レ適也(因に「適は和なり」とあり。)　○弱二於德一、强二於物一(正義に「心に得る者甚だ弱くして、外に辯ずる者甚だ强し」とあり。)　○其塗隩矣(塗は道なり。因に「隩とは言ふ心は其の小にして暗く、六通四辟の道に非ず」と。宣云ふ「迂曲にして大道に非ず」と又通ず。)　○何庸(宣又云ふ「無用なり」と。)　○夫充レ一尙可、曰二愈貴一レ道幾矣(因に「其の一偏の能を充て尙猶ほ可なり。若し此れ其の愈〻道より貴きものと曰はゞ、亦幾殆なり。」)　○駘蕩(釋文に「司馬云ふ、放散なり」と。)　○是窮レ響以レ聲、形與レ影競走也(宣注に云ふ「皆本を知らざるの喩なり」と。)

莊子新釋 下卷終

なり。其の物に於けるや、何ぞ庸ひん。夫れ一に充てば尙ほ可なり。愈〻道より貴しと曰はゞ幾し。惠施此を以て自ら寧んずること能はず。萬物に散じて厭はず、卒に善辯を以て名を爲す。惜いかな、惠施の才にして、駘蕩して得ず、萬物を逐うて反らざること。是れ響を窮むるに聲を以てし、形と影と競ひ走るなり、悲しい夫。

大意 惠施の學術を論斷して文を結ぶ。

通釋 桓團や公孫龍等は詭辯家の仲間であつて、人の心を蔽ひ、人の意を亂し、口だけは人に勝つても心服させることが出來ぬ。彼等は辯論に迷ひ込んだ連中である。就中惠施は日々その知を恃んで人と辯じ立て、徒に辯論に勝れた連中と奇怪な說を吐いた。上に揭げたのが彼の詭辯の概略であつて一つとして取るに足るものはない。而も彼は辯口を以て自ら天下第一の賢者だと自惚て「我が辯論は天地の壯大なるに比すべきだ」と曰つた。然しながら彼は所謂其の雄を守るを知るのみで其の雌を守るを知らぬ、道術なきものである。南方に黃繚と云ふ變り者があつた、或る時惠施に對つて、天地が墜落したり陷落しない譯や風雨雷霆の起る理由などを問うた。惠施は遠慮もなく應へ、深く考へもしないで、あまねく萬物に就いて說をなし、喋々と辯じ立てゝ休まなかつた。益〻大風呂敷を廣げて置かなかつたが、それでもまだ說き足らない氣がして、更に奇怪な說を附加へ、たゞ人の說に反對したり、人に打ち勝つことのみを目標として居た。だから世人とも和合せず、德が貧弱で、向ふ息が強く、其の信ずる道は小であつて暗く、四通八達のものでない。天地の大道に由つて惠施の能を眺めたならば、丁度一匹の蚊や虻が骨折つて居るやうなものであつて、社會に對して何の功用もない。それも一個の能力を擴充するに止まるならばまだよ

對。偏爲萬物說、說而不休。多而無已、猶以爲寡、益之以怪、以反人爲實、而欲以勝人爲名。是以與衆不適也。弱於德、强於物、其塗隩矣。由天地之道、觀惠施之能、其猶一蚉一蝱之勞者也。其於物也何庸。夫充一尙可、曰愈貴道幾矣。惠施不能以此自寧。散於萬物而不厭、卒以善辯爲名。惜乎、惠施之才、駘蕩而不得、逐萬物而不反。是窮響以聲、形與影競走也、悲夫。

訓讀 桓團、公孫龍は、辯者の徒、人の心を飾り、人の意を易ふ。能く人の口に勝つも、人の心を服すること能はず。辯者の囿なり。惠施日に其の知を以て、人と之れ辯じ、特に天下の辯者と怪を爲す。此れ其の柢なり。然かも惠施の口談、自ら以て最も賢と爲す。曰く、天地其れ壯なるかなと。施は雄を存して、而して術なし。南方に倚人あり、黃繚と曰ふ。天地の墜ちず陷らざる所以と、風雨雷霆の故とを問ふ。惠施辭せずして應じ、慮らずして對ふ。偏く萬物の說を爲して、說いて休まず。多くして已むことなくして猶ほ以て寡しと爲し、之を益すに怪を以てし、人に反するを以て實と爲し、而して人に勝つを以て名と爲さんと欲す。是を以て衆と適はざるなり。德に弱くして物に強く其の塗隩なり。天地の道に由りて、惠施の能を觀れば、其れ猶ほ一蚉一蝱の勞するものゝごとき

ると止まつて居る所があるに違ひないし、又止まつて居れば行けぬ所から見ると、止つて居ることがないと考へられる　狗は犬でない、つまり狗と犬とは一物の兩名であるので、既に狗といへば同時に犬とはいへず、又犬と云へば同時に狗とは云へぬから、狗は犬でないと云ふことが出來る。黄馬と黒牛とは二疋であつて三つの名がある。なぜならば色は形以外のものであるから馬と牛とに黄黒の色を合せて三となる。白狗は黒い、なぜならば白とか黒とかは人が勝手に附けた名で本來のものでないから、さう云へる。孤駒に母なし、駒にはもとより母があるが、既に孤と名づくる以上は絶對に母がない。一尺の杖を毎日半分づゝ折り取つてゆけば何年經つても盡きることがない。以上の如き論題を携げて當時の辯者達は大將の惠施と論じ合つて止めることなく、あたら一生をこんなことに費して仕舞つた。

語釋　通釋中に詳かなり。

桓團公孫龍、辯者之徒、飾人之心、易人之意。能勝人之口、不能服人之心。辯者之囿也。惠施日以其知與人之辯、特與天下之辯者爲怪。此其柢也。然惠施之口談、自以爲最賢曰、天地其壯乎。施存雄而無術。南方有倚人焉、曰黃繚。問天地所以不墜不陷。風雨雷霆之故。惠施不辭而應、不慮而

わけは卵から出た雛は皆毛が生えて居る、それは卵の中に既に其の潛精力を持つて居る爲めである、だから卵に毛ありと云へる。鷄は三足だ、つまり鷄は足が二本であるが、其の歩むのは心があるからである。だから三本足と云へる。楚の都の郢は天下を有つ、それは郢は邊鄙であるが楚人は天下の中央だと思つて居るから、郢が天下を有つとも云へる。犬は羊となすことが出來る、それは犬と云ひ、羊と云ふも皆人が勝手に附けた名であるから、犬を羊と呼んでも差しつかへはない。馬に卵あり、つまり馬は胎生し鳥は卵生するが、生れると云ふ點から云へば同じことだから馬に卵ありと云へる。丁子に尾あり、ヒキガヘルには尾はないが、蝌斗の時分に尾があるのを見れば、丁子に尾ありと云へる。火は熱くない。火鼠が火中に住む所から見れば、さう云へる。山がモノを言ふ。空谷が反響する所からさう云へる。車の輪は地を蹍まないで行く、つまり車輪が絶えず運轉して居る所から見てさう云へる。目は物を見ない、それは暗い所では物が見えぬ、光の力を借りて始めて見える、目だけでは役に立ぬから、さう云へる。指は至らず、至りて絶えず、卽ち指が物を指す時は物に觸れないが指すことに因つて物を得る所からいへば、そこまで届いて間が絶れて居ないと同樣だ。龜は蛇より長し、つまり壽命の上からはさう云へる。矩は四角くない、卽ち矩はそれ自體もと方形ではないからさう云へる。規は圓くはない、之も前と同じ理窟で、規はそれ自體もと圓形ではないからさう云へる。孔は枘を圍まぬ、つまり枘が孔に這入るのは空隙があるからである。若し圍んで空隙がなかつたら這入ることが出來ぬ、故に鑿は枘を圍まずと云へる。飛ぶ鳥の影は未だ嘗て動かない、つまり鳥は動くが影自體は動かない。疾く飛ぶ矢にも行きもせず止りもせぬ時がある、つまり行くのに時間がかゝる所から見

卵有毛、雞三足。郢有天下。犬可以爲羊。馬有卵。丁子有尾。火不熱。山出口。輪不蹍地。目不見。指不至、至不絶。龜長於蛇。矩不方。規不可以爲圓。鑿不圍枘。飛鳥之景未嘗動也。鏃矢之疾、而有不行不止之時。狗非犬。黃馬驪牛三。白狗黑。孤駒未嘗有母。一尺之棰、日取其半、萬世不竭。辯者以此與惠施相應、終身無窮。

訓讀 卵に毛あり、雞は三足。郢は天下を有つ。犬以て羊と爲すべし。馬に卵あり。丁子に尾あり。火は熱からず。山、口を出だす。輪は地を蹍まず。目は見ず。指は至らず、至つて絶えず。龜は蛇より長し、矩は方ならず。規は以て圓と爲すべからず。鑿は枘を圍まず。飛鳥の景未だ嘗て動かざるなり。鏃矢の疾きも、行かず止まらざるの時あり。狗は犬に非ず。黃馬驪牛三つ。白狗は黑し。孤駒未だ嘗て母あらず。一尺の棰、日に其の半を取れば、萬世竭きずと。辯者此を以て惠施と相應じて、終身窮まりなし。

大意 前節に續いて惠施及び其の學徒の好んで用ひた論題を掲ぐ。

通釋 惠施及び其の學徒の好んで用ひた論題に種々奇拔なものがある。例へば卵に毛ありと云ふのがある、其の

と云ふ以上は際限があるから、窮りなしと云へない。又今日、越に往つたのは昨日越から來たと同じことである。なぜならば今日と云ひ昨日と云ふのも亦相關的のもので今日なくば昨日なく、昨日なくば今日なし、故に今昔の別はない。又往くとか來るとか云ふことも之と同じことである。故に今日越に往きて昔來るなりと云へる。次ぎに又環の連れるものは解き離すことが出來ぬやうに見えるけれども、連環は互に環の空な處を貫いて居て、環其のものを貫いて居るのでないから、決して解けぬ筈はない。次ぎに又天の中央は誰にでも分かる、それは燕の北とも、越の南とも云へる。なぜならば人は誰でも自分の居る處を以て中央だと思ふからである。次ぎに又差別感念を離れて萬物を我と同一に見て汎く愛すれば天地は我と冥合して一體となる。」惠施は斯樣な考へ方をして、自ら天下を大觀した積りで、世間の辯者連を諭したが、當時の人々で彼れの云ふことに興味を感じたものが多かつた。

語釋　厤二物之意一（釋文に「分別して事を歷說す」とあり。）　○天與レ地卑云云（成疏に「夫れ物情、見ゆる者は天高くして地卑く、山崇くして澤は下し、今道を以て之を觀れば則ち山澤均平、天地一致なり。齊物論に云ふ、秋毫より大なるはなく、泰山を小と爲すとは即ち其の義なり。」又釋文に「李云ふ、地亦以て天に比する時は地は天より卑し。宇宙の高き若きは則ち天地皆卑し、天地皆卑ければ則ち山と澤と平かなりと。」）　○日方中方睨（成疏に「睨は側視なり。西に居る者は呼んで中となすも、東に處る者は呼んで側となす。則ち中側なきなり。」）　○方生方死（齊物論に見ゆ。參照。）　○今日適レ越而昔來（成疏に「夫れ今を以て昔を望む、所以に今あり。昔を以て今を望む。所以に昔あり。今自ら今に非ざれば何ぞ能く昔あらんや。昔自ら昔に非ざれば豈に今あらんや。既に其の昔なく今なし。故に今日越に適きて昔來と曰ふも可なり。」此の句亦齊物論に引かる。）　○連環可レ解也（釋文に「司馬云ふ、夫れ物は形に盡く。形盡くるの外は物に非ず。連環の貫く所は環なきを（空の所）貫く、環不貫くに非ず。若し兩環相貫かざれば、連環と雖もめとより解く可し。と」）　○我知天下之中央、燕之北越之南是也（成疏に「夫れ燕越二邦相去ること超過、人情封執、各々其の方を是とす、故に燕の北、越の南、天下の中となすべきなり」。）　○大二觀於天下一（釋文に「所謂自ら以て最となすなり」とあり。天下で最も勝れて居ると思ふ。）

【大意】是れ本篇の第七段、惠施の學術を論ず。本篇の附錄なり。本節は惠施の詭辯的論題を揭ぐ。林希逸曰く、墨翟、宋尹、彭田、愼到の徒は猶ほ道を見ることの偏なる者と爲す。惠子の若きは辯を好むことを主とするのみ。故に道術風を聞くの列に預らず、たゞ篇末に於て之を言ふのみ。

【通釋】詭辯派の大家、惠施の方術は多岐であつて、その書は五車に積むほどもある。然し其の道は道理にたがひ、雜駁であり、其の言は理に合はず、事物の意味を歷說して次の如きことを曰つて居る。「外あれば至大ならず。故に大の極は外なきなり、之を大一と謂ふ。內あらば至小ならず、故に小の極は內なし、之を小一と謂ふ。極大と極小とは大小異なる如くなれども、空間を超絕して居る所から見れば同一である、故に大一小一と謂ふなり。同じ理窟から厚さなきもの（小一）は積むことが出來ぬが、其の大さは千里に至る（大一）。又地を以て天に比する時は地は天よりも卑いが、宇宙の高きに較ぶれば天地は共に卑い、要するに大小高低は比較上のことで絕對的のものでないから天は地よりも卑く、山は澤よりも平かであるとも云へる。日が中央に位して居る時は既に傾いて居る時である、なぜならば西に居るものから見て中央でも東に居るものから見れば中央ではない、日本の晝はアメリカの夜であることで分かる。又物が生きて居ることは、方に死んで居ることである、なぜならば死生も亦相關的のもので、生があつて死があり、死があつて生がある。生を離れて死なく、死を離れて生なし、されば生は死であり、死は亦生であると云へる。又物と物と大體に於て相同じく、部分的には同異がある場合を小同異と謂ひ、物が盡く相同じきか又は盡く相異つて居る場合を大同異と謂ふ。又天は無窮であつて南方も廣漠窮りがないやうに見えるが、既に南方

惠施多方、其書五車、其道舛駁、其言也不中。麻物之意、曰、至大無外、謂之大一。至小無內、謂之小一。無厚不可積也、其大千里。天與地卑、山與澤平。日方中方睨。物方生方死。大同而與小同異、此之謂小同異。萬物畢同畢異、此之謂大同異。南方無窮而有窮。今日適越而昔來。連環可解也。我知天下之中央。燕之北、越之南是也。汎愛萬物、天地一體也。惠施以此爲大觀於天下而曉辯者。天下之辯者相與樂之。

訓讀 惠施多方、其の書五車、其の道舛駁、其の言や中らず、物の意を麻して曰く、至大は外無し、之を大一と謂ふ。至小は內無し、之を小一と謂ふ。無厚は積むべからざるなり、其の大千里。天は地より卑く、山は澤より平かなり。日方に中すれば方に睨す。物方に生ずれば方に死す。大同にして小同と異なる、此を之れ小同異と謂ふ。萬物畢く同じく畢く異なる、此を之れ大同異と謂ふ。南方窮りなくして窮りあり。今日越に適いて而して昔來る。連環解くべきなり。我れ天下の中央を知る。燕の北、越の南是なり。汎く萬物を愛すれば、天地一體なりと。惠施此を以て天下に大觀せりと爲して辯者を曉す。天下の辯者相與に之を樂しむ。

以て己の考を述べ、常に物の拘束を受けず、一方に偏せず、又一端を以て物を見ない。天下をば沈滯溷濁であつて與に正言することが出來ないと看做し、そこで眞心の言を以て自得の境に導き、古聖賢の口を假りて眞理を說き、人物に托して廣く道理を述べ、獨り天地自然と往來し、凡ての物に對して傲らず、是非の區別をやかましく云はず、世の衆人と同處して厭はない。其の書は奇拔であるが巧に物情を描寫して居て傷がない。其の文辭は變化に富み不揃ひであるが幻怪な處があつて觀るに足る。それは彼れの德が內に充實して自然と文辭となつて現れたのであつて故意になしたのではない。彼は上、造化自然と遊び、下は死生を超越したものを友となし、萬物の根本大宗たる道に造ること、大にして廣く、深くして遠く、之と調和適合して上遂すと謂ふべきである。然しながら彼が世の敎化に應じて物情を解釋するや、其の理は豐富にして之を用ふれども盡くることなく、其の說き來る所は常に道を離れず、其の書は窈窕深遠であつて彼が胸中に得る所は言語の盡すべき所でない。

語釋 謬悠（成疏に「謬は虛なり、悠は遠なり」とあり。） ○荒唐（又「廣大なり。」） ○無端崖（人間世の無崖に同じ。） ○不以觭見之（正義に「觭は一端なり、一端を以て自ら見ざるなり。」） ○莊語（莊は正なり、莊語は眞面から言ふこと。） ○卮言、重言、寓言（皆寓言篇に出づ、參照。） ○精神（自然なり。） ○敖倪（成疏に驕矜なりとあり。） ○瓌瑋（釋文に奇特なりとあり。） ○連犿（釋文に「李云ふ、宛轉の貌と。一に云ふ、相從ふの貌、物と相從つて違はず、故に傷なきなり」と。） ○諔詭（德充符に諔詭幻怪之名とあり。其の釋文の李說に諔詭は奇異なりとあり。） ○終始（死生の如し、無終始者とは死生を忘るゝ至人を云ふ。） ○稠適而上遂（釋文に稠亦調に作るとあり。成疏に「遂は達なり。玄道に調適上達するなり」とあり。） ○其應於化云云（以下の數句、解に苦しむ。姑らく林希逸に從つて解く、「其の言皆無實自然と雖も之を世に用ふる時は敎化に應じて物理を解釋す。以て俗を化して理を明かすべきを謂ふ。其理不竭とは言ふ心は之を用ふるに盡きざるなり。不蛻とは其の言、道よりして來り道を蛻離せざるを謂ふ。芒乎昧乎とは其の書の深遠なるを言ふ。未之盡者とは其の胸中の得る所、言語の盡すべき所に非ざるを言ふ。」）

未之盡者。

訓讀 芴漠形なく、變化常なし。死與生與、天地と並ぶ與、神明と往く與、芒乎として何にか之き、忽乎として何にか適く。萬物畢く羅なりて、以て歸するに足る莫し。古の道術是に在るものあり。莊周其の風を聞いて之を悅び、謬悠の說、荒唐の言、無端崖の辭を以てす。時に恣縱にして儻せず、觭を以て之を見さざるなり。天下を以て、沈濁にして與に莊語すべからずと爲し、巵言を以て曼衍を爲し、重言を以て眞を爲し、寓言を以て廣を爲し、獨り天地精神と往來して、萬物を敖倪せず、是非を譴めずして以て世俗と處る。其の書瓌瑋と雖も、而かも連犿として傷むなきなり。其の辭參差と雖も、而かも諔詭にして觀るべし。彼れ其れ充實して以て已むべからず。上は造物者と與に遊んで、下は死生を外にし、終始無きものと友たり。其の本に於けるや、弘大にして而して辟、深閎にして而して肆、其の宗に於けるや、稠適して而して上遂すと謂ふべし。然りと雖も、其の化に應じて物に解くや、其の理は竭きず、其の來るや蛻せず、芒乎昧乎、未だ之れ盡きざるものなり。

大意 是れ本篇の第六段、莊周の學術を叙す。

通釋 又、古の道術の中には、其の行が恍惚寂寞として形迹なく、事物に順つて推移して常形なく、死生を超脱し、其の德、天地と並び、自然を友とし、芒漠恍惚として其の來往を把捉するを得ず。羅列せる萬物も一として心を歸するに足るものなしと達觀する一派があつた。莊周は其の風を聞いて悅び、虛遠の說、廣大の言、無涯の辭を

云云（諸本皆曰の字なし、前後の文例によれば之が無かるべからず。）　○歸然（有餘の大なるを形容して云ふ。正義に據りあるに因りて特に其の貌を狀すとあり。）　○曲全（委曲して獨全すること。即ち事物に順應して獨り身を全うする、）　○以深爲根、以約爲紀（深は深遠なる大道を斥し、約は簡約なる無爲を指す。老子第五十九章深根固柢とあり。此の句によつて解するも通ず。）

芴寞無形、變化無常。死與生與、天地並與、神明往與、芒乎何之。忽乎何適。萬物畢羅、莫足以歸。古之道術有在於是者。莊周聞其風而悅之、以謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭。時恣縱而不儻、不以觭見之也。以天下爲沈濁、不可與莊語、以巵言爲曼衍、以重言爲眞、以寓言爲廣。獨與天地精神往來、而不敖倪於萬物、不譴是非、以與世俗處。其書雖瓌瑋、而連犿無傷也。其辭雖參差、而諔詭可觀。彼其充實、不可以已。上與造物者遊、而下與外死生無終始者爲友。其於本也、弘大而辟、深閎而肆、其於宗也、可謂稠適而上遂矣。雖然、其應於化而解於物也、其理不竭。其來不蛻。芒乎昧乎

なす。曰く、堅ければ則ち毀る、鋭ければ則ち挫くと。常に物に寬容にして、人に削しくせず。至極と謂ふべし。
關尹老聃や、古の博大眞人なる哉。

大意 老子の說を列擧して以上を結ぶ。

通釋 老子はかう曰つて居る「雄を知りながら、而も柔弱を守り、潔白を知りながら、而も汚辱の地に居れば、天下の人皆おのづから歸服すること恰も衆水の谿谷に集り來るが如くである。」人は皆先んじようとするが、己（老子）は後たるを甘じ「天下の垢を受けよう」と曰つて居る。又、世人は皆實を取らんとするが、己は獨り虛を守りて曰ふには「凡て物は富藏すればする程不足を感ずるものであるが、自分は藏することをしないから常に不足を感ぜず、獨立自足、餘裕綽々である。身の行も安徐にして精力を費すことなく、無爲無作であつて、人の巧知を弄し、利を爭ふのがおかしい。」かくの如く世人は皆身を危くしても、福利を求めんとするが、己は獨り事物に順應して身を全うせんとして「とにかく咎を免れさへすればよい」と曰つて居る。更に又、深遠なる大道を根柢となし、節約なる無爲を綱紀となして曰ふには「物は堅いと却つて毀れ、鋭いと却つて折れるものだ。」彼は常に物に對して寬容であつて、人に對して刻薄でない。至れる人と謂つてよい。要するに關尹と云ひ、老聃と云ひ、共に古の偉大なる眞人であるわい。

語釋 知㆓其雄㆒、守㆓其雌㆒、爲㆓天下谿㆒、知㆓其白㆒、守㆓其辱㆒、爲㆓天下谷㆒（老子第二十八章に知㆓其雄㆒、守㆓其雌㆒、爲㆓天下谿㆒。知㆓其白㆒、守㆓其黑㆒、爲㆓天下式㆒。知㆓其榮㆒、守㆓其辱㆒、爲㆓天下谷㆒とあり、參照。）○人皆取㆑先、己獨取㆑後（同六十七章に不㆔敢爲㆓天下先㆒とある、參照。）○受㆓天下之垢㆒（同七十八章に受㆓國之垢㆒、是謂㆓社稷主㆒とある、參照。）○曰、無㆑藏也

も亡きが如く、心は寂然として水の澄めるが如くである。凡そ道に同ずるものは相和し、道を得るものは虚しきが如く、未だ嘗て人の先に立つことなく、常々之に隨ふのみである。是れ皆我が黨の本領である。

【語釋】在己無居（郭注に「物來れば應じ、應じて藏せず」とあり。）○形物自著（又「自ら是とせずして萬物に委ぬ」とあり。）

老聃曰、知其雄、守其雌、爲天下谿。知其白、守其辱、爲天下谷。人皆取先。己獨取後。曰、受天下之垢。人皆取實、己獨取虛。曰、無藏也、故有餘。巋然而有餘、其行身也、徐而不費、無爲也而笑巧。人皆求福、己獨曲全。曰、苟免於咎。以深爲根、以約爲紀。曰、堅則毀矣、銳則挫矣。常寬容於物、不削於人。可謂至極。關尹老聃乎、古之博大眞人哉。

【訓讀】老聃曰く、其の雄を知りて、其の雌を守れば、天下の谿と爲り、其の白を知りて、其の辱を守れば、天下の谷と爲ると。人皆先を取る。己れ獨り後を取る。曰く、天下の垢を受くと。人皆實を取り、己れ獨り虛を取る。曰く、藏むることなきなり、故に餘りあり、巋然として餘りあり、其の身を行ふや徐にして費さず、無爲にして巧を笑ふと。人皆福を求め、己れ獨り曲全す。曰く、苟くも咎を免れんのみと。深を以て根と爲し、約を以て紀と

通釋 又、古の道術の中に、道を精となし、物を粗となし、物資の充積を以て足らずとなし、淡然無欲にして道德を立場となすものがあつた。關尹や老聃は其の風を聞いて悦び、虚無の道を立て、唯一絶對を主とし、柔弱謙遜を以て外部に對し、虚心にして物を毀損せざるを以て内面の德とした。

語釋 以レ本(本は萬物の本、即ち道なり。) ○有レ積(粗なる物を蓄積すること。) ○澹然(無欲の貌。) ○神明(本たる道を斥す。) ○常無有(道を云ふ。) ○太一(亦道を云ふ。) ○濡弱謙下(皆老子處世の態度なり。老子第七十六章に柔弱は生の徒とあり。又第六十七章には敢て天下の先とならずともあり。)

關尹曰、在レ己無レ居、形レ物自著。其動若レ水、其靜若レ鏡、其應若レ響、芴乎若レ亡。寂乎若レ淸。同レ焉者和、得レ焉者失。未三嘗先二人而常隨レ人。

訓讀 關尹曰く、己に在りて居ることなく、物に形して自から著す。其の動くこと水の若く、其の靜かなること鏡の若く、其の應ずること響の若く、芴乎として亡きが若く、寂乎として淸きが若し。焉に同じきものは和し、焉を得るものは失ふ。未だ嘗て人に先んぜずして、常に人に隨ふと。

大意 關尹の説をあぐ。

通釋 關尹の言ふ所によれば「物來れば應ずるのみで、之に執着することなく、物の自然に任せて自ら恃むことなく、其の動くこと流水の如く、其の靜かなること明鏡の如く、其の物に應ずること響の如く、恍忽として有れど

がない。常に是非を論爭することを好む一般人とは其の態度が違つて居て、人の耳目を聚めることを避けて居るが、然し物を宛轉せんことを主とする迹方を免れない。其の謂ふ所の道は眞の道ではなく、其の言ふ所の是は非を免れない。之を要する彭蒙、田駢、愼到等は眞の道を知らないのであるが、道の大體は聞いたことのある連中である。

語釋 得不敎（宣注に「不敎とは不言の敎なり」とあり。） ○窢然（副墨に「逆風物を過ぐるの聲」とあり。正義にも「逆風、物を動かすの聲、以て其の過ぎて迹なきに喩ふ。」） ○悪可而言（副墨に「烏んぞ可として言はんや、烏んぞ不可として言はざらんや。」） ○常反人（正義に「人情是非を論ずることを好む。其の道獨り是非なきを以て主れりとなす。故に常に相反するなり。」） ○不聚觀（聚一本に見に作る、亦通ず。正義に「人の觀聽を聚めず。」） ○不免於魭斷（魭は刓に同じ、刓斷の才は前節に見ゆ。宛轉の意なり。正義に「こゝろ魭斷を主として未だ純ら自然に任かすること能はず。」） ○所言之韙（韙は是なり。）

以本爲精、以物爲粗、以有積爲不足、澹然獨與神明居。古之道術有在於是者。關尹老聃聞其風而悅之。建之以常無有、主之以太一。以濡弱謙下爲表、以空虛不毀萬物爲實。

訓讀 本を以て精と爲し、物を以て粗と爲し、積あるを以て足らずと爲し、澹然として獨り神明と與に居る。古の道術是に在るものあり。關尹老聃、其の風を聞いて之を悅び、之を建つるに常無有を以てし、之を主とするに太一を以てす。濡弱謙下を以て表と爲し、空虛にして、萬物を毀たざるを以て實と爲す。

大意 是れ本篇の第五段。關尹老聃の學術を論ず。三節に分けて說く。本節は其の總論。

怪訝を得るのみ。他人の口吻を借りて斷を作す。格調又變ず」と。）

田駢亦然。學於彭蒙、得不敎焉。彭蒙之師曰、古之道人、至於莫之是莫之非而已矣。其風窢然、惡可而言。常反人不聚觀、而不免於魭斷。其所謂道、非道、而所言之韙不免於非。彭蒙田駢愼到不知道。雖然、槪乎皆嘗有聞者也。

【訓讀】田駢亦然り、彭蒙に學んで、不敎を得たり。彭蒙の師曰く、古の道人、之を是とする莫く、之を非とする莫きに至るのみと。其の風窢然、惡にか可として言はんと。常に人に反して觀を聚めず、而かも魭斷を免かれず。其の所謂道は道に非ずして、言ふ所の韙は非を免れず。彭蒙田駢愼到道を知らず。然りと雖も、槪乎として皆嘗て聞くことあるものなり。

【大意】田駢等の道を叙し上を結ぶ。

【通釋】田駢も亦愼到と同じ考であつた。彼は彭蒙に學んで不言の敎を得た。彭蒙の師は「古の道人は是非超越の境地に至つて居るのだ」と曰つて居る。其の風は少しも迹の認むべきものなく、可とも不可とも何んとも言ひやう

鎚で打たれようが、丸くされようが、斷ち切られようが、凡てされるがまゝに任せ、外界の事物と宛轉推移し、是非の己見を捨て、世の煩累を免がれさへすればよいので、知慮を師とせず、算段を用ひず、魏然として高くとまつて居る。推されて始めて行き、曳かれて始めて往き、すべて無心無知を以て動くことは飄風の還るが如く羽の旋るが如く、又磨石の隧るが如くである。かく無心無知なるが故に身を全うして非るゝことなく、其の行動にも過なく、罪に陷ることがない。そは何故かと云へば、凡て無知のものは我見を立ても心配もなく、知慮を用ふる煩累もなく、又一擧一動が道理を離れないから、一生を通じて毀もなく譽もない。されば彼は「無知の物の如き境界に至ればそれでよいので、聖賢などの用はない。かの土塊は道を失つて居ない。あの無心無知の狀態が一等望ましい」と曰つて居る。然し世の豪傑連は共に笑つて曰ふには「愼到の道は生きた人間の行ではなく、死人の理窟に陷つて居るもので、徒に奇怪な思を人に與へるのみである。」

語釋　冷二汰於物一（解多くして定說を見ず。郭は以て聽放の如しと爲す、物のなり行きに聽かせること。口義には「冷汰は脱洒なり、冷然として物に疎汰して拘礙なし」。或は冷汰は淘汰なりと。羅氏の循本には「冷は淸冷の意、汰は洗滌の意、物を冷汰すとは猶ほ事に遇ひて脱灑なりと言はんが如し」と。羅說と口義とは相近し。今之に從ふ。）　○曰、知不レ知、將二薄レ知而後鄰一レ傷レ之者也（亦解多し。曰は愼到曰くなり。愼到を敍述し愼到の言を引くなり。薄は迫なり、鄰は近なり。言ふ心は七竅鑿たれて混沌死するなり。知不レ知は老子（第七十一章）に知不レ知上とある意とは異なる。）　○謑髁、縱脫（副墨には「皆無知無能の貌」とあり、今之に從ふ。正義には「謑髁は不正の貌、蓋し圓轉として職事に任ぜざるなり。縱放脫略、檢を行ふを事とせず」とあり。亦通ず。）　○椎拍輐斷（定說なし。皆物と宛轉する所以、姑らく自說を以て解す、通釋を見よ。）　○苟可二以免一（口義に「苟も世俗の累を免るゝを以て意となす」。）　○不レ知二前後一（又「思算せざるなり」とあり。）　○飄風之還云云（皆無心にして物と宛轉する喩。）　○無レ譽（毀字を省く。）　○夫塊不レ失レ道云云（林西仲曰く「塊は土塊、無知の爲なり。愼到以て道を失すとなす、死人に非ずして何ぞ。故に豪傑、之を笑ふ。徒に

焉。

訓讀 是の故に愼到、知を棄て己を去つて、已むことを得ざるに縁り、物を冷汰して、以て道理と爲す。曰く、知るは知らずと。將に知に薄りて後之を傷るに鄰からんとする者なりと。謑髁、任ずるなくして、天下の賢を尙ぶを笑ひ、縱脫、行なくして、天下の大聖を非り、椎拍輐斷、物と與に宛轉し、是と非とを舍て、苟くも以て免るべし、知慮を師とせず、前後を知らず、魏然たるのみ。推して後行き、曳きて後往く、飄風の還るが若く、羽の旋るが若く、磨石の隧するが若し。全うして非なく、動靜、過なく、未だ嘗て罪あらず。是れ何の故ぞや。夫れ無知の物は、己を建つるの患なく、知を用ふるの累なく、動靜に理を離れず、是を以て終身譽れなし。故に曰く、無知の物の若きに至るのみ。賢聖を用ふることなし。夫の塊は道を失はずと。豪傑相與に之を笑つて曰く、愼到の道は、生人の行に非ずして、死人の理に至ると。適に怪を得るのみ。

大意 愼到の學說を論斷す。

通釋 此の故に愼到は知慮を棄て己見を去り、常に已むを得ざるに至つて始めて應ずると云ふ立場に從ひ、物に對して洒脫的態度を執るのを以て道理に適つたことゝし、「知ると云ふことは反つて知らぬと云ふことであつて、知を事とするのは知に迫りて己を段々と傷はんとするものである」と曰つて居る。從つて無知無能を以て任じ自ら職事に任ずることなく美事を行ふことなく、天下の賢人を尙ぶを笑ひ、天下の所謂大聖をそしり、椎で擊たれようが

いては諸説あり、成疏には「理に依りて斷決す」とあり。口義には「私意と決去す」とあり。宣注には「係累を決去す」とあり。因には「決然とは猶ほ水の決するが如く、其の自ら流るゝに聽かせて主持することあるなし」と。今因に從ふ。趣レ物而不レ兩とは又因に「事に隨って趣き、兩意を生ぜず」と。）○齊二萬物一以爲レ首（正義に「其の學、萬物を齊しうするを以て首務となし、小大一の如く分別を超さず」と。）○不レ能レ辯レ之（辯は辨に同じ。正義に云ふ「大道は能く天地を包羅するも分辯する別なし。此れ天地と道と皆能する所あり能はざる所あるを言ふ」と。）○敎則不レ至（訓義に「物々各天性の良能を具ふ、敎を待たず。若し敎導を待つて之を無からしむれば、吾の敎必ず及ばざる所のものあらん」。）○道則無レ遺者（正義に「惟だ之と同じく道に歸する時は道は物を歸して未だ始めより遺すことあらず。大は大を成し、小は小を成し、偏からず然らざるの患なし。即ち所謂齊なり」。）

是故愼到棄レ知去レ己、而緣二不レ得レ已一、冷二汰於物一、以爲二道理一。曰、知不レ知。將二薄レ知而後鄰傷レ之者也。謑髁無レ任、而笑二天下之尙一レ賢也。縱脫無レ行、而非二天下之大聖一。椎拍輐斷、與レ物宛轉、舍二是與一レ非、苟可二以免一。不レ師二知慮一、不レ知二前後一、魏然而已矣。推而後行、曳而後往、若二飄風之還一、若二羽之旋一、若二磨石之隧一。全而無レ非、動靜無レ過、未二嘗有一レ罪。是何故。夫無知之物、無二建レ己之患一、無二用レ知之累一、動靜不レ離二於理一。是以終身無レ譽。故曰、至二於若一レ無知之物一而已。無レ用二賢聖一。夫塊不レ失レ道。豪傑相與笑レ之曰、愼到之道、非二生人之行一、而至二死人之理一。適得レ怪

物に於て擇ぶこと無く、之と倶に往く。古の道術是に在るものあり。彭蒙、田駢、愼到、其の風を聞いて之を悅び、萬物を齊しうするを以て首と爲す。曰く、天能く之を覆へども、之を載すること能はず。地能く之を載すれども、之を覆ふこと能はず。大道能く之を包めども之を辯ずること能はずと。萬物皆可なる所あり、不可なる所あるを知る。故に曰く、選べば則ち徧からず、敎ふれば則ち至らず。道は則ち遺すことなきものなりと。

大意 是れ以下三節は本篇の第四段。彭蒙、田駢、愼到の學術を論ず。此の節は其の總論。

通釋 又、古の道術の中には、公正にして阿らず、平易にして私なく、水の決するが如く、自ら流るゝにまかせて主持することなく、物の趣くがまゝに任せて可不可の意見を立てず、事に對して顧慮せず、知謀をめぐらさず、物に對して選擇することなく物と倶に推し移るものがあつた。かの彭蒙、田駢、愼到の徒は其の風を聞いて悅び、萬物を齊しうするを以て第一となして居る。其の說によると「天は萬物を覆ふことは出來るが、載せることは出來ぬ。又地は萬物を載せることは出來るが、覆ふことは出來ぬ。天地の大道は凡てを包容することは出來るが、之を辯別することは出來ぬ。かく天地と云ひ大道と云ひ、かゝる偉大なものでも出來ることゝ出來ないことがある。されば萬物皆可なる所もあり不可なる所もあることがわかる。だから吾等の先輩の言に「選擇をすれば一方に偏して周徧なことは出來ぬ。又小なる人間の知識を以て敎ふれば至極の所に達すること出來ぬ、たゞ道は細大遺漏することなく萬物を包容するものである」とある。

語釋 公而不レ當、易而無レ私(成疏に「公正にして阿黨せず、平易にして偏私なし」とあり。不當に就いては崔本に不黨に作り至公不黨と解す。是なり。)　〇決然無レ主、趣レ物而不レ兩(決然につ

て之に傲らんとするものでもない。」又曰く「君子は人を寛恕して苛刻な觀察をしない、又凡て身を以て事に當り他の物の力を假りない。」又彼等の考によれば、世の中に益の無いことは之を明かにするよりも止めたがましである。かくて彼等は外は攻伐を禁じ兵戈を止むるに努め、內は情欲の減削に務める。而して其の說く所には大小精粗の別はあるが、其の行ふ所は大體此の如きに過ぎぬから、亦一方術たるを免れない。

語釋 不レ爲二苛察一（郭云ふ「寬恕を務むるなり」と。）○明レ之不レ如レ已也（正義に「之を明かにするも益なし、明かにせざるに如かず」。）○其大小精粗云云（又「其の學の大小精粗、同じからずと雖も、行ふ所の大歸、僅かに是くの如きのみ」。）

公而不レ當、易而無レ私。決然無レ主、趣レ物而不レ兩、不レ顧二於慮一、不レ謀二於知一、於レ物無レ擇、與レ之俱往。古之道術有下在二於是一者上。彭蒙田駢愼到聞二其風一而悅レ之、齊二萬物一以爲レ首。曰、天能覆レ之、而不レ能レ載レ之。地能載レ之、而不レ能レ覆レ之。大道能包レ之、而不レ能レ辯レ之。知二萬物皆有レ所レ可、有一レ所レ不レ可。故曰、選則不レ偏、敎則不レ至。道則無レ遺者矣。

訓讀 公にして當せず、易にして私なし。決然として主なく、物に趣いて兩にせず、慮に顧みず、知に謀らず、

飽、弟子雖饑不忘天下、日夜不休。曰、我必得活哉、圖傲乎救世之士哉。曰、君子不爲苛察、不以身假物。以爲無益於天下者、明之不如已也。以禁攻寢兵爲外、以情欲寡淺爲內。其大小精粗、其行適至是而止。

訓讀 然りと雖も、其の人の爲めにするや太だ多く、其の自らの爲めにするや太だ少し。曰く、請ふ固より五升の飯を置きて足らんことを欲すと。先生恐らくは飽くことを得ず、弟子饑うと雖も天下を忘れず、日夜休まず。曰く、我れ活を得ることを必せんや、世を救ふの士に傲ることを圖らんと。曰く、君子は苛察を爲さず、身を以て物を假らずと。以爲へらく天下に益無きものは、之を明かにするは已むるに如かざるなりと。攻を禁じ兵を寢むるを以て外と爲し、情欲寡淺を以て內と爲す。其の大小精粗、其の行適に是に至つて止む。

大意 前節につゞく。

通釋 世間ではかく冷評するが、然し彼等は人の爲めにすること甚だ多くて、自身の爲めにすることは甚だ少ない。そして自ら曰ふには「一日五升だけのお飯で足るやうにしたい」と。それぽつちでは恐らく先生(宋鈃、尹文)も腹がふくれず、弟子も餓ゑるであらうが、それでも少しも天下を忘れず、日夜奔走し通しである。そして又曰ふには「我々は必ずしも自ら活きんことを期するものでもなく、又世の所謂救世濟民を看板とせる俗士の向ふを張つ

大意 是れ本篇の第三段。宋鈃尹文の學術を論ず、二節に分けて說く。

通釋 又、古の道術の中には、世俗に累はされず、物を飾らず、人に苛刻にせず、衆心に逆はず、天下を安寧にして民生を遂げしめ、自他の養足るを以て限度となし、其の餘を求むることなく、如上の事柄を行つて以て心の潔白を明かにするものがある。彼の宋鈃尹文の徒は其の風を聞いて悅び、上下均平な華山の形に象りたる冠を作り、之を戴いて其の主義を表示し、凡てのものに接するに區分を立てゝ相犯さしめないことを第一となし、人の心の容態を語りて、其の大切なることを高調して「心の作用は人と人との驩樂を和合し、延いては天下を調へるのであるから、お互に之を大切なものとして行きたいものである」と曰ひ、又人から侮られても恥辱とせず、人の爭を救ひ、攻伐を禁じ、兵戈を止め、要するに世の中の戰爭を絕たんとするのが主義であつて、之を以て天下を周行し、上は人君に說き下は民衆に敎へた。たとひ天下の人々がそれを聽き容れなくても、どこまでもやかましく說き立てゝ止めない。だから世間から「上下の人々に厭れながら、猶ほ、强ひて謁見を求めるもの」と冷評された。

語釋 不レ苟二於人一（章炳麟は苟は苛の誤となす。是なり。舊注の如く苟且と解する時は下句と倫せず。）○不レ忮（忮は逆なり、又は害なり。）○白レ心（因に「既に世を救ふに勞し、自ら率ずること又薄くして以て其の心の他なきを示すを言ふ」とあり。）○華山之冠（釋文に「華山の上下均平なり、冠を作りて之を象るは、己が心の均平を表はすなり」とあり。）○以二別宥一爲レ始（始は首なり。郭云ふ「相犯錯せしむるを欲せず」と、物を區分して互に犯さしめないことを第一となす意。）○胹二合驩一（胹は和なり。人の驩樂を和合すること。）

雖レ然、其爲レ人太多、其自爲太少。曰、請欲下固置二五升之飯一足上矣。先生恐不レ得

不累於俗、不飾於物、不苟於人、不忮於衆、願天下之安寧以活民命、人我之養、畢足而止、以此白心。古之道術有在於是者。宋鈃尹文聞其風而悅之、作爲華山之冠以自表、接萬物以別宥爲始。語心之容、命之曰心之行、以聏合驩、以調海內。請欲置之以爲主。見侮不辱、救民之鬪、禁攻寢兵、救世之戰。以此周行天下、上說下教。雖天下不取、強聒而不舍者也。故曰、上下見厭而強見也。

訓讀 俗に累はされず、物を飾らず、人に苟くもせず、衆に忮はず、天下の安寧にして以て民命を活かし、人我の養、畢く足つて止まんことを願ひ、此を以て心を白にす。古への道術、是に在るものあり。宋鈃尹文は其の風を聞いて之を悅び、華山の冠を作爲して、以て自ら表し、萬物に接するに別宥を以て始めとす。心の容を語り、之を命じて曰く、心の行は、以て驩を聏合し、以て海內を調ふ。請ふ之を置いて以て主とせんと欲す。侮られて辱とせずして、民の鬪を救ひ、攻を禁じ兵を寢めて、世の戰を救はんとす。此を以て、天下に周行して、上に說き下に敎ふ、天下取らずと雖も、強聒して舍かざるものなり。故に曰く、上下に厭はれて強ひて見ゆるなり。

脛無毛、相進而已矣。亂之上也、治之下也。雖然、墨子眞天下之好也、將求之不得也、雖枯槁不舍也。才士也夫。

訓讀 墨翟、禽滑釐の意は則ち是なり。其の行は則ち非なり。將に後世の墨者をして、必ず自ら苦しんで、腓に胈なく、脛に毛無きを以て、相進ましめんとするのみ。亂の上なり、治の下なり。然りと雖も、墨子は眞に天下の好なり、將に之を求めて得ざれば、枯槁すと雖も舍かざるなり。才士なる夫。

大意 重ねて墨子の道を論評して結ぶ。

通釋 之を要するに墨翟、禽滑釐は、禹の勤勞主義を宗旨と爲す者なれば、其の意は則ち是なれども、其の行ふ所は餘りに極端に馳せて是に非ず。若し彼の言に從へば後の墨者をして必ず自ら勞苦して股に肉なく脛に毛が無くなる程精進せしむるに止まるのみであつて、道に得る所はない。かくの如きは亂の至極で、治の最下である。とは云へ墨子其の人は眞に天下稀に見る勤儉を好む人で、今の世にかゝる人物を求めても容易に得がたい人物で、彼は其の身が顦顇枯槁しても決して之を止めない。されば彼を謂つて聖賢と云ふを得ざるも豪傑の士たるを失はないのであるわい。

語釋 相進（陳壽昌は相尙ぶと解す、亦通ず。） ○天下之好也云云（說多し。今は成疏に從ふ。「宇內、儉を好む一人のみ。其の輩類を求むるに竟に得るを得ず。顦顇此くの如きも終に休廢せず。性に率つて眞に好む。矯めて爲すに非ざるなり」と。） ○才士也夫（又云ふ「夫は歎なり。物に逆ひ性を傷つく、誠に聖賢に非ず。亦勤儉世を救ふ才能の士のみ」と。）

巨子爲聖人、皆願爲之尸、冀得爲其後世、至今不決。

訓讀 相里勤の弟子、五侯の徒、南方の墨者、苦獲、已齒、鄧陵子の屬、倶に墨經を誦して、倍譎して同じからず。別墨と相謂つて、堅白同異の辯を以て相訾り、觭偶不仵の辭を以て相應じ、巨子を以て聖人と爲し、皆之を尸と爲さんを願ひ、其の後世たるを得んを冀ひて、今に至つて決せず。

大意 墨家者流の分裂を敍す。

通釋 其の後、墨子の學派が分れて相里勤の弟子で五侯と云へるものや、南方の墨者で苦獲、已齒、鄧陵子のともがらは、倶に墨子の經典を誦しながら、其の執る所各々背反して同じからず、互に墨者の別派であると主張して堅白同異の詭辯を弄して訾り合ひ、奇偶は相等しなどの言を以て應酬し、各々其の派の大家をば聖人と稱して皆之を主と崇め、墨子の傳統を繼承せしめんことを願つたが、それはトテも駄目なことで、今に至るまで統一がない。

語釋 相里勤（韓非子の顯學篇に相里氏の墨ありとあるもの是なり。） ○五侯之徒（五侯は相里勤の弟子の名なり。一説には相里勤の弟子にして諸侯に仕ふる學徒と解す。） ○倍譎（倍は背なり。譎は成疏に「異なり」とあり。） ○觭偶不仵（觭偶は奇偶なり。陳壽昌曰く「不仵は不異なり。觭偶はもと異る。而るに相仵らずと曰ふ。此れ强辯の事なり」と。亦當時詭辯の一ならん。） ○巨子（釋文に「向云ふ、墨家その道理成る者を號して鉅子となす。儒家の碩儒の若し」と。其の派の大斗を云ふ。） ○尸（郭云ふ「主なり」と。）

墨翟禽滑釐之意則是、其行則非也。將使後世之墨者、必自苦、以腓無胈、

と爲し、跂蹻を以て服と爲し、日夜休はず、自ら苦しむを以て極と爲し、此の如きこと能はずんば、禹の道に非ざるなり、墨と爲すに足らずと曰はしむ。

大意 此の節、墨子の說を引き、其の學術を述ぶ。

通釋 墨子は其の道の本づく所を述べて曰ふ「昔、禹が洪水を塞ぎ止め、江河の下流に堆積した泥土を切り開きて之を海に注ぎ、中國は云ふまでもなく四方の未開地までも往來を通じた時、本流は三百、支流は三千、其の他小川は無數であつたが、禹は自ら槖や耜などを操つて是等の川を聚め整理した。それが爲めに股の肉は落ち、脛の毛はなくなり、烈しい風に髮を吹かれ、ひどい雨を身にあびるなど艱難辛苦して洪水を治め萬國を安らかにした。禹は古今の大聖人である、而も天下の爲めに肉體を勞すること此の如くであつた。」之に因つて、墨子は後世己の敎を奉ずるものに粗末な衣服を著せ、下駄や草鞋を穿かせて、日夜休まず、自ら勞苦することを以て道の至極と信じ、かくの如きことが出來なくては大聖禹の道ではなく、又墨者と爲すに足らぬと曰はしめて居た。

語釋 名山（釋文は山を以つて川の誤となす、是なり。） ○九雜（釋文に「九は本亦鳩に作る。聚なり。」崔云ふ、「治むる所、一に非ず、故に雜と曰ふ」と。） ○沐甚風、櫛疾雨（盧文弨は沐と櫛とを入れ替へとなす是なり。） ○裘褐（粗衣なり。） ○跂蹻（跂は下駄、蹻は革履、草鞋の屬。）

相里勤之弟子、五侯之徒、南方之墨者苦獲已齒鄧陵子之屬、俱誦墨經而倍譎不同。相謂別墨、以堅白同異之辯相訾、以觭偶不仵之辭相應、以

ば其の王道から去ることも亦遠しと謂はねばならぬ。

語釋 不レ怒、(因に「たゞ自ら責むるなり」とあり。) ○好レ學而博不レ異。不下與二先王一同上(不異とは因に「人に異なることを求めず」とあり。一説には博字の下にて句す。之によれば以上は先王の道に異ならざれども古の禮樂を毀る點に於て亦同じからずとあり。一節として存す。) ○桐棺三寸(桐は朽ち易し、棺材としては最も粗末なもの、三寸は棺板としては最も薄き寸方。) ○是果類乎(宣云ふ「果して人情に近きか」と。) ○大觳(郭云ふ「潤なきなり。」情味なきこと。)

墨子稱レ道曰、昔者禹之湮二洪水一、決二江河一、而通二四夷九州一也、名山三百、支川三千、小者無數、禹親自操二橐耜一、而九二雜天下之川一。腓無レ胈、脛無レ毛、沐二甚風一、櫛二疾雨一、置二萬國一。禹大聖也、而形二勞天下一也如レ此。使下後世之墨者、多以二裘褐一爲レ衣、以二跂蹻一爲レ服、日夜不レ休、以二自苦一爲上レ極、曰、不レ能レ如レ此、非二禹之道一也、不レ足レ爲レ墨。

訓讀 墨子、道を稱して曰く、昔は禹の洪水を湮ぎ、江河を決して、四夷九州を通ずるや、名山三百、支川三千、小なるもの無數、禹は親しく自ら橐耜を操つて、天下の川を九雜す。腓に胈なく脛に毛なく、甚風に沐し、疾雨に櫛り、萬國を置く。禹は大聖なり、而かも形の天下に勞するや此の如しと。後世の墨者をして多く裘褐を以て衣

【大意】上節を承けて墨子の學術を論評す。

【通釋】墨子の博愛と利益の平等とを主張し、戰爭を否定した。其の敎ふる所は人に對して怒らず自ら責むるに在り。又學を好んで博く文を學べども敢て異說を出すことを求めない。然し大體に於ては先王と其の道は同じではなく、古の音樂を毀つたのである。古の音樂を考ふるに、黃帝には咸池、堯には大章、舜には大韶、禹には大夏、湯には大濩、文王には辟雍など、それ〴〵の音樂があり、更に武王、周公は武と云ふ音樂を作つた。又古の喪禮には身分の貴賤に相應した儀式があり、地位の上下に順つて等級があつて、天子を葬るには棺槨が七重、諸侯は五重、大夫は三重、士は二重と定つて居た。然るに今墨子は此の喪禮を凡て奢侈と認めて用ひない。即ち子が生れても歌はず、人が死んでも喪に服しない、そして粗末な桐の棺、それも厚さ僅かに三寸で、外槨を用ひないのを法式とした。こんな態度で人を敎へたならば、墨子自身は人を愛利する心であつても、恐らく人を愛することにならず、又此の態度で自ら行ふは固より己を愛することにならぬ。然しこれだけの批評では未だ墨子の道を破るには十分でない。そこで更に進んで言ふならば、元來歌ふべき場合に歌はず、哭すべき場合に哭せず、樂しむべき場合に樂まないやうにするのは、果して人情に近いものであらうか。そして生きて居る間は勤苦を以て日を送り、死んだ時には粗末な葬式で濟まして仕舞ふと云ふやうな墨子の道は刻薄であつて潤なく、人を憂へ悲しましめ、到底普通の人の行ひにくいことで、恐らく萬古不易の聖人の道とすることは出來ぬ。勿論之は天下の人心に反し、人々の堪へざる所である。首唱者の墨子のみは能く之に堪へるとしても、天下の人心を何うしようぞ。苟も人心より離れた敎なら

法式。以此教人、恐不愛人。以此自行、固不愛己。未敗墨子道、雖然、歌而非歌、哭而非哭、樂而非樂、是果類乎。其生也勤、其死也薄、其道大觳、使人憂、使人悲。其行難爲也。恐其不可以爲聖人之道。反天下之心、天下不堪。墨子雖獨能任、奈天下何。離於天下、其去王也遠矣。

訓讀　墨子は氾愛兼利して鬪を非とす。其の道怒らず。又學を好んで博くして異にせず。先王と同じうせず、古の禮樂を毀る。黃帝に咸池あり、堯に大章あり、舜に大韶あり、禹に大夏あり、湯に大濩あり、文王に辟雍の樂あり。武王周公は武を作る。古の喪禮は貴賤に儀あり、上下に等あり、天子は棺槨七重、諸侯は五重、大夫は三重、士は再重。今は墨子、獨り、生れて歌はず、死して服せず、桐棺三寸にして槨なき、以て法式と爲す。此を以て人に敎へば、恐らくは人を愛せじ。此を以て自ら行へば、固より己を愛せじ。未だ墨子の道を敗らざるも、然りと雖も、歌ふべくして歌ふを非とし、哭すべくして哭するを非とし、樂しむべくして樂しむを非とす、是れ果して類するか。其の生や勤、其の死や薄、其の道大觳、人をして憂へしめ、人をして悲しましむ。其の行は爲し難きなり。恐らくは、其れ以て聖人の道と爲すべからず。天下の心に反して、天下堪へず。墨子獨り能く任ずと雖も、天下を奈何せん。天下を離るれば、其の王を去るや遠し。

述す。

【通釋】古の道術の中に、後世の人々をして質素にして奢侈に流れしめず、濫りに物を消費せず、文物制度を衒耀せず、禮法を以て其の身を正し、世の中の危急に備へて居るものがあり。かの墨翟や禽滑釐は其の風を悦んで學んだが、之を行ふことが度に過ぎ、之を止むることが極端であつた。例へば音樂否定説を唱へ、それが節用の道であると主張し、又子が生れても喜んで歌ふことなく、人が死しても喪に服しないことにした。

【語釋】不レ靡ニ於萬物一（宣注に「靡せずとは靡費を事とせず」とあり。濫りに物を消費せぬこと。諸注多く靡に麗なりと解し、物を飾る意となす。亦通ず。）○不レ暉ニ於數度一（暉は耀なり。制度を設けて外觀を衒ふこと。）○已レ之大循（正義に云ふ「已は止なり。大循は猶ほ太甚の如し」。上の不侈不靡不暉を承けて曰ふ。即ち之を禁止すること甚だしきを云ふ。）○作ニ爲非樂一、命レ之曰ニ節用一（非樂節用は墨子書中の篇名なり。故に之を用ひて句を作す。）

墨子汎愛兼利而非レ鬭。其道不レ怒。又好レ學而博不レ異。不レ與ニ先王一同、毀ニ古之禮樂一。黃帝有ニ咸池一、堯有ニ大章一、舜有ニ大韶一、禹有ニ大夏一、湯有ニ大濩一、文王有ニ辟雍之樂一。武王周公作レ武。古之喪禮、貴賤有レ儀、上下有レ等、天子棺槨七重、諸侯五重、大夫三重、士再重。今墨子獨生不レ歌、死不レ服、桐棺三寸而無レ槨、以爲ニ

して見るに、能く天地自然の美を備へ、聖王神明の容に稱つたものは稀である。この故に内に聖德を保ち、之を外に用ひて王業を成すの道術は、闇くして明ならず、鬱塞して現れない。天下の人々は各々得手勝手なことをして、之を以て道術であると思つて居る。かくして諸子百家の徒は自ら道と信ずる方に奔り往きて本に歸ることを知らないから、絕對に道に合致することが出來ぬであらう。從つて後世の學者は不幸にして天地の至純、古人の大道を見ることなく、折角の道術も天下の亂ゆゑに分裂せんとして居る。誠に悲しいことではないか。

語釋　一察(陳壽昌曰く「一は偏の見なり」と。)　○察古人之全(察は視に同じ。比較の意。一曲の士を以て古人の大全に比較する時はの意。)

不侈於後世、不靡於萬物、不暉於數度、以繩墨自矯、而備世之急。古之道術有在於是者。墨翟禽滑釐聞其風而說之、爲之大過、已之大循、作爲非樂、命之曰節用。生不歌、死無服。

訓讀　後世を侈らしめず、萬物を靡せず、數度を暉かさず、繩墨を以て自ら矯めて世の急に備ふ。古の道術是に在るものあり。墨翟、禽滑釐其の風を聞いて之を說ひ、之を爲すこと大過、之を已むること大循、非樂を作爲し、之を命じて節用と曰ふ。生れて歌はす、死して服なし。

大意　以下諸家を列叙し、本段には先づ墨家の學術を論ず、五節に分けて說く。此の節は墨翟、禽滑釐の學を略

天地之純、古人之大體、道術將爲天下裂。

訓讀 天下大に亂れて、賢聖明ならず、道德一ならず。天下多く一察を得、以て自ら好しとす。譬へば耳目鼻口、皆明かなる所あつて、相通ずる能はざるが如く、猶ほ百家衆技のごとし。皆長ずる所あつて、時に用ふる所あり、然りと雖も、該ねず徧からず、一曲の士なり。天下の美を判ち、萬物の理を析つ。古人の全きを察するに、能く天地の美を備へ、神明の容に稱ふこと寡し。是の故に內聖外王の道、闇くして明ならず、鬱として發せず。天下の人、各々其の欲する所を爲して、以て自ら方と爲す。悲しい夫、百家往いて反らず、必ず合はず。後世の學者、不幸にして天地の純、古人の大體を見ず、道術將に天下の爲に裂けんとす。

大意 天下亂れて道術の分裂せるを叙す。林西仲曰く、方術を治むる者、各々其の一偏の說を逞うして古人の全を會すること能はず、道術分れて一ならざる所以を言ひ、以て下文數段を起すと。

通釋 後世天下が大に亂れて、聖賢の道が廢れて道德支離し、天下の學者は各々道の一部を見得して自ら是として居る。譬へば耳目鼻口がそれぞれ明かなる所あるも、其の能はたゞ一部分に止まりて相通用することが出來ないと同じく、又各種の技術者と等しく、彼等は皆それぞれ長ずる所があり、時によつて用ふる所はあるが、道の全體を兼ね備へ徧く通ずることが出來ない、要するに一曲部に捉はれた人々である。されば物の全體を大觀する力なく、徒らに天地自然の美を判別し、萬物の理を分析して自ら得々として居る。之を古の全德を備へて居る人と比較照察

してあるから之を知ることが出來る。又其の詩書禮樂の中に傳つて居るものは鄒魯地方の儒者達が多く之を明かにして居る。卽ち詩は以て情思を述べ、書は以て世事を述べ、禮は以て行儀を述べ、樂は以て性情の和を述べ、易は以て陰陽の理を述べ、春秋は以て名分を明かにしたものである。かくの如く道術の末節たる仁義禮樂文物度數にして天下に散在し、中國の到る處に設けられて居るものは、諸子百家の徒が時に臨んで之を唱道して居るから是等に就いては特に此に論及する要はない。たゞ道術の本たる道德が如何になつたかについて下に述べて見よう。

語釋　明於本數、係於末度(本數は度數の本で、道を斥す。末度は道の末節で、仁義禮樂法度を云ふ。係とは宣注に「本擧りて末從ふ。係字妙」とあり。本たる道があつて始めて末たる法度が設けらるゝ意。)　○六通四辟(辟は開なり、古人の聖德六合四方に通達するを云ふ。)　○鄒魯之士(孔子魯の鄒邑に生る故に儒者を謂つて鄒魯の士と曰ふ。)　○縉紳先生(縉は搢に同じ挿なり、縉紳とは笏を大帶に挿む人卽ち卿大夫を云ふ。先生は學者なり。)

天下大亂、賢聖不明、道德不一。天下多得一察焉以自好。譬如耳目鼻口、皆有所明、不能相通、猶百家衆技也。皆有所長、時有所用、雖然、不該不徧、一曲之士也。判天下之美、析萬物之理、察古人之全、寡能備於天地之美、稱神明之容。是故内聖外王之道、闇而不明、鬱而不發。天下之人、各爲其所欲焉以自爲方。悲夫、百家往而不反。必不合矣。後世之學者、不幸不見

史、尙多有之。其在於詩書禮樂者、鄒魯之士、縉紳先生多能明之。詩以道志、書以道事、禮以道行、樂以道和、易以道陰陽、春秋以道名分。其數散於天下而設於中國者、百家之學、時或稱而道之。

訓讀 古の人其れ備はれるか、神明に配し、天地を醇くし、萬物を育し、天下を和し、澤は百姓に及び、本數を明かにし、末度を係く。六通四辟、大小精粗、其の運、在らざることなし。其の明かにして數度にあるものは、舊法世傳の史、尙ほ多く之れ有り。其の詩書禮樂にあるものは、鄒魯の士、縉紳先生多く能く之を明にす。詩は以て志を道ひ、書は以て事を道ひ、禮は以て行を道ひ、樂は以て和を道ひ、易は以て陰陽を道ひ、春秋は以て名分を道ふ。其の數、天下に散じて、中國に設くるもの、百家の學、時に或は稱して之を道ふ。

大意 道術の末節たる仁義禮樂文物制度は書傳之を載せ、學者亦之を傳ふることを述ぶ。

通釋 上に述ぶる如く古の人は其の德行完備して缺くる所がない。從つて其の德は神明に配し天地を醇化し、萬物を成育し天下を和合し、其の德澤は卑民に及び萬物の根本たる道を明かにし、仁義禮樂より制度法制の末節に至るまで凡て之を制定して、四方八方に開け通じ流布せざる所はない。大小精粗の機關凡て具備し其の作用の及ばざる所はない。而して其の道術の著明にして制度文物に現れて居るものは古來傳ふる所の法制史の上に尙ほ多く記載

となし、禮を以て善行となし、音樂を以て人の性情を和げる具となし、其の仁慈の德風、薰然として遠近に及ぶものを君子と謂ふ。是れ卽ち上に所謂一に原いて成る所の王者である。さて王者の德は此の樣であるが之を政に施す時は法度を設けて上下の分を定め、官名を定めて職掌の表示となし、言論と事實とを參考として實績を徵驗し、古と今とを稽考して決斷を爲し、諸般の文物制度は恰も算數の一二三四と次序を追ふ如くに整然と定まつて居る。かくて百官は此の整然たる度數に從つて上下尊卑の分限を犯すことなく、各々其の常職を治め事務を執り、民の衣食の安定を主要事となし、鷄豚狗彘を蕃殖せしめ、府庫を設けて貨財を蓄藏し、老弱孤寡のものに特に心をそゝぐことになる。以上の如く君子の施設する所は皆民を養ふの理に叶ふものである。

語釋　天下之治ニ方術ー(副墨に「方術とは道術の一方に局するものなり」と云ひ、下の古の所謂道術なる者と區別す。此の說是なり。)　○神何由降、明何由出(神と明とは下句の聖王に對す。聖王神明の德を謂ふ。因に「道術の極を言ふ」とあり。)　○原ニ於一ー(成疏に「原は本なり」とあり。)　○不レ離ニ於宗ー云云(以下謂ニ之聖人ーの句までは一に原いて生ずる所の聖者の德を述ぶ。林希逸曰く「宗と曰ひ、精と曰ひ、眞と曰ふは皆一の字と同じ。天を以て宗と爲し、德を以て本と爲し、道を以て門と爲すとは皆無爲自然なり」と。)　○兆ニ於變化ー(成疏に「機兆を覩て物に隨つて變化す」とあり。亦無爲自然順應なり。)　○以レ仁爲レ恩(以下は上に所謂一に原いて成る所の王者の德行を敍す。)　○以レ參爲レ驗(韓非の形名參驗の意か。卽ち言と實を參驗して賞罰をなすこと。)　○其數一二三四(口義に云ふ「言ふ心は纖悉歷々として明かに備はる、なり」と。凡百の文物制度が整然と次序を追うて具備するを云ふ。)

古之人其備乎、配ニ神明ー、醇ニ天地ー、育ニ萬物ー、和ニ天下ー、澤及ニ百姓ー、明ニ於本數ー、係ニ於末度ー。六通四辟、大小精粗、其運無ニ乎不ーレ在。其明而在ニ數度ー者、舊法世傳之

を以て恩と爲し、義を以て理と爲し、禮を以て行と爲し、樂を以て和と爲し、薰然として慈仁なる、之を君子と謂ふ。法を以て分を爲し、名を以て表を爲し、參を以て驗を爲し、稽を以て決を爲す。其の數は一二三四是れなり。百官此を以て相齒す。事を以て常と爲し、衣食を以て主と爲す。蕃息畜藏、老弱孤寡を意となす。皆以て民を養ふの理あるなり。

大意 是れ本篇の第一段、今の學術を總論す。三節に分けて說く。此の節には先づ古の道術を得たる聖王の德行を述ぶ。

通釋 當今の世の中には一方に偏したる學術を治むるものが多くて、皆各々自己の有する所の學術を以て最上最善であるとして、其の一曲に偏し居ることに氣がつかぬ。然らば其の一方に偏せず、道の全きを盡して居る古の道術なるものは最早や今の世には存在しないであらうか。曰く、然らず、道は普遍であつて古今に變りなく、今日の天下に於ても存在して居るのである。然らば古の道術に於て謂ふ所の神明なる聖王は何くより生ずるのであるか。曰く、もとより聖者の生ずるも王者の成るも皆由る所がある。卽ち皆共に道の一原に出づるものに外ならぬのである。更に之を詳かにするならば、人にして萬物の大宗たる道を離れざるものを天人と謂ひ、道の精粹を保有するを神人と謂ひ、道の純眞を失はざるを至人と謂ひ、天を宗とし、德を本とし、道を門とし、變化の兆を見て之と推移する、之を聖人と謂ふ。要するに天人と謂ひ、神人と謂ひ、至人と謂ひ、聖人と謂ふは呼稱を異にして其の實は皆同一人であつて上に所謂一に原いて生ずる所の聖者を謂ふのである。次ぎに仁を以て恩惠となし、義を以て道理

天下之治方術者多矣。皆以其有爲不可加矣。古之所謂道術者、果惡乎在。曰、無乎不在。曰、神何由降、明何由出。聖有所生、王有所成、皆原於一。不離於宗、謂之天人。不離於精、謂之神人。不離於眞、謂之至人。以天爲宗、以德爲本、以道爲門、兆於變化、謂之聖人。以仁爲恩、以義爲理、以禮爲行、以樂爲和、薰然慈仁、謂之君子。以法爲分、以名爲表、以參爲驗、以稽爲決。其數一二三四是也。百官以此相齒。以事爲常、以衣食爲主、蕃息畜藏、老弱孤寡爲意、皆有以養民之理也。

訓讀　天下の方術を治むるもの多し。皆、其の有を以て、加ふべからずと爲す。古の所謂道術なるものは、果して惡にか在る。曰く、在らざること無し。曰く、神は何くより降り、明は何くより出づる。聖は生ずる所あり、王は成る所あり、皆一に原づく。宗を離れざる、之を天人と謂ひ、精を離れざる、之を神人と謂ひ、眞を離れざる、之を至人と謂ふ。天を以て宗と爲し、德を以て本と爲し、道を以て門と爲し、變化に兆する、之を聖人と謂ふ。仁

雜篇　天下篇　第三十三

叙説　本篇は全書の後序たり。其の作者に至つては異説あれども、姑らく莊子門流の補作となす。全篇一章。七段に分けて當時諸家の學術を列叙して其の得失を論じ、重きを老莊に歸す。林西仲曰く、列禦寇篇の末に莊子將に死するの一段を載せて以て漆園の筆を此に絶つを明かす。猶ほ春秋の獲麟の如し。此の外、一字を添設すべからず。則ち天下の一篇は辯ぜずして莊を訂する者の作る所たるを知ると。又曰く、此の篇、莊子全書の後序たり。當日書を著はすの意を明かす。一片呵成の文字なり。閱事老莊を以て概して一曲の士を頂し來ると雖も、語意却て軒輕あり。其の莊周を叙する一段は關老と同一の道術ならず。則ち莊子は別に是れ一種の學問なること知るべしと。宣穎曰く、一部大書の後、此の洋々たる大篇を作りて以て收尾となす。史記の自叙ある如きを一般なり。古道の淵源に遡り、末流の散失を推す。前に大冒を作し、中五段に分け、隱々老子及び自己を以て諸家を收服し、古學の眞派に接す。末に惠子の一段を用ふるはたゞ借りて以て自家に反襯するのみ。其の體大、其の色蒼、其の致淡、超世の文なりと。又今人顧實氏曰く、天下篇は莊書の叙篇にして周末人の學案あり。天下篇を讀まざれば以て莊子著書の本旨を明かす無く、亦以て周末人學術の概要を明かすなし。故に凡そ今の中國學術を治むる者は天下篇を重視することを知らざるなし、而して認めて當に急に先きに讀破すべしとなすと。

ら其の功業は外にのみ馳せてしまつて、自己の眞の精神に對しては何の益もないのだ。誠に悲しいことではないか」と。

語釋 珠璣（共に玉である。璣は圓くない玉をいふ。） ○以二不平一平、其平也不レ平（林希逸曰く「萬物の理は本平なり、我が不平の心を以て其の平を平にせんと欲せば、則ち其の平なる者も亦不平なり」と。思ふに自然は平等一如、已に心に平なりと思ふことは、人爲にして其の平等を缺くものである。心を以てすれば直ちに絶對平等より一歩墮することを意味す。） ○以二不徵一徵、其徵也不レ徵（郭注に曰く「徵は應なり」と。成疏に之を述べて曰く「聖人は無心にして感あれば則ち此に應ず。眞應なり。若し心有つて物に應ずれば、應ずること能はず」と。徵を測るなり、憶度なりと解する説あるもこゝには從はず。）

ば、其の徵や徵ならず。明なるものは唯之が使たり、神なるものは之を徵す、夫れ明の神に勝らざるや久し。而るを愚者其の見る所を恃んで、人に入る。其の功は外なり、亦悲しからずやと。

大意　莊子は其の死に際して、天地を棺槨となして自然に歸るのだから盛儀厚葬の必要はないと言つて、當時の儒家の儀禮に流れてゐるのを譏つたのである。蓋し面白い一節である。

通釋　莊子の臨終に際して、弟子達は當時の習慣に習つて手厚く葬り度いといふ意見を漏した。莊子は之を聞いて言つた。「俺は此の天地を棺槨とし日月を以て一對の珠璧となし、星辰をば澤山の飾りの珠と爲し、萬物を以て悉く我へのおくり物と心得てゐる。我が葬具は何もかも備つてゐるではないか。此の上何を一體つけ加へんとするのか」。弟子達は「粗末なお葬式をしますと、烏や鳶が來て先生の屍をつゝいて食ひはしまいかと恐れ心配してゐます」と答へた。莊子は之に對へて敎へきかした。「粗末に葬つて地上に屍が出てゐると烏や鳶の餌食となり、手厚く葬つて地中深く埋められると、螻蟻の餌食となるのだ。然るに今烏鳶の餌食となるのを奪つて螻蟻に與へようとするのは何と不公平ではないか。凡そ不公平な標準で物を公平にしようとしたつて、其の平は眞の平とは云へない。無心にして自然に應ずるのを徵といふのであるが、若し心を働かし物に應ぜられんとする不徵の念があつて應ずるならば、其の物に應ずることは眞の應ずるものとは云へない。明知の人は其の知を使役するから却つて物に役せらるゝを免れない。有道の人卽ち神知にして始めて無心にして物に應ずることが出來る。もと〱明知の神知に及ばないことは今に始まつたことではないのだ。然かも愚者は己が見る所を恃んで人爲に入りこんでしまふ。だか

語釋 或聘於莊子（史記の老莊申韓列傳には、楚の威王莊周の賢を聞き、使をして幣を厚うして之を迎へしむとあるも、果して此の時かどうか明でない。故に成疏にも曰く「寓言にして聘する人の姓氏族を明らかにせず。故に或と曰ふなり」と。）○犧牛（成疏に曰く「犧は養なり。君王は預め前三月、牛を養ひ宗廟を祭る。之を犧と曰ふなり」と。）○太廟（天子の祖先を祭る廟をいふ。）

莊子將死、弟子欲厚葬之。莊子曰、吾以天地爲棺槨、日月爲連璧、星辰爲珠璣、萬物爲齎送。吾葬具豈不備邪。何以加此。弟子曰、吾恐烏鳶之食夫子也。莊子曰、在上爲烏鳶食、在下爲螻蟻食。奪彼與此、何其偏也。以不平平、其平也不平。以不徵徵、其徵也不徵。明者唯爲之使、神者徵之。夫明之不勝神也久矣。而愚者恃其所見、入於人。其功外也、不亦悲乎。

訓讀 莊子將に死せんとす。弟子厚く之を葬らんと欲す。莊子曰く、吾れ天地を以て棺槨と爲し、日月を連璧と爲し、星辰を珠璣と爲し、萬物を齎送と爲す。吾が葬具豈に備はらざらんや。何を以て此に加へんと。弟子曰く、吾れ烏鳶の夫子を食はんことを恐ると。莊子曰く、上に在れば烏鳶の食と爲り、下に在れば螻蟻の食と爲る。彼を奪つて此に與ふ。何ぞ其れ偏なるや。不平を以て平にせんとすれば、其の平や平ならず。不徵を以て徵せんとすれ

ものだ」。

語釋 恃₌緯蕭₋而食者（成疏に曰く「葦とは蘆なり。蕭とは蒿なり。家貧にして蘆蒿を織つて薄と爲し、賣りて以て食に供す」と。薄は簾であつて、すだれを作つて生活する者である。）○鍛ㇾ之（成疏に曰く「鍛は椎なり」と。鍛とは槌を以つて打つ意である。）○驪龍（釋文に曰く「黒龍なり」と。）○韲粉（玉篇に見ゆ。韲と齏と同じ。王念孫曰く「齏は細碎の名なり」と。音はセイであつて、細かに碎かれる意味である。）

或聘於莊子。莊子應其使曰、子見夫犧牛乎。衣以文繡、食以芻菽。及其牽而入於太廟、雖欲爲孤犢、其可得乎。

訓讀 或る人莊子を聘す。莊子其の使に應へて曰く、子、夫の犧牛を見しや。衣するに文繡を以てし、食はすに芻菽を以てす。其の牽かれて太廟に入るに及んで、孤犢たらんと欲すと雖も、其れ得べけんやと。

大意 犧牛を喩へとして、外物に牽かれて仕官などしない莊子の見解を述べた面白い話である。

通釋 或る人が莊子を招聘しようとした時に、莊子は其の使者に向つて次の如く答へた。「あなた方はあの犧牲になるために飼はれてゐる牛を御覽になつたことが御座いませう。平常は錦を衣て、おいしい芻菽を食べてゐますが、さていよ〳〵牽かれて太廟の中に入つて當に屠殺されんとしてから、其の平素のもてなしを悔いて、俄かに普通の小牛になり度いと思つても、時既に遲く、如何んとも出來ないものであります。私が若しあなた方の招きに應ずればまあ此の犧牛のやうなものでせう」と。

を鍛けよ。夫れ千金の珠は、必ず九重の淵、而かも驪龍の頷下に在り。子能く珠を得しは、必ず其の睡に遭ひたればなり。驪龍をして寤めしめば、子尙ほ奚の微か之れあらんと。今宋國の深さ直に九重の淵のみに非ざるなり、宋王の猛、直に驪龍のみに非ざるなり、子能く車を得たるものは、必ず其の睡りに遭ひたればなり。宋王をして寤めたらしめば、子韲粉たらんのみと。

大意 莊子が宋王に見えて車十乘をもらつた人に、其の盲睡に乘じて得たものであつて、誇るに足りざることを致ふ。

通釋 或る人が宋王に見えて車十乘をもらつた。得意になつて其の十乘の車を莊子に見せて自慢した。莊子は其の人に對つて言つた。『ある河のほとりに家が貧しくて、蘆を織つてすだれを作つて生活してゐた者がある。其の子供がある時深淵に潜つて行つて千金の値のある貴重な珠を拾つて來た。其の父は子供に向つて、『汝は石をもつて其の珠を打ち碎いてしまへ。身のほども知らぬ馬鹿者だ。元來千金の珠は九重の深淵の中、而かもそこに棲む黑龍の頷の下に在るものだ。お前がよく之を取ることが出來たのは、丁度運よく黑龍が睡つてゐた時に出遭つたからであらう。若し黑龍が目を醒ましたら、それこそ大變で、お前は其の毒牙にかゝつて微塵も殘つてゐなかつたであらう。』と言つて叱つた。今宋國の危險なことは九重の深淵などの比ではなく、又宋王の猛さことは黑龍などにくらべられない。汝が宋王に妄說して車を得たのは、まあ運よく宋王の睡りに乘じたのだ。宋王をして若し其の睡りをさまさして、汝の妄說を知らしたら、微塵に粉碎されてしまつたであらう。よく〳〵身の程知らずに危きに近寄つた

語釋 心有睫(郭注に曰く「心を眉睫の間に役す」と。林希逸に從へば、心有眼として直ちに睫を眼に作つてゐる。今林希逸に從つて、心に眼あれば、千差萬別窮まる所なき意に解す。) ○凶德有五、中德爲首(成疏に曰く、「心耳眼舌鼻を謂ふなり」と。中德とは心を指すなり。) ○緣循(成疏に曰く「循は順なり。緣とは物他に順つて自ら立つ能はざるなり」と。) ○偃佒(林希逸曰く「隨で倒れ隨て起るの意なり」と。秦鼎曰く、「偃佒は偃仰と同じ」と。偃仰はものにより從ふ意。) ○困畏(林希逸曰く「困厄する所あつて憂へ畏るゝなり」と。) ○達大命者隨、達小命者遭(成疏に曰く「大命とは大年なり、小命とは小年なり、遭とは遇なり」と。林希逸曰く「天に在る者を大と爲し、己に在る者を小と爲す。天に在る者に達すとは則ち隨順して自然にまかすなり。己に在る者に達すとは、時の遭ふ所に隨つて之を命に歸す」と。) ○六府(林西仲曰く「知慧外動仁義の三つの者は是れ府の好からざる處。達生達知達命の三つの者は又是れ府の好き處なり」と。)

人有見宋王者、錫車十乘。以其十乘驕穉莊子。莊子曰、河上有家貧恃緯蕭而食者。其子沒於淵、得千金之珠。其父謂其子曰、取石來鍛之。夫千金之珠、必在九重之淵、而驪龍頷下。子能得珠者、必遭其睡也。使驪龍而寤、子尚奚微之有哉。今宋國之深、非直九重之淵也。宋王之猛、非直驪龍也。子能得車者、必遭其睡也。使宋王而寤、子爲韲粉矣。

訓讀 人の、宋王に見ゆる者あり、車十乘を錫ふ。其の十乘を以て莊子に驕穉す。莊子曰く、河上に家貧しうして緯蕭を恃みて食ふものあり。其の子淵に沒して、千金の珠を得。其の父其の子に謂つて曰く、石を取り來つて之

大意 此の一節の意味は明達でない。要するに、私心を以て云爲する人智のつまらないことを説いたものと思ふ。

通釋 抑々ある德をなすに心があつて、しかも其の心に目の作用を有して自然になることが出來ないほど、心を賊するものゝ大なるものはない。而して心に目を有すると、すべての事を道によらずに心で判斷し、心で見るから彼此計較して、其の累はしさに堪へず、遂に德を敗り、性を害ふに至る。凡そ凶德に五種あつて、其の中の中德を最も凶惡なものとする。しからば中德とは何であるかと言へば、其の心中に好む所があつてそれを是とし、其の爲さざる所を非として背ることである。又人が窮してしまふには窮するに當つて八つの原因があり、事を達するに當つては達するに又三つの原因があり、吾人の形體に就いては六府なるものがある。美貌、多髯、長身、肥大、多力、流麗、勇猛、果敢の八つは、ともに人に過ぎ優つたものであるが、之があると反つて人に怨まれ忌みねたまれて困窮するものである。自立が出來なくて外物に緣り循ふもの、俯仰一に人に從つて自ら主たることの出來ぬもの、怯弱で常に畏懼してゐるものゝ三者は、何れも獨立の操なく人に及ばざるものであるが、却つて達することを得るものである。次に六府とは何か。卽ち知慧ある者は外に心を馳せて内を傷け、勇動する者は爲に他から怨まれることが多く、仁義を爲す者は救ひを乞ふ者多くて責めを負ふことが多い。生の眞、卽ち自然の眞情を悟つた者は大なるものである。又人知に達する者は、物に迷つて小なるものである。大命に達する者は、自然に順つて其の境に安んじ、小命に達する者、卽ち仁義の道德に拘はるものは、事物に接して之を解脱することは出來ないものである。

爲と爲すべし。矯と云ふは非なり」と。）　○諸父（伯叔の通稱である。）

賊莫大乎德有心而心有睫、及其有睫也而內視、內視而敗矣。凶德有五、中德爲首。何謂中德。中德也者、有以自好也而吡其所不爲者也。窮有八極。達有三必。形有六府、美、髯、長、大、壯、麗、勇、敢、八者俱過人也、因以是窮。緣循、偃佒、困畏、不若人、三者俱通達。知慧外通、勇動多怨、仁義多責。達生之情者傀、達於知者肖、達大命者隨、達小命者遭。

訓讀　賊は德に心あつて、心に睫あるより大なるは莫し、其の睫あるに及んでや內視す、內視すれば敗る。凶德に五あり、中德を首と爲す。何をか中德と謂ふ。中德なるものは、以て自ら好むあるなり、而して其の爲さざる所のものを吡るなり。窮に八極あり。達に三必あり。形に六府あり、美、髯、長、大、壯、麗、勇、敢、八つの者は俱に人に過ぐるなり、因つて是を以て窮す。緣循、偃佒、困畏、人に若かず、三つの者は俱に通達す。知慧は外に通じ、勇動は怨多く、仁義は責多し。生の情に達するものは傀、知に達するものは肖、大命に達するものは隨、小命に達するものは遭。

命而呂鉅、再命而於車上儛、三命而名諸父、孰協唐許。

訓讀 正考父は一命にして而して傴し、再命にして而して僂し、三命にして而して俯し、牆に循つて走る、孰れか敢へて軌せざらん。而の夫の如きものは、一命にして呂鉅し、再命にして車上に於て儛ひ、三命にして諸父に名いふ、孰れか唐許に協はん。

大意 正考父の位愈〻高くしていよ〳〵讓ることを述べ、今人の位の高くなるに從つて傲ることを戒む。

通釋 あの孔子十世の祖先である正考父は謙讓の人で、一命をうけて士となつた時は背を曲げ、再命によつて大夫となつた時には腰を曲げ、三命によつて卿となつた時は俯してひたすら恭肅して、道を堂々と歩くやうなことは決してなく、牆に沿うて道路の側をこそ〳〵と走つてゐた。斯く段々位が高くなるに順つて、益〻謙遜したので、其の美德は何人も手本としない者は無かつた。然るに現今の小人どもは、一命に依つて士となると最早尊大に構へ、再命によつて大夫になれば、車上に亂舞して得意がり、三命によつて卿となれば有頂天になつて伯叔父の名さへ呼び捨てにする位である。古の唐堯や許由の謙德に比べると、其の及ばざること誠に遠いではないか。

語釋 正考父（釋文に曰く「宋の湣公の玄孫にして、弗何の曾孫なり」と。即ち孔子十代の祖、宋の大夫であるとふ。成疏に曰く「考は成なり、父は大なり。考成の大德ありて正道を履む。故に正考父と號す」と。） ○一命而傴云云（成疏に曰く「士は一命、大夫は二命、卿は三命なり」。林希逸曰く、「傴は背の曲れるなり。僂は腰の曲れるなり。俯は身の地に伏するなり。言は爵愈〻高くして身愈〻下れるなり」と。） ○而夫（郭注に曰く「而夫とは凡夫を謂ふなり」と。成疏に曰く「而夫とは鄙夫なり」と。其の他異說あるも是等の意に從つて小人と解す。） ○呂鉅（郭嵩燾曰く「釋文に「呂鉅は矯の貌」と。謂ら〻は此れ當に矯と爲すべからず。方言に弦呂は長なり。東齊には弦と曰ひ、宋魯には呂と曰ふ。說文に鉅は大剛なり。亦通じて巨大に作る。呂鉅とは自ら高大にするを謂ふ。當に矜張

あり、外は寛やかで緩舒として内心は性急なものがあり、外面と內實とは此の如く全く相反するものである。故に義に就くこと、渴渇した者が水を飲むやうな者は、又義を捨て去ることも、熱の去る如く速かである。だから君子が人を用ふるに當つては、遠くうと〳〵しく使つて、其の忠であるかどうかを觀、親しく近づけて使つて其の敬を盡すかどうかを觀、事煩はしく之を使つて、其の能力の有無を觀、不意に質問して、其の知に富んでゐるか否かを觀、急に約束をして見て、其の信があるかどうかを觀、貨財を委ねてまかせて、仁が有るかどうかを觀、危急を告げて、之に節操があるかどうかを觀、酒に醉はせて見て、其の儀則を守るかどうかを觀、男女雜居させて見て、其の貞操の有無を觀察するものだ。此の九ケ條を以て人を驗らべると、如何なる人でも其の賢愚得不肖は隱くすことが出來なくて、明かとなるものである」。

語釋　愿而益（釋くに「廣雅云ふ、愿は謹愨なり」と。兪樾曰く「益は當に謚に作るべし。謚の言たるや驕溢なり」と。）　○有長若不肖（釋文に曰く「外は長者の如く內は似ざるなり」と。林西仲曰く「長とは技なり、不肖とは能無きなり」と。即ち外面は長者君子の如く能あるやうに見えて、內實は之に反して無能にして愚なる意。）　○順懁而達（成疏に曰く「懁は急なり。形は躁急に順つて、心は理に達するなり」と。懁は辨急の意。）　○有堅而縵。有緩而釬（成疏に曰く「縵は緩なり、釬は急なり。自ら形は堅固の如くして實は散緩なるもの有り。亦外形は寛緩にして心內は躁急なるもの有るなり」。兪樾曰く「縵とは慢の假字、釬とは悍の假字なり」と。）　○觀其側（釋文に曰く「側とは不正なり。一に云ふ。醉者喜んで冠を傾側するを云ふ」と。下云く「側或は則に作る」と。郭嵩燾は釋文の說を引用して曰く「側は當に則と爲すべし。詩に曰く、酒を飲むは孔だ嘉し、維れ其れ令儀と。所謂る則なり」と。側は則に作るの論に從ふ。）

正考父一命而傴、再命而僂、三命而俯、循牆而走、孰敢不軌。如而夫者、一

觀其仁、告之以危而觀其節、醉之以酒而觀其側、雜之以處而觀其色。九徵至不肖人得矣。

訓讀 孔子曰く、凡そ人心は山川よりも險、天を知るよりも難し。天猶は春秋冬夏旦暮の期あり、人は厚貌深情なり。故に貌は愿にして益なるあり。長にして不肖の若きあり。順懁にして達なるあり、堅にして縵なるあり、緩にして而して釬なるあり。故に其の義に就くこと渴するが若きものは、其の義を去ること熱の若し。故に君子遠く之を使つて其の忠を觀、近く之を使つて其の敬を觀、煩しく之を使つて其の能を觀、卒然として焉れに問うて其の知を觀、急に之と期して其の信を觀、之に委ぬるに財を以てして其の仁を觀、之に告ぐるに危きを以てして其の節を觀、之に醉はしむるに酒を以てして其の側を觀、之に雜へ以て處きて其の色を觀る。九徵至つて不肖人得と。

大意 人といふ者は外貌を飾り心情を隱くすもので、なか〳〵本根は出さないが、又見方に依つては、人物の如何も容易に知られることを說く。

通釋 孔子か嘗て言つた「凡そ人の心は山川よりも險はしく、其の知り難きことは天事を知るよりも難いものだ。天の事はまだ春夏秋冬の時節循環と、朝夕の區別があつて推定することが出來る。しかし人は容貌を飾り、情を隱して、なか〳〵其の眞を露さない。だから外貌は誠に謹愿であつて內心は驕溢な者があり、外は長者君子の如く見えて、內は愚かな小人があり、外は躁急のやうで內に於て理に達する者があり、外面堅實にして、內心散漫な者が

心內の刑となるものは、心の動搖と過悔とである。小人は此の內刑外刑共に免れ得ない者で、外部からは金木の刑を受けて訊問せられ、內部からは陰陽の不調和となつて重き病氣となる。能く內外の刑を免れて天成の心身を完うする者は、たゞ眞人だけであります。

語釋　貞幹（林西仲曰く「貞と楨と通ず。楨幹は猶棟梁と云ふがごとし」と。今此の說に從ふ。）　○圾乎（釋文に曰く「圾は危なり」と、危殆の貌である。林希逸曰く「殆哉圾乎とは危きの甚しきなり」と。）　○飾羽而畫（林希逸曰く「畫は綵色なり、物既に加はるに采色を以てして、又羽を以て之を飾るなり。言は其れ文飾の甚しきなり」と。宣穎曰く「才に自然の文采あり、飾りて之を畫くは、則ち人巧を務むるなり」と。）　○彼宜汝與、予頤與、誤而可矣（林西仲曰く「彼とは仲尼を指す。謂は、仲尼若し汝と宜しくして、之に與へ以て天下を安養せん乎。誤って之を用ふれば、則ち可なり。若し箸にして之を用ふれば豈可ならんや」と。予頤與の三字の解釋は從ひにくい。王が俸祿を與へて仲尼を養ふ意であらう。）　○不齒（齒列しない、即ち相伍しない意。）　○金與木也（郭注に曰く「金は刀鋸斧鉞を謂ひ、木は捶楚桎梏を謂ふ」と。）　○宵人（郭注に曰く「明坦の塗に由らざる者之を宵人と謂ふ」。釋文に王云ふ、「明正の徒に非らざる之を宵夏の人と謂ふ」と。王先謙曰く「宵は小の古字、通用す」と。即ち小人のことなり。）

孔子曰、凡人心險於山川、難於知天。天猶有春秋冬夏旦暮之期、人者厚貌深情。故有貌愿而益、有長若不肖、有順懁而達、有堅而縵、有緩而釬。故其就義若渴者、其去義若熱。故君子遠使之而觀其忠、近使之而觀其敬、煩使之而觀其能、卒然問焉而觀其知、急與之期而觀其信、委之以財而

雖も、神は齒せず。外刑を爲すものは、金と木となり、內刑を爲すものは、動と過となり。宵人の外刑に離るものは、金木之を訊し、內刑に離るものは、陰陽之を食す。夫れ外內刑を免るゝものは、唯眞人之を能くすと。

大意 哀公と顏闔との問答。孔子の禮樂の論を斥けて、無爲の政を說くのである。

通釋 魯の哀公が顏闔に向つて問うた。「俺が若し孔子を以て國家の棟梁たるべき重臣としたら、それで國家の病患は瘳することが出來るであらうか」。顏闔は次の如く答へた。「それはとんでもない事で、危險千萬であります。仲尼は事を文飾し、言辭を美しくすることに努め、支末を以て本旨と爲し、本性を矯め忍んで仁義禮樂の敎を掲げて世人に從はんことを說いて、自らは其の信でないことも知らないのです。且私心に受けたことを是として、天與の精神をも制し去らうとする者で、どうして斯ういふ人は人民の風上に立たすに足りませうや、足らない者である。彼の說く所にして果して君の意に合するやうな宜い點があるなら、姑らく俸祿を與へて養つたらよいと思ひます。若し誤つて之を用ゐたらそれは已むを得ないことです。しかし若し仲尼を重く登庸したら、人民は大抵實を離れて僞を學ぶやうになるので、決して民生を厚うし、民德を示す所以ではありません。後々のことを考へて見ると、どうも彼を用ふることはやめた方がよいと思ひます。考へて見ますに、民の治め難いのは、上たる者が人に仁德を施して忘れ得ず、天が萬物を布き生ずるやうに無心にやれないからである。かの商人は利のみに走るから、人は之と相伍することを好まない。たま〳〵事情已むを得ずして、人と齒列することがあつても、其の本心を洗つて見ると、決して精神は相伍して一緒になつてゐないものだ。凡そ體外の刑を爲すものは斧鉞や桎梏の類の金や木であるが、

魯哀公問於顏闔曰、吾以仲尼爲貞幹、國其有瘳乎。曰、殆哉圾乎。仲尼方且飾羽而畫、從事華辭、以支爲旨、忍性以視民、而不知不信。受乎心、宰乎神、夫何足以上民。彼宜汝與、予頤與、誤而可矣。今使民離實學僞、非所以視民也。爲後世慮、不若休之。難治也、施於人而不忘、非天布也。商賈不齒、雖以事齒之、神者弗齒。爲外刑者、金與木也、爲內刑者、動與過也。宵人之離外刑者、金木訊之、離內刑者、陰陽食之。夫免乎外內之刑者、唯眞人能之。

訓讀 魯の哀公、顏闔に問うて曰く、吾れ仲尼を以て貞幹と爲さば、國其れ瘳ゆることあらんかと。曰く、殆いかな圾乎たり。仲尼方に且に羽を飾つて畫し、華辭に從事し、支を以て旨と爲し、性を忍んで以て民に視し、而して信ならざるを知らず。心に受け、神に宰す、夫れ何ぞ以て民に上たるに足らん。彼れ汝に宜しき與、予へて頤はん與、誤ならば可なり。今は民をして實を離れ僞を學ばしむ、民に視す所以に非ざるなり。後世の爲めに慮るに、之を休むるに若かず。治め難きや、人に施して忘れず、天布に非ざればなり、商賈は齒せず、事を以て之に齒すと

大意 曹商の名利を得て威張つてゐるのを見て、莊子は特意の比喩を以て罵倒するところ。

通釋 宋に曹商といふ人があつて宋の王のために秦に使ひした。彼は出際にあたつて、宋王から車を數乘もらつた。秦に行くと、秦王は大に悅んで更に車百乘を增し與へた 曹商は宋に歸つて來て、莊子に會つて言つた。「どうもね、貧民窟のむさ苦しい處に住つて、困窮して屨などを造つて、項は瘦せて背が立ち、顏は黃ばんで憔悴してゐるのは、私の不得手な所であつて、一たび萬乘の君を說き悟して從車百乘の榮を蒙ることは、私の最も得意とする所である。だから當に斯くの如く榮達を得たのである」。莊子は其の榮譽を得るの愚を笑つて言つた「秦王が病氣をした時に醫者を呼んで、其の腫物をつぶして膿をとり去つた者には車一乘を與へた。王の痔を舐めて吸ふことの出來るものには車を五乘を與へた。即ち療治する所が下れば下るほど車を與へることも從つて多い。汝もそんなに澤山車を得た所を見ると、君はどうも秦王の痔でもなめて治したのだらう。實に汚ないことだ。速に去つて俺を汚さないやうにせよ。」

語釋 曹商（成疏に曰く「姓は曹名は商。宋人なり。宋の偃王の爲に秦に使す。應對秦王の之を愛する所となり、遂に車百乘を賜ふ。乘は駟馬なり」と。）○窮閭阨巷（郭慶藩曰く「案ずるに廣雅に閭は居なり。古は里中の道を謂つて巷となす。亦居る所の宅を謂つて巷と爲す。閭巷は皆居なり」と。阨は隘と通じて狹い道路の意。故にむさ苦しい汚ない住居の義。）○槁項（釋文に「司馬云ふ項槁立するなり」と。林希逸曰く「瘦せて肉無きなり」と。）○黃馘（釋文に「司馬云ふ、面の黃熟するを謂ふ」と。林希逸曰く「髮黃にして耳に被るなり」と。今釋文の說に從ふ。顏色の黃ばんで憔悴してゐる意である。）○癰痤（林希逸曰く「痤も亦癰の類なり。癰痤は上に在り。痔疾は下に在り。舐すること愈ゝ下つて賞すること愈ゝ厚し。痔を舐むるを以て車を得るは之を鄙とす。言は其れ汚辱貴ぶに足らざるなり」と。）

苞裹有るなりと。牘は、竹簡を謂ふ」。林希逸曰く、「苞苴とは饋遺なり。竿牘とは往來して相問勞する者なり」と。）　○敝ニ精神乎蹇淺ニ（成疏に曰く「精」を跛蹇淺薄の事に勞し、虛に遊び、高きに步ること能はざるを謂ふ」と。跛蹇はチンバの事で精神をつまらぬことに勞する意である。）　○甘冥（兪樾曰く「釋文に冥は字の如し、又云ふ、本亦瞑に作る。又音は眠。當に之に從ふべし」と云ひて文選李善の注を引證して、瞑は古の眠なりと論ず。今はしばらく之に從つて安らかに無何有の境に眠る意味に解す。）

宋人有曹商者、爲宋王使秦。其往也得車數乘。王說之、益車百乘。反於宋、見莊子曰、夫處窮閭阨巷、困窘織屨、槁項黃馘者、商之所短也。一悟萬乘之主、而從車百乘者、商之所長也。莊子曰、秦王有病召醫。破癰潰痤者得車一乘。舐痔者、得車五乘。所治愈下、得車愈多。子豈治其痔邪、何得車之多也。子行矣。

訓讀　宋人に曹商なるものあり、宋王の爲めに秦に使す。其の往くや車數乘を得。王之を說び、車百乘を益す。宋に反り、莊子を見て曰く、夫れ窮閭阨巷に處り、困窘して、屨を織り、槁項黃馘なるは、商の短なる所なり。一たび萬乘の主を悟して、從車百乘なるものは、商の長ずる所なりと。莊子曰く、秦王病あつて醫を召す。癰を破り痤を潰すものは、車一乘を得。痔を舐むるものは、車五乘を得。治する所愈〻下れば、車を得ること愈〻多し。子豈に其の痔を治したるや、何ぞ車を得るの多きや。子行れと。

朱泙漫といふ人は龍を屠ることを支離益について學んだ。千金の家財を傾けつくして三年の後其の腕はすつかり磨き上つたが、さて會得して見ると其の妙技を用ふる所がなかつた。聖人も丁度こんな具合で、道を得たからと云つて、之を世に用ふるのではない。聖人は必然のことでも必然としない。圓融無礙にしてたゞ自然に順ふのみである。故に喜怒好惡の情が胸中に戰ふといふことがない。衆人は之に反して、必然は必然として固執するが故に、心中は常に好惡善惡の爭ひが絶えない。其の感情の上に爭ひがあると、是非好惡に從つて要求が起るものであり、其の感情の爭ひを恃みて之に順へば、遂に本性をもなくしてしまふ。小人の知は、人に贈物を通じたり、手紙で消息を問ふたりする位のことで、精神を淺薄なことに費やしてをりながら、道と物とを兼ねて修得して、太一形虚の道の眞髓に悟入せんとしてゐる。かくの如き者は知は古今に迷ひ、身は外物に累はされて、到底太初の妙理を悟ることは出來ない。あの至人たる人は、精神を道の本源たる無始に歸し、身は無何有の鄕に安らかに眠り、物外に超越して水の如く流れ、大自然の太清より發動して、萬境に順應して窮りないものである。悲しいことではないか、汝小人よ。汝の知と爲す所は毫毛の末に限られて極めて微小なるものであるのに、之に纏繞せられて、無物の初めたる太寧を知らないとは。」

語釋 朱泙漫支離益（釋文に「司馬云ふ、朱泙漫支離益は皆人の姓名」と。郭慶藩や兪樾等は文選或は廣韻を引用して考證してゐるが、要するに莊子寓言中の人物で、深く探索する必要はあるまいとおもふ。支離益などゝ云ふ名は何と屠殺を業とする者にふさはしいではないか。） ○單二千金之家一（釋文に曰く「單は盡なり。」家は本亦賈に作る」と。千金の家財を費消しつくすこと。） ○無レ兵（林西仲曰く「兵とは胸中の交戰を謂ふなり」と。） ○苞苴竿牘（釋文に「司馬云ふ、苞苴は

而甘冥乎無何有之鄕、水流乎無形、發泄乎太淸。悲哉乎汝爲、知在毫毛、而不知太寧。

訓讀 莊子曰く、道を知るは易く、言ふこと勿きは難し。知つて言はざるは、天に之く所以なり。知つて之を言ふは、人に之く所以なり。古の人は天にして人ならず。朱泙漫は龍を屠ることを支離益に學ぶ。千金の家を單し三年にして技成るも、其の巧を用ふる所なし。聖人は必を以てしても必とせず、故に兵なし。衆人は必ならざるを以て之を必とす、故に兵多し。兵に順ふが故に行いて求むるあり、兵之を恃めば則ち亡ぶ。小夫の知は、苞苴竿牘を離れず。精神を蹇淺に敝らし、而して道と物とを兼ね濟して、太一形虛ならんことを欲す。是の若き者、宇宙に迷惑し、形に累はされて太初を知らず。彼の至人なる者は、精神を無始に歸して、而して無何有の鄕に甘冥し、無形に水流し、太淸に發泄す。悲しい哉汝の爲、知は毫毛に在るも、而かも太寧を知らずと。

大意 至人の悟入した太初太寧の自然境を說く。

通釋 莊子說いて曰く　元來道なるものは自然そのまゝのものだから、之を知るのはいと心易いが、之を言葉に出さないのは難かしい。道を知つても言はないのは、其の知深くして自然に悟入する所以であり、知つて直ちに言葉にわたるのは、凡人の境に墮入する所以である。抑、古の人は無言にして自然に任かして人爲を用ひなかつた。

つた。いはゆる聖人といふ者は、常に安んずべき所の天に安んじて人爲に安んずるやうなことはしない。衆人は之に反して、安からざる所の人爲に安んじて、其の安んずべき所の天に安んずることが出來ないのだ。

語釋 緩（釋文に「司馬云ふ、緩は名なり」と。）○呻吟裘氏之地（釋文に曰く「吟詠を謂ふ、學問の聲なり。裘氏は地名なり」と。）○闔胡嘗（釋文に曰く「闔は語助なり。胡は何也なり」と。王先謙曰く「闔は盍と同じ、何不也なり。胡も亦何也なり、闔胡連文して、古書の倘猶、惟獨の例の如し。自ら複語あるのみ。嘗は試なり」と。闔胡はどうして何々せざるの意であらう。）○良（林希逸曰く「良は或は良に作る。良は涙。象なり」と。）○相捽（林希逸曰「捽は相爭ひ扭つなり」と。捽は觸るゝ意であるから、相ひ打ち合ふことである。）○自是（兪樾曰く「自是は二字句を絶つべし。緩の自ら其の儒を美とするがごときは、是れ自ら是とするなり。有徳者は已に此あるを知らず、有道者は更に論無し」と。此の說又通ず。今はしばらく下の有徳者に續けて、上をうけて、是れによつて考へて見るといふやうに解した。）

莊子曰、知道易、勿言難。知而不言、所以之天也。知而言之、所以之人也。古之人、天而不人。朱泙漫學屠龍於支離益。單千金之家、三年技成、而無所用其巧。聖人以必不必、故無兵。衆人以不必必之、故多兵。順於兵、故行有求。兵恃之則亡。小夫之知、不離苞苴竿牘、敝精神乎蹇淺、而欲兼濟道物、太一形虛。若是者、迷惑於宇宙、形累不知太初。彼至人者、歸精神乎無始、

じて、其の安んぜざる所に安んぜず、衆人は其の安んぜざる所に安んじて、其の安んずる所に安んぜず。

大意　凡べて事の成就の如何は人に依るものでなく、天分に存するものだ。それだのに多くの人は、人智に執着して自然の力を知らないものであることを說く。

通釋　鄭の緩と云ふ人が裘氏といふ地で詩書を誦讀すること三年にして大に儒學を修得し、仕へて俸祿を得たから、宛も黃河の水が其の沿岸九里の閒を潤すが如く、其の利澤は三族に及んだ。次に弟の翟をして墨子の學をやらした。そこで弟も墨學を修め得て、其の兄弟は儒墨互に是非を爭つた。ところが父は弟の翟を愛して之を助けた。其の後十年たつて緩は憤慨のあまり自殺して仕舞つた。其の父は緩の夢枕に立つのを見た。夢の中で緩の言ふやうには「汝の子翟をして墨者たらしめた者は即ちこの俺だ。いはゞ俺は汝等の恩人だ。それだのになぜ試みにも俺の墓をかへり見てくれないのだ。俺の墓に植ゑられた柏は最早實るほどになつてゐるのに」と。元來造物者が人閒に應報するのは、其の人には報いないで、その人の天分に報ゆるものだ。だから弟の翟が墨者たるを得たのは、兄の力に依つたのでなく、弟に墨者たるの天分があつたからである。然るに緩は己のお蔭だといふて恩を歸せようとして、其の弟の一身を謀る上に他人と異なる點があるにせよ、之を自慢にして親を賤むのは、丁度齊人が、泉は自然の惠みであるのに、各々自分のものゝやうに考へて井水を爭つて摑み合ひをするのと同じだ。而して現代の人は皆緩たるを免れない。是れによつて考へて見ると、有德者は自然のまゝであつて自分の德あることも知らない。まして有道の者となると、自然無爲たることは言を俟たない。古は此の自然を忘れるものを稱して遁天の刑と謂

墨。儒墨相與辯。其父助翟。十年而緩自殺。其父夢之。曰、使而子爲墨者予也。闔胡嘗視其良、既爲秋柏之實矣。夫造物者之報人也、不報其人、而報其人之天。彼故使彼。夫人以己爲有以異於人、以賤其親、齊人之井飮者相捽也。故曰、今之世皆緩也。自是有德者以不知也、而況有道者乎。古者謂之遁天之刑。聖人安其所安、不安其所不安。衆人安其所不安、不安其所安。

訓讀 鄭人緩なるもの、裘氏の地に呻吟す。祇に三年にして、緩儒と爲る。河九里を潤し、澤は三族に及ぶ。其の弟をして墨たらしむ。儒墨相與に辯ず。其の父は翟を助く。十年にして緩自殺す。其の父之を夢む。曰く、而の子をして墨たらしめしものは予なり。闔ぞ胡ぞ嘗に其の良既に秋柏の實を爲せるを視ざると。夫れ造物者の人に報ずるや、其の人に報ぜずして、其の人の天に報ず、彼故に彼ならしむ。夫の人己を以て、以て人に異なるありと爲して、以て其の親を賤しむは、齊人の井に飮むもの相捽つなり。故に曰く、今の世皆緩なり。是によつて德あるものは知らざるを以てなり、而るを況んや道あるものをや。古は之を遁天の刑と謂ふ。聖人は其の安んずる所に安ん

汝が求めて人々をして汝のもとに依り聚まるやうにしたのではないが、汝はまだ世人をして汝に頼り聚らしめないやうにすることは出來ない。汝の不德の致す所だ。それでは學問しても何にも役に立たぬ。人々を感心させたり、悅ばしたりするのは、自ら特異な所を出すからだ。すべて人を感動さすやうになると、自分の精神も外に馳せて、本心を搖がし失ふやうになる。もう何も言つて聞かせることはない。汝と一緒になつて遊ぶ者は、汝に何も告げ戒めるやうなことはない。彼等の淺薄な小言は悉く人を毒するものだ。だから彼等は汝に忠告し覺らすやうなこともなく、汝自身も悟る所がないのだ。共に迷つて畢竟覺め悟る時はあるまいのに誰と共に學び悟らんとするのか。一體巧者はあくせくと勞し、智者は何やかやと憂ふるものだ。之に反して無能なる者、卽ち小智を勞さない聖人は、何等外物を求むることもなく、十分食に飽いて且自由に樂しみ遊ぶものだ。たとへば繋がれない小舟が風のまにまに去來するごとく、全く虛心にして逍遙自適するものである。」

語釋　敦レ杖蹙二之乎頤一（成疏に曰く「敦は竪なり」と。竪は植立することである。林西仲曰く「其の杖をたてゝ以て頤を支へ、皮肉の皺よるを謂ふなり」と。）○賓者（釋文に曰く「客を通ずるの人」と）○本才（釋文に曰く「一本に才は性に作る」と。本性なら一層判然としてゐる。）○又無レ謂也（釋文に曰く「本才を動搖して以て求むることを致す者は、又道德の謂に非らざるなり」と。しかし此の伯昏瞀人の答は、最初に已矣と喝破して、列子の迷忘を破らんとしてゐるから「又謂ふべきなし」と讀んで、汝等に言ひ聽かせることはもう無いの意に解したい。）○小言（釋文に曰く「言道に入らず。故に小言と曰ふ」。）○何相孰也（林希逸曰く「相誰何するなり。相借問するの意なり」と。）○無能（林希逸曰く「無能は卽ち無爲の意なり」と。）

鄭人緩也、呻二吟裘氏之地一。祇二三年一、而緩爲レ儒。河潤二九里一。澤及二三族一。使二其弟

つこと閒あり、言はずして出づ。賓者以て列子に告ぐ。列子屨を提げ、跣にして走り、門に曁ぶ。曰く、先生既に來る、曾ぞ藥を發せざるやと。曰く、已めよ。吾れ固より汝に告げて曰ひき、人將に汝を保たんとすと。果して汝を保てり。汝能く、人をして汝を保たしむるに非ざれども、而かも汝、人をして汝を保つ無からしむること能はざるなり、而かも焉ぞ之を用ひん。感豫するは異を出だすなり、必ず且に感ずることありて本才を揺さんとがす、又謂ふべきなきなり。汝と與に遊ぶもの、又汝に告ぐること莫きなり。彼の小言する所は、盡く人毒なり。覺すること莫く、悟ること莫し、何ぞ相孰とせんや。巧者は勞して知者は憂ふ。無能なる者は求むる所なく、飽食して遨遊す。汎として繫がざるの舟の若く、虛にして遨遊するものなりと。

大意 前節をうけて、小智小巧を勞するものは、何時までたつても覺ることなく、其の本性を害ふものであることを說く。

通釋 其の後閒もなく伯昏瞀人が列子の家を訪問してみると、敎を受けに來た人が多くて、屨が戶外まで一ぱい脫いであつた。伯昏瞀人は北面して戶外に立つて、杖の上に頤をのせ、皺をよせてもたれたまゝ、暫く列子の話を立ち聞きしてゐたが、無言のまゝ去つてしまつた。取次の者が之を見て列子に告げると、列子はあわてゝ屨を提げて跣足のまゝで其の後を追つて行つて、やつと門のところで追ひ付いた。そして「先生はわざ〳〵お越し下さつたのに、何ぜ私に藥となるべき御敎を發して下さらなかつたのですか」と尋ねた。伯昏瞀人は之に對へて言つた。「徒言を勞するな。俺は汝に既に人が汝を師として賴り聚つて來るだらうと言つておいた。果して其の通りだ。これは

○多餘之贏（東條保曰く「江南古藏本、及び江南李氏書本倶濳夫の注、多の上に無の字有り」と。此の說に從へば意味は一層明かとなる。飲み物を賣る商人は、ほんの飲食の財とするだけのことで、あり餘る財產は無いの意となる。しかし今は無の字を脫した原文に依つて解釋を下す。）　○效レ我以レ功（釋文に曰く「效ェ校なり」と。戰國策の西周策に、吾得無效也云云の句がある。高誘效に注して、效は致なりといふ。「いたす」と訓ずれば意は明かとなる。委任する意である。）　○人將レ保レ汝（成疏に曰く「保は守なり」世人が汝を守つて依り聚るであらうの意。）

無幾何而往、則戶外之屨滿矣。伯昏瞀人北面而立、敦杖蹙之乎頤。立有閒、不言而出。賓者以告列子。列子提屨、跣而走、曁乎門、曰、先生既來、曾不發藥乎。曰、已矣。吾固告汝曰、人將保汝。果保汝矣。非汝能使人保汝、而汝不能使人無保汝也、而焉用之。感豫出異也、必且有感搖而本才。又無謂也。與汝遊者、又莫汝告也。彼所小言、盡人毒也。莫覺莫悟、何相孰也。巧者勞而知者憂。無能者無所求、飽食而遨遊。汎若不繫之舟、虛而遨遊者也。

訓讀　幾何も無くして往けば、則ち戶外の屨滿てり。伯昏瞀人、北面して立ち、杖を敦めて、之に頤を蹙す。立

から私はびつくりして中途から引き還して來たのです」と答へた。瞀人は又「そんな事位で又どうしてびつくりしたのだ」と問うた。列子は之に對へて次の如く云つた。「つく〲考へて見ますと、こりやどうも私の內面にあるところの誠が渾然ととけ去らないで、迹形を殘してゐるために動いて光彩を放つたのだと思はれます。だから外面にあらはれたもので人心を服し、店の人々をして老人を貴ぶことをも舍てゝ此の私を敬せしめたのであつて、此の私の修養が足らなくて、外面に德が現れるといふことが、私の患ひとなつたのです。彼の漿を賣る人々は、食物や飮物を財貨として、其の賣上げの殘つたのを儲けとしてゐる者で、其の利益はごく少ないし、權力なんてまるで無いものです。それでさへあんな風ですから、まして天子であつたら如何ばかりでせう。楚の天子は其の身も知も國事に勞して、精も盡き果て倦み疲れてしまつてゐますから、若し私が往つたらきつと國政を委ねて私に功を立てさせようとするでせう。さうなつたら大變です。だから自分のまだ〲修養の足らないのを驚いて歸つて來たのであります」と。伯昏瞀人は之を聞いて云つた。「いやそれは結構だ。汝自ら內省して自己を觀察して修めるのはまあいゝ。だが汝がそんな風に自己を處理するなら、世人は汝の許に聚つてきつと汝を師として仰ぐやうになるであらう。」

語釋　伯昏瞀人（威疏に曰く「伯昏は楚ハ賢士なり。號して伯昏といふ。隱者の徒なり。禦寇旣に壺子を師とす。又伯昏に事ふ」。）　○奚方而反（釋文に「李云ふ方は道なり」と。道中から引き反へす。途中からなぜ反つて來たかの意。方を放と訓じて、倣なりと解する說あるも今は從はず。）　○餐（郭注に曰く「賣を賣る家」と。飮食物の店。）　○形諜成レ光（郭注に曰く「擧動便辟（禮儀が外にあられて正しくないこと）にして光儀を成すなり」と。林希逸曰く「諜は動なり」と。諜は元來敵人の動靜を伺ふ意であるから、誠の迹形が外に伺つて表面に出づることである。）　○盬ニ其所患一（釋文に曰く「盬は亂なり」と。林西仲曰く「盬は猶ほ醜のごとし。所患とは、人の己を敬すること他人に過ぎて患を致す所以なることを謂ふ」と。林西仲の說に從ふ。）

驚。伯昏瞀人曰、善哉觀乎。汝處已、人將保汝矣。

訓讀　列禦寇、齊に之く、中道にして反り、伯昏瞀人に遇ふ。伯昏瞀人曰く、奚ぞ方にして反れると。曰く、吾れ驚けりと。曰く、惡にか驚けると。曰く、吾れ嘗て十漿を食へるに、五漿は先づ饋れりと。伯昏瞀人曰く、是の若くば則ち汝何爲ぞ驚けるやと。曰く、夫れ內、誠解けず、形、諜して光を成す。外を以て人心を鎭し、人をして老を貴ぶことを輕んぜしめて、其の所患を整せり。夫れ漿人は特に食羹の貨、多餘の贏を爲すのみ。其の利たるや薄く、其の權たるや輕うして、而かも猶ほ是の若し、而るを況んや萬乘の主に於てをや。身は國に勞して、知は事に盡く、彼將に我に任ずるに事を以てして、我に效さしむるに功を以てするあらん。吾れ是を以て驚くと。伯昏瞀人曰く、善いかな觀ることや。汝已を處すれば、人將に汝を保たんとすと。

大意　此の章、二節に分けて說く。列子が自分の心身を害はないやうに、楚に行くことを止めたが、それはまだ智能の働きを脫して、自然に逍遙することの出來ないことを說く次節の伏線である。

通釋　列子が齊に往つたが中途から引き還して來て、たま／＼伯昏瞀人に出遇つた。伯昏瞀人は列子に向つて、「なぜ途中から反つて來たのか」と尋ねた。列子は「私はびつくりすることがあつて還つて來ました」と答へた。瞀人は又「何をびつくりしたのだ」と尋ねた。列子は「私は道中で口が渇いたから、飲み物を十回も貰ひました。ところが、其の中五軒まで私の容子を見ると、代金を出さないのに先方から進んで飲み物をおくつて呉れました。だ

雜篇　列禦寇第三十二

叙説　此の篇は多く莊子の手に成るものと認められてゐる。成程文章構想共に雜篇中の他篇に優る所が多い。蘇東坡は讓王以下の四篇を去り、寓言篇の末章楊子居爭席の一段をば此の篇と合せて一章とした。此の説を明眼として服した人は多い。一篇の大意は、人意的の知を去つて、無爲自然の神知を妙得することを說くのであつて、面白い例話が多い。古來此の篇中の話は所々に引用されてゐる。但し最後の莊子の葬禮に關する話だけは門人後者の追記であらう。

列禦寇之レ齊、中道而反、遇二伯昏瞀人一。伯昏瞀人曰、奚方而反。曰、吾驚焉。曰、惡乎驚。曰、吾嘗食二於十䬸一、而五䬸先饋。伯昏瞀人曰、若是則汝何爲驚已。曰、夫內誠不レ解、形諜成レ光。以レ外鎭二人心一、使三人輕二乎貴老一、而整二其所一レ患。夫䬸人特爲二食羹之貨一、多餘之贏。其爲レ利也薄、其爲レ權也輕、而猶若レ是、而況於二萬乘之主一乎。身勞二於國一、而知盡二於事一、彼將レ任レ我以レ事、而效レ我以レ功。吾是以

るのに、先生は腰を曲げ身を屈めて、再拜して應對せられたのは、餘りに謙遜過ぎはしますまいか、我々門人どもは皆先生の行爲を解しかねて居ます。あの漁父だけがどうしてかくまで手厚く禮せられたのですか」と。孔子は車の横木に倚りかかつて嘆息して云ふには、「由よ、お前は隨分度し難い人間だな。禮義を習ふことが旣に年久しいのに、卑しい心が今だに去らない。近くへ來い、敎へてやるから。一體長者に遇つて敬せざるは禮を失して居る。賢者を見て尊ばざるは仁ではない。かの至仁なる人でなければ、人に卑下することは出來ない。人に卑下するに至純の心を以てしなければ、其の眞を盡し難い。だから長く身を傷るのである。不仁の人を害することは、禍これより大なるものはない。然るに汝だけが不仁の禍を恣にしようとしてゐるのは、誠に惜しいことだ。その上道といふものは、萬物の生成する根源である。萬物は道を失へば死し、道を得れば生じ、事を爲して道に逆へば失敗し、道に順へば成功する、されば人の貴賤を問はず、道の在る所は卽ち師の在る所であるから、聖人は之を尊ぶのである。今かの漁父こそは眞に有道の人の謂ふべきである。故に自分は尊敬せずには居られないのだ」と。

語釋　逆立(對面して立つの意。)　○磬折(磬は古代の樂器の名、磬折とは磬の如く身をかゞめて禮をすること、禮記曲禮に「立てば則ち磬折す」と見ゆ。)　○湛二於禮儀一有レ閒矣(湛は沈溺なり、一本其字に作る。林注に曰く「禮義の學に浸潤すること、亦時有り」と。)　○彼非二至仁一、不レ能レ不レ人(彼字は指す所汎し、單に漁父或は孔子と解すべからず。林注は「彼の漁父若し至人に非ずんば、豈能く人をして此の如く降下して之を尊敬せしめんや」と解す。されど彼字を漁父と解しては下の「下レ人不レ精、不レ得二其眞一」の二句通ぜず。)

見ざるなり。萬乘の主、千乘の君、夫子を見るに、未だ嘗て庭を分ちて伉禮せずんばあらず。夫子猶ほ倨傲の容あり。今漁父拏を杖てゝ逆立して、夫子曲要磬折し、再拜して應ず。太甚しきこと無きを得んや。門人皆夫子を怪しむ。漁父何を以て此を得たるかと。孔子軾に伏して歎じて曰く、甚しいかな、由の化し難きや。禮義に湛ること閒あれども、僕鄙の心、今に至りて未だ去らず。進め、吾れ汝に語げん。夫れ長に遇ひて敬せざるは禮を失ふなり。賢を見て尊ばざるは、仁ならざるなり。彼の至仁に非ざれば、人に下ること能はず、人に下つて精ならざれば、其の眞を得ず。故に長く身を傷る。惜しいかな、不仁の人に於けるや、禍、焉より大なるは莫し、而して由、獨り之を擅にす。且道なるものは、萬物の由る所なり、庶物之を失ふものは死し、之を得るものは生く。事を爲して之に逆へば則ち敗れ、之に順へば則ち成る。故に道の在る所、聖人之を尊ぶ。今は漁父の道に於けるや、有りと謂ふべし。吾れ敢へて敬せざらんやと。

大意　子路が孔子の特に漁父のみを畏敬すること一入深き理由を尋ねたるに、孔子は子路の失禮不仁を戒め、漁父は有道の士なるが故に敬せざるを得ずと對へて此の篇を結ぶ。

通釋　子路が車の側につき從ひ孔子に尋ねて云ふには、「私が先生の弟子となつてから、隨分年久しいことですが、これ迄先生が人に遇つてこんなに畏れられたのを見たことがありません。たとひ萬乘の天子でも、千乘の諸侯でも、先生に會ふときには、必ず庭上に對坐して平等の禮を以て事へないものはありませんでしたが、それでも先生はまだ倨傲の容子をして居られるのが常でした。然るに今かの漁父は橈を立てゝ、向ひあつて立つたまゝであ

子路旁車而問曰、由得爲役久矣、未嘗見夫子遇人如此其威也。萬乘之主、千乘之君、見夫子、未嘗不分庭伉禮。夫子猶有倨傲之容。今漁父杖拏逆立、而夫子曲要磬折、再拜而應。得無太甚乎。門人皆怪夫子矣。漁父何以得此乎。孔子伏軾而歎曰、甚矣由之難化也。湛於禮義有閒矣、而樸鄙之心、至今未去。進。吾語汝。夫遇長不敬、失禮也。見賢不尊、不仁也。彼非至仁、不能下人。下人不精、不得其眞。故長傷身。惜哉、不仁之於人也、禍莫大焉。而由獨擅之。且道者、萬物之所由也。庶物失之者死、得之者生。爲事逆之則敗、順之則成。故道之所在、聖人尊之。今漁父之於道、可謂有矣。吾敢不敬乎。

訓讀　子路車に旁うて問うて曰く、由の役たるを得ると久し、未だ嘗て夫子の人に遇うて此の如く其れ威るゝを

聞く、與に往くべきものは、之と與に妙道に至る。與に往くべからざるものは、其の道を知らず、愼んで之と與にする勿れ、身乃ち咎なしと。子之を勉めよ。吾れ子を去らん、吾れ子を去らんと。乃ち船を刺して去り、蘆間に延緣す。顏淵車を還らし、子路綏を授く、孔子顧みず。水波定まり、拏音を聞かざるを待つて、而る後に、敢へて乘る。

大意 孔子漁父に就きて大道を學ばんと嘆願したるも、漁父許さずして去る。

通釋 孔子が又再拜して起つて云ふには、「今私が先生にお目にかゝることが出來たのは、天の引き合せとしか思はれません。然も先生は私のやうな愚昧な者を敎へることを恥とせられないで、弟子同樣に看做して親しくお敎へ下さいました。甚だ失禮なことを伺ひますが、お住ひはどちらで御座いますか。何卒弟子となつて業を受け大道を究めたいと存じます」と。漁父が云ふには、「自分は次のやうなことを聞いて居る。與に往くことの出來る上智の人は、敎へて與に玄妙の道に達することが出來るが、與に往くことの出來ない下愚の人は、到底妙道を解し得ないから、避けて行を與にしてはならない。さすれば身に咎はないと。お前も精々道を勉强するさ。どれ俺は失禮しよう」と言ひ捨てゝ、棹をさして船を遣り、葦の間を縫うて立ち去つた。顏淵は車を還して迎へに來り、子路は車の綏を渡してお乘りなさいと勸めたが、孔子は見向きもしなかつた。船の影が次第に小さくなつて水波が靜まり、櫂の音が聞えなくなつて始めて、やつと車に乘つた。

語釋 刺レ船而去（刺は撐なり、船を遣るの意。） ○子路授レ綏（古へ馬車は立ち乘りなり。故に車中に綱を設けて執るに便ならしむ。之を綏といふ。）

いで、ひたすら人事を憂へ、眞を貴ぶことを知らないで、祿々として世俗の爲に化せられ遂に眞性を失ふに至る。されば常に意に安んずること能はずして禍を免れないのだ。誠に惜しいことだ。汝が早く人爲の俗禮に沈溺して、大道を聞くことの遲かつたのは」と。

語釋 眞者精誠之至也（成疏に曰く「夫れ眞とは僞ならず、精とは雜ならず、誠とは矯めざるなり」と、）○忠貞以レ功爲レ主（成疏に曰く、「貞は事の幹なり、故に功を以て主となす」と、）○事レ親以レ適爲レ主（適は親の意に協ふの義。）○祿祿（陸西星曰く「祿々は碌碌と同じ」と、祿祿は獨立の心なきさま。）

孔子又再拜而起曰、今者丘得レ遇也、若二天幸一然。先生不レ羞而比二之服役一、而身教レ之。敢問二舍所一レ在。請因受レ業而卒學二大道一。客曰、吾聞レ之、可二與往一者、與レ之至二於妙道一、不レ可二與往一者、不レ知二其道一、愼勿レ與レ之、身乃無レ咎。子勉レ之。吾去レ子矣、吾去レ子矣。乃刺レ船而去、延二緣葦閒一。顏淵還レ車、子路授レ綏、孔子不レ顧。待二水波定一、不レ聞二挐音一、而後敢乘。

訓讀 孔子又再拜して起つて曰く、今は丘の遇ふを得るや、天幸の若く然り。先生羞ぢずして、之を服役に比して身づから之を敎ふ。敢へて舍の在る所を問ふ。請ふ因つて業を受けて、卒に大道を學ばんと。客曰く、吾れ之を

び、最後に眞は天に受くる所以なりと結び、聖人は之を貴べども、愚人は人爲に出づる禮に拘束せられて眞性を失ふことを述ぶ。

通釋 孔子が愀然と打ち萎れて云ふには、「眞とは如何なるものか伺ひたいものです」と。漁父の云ふには、「眞とは精誠の至極である。精でもなく誠でもなければ、到底人を感動させることは出來ない。されば内に哀情無くして強ひて哭泣する者は、悲しげに見えても哀れを催さない。内に忿怒の情無くして強ひて怒號する者は、嚴しくても人を威壓することは出來ない。内に親愛の情無くして強ひて親愛を裝ふ者は、笑つても人を和樂させることは出來ない。眞の悲みは聲を發して號泣しなくても、おのづから哀れを催し、眞の怒りは外に發しない先に、人を威壓する力があり、眞の親みは笑ひが頰に浮ばない前に、既に人を和樂せしむるものである。眞情が内に溢るゝ時は、其の精神が必ず外に發露するものである。こゝが眞の貴い所だ。之を人倫の上に用ふる時は親に事へては慈孝となり、君に事へては忠貞となり、酒を飮んでは歡樂となり、喪に居ては哀戚となる。忠貞は功績を主とし、飮酒は和樂を主とし、服喪は哀戚を主とし、孝行は順適を主とする。功の成るのは其の績の美なるを尊び、必ずしも其の事迹を一定するには及ばない。されば親に事ふるには適順を主として、方法を論じない。酒を飮むには歡樂を主として酒器の良否を選ばない。喪に服するには哀戚を主として、禮に中ると否とを問はない。一體、禮といふものは、外を飾るに努め世俗の人の爲すことである。之に反して眞は、天から授かつた貴いもので、自然にして永遠に易ふることの出來ないものだ。故に聖人は天に法り眞を貴んで、世俗に拘泥しない。然るに愚者は天に法ることが出來な

不拘於俗。愚者反此。不能法天、而恤於人、不知貴眞、祿祿而受變於俗、故不足。惜哉。子之蚤湛於僞、而晩聞大道也。

訓讀 孔子愀然として曰く、請問す、何をか眞と謂ふと。客曰く、眞とは、精誠の至りなり、精ならず誠ならざれば、人を動かすこと能はず。故に強ひて哭するものは、悲しむと雖も哀しからず。強ひて怒るものは、嚴と雖も威あらず、強ひて親しむものは、笑ふと雖も和せず、眞悲は聲なくして哀しみ、眞怒は未だ發せずして威あり、眞親は未だ笑はずして和す。眞の內に在るものは、神、外に動く。是れ眞を貴ぶ所以なり。其の人理に用ふるや、親に事ふれば則ち慈孝、君に事ふれば則ち忠貞、酒を飮めば則ち歡樂、喪に處れば則ち悲哀。忠貞は功を以て主と爲し、酒を飮むは樂を以て主となし、喪に處るは哀を以て主と爲し、親に事ふるは適を以て主と爲す。功成の美、其の迹を一にすることなく、親に事ふるは適を以てして、所以を論ぜず、酒を飮むには樂を以てして、其の具を選ばず、喪に處るには哀を以てして、其の禮を問ふこと無し。禮なる者は、世俗の爲す所なり。眞なる者は、天に受くる所以なり、自然にして易ふべからざるなり。故に聖人は天に法つて眞を貴び、俗に拘はらず。愚者は此に反す。天に法ること能はずして、人を恤へ、眞を貴ぶことを知らずして、祿祿として變を俗に受く、故に足らず。惜い哉、子の蚤く僞に湛りて、晩く大道を聞けることやと。

大意 孔子が眞とは何ぞやと問へるに、漁父は之に對へて、眞とは精誠の至りなりと說き、次第に其の功用に及

て禍に累はされることはないであらう。然るに今解脱の工夫を我が身に修得しないで、反つて之を他人に要求するのは、內を忘れて外を務むるものではないか」と。

語釋 離二此四謗一（離は罹なり、遭なり、四謗とは冉・衛・宋・陳蔡の四辱なり。） ○處レ蔭以休レ影云云（處レ陰處レ靜は無爲にして自ら守るを謂ふなり。） ○和二喜怒之節一（中庸に曰く「喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ひ、發して皆節に中る、之を和と謂ふ、中なる者は天下の大本なり、和なる者は天下の達道なり」と。）

孔子愀然曰、請問何謂レ眞。客曰、眞者、精誠之至也、不レ精不レ誠、不レ能レ動レ人。故強哭者、雖レ悲不レ哀。強怒者、雖レ嚴不レ威、強親者、雖レ笑不レ和、眞悲無レ聲而哀、眞怒未レ發而威、眞親未レ笑而和。眞在レ內者、神動二於外一。是所三以貴二眞也。其用二於人理一也、事レ親則慈孝、事レ君則忠貞、飮レ酒則歡樂、處レ喪則悲哀。忠貞以レ功爲レ主、飮レ酒以レ樂爲レ主、處レ喪以レ哀爲レ主、事レ親以レ適爲レ主。功成之美、無レ一二其迹一矣、事レ親以レ適、不レ論二所以一矣、飮レ酒以レ樂、不レ選二其具一矣、處レ喪以レ哀、無レ問二其禮一矣。禮者、世俗之所レ爲也。眞者、所三以受二於天一也、自然不レ可レ易也。故聖人法レ天貴レ眞、

を人に求む、亦外ならずやと。

大意 孔子が漁父に魯・宋・衞・陳蔡に於ける四謗を物語り、已れ何等の罪なきに此の災厄に遭へる理由を尋ねたるに、漁父は己の影を畏れ、己の迹を惡んで、疾走して死せる愚人の例を引き來つて、孔子の災厄に遭へるは無爲にして眞を守る能はざる爲なりと述ぶ。

通釋 孔子が愀然と打ち萎れて溜息をつき、再拜して起つて云ふには「私は魯から二度も放逐せられ、衞では足迹を削られ、宋では桓魋に樹を伐られ、陳蔡の間では暴徒に圍まれました。私自身では何等過失があるとは思はないのに、かく四度までも人の怨を蒙つたのは何故でせうか」と。漁父が之を聞いて悽然と悲傷し顏色を變へて云ふには、「お前は隨分血の廻りの惡い男だな。或る所に自分の影法師を畏れ、自分の足迹を惡んで、之を逃れようとして走る者があつた。所が足を擧げる度數が多くなればなるたけ足迹も愈〻多くなり、走る速度が疾くなればなるたけ影は身を離れないのですつかり弱り、これではまだ走り方が遲いから影に追ひつかれるのだと考へて、猶ほ一層疾く走つて休まなかつたので、遂に力竭きて死んで仕舞つたといふことだ。そして日蔭に居れば影は自ら消え失せ、靜にして動かなければ足迹もつかないと云ふことを知らなかつた。愚も亦甚しいと謂ふべきだ。今汝は仁義の理を審かにし、是非の別を察かにし、進退の變を觀、受授の度を適當にし、好惡の情を正し、喜怒の節を和し、心を勞すること甚だ大ではあるが、まだ〳〵此の程度では禍を免れることは難しい。それよりは謹んで我が身を修め、愼んで我が眞性を守り、外物をば人に還し與へ、相對の世界を脫して本體の世界に入れば、我人共に全くし

畏影惡迹而去之走者。舉足愈數而迹愈多、走愈疾而影不離身。自以爲尚遲、疾走不休、絶力而死。不知處陰以休影、處靜以息迹。愚亦甚矣。子審仁義之閒、察同異之際、觀動靜之變、適受與之度、理好惡之情、和喜怒之節、而幾於不免矣。謹修而身、愼守其眞、還以物與人、則無所累矣。今不修之身而求之人、不亦外矣。

訓讀 孔子愀然として歎じ、再拜して起つて曰く、丘再び魯に逐はれ、迹を衞に削られ、樹を宋に伐られ、陳蔡に圍まる。丘は失ふ所を知らずして、此の四謗に離る者は何ぞやと。客悽然として容を變じて曰く、甚しいかな子の悟し難きことや。人の影を畏れ、迹を惡んで之を去つて走るものあり。足を擧ぐること愈〻數〻にして迹愈〻多く、走ること愈〻疾くして影は身を離れず。自ら以爲へらく尚ほ遲しと、疾く走つて休まず、力を絶つて死す。陰に處りて以て影を休め、靜に處りて以て迹を息むるを知らず。愚も亦甚し。子は仁義の閒を審にし、同異の際を察し、動靜の變を觀、受與の度を適へ、好惡の情を理め、喜怒の節を和して、而も免れざるに幾し。謹んで而の身を修め、愼んで其の眞を守り、還して物を以て人に與へば、則ち累はさるゝ所なし。今之を身に修めずして之を

己の爲すべき事でないのに、强ひて之を爲すのを總といひ、別に顧みて言を求めもしないのに、强ひて言を進むるのを佞といひ、先づ人の意を迎へて言葉を述べるのを諂といひ、事の是非を擇ばないで多言するのを諛といひ、好んで人の短所のみを語るのを讒といひ、人の交際を析き、親密を引き離すのを賊といひ、己と親しい者は惡でも譽め、己と疎い者は善でも毀つて、人を惡に陷れるのを慝といひ、事の善惡を擇ばず、二者共に受け容れ顏色を窺つて意を受け、人の好む所に調子を合はせるのを險といふ。以上述べた八つの疵は、外は以て衆人を惑亂し、內は以て一身を毀傷するが故に、君子は遠ざけて之を友とせず、明君は斥けて之を臣としないのである。次に余の所謂四患とは、好んで國家の大事を經理し、幾度か變更し常法を易へて、功名を高くかゝげようとするのを叨といひ、專ら私智を働かし、獨り事を恣にし、人を侵して自ら用ふるのを貪といひ、己の過を見て改めず、人の諫言を聞いて愈ゝ增長するのを很といひ、人が己と同じ意見なれば之を可とし、然らざれば善でも善としないのを矜といふ。これが卽ち四つの大患である。能くこの八疵を除き去り、四患を行はなくなつて始めて道を敎へることが出來るのである」と。

語釋　摠（成疏に云ふ、「摠は濫なり」と。）〇兩容頰適（釋文に云ふ、「善惡皆容れ、容貌調適するなり、頰或は顏に作る」と。）

孔子愀然而歎、再拜而起曰、丘再逐於魯、削迹於衞、伐樹於宋、圍於陳蔡。丘不知所失、而離此四謗者何也。客悽然變容曰、甚矣子之難悟也。人有

貪。見過不更、聞諫愈甚、謂之很。人同於己則可、不同於己、雖善不善、謂之矜。此四患也。能去八疵、無行四患、而始可教已。

訓讀 且つ人に八疵あり、事に四患あり、察せざるべからざるなり。其の事に非ずして之を事とする、之を總と謂ひ、之を顧みること莫くして、之を進むる、之を佞と謂ひ、意を希ひ、言を道く、之を諂と謂ひ、是非を擇ばずして言ふ、之を諛と謂ひ、好んで人の惡を言ふ、之を讒と謂ひ、交を析き親を離つ、之を賊と謂ひ、稱譽詐僞して以て人を敗惡する、之を慝と謂ひ、善否を擇ばず、兩ながら容れ頰適して、其の欲する所を偸拔する、之を險と謂ふ。此の八疵は、外以て人を亂り、内以て身を傷る。君子は友とせず、明君は臣とせず。所謂四患は、好んで大事を經し、變更して常を易へ、以て功名を挂けんとす、之を叨と謂ふ。知を事にし事を擅にし、人を侵して自ら用ふる、之を貪と謂ふ。過を見て更めず、諫を聞いて愈〻甚しき、之を很と謂ふ。人己に同じければ則ち可とし、己に同じからざれば、善と雖も善とせざる、之を矜と謂ふ。此れ四患なり。能く八疵を去り、四患を行ふなくして、始めて敎ふべきのみと。

大意 漁父前說に引き續き、人には八疵、四患あり、之を除き去りて始めて敎ふべしといひ、徐々に己の有する大道に入らんとするなり。

通釋 加ふるに人には八つの疵があり、事には四つの患があるから、よくよく之を明らかにしなければならない。

失して、萬物の生成を傷ひ、諸侯は暴亂を働き、勝手に取つたり攻めたりして、民の財用を殘ひ、禮樂は中和を得ず、財政は窮迫して、人倫は整はず、百姓の淫亂なのが、天子の公卿たる者の憂である。今汝は既に上は諸侯たり天子の公卿たる勢威もなく、下は諸侯の卿大夫たる官職もなく、一匹夫の身に過ぎないのに、勝手に禮樂を飭へ、人倫を規定して、衆人を敎化しようとするが、隨分餘計なお世話ではないか。

語釋　經子所以（釋文に云ふ「經は經營なり、司馬云ふ、經は理なり」と、今は林注に從つて條陳の意に解す、以は用なり。）○乃無所陵（成疏に曰く「陵も亦亂なり」と。）○田荒室露（郭慶藩曰く「荒露は荒蕪敗露を謂ふ、方言に曰く、露は敗なり」と。）○貢職（釋文に云ふ「職或は賦に作る」と。）

且人有八疵、事有四患、不可不察也。非其事而事之、謂之總。莫之顧而進之、謂之佞。希意道言、謂之諂。不擇是非而言、謂之諛。好言人之惡、謂之讒。析交離親、謂之賊。稱譽詐僞以敗惡人、謂之慝。不擇善否、兩容頰適、偸拔其所欲、謂之險。此八疵者、外以亂人、內以傷身。君子不友、明君不臣。所謂四患者、好經大事、變更易常、以挂功名、謂之叨。專知擅事、侵人自用、謂之

の官なし。而るに擅に禮樂を飭へ、人倫を選び、以て齊民を化せんとす。泰だ多事ならずや。

大意 孔子が至敎を乞へるに對し、漁父は先づ說くに人事を以てし、世に天子、諸侯、大夫、庶人の四階あるを明にし、其の憂に就いて述べ、孔子が匹夫の身を以て四者の憂を憂とするの愚を笑ふ。

通釋 孔子が再拜して起つて云ふには、「私は少年時代から學問を修めて、今日最早六十九歳の老人になりましたが、まだ至人の敎へを承はる機會がありませんでした。今幸に先生に遇ふことが出來ました。是非心を虛しうして御高敎を拜聽いたしたいと存じます」と。漁父が云ふには、「凡そ類を同じくする者は相從ひ、聲を同じくする者は相應ずるといふのが、固より自然の常理である。今汝が余に敎へを乞ふのも同聲相應ずるものだ。では先づ試みに吾が有する所の大道を棄てゝ、汝の事とする人事に就いて論じて見よう。汝の事とし努むるのは日常茶飯の問題である。天子、諸侯、大夫、庶人の此の四者が各ゝ其の職に任じて秩序の自ら正しいは、治平の盛美なものであり、此の四者が位を離れて上下相侵すならば、天下の衰亂これより大なるはない。百官各ゝ司る職を治め、庶人各ゝ從ふ業に勉むれば、上下亂るゝことはない。されば田は荒れ家は敗れ、衣食は足らず、租稅は滯つて後が續かず、妻妾は寵を爭つて和合せず、長幼は次序を失つて一家が治らないのが、庶人の憂である。材能は下劣にして任に勝へず、官の職事は治らず、行ひは淸廉潔白をかき、下僚は荒み怠り、勳功の美すべきもの無く、爵祿を維持することの出來ないのが、大夫の憂である。朝廷に忠臣なく、國家は昏亂し、百工の技藝は拙なく、天子への貢物は粗惡にして、春秋の朝覲は儕輩に後れ、天子に從順でないのが、諸侯の憂である。陰陽は調はず、寒暑は時を

亂、工技不巧、貢職不美、春秋後倫、不順天子、諸侯之憂也。陰陽不和、寒暑不時、以傷庶物、諸侯暴亂、擅相攘伐、以殘民用、禮樂不節、財用窮匱、人倫不飭。百姓淫亂、天子有司之憂也。今子既上無君侯有司之勢、而下無大臣職事之官。而擅飾禮樂、選人倫、以化齊民。不泰多事乎。

訓讀　孔子再拜して起つて曰く、丘少うして學を修め、以て今、六十九歳に至る。至教を聞くを得る所なし。敢へて心を虛しうせざらんやと。客曰く、同類相從ひ、同聲相應ずるは、固より天地の理なり。吾れ請ふ吾れの有する所を釋てゝ、而して子の以ふる所を經せん。子の以ふる所のものは人事なり。天子、諸侯、大夫、庶人、此の四者自ら正しきは、治の美なり。四者位を離るれば、亂焉より大なるは莫し。官其の職を治め、人其の事を憂ふれば、乃ち陵ぐ所なし。故に田荒れ室露れ、衣食足らず、徵賦屬がず、妻妾和せず、長少序なきは、庶人の憂なり。能任に勝へず、官事治まらず、行は淸白ならず、羣下は荒怠し、功美有せず、爵祿持せざるは、大夫の憂なり。廷に忠臣なく、國家昏亂し、工技巧ならず、貢職美ならず、春秋倫に後れて、天子に順はざるは、諸侯の憂なり。陰陽和せず、寒暑時ならず、以て庶物を傷り、諸侯暴亂し、擅に相攘伐し、以て民用を殘ひ、禮樂節せず、財用窮匱し、人倫飭はず、百姓淫亂なるは、天子、有司の憂なり。今子既に上は君侯有司の勢なく、而して下は大臣職事

に至つたのは、何を求めんが爲であるか」と。孔子が對へて云ふには、「先程先生は門人どもにお話があつたさうですが、十分言ひ盡されないで去つて仕舞はれました。私は至つて愚かな者で、まだ御趣意がよくのみこめません。竊に先生の下座に坐つてお待ちして居りまする故、どうか御敎訓をお垂れ下さつて、私の及ばない點を助け導いて戴きたいと存じます」と。之を聞いて漁父が云ふには、「ふ、ふ、ふん、汝は隨分學問の好きな男だなあ」と。

語釋 杖ㇾ拏（釋文に云ふ、「拏は泣居反、司馬云ふ、撓なり、音饒」と。）○緒言（俞樾に據れば「緒は餘なり、先生の言未だ畢らずして已る、是れ盡さざるの言あり、故に緒言と曰ふ」と。）○咳唾之音（せきとつばきとの意、導じて長者の言を敬ひて言ふ、漢書宣元六十傳に「大王誠に咳唾を賜ふ」と見ゆ。）

孔子再拜而起曰。丘少而修學、以至於今六十九歲矣。無所得聞至敎。敢不虛心。客曰、同類相從、同聲相應、固天地之理也。吾請釋吾之所有、而經子之所以。子之所以者人事也。天子諸侯大夫庶人、此四者自正、治之美也。四者離位、而亂莫大焉。官治其職、人憂其事、乃無所陵。故田荒室露。衣食不足、徵賦不屬、妻妾不和、長少無序、庶人之憂也。能不勝任、官事不治、行不淸白、羣下荒怠、功美不有、爵祿不持、大夫之憂也。廷無忠臣、國家昏

子貢還報孔子。孔子推琴而起曰、其聖人與。乃下求之、至於澤畔。方將杖拏而引其船。顧見孔子、還鄉而立。孔子反走、再拜而進。客曰、子將何求。孔子曰、曩者先生有緒言而去。丘不肖、未知所謂。竊待於下風。幸聞咳唾之音、以卒相丘也。客曰、譆。甚矣子之好學也。

訓讀　子貢還つて孔子に報ず。孔子琴を推して起つて曰く、其れ聖人かと。乃ち下つて之を求めて、澤畔に至る。方に將に拏を杖てゝ其の船を引かんとす。顧みて孔子を見、還鄉して立つ。孔子反り走り、再拜して進む。客曰く、子將に何をか求めんとすると。孔子曰く、曩に先生緒言あつて去る。丘不肖未だ所謂を知らず。竊に下風に待つ。幸に咳唾の音を聞かしめて、以て卒に丘を相けよと。客曰く、譆、甚しいかな。子の學を好むことやと。

大意　孔子、子貢の報告に接し、漁父を求めて澤畔に至り、之と會見して教を乞へる次第を叙す。

通釋　子貢が還つて來て、その事を孔子に報告すると、孔子は琴を側らに推しやり俄に起ち上つて云ふには「その人こそ恐らく聖人であらう」と。そこで早速杏壇を下つて漁父の姿を探し求めて澤の畔までくると、漁父は丁度棹を立てゝ、船を漕ぎ出さうとする所であつたが、振り返つて孔子を見、身體を還らして孔子に鄉つて立つた。孔子は後退すること數步、恭しく禮拜して而る後に進み出た。是に於て漁父が尋ねて云ふには「汝が余を追うて此

に雪を帶びた老人で、髪をふり亂し、袂を揮つて沙原を歩いて上り、小高い平地に至つて止まり、左手を膝の上におき、右手に頤を支へて孔子の歌曲を聽いて居た。やがて曲が終ると、子貢と子路とをさし招いたので、二人が往つて漁父と差向ひになると、かの漁父が孔子を指して云ふには、「彼はどういふ人閒だ」と。子路が對へて云ふには、「魯國の君子である」と。漁父が重ねて其の氏族を尋ねたので、子路が對へて云ふには、「族は孔氏である」と。漁父更に問ふて云ふには、「孔氏とは一體何を職業とする人であるか」と。子路がまだ對へない先に、子貢が引取つて云ふには、「孔氏は性に忠信を服し、身に仁義を行ひ、禮樂を修め整へて、人と人との關係を規定し、上は世の人主に忠誠をつくし、下は萬民を敎化して、天下の福利を增進しようとしてゐる。これが孔氏の治むる所の道である」と。漁父が又問うて云ふには、「では孔氏は領土を有する君か」と。子貢が對へて云ふには、「否、さうではない」と。漁父が又問うて云ふには、「然らば侯王の輔佐か」と。子貢が對へて云ふには、「否、さうでもない」と。そこで漁父が笑つて歸途に就き、歩きながら言ふには、「成程、仁は仁であるが、恐らく其の身の禍を免れないであらう。徒らに心を苦しめ、身を勞して、自己の眞性を危くするばかりで、道と離ること甚だ遠いものだ」と。

【語釋】緇帷之林（釋文には、司馬彪の說を引いて、「林の名」と解して居る。成疏には之を「其の林鬱茂して、日を蔽うて陰沈、葉を布き條を垂れ、又帷幕の如し、故に之を緇帷の林と謂ふなり」と詳述して居る。）　○有漁父者（釋文に「父は音甫、魚を取るの父なり、一に云ふ、是れ范蠡」と解して居るが漁父を范蠡とする說には與し難い。）　○杏壇（釋文には、司馬の說を引いて、「澤中の高處なり」と云ひ、又李の說を引いて「壇の名」と解して居る、成疏に之を釋つて「其の處杏多し、之を杏壇と謂ふ」と云つて居る。）　○須眉交白（須は鬚に通ず、交は俱なり、一說に皎なりと、今、後說に從へば「皎白」の義となれども、前說に從ふ。）　○飾禮樂（釋文に、「飾は又飭に作る、音敕」と見ゆ、按ずるに飾は飭と通用す、飭は修整の意。）　○下以化齊民（釋文に「李云ふ、齊は等なりと、許愼云ふ、齊等の民なりと、如淳云ふ、齊民は猶平民のごとし」と見ゆ。）　○其分於道也（釋文に「司馬云ふ、分は離なり」と。）

恐不免其身。苦心勞形、以危其眞。嗚呼遠哉。其分於道也。

【訓讀】孔子緇帷の林に遊び、杏壇の上に休坐す。弟子書を讀み、孔子弦歌して琴を鼓す。曲を奏すること未だ半ばならず、漁父なるものあり、船を下つて來る。須眉交白、髮を被り袂を揄し、原を行きて以て上り、陸に距りて止まる。左手膝に據り、右手頤を持して以て聽く。曲終つて子貢子路を招く。二人倶に對す。客は孔子を指して曰く、彼は何爲るものぞやと。子路對へて曰く、魯の君子なりと。客其の族を問ふ、子路對へて曰く、族は孔氏と。曰く、孔氏なるものは何をか治むると。子路未だ應へず。子貢對へて曰く、孔氏は、性忠信を服し、身仁義を行ひ、禮樂を飾り、人倫を選び、上以て世主に忠に、下以て齊民を化し、將に以て天下を利せんとす。此れ孔子の治むる所なりと。又問うて曰く、有土の君かと。子貢曰く、非なりと。侯王の佐かと。子貢曰く、非なりと。客乃ち笑つて還る。行く言つて曰く、仁は則ち仁なり、恐らくは其の身を免れざらん。心を苦しめ形を勞し、以て其の眞を危うす。嗚呼遠きかな、其の道に分るゝことやと。

【大意】孔子が弟子と緇帷の林に游んで絃歌して居た時、一人の漁父が現はれて、弟子の子貢子路と孔子に就いて問答し、孔子の德治主義は、徒らに心を苦しめ形を勞して、自己の天性を害するのみだと評し去つたことを叙す。

【通釋】孔子が弟子と緇帷の林に遊んで、杏壇の上に休息して居た。その時弟子達は書を讀み、孔子は詩を誦して琴を鼓いて居たが、曲を奏づること未だ半にも及ばないのに、一人の漁父が船から下りて來た。見れば鬚も眉も倶

雜篇　漁父第三十一

叙説　此篇、孔子が漁父に遇ひて道を問ひ、漁父孔子に外を説くことを叙す。通篇亦一章なり。

孔子遊乎緇帷之林、休坐乎杏壇之上。弟子讀書、孔子弦歌鼓琴。奏曲未半、有漁父者、下船而來。須眉交白、被髮揄袂、行原以上、距陸而止。左手據膝、右手持頤以聽。曲終而招子貢子路。二人俱對。客指孔子曰、彼何爲者也。子路對曰、魯之君子也。客問其族。子路對曰、族孔氏。曰、孔氏者何治也。子路未應。子貢對曰、孔氏者、性服忠信、身行仁義、飾禮樂、選人倫、上以忠於世主、下以化於齊民、將以利天下。此孔子之所治也。又問曰、有土之君與。子貢曰、非也。侯王之佐與。子貢曰、非也。客乃笑而還。行言曰、仁則仁矣、

髮は亂れて蓬の如く、鬢を突き出し、低く傾いた冠を戴き、粗末な冠の紐を結び裾の短い上衣を纏ひ、目を怒らし聲を勵まして論難し、王の御前で劍を撃ち合ひ、上は頸や領を斬り、下は肝や肺を傷けます。これが所謂庶人の劍であつて、まるで鷄の蹴合ひと異る所がありません。一たび生命が絶えて仕舞へば、もはや國事に用ふる術はないのであります。然るに今、大王は天子の位に在り乍ら、鬪鷄同然の庶人の劍をお好みになるのは、私が心竊かに大王の爲に愧づる所であります」と。是に於て文王は豁然として其の非を悟り、自ら莊子の手を牽いて御殿に上つた。料理番が食膳を進めたけれども、王は心落ちつかず、三たび食膳をめぐつて箸をとりかねた。莊子は見かねて云ふには、「大王よ、安坐して心氣をお鎭めなさい。劍の話は最うすつかり濟みました」と。是に於て文王は深く前非を悔い、宮中に謹愼して三ケ月も外に出です、劍士の禮遇が頓に改まつたので、劍士は皆憤つて自殺して仕舞つた。

語釋　宰人（肉を料理する者、厨人に同じ。）　○王三環レ之（釋文に、「環は繞なり、義を聞いて愧づ、饌を繞つて三周し、坐食する能はず」と見ゆ。）　○服ニ斃其處一（釋文に、「司馬云ふ、禮せられざるを忿つて皆自殺せるなり」と。）

王曰、庶人之劍何如。曰、庶人之劍、蓬頭、突鬢、垂冠、曼胡之纓、短後之衣、瞋目而語難、相擊於前、上斬頸領、下決肝肺。此庶人之劍、無異於鬭雞。一旦命已絕矣、無所用於國事。今大王有天子之位、而好庶人之劍。臣竊爲大王薄之。王乃牽而上殿。宰人上食。王三環之。莊子曰、大王安坐定氣。劍事已畢奏矣。於是文王不出宮三月、劍士皆服斃其處也。

訓讀　王曰く、庶人の劍は何如と。曰く、庶人の劍は、蓬頭、突鬢、垂冠、曼胡の纓、短後の衣、目を瞋らして語難し、前に相擊ち、上は頸領を斬り、下は肝肺を決す。此れ庶人の劍、鬭雞に異なる無し。一旦命已に絕つ、國事に用ふる所なし。今大王天子の位あり、而して庶人の劍を好む。臣竊かに大王の爲めに之を薄んずと。王乃ち牽いて殿に上る。宰人食を上る。王三たび之を環る。莊子曰く、大王安坐して氣を定めよ。劍事已に畢く奏せりと。是に於て文王宮を出でざること三月、劍士皆其の處に服斃す。

大意　莊子、庶人の劍を說き、王をして好劍の非を悔悟せしむることを敘す。

通釋　王が云ふには、「然らば庶人の劍とは如何なるものですか」と。莊子が對へて云ふには、「庶人の劍とは、頭

【訓讀】文王芒然自失して曰く、諸侯の劍は何如と。曰く、諸侯の劍は、知勇の士を以て鋒と爲し、淸廉の士を以て鍔と爲し、賢良の士を以て脊と爲し、忠聖の士を以て鐔と爲し、豪傑の士を以て夾と爲す。此の劍之を直くすれば亦前なく、之を擧ぐれば亦上なく、之を案ふれば亦下なく、之を運らせば亦旁なし。上は圓天に法りて以て三光に順ひ、下は方地に法りて以て四時に順ひ、中は民意を和して以て四鄕を安んず。此の劍一たび用ふれば、雷霆の震ふが如し。四封の內、賓服して君命に聽從せざるものなし。此れ諸侯の劍なりと。

【大意】諸侯の劍を說く。

【通釋】文王はぼんやりとしてあつけにとられて云ふには、「然らば諸侯の劍とは如何なるものですか」と。莊子が對へて云ふには、「諸侯の劍とは、智勇の士を鋒とし、淸廉の士を鍔とし、賢良の士を脊とし、忠聖の士を鐔とし、豪傑の士を夾とするのです。而して此の劍は、之を眞直に持てば前に當る物なく、之を擧げて振り翳せば上に支ふる物なく、之を案へてさつと擊ち下せば下に障ふる物なく、之を振り廻せば前後左右遮る物も御座いません。上は圓形の天に法り象つて日月星の三光に順ひ、下は方形の地に法り象つて春夏秋冬の四時に順ひ、中は民心を和樂せしめて四方を安んずるのです。此の劍を一たび用ふる時は、其の威力の盛んなること雷霆の天を鳴動させるやうで、海內の諸侯、皆其の威に服して君命を聽かざる者はありません、これが私の所謂諸侯の劍であります」と。

【語釋】三光（日月星なり、白虎通に、「天に三光有り、日・月・星、地に三形有り、高・下・平、人に三尊有り、君・父・師」と見ゆ。）○四鄕（成疏に曰く、「四鄕とは猶四方の如し」と。）○賓服（賓從に同じ、來り從ふの意。）

へて撃ち下せば下に障ふる物無く、之を振廻せば前後左右遮る物無く、上は空に浮べる雲を切り開き、下は地を繋ぐ大綱をも切り絶つといふ有様で、此の劍を一たび用ひたなれば、諸侯を匡正して、天下が忽ち服從します。これが私の所謂天子の劍であります」と。

語釋 今日試使士敦劍（釋文に曰く、「司馬云ふ、敦とは斷なり、試みに劍を用ひて相撃ち斷截せしむるなり」と。又兪樾曰く、「詩閟宮、敦商之旅の鄭箋に云ふ、敦は治なり」と、今前說に從ふ。）○夫子所御杖（成疏に曰く、「御用なり」と。杖はオ劍の類を謂ふ。）○以燕谿石城爲鋒（以下九句專ら劍の體に就いて論ず。）○晉魏爲脊（按ずるに、下文に韓魏爲夾と見ゆ、魏字再出す、或は晉趙の誤か。）○開以陰陽云云（成疏に曰く、「夫れ陰陽開闔、春夏維持、秋冬肅殺は、自然の道なり」と、制以五行より下五句、劍の製作の精巧なる所以を說く。）○直之無前（以下六句劍の用に就いて說く。）

文王芒然自失曰、諸侯之劍何如、曰、諸侯之劍、以知勇士爲鋒、以清廉士爲鍔、以賢良士爲脊、以忠聖士爲鐔、以豪傑士爲夾。此劍直之亦無前、擧之亦無上、案之亦無下、運之亦無旁。上法圓天以順三光、下法方地以順四時、中和民意以安四鄕。此劍一用、如雷霆之震也。四封之內、無不賓服而聽從君命者矣。此諸侯之劍也。

てし、行ふに秋冬を以てす。此の劍之を直くすれば前なく、之を擧ぐれば上なく、之を案ふれば下なく、之を運らせば旁なく、上は浮雲を決し、下は地紀を絶つ。此の劍一たび用ふれば、諸侯を匡し、天下服す。此れ天子の劍なりと。

大意　莊子、趙王に劍に三種あることを說き、先づ天子の劍なるものを詳說す。

通釋　やがて準備が整つたので、王は莊子を呼び出して云ふには、「今日は豫ての約束通り劍士に立合せてみて、優劣を決めることにしよう」と。莊子が云ふには、「それこそ長く望んで居た所です」と。王が云ふには、「先生の用ひられる劍は長いのですか、短いのですか」と。莊子が云ふには、「私の用ひるのは、長短何れでも宜しい。しかし、私には三種の劍がありますから、何れでも御意のまゝですが、でも一應その劍に就いて申上げた上で實地に試みることに致しませう」と。王が云ふには「では、三種の劍に就いてお話が承りたい」と。莊子が云ふには、「天子の劍があり、諸侯の劍があり、庶人の劍があります。之を三劍と申すのです」と。王が云ふには、「天子の劍とは如何なるものであるか」と。莊子が對へて云ふには、「天子の劍とは、燕の燕谿と塞外の石城とを鋒とし、齊の岱山を鍔とし、晉・魏を脊とし、周・宋を鐔とし、韓魏を夾とし、之を包むに東夷・西戎・南蠻・北狄の四夷を以てし、更に裹むに春夏秋冬の四時を以てし、繞らすに渤海を以てし、帶ぶるに常山を以てし、之を制するに木火土金水の五行を以てし、之を論ずるに刑罰恩德を以てし、開くに陰陽二氣を以てし、持するに春夏の和を以てし、行ふに秋冬の威を以てします。而して此の劍は、之を眞直に持てば前に當る物無く、之を擧げて振翳せば上に支ふる物無く、之を案

何如。曰、臣之所奉皆可、然臣有三劍、唯王所用。請先言而後試。王曰、願聞三劍。曰、有天子劍、有諸侯劍、有庶人劍。王曰、天子之劍何如。曰、天子之劍、以燕谿石城爲鋒、齊岱爲鍔、晉魏爲脊、周宋爲鐔、韓魏爲夾、包以四夷、裹以四時、繞以渤海、帶以常山、制以五行、論以刑德、開以陰陽、持以春夏、行以秋冬。此劍直之無前、擧之無上、案之無下、運之無旁、上決浮雲、下絶地紀。此劍一用、匡諸侯、天下服矣。此天子之劍也。

訓讀 乃ち莊子を召して曰く、今日試みに士をして劍を敦めしめんと。莊子曰く、之を望むこと久しと。王曰く、夫子御する所の杖は長短何如と。曰く、臣の奉ずる所は皆可なり、然れども臣に三劍あり、唯〻王の用ふる所のみ。請ふ先づ言つて而る後に試みんと。王曰く、願はくは三劍を聞かんと。曰く天子の劍あり、諸侯の劍あり、庶人の劍ありと。王曰く、天子の劍は何如と。曰く、天子の劍は、燕谿、石城を以て鋒と爲し、齊岱を鍔と爲し、晉魏を脊と爲し、周宋を鐔と爲し、韓魏を夾と爲し、包むに四夷を以てし、裹むに四時を以てし、繞らすに渤海を以てし、帶ぶるに常山を以てし、制するに五行を以てし、論ずるに刑德を以てし、開くに陰陽を以てし、持するに春夏を以

て云ふには、「私は大王が擊劍を好まれると聞いたから、擊劍によつて御目にかゝらうと思つて參りました」と。王が重ねて問うて云ふには、「汝の劍は一體何人位相手を制することが出來るのか」と。莊子が對へて云ふには、「私の劍は十步每に一人を斬り、千里を行くも遮り止むるものがありません」と。王はこれこそ我が意を得たりと大いに說んで云ふには、「それは素晴しい、天下無敵だ」と。此に於て莊子が徐ろに口を開いて云ふには、「抑ゝ劍道を爲むる極意は、敵に示すに隙を以てし、敵を誘ふに利を以てし、敵に後れて發し、敵に先んじて擊つに在ります。一つ御前でやらせて戴きたいと存じます」と。王が快く承諾して云ふには、「それでは暫く宿舍で身體を休めて、命令の下るのをお待ち下さい。その間に仕合の仕度をさせて先生の御出でを願ひませう」と。王はそこで出場の劍士を選拔する爲、力を較ぶること七日の長きに及んだ。其の爲死傷者が六十餘人も續出したが、遂に名手五六人を選定して、殿下に莊子と劍技を試みさせることとなつた。

語釋 莊子入ニ殿門一不レ趨（趨は小足にて疾く走ること、貴人の前を通る時の禮なり。）　○子欲ニ何以敎ニ寡人一、使ニ太子先一（成疏に曰く、「何の術を用ひて、以て我に敎練せんと欲して、太子をして先づ我に言ひしむるか」。先ぜしむとは豫め紹介せしむる意なり。）　○示レ之以レ虛云云（劍道の極意は、先づ敵に對して虛を示し、敵の方から打ち込み易いやうにして敵を近くおびき寄せ、敵に後れて劍を動かし、而も敵に先だつてすばやく打込むに在るとの意。）
○令レ設レ戲（國語の晉語に、「與レ之戲」と見ゆ、韋昭は戲に注して、力を角するなりと云へり、こゝには力を角する場所の意に解す。）

乃召ニ莊子一曰、今日試使ニ士敦一レ劍。莊子曰、望レ之久矣。王曰、夫子所レ御杖長短

子先。曰。臣聞大王喜劍。故以劍見王。王曰、子之劍、何能禁制。曰、臣之劍、十步一人。千里不留行。王大說之曰、天下無敵矣。莊子曰、夫爲劍者、示之以虛、開之以利、後之以發、先之以至。願得試之。王曰、夫子休就舍待命。令設戲請夫子。王乃校劍士七日、死傷者六十餘人、得五六人、使奉劍於殿下。

訓讀 王白刃を脫して之を待つ。莊子殿門に入つて趨らず、王を拜せず。王曰く、子何を以て寡人に敎へんと欲して、太子をして先んぜしむると。曰く、臣聞く大王劍を喜むと。故に劍を以て王に見ゆと。王曰く、子の劍、何をか能く禁制すると。曰く、臣の劍、十步に一人、千里行くを留めずと。王大に之を說んで曰く、天下に敵なしと。莊子曰く、夫れ劍を爲むる者は、之に示すに虛を以てし、之を開くに利を以てし、之に後れて以て發し、之に先んじて以て至る。願はくは之を試むるを得んと。王曰く、夫子休せよ。舍に就いて命を待て。戲を設けしめて夫子を請はんと。王は乃ち劍士を校すること七日、死傷するもの六十餘人、五六人を得、劍を殿下に奉ぜしむ。

大意 莊子、趙王に見え、己が劍術を誇說して試合を申込む。王悅びて莊子の相手を選ぶことを敘す。

通釋 文王は白刃を拔いて待つて居た。然るに莊子は殿門に入つても趨走の禮を行はず、王に見えてもお辭儀一つしなかつた。王が問うて云ふには、「汝は余に何を敎へるつもりで、太子に豫め紹介させたのか」と。莊子が對へ

死なねばならない。それでは千金なぞ頂戴したとて必要がないではないか。又若し私が上大王に說いて用ひられ、下太子の意を果したならば、趙の國難を救つたのであるから、何を要求したとて得られないものはありますまい」と。太子が云ふには、「如何にも先生の仰せらるゝ通りだ。我が父文王の眼前には唯〻劍士あるのみです」と。莊子が云ふには、「よろしい。私は嘗て劍を學んで相當自信を持つて居る」と。太子が云ふには、「成程然うでしたか。だが我が父の平素見る所の劍士は、皆頭髮は亂れて蓬の如く、鬢を突き出し、低く傾いた冠を戴き、粗末な冠の紐を結び、裾の短い上衣を纏ひ、目を怒らして論難します。すると王は其の樣を見てにこ〱と悅んで居ます。今先生が儒者の服を著けて王に御會ひになるならば、其の事が必ず王の御機嫌を損じて、折角御說き下されても徒勞に終りませう」と。莊子が云ふには、「それでは劍士の服を調へて參りませう」と。莊子は三日かゝつて劍服の用意を調へて、太子に會つた。太子はそこで莊子を伴うて文王の許に至つて謁見した。

【語釋】趙文王（釋文に、「司馬云ふ、惠文王なり、名は何、武靈王の子、莊子に後るゝこと三百五十年」と、綱紀に云ふ「周の赧王の十七年は趙の惠文王の元年」と、一に云ふ「長曆を案じ、惠文王を推すに、莊子と相値ふ、恐らくは司馬彪の言誤る」と。）○太子悝（釋文に、「悝は太子の名」と、兪樾曰く、「惠文王の後を孝成王丹と爲す、則ち此の太子は立たず」と。）○何以敎周云云（何を仰せつけられんとして千金を賜はりしやの意、周は莊子の名。）○垂冠（釋文に曰く、「將に鬪はんと欲す、故に冠低く傾くたり」と。）○曼胡之纓（釋文に曰く、「曼胡の纓とは、麤纓の文理無きを謂ふなり」と、飾無き冠の紐の意。）○短後之衣（釋文に曰く、「事に便なる爲なり」と、即ち裾短にして武事に便なる上衣の意。）○語難（釋文に曰く、「勇士の憤氣、心胸に積み、言、流利せざるなり、又云ふ、既に怒つて語る、人の畏れ難かる所と爲ると、司馬云ふ、說相擊つなり」と、要するに劍士が武骨なる聲を張り上げ、ごつ〱と問へ乍ら互に難詰する意。）

王脫白刃待之。莊子入殿門不趨、見王不拜。王曰、子欲何以敎寡人、使太

が王の見る所の劍士は、皆蓬頭、突鬢、垂冠、曼胡の纓、短後の衣、目を瞋らして語難す。王乃ち之を説ぶ。今夫太子必ず儒服して王に見えば、事必ず大に逆はんと。荘子曰く、請ふ劍服を治めんと。劍服を治むること三日、乃ち太子に見ゆ。太子乃ち與に王に見ゆ。

大意 趙の文王、撃劍を好み國衰ふ、太子悝之を患ひ、荘子に頼んで之を止めしめんことを叙す。

通釋 昔趙の文王が撃劍を好んだので、劍士の其の門に游んで食客となる者、三千餘人の多きに及び、晝夜の別なく王の前で撃劍をして、爲に死傷する者が年々百餘人に達した。然るに王は撃劍を好んで厭くことを知らなかつた。斯くして三年ほど立つと國がすつかり衰へて、隣國の諸侯は此の虚に乘じて趙を伐たんと謀つた。太子の悝は痛く之を患へて、左右近臣に募つて云ふには、「誰か父文王の御機嫌を損ねず、劍士を止めさせる事の出來る者はないか。若しあらば之に千金の賞を與へよう」と。左右の者が云ふには、「荘子ならば出來るでありませう」と。そこで太子は使者を遣し千金を荘子に捧げ贈らせた。然るに荘子は其の金を受けないで、使者と一緒に太子の許に來て面會して云ふには、「太子は私に何を仰せ付けられる積りで、千金を下さつたのですか」と。すると太子が云ふには、「先生は賢哲聖明なる方であると聞いて、謹んで千金を捧げて、幣帛として從者の許まで贈つた次第です。然るに先生は之をお受け下さらなかつたから、私は此の上何も申上げることは出來ません」と。それを聞いて荘子が云ふには、「聞く所によれば、太子が私を用ひんとせられたのは、王の嗜好せらるる撃劍を止めさせたい爲とのことですが、若し私が上大王に説いて用ひられず、王の御機嫌を損ひ、下太子の意に適はなかつたならば、我が身は刑せられて

子曰、然。吾王所見唯劍士也。莊子曰、諾、周善爲劍。太子曰、然。吾王所見劍士、皆蓬頭、突鬢、垂冠、曼胡之纓、短後之衣、瞋目而語難。王乃說之。今夫子必儒服而見王、事必大逆。莊子曰、請治劍服。治劍服三日、乃見太子。太子乃與見王。

訓讀　昔趙の文王劍を喜む。劍士門を夾んで客たるもの三千餘人、日夜前に相擊ち、死傷するもの歲に百餘人。之を好んで厭かず、是の如きこと三年にして國衰ふ。諸侯之を謀る。太子悝之を患へ、左右に募つて曰く、孰れか能く王の意を說ばせ、劍士を止むる者ぞ、之に千金を賜はんと。左右曰く、莊子當に能くべしと。太子乃ち人をして千金を以て莊子に奉ぜしむ。莊子受けず。使者と倶に往いて太子に見えて曰く、太子何を以て周に敎へんとして、周に千金を賜ふやと。太子曰く、夫子の明聖なるを聞き、謹んで千金を奉じて以て從者に幣す、夫子受けず、悝尙ほ何ぞ敢へて言はんと。莊子曰く、聞く太子の周を用ひんと欲する所の者は、王の喜好を絶たんと欲するなりと。臣をして上、大王に說いて王の意に逆らひ、下、太子に當らざらしめば、則ち身刑せられて死せん。周尙ほ安んぞ金を事とする所あらんや。臣をして上、大王に說いて、下は太子に當らしめば、趙國何を求むるとしてか得ざらんやと。太子曰く、然り。吾が王の見る所は唯劍士なりと。莊子曰く、諾、周は善く劍を爲すと。太子曰く、然り。吾

雜篇　說劍第三十

敍說　此の篇は莊子が好劍癖の趙王を說服することを述ぶ。全篇一章なり。

昔趙文王喜劍。劍士夾門而客三千餘人、日夜相擊於前、死傷者歲百餘人。好之不厭、如是三年國衰。諸侯謀之。太子悝患之、募左右曰、孰能說王之意、止劍士者、賜之千金。左右曰、莊子當能。太子乃使人以千金奉莊子。莊子弗受。與使者俱往見太子曰、太子何以敎周、賜周千金。太子曰、聞夫子明聖、謹奉千金以幣從者、夫子弗受、悝尙何敢言。莊子曰、聞太子所欲用周者、欲絕王之喜好也。使臣上說大王而逆王意、下不當太子、則身刑而死。周尙安所事金乎。使臣上說大王、下當太子、趙國何求而不得也。太

也」と。又完は釋文に、「音管、一本亦管に作る」と見ゆ。籥は釋文に「音藥、一本管籥を壎篪に作る」と、笎籥は簫笛の類なり。）○口嗛ニ於芻豢醪醴之味一（嗛は「こゝろよし」と訓ず、說文に、「嗛とは口に快き所有るなり」と。芻豢とは孟子告子篇「猶ニ芻豢之悅ニ我口一」の趙注に「草食を芻といひ、穀食を豢といひ」と、り、國語の韋注同じ、又大戴禮曾子天圓篇の盧注に「牛羊を芻といひ、犬豕を豢といふ」とあり、醪醴の醪は濁酒、醴は甘酒にて共に酒の名、芻豢醪醴にて美肉美酒と解せば可なるべし。）○侅ニ溺於馮氣一（侅は釋文に「飲食咽に至るを侅と爲す」とあれども、未だ從ふべからざるに似たり、說文に、「奇非常也」と見え、揚子法言には、「非常を侅事といふ」と見ゆ、侅溺とは沈溺の深しと言ふが如きなり、馮は釋文に、「馮は音憤、憤は滿なり、憤畜して通ぜざるの氣を言ふなり」と、王念孫曰く、「馮氣は盛氣なり、昭五年の左傳に今君奮焉震電馮怒、杜注に曰く、馮は盛なりと、楚詞離騷の馮不レ厭ニ乎求索一、王注に曰く、「馮は滿なり、楚人滿を名づけて馮と曰ふ」と、是れ馮は盛滿の義たり、改め讀んで憤と爲すを煩す無きなり」と。）○貪レ財而取レ慰（郭慶藩曰く、「慰當に蔚と通ずべし、淮南俶眞篇に五藏無ニ蔚氣一の高注に曰く、蔚は病なりと、繆稱篇に、侏儒瞽師、人之困慰者也の高注に曰く、慰病なりと、是れ蔚慰の二字古訓通用せるなり」と、されどかく解せず、慰安の意に解するも亦通ず。）○戚醮（成疏に曰く、「戚醮とは煩惱なり」と、案ずるに戚は憂なり、醮は憔に同じ、憔悴憂患なり。）○內周ニ樓疏一（樓は墻上の樓なり、疏は窓なり、望樓を築き射孔を設くるは盜を防ぐ所以なり。）○單以反ニ一日之無レ故（郭嵩燾曰く、「單當に亶に作るべし、單亶古字通ず、亶は訓但、單も亦訓但云云」と。）○繚レ意（繚は繚繞なり。）

きを福となし、過ぎて餘りあるを害となすことは、物皆然りであるが、就中財の餘りあるは、其の害最も甚しいものである。今金持は、耳は鐘鼓筦籥の美聲に溺れ、口は芻豢醪醴の美味に飽き、其の意を悅ばせて、自己の爲すべき業務を忘れて居るのは、實に亂と謂ふべきである。盛氣に沈み溺れて、自由を束縛せられ、恰も重荷を負うて高所に上り行くが如くであるのは、實に苦と謂ふべきである。徒らに財貨を貪つて疾病に罹り、權勢を貪つて精力を枯竭し、閑居すれば淫樂に耽り、體肥ゆれば元氣旺盛となるのは、實に疾と謂ふべきである。富を欲し利に走る故に、財の滿つること垣より高くとも、避くることを知らず、氣を盛にし貪つて止まないのは、實に辱と謂ふべきである。財を山と積み散じて用ふることなく、蓄財のことのみ專心念うて忘れず、その爲め滿心憔慮して惱み苦しんでも、利益を求めて止まないのは、實に憂と謂ふべきである。家に在るときは、劫賊來つて搖りはせざるかと疑ひ、外に出づるとき、は追剝に遭ひはせざるかと畏れ、內は望樓銃眼を建て周らして防備を嚴にし、外は必ず獨行せず、戰戰兢兢たるは實に畏と謂ふべきである。以上述べ來つた亂苦疾辱憂畏の六者は、天下の此の上もない害である。然るに世の富者は皆其の害を忘れて察することを知らない。而も其の災患一たび來るに及んで、俄に性を消耗し、財を蕩盡して、ただ一日でも無事な境遇に反りたいと望んでも最早時既に遲しだ。されば財を積み富を成すことは、之を名譽といふ點から觀察しても、名譽とは思はれず、之を利益といふ點から觀察しても、利益を得られない、然るに意を用ひ體を苦しめて只管名利を得んと爭ひ求むるのは、亦なんと閒違ではないか」と。

語釋 絕レ甘（甘美を去るなり。） ○耳營ニ鐘鼓筦籥之聲一（淮南子の原道篇に、「精神亂營」及び「不レ足三以營二其精神一」と見ゆ、高誘の註並に曰く、「營亂也」と、大戴禮文王官人篇に、「煩ニ亂之一而志不レ營」の盧辯注に曰く、「營猶レ亂

訓讀 無足曰く、必ず其の名を持して、體を苦しめ甘を絶ち、養ひを約にして以て生を持せば、則ち亦久病長阨すれども死せざるものなりと。知和曰く、平を福と爲し、餘り有るを害と爲す者は、物、然らざるは莫けれども、財は其の甚だしきものなり。今富人、耳は鐘鼓筦籥の聲を營み、口は芻豢醪醴の味に嗛し、以て其の意に感じて、其の業を遺忘す、亂と謂ふべし。侅溺して、重きを負うて行いて而して上るが若きなり、苦と謂ふべし。財を貪つて慰を取り、權を貪つて竭を取り、靜居すれば則ち溺れ、體澤すれば則ち馮す、疾と謂ふべし。富を欲し利に就くが爲めの故に、滿つること堵の若きのみなるも、而かも避くることを知らず、且つ馮して舍かず、辱と謂ふべし。財積んで而して用ふることなく、服膺して舍かず、滿心戚醮して、益を求めて止まず、憂と謂ふべし。內には則ち劫請の賊を疑ひ、外には則ち寇盜の害を畏る。內は樓疏を周らし、外は敢へて獨行せず、畏と謂ふべし。此の六つのものは、天下の至害なり。皆遺忘して察することを知らず。其の患至るに及び、性を盡くし、財を竭くして、單に以て一日の故なきに反らんことを求むるも、而かも得べからざるなり。故に之を名に觀れば則ち見えず、之を利に求むれば則ち得ず、意を繚らし體を絶ちて此を爭ふ。亦惑はずやと。

大意 富の大害たる亂苦疾辱憂畏の六事を列擧して富を求むるの大惑なるを說く。

通釋 無足が自己の說を辯護して云ふには、「必ず其の名譽を保持しようとして、自己の身體を苦しめ、美味を去り、食物も節約して食はず、たゞ生命をつなぐに過ぎないならば、久しく病床に臥し、長く困窮して死ない者と同じく、何の樂しい事も無いではないか」と。之を聞いて知和が反駁して云ふには、「すべて物は平均を得て過不足無

無足曰、必持其名、苦體絕甘、約養以持生、則亦久病長阨而不死者也。知和曰、平爲福、有餘爲害者、物莫不然、而財其甚者也。今富人、耳營鐘鼓筦籥之聲、口嗛於芻豢醪醴之味、以感其意、遺忘其業、可謂亂矣。侅溺於馮氣、若負重行而上也、可謂苦矣。貪財而取慰、貪權而取竭、靜居則溺、體澤則馮、可謂疾矣。爲欲富就利故、滿若堵耳、而不知避、且馮而不舍、可謂辱矣。財積而無用、服膺而不舍、滿心戚醮、求益而不止、可謂憂矣。內則疑刼請之賊、外則畏寇盜之害、內周樓疏、外不敢獨行、可謂畏矣。此六者天下之至害也。皆遺忘而不知察。及其患至、求盡性竭財、單以反一日之無故、而不可得也。故觀之名則不見、求之利則不得、繚意絕體而爭此、不亦惑乎。

通釋 知和が又之を駁して云ふには、「眞に道を心得たる人のする事と云ふものは、固より一擧一動百姓の心を以て心となし、決して自ら其の法則に違ふことはない。この故に足るを知つて爭はず、無爲なるが故に求むる所もない足らざるが故に止むなく之を求むるのであるから、四方を窮極して爭ひ求めても、自らそれをば貪とは思はない。餘りがあるから辭して受けないので、天下を棄てゝも自らそれをば廉とは思はない。廉と貪とは其の實、自然に從ふのであつて外物に繫はる所はない。內に反りみ之を自然の法則に鑑み照して過不及なからしむるのみであるから、勢ひ天子となつても決して貴を以て人に驕ることなく、富天下を有つても、決して財を以て人を弄ぶことなく、天子となり天下を有つことの如何に患たるかを計り、外物の己に及ぼす結果を慮つて、性命に害ありと思ふから辭して受けないので、淸廉の名譽を求むる爲めにするのではない。堯舜が帝となつて天下が和いだのは、天下萬民に仁惠を施したからではない。富貴といふ美名を以て其の身を害しなかつたからである。善卷、許由が帝位を讓られても辭して受けなかつたのは、徒らに辭讓したのではない、外物を以て己を害することを欲しなかつたからだ。堯舜といひ善卷許由といひ、これ等は皆眞の利に就き眞の害を避けたもので、天下の人が之を稱して賢となすのは、賢と稱せらるゝだけの實があるからである、別に彼等は名譽を得んが爲めにしたことではない」と。

語釋 故動以二百姓一不レ違二其度一（「林希逸曰く、「動くに百姓を以てすとは、言ふこゝろは智者の爲す所、每に百姓の同じく天に得る者を以て主となす、故に敢て自ら法度に違はず、百姓の同じく得る所は物有り則有るものなり、度は卽ち則なり」と。）　○四處（成疏に曰く、「四處とは猶四方のごとし」と。）　○堯舜爲レ帝而雍（雍とは和なり、尙書堯典に、「黎民於變時雍」と。）　○善卷許由（共に上古の隱士、許由は堯、善卷は舜、天下を以て之に讓れども受けず、箕山に隱る、許由は堯、天下を以て之に讓れども受けず、曰く「余天地の間に逍遙す、而して心意自得す、吾何ぞ天下を以て爲さんや」と。）

堯舜爲帝而雍、非仁天下也、不以美害生也。善卷・許由得帝而不受、非虛辭讓也、不以事害己。此皆就其利、辭其害、而天下稱賢焉、則可以有之、彼非以興名譽也。

訓讀 知和曰く、知者の爲、故より動くに百姓を以てして、其の度に違はず、是を以て足つて爭はず、以て爲すこと無きが故に求めず。足らざるが故に之を求む、四處に爭へども自ら以て貪と爲さず。餘りあるが故に之を辭す、天下を棄つれども自ら以て廉と爲さず。廉貪の實、以て外に迫るに非ざるなり。反つて之を度に監がむ。勢天子と爲れども、貴を以て人に驕らず、富天下を有てども財を以て人に戲れず。其の患を計り、其の反を慮つて、以て性に害ありと爲す、故に辭して受けざるなり、以て名譽を要むるに非ざるなり。堯舜の帝と爲つて雍ぐは、天下を仁するに非ざるなり、美を以て生を害せざるなり。善卷、許由、帝を得れども受けざるは、虛しく辭讓するに非ざるなり、事を以て己を害せざるなり。此れ皆其の利に就き、其の害を辭す、而して天下賢と稱するは、則ち以て之あるべければなり、彼れ以て名譽に興るにあらざるなりと。

大意 知和の駁論。利に就くは人の性なれども厭くなきの欲は反つて性を害す、故に聖人は足るを知りて之を爲さずと。

ば、天下の善美を窮め、人間の威勢を盡して、その强勢なることは、到底至德の人、賢哲の士も及ぶことは出來ない。富貴の人には、人多く之に依附して、人の勇力を挾んで己の威强となし、人の知謀を乗つて己の明察となし、人の道德に因つて己を賢良となし、國土を享けて封侯とならなくても、其の尊嚴なることはまるで君父同樣である。加ふるに耳が聲を悅び、眼が色を愛し、口が味を甘しとし、權勢が其の情に適ふのは、心が學ぶのを待たないで自から之を樂み、體が象り倣ふことを待たないでも自から之に安んずるものだ。故に人が欲するものに就き惡むものを避くるは、固より人の天性の然らしむる所で、師の敎へを待たない。天下の名利を欲するものは必ずしも我と同一でなくとも、誰か超然として名利を辭することが出來ようか」と。

語釋 窮美（釋文に曰く、「窮とは猶盡の如し」と。）　○俠人勇力（俠は挾と通ず、漢書叔孫通傳の「殿下郎中俠陛」の師古の注に俠は挾に通ずと見ゆ。）

知和曰、知者之爲、故動以百姓、不違其度、是以足而不爭、無以爲故不求。不足故求之、爭四處而不自以爲貪。有餘故辭之、棄天下而不自以爲廉。廉貪之實、非以迫外也。反監之度。勢爲天子而不以貴驕人、富有天下而不以財戲人。計其患、慮其反、以爲害於性、故辭而不受也、非以要名譽也。

無足曰、夫富之於人、無所不利。窮美究勢、至人之所不能及。俠人之勇力、而以爲威強、秉人之知謀、以爲明察、因人之德、以爲賢良、非享國而嚴若君父。且夫聲色滋味權勢之於人、心不待學而樂之、體不待象而安之。夫欲惡避就、固不待師、此人之性也。天下雖非我、孰能辭之。

訓讀 無足曰く、夫れ富の人に於ける、利ならざる所なし。美を窮め勢を究めて、至人も逮ぶことを得ざる所、聖人も及ぶこと能はざる所。人の勇力を俠んで、以て威強と爲し、人の知謀を秉つて、以て明察と爲し、人の德に因つて、以て賢良と爲し、國を享くるに非ずして嚴なること君父の若し。且夫れ聲色、滋味、權勢の人に於ける、心學ぶことを待たずして之を樂しみ、體象ることを待たずして之に安んず。夫れ欲惡避就、固より師を待たず、此れ人の性なり。天下我に非ずと雖も、孰れか能く之を辭せんと。

大意 無足が利に就き害を避くるは人の性なりと主張す。

通釋 無足が更に辯じて云ふには、「一體富と云ふものは人に對して、何事にも利便を與へるものだ。富さへあれ

體人に卑下せられ尊重せらるゝ事は、生を長くし體を安んじ意を樂ましむる所以の道である。然るにお前だけ富貴を求むる意が無い。それは智慧が足りなくて富貴を求むる術を知らないのか、抑も又知れども實行するだけの力がないのか、或は正道を推求して、念念忘れず、富貴を外にするが爲めなのか」と。之に對し知和が反駁して云ふには、「今、此の富貴の人が心に思ふやう、自分と同時に生れ、同郷に住む者は、自分をば俗にすぐれ世に超えたる人物と看做すであらうと。けれどもその胸中を察するに、全く主とする所なく、全く性命の正を失つて、たゞ古今の變遷を察し、是非の區別を見るに過ぎない。それ故世俗に與し化せられて、至重至尊なる性情を棄て去り、世俗の爲す所に倣うて富貴を求むるものだ。かゝる有樣では長生、安體、樂意の道を論じた所で、誤れるも亦甚しいではないか。慘怛の悲哀、恬愉の安樂も、自己の身體に鑑み察せず、怵愓の恐懼、欣歡の喜樂も自己の心に鑑み察せず、只管富貴を求むることのみを知つて、天理を知らない。この故に天子の貴き地位につき、天下の富を有つても、患を脱することが出來ないのだ、況んや衆人をや」と。

【語釋】　無足問於知和（無足、知和は共に假託の人名、成疏に曰く、「無足は貪婪の人にして足るに止まらざる者を謂ふ、知和は中和の道を體知し、分を守る淸廉の人なり、二人を假設し、以て貪廉の禍福を明らかにするなり」と。）○人卒（卒は衆なり、猶衆人と云ふに同じ、前の天地・秋水・至樂の諸篇にも見ゆ。）○意知而力不能行邪（郭慶藩曰く、「意は語詞なり、讀んで抑の若し、抑意古字通ず、論語學而篇の抑與之與を漢の石經には抑を意に作る云云」と。）○此人（富貴の人を謂ふ。）○慘怛、恬愉（慘怛とは悲の情にして心を痛め憂ふるなり、恬愉とは樂の情にしてやすんじよろこぶなり。）○知爲爲而不知所以爲（爲すを爲すとは人爲なり。富貴を求むるを指す、爲す所以とは天理なり、歡樂悲哀の起る所以を指す。）

歡之喜、不監於心。知爲爲而不知所以爲、是以貴爲天子富有天下、而不免於患也。

訓讀 無足、知和に問うて曰く、人卒未だ名に興り利に就かざるものあらず。彼れ富めば則ち人之に歸し、歸すれば則ち之に下る、下れば則ち之を貴ぶ。夫れ下り貴ばるゝものは、長生、安體、樂意する所以の道なり。今子獨り意なし、知足らざるか、意ふに、知れども力行ふこと能はざるか、故らに正を推して忘れざるかと。知和曰く、今夫れ此の人は、以爲へらく、己と時を同じうして生れ、鄕を同じうして處る者は、以て夫の絶俗過世の士と爲さんと。是れ專ら主正無く、古今の時、是非の分を覽る所以なり。俗に與し世に化せられて、至重を去り、至尊を棄てゝ、以て其の爲す所を爲すなり。此れ其の長生、安體、樂意の道を論ずる所以、亦遠からずや。慘怛の疾、恬愉の安、體に監みず。怵惕の恐、欣歡の喜、心に監みず。爲すを爲すを知つて、而して爲す所以を知らず、是を以て貴は天子と爲り、富は天下を有てども、患に免れざるなりと。

大意 此の章四節に分けて解く。富の功を主張する無足と富の害を主張する知和との問答によりて遂に富は長生安樂の道に非ざるを述ぶ。此の段に於ては先づ無足が富は長生安體樂意の道なりと爲すに對して知和之を駁す。

通釋 無足が知和に問うて云ふには、「凡そ人たる者は、誰しも名の爲めに興起し、利のある所に就かない者はない。人が富めば、世人は自から之に歸服し、既に歸服すれば之に卑下し、既に卑下すれば之を尊重するものだ。一

○執而圓機（成疏に「圓機とは猶環中の如し」と見ゆ、環中に就きては內篇齊物論參照。）　○無轉而行（王念孫に從ひ轉は讀んで專と爲す。）　○比干剖心（成疏に曰く、「比干紂に忠諫す、紂云ふ、聞く、聖人の心には九竅ありと、遂に其の心を剖きて之を視る」と。）　○子胥抉眼（成疏に曰く、「子胥夫差を忠諫す、夫差之を殺す、子胥曰く、吾れ死する後、眼を抉りて吳門の東に懸けよ、以て越の吳を滅すを觀ん」と。）　○直躬證父（論語子路篇に「吾黨有直躬者、其父攘羊、而子證之」とあるは是なり、直躬とは「正直者の躬」の意一說に「姓は直、名は躬」と。）　○鮑子立乾（鮑子名は焦、周末の人、前に出づ。）　○勝子不自理（釋文に曰く、「一本理を俚に作る、本又申子自理に作る、或は云ふ、申徒狄甕を抱いて河に之くを謂ふなり、一本申子不自理に作る、申生を謂ふなり」と。按ずるに明文鮑焦と申徒狄の二人を並べ引く、從つて勝子は申子に作るを是となす。）　○孔子不見母（釋文に、「李云ふ、未だ聞かず」と。）　○匡子不見父（釋文に、「司馬云ふ、馬子名は章、齊の人、其の父を諫めて父の逐ふ所と爲る、終身父を見ず、案ずるに此の事孟子離婁下篇に見ゆ」と。）　○離其患也（離は罹なり、無約の言は前文の「小人殉財君子殉名」より「離其患也」に至る迄。）

無足問於知和曰、人卒未有不興名就利者。彼富則人歸之、歸則下之、下則貴之。夫見下貴者、所以長生安體樂意之道也。今子獨無意焉、知不足邪。意知而力不能行邪、故推正不忘邪。知和曰、今夫此人以爲與己同時而生、同鄕而處者、以爲夫絕俗過世之士焉。是專無主正、所以覽古今之時、是非之分也。與俗化世、去至重、棄至尊、以爲其所爲也。此其所以論長生安體樂意之道、不亦遠乎。慘怛之疾、恬愉之安、不監於體。怵惕之恐、欣

大意 無約の言。行を修むることも、欲を縱にすることも共に性情を毀損するものにて是に非ず、人は當に天に從ひ道と徘徊せよと說く。

通釋 されば古語にも小人となつて利を貪るな、本に反つて汝の自然に從へ。君子となつて名を求めるな、天の法則に順へ。事の曲直を問はず、自然の大道を視て之に準據せよ。まのあたり四方を觀照して、四時と與に消長往來せよ。事の是非を問はず、汝の心に具有せる環中を執つて之に應ぜよ。汝の意を獨立達成して、大道と與に逍遙せよ。汝の行爲を專一にし、汝の信義を實現せんと努むるなかれ。然らずんば汝の眞性を失ふに至るであらう。富貴に赴き奔り、成功を逐ふことなかれ。然らずんば汝の天性を放棄するに至るであらう。之を史實に徵するに、王子比干が紂王を諫めて心を剖かれ、伍子胥が呉王夫差を諫めて眼を抉られて呉の東門に懸けられたのは、忠義の爲めに招いた禍である。直躬が父の攘みを證して刑せられ、尾生が女子と約して溺死したのは、信義を守らんとして得た患である。鮑焦が木を抱いて死し立つたまゝ火乾になり、晉の太子申生が自己の無實を辨ぜずして縊死したのは、廉ならんとして得た害である。孔子が天下を周遊して母の死目に遭はず、匡章が父を諫めて怒りを買ひ、家を逐はれて父の臨終に遭はなかつたのは、義ならんとして得た失である。これ等の事は上世より言ひ傳へて、後世の語り草となつて居る事である。しかく士たる者は、其の言を正しうして君を諫め、其の行ひを必ず爲し遂げんとする故に、殃に服し、患に罹るものである」と。

語釋 反殉而天(殉は從なり、而は爾なり。) ○相而天極(相は視なり、天極とは自然の大道の意。) ○與時消息(易の豐卦內象傳に、「天地盈虛、與時消息」と見ゆ、消は滅、息は生の意なり。)

四方、與時消息。若是若非、執而圓機。獨成而意、與道徘徊。無轉而行、無成而義、將失而所爲。無赴而富、無殉而成、將棄而天。比干剖心、子胥抉眼、忠之禍也。直躬證父、尾生溺死、信之患也。鮑子立乾、勝子不自理、廉之害也。孔子不見母、匡子不見父、義之失也。此上世之所傳、下世之所語、以爲士者、正其言、必其行。故服其殃、離其患也。

訓讀 故に曰く、小人たること無かれ、反りて而の天に殉へ。君子たること無かれ、天の理に從へ。若しくは枉若しくは直、而の天極に相よ四方を面觀して、時と與に消息せよ。若しくは是若しくは非、而の圓機を執れ。而の意を獨成して、道と與に徘徊せよ。而の行を轉ずる無かれ、而の義を成す無かれ、將に而の爲す所を失はんとす。而の富に赴く無かれ、而の成るに徇ふ無かれ、將に而の天を棄てんとす。比干は心を剖かれ、子胥は眼を抉らる、忠の禍なり、直躬は父を證し、尾生は溺死す、信の患なり。鮑子は立ながら乾し、勝子は自ら理せず、廉の害なり。孔子は母を見ず、匡子は父を見ず、義の失なり。此れ上世の傳ふる所、下世の語る所。以て士たるもの、其の言を正しくし、其の行を必す。故に其の殃に服し、其の患に離るなりと。

と云へるか。儒者は忠孝仁義等幾多の德目を作爲し、墨者は己の父母も他人の父母も見境なく一律平等に愛する。それでも五倫六紀の別が有ると云はれるか。且つ汝は正しく名を求めんが爲めにし、余は正しく利を得んが爲めにするのである。名といひ利といひ二者異れども、其の實兩者共に眞理にかなはず、大道に明らかならざるものだ。予は過日汝と論爭をなし、其の裁斷を無約に仰ぎし時、彼れ曰く、「小人は財利に殉じ、君子は名譽に殉ずるものだ。其の情を變へ、其の性を易ふる對象物の上よりすれば名と利との相違があるけれども、性の自然に徇ふことなく、外物を追ふ點に至つては何れも同一だ」。（無約の言は下に續く）

語釋 疏戚無レ倫（成疏に曰く、「戚は親なり、倫なり」と。） ○五紀（五紀は即ち五倫なり、詳言すれば、「父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信」の五者即ち是れなり。他に歳、日、月、星辰、暦數の五者、金、木、火、水、土の五行、仁、義、禮、智、信の五德、祖、父、身、子、孫の五者なりとの說もあれど、今皆取らず。） ○六位（兪樾曰く、「六位は即ち六紀なり、白虎通の三綱六紀篇に曰く、六紀とは、諸父、兄弟、族人、諸舅、師長、朋友を謂ふなり」と、又釋文には「君臣父子夫婦」とあれども今前說に從ふ。） ○堯殺二長子一（釋文に曰く、「崔云ふ、堯長子考監明を殺す」と、今崔氏何に據りしか詳にすべからず、案ずるに堯は長子丹朱を廢して大位を與へず、作者之を誣ひて殺と云へるのみ。） ○舜流二母弟一（釋文に曰く「弟とは象を謂ふなり、流とは放なり」と。） ○王季爲レ適（王季は周の古公の庶子季歷、即ち文王の父の謂なり、始め季歷太任を娶り昌を生む、聖瑞あり、父古公曰く「我が世つぎ當に興る者あるべし、其れ昌に在らんか」と、長子太伯、仲雍、父の季歷を立てゝ以て昌に傳へんと欲するを知る、乃ち二人亡げて荊蠻に如くと史記の周本紀に見ゆ、故に王季爲適と云ふ、適は嫡に通ず。） ○周公殺レ兄（成王の時、管叔は蔡叔と共に亂を作せり、周公命を奉じて管叔を誅し、蔡叔を放てり故に周公殺レ兄と云ふ。） ○儒者僞レ辭（僞は爲るなり、作爲の意。） ○不レ監二於道一（成疏に曰く、「監とは明なり、見なり」と。） ○吾日與レ子訟二於無約一（日は已往の日なり、「さきに」と訓ず、春秋文公七年左氏傳條下「日衛不レ睦」と同例なり。無約は假託の人名、約は拘束なり、名を離れ利を棄てゝ、外物に拘束せらるゝ無きの義より出づ。）

故曰、無レ爲二小人一、反殉二而天一。無レ爲二君子一、從二天之理一。若枉若直、相二而天極一。面觀

至於棄其所爲而徇其所不爲則一也。

訓讀 子張曰く、子行ひを爲さずんば、即ち將に疏戚倫なく、貴賤義なく、長幼序なからんとす。五紀六位、將に何を以て別を爲さんとするかと。滿苟得曰く、堯は長子を殺し、舜は母弟を流す。疏戚倫あるか。湯は桀を放ち、武王は紂を殺す、貴賤義あるか。王季は適となり、周公は兄を殺す、長幼序あるか。儒者は辭を僞り、墨者は兼愛す、五紀六位、將た別あるか。且子は正に名の爲めにし、我は正に利の爲めにす、名利の實、理に順はず、道に監みず、吾れ日に子と無約に訟へしとき曰く、小人は財に徇ひ、君子は名に徇ふ。其の、其の情を變じ、其の性を易ふる所以は、則ち異なり。乃ち其の爲す所を棄てゝ、其の爲さざる所に徇ふに至つては、則ち一なり。

大意 子張が行を修めざれば倫常を亂すと曰ふに對して、滿苟得は古來の所謂聖賢は皆倫常を亂して居るから、何も行を修める要はないと曰ひ、無約と云へるものに其の裁斷を請へり。

通釋 子張が云ふには、「汝が若し行ひを修めなければ、やがて親疎の倫次、貴賤の差別、長幼の順序が全く無くなるであらう。且つ又五倫六紀は何によつて區別をなさうとするのか」と。滿苟得は又それを駁して云ふには、「堯は長子丹朱を殺し、舜は同母弟象を流した。それでも親疎の閒に倫次が有ると云へるか。殷の湯王は其の君夏の桀王を南巣に放ち、周の武王は其の君殷の紂王を汲郡に殺した。それでも貴賤の閒に差別が有ると云へるか。王季は其の兄泰伯、仲雍の二人を凌いで嫡嗣となり、周公は其の兄管叔蔡叔を殺した。それでもまだ長幼の順序が有る

されば古書にも、「どちらが惡で、どちらが美か分るものか。成功すれば首として貴び、失敗すれば尾として賤しむまでだ」と云つて居るが尤もなことだ。

語釋 臧聚（釋文に曰く、「司馬云ふ、獲盜濫竊聚の人を謂ふなり」と、又成疏に曰く、「臧とは臧獲を謂ふなり、聚とは聚竊を謂ふなり、即ち盜賊小人なり」と。） ○小盜者拘云云（胠篋篇の「竊レ鉤者誅、竊國者爲ニ諸侯一、諸侯之門而仁義存焉」と同意。） ○桓公小白殺レ兄入レ嫂（齊の桓公、名は小白、其の兄子糾を殺し、嫂を入れて室家となす。春秋莊公八年左氏傳條下に詳かなり。） ○田成子常（齊の大夫田常、諡して成子と曰ふ、陳恆に同じ。） ○孔子受レ幣（春秋哀公十四年左氏傳條下及び論語憲問篇によれば、「陳成子簡公を弑す、孔子沐浴して朝し、哀公に告げて曰く、陳恆其の君を弑す請ふ之を討たん」と見え、本文の記事と背反す。案ずるに此の事固より史實に非ず聖賢の言行相一致せざることを證せんが爲めの作者の意圖に出でしのみ。） ○書曰云云（普通「書曰」とあるは書經の謂なれども、此處は古書の謂なり。「成者爲レ首」とは所謂勝てば官軍の謂にして「不レ成者爲レ尾」とは負れば賊軍の謂なり、善惡は畢竟事の成敗によるのみとの意。）

子張曰、子不レ爲レ行、即將下疏戚無レ倫、貴賤無レ義、長幼無上レ序。五紀六位、將ニ何以爲一レ別乎。滿苟得曰、堯殺ニ長子一、舜流ニ母弟一、疏戚有レ倫乎。湯放レ桀、武王殺レ紂、貴賤有レ義乎。王季爲レ適、周公殺レ兄、長幼有レ序乎。儒者僞レ辭、墨者兼愛、五紀六位、將レ有レ別乎。且子正爲レ名。我正爲レ利、名利之實、不レ順ニ於理一、不レ監ニ於道一、吾日與レ子訟ニ於無約一、曰、小人徇レ財、君子徇レ名。其所下以變ニ其情一、易中其性上則異矣。乃

か美、成るものを首と爲し、成らざるものを尾と爲すと。

【大意】子張が貴賤の分は行の美惡に在りと曰ふに對し、滿苟得は貴賤美惡は成敗に因りて定まるもので行に由らざるを曰ふ。

【通釋】子張が申すには、「昔夏の桀王、殷の紂王は天子の貴き地位につき、天下の富を有つて暴虐を恣にした。然るに今奴隷や盜賊に向つて汝の行ひは桀紂と同じだと云つたならば、怍づかしさうな顏色を浮べて、心に服從しないのは、かの桀紂の行爲は小人すらも賤しむ所であるからだ。之に反して仲尼や墨翟は、時に用ひられず一匹夫たるに過ぎなかつた。然るに今一國の宰相に向つて、閣下の行爲は仲尼墨翟と同じだといつたならば、容貌を變へ顏色を易へて、私なぞの到底及びもつかぬ所と謙遜するのは、かの仲尼墨翟は士の誠に貴ぶ所であるからだ。されば其の勢威が天子であつても、必ずしも貴いとは限らない。時に容れられず匹夫であつても、必ず賤しいとは限らない。貴賤の分別は全く行ひの美惡に在ることだ」と。それを聞いて滿苟得が駁して云ふには、「財貨を竊む小盜は捕へられ、國を竊む大盜は却つて諸侯となる。已に諸侯となれば、その門下には義士が集つて來る。昔齊の桓公小白は、其の兄子糾を殺し、嫂を入れて室となすやうな不倫の行ひがあつたが、賢人管仲は其の臣となつて之を補佐した。又齊の田成子常は、其の君簡公を弑して國を竊んだ亂賊であるが、聖人孔子は入朝して田常からの幣を受けた。今管仲孔子が桓公、田常二君の行爲を論ずる場合には之を大逆無道と賤しみ乍ら、實際行ふ所を見れば下つて臣となつた。して見れば聖賢の言ふ所と行ふ所とが、胸中に於て悖り戰ふことになる。矛盾も甚しいではないか。

仲尼墨翟、則變容易色、稱不足者、士誠貴也。故勢爲天子、未必貴也。窮爲匹夫、未必賤也。貴賤之分、在行之美惡。滿苟得曰、小盜者拘、大盜者爲諸侯。諸侯之門義士存焉。昔者桓公小白、殺兄入嫂、而管仲爲臣。田成子常殺君竊國、而孔子受幣。論則賤之、行則下之。則是言行之情、悖戰於胸中也。不亦拂乎。故書曰、孰惡孰美、成者爲首、不成者爲尾。

訓讀 子張曰く、昔桀紂、貴は天子と爲り、富は天下を有つ。今、臧聚に謂つて、汝の行ひ桀紂の如しと曰へば、則ち怍づる色あり。服せざるの心ある者は、小人も賤しむ所なればなり。仲尼墨翟、窮して匹夫たり。今宰相に謂つて、子の行ひ仲尼墨翟の如しと曰へば、則ち容を變じ色を易へて、足らずと稱する者は、士誠に貴べばなり。故に勢天子たるも、未だ必ずしも貴からざるなり。窮して匹夫たるも、未だ必ずしも賤しからざるなり。貴賤の分は、行ひの美惡に在りと。滿苟得曰く、小盜は拘れ、大盜は諸侯と爲る。諸侯の門に義士存す。昔桓公小白、兄を殺し嫂を入れて、而して管仲臣と爲る。田成子常、君を殺し國を竊んで、而して孔子幣を受く。論ずれば則ち之を賤しみ、行へば則ち之に下る。則ち是れ言行の情、胸中に悖戰するなり。亦拂らずや。故に書に曰く、孰れか惡孰れ

通釋　孔子の弟子の子張が滿苟得に問うて云ふには、「汝は利を求めんと欲するならば、何故德行を修めないか。德行がなければ人に信ぜられず、人に信ぜられなければ、事に任ぜられず、事に任ぜられなければ、利祿を得られない。されば名を求むる點から觀ても、利を得る點から計つても、義を行ふのが一番宜しい。若し名譽利益を棄てゝ、之を我が本心に反省したならば、かの士の德行を修めると云ふ事は、一日も缺くべからざることなのではあるまいか」と。滿苟得が答へて云ふには、「恥を知らず只管得んとする者は富み、人に信用を博するやうな事をよく口にする者は世に時めくものだ。だから名を求むる點から察しても、利を得る點から打算しても、人に信ぜられるのが一等よい。かの名利の大なる者は、殆んど恥無くして信なる者についてくるものだ。されど若し名利を全然離れて、之を我が本心に反省したならば、かの士の德行を修めると云ふ事は、自然の大道を守つて矯め飾らない所に在るのであるまいか」と。

語釋　滿苟得(姓は滿、名は苟得、假託の人なり、其の名によりて何はるゝが如く利を求むるの人なり。)　○盍不爲行(釋文に曰く「盍とは何不なり、何ぞ德行を爲さゞると勸む」と。)　○觀之名、計之利、而義眞是也(林希逸曰く「名利を求めんと欲せば、惟義を修むるを是と爲すなり」と。)　○反之於心(成疏には「反は乖逆なり、若し名利を棄てなば、則ち我が心に乖逆す、故に士の身を立つる、一日も仁義を行はざるべからず」と云へども、反は反省の意なり、名利を棄てゝ内本心に反省すればの意に解すべし。)　○抱其天乎(成疏に曰く「抱とは守るなり、天とは自然なり」と、名利を棄擲して、天眞を抱き守り、虛天の道に合するを云ふ。)

子張曰、昔者桀紂貴爲天子、富有天下。今謂臧聚曰、汝行如桀紂、則有作色。有不服之心者、小人所賤也。仲尼墨翟、窮爲匹夫。今謂宰相曰、子行如

子張問於滿苟得曰、盍不爲行。無行則不信。不信則不任。不任則不利。故觀之名、計之利、而義眞是也。若棄名利、反之於心、則夫士之爲行、不可一日不爲乎。滿苟得曰、無恥者富、多信者顯。夫名利之大者、幾在無恥而信。故觀之名、計之利、而信眞是也。若棄名利、反之於心、則夫士之爲行、抱其天乎。

通讀 子張、滿苟得に問うて曰く、盍ぞ行を爲さざる。行無ければ則ち信ぜられず、信ぜられざれば則ち任ぜられず。任ぜられざれば則ち利あらず。故に之を名に觀、之を利に計つて、義眞に是なり。若し名利を棄てゝ之を心に反せば、則ち夫の士の行を爲す、一日も爲さざるべからざるかと。滿苟得曰く、恥なきものは富み、信多きものは顯る。夫の名利の大なるものは、幾ど恥なくして信なるに在り。故に之を名に觀、之を利に計りて、信眞に是なり。若し名利を棄てゝ之を心に反せば、則ち夫の士の行を爲す、其天を抱かんかと。

大意 子張と滿苟得の問答に托して孔子の敎を誹る。子張が士の本分は行を修むるに在りと言ふに對して、滿苟得は士の道は天性を保つに在つて仁義を行ふに非らずと言ふ。

く、今者闕然として數日見ず。車馬行色あり、往いて跖を見る微きを得んやと。孔子天を仰いで歎じて曰く、然りと。柳下季曰く、跖は汝の意に逆ふこと前の若くなること無きを得んやと。孔子曰く然り。丘は所謂病無くして自ら灸するなり。疾く走りて虎頭を料で、虎須を編む、幾んど虎口を免れざる哉と。

【大意】孔子が盗跖に說きまくられてホウ〳〵の體にて家に歸りしを叙す。

【通釋】孔子は再びお辭儀をして、小走りに門を出で、車に上つて手綱を執らうとしたが三度も取りはづし、目はぼつとして何も見えず、顏色は火の氣のない灰のやうになり、車の横木に凭りかゝり頭を垂れて、息をつくことも出來ぬ位であつた。歸つて魯の東門の外まで來ると、ばつたりと柳下季に出遭つた。柳下季が申すには、「此頃中は御無沙汰して數日御目にかゝらなかつた。所で車馬の樣子を見ると、どこかへ旅行せられたやうに見受けられるが、態々盗跖に會ひに行かれたのではないか」と。孔子は天を仰いで嘆息して云ふには、「然うだ、盗跖を訪うた歸りだ」と。そこで柳下季の云ふには、「跖が汝の意に逆ふことは先日余の申上げた通りではなかつたか」と。孔子の云ふには、「如何にも其通りだ。私は俗に申す疾氣もないのに自ら灸をすゑたのと同樣、汝の忠言を無にして疾く走つて虎の頭を撫で、虎の鬚を結ぶやうな危險を冒して、すんでの所で虎に食はれて仕舞ふ所であつた。はてさて危い事であつた」と。

【語釋】死灰(火氣無き灰なり、齊物論に見ゆ。)○軾(車の前の横木にて車中敬禮する時は、俯して之に凭りかゝる、經傳多く式に作る。)○闕然(缺けて全からざる貌、此處にては御無沙汰の意。)○得レ微ニ往見一レ跖邪(成疏に曰く「微は無なり」と。)○若レ前乎(我が前日言ふ所の若くならざりしやの意。)○料ニ虎頭一(料は捋に同じ、「なづ」と訓ず。)○編ニ虎須一(須は鬚と通ず。)

ふことの出來ない者は、道に通達した者ではない。汝の言ふ所は、皆余の唾棄する所だ。速に此場を去つて馳せ歸れ、二度と斯やうな事を申してはならぬぞ。汝の道は狂々として性を失ひ、汲々として足らざるを憂ひ、徒らに作僞を弄する虛僞の道だ。それで以て眞性を全うし得られるものではない。何ぞ論ずるに足りやうか、一顧の價値もないものだ。

語釋 騏驥（共に一日千里を走るといふ駿馬。） ○狂狂汲汲（成疏に曰く「狂狂とは性を失ふなり、汲汲とは足らざるなり」と。）

孔子再拜、趨走出門、上車執轡三失、目芒然無見、色若死灰、據軾低頭、不能出氣。歸到魯東門外、適遇柳下季。柳下季曰、今者闕然數日不見。車馬有行色、得微往見跖邪。孔子仰天而歎曰、然。柳下季曰、跖得無逆汝意若前乎。孔子曰、然。丘所謂無病而自灸也。疾走料虎頭、編虎須、幾不免虎口哉。

訓讀 孔子再拜し、趨走して門を出で、車に上り轡を執らんとして三たび失し、目芒然として見ることなく、色死灰の若し。軾に據り頭を低れて、氣を出すこと能はず。歸つて魯の東門外に到り、適々柳下季に遇ふ。柳下季曰

こと無かれ。子の道は、狂狂汲汲、詐巧虚僞の事なり、以て眞を全うすべきにあらざるなり。奚ぞ論ずるに足らんやと。

大意 古來の忠臣亦上に同じく貴ぶに足らず。凡そ孔子の言ふ所は詐欺巧虚のことにて從ふ可からずと言ふ。

通釋 又世間で忠臣と謂はれて居る者は、王子比干、伍子胥の二人に及ぶ者はない。然るに子胥は屍を江に沈められ、比干は心を剖かれて殺された。此の二人の者は世間でいはゞ忠臣であるが、結局、天下の物笑の種となつた。上に述べた黄帝堯舜から次第に觀來つて、伍子胥比干に至るまで、世に所謂聖賢なる者は皆貴ぶに足らないものだ。丘よ汝の我に說く所が、若し鬼神幽界に關する事であるならば、吾輩の知る所でないが、人生現實に關する事であるならば、これ迄述べたことで十分だ。これしきの事は、吾輩の疾くの昔承知のことで、今更汝の說を承るまでもないことだ。今吾は汝に人の性情に就いて敎へてやらう。一體目といふものは美色を視ることを欲し、耳は美聲を聽くことを欲し、口は美味を味ふことを欲し、志氣は盛んならんことを欲する、これ普通の人情だ。人の壽命は上壽とて最も長い者が百歲、次の中壽は八十、次の下壽は僅かに六十に過ぎない。それも病氣になつたり、人が死んだり、其他の心配事を除いたら、其中口を開いて晴れやかに笑ふのは、一月の中僅か四五日に過ぎないであらう。天地の存在には窮りがないが人間は時が來れば死なねばならぬ。限りある人の身を以て窮り無き天地間に生を托してゐる。その忽然として速かなるさまは、恰も駿馬が馳せて戶の隙間を通り過ぎるのと同樣でまことに果無いものだ。然るにこゝに氣がつかず、徒らに利を追ひ名を求めて我と我が生命を縮め、其志意を悅ばせ、其壽命を養

一月之中、不過四五日而已矣。天與地無窮、人死者有時、操有時之具、而託於無窮之閒、忽然無異騏驥之馳過隙也。不能說其志意養其壽命者、皆非通道者也。丘之所言、皆吾之所棄也。亟去走歸、無復言之。子之道、狂狂汲汲、詐巧虛僞事也、非可以全眞也。奚足論哉。

訓讀 世の所謂忠臣なるものは、王子比干・伍子胥に若くは莫し。子胥は江に沈められ、比干は心を剖かる。此の二子は世の謂ゆる忠臣なり。然れども、卒に天下の笑と爲る。上より之を觀て、子胥比干に至るまで、皆貴ぶに足らざるなり。丘の我に說く所以のもの、若し我に告ぐるに鬼の事を以てせば、則ち我、知ること能はざるなり。若し我に告ぐるに人事を以てせば此れに過ぎず。皆吾が聞知する所なり。今吾れ子に告ぐるに人の情を以てせん。目は色を視んことを欲し、耳は聲を聽かんことを欲し、口は味を察せんことを欲し、志氣は盈たんことを欲す。人の上壽は百歲、中壽は八十、下壽は六十。病瘦、死喪、憂患を除いて、其中口を開いて笑ふもの、一月の中、四五日に過ぎざるのみ。天と地とは窮まりなく、人の死するは時あり、時あるの具を操つて、而して窮まりなきの閒に託す、忽然たること、騏驥の馳せて隙を過ぐるに異なるなきなり。其志意を說ばせ、其壽命を養ふこと能はざるものは、皆道に通ずるものに非ざるなり。丘の言ふ所は、皆吾の棄つる所なり。亟かに去り走り歸れ、復た之を言ふ

の眞性を惑亂し、强ひて其の眞情に反すとの意」）　○鮑焦（成疏に曰く「姓は鮑、名は焦、周の時の隱者なり、行ひを飾り世を非り、廉潔自ら守り、擔を荷ひ樵を採り、橡を拾ひて食に充ち、故に亂の收穫するものなし。天子に臣たらず、諸侯に友たらず、子貢之に遇ふ、之に謂つて曰く、吾聞く、其の政を非る者は、其の地を履まず、其の君を汙とする者は、其の利を受けずと、今子其の地を履み其の利を食ふ、其れ可ならんやと、鮑焦曰く、吾聞く、廉士は進むを重んじ退くを輕んず、賢人は愧ぢ易くして死を輕んずと、遂に木を抱いて立て枯す」と。）　○申徒狄（釋文に曰く「申徒狄將に河に投ぜんとす、崔河之を止めて曰く、吾聞く、聖人の仁は士民の父母なり、若し足を濡すの故に溺人を救はざれば、可ならんかと、申徒狄曰く、然らず、昔桀は龍逢を殺し、紂は比干を殺す、而して天下を亡へり、吳は子胥を殺し、陳は泄冶を殺し、而して其の國を滅せり、聖人不仁有るに非ず、用ひざる故なりと、遂に河に沈みて死す」と。）　○介子推（成疏に曰く「文公は晉の文公重耳なり、驪姬の難に遭うて、他國に出奔し、路に在りて乏し、推、股肉を割いて以て之に飴はしむ。公後ち還つて三日、從者を封じ、遂に子推を忘る。子推龍蛇の歌を作り、其の宮門に書し怒りて逃ぐ、公後ち慙ぢ謝し、子推を介山に追ふ、子推隱れ避く、公因つて火を放つて山を燒き、其の走り出でんことを庶ふ、火至る、子推遂に樹を抱いて焚死す」と。）　○尾生（釋文に曰く「一本微に作る、戰國策尾生高に作る、高誘以て魯人と爲す」と。）　○四者（東條弘曰く「江南古藏本、四者を六子に作る」と。然らば上記の伯夷、叔齊、鮑焦、申徒狄、介子推、尾生の六子と合す、是なるに似たり。）

世所謂忠臣者、莫若王子比干・伍子胥。子胥沈江、比干剖心。此二子者世謂忠臣也。然卒爲天下笑。自上觀之、至於子胥比干、皆不足貴也。丘之所以說我者、若告我以鬼事、則我不能知也。若告我以人事者、不過此矣。皆吾所聞知也。今吾告子以人之情。目欲視色、耳欲聽聲、口欲察味、志氣欲盈。人上壽百歲、中壽八十、下壽六十。除病瘦死喪憂患、其中開口而笑者、

して父瞽瞍に憎まれ、禹は治水に勤勞して半身不隨となり、殷の湯王は其主たる夏の桀王を放ち、周の武王は殷の紂王を伐ち、周の文王は殷の紂王の爲め羑里に幽閉せられた。此の六人の人々は世人の高しとして尙ぶ所であるが、反覆熟論すれば、皆利慾の爲めに其眞性を惑亂し、强ひて其自然の性情に反したもので、其行爲は決して高しとするに足らず、反つて甚だ羞づべきものである。又世間で賢士と稱せられてゐる伯夷叔齊は、孤竹の君たることを辭して首陽の山に隱れて餓死し、その骨肉は空しく山野にさらされて葬る人なく、鮑焦は行を飾り世を誹り、木を抱いて死し、申徒狄は君を諫めて聽かれず、石を負うて自ら河に投じて死し、魚鼈の餌食となつて仕舞つた。介子推は無類の忠臣で、自ら股を割いて其の君晉の文王に進めたが、文王は歸國の後その德に背いたので、子推は怒つて山に入り、木を抱いたまゝ燒死した。尾生は女子と橋の下で逢ふ約束をしたが、その女は遂に來ず、水が益して來たけれども、固く約を守つて去らず、橋桁を抱いたまゝ死んだ。これらの人々の最後は磔になつた犬、河に流した豕同樣悲慘なものであり、又其名を求むるに汲々たる姿は瓢を操つて門邊に立つ乞丐同樣醜いものであつた。すべてつまらぬ名聲に束縛せられて死を輕んじ、本然の性に反つて壽命を養ひ天性を全うすることを知らない輩である。

語釋　堯不慈（堯其の子丹朱に天下を授けざるを謂ふ。）　○舜不孝（成疏に曰く「父の疾む所となる」と。今史記の五帝本紀によれば、舜の父瞽叟は頑、母は嚚、弟象は傲、皆舜を殺さんと欲す」とあり。莊子此を以て舜は不孝となすなり。）　○禹偏枯（成疏に曰く「治水に勤勞し、風に櫛り雨に沐し、偏枯の疾を致し半身不遂なり」と。）　○文王拘二羑里一（成疏に曰く「羑里は殷の獄名、文王紂の難に遭ひ囹圄に厄せられ、凡そ七年を經て、方に免れ脱するを得たり」と。）　○六子（以上擧ぐる所の黃帝堯舜禹湯文武の七子を指す、但し此に六子と云へるは、文武を數へて一と爲せるなり。）　○孰二論之一（孰は熟に同じ、猶之を精熟討論すればと言ふがごとし。）　○以レ利惑二其眞一云云（利欲の念を以て其

割其股以食文公。文公後背之。子推怒而去、抱木而燔死。尾生與女子期於梁下。女子不來、水至不去、抱梁柱而死。此四者、無異於磔犬流豕、操瓢而乞者。皆離名輕死、不念本養壽命者也。

訓讀 世の高しとする所は黃帝に若くは莫し。黃帝すら尙ほ全德なる能はずして、涿鹿の野に戰つて、血を流すこと百里。堯は不慈、舜は不孝、禹は偏枯、湯は其主を放ち、武王は紂を伐ち、文王は羑里に拘はる。此の六子は、世の高しとする所なり。之を孰論するに、皆利を以て其眞を惑はして、強ひて其情性に反す。其行乃ち甚だ羞づべきなり。世の所謂賢士、伯夷叔齊は、孤竹の君を辭して、首陽の山に餓死し、骨肉葬らず。鮑焦は行を飾り、世を非り、木を抱いて死す。申徒狄は諫めて聽かれず、石を負うて自ら河に投じ、魚鼈の食ふ所と爲る、介子推は至忠なり。自ら其股を割いて以て文公に食はしむ。文公後之に背く。子推怒つて去り、木を抱いて燔死す。尾生は女子と梁下に期す、女子來らず、水至れども去らず、梁柱を抱いて死せり。此の四者は、磔犬流豕、瓢を操つて乞ふ者に異なること無し。皆名に離り死を輕んじ、本を念ひ壽命を養はざるものなり。

大意 古來の聖賢は皆名の爲めに身を害したるものにて、貴ぶに足らずと言ふ。

通釋 凡そ世人の尊崇する所の者は、黃帝に及ぶものはない。其黃帝すら尙德を全うすることが出來ないで、蚩尤と涿鹿の野に戰つて、血を流すこと百里の廣きに及んだ。堯は不慈にして天下を其子丹朱に讓らず、舜は不孝に

を剝いでやらう。汝は再び魯より逐はれ、足跡を衞に削られ齊では困窮し、陳蔡では圍まれ、この廣い天下に其身を容るゝ場所すらない。子路に敎へてあんな災厄に陷らせた。汝の行ふ所、上は一身を修むることなく、下は人を治むることが出來ない。汝の說く所の仁義の道は一顧の價値すらないものだ。

語釋 ○修ニ文武之道ニ（成疏に曰く「孔子文武を憲章し、仁義を宣說し、後世の敎を爲すなり」と。）○縫衣淺帶（縫くは縫腋の衣、淺帶は淺狹の帶、儒服なり。）○危冠、（釋文に「李云ふ、危は高なり。子路勇を好む。冠は雄雞の形に似、背に豭斗を負ひ、用て己の勇を表せるなり」と。）○其卒之也（之は時を表はす助詞なり。「其ノ之ヲ卒ル也」と反讀するも亦可なり。）○子路欲レ殺ニ衞君ニ云云（成疏に曰く「仲由懸ゝ疾むの情深く、衞の君蒯聵を殺さんとし、事既に逮ばず。身菹醢に遭ふ。盜跖故に此を以て相譏るなり」と。）○菹（釋文に曰く「菹葅」と。又玉篇に曰く「淹菜を菹と爲す」と。）

世之所レ高、莫レ若ニ黃帝一。黃帝尚不レ能レ全レ德、而戰ニ涿鹿之野一、流レ血百里。堯不慈、舜不孝、禹偏枯、湯放ニ其主一、武王伐レ紂、文王拘ニ羑里一。此六子者、世之所レ高也。孰論レ之、皆以レ利惑ニ其眞一、而強反ニ其情性一。其行乃甚可レ羞也。世之所レ謂賢士、伯夷叔齊、辭ニ孤竹之君一、而餓ニ死於首陽之山一、骨肉不レ葬。鮑焦飾レ行非レ世、抱レ木而死。申徒狄諫而不レ聽、負レ石自投ニ於河一、爲ニ魚鼈所一レ食。介子推至忠也。自

【訓讀】今子文武の道を修め、天下の辯を掌り、以て後世に敎ふ。縫衣淺帶、矯言僞行して、以て天下の主を迷惑せしめて、富貴を求めんと欲す。盜、子より大なるは莫し。天下何の故にか子を謂つて盜丘と爲さずして、乃ち我を謂つて盜跖とする。子甘辭を以て子路に說いて之を從はしめ、子路をして其の危冠を去り、其の長劍を解いて、敎を子に受けしむ。天下皆曰く、孔丘能く暴を止め非を禁ずと。其の卒りや、子路衞君を殺さんと欲して事成らず、身は衞の東門の上に葅せらる。是れ子が敎の至らざるなり。子自ら才士聖人と謂ふか、則ち再び魯に逐はれ、迹を衞に削られ、齊に窮し、陳蔡に圍まれ、身を天下に容れられず。子は子路に敎へて此の患に葅せられしむ。上以て身を爲むるなく、下以て人を爲むる無し。子の道豈に貴ぶに足らんや。

【大意】盜跖の言つゞく。孔子の道の貴ぶに足らざるを述ぶ。

【通釋】今汝は文武の道を修め、天下の辯を備へ、後世に亂賊の法を敎へ、大袖の衣を着、狹い帶をしめ、矯激の言を弄し、僞善的行爲をなして、天下の人君の心を迷はせて、富貴を求めようとして居る。してみれば盜賊は汝より大なるものはない。然るに天下の人は何故に汝を呼んで盜丘といはずして、却つて我を呼んで盜跖といふのであるか。汝はさきに甘言を以て子路に說いて之に從はせ、子路をして其の戴ける高い冠を脫ぎ、其の佩びたる長大の劍を解き、敎へを汝に受けさせた。そこで天下の人は皆孔丘が能く暴行を禁じ非違を禁ずると云つて譽めた。けれども終局に於て、子路は衞の君蒯聵を殺さうとして事が失敗に終り、衞の東門の附近に於て鹽漬にせられて仕舞つた。これは汝の敎への行き屆かない證據だ。それでも汝は自ら厚がましくも才士聖人と稱するのか。然らば假面

語釋 規（はかると訓ず。謀度なり。） ○安可₂長久₁也（成疏に「大城衆民は長久なる可からざるを言ふ」と。） ○置錐之地（置は立なり、錐の頭を立てる程の少許の地をいふ。） ○後世絶滅（林西仲曰く「莊子は戰國に生る。彼の時東周衰ふと雖も、猶共主と爲す。其の後世絶滅すといふは、斷じて此の理なし」と。これにより盜跖篇が莊子以後の人の手に成れることを知るべし。） ○居居（成疏に曰く「安靜の貌」と。） ○于于（成疏に曰く、「自得の貌」と。） ○民知₂其母₁、不₁知₂其父₁（當時夫婦の別未だ無し、從つて子は母の許に於て養育せらる。故に其の母を知つて其の父を知らざるなり、所謂母系制度時代なり。） ○蚩尤（成疏に曰く「神農の時の諸侯、始めて兵を造りし者なり。神農の後第八帝を楡罔と曰ふ。蚩尤氏强くして楡罔と王を爭ひ、楡罔を逐ふ。楡罔黃帝と謀を合して戰つて蚩尤を殺す。漢書音義に云ふ。蚩尤は古の天子と。一に曰く庶人の貪しき者」と。）

今子修文武之道、掌天下之辯、以教後世。縫衣淺帶、矯言僞行、以迷惑天下之主、而欲求富貴焉。盜莫大於子。天下何故不謂子爲盜丘、而乃謂我爲盜跖。子以甘辭說子路、而使從之、使子路去其危冠、解其長劍、而受教於子。天下皆曰、孔丘能止暴禁非。其卒之也、子路欲殺衞君、而事不成、身菹於衞東門之上。是子教之不至也。子自謂才士聖人邪、則再逐於魯、削迹於衞、窮於齊、圍於陳蔡、不容身於天下。子教子路菹此患。上無以爲身、下無以爲人。子之道豈足貴邪。

自分自身十分承知のことである。且つ又自分は次のやうなことを聞いて居る。人の面前で人を譽めることを好む者は、又陰で人を毀ることを好む奴だと。今汝が我に告ぐるに大城衆民の好餌を以てしたのは、これは利慾によつて我を誘はんとするもので、我を凡人扱ひにしようとするものだ。大城衆民の利はどうして長く久しく保つことが出來ようか。凡そ城の大なる者は、天下に及ぶものはない。然るに堯舜は其の天下を保有して居たけれども、其の子孫は錐を立てる程の狹い土地も持つて居なかつた。殷の湯王周の武王は立つて天子となつたが、その後が絶えて仕舞つた。これは其の利の餘りに大なる爲めではあるまいか。尙自分の聞く所によると、昔は禽獸が多くて人の數が少かつた。その爲め民は皆樹上に巣を構へてその害を避け、晝は橡や栗の實を拾つて食べ、夜は樹上に栖んだ。だから之を名けて有巣氏の民と云つた。又古へは民は衣服を作ることを知らず、夏は多く薪を積み蓄へ、冬になると之を焚いて暖をとつたので、之を名けて知生の民と云つた。神農の時代には、人は臥して居る時は安靜に、起きて居る時は自得し、婚姻制度が確立しないので民は其の母を知つて、其の父を知らず、麋鹿と混居し、自ら耕して食ひ、自ら織つて着、互に他を害ふ心が全然無かつた。これが德の最も隆なるものである。所が下つて黃帝に至ると最早無爲の德を致すことが出來なくて、蚩尤と涿鹿の野に戰つて血を流すこと百里に及んだ。其の後堯舜が作つて天子となり、文武百官を立てた。殷の湯王は其の主たる夏の桀王を伐ち、周の武王は殷の紂王を殺して共にその天下を奪つた。これから後になると、强者は弱者を凌ぎ、衆き者は寡き者を暴すといふ弱肉强食の世となつた。されば湯武以來は、皆亂人の徒輩だ。

は、皆愚陋恒民の謂のみ。今長大美好、人見て之を說ぶものは、此れ吾が父母の遺德なり。丘、吾を譽めずと雖も、吾れ獨り自ら知らざらんや。且つ吾れ之を聞く、面のあたり人を譽むるを好むものは、亦背いて之を毀るを好むと。今我に告ぐるに大城衆民を以てするは、是れ我を規るに利を以てして、而して恒民もて我を畜はんと欲するなり。安んぞ長久なるべけんや。城の大なるものは、天下より大なるは莫し。堯舜天下を有ちしも、子孫置錐の地無し。湯武立つて天子たりしも、而かも後世絶滅す。其の利の大なるを以ての故に非ずや。且つ吾れ之を聞く。古は禽獸多くして人民少し。是に於て民皆巢居して以て之を避く。晝は橡栗を拾ひ、暮は木上に棲む。故に之を命けて有巢氏の民と曰ふ。古は民衣服を知らず、夏は多く薪を積み、冬は則ち之を煬く。故に之を命けて知生の民と曰ふ。神農の世、臥せば則ち居居、起てば則ち于于、民は其の母を知つて、其の父を知らず、麋鹿と共に處り、耕して食ひ、織つて衣、相害するの心有ること無し、此れ至德の隆なり。然り而して黃帝德を致すこと能はず。蚩尤と涿鹿の野に戰ひ、血を流すこと百里。堯舜作つて、羣臣を立つ。湯は其の主を放ち、武王は紂を殺す。是より後、强を以て弱を陵ぎ、衆を以て寡を暴す。湯武以來、皆亂人の徒なり。

大意 以下盜跖の言。孔子の敎こそ反つて亂賊の敎なるを云ふ。

通釋 盜跖が大いに怒つて云ふには、「丘よ、來り進め。一體利慾を以て諫ることが出來、言葉を以て諫むることの出來る者とは、愚昧なる凡人に就いてのみ云へることだ。今、汝が余の美點として數へた身體が大きく容貌が美しくて、見る人に好感を與へると云ふことは、吾が父母から授けられた遺德である。何も汝が譽めなくても、既に

邪。且吾聞之、好面譽人者、亦好背而毀之。今告我以大城衆民、是欲規我以利而恆民畜我也。安可長久也。城之大者、莫大乎天下矣。堯舜有天下、子孫無置錐之地。湯武立爲天子、而後世絕滅。非以其利大故邪。且吾聞之。古者禽獸多而人民少。於是民皆巢居以避之。晝拾橡栗、暮棲木上。故命之曰有巢氏之民。古者民不知衣服、夏多積薪、冬則煬之。故命之曰知生之民。神農之世、臥則居居、起則于于、民知其母、不知其父、與麋鹿共處、耕而食、織而衣、無有相害之心。此至德之隆也。然而黃帝不能致德。與蚩尤戰於涿鹿之野、流血百里。堯舜作、立羣臣。湯放其主、武王殺紂。自是之後、以强凌弱、以衆暴寡。湯武以來、皆亂人之徒也。

【訓讀】盗跖大に怒つて曰く、丘來り前め。夫れ規るに利を以てすべくして、而して諫むるに言を以てすべきもの

ゐるのは、これ下德である。凡そ人として此の一德を具有する者は、それだけでも南面して王侯と稱するに十分である。今將軍は此の三德を兼ね備へて居られる。身の長は八尺二寸あり、面目には光彩があり、脣はあか〳〵と紅に燃え、齒は貝を並べた如く美しく、聲は黃鐘の音律にかなつて居る。それにも拘らず名づけて盜跖と呼ばれて居るのは、私が心私かに將軍の爲め遺憾にたへない所であります。將軍が若し臣の言に耳を傾ける意志があるならば、私は南は吳越に使し、北は齊魯に使し、東は宋衞に使し、西は晉楚に使し、諸侯に說いて地を割かしめ、將軍の爲めに數百里の大城を築き、數十萬戶の食邑を立て、將軍を尊んで諸侯となさしめ、天下と共に舊を改めて氣分を一新し、戰を罷めて士卒を休息させ、離散せる兄弟を收め養ひ、物を供へて祖先の靈を祭るならば、これこそ聖人才士の行といふもので、天下萬民の願ふ所であります。」

語釋 知維天地（口義に曰く「知天地を維ぐとは、知以て天地を包羅すべし、天地其の知の外に出づること能はざるなり」と。） ○能辯諸物（口義に曰く「能く諸物を辯ずとは、知以て諸物を辯ずべし、其の知らざること無きを謂ふなり」と。） ○激丹（激は釋文に「司馬云ふ明なり」と。） ○齊齒（齒列の齊へるを謂ふ。） ○黃鐘（音律の名。六律六呂の基本となる微妙の好音。） ○共祭（釋文に曰く「共音供」と。王先謙曰く「共は讀で供と爲す」と。今王說に從ふ。）

盜跖大怒曰、丘來前。夫可規以利、而可諫以言者、皆愚陋恆民之謂耳。今長大美好、人見而說之者、此吾父母之遺德也。丘雖不吾譽、吾獨不自知

休卒、收養昆弟、共祭先祖、此聖人才士之行、而天下之願也。

訓讀 孔子曰く、丘之を聞く、凡そ天下に三德あり。生れながらにして長大美好なること無雙、少長貴賤見て皆之を說ぶは、此れ上德なり。知は天地を維ぎ、能は諸物を辯ずるは、此れ中德なり。勇悍果敢にして、衆を聚め兵を率るは、此れ下德なりと。凡そ人此の一德あるものは、以て南面して孤と稱するに足る。今將軍此の三者を兼ぬ。身の長は八尺二寸、面目光あり、唇は激丹の如く、齒は齊貝の如く、音は黃鐘に中る。而るに名づけて盜跖と曰ふ、丘竊かに將軍の爲めに恥ぢて取らず。將軍臣に聽くに意あらば、臣請ふ南は吳越に使し、北は齊魯に使し、東は宋衞に使し、西は晉楚に使し、將軍の爲に大城數百里を造り、數十萬戶の邑を立て、將軍を尊んで諸侯となさしめ、天下と更始して、兵を罷め卒を休め、昆弟を收養し、先祖を共祭せば、此れ聖人才士の行にして、天下の願なりと。

大意 孔子は盜跖に向つて、其の天下に君たるの德を具することを稱し、且つ跖の爲めに大に諸侯に遊說すべしと言ふ。

通釋 孔子の云ふには、「私の聞く所に據れば、凡そ天下に三つの德があります。生れつき身のたけが大きく容貌の麗はしきこと雙びなく、老いも少きも、貴人も賤者も、見る者等しく好感を抱くのは、これ上德であり、其の智は天地を網羅し、其の能は諸物を辨ずるのは、これ中德であり、勇悍にして決斷力に富み、衆人を聚め、衆兵を率

が心に逆はば殺して仕舞ふぞ」と。

語釋 顏回爲御子貢爲右（支那の車には大車小車の別がある。大車は牛車、小車は馬車にて乘用車なり。小車には驪馬をつなぎ三人乘りである。馭者は中央に位し、主人は左に、車右は右に在り。車右は又驂乘ともいふ。） ○餔（釋文に「字林に云ふ、日申時の食なりと」又成疏に曰く「餔は食なり」と今後說に從ふ。） ○是夫魯國之巧僞人非邪（僞は人爲なり、道家は無爲自然を尚び、儒家の孝悌忠信仁義を以て作爲に出づとなす。故に孔子を呼んで巧僞人となすなり。非字の下に位するは魯國は巧僞人に非るかの倒裝法なり。） ○枝木之冠（釋文に「司馬云ふ、冠華飾多くして、木の枝の繁きが如し」と。） ○死牛之脅（釋文に「司馬云ふ、牛皮を取りて大革帶となすと」。） ○徼倖（成疏に冀望なりと見ゆ。） ○願望履幕下（成疏に云ふ「幕亦綦字に作る者あり、綦は履の迹なり。願はくは綦迹を履まんとは猶ほ足下を看んの如し」と。） ○反走（卻退なり。） ○乳虎（乳兒を哺する虎は其の威殊に烈し。）

孔子曰、丘聞之、凡天下有三德。生而長大美好無雙、少長貴賤見而皆說之、此上德也。知維天地、能辯諸物、此中德也。勇悍果敢、聚衆率兵、此下德也。凡人有此一德者、足以南面稱孤矣。今將軍兼此三者。身長八尺二寸、面目有光。脣如激丹、齒如齊貝、音中黃鐘、而名曰盜跖、丘竊爲將軍恥不取焉。將軍有意聽臣、臣請南使吳越、北使齊魯、東使宋衞、西使晉楚、使爲將軍造大城數百里、立數十萬戶之邑、尊將軍爲諸侯、與天下更始、罷兵

通釋 孔子は柳下季の止めるのも聽かないで、弟子の顏回を御車となし、子貢を車右となして、態々盜跖に會ひに出掛けた。折から盜跖は手下を太山の南麓に休ませて、人間の肝を膾にして食つて居た。孔子は車から下りて、取次の者に遇つて云ふには「私は魯の孔丘と申す者であるが、將軍の御高義を耳にして、敬んで取次のお方に敬意を表し、そのお執成によつて面謁を求むる次第である」と。そこで取次の者が奧に入つてその由を通じた所、盜跖は之を聞いて大に怒り、目は明星の如くきら〳〵と輝き、髮は逆立つて冠を突くといふ物凄い形相をして云ふには、「此奴は魯國の大山師孔丘ではないか。俺に代つて彼に告げよ。汝は樣々の言語を造り出し、妄りに文王武王の德をほめそやし、頭には飾りの多い冠を戴き、身には死牛の皮で造つた帶を纏ひ、口數が多くて謬れる說を唱へ、自ら耕さないで食ひ、自ら織らないで着、脣を動かし舌を鳴らして道を說き、勝手に是非の別をこね廻して、天下の人君を迷はせ、天下の學者をして本然の性に反ることを忘れさせ、無暗に孝悌の德を作つて、あはよくば封侯富貴を得んと冀望するものである。汝の罪は大きくて極めて重い。疾く走つて歸れ、さもなければ汝の肝を取つて晝食の膳の肴にして喫れるぞ」と。孔子は再び取次の者を煩はし意を通じて云ふには、「私は將軍の賢兄柳下季氏とは昵懇の間柄である。願はくば一たび將軍の脚下に伏して拜謁の榮を得たいものである」と。そこで取次の者が再びその意を通じた。盜跖が云ふには、「うるさい奴だ。それでは通してやれ」。孔子は小走りして進み、席を避けて引下り、恭しく盜跖を再拜した。すると盜跖は大に怒つて、兩足をうんと伸ばし、劍に手をかけ目を見張り、子持ちの虎のやうに恐しい聲を張り上げて云ふには、「丘よ、來り進め。汝の言ふ所、吾が意にかなへば生かしておくが、吾

謁者復通。盜跖曰、使來前。孔子趨而進、避席反走、再拜盜跖。盜跖大怒、兩展其足、案劍瞋目、聲如乳虎。曰、丘來前。若所言順吾意則生、逆吾心則死。

訓讀 孔子聽かず、顏回を馭と爲し子貢を右と爲し、往いて盜跖を見る。盜跖乃ち方に卒徒を太山の陽に休し、人の肝を膾にして之を餔ふ。孔子車より下りて前み、謁者を見て曰く、魯人孔丘、將軍の高義を聞き、敬んで謁者に再拜すと。謁者入つて通ず。盜跖之を聞いて大に怒り、目は明星の如く、髮上つて冠を指す。曰く、此れ夫の魯國の巧僞人孔丘に非ずや。我が爲めに之に告げよ。爾言を作り語を造り、妄りに文武を稱し、枝木の冠を冠り、死牛の脅を帶び、多辭繆說し、耕さずして食ひ、織らずして衣、脣を搖かし舌を鼓し、擅に是非を生じて、以て天下の主を迷はし、天下の學士をして、其の本に反らざらしめ、妄りに孝弟を作して、封侯富貴を徼倖するものなり。子の罪大にして極めて重し。疾く走り歸れ。然らずんば、我れ將に子の肝を以て晝餔の膳を益さんとすと。謁者復た通ず。盜跖曰く、來り前ましめよと。孔子趨つて進み、席を避けて反り走り、盜跖を再拜す。盜跖大に怒り、兩つながら其の足を展べ、劍を案じ目を瞋らし、聲乳虎の如し。曰く丘來り前め。若が言ふ所吾が意に順はば則ち生きん、吾が心に逆はば則ち死せんと。

大意 孔子は柳下季の止むを聽かず、盜跖を訪ふ。盜跖は先づ孔子を魯の大山師と罵倒す。

らぬ神に祟り無し、先生は必ず出掛けてはなりませぬ」と。

語釋　柳下季（成疏に「姓は展、名は禽、字は季、柳下に食む故に之を柳下季といふ、亦言ふ、柳樹の下に居る、故に以て號となす、展禽は是れ魯の莊公の時、孔子を相去ること百餘歲なり、而るに友たりと云ふは蓋し寓言なり」と。）○盜跖（釋文に「漢書の李奇の注に云ふ、跖は秦の大盜なり」と。兪樾曰く「史記の伯夷傳の正義に又云ふ、跖は黃帝の時の大盜の名と、是れ跖は何れの時の人たるか、竟に定說無し、孔子と柳下惠とは時を同じくせず、柳下惠と盜跖とも亦時を同じくせず。讀者寓言を以て實と爲す勿れ」と。）○入保（釋文に禮記の鄭注を引いて曰く「小城を保と云ふ」と。）○能詔（釋文に「字の如し、敎ふるなり」と見ゆ。）○漂風（漂は飄に同じ。旋風なり。）

孔子不聽、顏回爲馭、子貢爲右、往見盜跖。盜跖乃方休卒徒太山之陽、膾人肝而餔之。孔子下車而前、見謁者曰、魯人孔丘、聞將軍高義、敬再拜謁者。謁者入通。盜跖聞之大怒、目如明星、髮上指冠。曰、此夫魯國之巧僞人孔丘非邪。爲我告之。爾作言造語、妄稱文武、冠枝木之冠、帶死牛之脅、多辭繆說、不耕而食、不織而衣、搖脣鼓舌、擅生是非、以迷天下之主、使天下學士不反其本、妄作孝弟、而徼倖於封侯富貴者也。子之罪大極重。疾走歸。不然、我將以子肝益晝餔之膳。孔子復通曰、丘得幸於季。願望履幕下。

通釋 孔子は柳下季と友達の間柄であつた。柳下季には弟があつて其の名を盜跖といつた。彼は當世稀なる大泥坊で、手下を九千人も澤山に引き連れて天下をのさばり歩き、諸侯の國を侵し暴して、民の部屋に穴をあけて忍び込み、戸の樞をはづして押し入り、人の牛馬を騙り出し、人の婦女を奪ひ取り、利得に目がくらんで親疏の見境がつかず、他人は固より父母兄弟をも顧みず、先祖のお祭もしない。彼の通過する村里では大國は城を守り、小國は堡に入つて其の害を防ぐといふ有樣で、萬民はその爲に非常に苦しんだ。孔子が或る時柳下季に向つていふには、「凡そ人の父たる者は、必ずよく其の子を敎へ戒め、人の兄たる者は、必ずよく其の弟を敎へ導いて、不善をなさしめないやうにすべきである。」若し父として其の子を敎戒することが出來ず、兄として其の弟を敎導することが出來なければ、父子兄弟の親愛があつても少しも貴むに足りないであらう。今先生は現代に於る最も才のすぐれた人であるのに、弟は盜跖のやうな惡黨となつて天下に害毒を流して居るにも拘らず、それを敎へ導くことが出來ない。私は竊に先生の爲に之を羞づかしい事だと思つてゐる。一つ先生に代つて出掛けて說敎してやらう」と それを聞いて柳下季のいふには「先生は人の父たる者は必ずよく其の子を敎戒し、人の兄たる者は必ずよく其の弟を敎導するものだと言はれるが、若し子が父の敎戒を聽かず、弟が兄の敎導に從はなかつたならば、よし先生の能辯を以てしても、どうすることが出來ませうや。且つ弟の盜跖といふ奴は、其の心は湧き出づる泉の如く姦智に長け、其の意は旋風の如くはげしく、強さは敵を防ぐに十分であり、辯舌は己の非行をいひ繕ふに十分である。其の心に順つて居れば喜び、其の心に逆へば怒り出し、ずぐ罵倒して人を辱かしめるといつた有樣で、實に始末の惡い奴だ。觸

敎、雖今先生之辯、將奈之何哉。且跖之爲人也、心如涌泉、意如飄風、強足以拒敵、辯足以飾非。順其心則喜、逆其心則怒。易辱人以言。先生必無往。

訓讀 孔子、柳下季と友たり。柳下季の弟、名を盜跖と曰ふ。盜跖從卒九千人、天下に橫行し、諸侯を侵暴し、室に穴し戶に樞し、人の牛馬を驅り、人の婦女を取り、得を貪つて親を忘れ、父母兄弟を顧みず、先祖を祭らず。過ぐる所の邑、大國は城を守り、小國は保に入る。萬民之を苦しむ。孔子柳下季に謂つて曰く、夫れ人の父たるものは、必ず能く其の子に詔げ、人の兄たるものは、必ず能く其の弟を敎ふ。若し父其の子に詔ぐること能はず、兄其の弟を敎ふること能はずんば、則ち父子兄弟の親を貴むこと無し。今先生は世の才士なり。弟は盜跖となり、天下の害を爲せども、敎ふること能はざるなり。丘竊に先生の爲めに之を羞づ。丘請ふ、先生の爲めに往いて之を說かんと。柳下季曰く、先生言ふ、人の父たるものは、必ず能く其の子に詔げ、人の兄たるものは、必ず能く其の弟を敎ふと。若し子は父の詔を聽かず、弟は兄の敎を受けずんば、今の先生の辯と雖も、將た之を奈何せんや。且跖の人と爲りや、心は湧泉の如く、意は飄風の如し。強は以て敵を拒ぐに足り、辯は以て非を飾るに足る。其の心に順へば則ち喜び、其の心に逆へば則ち怒り人を辱むるに言を以てし易し。先生必ず往くこと無かれと。

大意 孔子が盜跖を說諭せんとして先づ盜跖の兄柳下季に其の意を告ぐ、柳下季、弟の無道なるを述べ、孔子を止むることを敍す。

雜篇　盜跖第二十九

叙説　盜跖の口を假りて孔子の道を罵倒す。史遷の所謂漁父盜跖胠篋を作りて以て孔子の徒を詆毀すとは是なり。外に二章を錄す。意旨淺膚、末流の作なり。

孔子與柳下季爲友。柳下季之弟、名曰盜跖。盜跖從卒九千人、横行天下、侵暴諸侯、穴室樞戸、驅人牛馬、取人婦女、貪得忘親、不顧父母兄弟、不祭先祖。所過之邑、大國守城、小國入保。萬民苦之。孔子謂柳下季曰、夫爲人父者、必能詔其子、爲人兄者、必能敎其弟。若父不能詔其子、兄不能敎其弟、則無貴父子兄弟之親矣。今先生世之才士也。弟爲盜跖、爲天下害、而弗能敎也。丘竊爲先生羞之。丘請爲先生往說之。柳下季曰、先生言爲人父者、必能詔其子、爲人兄者、必能敎其弟。若子不聽父之詔、弟不受兄之

恃みにして威を保ち、牲を割き殺して盟約をなして以て信と爲し、善行を表彰して衆人の心を悦ばしめ、兵を擧げて殷を伐ち君を弑して以て天下を要め收めんとしてゐる。これは推亂を推して暴に易へるに過ぎない。私の聞く所によると、『古の士は、治世に遭へば其の任に當つて仕事をすることを避けないが、亂世に遭へば、節を枉げて苟も存することをしない』といふことだ。今や殷の政亂れて天下は闇黑で、周の德も亦衰へてゐる。其の周と並び存して吾が身を汚さんよりは、寧ろ之を避けて己れひとり行を潔くした方がましである」といつて、二人は共に北の方首陽山に至り、遂に餓を守つて山中に死んだ。伯夷叔齊の如きは、その富貴に於て、苟も受くべき理由があつたならば、必ずしも高尚な節義や、世に戻つた樣な行を賴みにする者ではない。畢竟、義に背き理に於て受くべからざるものがあつたがために、惟自己の心を樂ましめて世に事へなかつたのである。これが卽ち二士の執る所の節義なのである。

語釋 西方有レ人（西方は岐周にして、人は西伯昌、卽ち文王なり。文王の老を養ひ善政を施くをいふ。） ○岐陽（成疏に曰く「岐陽は是れ岐山の陽、文王の都せし所の地なり。今の扶風是れなり」と。今日の陝西省岐山縣である。） ○叔旦（周公は名は旦、武王の弟なるが故に叔旦といふ。文王の子成王を輔けて周室の礎を固めた人で、孔子の理想とする大聖人である。） ○血牲而埋レ之（林希逸曰く「牲を殺し其の血を取て、以て盟て後之を埋む」と。） ○祈喜（兪樾曰く「喜は當に禧に作るべし。爾雅釋詁に禧は福なり」と。ヨ福を祈り求むるの意である。） ○上謀而下行レ貨（王念孫に曰く「上謀而下行貨の下字は後人の加ふる所なり。上と尙と同じ。上謀而行貨。阻兵而保威と句法正に相對す。後人誤つて上を讀んで上下の上と爲す。故に下の字を加ふるのみ、呂氏春秋誠廉篇には正に上謀而行貨、阻丘而保威に作る」と。卽ち王念孫に從へば「謀を上び貨を行ふ」と讀むべきであるが、今は本文通りに上謀つて下貨を行ふの意に解す。） ○遂餓而死焉（郭象に曰く「論語に曰く、伯夷叔齊は　陽の下に餓ゆと。其の死を言はず、此に死焉と云ふは、亦其の餓を守りて以て終りしを明かにせんと欲するなり。未だ必ずしも餓死せざるなり」と。伯夷叔齊餓于首陽之下の事は論語季氏篇に見ゆ。）

けて以て吾が行を潔ふするに如かずと。二子北首陽の山に至り、遂に餓えて死す。伯夷叔齊の若き者は、其の富貴に於けるや、苟も得べきのみならず、則ち必ず高節戻行を賴まず、獨り其の志を樂んで世に事へず。此れ二士の節なり。

大意 殷末周初の戰亂に際して伯夷叔齊の二人が、其の行を淸くして首陽山に入つて餓死した事を叙し、以て外物のために苟も性命を害はざるの意を總括す。

通釋 昔、周の國が興るとき二人の士があつて孤竹國に居り、一人を伯夷一人を叔齊といつた。二人は相語つて「西方に有道者らしい人が居るといふことだから、試みに往つて會つて見ようではないか」といつて、岐山の南に到つた。周の武王は之を聞いて、弟の周公を遣はして二人に面會させ、之と誓はしめ、「俸祿を倍にし、一等の官に就いて頂くから」といつて、牲を殺し、その血をとつて盟書を神聖にして地に埋め、二人を官につかしめんとした。伯夷叔齊の二人は顏を見合せて笑ひながら「まあ變なことだ。吾は有道の人があると聞いて來たのだが、こんなことが吾等の謂ふ道ではない。昔、神農氏が天下を治めたとき、四時の祭祀には恭敬を盡したが、しかも幸福を祈らず、人に接するに當つては、忠信にして治道を盡しても、而かも民の歸向を求めず、政のために政をするのを樂しみ、國家統治のために治を計るのを樂んで、何等要求する所がなく、又人の壞敗を以て自ら成れりとせず、人の卑賤を以て自ら高しとなさず、好機に遭遇しても自ら利を收めようといふ樣なことはしなかつた。然るに今周は殷の衰亂を見て、俄かに治政を施き人心收攬の策をとり、上は計謀をめぐらし、下は爵祿を以て士を招き、兵力を

遭治世不避其任、遇亂世不爲苟存。今天下闇、周德衰。其並乎周以塗吾身也、不如避之以潔吾行。二子北至於首陽之山、遂餓而死焉。若伯夷叔齊者、其於富貴也、苟可得已、則必不賴高節戾行、獨樂其志、不事於世。此二士之節也。

訓讀 昔し周の興るとき、士二人あり。孤竹に處る。伯夷叔齊と曰ふ。二人相謂つて曰く、吾聞く、西方に人有り、道有る者に似たりと。試みに往いて觀んと。岐陽に至る。武王之を聞いて、叔旦をして往いて之を見せしめ、之と盟て曰く、富二等を加へ、官の一列に就けんと。血牲して之を埋む。二人相視て笑て曰く、嘻、異なる哉。此れ吾がいはゆる道に非るなり。昔者神農の天下を有つや、時祀敬を盡して喜を祈らず。其の人に於けるや、忠信治を盡して求むることなし。政のために政を爲すを樂しみ、治のために治を爲すを樂しむ。人の壞るゝを以て自ら成れりとせず、人の卑しきを以て自ら高しとせず、時に遭ふを以て自ら利せざるなり。今周は殷の亂を見て遽かに政を爲す。上謀て下貨を行ひ、兵を阻んで威を保ち、牲を割て盟て以て信と爲し、行を揚げて以て衆を說ばせ、殺伐以て利を要む。是れ亂を推して以て暴に易ふるなり。吾聞く、古の士、治世に遭へば其の任を避けず、亂世に遇へば苟も存することを爲さずと。今天下闇く、周德衰ふ。其の周に並んで以て、吾身を塗せんよりは、之を避

である。俺はそんなことを久しく見聞するに忍びない」と言つて、石を負ふて自ら廬水に沈んでしまつた。

語釋 卞隨瞀光（成疏に曰く「姓は卞、名は隨なり。姓は瞀、名は光なり。並に道を懷ふの人、賢者なり。湯其の賢を知り、之に因て讓を求る。既に隱者の務に非ず。故に之を辭るに不知を以てす」と。林希逸は又「卞隨瞀光は皆古の隱者なり。但其の自ら沈むの一節も亦考ふべからず。或は亦寓言のみ」と言つてゐる。）〇強力忍垢（釋文に「李云ふ、強力は兵を阻（たの）んで力を須ふ。忍垢は垢を耐す、須らく垢を忍ぶべしと。」林希逸は「強力は作爲有るの意、忍垢は世俗の汚辱の事に堪ゆるなり」と注してゐる。）

昔周之興。有士二人。處於孤竹。曰伯夷叔齊。二人相謂曰。吾聞、西方有人。似有道者。試往觀焉。至於岐陽。武王聞之、使叔旦往見之、與之盟曰、加富二等、就官一列。血牲而埋之。二人相視而笑曰、嘻、異哉。此非吾所謂道也。昔者神農之有天下也、時祀盡敬而不祈喜。其於人也、忠信盡治而無求焉。樂與政爲政、樂與治爲治、不以人之壞自成也、不以人之卑自高也、不以遭時自利也。今周見殷之亂而遽爲政。上謀而下行貨。阻兵而保威、割牲而盟以爲信、揚行以說衆、殺伐以要利、是推亂以易暴也。吾聞、古之士、

【大意】前節の生を尊ぶことをうけて更に卞隨瞀光の清廉よく天下を受けざりし事を敍す。

【通釋】殷の湯王が夏の桀王を伐たんとして隱君士の卞隨に相談した。卞隨は「そんな事は吾輩の與り知るところでない」と言つた。「それでは誰に謀つたらよいか」と聞くと、「一向に知らない」と答へて全然相談に應じない。湯王は已むなく瞀光に相談して見たが、卞隨と同じ答へをしてゐるのでどうも仕方がない。そこで湯王は更めて「伊尹はどんなものか」と問うた。瞀光は「伊尹は事を遂行する力を持つてゐて汚辱を耐へ忍び得る人だ。其の他の事は知らない」と答へた。湯は遂に伊尹と謀つて桀を征伐して天下を取り、卞隨に讓つて天下を治めしめんとした。卞隨は斷つて「曩に君が桀を伐たんとして吾輩に謀つたのは、必ず俺を君を弑する心を有する賊と見做したのであらう。今又桀に勝つて俺に天下を讓らうとするのは、必ず俺を貪欲な者と考へたからであらう。不幸にも俺は亂世に生れたが爲に、君の樣な無道な人が二度までやつて來て、汚辱の行を以て俺を汚がし辱かしめたのだ。俺は猶生きながらへてかゝることを屢ゝ聞くに堪へない」と言つて、竟に卞隨は椆水に身を投げてしまつた。湯は又瞀光に讓らうとして勸めて言つた。「知ある者は謀略を運らし、勇ある者は遂行し、仁德ある者は天子の位に居つて之を治めるのが古の道である。お前一つ立つて天子になつて吳れまいか」と。瞀光は之を辭して「たとひ無道であつても上を廢するは義ではない。干戈を交へて民を殺すのは仁ではない。人が討伐の難を犯して取つた天下を、俺が勞せずして獨り其の利を享くるのは廉潔を害するものだ。古人の言に『其の義にかなふものでなければ其の祿を受けず、無道の世には其の國土を踐まぬ』とあるのを聞いてゐる。況して俺を尊敬して天子に爲さんとするなどは以ての外

光辭曰、廢上、非義也。殺民、非仁也。人犯其難、我享其利、非廉也。吾聞之。曰非其義者、不受其祿、無道之世、不踐其土。況尊我乎。吾不忍久見也。乃負石而自沈廬水。

訓讀 湯將に桀を伐たんとす。卞隨に因つて謀る。卞隨曰く、吾が事に非ざるなりと。湯曰く、孰か可なると。曰く、吾れ知らざるなりと。湯又瞀光に因つて謀る。瞀光曰く吾が事に非ざるなりと。湯曰く、孰か可なると。曰く、吾れ知らざるなりと。湯曰く、伊尹は如何と。曰く、強力にして垢を忍ぶ、吾れ其の他を知らざるなりと。湯遂に伊尹と與に謀つて桀を伐ち、之に尅ち、以て卞隨に讓る。卞隨辭して曰く、君の桀を伐つや我に謀るは、必ず我を以て賊と爲すなり。桀に勝つて我に讓るは、必ず我を以て貪と爲すなり。吾れ亂世に生れて、無道の人、再び來つて我を漫すに其の辱行を以てす。吾れ數ゝ聞くに忍びざるなりと。乃ち自ら椆水に投じて死す。湯又瞀光に讓る。曰く、知者之を謀り、武者之を遂げ、仁者之に居るは古の道なり。吾子胡ぞ立たざるやと。瞀光辭して曰く上を廢するは義に非ざるなり。民を殺すは仁に非ざるなり、人其の難を犯して、吾れ其の利を享くるは、廉に非ざるなり。吾れ之を聞く、曰く、其の義に非ざれば、其の祿を受けず、無道の世は其の土を踐まずと、況や我を尊ばんをや。吾れ久しく見るに忍びざるなりと。乃ち石を負うて自ら廬水に沈む。

通釋 舜が天下を其の友人の無擇に讓らうとした時、無擇は之を辭して、「君の人となりはどうも變ではないか。君は以前畎畝の中に居たのに、その農耕に安んぜずして堯の門に遊んで天子となり、天下を治めるために其の性命を害うた。而かも猶それに止まらず、俺に迄其の汚行を強ひて、天子として俺を汚さうとするのか。俺は生きて君のやうな人を見るのを羞づる者だ」といつて、自ら淸冷の淵に身を投げてしまつた。

語釋 北人無擇（成疏に云ふ「北方の人にして、名は無擇と曰ふ。舜の友人なり」。）○居於畎畝之中（釋文に「司馬云ふ壟上を畝と曰ひ、壟中を畎と曰ふと」。即ち壟は田中高き所を謂ひ、農耕に從事する意味である。）○淸冷之淵（釋文に「山海經に云ふ、江南に在りと。一に云ふ、南陽郡西崿山下に在りと」。思ふに寓言中の地名だから確定し難い。）

湯將伐桀。因卞隨而謀。卞隨曰、非吾事也。湯曰、孰可。曰、吾不知也。湯又因瞀光而謀。瞀光曰、非吾事也。湯曰、孰可。曰、吾不知也。湯曰、伊尹何如。曰、强力忍垢、吾不知其他也。湯遂與伊尹謀伐桀、尅之、以讓卞隨。卞隨辭曰、后之伐桀也謀乎我、必以我爲賊也。勝桀而讓我、必以我爲貪也。吾生乎亂世、而無道之人再來漫我以其辱行。吾不忍數聞也。乃自投稠水而死。湯又讓瞀光。曰、知者謀之、武者遂之、仁者居之、古之道也。吾子胡不立乎。瞀

く義である。）○其何窮之爲（郭慶藩曰く「何窮之爲の爲は猶詞の如きなり。古は詞爲二字は義通ず」と。）○天寒既至（兪樾曰く「天は乃ち大の字の誤なり。國語魯語に天寒降。韋昭の注に曰く、季冬建丑の月大寒の後を謂ふなりと。若し天寒既に至ればに作れば其の義を失す。呂氏春秋愼人篇にも亦此の事を載せ、正に大寒に作る」と。）○陳蔡之隘（釋文に隘音厄とあり。卽ち阨と同じで阨塞の義である。）○削然反琴（釋文に「李云ふ琴を反す聲」と。林希逸曰く「削然は音消、蕭洒の意、反琴者は再び琴を取て彈ずるなり」と。秦鼎曰く「通雅 削然は修然。卽ち肅然なり」と。）○扢然（釋文に「李云ふ、奮舞の貌」と。司馬云ふ、喜の貌」と。卽ち喜び躍然として舞ふ貌である。）○共伯得乎丘首（釋文に依て考へれば、共伯は名は和。其の行を修め、賢人を好み、諸侯から賢として尊敬された。周の厲王の難に天子が絕えた。諸侯から推されて天子とされた。共伯は聽き入れなかつたが、遂に已むなく王位に卽いた。十四年に大旱があり、大火災があつた。太陽をトとし見ると、厲王の祟りだといふ。召公は乃ち宣王を立てた。共伯は宗に復歸して、逍遙として道を共山の　に得たといふことである。又共山は今の河內共縣の西に在ると云つてゐる。郭慶藩は荀子や呂氏春秋を引證して共首は共頭たりと云つてゐる。林希逸は丘首は山名なり。所謂る共伯は未だ必ずしも其の和を指さず。大抵皆寓言なり實を以て之を求むることを無し」と說明してゐる。）

舜以天下讓其友北人無擇。北人無擇曰、異哉后之爲人也、居於畎畝之中、而遊堯之門。不若是而已、又欲以其辱行漫我。吾羞見之。因自投清冷之淵。

訓讀 舜、天下を以て其の友北人無擇に讓る。北人無擇曰く、異なるかな后の人と爲りや、畎畝の中に居て堯の門に遊ぶ。是の若くなるのみならず。又其の辱行を以て我を漫さんと欲す。吾れ之を見るを羞づと。因つて自ら清冷の淵に投ず。

大意 舜の友無擇の天下のために其の性命を毀損せざることを說く。

路の名）と賜（子貢の名）とは誠に小人だ。こゝへ呼んでおいで、云つて聞かせることがある」。子路と子貢は呼ばれて室に入つた。そして子路は「只今の如き有樣では全く窮したと申すより外ありません」と言つた。孔子は之に答へた。「それは何と云ふ言葉です。君子は道通ずるを通といひ、道に窮するを窮といふのである。今俺は仁義の道を抱きながら、亂世のために其の災患を蒙つてゐるが、然し決し窮してはゐない。されば俺は自ら內心省みるも道に窮することなく、患難に臨むも其の德を失ふことはない。之を樹木に譬ふれば、寒さは既に天地に充ちて、霜雪のために萬木紅葉して風に從つて落葉するに、松柏のみが翠色滴たらんばかりに茂つてゐると同じである。この今の窮境も俺にとつては却つて幸といふべきで、災厄に依つて其の德があらはれるばかりである」と。そして蕭然として琴を元の座に反して又彈きつゝ詩を歌はれた。子路と子貢は大に感悟して、子路は勇ましく立ち上つて楯を執つて舞つた。子貢は之を見て歎じて、「自分は天が如何に高く、地が如何に低く深かいかは知らないが、わが先生の德はそれにも勝るものだ。古の得道の人は、窮しても樂しみ、通じても樂しむ。樂しむ所は富貴貧賤などの外物の窮通についてゞはない。道德さへ本當に吾が身に體得しておれば、外的の窮通の如きは、寒暑の去來の如く一向に頓着するに足らぬものである。故に許由は堯の天下を讓らんとするを避けて潁水の南に隱れて自ら娯しみ、共伯は王位を辭して丘首に遊んで然かも志を得たのである。吾が先生も亦此の類で眞に道を樂しむ者であらう」と言つた。

【語釋】藜羹不レ糝（林希逸曰く「言は菜有つて米無きなり」。藜羹は「アカザノアツモノ」で轉じて粗食の義に用ふ。糝は米粒を以つて羹に和する義である。）　○藉（釋文に曰く「藉は毀なり。文云ふ陵藉なり」と。秦鼎曰く「藉は狼藉なり」と、亂暴な働

に遭ふ。其れ何の窮するをか之れ爲さん。故に内に省みて道に窮せず、難に臨んで其の德を失はず。天寒既に至り、霜雪既に降る。吾れ是を以て松柏の茂るを知るなり。陳蔡の隘は、丘に於て其れ幸かと。孔子削然として琴を反して弦歌す。子路扢然として干を執つて舞ふ。子貢曰く、吾れ天の高く、地の下きを知らざるなり。古の道を得る者は、窮も亦樂しみ、通も亦樂しむ。樂しむ所は窮通に非ざるなり。此に道德あれば、則ち窮通は寒暑風雨の序たり。故に許由は潁陽に娯しみ、而して共伯は共首に得たりと。

大意　孔子が陳蔡の閒に厄に遭遇して而かも平然たりし事を叙し、得道者の窮通は外物の上に非らずして道德に存することを説く。

通釋　孔子が陳蔡の閒に窮した時、數日間煮た物を食はず、野菜はあるが米が無いので顏色もひどく憔悴してゐた。しかし孔子は自若として部屋に安坐して琴を彈き詩を詠じて窮迫を知らざる如くであつた。顏回が羹にする野菜を擇り分けてゐると、そこへ子路と子貢が來て口を揃へて、「我が先生は二度までも魯から逐はれ、衛に往つては又用ひられずして足迹を削られ、宋に遊びては樹下に禮を講じて桓魋から樹を伐り倒されて殺されんとし、商周にても厄窮に遭ひ、今又陳蔡の閒に圍まれてゐる。先生を殺さうとする者も罪せられないし、先生に狼藉を働いて亂暴を加へても禁ぜられない有樣であるのに、先生は平氣なもので、琴を彈じ歌を歌つて少しも音聲を絕たれない。一體全體君子が耻を知らないのはあんなものかしらん」と言つて誹り合つた。顏回は默々として之に應ずることもなく、室に入つて孔子に告げた。孔子は彈いてゐた琴を前に押しやつて、喟然として嘆じて云はれるには「由（子

也。君子通於道之謂通、窮於道之謂窮。今丘抱仁義之道、以遭亂世之患。其何窮之爲。故內省而不窮於道、臨難而不失其德。天寒既至、霜雪既降。吾是以知松柏之茂也。陳蔡之隘、於丘其幸乎。孔子削然反琴而弦歌。子路扢然執干而舞。子貢曰、吾不知天之高也、地之下也。古之得道者、窮亦樂、通亦樂。所樂非窮通也。道德於此、則窮通爲寒暑風雨之序矣。故許由娛於潁陽、而共伯得乎丘首。

訓讀 孔子、陳蔡の間に窮し、七日火食せず、藜羹糝せず。顏色甚だ憊れて、室に弦歌す。顏回、菜を擇ぶ。子路子貢相與に言つて曰く、夫子再び魯に逐はれ、迹を衛に削られ、樹を宋に伐られ、商周に窮し、陳蔡に圍まる。夫子を殺すものも罪なく、夫子を藉するものも禁なし。弦歌して琴を鼓し、未だ嘗て音を絕たず。君子の恥無きや、此の如きかと。顏回以て應ずることなく、入つて孔子に告ぐ。孔子琴を推し、喟然として歎じて曰く、由と賜とは細人なり、召して來れ、吾れ之に語げんと。子路子貢入る。子路曰く、此の如きもの窮すと謂ふべしと。孔子曰く、是れ何の言ぞや。君子道に通ずる之を通と謂ふ、道に窮する之を窮と謂ふ。今丘は仁義の道を抱いて以て亂世の患

子であるから、巖穴に隱遁して富貴榮華の生活から離脱することも、布衣の士よりは一層困難である。されば未だ道に達した者ではないが、道を得んとする志だけは持つてゐると謂ふべきで立派な者である。

語釋　中山公子牟（釋文に「司馬云ふ魏の公子。中山に封ぜらる。名は牟と。」）○心居乎魏闕之下（釋文に「司馬云ふ、魏は象魏、人君の門なりと」。卽ち古の宮門法を懸くる所をいふ、富貴を慕つて忘る能はざる意である。）○神無惡乎（秦鼎曰く「神惡とは猶ほ心中快ならずと云ふが如し」と。卽ち欲望を制壓しなければ精神上何等害ふことなく、不愉快を感じ得ないといふ意である。）○重傷（兪樾曰く「重傷とは猶再傷の如きなり、自ら勝つ能はず、則ち已に傷つく。又强ひて之を制して縱にせしめず。是れ再傷なり。故に曰く、此を之れ重傷と謂ふ」と。）○魏牟萬乘之公子也云々（成疏に曰く「夫れ大國の王孫生れて榮貴なり。遂に能く巖に棲み谷に隱れ、身艱辛を履む。未だ玄道を階まずと雖も、而かも淸高の志有り、以て貪を激し俗を勵ますに足る」と。）

孔子窮於陳蔡之閒、七日不火食、藜羹不糝。顏色甚憊、而弦歌於室。顏回擇菜。子路子貢相與言曰、夫子再逐於魯、削迹於衞、伐樹於宋、窮於商周、圍於陳蔡。殺夫子者無罪、藉夫子者無禁。弦歌鼓琴、未嘗絕音。君子之無恥也、若此乎。顏回無以應、入告孔子。孔子推琴、喟然而歎曰、由與賜細人也、召而來、吾語之。子路子貢入。子路曰、如此者可謂窮矣。孔子曰、是何言

矣。

【訓讀】中山公子牟、瞻子に謂つて曰く、身は江海の上に在り、心は魏闕の下に居る、奈何と。瞻子曰く、生を重んぜよ、生を重んずれば則ち利輕し。中山公子牟曰く、之を知ると雖も、未だ勝つこと能はずと。瞻子曰く、自ら勝つこと能はずんば則ち從へ、神惡むこと無からんか。自ら勝つこと能はずして、强ひて從はざるものは、此を之れ重傷と謂ふ。重傷の人は壽の類無しと。魏牟は萬乘の公子なり、其の巖穴に隱るゝや、布衣の士よりも爲し難し。未だ道に至らずと雖も、其の意ありと謂ふべし。

【大意】魏の公子牟と瞻子との問答を叙し外物を超越して眞性を全くするの術を說く。

【通釋】中山の公子牟が魏の賢人瞻子に向つて曰つた。「此の吾が身は江海に浮かんで世を避けながら、心は猶ほ宮中に居た頃の榮華を慕つて忘れることが出來ない。如何にしたらよいでせうか」。瞻子は對へて「たゞ生命の貴きことを知つて之を重んじなさい。生命の尊貴なることを知れば榮利は自然と輕くなつて心を奪はれることはありますまい」と曰つた。公子牟は更に言つた。「自分もさういふことは心得てゐるけれども、まだ利欲の念に打ち勝つことは出來ないのだ」。瞻子はそこで答へた。「あなたが自分で情欲の念に打ち勝つことが出來なければ、姑く心の欲する所に從ひなさい。さうすれば精神の惡み厭ふ所なく心を害することはあるまい。榮華を慕ふ情欲に自ら打ち勝ち得ないのは既にあなたの心に對して一傷であるのに、それに又强ひて榮利の情に打ち勝たうとするのは又一傷である。これを重傷といふのである。重傷の人に限つて長命する者はない」。思ふに公子牟はさすがに萬乘の大國たる魏の公

ことを欲しないのであります」と。孔子は之を聞いてさも感動した如く顏色を變じて言うた。「あゝ結構な事だ。お前の意中は誠に見上げたものだ。俺はこんな事を聞いたことがある。足るを知る者は利欲の爲めに累はされず、眞に自ら得る所のある者は、富貴爵祿といふやうな外物を失つても懼れず、十分精神の修養の出來た者は地位なんか無くとも少しも怍ぢ憚ることが無いといふことである。俺は此の立派な言を誦することは既に久しいことであるが、今お前が丁度之に當つてゐることが解つた。これは全く俺が得る所があつたといふべきである。

語釋　回來(王引之曰く「來は句中の語助なり」と。しかし顏回は孔子の最愛の弟子であつて、其の身を思うて仕官を勸める時だから、回に向つて「ヅット近寄つて前の方へお出で」といふ意味に解した方が適當であらう。)　○粥飦(飦は釋文に或は饘に作る。廣雅に云ふ「糜なり」と。家語に曰く「厚粥なり」と。今は飦と粥と通用す。)　○郭外之田、郭内之田(林希逸曰く「郭外は田なり。郭内は圃なり。顏子未だ必ずしも有らず。莊子の言も亦未だ必ずしも信ずべからず」と。蓋し論語に見ゆる顏子は赤貧洗ふが如き境遇に安住したのである。斯の文の如く顏子が兎に角衣食に足つたといふ事は直ちに信ずることは出來ない。)　○愀然(釋文に曰く「一本欣に作る」と。愀は音秋、又悄と通ずといふ。集韻に「容色變ずるなり」といふ。感動して顏の色を變へる貌であらう。)

中山公子牟謂瞻子曰、身在江海之上、心居乎魏闕之下。奈何。瞻子曰、重生。重生則利輕。中山公子牟曰、雖知之、未能勝也。瞻子曰、不能自勝則從、神無惡乎。不能自勝而強不從者、此之謂重傷。重傷之人、無壽類矣。魏牟萬乘之公子也、其隱巖穴也、難爲於布衣之士。雖未至乎道、可謂有其意

之、知足者、不以利自累也。審自得者、失之而不懼。行修於内者、無位而不作。丘誦之久矣。今於回而後見之。是丘之得也。

訓讀 孔子顔回に謂つて曰く、回來れ、家貧しく居卑し、胡ぞ仕へざるやと。顔回對へて曰く、仕を願はず、回、郭外の田五十畝あり、以て飦粥に給するに足る。郭内の田十畝、以て絲麻を爲るに足る。琴を鼓すれば以て自ら娯しむに足り、夫子に學ぶ所の道は、以て自ら樂しむに足れり。回、仕を願はずと。孔子愀然として容を變じて曰く、善い哉、回の意や。丘之を聞く、足るを知るものは、利を以て自ら累はさず。自得を審かにするものは、之を失うて懼れず。行、内に修まるものは、位無くして怍ぢずと。丘之を誦すること久し。今、回に於て後之を見る。是れ丘の得なりと。

大意 顔回は貧賤に安んじて道を樂み、仕官を願はない。孔子之を見て大に稱せられたことを叙す。

通釋 孔子が顔回に向つて「回よもつと前に進みなさい。お前は家は貧乏で位地も卑いのだがなぜ仕へないのか」と云つた。顔淵が答へて申すには、「私は仕官することを願ひません。實は私には城外に田地を五十畝所有して居りますから、これで十分お粥位は啜れます。又城内には宅地を十畝持つてゐますから、こゝに麻や桑を植ゑて十分着物を作ることが出來ます、又毎日琴を彈いて自ら樂しむことも出來ますし、更に又先生から教授して頂いた道を學びまして自ら欣々として樂しみ安んずることが出來ます。是れ以上何をも要求致しません。ですから私は仕へる

十年間も衣一枚作ることが出來なかつた。そのために冠を正すと纓が古くて切れてしまひ、襟をとり繕ふと衣がぼろ／＼ですぐに肘があらはれ、履を穿けば踵の所が壞れるといふ有樣であつた。しかも其の破れ履をひつかけて足をひきずりながら、商頌の詩を吟ずれば、其の聲は大きく且つ淸くして天地に滿ち亙り、宛も金石から出る聲音の如く瀏喨たるものであつた。斯くの如く貴賤貧富を超越し悠々として物外に自適してゐたゝめに、天子も臣として使ふことが出來ず、諸侯も友として之と交はることが出來なかつた。思ふに心性を養ふ者は形體を超越して口體のために其の志を挫くことなく、形體を養つて生命を尊ぶ者は利欲に超然たることを得、眞に道を體得した者は、心知の働きを忘れ、而かも無爲にして隨所に適應し得るものである。

語釋　顔色腫噲（腫噲の譯は古來諸說一定しない。釋文に司馬は「剝錯なり」と云ひ、王は「熱盛常ならざるの貌」と云ふ。郭慶藩は「噲は疑ふらくは字當に瘡と爲すべし。病甚し」と云ふ。論語にも曾子有レ疾「泰伯篇」など、曾子の病氣の事を述べてゐるが病名は判然しない。此の腫噲も曾子は貧困に起臥してゐる者だから、營養不良などによつて顔色青く腐肉が浮き上つて膨「フク」れてゐる位に解してよいと思ふ。）　○曳縰（成疏に曰く「縰は躧「フム」なり」。林希逸は「杖曳して行くなり」と云ふ。）　○商頌（詩經の中にある殷の湯王の聖德を譽めた詩篇である。頌とは詩經關雎の字に依れば「盛德の形容を美し、其の成功を以て神明に告ぐる者なり」と云つて祖廟に於て歌ふ詩である。）

孔子謂二顔回一曰、回來、家貧居卑、胡不レ仕乎。顔回對曰、不レ願レ仕。回有二郭外之田五十畝一。足三以給二飦粥一。郭內之田十畝、足三以爲二絲麻一。鼓レ琴足三以自娛一、所レ學二夫子之道一者、足三以自樂一也。回不レ願レ仕。孔子愀然變レ容曰、善哉回之意。丘聞

を以て行を爲る」と。郭慶藩曰く「華に樸「アフチ」なり」と。）　○縱履（釋文に「亡云ふ縱履は履の踵「クビス」無きを謂ふと」。林希逸曰く「縱履は其の履を曳くなり」と。）　○希レ世而行（釋文に「司馬云ふ、希は望なり。行ふ所常に世譽を顧みて働くと」。林西仲曰く「言は其の行ふ所を以て世に媚びるなり」と。）　○仁義之慝（林西仲曰く「仁義を假て以て姦を文「カザル」なり」。卽ち仁義の名に託して邪惡を行ふことである。）

曾子居レ衞。縕袍無レ表、顏色腫噲、手足胼胝。三日不レ擧レ火、十年不レ製レ衣、正レ冠而纓絕、捉レ衿而肘見、納レ履而踵決。曳レ縰而歌二商頌一。聲滿二天地一、若レ出二金石一。天子不レ得レ臣。諸侯不レ得レ友。故養レ志者忘レ形、養レ形者忘レ利、致レ道者忘レ心矣。

訓讀　曾子、衞に居る。縕袍表なく、顏色腫噲し、手足胼胝す。三日火を擧げず、十年衣を製せず、冠を正せば纓絕ち、衿を捉れば肘見え、履を納るれば踵決す。曳縰して商頌を歌ひ、聲天地に滿ち、金石より出づるが若し。天子も臣とするを得ず。諸侯も友とするを得ず。故に志を養ふものは形を忘れ、形を養ふものは利を忘れ、道を致すものは心を忘る。

大意　曾子の貧窮に處してしかもよく貧窮に安舒たるを叙し、以て修養の段階に從つてよく對象を超越し得ることを說く

通釋　曾子が衞に居た時甚だ貧窮のドン底に陷ちてゐた。表の破れた綿入のドテラを着、榮養不良のため顏は水ぶくれに腫れ上り、手足はひゞや赤ぎれに荒れ果てゝしまひ、三日間も炊くために火をつけなかつたこともあり、

の戸は蓬で作つた不完全なものであり、しかも桑の小枝を樞となし、破れ甕で以つて牖を造つた部屋が夫婦一つづゝ。其の牖は粗末な布で塞いであつて、上は雨が漏り、下はじめ〳〵としてゐて誠に見るに堪へざるあばら屋であつた。しかし原憲は其の中に平然と正坐して琴を彈じてゐた。ある時同門の子貢が肥え太つた駿馬に乘つて、中側は紺で外側は白で塗つた立派な軒蓋の中にをさまつて訪ねて來たが、大きな大夫用の車は路が狹くて這入らない子貢は乃ち車を下りて歩いて行つて原憲の門に到つて面會を求めた。原憲は取次もないから、自分自ら樗の木皮で作つた冠を戴き、破れ履をひつかけ、藜の杖をつきながら門に出で子貢を迎へた。子貢は原憲の其の衰へた有樣を見て「まあ先生はどうしてこんなに病み疲れた樣子をして居られますか」と不憫さうに尋ねた。原憲は對へて、「私が聞く所によりますと、財のない者を貧といひ、學んで行ふことの出來ない者を病といふさうです。私は貧乏はしてゐますが、學んだ事を怠つて病み疲れてはゐません」と曰つた。子貢は斯ういはれて何だかもぢ〳〵して頗る愧ぢ入つた顏色をした。原憲は笑ひながらに言葉をついで「かの世俗に投じ世人の好むやうな行をし、徒黨を組んで相ひ交際し合ひ、學問しても眞に自己のためにせずして人のためにし、人を敎へても眞に道のためにせずして利己のためにし、仁義の蔭にかくれて姦惡を働き、車馬を飾つて人に矜ることは、現代の風潮にして人の希望するところであるが、私だけはそんな事をするに忍びないのです」と言ひ聞かした。

【語釋】環堵之室（庚桑楚篇に見ゆ。小室を謂ふ。成疏に曰く「方丈の室の如きなり」と。）○茨以生草（釋文に「李云ふ、茨は屋を蓋ふなり」と。郭慶藩曰く「生とは新生未だ乾かざるの草を謂ふ」。）○爲塞（釋文に「司馬云ふ、褐を以て牖を塞ぐなり。蓋し支那の陋屋は多く土造りなるを以て布を以て隙を塞ぐことはない。牖にかけたことをいふであらう。」）○匡坐而弦（釋文に「司馬云ふ、匡は正なりと。」案ずるに弦は弦歌を謂ふ。）○華冠（釋文に曰く「華木の皮

原憲華冠縱履、杖藜而應門。子貢曰、嘻先生何病。原憲應之曰、憲聞之、無財謂之貧、學而不能行謂之病。今憲貧也、非病也。子貢逡巡而有愧色。原憲笑曰、夫希世而行、比周而友、學以爲人、敎以爲己、仁義之慝、輿馬之飾、憲不忍爲也。

訓讀 原憲、魯に居る。環堵の室、茨くに生草を以てす。蓬戸完からず、桑以て樞と爲し、而して甕牖の二室、褐以て塞ぐことを爲す。上漏り、下濕ふ。匡坐して弦す。子貢、大馬に乘り、紺を中にし素を表にす。軒車巷に容らず。往いて原憲を見る。原憲華冠縱履し、藜を杖いて門に應ず。子貢曰く、嘻先生何をか病むと。原憲之に應へて曰く、憲之を聞く、財無き之を貧と謂ひ、學んで行ふこと能はざる之を病と謂ふ。今、憲は貧なり、病に非ざるなりと。子貢逡巡して愧色あり。原憲笑つて曰く、夫れ世に希うて行ひ、比周して友とす。學ぶは以て人の爲めにし、敎ふるは以て己の爲めにす。仁義の慝、輿馬の飾は、憲、爲すに忍びざるなりと。

大意 原憲の赤貧に處して其の身性を忘れざるを叙し、更に之に比較して子貢の外物に牽かれ富貴を誇ることの愧づべきを說く。

通釋 孔子の弟子原憲が魯に居たとき、其の住ひは所謂方丈の室であつて、刈り立ての生草で屋根を葺き、門も

にお隨ひ申した譯ではありません。今大王は國法を廢し、天下への公約を破つて些の功績もない私などに謁見下さるのは、其の價値のない私ですから、却つて私の名が天下に聞える所以ともなりません」と。昭王は大に感心して司馬子綦に向つて「あの說は下賤の身でありながら天下の大義を說くこと甚だ優れてゐる。汝は予の爲めに彼を招致して三公の位を與へよ」と命じた。然るに說は又、「三公の位は屠羊の業よりも貴く、萬鍾の俸祿は屠羊の利よりも遥かに大きいことは私もよく承知してをります。然し無功の私が爵祿を貪つて、そのために吾が君をして手柄のない者に無暗に爵祿を施すといふ汚名を蒙らしめることが出來ませうや、そんな事は出來ません。故に私は敢へて三公の位もお受けしないのです。どうか元の屠羊の肆に歸して下さい」と云つて、遂に飽くまで固辭して受けなかつた

語釋　楚昭王失レ國（成疏に曰く「昭王名は軫、平王の子なり。伍奢伍尚平王の誅戮に遭ひ、子胥吳に奔りて野に耕す。後吳王闔閭の世に至り、兵を請うて楚を伐ち郢に入り、以て父の讐を雪ぐ其の時昭王窘急し、棄て走りて隨に奔り又鄭に奔る」と。）

○子其爲レ我（一本に其は綦に作る。兪氏曰く「是昭王自ら司馬子綦に言ふ。常に子と稱すべし。子綦と稱すべからず。綦の字は衍文なり」と。）　○三旌之位（釋文に曰く「三旌は三公なり。司馬本三珪に作りて云ふ。諸侯の三卿皆珪を執るを謂ふなり」と。林希逸曰く「三旌は三公なり。三公の車服は各々旌別有り。故に三旌と曰ふ」と。）

原憲居レ魯。環堵之室、茨以二生草一。蓬戸不レ完、桑以爲レ樞、而甕牖二室、褐以爲レ塞。上漏下濕。匡坐而弦。子貢乘二大馬一、中レ紺而表レ素。軒車不レ容レ巷。往見二原憲一。

に謂つて曰く、屠羊說、居處卑賤なれども義を陳ぶること甚だ高し。子其れ我が爲に之を延くに三旌の位を以てせよと。屠羊說曰く、夫れ三旌の位は、吾れ其の屠羊の肆より貴きを知れり、萬鍾の祿は、吾れ其の屠羊の利より富むを知れり。然れども豈に爵祿を貪るを以て、而して吾が君をして妄施の名あらしむべけんや。說敢へて當らず。願はくは復た吾が屠羊の肆に反らんと。遂に受けず。

大意 屠羊說のよく本分を守つて、非義の富貴を貪り、外物に心を奪はれざるを敘し前數節の意を補說す。

通釋 楚の昭王は吳の軍に敗られて國を棄てゝ逃げた。羊を屠殺するのを生業としてゐた說なる者が、王に隨從して歩いた。昭王が再び國を奪ひ返して立ち歸るや、其の敗亡の時に扈從した者を賞せんとして、愈ゝ說の番になつた時、彼は之を受けないで次の如く曰つた。「大王が國を失ひ給へば、私も屠羊の業を失ひ、大王が國を復してお歸りになれば、そのお蔭で私も屠羊の業に反ることが出來ましたやうな譯で、私の爵祿は最早元通りに復したわけですから、この上賞せられる筈はありますまい」。しかし昭王は命じて無理に受けさせんとした。そこで說は又答へた。「大王が國を失はれたのは私の罪でないから、敢へて其の誅罪などには服しません。其の理の如く、大王の國に反られたのは何も私の功ではないから、敢へて其の賞を受くべき理由はありません」。昭王は已むなく、「しからば一度面會をしよう」と云つた。說は答へた。「楚の國法によれば重賞大功が有つて後初めて王に見ゆることが出來ます。今私の知慧では楚國の危急を救つて存在せしめることも出來ないし、又私は寇敵と戰つて君の馬前に討死する程の勇氣もありません。吳の軍が郢に攻め入つた時は、私は難を畏れて敵を避けて逃げたのみで、殊更に大王

而避寇。非故隨大王也。今大王欲廢法毀約而見說。此非臣之所以聞天下也。王謂司馬子綦曰、屠羊說居處卑賤、而陳義甚高。子其爲我延之以三旌之位。屠羊說曰、夫三旌之位、吾知其貴於屠羊之肆也、萬鍾之祿、吾知其富於屠羊之利也。然豈可以貪爵祿、而使吾君有妄施之名乎。說不敢當。願復反吾屠羊之肆。遂不受也。

訓讀　楚の昭王、國を失ふ。屠羊說、走つて昭王に從ふ。昭王國に反り、將に從ふ者を賞せんとし、屠羊說に及ぶ。屠羊說曰く、大王國を失へば、說屠羊を失ひ、大王國に反れば、說も亦屠羊に反る。臣の爵祿已に復す。又何の賞をか之れ有らんと。王曰く、之を強ひよと。屠羊說曰く、大王國を失ふも、臣の罪にあらず、故に敢へて其の誅に伏せず。大王、國に反るも、臣の功にあらず、故に敢へて其の賞に當らずと。王曰く、之を見んと。屠羊說曰く、楚國の法、必ず重賞大功あつて而る後見ゆることを得。今、臣の知、以て國を存するに足らず、而して勇、以て寇に死するに足らず、吳軍、郢に入りしとき、說、難を畏れて寇を避けしのみ。故に大王に隨ひしにあらざるなり。今大王、法を廢し約を毀りて說を見んと欲す。此れ臣の、天下に聞ゆる所以に非ざるなりと。王、司馬子綦

俺の爲人を知つて食料を下さるのならばよいが、君は人の言を聞いて始めて穀物を贈つて下さつたのだ。人の言に依つて動くやうな君だから、若し反對に俺を讒言する者でもあれば、君は又其の言に耳を傾けて俺を罪するやうになるであらう。だから受けないのだ」。其の後果して鄭の民は亂をなして子陽を殺した。列子は其の難を免るゝことを得た。

語釋 其妻望レ之而拊レ心（望は怨貴の意であろ。「ウラム」と訓ず。又視貴に通ず。拊は撫なり、擊なり。拊心は胸をさすつて飢渴の苦痛を訴へること。） ○君過而云々（陸樹之曰く「引いて己の罪と爲すを謂ふなり」。君が賢人を用ひざるを以て己の過となすのである。） ○民果作レ難而殺二子陽一（釋文に曰く「子陽嚴酷、罪ある者赦すことなし。舍人弓を折る。子陽の怒り責めんことを畏れ、國人の猘狗「狂犬なり」を逐ふは因りて子陽を殺す」と。兪樾は史記鄭世家を引いて曰く「繻公二十五年鄭公其の相子陽を殺す。二十七年子陽の黨共に繻公駘を弑すと。又諸書と同じからず」と。）

楚昭王失國。屠羊說走而從於昭王。昭王反國、將賞從者、及屠羊說。屠羊說曰、大王失國、說失屠羊、大王反國、說亦反屠羊。臣之爵祿已復矣。又何賞之有。王曰、強之。屠羊說曰、大王失國、非臣之罪。故不敢伏其誅。大王反國、非臣之功。故不敢當其賞。王曰、見之。屠羊說曰、楚國之法、必有重賞大功而後得見。今臣之知不足以存國、而勇不足以死寇。吳軍入郢、說畏難

【訓讀】子列子窮す、容貌飢色あり。客の之を鄭の子陽に言ふものあり。曰く、列禦寇は蓋し有道の士なり。君の國に居つて窮す。君乃ち士を好まずとせらるゝ無からんやと。鄭の子陽卽ち官をして之に粟を遺らしむ。子列子使者を見、再拜して辭す。使者去る。子列子入る。其の妻之を望みて心を拊つて曰く、妾聞く、有道者の妻子となれば、皆佚樂を得と。今饑色あり、君、過てりとして先生に食を遺る。先生受けず。豈命ならずやと。子列子笑つて之に謂つて曰く、君自ら我を知るにあらざるなり。人の言を以てして我に粟を遺れり。其の我を罪するに至るや、又且に人の言を以てせんとす。此れ吾が受けざる所以なりと。其の卒りに民果して難を作して子陽を殺せり。

【大意】列子のよく人事に處するの賢を述べ、輕卒に物に走ることを警め、生の重んずべきを說く。

【通釋】列子が貧窮の極、すつかり飢え疲れた顏色をしてゐた。或る人が之を見て列子の有樣を鄭の宰相の子陽に話して更に次の如く述べた。「恐らく列子は有道の立派な人でありませう。然るに今君の國に居てあの如く窮迫し切つてゐます。君がこのまゝにしておかれますと、人々から君は賢士を好まないのだとせらるゝかも知れません」子陽は早速倉庫を掌る役人を遣つて列子に穀物を贈らしめた。列子は使者を引見して再拜して其の厚意を謝したが、穀物は辭退してしまつた。使者が歸つて列子が室に入つて來ると、其の妻は怨めしさうに列子を見やつて、胸をさすり哀願する如く云つた。「妾は嘗て有道者の妻となれば、何れも佚樂が得られると聞いて居ります。今あなたの貧困の有樣を見て、君主の方から態々自分の過として、食料を遺られたのに、あなたはお受けになりません。そしてこんなに苦しみますのは誠に果敢ない運命ではありませんか」。列子は笑ひながら妻に向つて答へた。「國君が自ら

使者を欺く。○兪樾曰く「上の者の字は衍文。恐謬而遺使者罪。其の誤聽を以て罪を得るを恐るゝなり。聽は即ち使者、之を聽く聽者一人、使者一人に非ず」と。） ○緒餘（釋文に「司馬及び李云ふ、緒は殘なり、殘餘ろ謂ふなり」と。） ○土苴（釋文に「李云ふ、土苴は糟魄なり。皆眞物ならざるなりと。司馬云ふ、土苴は糞草のかきなり」と。） ○帝王之功云云（陸樹之曰く「循注に、此の數語は莊子自ら道ふの辭、常人說き出ださずと。今呂氏春秋に見ゆ、不韋は莊子を去ること未だ遠からず、必ず其の眞を得ん」と。）

○必察其所以之與其所以爲（釋文に「王云ふ、所以之は德の加はる所の方を謂ひ、所以爲は物を待つ所以を謂ふなり」と。林希逸曰く「所以之は往く所以なり。所以之、所以爲は兩句只一意なり」と。蓋し行動せんとするに當つて先づ其の心の向ふ所、其の爲さんとする所以を靜かに觀察する意か。） ○隨侯之珠（成疏に曰く「隨國は濮水に近し、濮水寶珠を出す、即ち是れ靈蛇の銜みて以て恩に報ずる所にして、隨侯之を得る者なり。故に之を隨侯の珠と謂ふ」と。） ○豈特隨侯之重哉（兪樾曰く「隨侯の下當に珠の字有るべし、若し珠の字無くんば文義足らず、呂氏春秋貴生篇に「夫生豈特隨侯珠之重也哉」に作る。當に據りて補ふべし」と。）

子列子窮、容貌有飢色。客有言之於鄭子陽者曰、列禦寇蓋有道之士也。居君之國而窮。君無乃爲不好士乎。鄭子陽即令官遺之粟。子列子見使者、再拜而辭。使者去。子列子入。其妻望之而拊心曰、妾聞、爲有道者之妻子、皆得佚樂。今有饑色、君過而遺先生食。先生不受。豈不命邪。子列子笑謂之曰、君非自知我也。以人之言而遺我粟。至其罪我也、又且以人之言。此吾所以不受也。其卒民果作難而殺子陽。

んな贈物を下さる譯がない。若し俺がうつかり頂戴などしますと、お使の方が聽き誤りの罪でも蒙ることになります。どうかもう一度よく取調べて頂きたい」と云つた。使者は立ち歸つて其の事の間違ひでないのを確め、更に來つて顏闔に面會しようとしたが、其の時は顏闔は既に逃れて居なかつた。此の事から推すと顏闔は浮雲の如き富貴を求め慕ふ心を惡んだものである。故に古い諺にも「道の眞髓でもつて自分の身を治め、其の殘りの屑でもつて國家を治め、其の又殘りの粕で天下を治むるのだ」と云つてゐる。此に由つて考へると、帝王の天下を治平するといふ仕事も全く聖人の餘事にすぎない。天下統治のために身心を勞するのも、其の身を完うし、生を養ふ所以ではない。然るに現今の所謂る君子といふ人は、多く自己の身を危險にさらし、其の生命を棄てゝまでも、外物のために煩はされ、富貴を追ひ求めてゐる。誠に悲しむべきことではないか。凡そ聖人の行爲動作を見ると、其の心の向かふ所、其の爲すべき所などを良く觀察して行ふから、事の本末輕重を誤まるやうな事はない。今こゝに人があつて、天下の名珠たる隨侯の珠を投げて、千仭の高い所に居る雀を擊つたとしたならば、必ず世人は其の愚を笑ふであらう。何故ならば、つまらぬ一小雀を求めんとして、非常に貴重な寶珠を用ふるがためである。此の天から授つた生は、其の貴重さに於いては、隨侯の寶珠の比などではない。然るに此の無上の貴い生命を外物のために損傷するなどゝは誠に情けないことではないか。

【語釋】顏闔（成疏に曰く「姓は顏、名は闔、魯人、隱者なり。顏闔の清廉の道を得るを聞き、之を召して相と爲さんと欲す。故人を使はし幣帛を齎し持して、先づ其の意を通ぜしむ」と。）　○陋閭（閭は閻と同じ。卽ちいぶせき家をいふ。）　○苴布之衣（成疏に曰く「苴布は子麻の布なり」と。子麻は雌麻にして、秋に刈る。其の質は硬にして潔白ならず、喪服には之を用ふ。卽ち粗末な衣である。）　○恐聽者謬而遺二使者罪一（成疏に曰く「幣を授くることを欲せず、此の矯詞を致して以て

【訓讀】魯君、顏闔の道を得るの人たるを聞き、人をして幣を以て先んぜしむ。顏闔、陋閭を守り、苴布の衣にして自ら牛に飯す。魯君の使者至る、顏闔自ら之に對す。使者曰く、此れ顏闔の家かと。顏闔對へて曰く、此れ闔の家なりと。使者幣を致す。顏闔曰く、恐らくは聽く者の謬つて、使者の罪を遺さんことを。之を審にせんには若かずと。使者還り反つて之を審にし、復た來つて之を求むれば、則ち得ざるのみ。故に顏闔の若きものは、眞に富貴を惡むなり。故に曰く、道の眞は以て身を治め、其の緒餘以て國家を爲め、其の土苴以て天下を治むと。此に由つて之を觀れば、帝王の功は、聖人の餘事なり、身を完うし生を養ふ所以に非ざるなり。今、世俗の君子、多く身を危うし生を棄てゝ以て物に殉ふ。豈に悲しからざらんや。凡そ聖人の動作は、必ず其の之く所以と、其の爲す所以とを察す。今且此に人あり、隨侯の珠を以て、千仞の雀を彈かば、世必ず之を笑はん。是れ何ぞや。則ち其の用ふる所の者重くして、要むる所の者輕ければなり。夫れ生なるものは豈に特隨侯の重きのみならんや。

【大意】得道の人顏闔の事跡を述べ、今の君子の輕重を知らず、生を害うて富貴に殉ずるの愚を悲み論ず。

【通釋】魯の君哀公は隱者の顏闔が得道の人であると聞き、之を招聘せんとして、先づ使者を遣はし、贈物をもたらして其の意を通ぜしめた。顏闔はみすぼらしいいぶせき家に住み、粗末な布の衣を著て自ら牛に飼料を與へてゐた。そこへ魯君の使者がやつて來たので、顏闔自ら之に應接した。使者は「此れが顏闔といふお方の宅ですか」と尋ねた。顏闔は「左樣です」と答へた。使者は魯君からの贈物を差出して其の挨拶をした。顏闔は十分魯君の意のある所を悟つたけれども、其の招きに應ずることを欲しないために、「それは多分何かの間違ひでせう。私などにこ

又其の次なり」と。）

魯君聞顏闔得道之人也、使人以幣先焉。顏闔守陋閭、苴布之衣而自飯牛。魯君之使者至、顏闔自對之。使者曰、此顏闔之家與。顏闔對曰、此闔之家也。使者致幣。顏闔曰、恐聽者謬而遺使者罪。不若審之。使者還反審之、復來求之、則不得已。故若顏闔者眞惡富貴也。故曰、道之眞以治身、其緖餘以爲國家、其土苴以治天下。由此觀之、帝王之功、聖人之餘事也、非所以完身養生也。今世俗之君子、多危身棄生以殉物、豈不悲哉。凡聖人之動作也、必察其所以之、與其所以爲。今且有人於此、以隨侯之珠、彈千仞之雀、世必笑之。是何也。則其所用者重、而所要者輕也。夫生者豈特隨侯之重哉。

の高かい子華子が、魏の君、昭僖侯に見えたところが、昭僖侯は戰爭の事を氣にして如何にも浮かぬ顏をしてゐた。そこで子華子は昭僖侯に向つて話かけた。「今試みに天下の人をして君の面前で誓約書を書かしめたとしませう。其の誓約書の辭に次の如く書いてあります。左手で此の誓約書をつかめば右手は斷たれ、右手で之をとれば左手が斬り斷たれる。それでもよく之をつかみ得る者は必ず天下を所有することにしようと。如何でございます、それでも君は此の誓約書をお取りになりますか」と。昭僖侯は「そんな條件では私はその銘を取るのはいやです」と答へた。すると子華子が曰ふには「誠に結構です、ご尤もと存じます。君の今のお答へに依つて考へて見ますと、君の兩臂は天下よりも大切であり、お身體は又兩臂よりも更に大事であります。そうして一方韓の一國は天下より遙かに輕いものであり、今君が魏と爭つてゐる境上の一部などは韓一國に比すれば、更に又輕いものであります。然るに君は今拜見する如く、身を愁へ生を害ふてまでかの一小地を失はないやうにと心配して居られます。實にどうもつまらぬことではありませんか」。昭僖侯之を聞いて「成程善いことを言つてくれた。今迄種々と私に敎へた者は澤山有るが、まだ嘗てこんな善いことを聞かしてくれたものはない」と曰つて翻然と悟る所があつた。實に子華子は物の輕重をよく知つた者と謂ふべきである。

語釋　子華子（同馬云ふ「魏人なり」。兪樾は呂覽の貴生篇誣徒篇を引いて曰く「高注竝に云ふ子華子は古の道を體するの人なり」と。）　○昭僖侯（司馬云ふ「釐侯なり」と。兪樾曰く「韓に昭侯有り、僖公有りて昭僖侯無し」と。陸樹之曰く「魏侯なり」と。蓋し子華子は魏の賢人で、昭僖侯に仕えて呼ぶに「君」を以てし、昭僖侯も亦其の言に耳を傾けた事と、兪樾の說とを照合して昭僖侯を魏候とするのか正しくないとか思ふ。）　○攫（成疏に曰く「攫は捉取なり」。釋文に曰く「取なり」と。）　○廢（成疏に曰く「廢は之を斬り去るなり」と。）　○寡人不攫也（成疏に曰く「答へて云ふ、兩臂を斬りて六合を取る能はざるなり」と。）　○善哉云云（呂註に曰く「昭僖侯能く子華子の言を用ひ、其の爭ふ所を輕くするも、天下を以て生に易へざる者に於ては

攫之者、必有天下。君能攫之乎。昭僖侯曰、寡人不攫也。子華子曰、甚善。自是觀之、兩臂重於天下也、身亦重於兩臂。韓之輕於天下亦遠矣。今之所爭者、其輕於韓又遠。君固愁身傷生、以憂戚不得也。昭僖侯曰、善哉、敎寡人者衆矣。未嘗得聞此言也。子華子可謂知輕重矣。

訓讀　韓魏、相與に侵地を爭ふ。子華子、昭僖侯に見ゆ。昭僖侯憂色あり。子華子曰く、今、天下をして銘を君の前に書せしめん。書の言に曰く、左手之を攫めば則ち右手廢し、右手之を攫めば則ち左手廢せん、然かも之を攫むものは、必ず天下を保たんと。君能く之を攫まんやと。昭僖侯曰く、寡人攫まざるなり。子華子曰く、甚だ善し。是によつて之を觀れば、兩臂は天下より重きなり、身亦兩臂より重し。韓の天下より輕きこと亦遠し。今の爭ふ所のものは、其れ韓より輕きこと又遠し。君、固に身を愁へ、生を傷りて、以て得ざるを憂戚するや。昭僖侯曰く、善いかな、寡人に敎ふるもの衆し。未だ嘗て此の言を問くことを得ざりしなりと。子華子は輕重を知ると謂ふべし。

大意　子華子が昭僖侯に說いた例話を述べ、前章を受けて生を貴び物の輕んずべきこと强調す。

通釋　韓と魏は相隣接してゐるために、互に兵を起して境上の地を侵略し合つてゐた。魏の賢人として其の名

逃れて山中の丹穴に匿れてしまつた。越の國では君主が無くなつたので、王子を索ね探かしたが容易に見つからなかつた。それでもやつと丹穴に尋ねあて、王子を連れ歸らうとしたが、王子は出ようとしない。越の人々は已むなく、艾を薰べて穴の中へ煙を送つて王子を追ひ出し、無理に國王の輿に乘せようとした。王子は仕方なく綏をとつて車に登り、天を仰いで歎息して曰ふには、「君主か、君主か、遂に私も君主にならなくてはならぬのか。天帝よ、獨り私を舍てゝ君となることを免れさしては下さいませんか」と。思ふに王子搜は君主となることを嫌惡したのではない。君と爲つて前三代の如く弑虐の災に遭ひ、國の亂れるのを見るといふ君主となるが爲に著きまとふ災患をいやがつたのである。實に彼れ王子搜の如きは生を貴んじ、國君たると云ふ富貴のために其の生命を傷めない者といふべきであらう。此の點が即ち越人から切に仰がれて君主に推された所以である。

語釋　王子搜（兪樾曰く「釋文に云ふ、搜は作翳子に翳に作ると。然れども翳の前に三世君を弑するの事なし。史記越世家索隱に、搜を以て翳の子無顓「せん」と爲す。竹書紀年に據るに、翳は其の子の爲に弑さる、越人其の子を殺して無余を立つ、又弑さる。而して無顓を立つ。是れ無顓以前三君皆終を善くせず、則ち王子搜は是れ無顓の異名なること疑ひなし。淮南子は蓋し傳聞の誤りならん。當に索隱に據りて訂正すべし」と。）　○丹穴（釋文に「爾雅に云ふ南に日を戴くを丹穴と爲す」と。成疏に曰く「丹山の洞なり」と。）　○援レ綏（成疏に曰く「援は引なり、綏は車上の繩なり」と。綏は卽ち車に上る時に挽く索である。）　○呼（釋文に曰く「本或は歎に作る」と。）

韓魏相與爭侵地。子華子見昭僖侯。昭僖侯有憂色。子華子曰、今使天下書銘於君之前。書之言曰、左手攫之則右手廢、右手攫之則左手廢、然而

傷レ身不三以レ利累二形（釋文に「王云ふ、富貴は養有り、而かも味養を以て身を傷らず、貧賤利なし、而かも利を求むるを以て形を累さゞるなり」と。）

越人三世弑二其君一。王子搜患レ之。逃二乎丹穴一、而越國無レ君。求二王子搜一不レ得。從二之丹穴一。王子搜不レ肯レ出。越人薰レ之以レ艾、乘以二王輿一。王子搜援レ綏登レ車、仰レ天而呼曰、君乎君乎、獨不レ可三以舍二我乎一。王子搜非レ惡レ爲レ君也。惡二爲レ君之患一也。若二王子搜一者、可レ謂レ不下以レ國傷上レ生矣。此固越人之所レ欲レ得爲レ君也。

訓讀　越人、三世其の君を弑す。王子搜之を患へ、丹穴に逃れて、越國、君なし。王子搜を求むれども得ず、之に丹穴に從ふ。王子搜出づるを肯んぜず。越人之を薰するに艾を以てし、乘するに王輿を以てす。王子搜綏を援りて車に登り、天を仰いで呼んで曰く、君か君か、獨り以て我を舍つへからざるかと。王子搜は君たるを惡むに非ざるなり。君たるの患を惡むなり。王子搜の若きものは、國を以て生を傷らずと謂ふべし。此れ固より越人の得て君となさんと欲する所なり。

大意　越の王子搜のよく輕重本末を知るを稱し以て生の大切なるべきを說く。

通釋　越人が三代つゞいて其の君を弑したので、繼いで立つべき王子搜は之を患へ、又弑害に遭はんことを懼れ、

よりむしろ自ら去つて戰爭の苦を免れしめんとして曰ふには、「人の兄と居て其の弟を戰ひのために殺したり、又人の父と一緒に居て其の子を驅り立て、戰爭のために殺すことは、到底俺のよく忍び得る所でない。お前等はどうか勉めて働いてゐてくれ、お前等が俺の臣となつてゐても、狄人の臣となつても生きてゐるには何の變りもあるまい、俺は戰爭をしてお前達を苦しませるに苦びない。且俺の聞く所によると、『元來土地といふものは物を生じて人間を養ふものだ、其の人を養ひ培つてくれる土地を爭つて、そのために人の生を害してはならない』と言ふではないかどうか皆元氣で暮して貰ひたい」と。遂に鞭を杖としてとぼ〳〵と自分の愛した土地邠を去つて行つた。邠の人々はこれを聞いて「仁人なり、失ふべからず」と云つてどし〳〵其の後を追つて從つた。そして岐山の麓におちついて又大王を仰いで立派な國を建てた。まつたく大王亶父の如き人こそ生を尊び重んずる人といふべきである。よく生を尊び大切にする者は、富貴に處して思ひのまゝになつても衣食聲色といふやうな外物のために其の身を傷害することはない、又貧賤に陷つても名利貪慾のために其の身に累を及ぼすやうなことはしない。然るに今の人を見ると全く困つたものだ。高位高官を得て榮爵にありついてゐる者は、みなびく〳〵して之を失はねばよいがといふことばかりを氣にし、名利のためには輕々しくも其の身を亡ぼして憚らないものが多いではないか。何と惑へるの甚しきものといふべきではないか。

語釋　大王亶父居㆑邠（大王は周の有名な文王の祖父仁德の君としてよく衆望を得た人である。邠は音「ヒン」地名である。今の邠縣の地の地なり。）○不㆘以㆑所㆓用養㆒害㆖㆑所㆑養（釋文に曰く「地は以て人を養ふ所なり。今爭つて以て人を殺せば、是れ地を以て人を害するなり。人は地に養はる。故に地の故を以て人を害せざるなり」と。成疏に云ふ「用養は土地なり、所養は百姓なり」と。）○筴、音は「サク」古くは策と同じに用ひられた。馬鞭である。）○不㆓以㆑養

身。豈不惑哉。

訓讀 大王亶父、邠に居る。狄人之を攻む。之に事ふるに皮帛を以てすれども受けず、之に事ふるに犬馬を以てすれども受けず、之に事ふるに珠玉を以てすれども受けず。狄人の求むる所のものは土地なり。大王亶父曰く、人の兄と與に居て其の弟を殺し、人の父と與に居て其の子を殺すは、吾れ忍びざるなり。子皆勉めて居れ、吾が臣たると、狄人の臣たると、奚を以て異ならん。且吾れ之を聞く、用つて養ふ所を以て、養ふ所を害せずと。因て策を杖いて之を去る。民相連れて之に從ひ遂に國を岐山の下に成せり。夫れ大王亶父は能く生を尊ぶと謂ふべし。能く生を尊ぶものは、貴富と雖も養を以て身を傷らず、貧賤と雖も利を以て形を累さず。今、世の人、高官尊爵に居るもの、皆之を失ふことを重かり、利を見ては輕ゝしく其の身を亡ふ。豈に惑はざらんや。

大意 本章は大王亶父の能く物を輕んじ生命を重んずるを叙し、榮利のために其の心身を害ふ者を啓發す。この章の事は孟子(梁惠王下篇)にも見ゆ。參照せよ。

通釋 賢德で有名な周の大王亶父が邠といふ所に居た時に、隣國の狄人が攻め寄せて來た。慈悲深い大王は戰爭をして人民を殺傷することを好まず、先づ毛皮や絹布を贈つて之に事へようとしたが受けない。今度は犬馬などの家畜を奉つたが之も受け入れない。そこで仕方がないから大切な珠玉を贈つて和を請ふたが、それでも肯き入れない。即ち狄人の要求する所は亶父の治めて居る土地であるからである。大王は已むなく戰ひをして其の民を苦しむ

語釋 善卷（釋文に「李云ふ、姓は善、名は卷と」。顧□曰ふ「呂覽下賢篇に善綣に作る」と。即ち呂覽下賢篇に曰く「堯は帝を以て善綣を□す。北面して焉（これ）に問ふ。堯は天子なり。善綣は布衣たり。何の故に之を禮する 此の若く其れ甚しきや。善綣は得道の士なればなり。」又今の常德府武陵縣南蒼山に善卷壇有りと云ひ、壇の近くに其の墳ありとも云つてゐる。蓋し隱者として相當に名のあつた人であらう。） ○葛絺（葛は「くず」といつて山野に自生する蔓草の一種で、莖の纖維を採つて布を織り帷子を作る。絺は葛の細い維で織つたものを云ふ。又葛布で仕立てた衣服を云ふ。即ち葛絺はくずで織つた帷子である。） ○收斂（收は「オサム」、斂は「内ニ仕舞ヒコム」意で、收穫して藏することである。） ○石戶之農（又釋文に「石戶と本亦后に作る。李云ふ、石戶は地名、名は農。農人なりと。」即ち舜の友人で名は農、石戶の人なり。） ○捲捲乎（釋文に「力を用ふる貌」とある。王先謙は注して「勤苦」と曰ふ。「せつせとして」、「あくせくとして」の意。） ○后之爲人（后は君なり。舊解多く舜を指す。王先謙は釋文の戶は亦后に作るを引いて、「此の后は自稱して我を言ふ」と解するも、從はず。） ○葆力（林希逸云ふ、「勤苦して力を用ふるなり」と。） ○夫負妻戴（妻戴は成疏に云ふ「古人物を荷するに、多く頭を用て戴く、如今高麗に猶此の風有り」と。京都の大原女を思ひ出す。）

大王亶父居邠。狄人攻之。事之以皮帛而不受、事之以犬馬而不受、事之以珠玉而不受。狄人之所求者土地也。大王亶父曰、與人之兄居而殺其弟、與人之父居而殺其子、吾不忍也。子皆勉居矣、爲吾臣、與爲狄人臣奚以異。且吾聞之。不以所用養害所養。因杖筴而去之。民相連而從之、遂成國於岐山之下。夫大王亶父可謂能尊生矣。能尊生者、雖貴富不以養傷身、雖貧賤不以利累形。今世之人、居高官尊爵者、皆重失之、見利輕亡其

に逍遙して、心意自得す。吾れ何ぞ天下を以て爲さんや。悲しいかな、子の余を知らざるやと。遂に受けず。是に於て去つて深山に入り、其の處を知ることなし。舜天下を以て其の友石戸の農に讓る。石戸の農曰く、捲捲乎たり、后の人たる、葆力の士なりと。舜の德を以て未だ至らずと爲すなり。是に於て夫負妻戴、子を攜へて以て海に入り、終身反へらざるなり。

大意 前節をうけて有道の人よく外物のために生を損せざるを說く。

通釋 舜が更に善卷なる者に天下を讓らうとしたが善卷は斷乎として之を斥けて答へた。「私は此の廣大なる宇宙の間に生を保ち、冬は皮や毛を纏つて寒さを防ぎ、夏は帷子を着て涼をとる。春夏の季節には播種耕作するが、身體は十分强くて其の働きに堪へ、秋は穀物を取入れて、こゝに衣食は足つて冬にかけて安らかに休養することが出來る。私の日常の生活は、曉天を仰いで鋤を擔いで出で〻働き、星を戴いては歸つて休むのだ。此の悠々たる天地の間に逍遙して、心意自得の樂みを味つてゐる。貴方の與へんとする天下が何です。貴方にして私の此の悅樂無碍の胸中がわからないとは、まことに情けないではないか」。善卷は遂に去つて深山に逃れてしまつて其の後何處に居たか行方知らずになつた。舜は今度は又其の友人の石戸の農といふ者に讓らうとした。すると農は、「まあアクセクとしてお働きになるのが貴方の御性分ですから、どうぞ精々お務め下さい」と言つて舜の德をばまだ至らぬものとして取り合はない。そしてこんな事に拘はるのはうるつさいと思つて、さつさと家財道具を取かたづけて、自分は之を負ひ、妻には頭にのせさせ、子の手を引いて、遠く海邊に逃れてしまつて一生涯歸らなかつた。

そ何事も出來る。即ち此の點が道を體得した者の世俗の輩と異なる所以である。

語釋 子州支父、子州支伯（釋文に曰く「父は音甫、李云ふ。支父は字なり。即ち支伯なりと。」自儀曰く「支父支伯は是れ一人なり。」蓋し隱者寓言の人なり。）○幽憂之病（釋文に「王云ふ、其の病深固なるを謂ふなりと。」蘇輿曰く「幽憂は其の清幽を得ざるを憂ふ」。蓋し幽憂之病は深く解するを要せず。今日の神經衰弱か。）

舜以天下讓善卷。善卷曰、余立於宇宙之中、冬日衣皮毛、夏日衣葛絺。春耕種、形足以勞動、秋收斂、身足以休食。日出而作、日入而息、逍遙於天地之閒、而心意自得。吾何以天下爲哉。悲夫、子之不知余也。遂不受。於是去而入深山、莫知其處。舜以天下讓其友石戶之農。石戶之農曰、捲捲乎后之爲人、葆力之士也。以舜之德爲未至也。於是夫負妻戴、攜子以入於海。終身不反也。

訓讀 舜天下を以て善卷に讓る。善卷曰く、余、宇宙の中に立ち、冬日は皮毛を衣、夏日は葛絺を衣る。春は耕種して、形以て勞動するに足り、秋は收斂して、身以て休食するに足る。日出でゝ作し、日入つて息ひ、天地の閒

之れ可なり。然りと雖も、我れ適〻幽憂の病あり、方に且に之を治めんとす。未だ天下を治むるに暇あらざるなりと。夫れ天下は至重なり、而かも以て其の生を害せず、又況や他物をや。唯〻天下を以て爲す無きもの以て天下を託すべきなり。舜、天下を子州支伯に讓る。子州支伯曰く、予適〻幽憂の病あり、方に且に之を治めんとす。未だ天下を治むるに暇あらざるなりと。故に天下は大器なり、而かも以て生に易へず、此れ有道者の俗に異なる所以の者なり。

大意 本章は自己の眞生命を活かすことは天下統治の大任より重きことを論ず。

通釋 堯が天下を許由に讓らうとしたが受けない。そこで隱者子州支父に與へんとした。支父が答へて曰ふには「私を天子にして下さいますか、それはまことに結構な事で御座います。然し私は今幽憂の病に罹つてゐまして切に治さうとしてゐます。そのために天下を治めるやうな暇なんかありません」と。實際天下は大切なものである。其の天下を統治することは最も大切な仕事である。がしかし自分の生命はそれ以上のものである。天下治定の務だからと云つてそのために生命を害してはいけない。況んや他の事物なんかで其の生を害ひ身を亡ぼすなどはもつての外である。たゞ天下といふものに拘束されない圓轉無礙の働の出來る人にして始めて安心して天下を託することが出來る。又舜が天下を子州支伯に讓らうとした。支伯は前と同じやうに「私はたま〳〵幽憂の病に罹つてゐまして、目下治療中で御座いますから、天下なんか治めてゐる暇はありません」と答へた。是等の言を味ふに成程天下は大きな、そして忽かにすべからざる所謂大器に相違ないが、自分の生命には易へ難い。我が生命を活かしてこ

雜篇　讓王第二十八

叙説　前章に堯、王位を許由に讓ることを記す、故に篇に名づく。一篇の意は性は重くして、王侯爵祿の輕きを論ず。然れども言ふ所淺劣、多く採るに至るなし。蘇東坡謂へらく、讓王以下四篇（讓王、盜跖、說劍、漁父）莊子の作る所に非ずと。（莊子祠堂記）陸西星、宣穎、陳壽昌諸家皆注せず。

堯以天下讓許由。許由不受。又讓於子州支父。子州支父曰、以我爲天子、猶之可也。雖然、或適有幽憂之病、方且治之。未暇治天下也。夫天下至重也、而不以害其生、又況他物乎。唯無以天下爲者、可以託天下也。舜讓天下於子州支伯。子州支伯曰、予適有幽憂之病、方且治之、未暇治天下也。故天下大器也、而不以易生、此有道者之所以異乎俗者也。

訓讀　堯、天下を以て許由に讓る。許由受けず。又子州支父に讓る。子州支父曰く、我を以て天子と爲す、猶ほ

きをしてゐるから、人が皆いやがつて去つて仕舞ふ。全體純白なものは反つて汚れて居るやうに見え、盛徳の人は反つて足らない所があるやうに思はれる、されば何事によらず控へ目にやるがよい、解つたか」。陽子居は之を聞き恐縮して是れまでの容子をスッカリ變へて「敬んで尊命を拜承しました」と云つた。始め陽子居が沛に出かけた時、其の態度が威張つて居たので、同宿者まで彼を送迎し、宿の主人は彼の爲めに敷物を執り、妻は手拭や櫛を執り、同宿者は座席を避け、竈の前で煬まつて居る者も場所を避けて彼に讓ると云ふ有樣であつたが、彼が老子の教を聞いて歸途に就くや其の態度は一變して穩になつたから、同宿のものも彼と席を爭ふ程打ちとけ親むやうになつたと云ふことである。

語釋　請㆓問其故㆒(其の敎ふ可からざるの故を質問するなり。一本故を途に作る亦通ず。)　○睢睢盱盱云云(因に「睢は目を仰ぐ。盱は目を張る。皆視ること面より上にして傲に近き者なり。而誰與居とは言ふ心は人、將に畏て之を去らんとす。」)　○太白若ㇾ辱、盛德若ㇾ不ㇾ足(老子四十一章に出づ。)　○迎將(將は送なり。)　○家公(宿屋の主人。)　○煬者(火をもして暖をとるもの。或は炊者即ち料理人となす、亦通ず。)

訓讀 陽子居、南、沛に之く。老聃、西、秦に遊ぶ。郊に邀へ、梁に至つて、老子に遇ふ。老子中道にして天を仰いで歎じて曰く、始め汝を以て敎ふべしと爲す、今や不可なりと。陽子居答へず。舍に至り、盥漱巾櫛を進め、屨を戸外に脱ぎ、膝行して前んで曰く、向には弟子、夫子に請はんと欲す。夫子行いて閒あらず、是を以て敢へてせず。今、閒あり、其の故を請問すと。老子曰く、而、睢睢盱盱たり。而、誰と與にか居らんや。太白は辱れたるが若く、盛德は足らざるが若しと。陽子居蹵然として容を變じて曰く、敬んで命を聞けりと。其の往くや、舍者迎將し、其の家公席を執り、妻、巾櫛を執り、舍者、席を避け、煬者竈を避けしに、其の反るや、舍者之と與に席を爭へり。

大意 盛德の士は外を飾らず是非を事とせず、和光同塵、外足らざるが如くなるを述ぶ。

通釋 應帝王篇にも見えて居た陽子居が南の方、沛に行き、老子は西の方、秦に遊んだ。よい機會を得たので陽子居は老子を郊外に出迎へ、梁の國まで行つて老子に遇つた。老子は道中で天を仰いで歎息して曰つた、「俺は始め汝を敎ふるに足るものだと思つたが、今は全く駄目だと思ふ」。陽子居はそれには何も答へなかつたが、やがて宿に着いて老子に盥、手洗、手拭、櫛などを進め屨を戸外に脱いで、恭々しく膝行して老子の前に進んで曰ふには「先き程私は先生にお尋ねしたいと存じましたが道中のことゝてお暇もないやうでしたからお伺ひしませんでしたが今は宿へお着きになつてお暇があるやうですからお伺ひしますが、先き程私のことをば敎ふるに足らないと仰せになりました譯をお聞かせ下さいませんか」。老子が曰ふには「汝は上目をつかひ、目を見張り、イヤに高慢ちきな顔つ

又俺が力と恃む形も亦自然の支配を蒙つて居るものである。それは兎に角として俺は彼れ形が來れば之と與に來り、形が往けば之と與に往き、形が運動すれば之と共に運動する。かく全然形につれて運動する俺にかれこれ尋ねて見た所で何んにもならんぢやないか」。

語釋 叟叟(叟は老人の稱、罔兩を呼び掛けて言ふ。影外の微陰一に非らず故に叟々と曰ふ上の衆字と相應ず。) ○稍問(因に循ふ末論と云はんが如しとあり。) ○予有而不レ知ニ其所以一(又因に影の俯仰行止、形に隨ふのみ、豈に其の然る所以を知らんやとあり。) ○蜩甲也、蛇蛻也云云(蜩甲は蟬殼なり、蛇蛻は蛇のヌケガラなり。因に云ふ「蜩甲蛇蛻は形に附くと雖も倚ほ其の質あり影は則ち見る可きも執るべからず故に之に似て實は非なり」と。) ○吾屯也(屯は聚なり、影の明に遇へば顯はるゝを謂ふ。) ○吾代也(代は代り去るなり、暗に遇はゞ消ゆるを謂ふ。) ○彼(形を云ふ。) ○強陽(成疏に運動の貌とあり。)

陽子居南之沛。老聃西遊於秦。邀於郊、至於梁而遇老子。老子中道仰天而歎曰、始以汝爲可教、今不可也。陽子居不答。至舍、進盥漱巾櫛、脫屨戶外、膝行而前曰、向者弟子欲請夫子。夫子行不閒、是以不敢。今閒矣。請問其故。老子曰、而睢睢盱盱。而誰與居。太白若辱、盛德若不足。陽子居蹵然變容曰、敬聞命矣。其往也、舍者迎將、其家公執席、妻執巾櫛、舍者避席、煬者避竈。其反也、舍者與之爭席矣。

待邪、而況乎以有待者乎。彼來則我與之來、彼往則我與之往、彼強陽則我與之強陽。強陽者又何以有問乎。

訓讀 衆罔兩、景に問うて曰く、若、向には俯して今や仰ぎ、向こは括にして今や被髮し、向には坐して今や起ち、向には行きて今や止まるは何ぞやと。景曰く、叟叟や、奚ぞ稍問するや、予有れども其の所以を知らず。予れ蜩甲なり、蛇蛻なり、之に似て非なり。火と日とには吾れ屯まり、陰と夜とには吾れ代はる、彼は吾が待つ有る所以か、而るを況んや以て待つ有る者をや。彼れ來れば則ち我れ之と與に來り、彼れ往けば則ち我れ之と與に往き、彼れ強陽すれば則ち我れ之と與に強陽す。強陽するものは又何を以てか問ふことあらんやと。

大意 人は皆自然の支配を受けて居ることは、恰も影が形に從つて始めて東往座起するが如くであるから、凡ゆ自己の意思を棄てゝ、自然に順ふべきであることを說く。齊物篇の罔兩 問景章 に因る後人の作。

通釋 影の外邊の薄い影である多くの罔兩が影に問うて曰く「汝は先き程は俯して居たが今は仰向き、先き程は髮を結つて居たが今は解きて髮を被り、先き程は坐して居たが今は起ち、先き程は歩行して居たが今は止まつて居る。どうして其のやうに變りぽいのだ」。影が答へて曰ふには「先生達は何んとツマラヌことを問ふぢやないか。俺は何んでもやるけれども其の譯を知らぬ。俺は丁度蟬の殼や蛇の皮に似てそれとも更に異なるものである。俺は火や太陽のある所には姿を現はすが、日蔭や夜には隱れて仕舞ふ。凡ての形は俺が力と恃む所のものであるが、更に

道人事天命鬼神等に求めてヤキモキするよりも、如かず死生兩つながら相忘れんには。是れ死を知らず、生を知らざる境地であつてやがて大妙に入る所以である」。

語釋　野（成疏には質樸なりとあり。浮華を去つて素朴に歸る意。）○從（成疏に俗に順ふとあり。）○通（郭注に彼我を通ずるなりとあり。）○物（郭注に「又物と爲ずるなり」とあり。）○來（成疏に衆の歸となるとあり。）○鬼入（因に神來り舍るなりとあり。人間世に鬼神も將に來り舍らんとす、而るを況んや人をやとあるは此の謂である。）○天成（因に造化の自然に合すると謂ふとあり。）○不レ知レ死、不レ知レ生（因に又「內篇の所謂不死不生なる者なり」とあり。要するに此の一節は大宗師の南伯子葵問女偊の章に因つて書いたものであることは明かである參照。）○大妙（道の異稱。）○生有レ爲。死也勸公（以下顏成子運が死生を超脫して大妙に入りての的過程を自ら述べたのであるが、或は錯簡脫衍あるものか、極めて解しにくゝ、諸家皆明解なし、今は主として林西仲によつて解す。林西仲曰く「人の生や蓋し爲す所の同じからざるあり。其の死するに及んでは歸を同うして異あることなく、之を勸むる者あるが如く然り」と。是れ公を以て同と解するものに似たり。姑らく此の解に從ふ。）○以ニ其死一也有レ自也（自は由なり。人の死は勸むる者の如し、故に人爲ではなく何か由る所ありとするなり。）○生陽也無レ自也（林西仲は陽字を衍となすも、死は陰、生は陽、故に生陽と言ふなり。生や爲すあり、故に由るなしと言ふなり。皆上の二句に由つて言ふなり。）○惡乎其所レ適云云（適は自適なり。死生共に自然に由るとせば何れに適くとして不可あらんや、皆自適の境なり。）○有ニ以相應一也云云（林西仲曰く「若し生死の理を以て之を鬼に求むれば善に福く淫に禍す、既に鬼の之を主どる者あるに似たり。しかれども善者或は未だ必ずしも福あらず、淫者或は未だ必ずしも禍あらず、又鬼の之を主どる者あること無きに似たり」。）

衆罔兩問ニ於景一曰、若向也俯而今也仰、向也括而今也被髮、向也坐而今也起、向也行而今也止、何也。景曰、叟叟也、奚稍問也、予有而不レ知ニ其所一以。予蜩甲也、蛇蛻也、似レ之而非也、火與レ日吾屯也、陰與レ夜吾代也、彼吾所ニ以有一

れ鬼あらんやと。

大意 達道の人の能く死生を超越して道に悟入せる由を述ぶ。內篇大宗師に因る後人の作か。

通釋 齊物論にも見えて居た顏成子遊が東郭子綦と云へる賢人に向つて曰ふには「私は先生の言を聞いてから、一年立つて素朴となり、二年立つて世に逆ふことがなくなり。三年にして彼我の別を設けることがなくなり、四年にして物と同化することになり、五年にして招かずと雖も自ら衆物我に來歸することになり、六年にして鬼神も亦來り舍り、七年にして造化の自然に合し、八年にして生死を超越し、九年にして玄妙の大道に悟入することになつた。そも／＼人は生きて居る時には各自の考に從つて千差萬別の事を爲して居るが、一旦死に至れば其處に何か大きな力があつて人を勸めて同じ狀態に歸せしめるやうに思はれる。か樣に人の死には由る所があり、生には基づく所がないと考へてよいだらうか、いや／＼死生は同じく大公自然に由るもので死にのみ由る所がありて生に由る所なきものではない。死も生も同じく大公自然に由るものならば、死も亦適所であり生も亦適所であつて其の間適不適の別がない。然しながら死生の事たる曰く不可解であつて、天には日月星辰の運行あり、地には人事の據るべきものがあるが、之によつて死生の理を求めんとしても明かにしがたいのである。然らば死生の理を天命に求めて見ても、死の終る所も生の始まる所も共に知ることが出來ないから、死生は天命に由るとも由らぬとも明かにしがたいのであり、更に又死生の解決を鬼神に求めて見ても、生の禍福、死の遲速（壽夭）は行の善惡に應ずることもあり、應ぜざることもあるから、死生は鬼神の力に由るや否や亦明かにしがたいのである。されば死生の解決を天

顏成子遊謂東郭子綦曰、自吾聞子之言、一年而野、二年而從、三年而通、四年而物、五年而來、六年而鬼入、七年而天成、八年而不知死不知生、九年而大妙。生有爲。死也勸公。以其死也有自也、而生陽也無自也、而果然乎。惡乎其所適。惡乎其所不適。天有歷數、地有人據、吾惡乎求之。莫知其所終、若之何其無命也。莫知其所始。若之何其有命也。有以相應也、若之何其無鬼邪。無以相應也、若之何其有鬼邪。

訓讀　顏成子遊、東郭子綦に謂つて曰く、吾れ子の言を聞きしより、一年にして野、二年にして從、三年にして通、四年にして物、五年にして來、六年にして鬼入、七年にして天成、八年にして死を知らず、生を知らず、九年にして大妙なり。生は爲すことあり、死や勸公。其の死を以てや自ること有りとして、生陽や自ること無しとする、果して然るか。惡にか其れ適する所なる、惡にか其れ適せざる所なる。天に歷數有り、地に人據有り、吾れ惡にか之を求めん。其の終る所を知る莫し、之を若何ぞ其れ命無からんや。其の始まる所を知る莫し、之を若何ぞ其れ命あらんや。以て相應すること有るなり。之を若何ぞ其れ鬼なからんや。以て相應することなきなり、之を若何ぞ其

く、孔子は之を謝せり。而して其れ未だ之れを嘗て言はずと。孔子の云ふ、夫れ才を大本に受け、靈に復つて以て生くれば、鳴いて律に當り、言つて法に當ると。利義前に陳ねて、好惡是非するは、直ゝ人の口を服するのみ。人をして乃ち以て心服して敢へて蘁立せざらしめて、天下の定を定む。已みなんか已みなんか、吾れ且た彼に及ぶことを得ざらんかと。

大意 此の章、前章巵言の意を承けて人を心服するには無言に如くなきを言ふ。而して其の中孔子の言を引くはおのづから重言の例を示す。

通釋 莊子が或る時、例の論敵惠子に向つて曰ふには「孔子は其の學德、年と共に新にして年六十になるまでに六十度も變化した。例へば其の年の始めに是なりと信じたことも、年末には之を非なりと悟り改めたと云ふことである。されば今後とても猶ほ變化して、他日、今の是と思へることを非とすることは、今日五十九年間のことを非としたのと同じことに立ち至るは想像に難くない。此の孔子の態度はお互に參考にせねばならぬことだ」。然るに惠子が曰ふには「それは孔子が一生懸命になつて學に志し、知を研くことを事とした爲めに、そこまで進んだのである」。莊子が曰ふには「さ樣ではない。孔子は道の把握は學知の能くする所でないことを識つて疾くの昔、之を捨て去り、學問や知識などのことは少しも言はない。それは次ぎのやうな孔子の言によつても明かである。即ち孔子は斯う云つて居る「元來人は其の才知を造化の自然に受けて來たのであるから天賦の靈性に立ち復つて生を遂ぐる時は、其の聲は音律に協ひ其の言は理に當る。然るに若し利義を陳べ立てゝ、好惡の情、是非の論を逞うする時は

つて各〻相異れる形を以てかはる〴〵生じ來つて其の終始は環の如く端倪を得ることが出來ぬ。是れ萬株一如の理であつて不齊の中に自から至齊の存在する所以である、之をば自然的均等と謂ふ。さて自然的均等とは是非の限界を脱却せる無心喪我の境地を云ふ。

【語釋】和以天倪、因以曼衍、所以窮年（齊物論に出づ、就いて見よ。）○有自也而可云云（可不可、然不然は由つて來る所ありて、何れも後天的便宜的のものなりとの意。以下の句皆齊物論に出づ。參照）○萬物皆種也云云（因に云ふ「物理を以て論せば、胎卵濕化、物種萬あり、形同じからずと雖も、禪代已むことなし。是が不齊の中に至齊なる者ありて存す」。禪は代なり、倫は端なり。）

莊子謂惠子曰、孔子行年六十而六十化。始時所是、卒而非之。未知今之所謂是之非五十九非也。惠子曰、孔子勤志服知也。莊子曰、孔子謝之矣。而其未之嘗言。孔子云、夫受才乎大本、復靈以生、鳴而當律、言而當法。利義陳乎前、而好惡是非、直服人之口而已矣。使人乃以心服、而不敢蘁立、定天下之定。已乎已乎、吾且不得及彼乎。

【訓讀】莊子、惠子に謂つて曰く、孔子、行年六十にして、六十化す。始めの時是とする所、卒にして之を非とす。未だ知らず今の所謂是の五十九の非に非ざることをと。惠子曰く、孔子は志を勤め、知を服するなりと。莊子曰

出で、和するに天倪を以てするに非ざれば、孰れか其の久しきを得ん。萬物皆種なり、同じからざるの形を以て相禪る、始卒環の若く、其の倫を得る莫し、是を天均と謂ふ。天均なるものは、天倪なり。

大意 卮言を用ふる所以を説く。

通釋 次ぎに卮言は吾が輩が毎日述べて居る所の無心無我を以て物論を調和し、自由無碍を以て物論に因り順ひ、悠游天壽を卒うる所のものである。凡そ世上の論は言はざることによつて齊しうすることが出來る。然るに之を齊しうせんとして言ふ時は反つて齊しくならぬ。かく言ふことによつて齊しうせんとする時は反つて齊しくならぬから、吾が輩は常に無言第一を提唱して居るのである。然しながら無言と云つて全然口をつぐんで居ると云ふのではなくて、言ふと雖も無心を以て言ふのである。かく無心を以て言ふならば、終身言ふも是非の論に陷ることがないから全く言はざるに等しいのである。之に反して我意を挾さみ、作爲の心を有する時は終身言はざるも、是非の論を惹起すことになる。要は言と不言とにあるに非ずして無心無我に在るのみである。元來世上の可不可、然不然の別は後天的便宜的のものであつて先天的根本的に左樣定まつて居るものでない。卽ち何を標準にして然不然、と云ふことが定まるかと云ふに、それはたゞ人々が時と場合とによつて一時的便宜的に或は然を然とし、不然を不然とするまでのことである。可不可の別も同樣にして定まるのに過ぎない。凡そ世の中の事々物々には然なる所、可なる所があつて、其の然なる所、可なる所に因つて云へば凡ての物に不然もなく不可もない。されば常に無心の言を以て物論を調和するに非ざれば、永久の齊一を得ることは出來ぬ。獨り物論のみでない、一切の物は千差萬別であ

巵言日出、和以天倪、因以曼衍、所以窮年。不言則齊、齊與言不齊。言與齊不齊也。故曰無言。言無言、終身言、未嘗言。終身不言、未嘗不言。有自也而可。有自也而不可、有自也而然、有自也而不然。惡乎然。然於然。惡乎不然、不然於不然。惡乎可、可於可。惡乎不可、不可於不可。物固有所然。物固有所可、無物不然、無物不可。非巵言日出、和以天倪、孰得其久。萬物皆種也、以不同形相禪、始卒若環、莫得其倫、是謂天均。天均者、天倪也。

訓讀　巵言は日に出づ、和するに天倪を以てし、因るに曼衍を以てし、年を窮むる所以なり。言はざれば則ち齊し、齊しくすると言ふとは、齊しからず。言ふと、齊しきとは齊しからざるなり。故に曰く、言ふなしと。言つて言ふなければ、終身言ふも、未だ嘗て言はず。終身言はざるも、未だ嘗て言はずんばあらず。自ること有つて可。自ること有つて不可、自ること有つて然り、自ること有つて然らず。惡にか然る。然るを然りとす。惡にか然らざる、然らざるを然らずとす。惡にか可なる、可なるを可なりとす。惡にか可ならざる、可ならざるを可ならずとす。物固より然る所有り。物固より可なる所有り、物として然らざるはなく、物として可ならざるは無し、巵言の日に

非先也。人而無以先人、無人道也。人而無人道是之謂陳人。

訓讀 重言十に七は、言を已むる所以なり。是れ耆艾の爲めなり。年先んずるも、而かも經緯本末なくして、以て年耆を期するものは、是れ先んずるに非ざるなり。人にして以て人に先んずることなきは、人の道なきなり。人にして人の道なき、是を之れ陳人と謂ふ。

大意 重言を用ふる所以を明かす。

通釋 吾が輩が言を爲すに十が七まで重言を用ふるのは世人の爭辯を止むる方便である。古聖賢の名に托して言を爲すと、人が之に順ひ易いのは世人が一般に長老を重んずるが爲めである。つまり重言を用ふるのは此の世俗の一般心理を順用するのである。但し年齢ばかりが人に先だつて居ても、物の常態變化、事の本末終始に關して何等の分別なく、たゞ年長を賴みとするものは眞に人に先立つものではない。年は上でも人の先に立てないのは人に先立つべき德がないからである。折角人でありながら人に先立つべき德がなければ所謂古るくさい人たるに過ぎぬ。かゝる陳人を引合に出しても何の役にも立たぬのであつて、重言に用ふる古人は眞の有道の士でなくてはならぬ。

語釋 所以已言也（口義に「已は止なり、言を已むとは以て其の爭辯を止むべきなり。重を耆艾の人に借る時は則ち敢て以て非となさず、以て其の議論を止め塞ぐべきなり。古先帝王聖賢は皆耆艾なり」とあり。） ○耆艾（禮記の曲禮上に六十を耆と曰ひ、五十を艾と曰ふと見ゆ。長老の稱なり。） ○無經緯本末以期年耆者、是非先也（口義に云ふ「經緯本末は常を知り變を知り首を知り終を知るを言ふ。期年耆とは年長を恃みとする意なり」此の句或は「期年を以て耆とする者」と訓み、「期は期頤の年、禮記の曲禮上に百年を期と曰ふ、頤（養なり）ふとあり）なり。年先んずと雖も、學に見る所なく、たゞ期頤の年を以て稱して耆伯と爲せば則ち其の年先んずと雖も先となすに足らず。」（口義）と解す。亦一說なり。）

通釋　吾か輩(莊子)が平常言ふ所に寓言重言巵言の三種がある。寓言は十中の九までがそれに屬するのであり、重言は寓言中の特殊のもので十中の七までがそれに屬し、巵言は吾が輩が平常述べて居る所の無心眞我を以て物論を和するものを謂ふのである。何故に右三種の言を用ふるかとならば、先づ吾が輩の言論の十中の九までを占めて居る寓言は外の事物をかりて道を論ずるのを云ふ。なぜ道を論ずるに外の事柄をかりてするかと言ふに、それは譬へば父が自ら子の爲めに仲人しないのは、父が子の仲人をして子を譽め立てるよりも、他人が譽め立てる方が遙かに增しであるからである。つまり之と同じ譯合である。自分の意見として述べても、外の事をかりて述べても、その實は同じであるが聞く人の感じは非常に違ふ。之は自分の罪でなく。聞く人の罪であるが。どうも止むを得ないことである。若し此の點を考慮に入れないで自分の意見として述べる時は、聞き手の方では己れと同意見の場合には贊成して是認するが意見が違ふ場合には反對して非難する。さ樣な譯だから寓言を用ひて道を述べるのである。

語釋　寓言十九、重言十七、巵言日出、和以天倪(巵は「サカヅキ」。宣注に「器に隨つて摹寫すること水の巵に在るが如し、則ち日に談ずるもの皆是なり」とあり、即ち水が方圓の器に隨ふが如く、己が我見を立てることなく無心無我、事の可不可、然不然のまゝに隨つて述べる言を巵言と云ふ。されば莊子の言ふ所は皆巵言であつて、其の所謂巵言を爲すに當つて外の事物をかりて述べるのを寓言と謂ひ、寓言の中でも古聖賢に托して述べるのを重言と謂ふ。林希逸によれば「重言とは古人の名を借りて以て自ら重くす。黄帝神農孔子の如き是れなり」。されば重言は寓言の中に在り。寓言は亦巵言の中にあつて、三者は全然別種のものではない。和以二天倪一とは宣注によれば、「己を以て與らざるなり」とあり、我見を交へず、私意を加へず、物論を調和する意なり。此の句、既に齊物論に見ゆ、參看。)

重言十七、所二以已一レ言也。是爲二耆艾一。年先矣、而無二經緯本末一以期二年耆一者、是

雜篇　寓言第二十七

敘說　此の篇は莊書の自序とも謂ふべき篇であつて、全書に於ける立言の要旨を述べてゐる。但し首章に於て其の大旨は盡きて居るので、自餘の諸章は附たりである。

寓言十九、重言十七、巵言日出、和以天倪。寓言十九、藉外論之。親父不爲其子媒、親父譽之、不若非其父者也。非吾罪也、人之罪也。與己同則應、不與己同則反、同於己爲是之、異於己爲非之。

訓讀　寓言は十に九、重言は十に七、巵言は日に出で、和するに天倪を以てす。寓言十に九は、外を藉りて之を論ずるなり。親父其の子の爲めに媒せざるは、親父の之を譽むるは、其の父に非ざる者に若かざればなり。吾が罪に非ざるなり、人の罪なり。己と同じければ則ち應じ、己と同じからざれば則ち反し、己に同じきは之を是と爲し、己に異なるは之を非と爲せばなり。

大意　此の章、三節に分つ。莊子の平常言ふ所に寓言重言巵言の三種あるを言ひ、先づ寓言を用ふる所以を述ぶ。

んか最早不必要だ。吾はこの忘言の大眞人を一體何處に探し求めて、不言の玄道を語り合ふことが出來やうか、悲しい哉、現代にはそんな人は居ないのだ。

語釋 筌（成疏に曰く「筌は魚笱なり、竹を以て之を爲る」と。今溪川に於て魚を捕へる「ヤナ」といふやうなもの。）　○蹄（成疏に曰く「兔罥なり、兔の脚を繫係するを以て蹄といふ」と。ウサギアミであらう。）

が迴つて來るのを避けて、弟子を引き連れて、窾水の傍にうづくまつてゐた。諸侯は此の廉潔を聞いて人をやつて之を弔慰した。そんなことが三年もつゞいた。申徒狄はまた紀他を慕つて自ら川に身を投じてしまつた。是等は皆物の未だ至らざるに、反つて自ら先んじて其の性を害ふもので、決して自然の道に生きたものではない。

語釋 湔門（釋文に曰く「城門の名」宋の東門の名といふ。）　○黨人（鄕黨の人々。）　○務光紀他申徒狄（大宗師篇に見ゆ、皆隱者。）　○踆於窾水（釋文に「字林に云ふ、古の蹲の字、音は「ソン」と。窾水ト司馬云ふ、水名と」。）　○弔之（釋文に「司馬云ふ、其の自ら沈むが故に之を弔すと」。）

筌者所以在魚、得魚而忘筌。蹄者所以在兎、得兎而忘蹄。言者所以在意、得意而忘言。吾安得夫忘言之人而與之言哉。

訓讀 筌は魚に在る所以、魚を得て筌を忘る。蹄は兎に在る所以、兎を得て蹄を忘る。言は意に在る所以、意を得て言を忘る。吾れ安にか夫の忘言の人を得て、之と與に言はんやと。

大意 文立文字、教外別傳の妙諦を得た人と語り得ざるの悲を述べて、以上の無爲自然に自適するの論旨を結ぶ。

通釋 あの竹で作つた筌は魚を捕へる道具であり、蹄は兎を捕へる器具であつて、魚や兎を捕へてしまへば最早用はない。これと同じやうに、言葉は意味を表示するためのものであつて、其の意味を了得してしまへば、言語な

ろことをいふ。到植を傾到として、耕す民に反つて害ふの過半と解する説あるも採らず。）○皆搣可以休老（釋文に玉篇に云ふ、皆は搣なりと。搣は本亦滅に作る。皆滅」。林希逸曰く「物欲を屏除して其の天理を全くす」と。今之に從ふ。又搣は拔なり。搣は摩なり、皆は目皆なり、として目がしらを摩擦するを謂ふとなす説あるも採らない。）○駭天下（成疏に曰く「駭は驚なり」と。百姓衆民の視聽を驚かすのである。）

演門有親死者。以善毀爵爲官師。其黨人毀而死者半。堯與許由天下。許由逃之。湯與務光。務光怒之。紀他聞之、帥弟子而踆於窾水。諸侯弔之、三年。申徒狄因以踣河。

訓讀 演門に親死するものあり。善く毀せたるを以て、爵せられて官師と爲る。其の黨人の毀せて死するもの半。堯、許由に天下を與へて、許由之を逃る。湯務光に與へて、務光之を怒る。紀他、之を聞き、弟子を帥ゐて窾水に踆る。諸侯之を弔すること三年。申徒狄因て以て河に踣る。

大意 名のために其の性を害なひ身を亡ぼすことを述ぶ。この話はしば／＼繰返されたことである。

通釋 宋の演門といふ所に、親の死に際して、殊勝にも喪に服して、そのために身體がすつかり痩せ衰へたものがあつた。そして其の孝行を表彰されて爵位を授つた。然るに其の鄕黨の人達は之を眞似て、斷食したりなどしたために死んだ者が過半數にも達した。徒に名譽を好むとこんなことになる。昔堯が國を許由に讓らうとしたが、許由は逃げて受けなかつた。湯が務光に國を與へんとしたら務光は怒つた。紀他はこの話を聞いて、自分の方へ順番

其の爲すことを外にさらしあらはすからである。人が種々と智略をめぐらして權謀術數などの行はれるのは急遽に際して何んとか之を切りぬけんとするが爲であり、人の才知は爭ひから起るものであり、人の心に塞がりとどこほりの出來るのは、物に執着するからである。政府でやる仕事も衆民の宜しとする所に從つて爲すべきであつて、個人的の知を働かしてはならない。春雨が訪れる頃となると、草木は勢よく芽を吹き出す。人々は農具を修めて始めて之を鋤くのであるが、此の時既に草木の新芽を出して更生せんとしてゐるものは過半であつて、別に人の耘耕を待つて發芽するものではない。多くの人は其の大自然の働きを知らないのだ。心を安靜にしてをると、神氣を補つて病氣をも治るものだ。嗜慾を斷つてしまへば老いてから安寧を得ることが出來る。心の寧靜を保つてゐると、事に臨みてあわてさわぐことはない。しかしこの三つも畢竟するに物欲に累はされ勞苦するものゝ爲すことであつて自然に遊佚し得る者の爲す所でない。無爲に遊佚する者は、悠々超脫して、そんなことは全然問題にしないのである。又聖人が自ら高くとまつて世人を駭かし騷がすやうなことは、神人になるとテンデ問題にもしないのだ。賢人は世人に目立つやうな事をやるが、聖人になるとそんなことはテンデ問題外である。君子の國人をおどろかすやうな行爲は、賢人になると全く問題にしない事だ。小人の一時に都合よくなるやうな行爲は、君子になると全然問題にしないのだ。即ち修養が進めば進む程、其の爲す所、其の理想とする所は段々と異つて來る者である。

語釋 謀稽₌乎詃₋（郭注に曰く「詃は急なり。急にして而る後其の謀を考ふ」。成玄英之を疏して曰く「急難之時、然して後謀計を校ふ」と。）○柴生₌乎守₋（成疏に曰く「柴は塞なり、守は執なり」と。道の塞がつて通じないのは物に執着するためである。）○銚鎒（釋文に曰く「銚は削なり、能く穿削する所有るなり。●鎒は田を鋤くの具なり」と。鋤ゐ耕作したりなどすることである。）○草木之到植者過半（到は倒である。植は生といひ、立つといふ。即ち頭を倒にして草木の發芽す

可以補病、眥㳒可以休老、寧可以止遽。雖然若是勞者之務也。非佚者之所、未嘗過而問焉、聖人之所以駴天下、神人未嘗過而問焉。賢人所以駴世、聖人未嘗過而問焉、君子所以駴國。賢人未嘗過而問焉。小人所以合時、君子未嘗過而問焉。

訓讀 德は名に溢れ、名は暴に溢れ、謀は誸に稽へ、知は爭に出で、柴は守に生ず。官事は衆宜に果る。春雨の日時、草木怒生す。銚鎒是に於てか始めて修む。草木の到植するもの半に過ぎて、而して其の然るを知らず。靜然は以て病を補ふべく、眥㳒は以て老を休すべく、寧は以て遽を止むべし。然りと雖も、是の若きは勞者の務なり。佚者の所にあらず、未だ嘗て過ぎて問はず、聖人の天下を駴かす所以、神人は未だ嘗て過ぎて問はず。賢人の世を駴かす所以、聖人は未だ嘗て過ぎて問はず、君子の國を駴かす所以、賢人は未だ嘗て過ぎて問はず、小人の時に合ふ所以、君子は未だ嘗て過ぎて問はず。

大意 大自然の德を讃美し、神人は此の自然に優遊することを說いて、人々に神人から小人に至るまでの理想に差等のあることを明かにす。

通釋 自然の德があふれて德を失ふのは、人が名聲を欲するからであり、人の名聲があふれて實を超えるのは、

の流通を計つて止まない。それだのに人は反つて自ら其の孔を塞ぐやうなことをする。だから遂に死んでしまふ。一體人體には胸から腹にかけて大きな穴曠のあるものであり、胎中に空曠があつて、ガラリと空虚であるから、其の中に自然天然の道が遊ぶことができる。今、室に餘裕がなくて、嫁も姑も一所にごて〳〵してゐると、互に爭つていがみ合ふやうになる。そのやうに心に天遊がないと、眼耳鼻舌心知の六つのものが爭つて遂に本性を亡ぼしてしまふものである。あの幽邃な林や山を人が喜び求めるのは、人の日常が是等の眼や耳などの感覺に依つて起る精神の煩累に堪へないがためである。

語釋　目徹爲レ明（成疏に曰く「徹は通なり」と。卽ち目は瞳孔から物が通つてよく視覺に達するのを明といふのである。）○顫（成疏に曰く「顫は辛臭の事なり」と。臭氣をよく嗅ぎ分けること。）○哽而不レ止則跈（釋文に「哽は塞なり」。廣雅に云ふ、「跈は履なり、止なり」と。孔が硬塞してだん〳〵ひどくなるとすつかり通達の運りが止まつてしまふこと。王念孫は、跈は㐱なり、㐱は戾なりと云つて、乖戾に解するけれども却つて意味の判明を欠ふきらひがある。跈は止なりと解して十分に意義は通ずると思ふ。）○日夜無レ降（成疏曰く「降は止なり、自然の理穿通して、萬物晝より夜に及びて未だ嘗て止息せず」と。）○胞有二重閬一（釋文に曰く「胞は腹中の胎」、郭注に曰く「閬は空曠なり」と。胞を人體を包む肉と皮との間の膜と解する人あるも採らない。）○心有二天遊一（成疏に曰く「虛空なる故に自然の道其の中に遊ぶ」。）○婦姑勃谿（釋文に「司馬云ふ、勃谿とは反戾なり。虛空以て其の私を容るゝなければ、則ち反戾して共に鬪爭するなりと。嫁と姑を一家におけば直ぐに相爭ふに至るのは古今東西を問はない。）○六鑿相攘（成疏に曰く「鑿は孔なり、攘は則ち逆なり。自然の道其の心に遊ばざれば、六根逆つて理に順はず」と。釋文に「司馬云ふ、六情攘奪すと」。）

德溢二乎名一、名溢二乎暴一、謀稽二乎誸一、知出二乎爭一、柴生二乎守一。官事果二乎衆宜一。春雨日時、草木怒生。銚鎒於レ是乎始修。草木之到植者過レ半、而不レ知二其然一。靜然

婦姑勃谿。心無天遊、則六鑿相攘。大林丘山之善於人也、亦神者不勝。

訓讀 目の徹るを明と爲し、耳の徹るを聰と爲し、鼻の徹るを顫と爲し、口の徹るを甘と爲し、心の徹るを知と爲し、知の徹るを德と爲す。凡そ道は壅がることを欲せず、壅がれば則ち哽す、哽して止まざれば則ち跈す、跈すれば則ち衆害生ず。物の知あるものは息を恃めばなり。其の殷ならざるは天の罪にあらず、天の之を穿つ。日夜降むことなし。人則ち顧つて其の竇を塞ぐ。胞に重閬あり、心に天游あり、室に空虚なければ、則ち婦姑勃谿す。心に天游なければ、則ち六鑿相攘ふ。大林丘山の人に善きや、神なるもの勝へざればなり。

大意 此の一節は心の天遊を說く、心に天遊がないと眼や耳などの感覺作用に煩はされて、本性を害ふことを論ず。

通釋 目の能く徹つて物を視るのを明となし、耳の能く通じて聲を聽くのを聰となし、鼻の能くとほつて臭氣をかぐのを顫となし、口の能く通じて味を知るのを甘と爲し、心の能く通じて物を判知するのを知となし、知の能く通じて外物に惑はされないのを德といふのである。目耳鼻口其の他の道なるものは、能く通ずるを貴びて、塞がることを欲しない。若し塞がると孔は硬塞してしまつて、硬く塞がつてしまふと、全く通じなくなる。斯く孔が塞がれて通じなくなると、遂に種々の害が起つて來る。又凡べて物の知覺ある者は、氣息の流通を恃んで生きて行けるのである。そして其の氣息の盛んでないのは天の罪ではない。天はもとく此の孔を穿ち通じて、日夜呼吸し、氣息

適の境に至つた者でない。世の中に君となり臣となつて君臣の別があるも、これも唯一時のことであつて、世が易れば貴賤の差別なんかありはしない。だから古語にも、「至人は行つて何の跡方をも殘さない」と云つてゐる。徒に古代を尊重して、現代を卑しむのは、學者の流儀である。けれども、あの三皇以前の帝王たる狶韋氏時代の眼で、現代を見たら、どんな世でも眞を失つてゐない時はないであらう。たゞ悟りきつた至人は、能く世間に逍遙して奇僻に陷らない。よく世人に順應するが、それかと云つて自己そのものを失はない。世俗の敎などは、別について學ぶことはしないが、かと云つて、其の意をよく承けて彼此の區別を立てるやうな事はしないものである。

語釋　人有二能遊一云云（林希逸曰く「能遊ぶと者は則ち之に遊ぶ。遊ぶこと能はざる者は、能はざるに終る。世に達者と不達者あるを言ふなり。遊は自樂の意なり」と。）○火馳（世事を逐ひ求むこと火の急なるやうである。）○流遁之志決絕之行（林希逸曰く「流遁とは物を逐ふて返ることを忘るゝなり。決絕とは世と判然として自ら異にするなり」と。即時流に投じて惑ふ者、隱棲して自ら世を異にする者を云ふ。）○夫孰能不レ波（林希逸曰く「若し夫れ天地の初め、上古の世を以て、今日を觀ば、則ち皆波蕩流逐して其の性を失ふ者と爲す」と。王先謙曰く「且に淳古の眼を以て今の世を觀れば、夫れ孰れか能く之に動かざらん。波は動なり」と。）

目徹爲レ明、耳徹爲レ聰、鼻徹爲レ顫、口徹爲レ甘、心徹爲レ知、知徹爲レ德。凡道不レ欲レ壅、壅則哽、哽而不レ止則跈、跈則衆害生。物之有レ知者恃レ息。其不レ殷非二天之罪一。天之穿レ之、日夜無レ降。人則顧塞二其竇一。胞有二重閬一、心有二天遊一。室無二空虛一、則

時也。易世而無以相賤。故曰、至人不留行焉。夫尊古而卑今、學者之流也。且以狶韋氏之流、觀今之世、夫孰能不波。唯至人乃能遊於世而不僻、順於人而不失己。彼敎不學、承意不彼。

訓讀 莊子曰く、人、能く遊ぶことあらば、且遊ばざることを得んや。人にして遊ぶこと能はずんば、且遊ぶことを得んや。夫れ流遁の志、決絶の行は、噫其れ至知厚德の任に非ざるか。覆墜して反らず。火馳して顧みず。相與に君臣たりと雖も、時なり。世を易ふれば以て相賤しむこと無し。故に曰く、至人は行を留めずと。夫れ古を尊んで今を卑しむは、學者の流なり。且狶韋氏の流を以て、今の世を觀る、夫れ孰れか能く波せざらん。唯至人は乃ち能く世に遊べども僻せず、人に順へども己を失はず、彼、敎ふるも學ばず、意を承くるも彼とせず。

大意 至人の逍遙自適の有樣を説明する。

通釋 更に莊子は言つた。「世の中に逍遙として自適出來るものは、優遊自適しまいとしても、自然に悠々自得たり得る。無爲の境に遊ぶことの出來ない者は、如何に自適せんとしても出來得ないのである。あの物を逐ふて本然に反るを忘れたり、又決然として世を捨てゝ高踏したりする者は、皆逍遙自在の者でなく、至知厚德の人、即ち有道の人ではない。又世事に陷沒して根本に反らないのも、外物を驅馳して本性を顧みないのも、亦ひとしく逍遙自

訓讀 惠子、莊子に謂つて曰く、子の言用なしと。莊子曰く、用なきを知つて、始めて與に用を言ふべし。夫れ地は廣く且大ならざるにあらざるなり。人の用ふる所は足を容るゝのみ。然らば則ち足を側つて之を墊り、黃泉に致らば、人尙ほ用ふるありやと。惠子曰く、用ふるなしと。莊子曰く、然らば則ち無用の用たることや亦明なりと。

大意 莊子の一流の無用の用の說明だ。簡單にして良く解る面白い喩話である。此の章、六節に分けて解す。

通釋 惠子が莊子に對つて曰つた。「君の議論は實際上何の役にも立たない」と。莊子は答へた。「すべて無用を知つてから、始めて與に用に就いて語り得るものだ。見たまへ、地面は實に廣大なものではないか。しかし實際に人の用ふる所は、歩く時に足を踏み容るゝ所だけである。其の他は凡て無用だ。だからと云つて、足を側つて踏む所だけを殘して、其の周圍を堀り下げて黃泉に達するやうに深くしたらどうだ。それでも足の下の地面が役に立つと思ふか」惠子は「そりや役に立たない」。莊子は「だからさ、無用な所があつて始めて、有用な所も働きを現はすのだ。どうだ、無用の用といふことがよくわかつたか」と言つた。

語釋 側レ足而墊レ之（側は測ると讀む說がある。墊は釋文に「司馬云ふ、堀なり」と。卽ち足の形のみ殘して下に堀り下げるのである。）　○致二黃泉一（致は至る意である。）

莊子曰、人有二能遊一、且得レ不レ遊乎。人而不レ能レ遊、且得レ遊乎。夫流遁之志、決絕之行、噫其非二至知厚德之任一與。覆墜而不レ反、火馳而不レ顧。雖三相與爲二君臣一、

大意 前節をうけて、小知の役に立たないことを論じ、自然に順應して大知の働にまかすべきを說く。

通釋 孔子は之に就いて次の如く述べた「神龜は能く夢に元君と相見ゆることが出來ても、余且の網を避けることが出來なかつた。其の知は、七十二回もトつて皆能く中つたけれども、腸をゑぐりとらるゝ患を逃るゝことは出來なかつた。是に由つて觀ると、知有るも困窮するところがあり、神靈も畢竟及ばないものである。至知が有るといつても、萬人の衆謀には勝てない。魚は網を畏れないで、鵜鶘を畏れて深く沈んでゐても、神龜のやうに網にかゝるものがある。是れ徒らに小知を弄して大知を得ないが爲めである。故に人は小知を棄て去つてしまへば、大知は自ら明らかになり、善を去つてしまへば、眞善自ら我に備はるのである。生まれたまゝの赤ん坊が、別に良師を得て言語を習はなくとも、よく言ふやうになるのは、能く言ふ者と一緒に處るからである。人は斯く自然に順應すべきであつて、知を用ひたとて、全く何の役にも立たない。」

語釋 鵜鶘（釋文に曰く「水鳥なり」と。）○石師（釋文に曰く、「一本に碩師に作る」と。良師、大師の意味。）

惠子謂莊子曰、子言無用。莊子曰、知無用而始可與言用矣。夫地非不廣且大也。人之所用容足耳。然則側足而墊之致黃泉、人尚有用乎。惠子曰、無用。莊子曰、然則無用之爲用也亦明矣。

腸をゑぐり甲を鑽つて、七十二回も之で占つたが、吉凶は其の都度中つた。

語釋 宋元君（釋文に「李云ふ、元公なりと。案ずるに、元公は名は佐、平公の子なり」と。宋の元公は又田子方篇にも見ゆ。）○阿門（成疏に曰く「阿旁曲室の門を謂ふ」と。大門の傍のくゞり門である。）○宰路（釋文に「李云ふ、淵の名、龜の居る所と」。）○余且（釋文に曰く「姓は余、名は且なり」と。兪樾曰く「史記龜策傳に豫且に作る」と。）○圜（圓と同じ。甲の大きさの意味。）○七十二鑽（鑽は「キル」と訓ず。甲でトする時に切つて傷を附ける意であらう。釋文に、「司馬云ふ、鑽はトを命じて、トする所の事を以て之を灼くなりと」。）

仲尼曰、神龜能見夢於元君、而不能避余且之網。知能七十二鑽而無遺筴、不能避刳腸之患。如是則知有所困、神有所不及也。雖有至知、萬人謀之。魚不畏網而畏鵜鶘。去小知而大知明、去善而自善矣。嬰兒生無石師而能言、與能言者處也。

訓讀 仲尼曰く、神龜能く夢に元君に見ゆれども、而かも余且の網を避くること能はず。知能く七十二鑽して遺筴なけれども、刳腸の患を避くること能はず。是の如きは則ち、知も困する所あり。神も及ばざる所あればなり。至知ありと雖も、萬人之を謀る。魚、網を畏れずして、鵜鶘を畏る。小知を去れば大知明かに、善を去れば自ら善なり。嬰兒生れて石師なくして能く言ふは、能く言ふものと與に處ればなりと。

河伯の所に使す。漁者余且、予を得たりと。元君覺めて、人をして之を占はしむ。曰く、此れ神龜なりと。君曰く、漁者に余且ありやと。左右曰く、有りと。君曰く、余且をして朝に會せしめよと。明日、余且朝す。君曰く、漁して何をか得たると。對へて曰く、且が網、白龜を得たり。其の圓五尺と。君曰く、若の龜を獻ぜよと。龜至る。君再び之を殺さんと欲し、再び之を活さんと欲す。心疑ふ。之を卜す。曰く、龜を殺して以て卜せば、吉なりと。乃ち龜を刳る。七十二鑽して、遺筴なし。

大意 神龜が余且に捕はれて、一旦元君に救はれたが、遂に殺されて、占卜に用ひた。即ちこの話を以て、次の小知大知の議論を引き起すのである。

通釋 宋の元君が夜中に夢を見た。其の夢に、一人の男が髮をふり亂して、門側の小門を窺ひつゝ告げて言つた。「俺は宰路の淵から來た者で、清江の神の爲めに、河伯の所へ使に往くのである。しかし悲しい哉、漁者の余且といふ者のために生捕られて了つた」と。元君が夢から覺めて之を占はした。卜者は「それは神龜である」と言つた。元君は、「漁師に余且といふ者が有るか」と尋ねた。左右の臣は有る旨を答へると、元君は之を朝廷に召し出すやうに命じた。翌日余且は朝廷にやつて來た。元君は問うた「汝は出漁して何を捕へたか」と。余且は答へた。「私の網に白い龜がかゝりました。其の甲の廣さは五尺もあります」と。そこで元君は「汝の龜を獻ぜよ」と命じた。やがて龜は獻上されて朝廷に至つた。元君は之を殺さうか、活かさうかと再三考へたが、心が惑うて決することが出來ない。又之を占はした。すると、其の卜は「其の龜を殺して占へば吉である」と出て來た。元君は早速之を殺して、

下（成疏に曰く「脩は長なり。趨は短なり」と。上半身が長くて、下半身が短い。」）○末僂而後耳（釋文に「李云ふ、末僂とは背脊を謂ふと。司馬云ふ、後耳とは耳後に卻「チカ」しと」。背部が前に曲がつてゐて耳が後方についてゐる。）○去汝躬矜與汝容知（釋文に曰く「躬矜は身矜つて善行を脩むることを爲す。容知は知を飾つて容好と爲すを謂ふ」と。史記の老莊列傳に曰く「老子が孔子の禮を問ふに對へて曰く、子の驕氣と多欲と、態色と淫志とを去れ●是れ皆子の身に益無し」と。これと同じ意味であらう。）○固窶邪（成疏に曰く「固く聖迹を執つて、抑揚從ひ、已に本性を失ふ。故に窮窶す」と。窶を又貧困と解する說あるも採らず。）○惠以歡爲驁（林希逸曰く「惠は惠を人に施すなり。歡は人の歡心を得ることを欲するなり。惠を施して人の歡心を得るを以て驁と爲す」と。）○中民之行進焉耳（宣穎曰く「中民とは庸民なり」と。凡人の爲す所は務めてこゝに至るのみの意。）○相引以名、相結以隱（林希逸曰く「名を以て相ひ汲引して、隱蔽の計を以て自ら相ひ交結す」と。●隱を惻隱の情と解する說もある。今は從はない。）○聖人躊躇以興事（成疏に曰く「躊躇は從容なり」と。林希逸曰く「躊躇は進まんと欲して進まざるの意なり。躊躇を以て事を興すとは、卽ち已むを得ずして、而して後應ずるなり。惟其れ無心なり。故に毎ごとに功を成す」と。林希逸の說を妥當とす。）

宋元君夜半而夢。人被髮闚阿門、曰、予自宰路之淵。予爲清江使河伯之所。漁者余且得予。元君覺、使人占之。曰、此神龜也。君曰、漁者有余且乎。左右曰、有。君曰、令余且會朝。明日余且朝。君曰、漁何得。對曰、且之網、得白龜焉。其圓五尺。君曰、獻若之龜。龜至。君再欲殺之、再欲活之。心疑。卜之、曰、殺龜以卜、吉。乃刳龜。七十二鑽、而無遺筴。

訓讀 宋の元君、夜半にして夢む。人、被髮して阿門を闚うて、曰く、予は宰路の淵よりす。予は清江の爲めに

して、其の上半身は長く、下半身は短く、其の背は少し曲り、耳は稍ゝ後について垂れてゐる。其の目附を見ると四海の内を經營せんとの慨世の色が浮かんでゐます。一體誰の子か分りません」と。老萊子は、「それは孔丘であらう、呼んで來い」と言つた。やがて仲尼がやつて來ると老萊子はまづ言つた「丘よ、汝の身のまはりを飾つて矜りを持つことゝ、汝の容貌を知慧者らしく裝ふこととを除いてしまへ。さうしたら君子と爲ることが出來よう」。仲尼は恭しく禮をして少し退き、蹙然と驚いた樣子で容を改めて問うた。「斯くの如くして學業は果して向上致しませうか」。老萊子は答へた。「抑ゝ汝は現世の亂れて民の傷み悲むのを見て、之を救はんとして仁義を唱へるが、それは却つて萬世の後に對して禍患を殘して誇つてゐるものだ。一體汝の運命はまさに窮してゐるためなのか、それとも汝の知略の及ばざるが爲か。それ人に恩惠を施して其の歡心を買つて得意になつて營々としてゐるのは、まことに終生の恥辱である。これは凡人だけが行ひ進む所である。又凡人は互に名聲を以て引き合ひ、隱蔽の情を以て相結ぶのである。堯帝を聖人として譽め尊び、桀を暴君として斥けるよりは、寧ろ是非兩つながら忘れて、其の毀譽する所を閉ぢて、無爲に安んずるに越したことはない。自然に反すれば必ず道を傷つけ、靜を破つて動けば、邪僻に陥らないことはない。聖人は常に控へ目にして已むことを得ずして立つて事を爲し、それに依つて成功するものである。汝はどうして、そんなに營々として事にかゝはつてゐるか。そんなことでは終生自負矜持の執着から脱することは出來まい。

語釋　老萊子（古來老聃と同じ人かと疑はれてゐる。史記の老莊列傳に曰く「或は曰く、老萊子も亦楚人なり。書十五篇を著はし、道德家の用を言ふ。孔子と時を同くす」と。成疏に曰く「楚の賢人にして隱者なり。常に蒙山に隱る」と。）　○脩上而趨

邪。惠以歡爲驚。終身之醜。中民之行進焉耳。相引以名、相結以隱。與其譽堯而非桀、不如兩忘而閉其所譽。反無非傷也。動無非邪也。聖人躊躇以興事、以每成功、奈何哉其載焉、終矜爾。

訓讀 老萊子の弟子出でゝ薪とる。仲尼に遇ふ。反つて以て告げて曰く。彼に人あり、脩上にして趨下、末僂にして後耳、視ること四海を營むが若し。知らず其の誰氏の子なるをと。老萊子曰く、是れ丘なり、召して來れと。仲尼至る。曰く、丘、汝の躬矜と、汝の容知とを去らば、斯れ君子たりと。仲尼揖して退き、蹙然として容を改めて問うて曰く、業進むことを得べきやと。老萊子曰く、夫れ一世の傷に忍びずして萬世の患に驚る。抑ゝ固より窶まんとにや、其の略亡くして及ばざるにや。惠むに歡を以てして驚ることを爲すは、終身の醜なり。中民の行進、むのみ、相引くに名を以てし、相結ぶに隱を以てす。其堯を譽めて桀を非らんより、兩つながら忘れて、其の譽むる所を閉ぢんには如かず。反すれば傷に非ざること無きなり。動けば邪にあらざること無きなり。聖人躊躇して以て事を興し、以て每に功を成り、奈何ぞ其れ載とせん、矜に終らんのみと。

大意 老萊子の孔丘に敎ふる言をかりて、仁義禮樂の形骸を破つて、無爲自然の大道に歸すべきを說く。

通釋 老萊子の弟子が薪を取りに出て仲尼に出遇つた。家に反つて師匠に告げて言ふやうには「彼處に人が居ま

下知して、「既に東が白らんで來た。仕事の具合はどうだ」と言つた。輩下の小儒の連中は答へた。「まだ上衣を剝いだのみで、下裳や襦袢を脫がせない。口中を見ると尙ほ珠をくはへてゐる。古詩にも、『靑々たる麥が陵墓に茂つてゐる。卽ち墓も幾もなく廢墟となつて麥が茂るやうになる。且つ生前中に何の恩德をも施さない者が、死んで珠などを含み、永久に餓ゑないことを望むとは何事だ』と言つてゐる」と言ひながら、やがて死人の鬢を攫み上げて其の頤下を抑へ、鐵錐で頤をたゝいて、徐ろに口を開けて、口中の珠を上手に傷もつけずに盜みとつてしまつた。今の儒者は此の如く、詩禮を惡用して己の姦をなすのである。

語釋 臚傳（釋文に「字林、漢書に注して云ふ、上より傳語して下に告ぐるを臚と曰ふ」と。穴の上から下に向って言ふ意である。） ○裙襦（裙は下裳を謂ふ。襦は肌着である。） ○靑靑之麥詩（成疏に曰く、「逸詩なり、凡そ貴人葬者は口に多く珠を含む。故に靑々の詩を誦して之を刺る」と。陵陂は陵の傾斜せる所。） ○接其鬢（成疏に曰く「接は撮なり」と。鬢毛をつかむこと。） ○擪其顪（擪は一本に壓に作る。釋文に「字林云ふ、「擪は一指にて按ふるなり」と。顪は司馬云ふ「頤下の毛なり」と。） ○控其頤（控は或は「引なり」と注し、或は「打なり」と注す。今は今者に從つて其の頤をたゝくと解す。）

老萊子之弟子出薪。遇仲尼。反以告曰、有人於彼。脩上而趨下、末僂而後耳、視若營四海。不知其誰氏之子。老萊子曰、是丘也。召而來。仲尼至。曰、丘去汝躬矜、與汝容知、斯爲君子矣。仲尼揖而退、蹙然改容而問曰、業可得進乎。老萊子曰、夫不忍一世之傷、而驁萬世之患。抑固窶邪。亡其略弗及

(釋文に「李云ふ、詮は量なり」と。陸樹芝曰く「舊説に、詮ずとは人才を詳論するなり。詶説とは往事を詶説するなり」と。)　○竿累(累とは綸なり。小竿とは細糸の意。)　○灌瀆(釋文に「司馬云ふ、溉灌の瀆なりと」。田畑の灌漑用の小溝である、)
○鯢鮒(釋文に「李云ふ、皆小魚なりと」。)　○干縣令(縣令の官名を秦以後のものとして、縣令を或は高き令聞といひ、或は掲示と解す。卽ち掲示するところのものに合はんことを求むと。しかし此の雜篇の制作年代を下して秦漢當時となすの説に從へば、縣令は又縣の長官と解して異義はないと思ふ。)

儒以詩禮發冢。大儒臚傳曰、東方作矣。事之何若。小儒曰、未解裙襦、口中有珠。詩固有之曰、青青之麥、生於陵陂、生不布施、死何含珠爲。接其鬢、擪其顪、儒以金椎控其頤、徐別其頰、無傷口中珠。

訓讀　儒あり、詩禮を以て冢を發く。大儒、臚傳して曰く、東方作る、之を事とすること何若んと。小儒曰く、未だ裙襦を解かず、口中に珠あり。詩に固より之あり、曰く、青青の麥、陵陂に生ず。生きて布施せず、死して何ぞ珠を含むことを爲んと。其の鬢を接り、其の顪を擪へ、儒、金椎を以て其の頤を控ち、徐に其の頰を別け、口中の珠を傷つくること無しと。

大意　現代の儒者の詩書禮樂を利用して、却つて罪惡を犯してゐることを、墓を發く盜賊にたとへて罵つたのである。

通釋　小儒があつて、詩書禮樂を標榜しながら、夜中に人の塚を發いて物を盜まうとする。頭分の大儒が配下に

瀆に趨き、鯢鮒を守れば、其の大魚を得るに於て難し。小說を飾りて以て縣令に干むるは、其の大に達するに於て亦遠し。是を以て未だ嘗て任氏の風俗を聞かざるもの、其の與に世を經すべからざるも亦遠し。

【大意】志すことの大小を論じ　小志を抱く者の共に大を語り、大を爲すに足らざることを述ぶ。

【通釋】任國の公子が大きな釣針と太い繩とを爲つて、五十頭の犍牛卽ち去勢された牛を餌として、會稽山に腰を下し　竿を東海に投じて每日釣をした。一年經つても魚がかゝらない。所がやつと大魚が引つかゝつて　餌を食ひ釣針を牽いて水中深く潛沈して行つた。又しばらくして、非常な速力で水上に馳せ揚つて鬐を奮ふと、山のやうな白波が立ち、海水は震動して、其の聲は鬼神の唸る如くで、千里の外までも人々を畏れをのゝかしめた。公子は終にこんな魚を釣り上げて、之を切り離して乾肉にした。淛河以東、蒼梧山以北の人は　皆此の魚の肉に飽かない者はなかつた。其の後、小才なる淺見諷說の輩は、此の絕大なる話を驚いて相語り合つてゐる。彼の小さな竿に細い糸をつけたのを揚げ、田閒の小瀆に在つて、鯢や鮒ばかりを見守つてゐる者は、こんな大魚を得ることは思ひもよらない。之と同じく、彼の淺陋なる說辭を飾つて、一地方の縣令に向つて採用を求むる者は、大した出世は及びもつかぬことである。されば之れ迄、未だ任公子の風を聞いたことのない。卽ち眼前の小事に心を勞して、大なるものに心を向くべきことを知らない者は、ともに世を經綸するに足らざる庸才である。

【語釋】任公子（釋文に「李云ふ、任は國名なり」。任國の公子。）〇巨緇（大なる黑索をいふ。ふといつり繩である。）〇犗（釋文に曰く「犍牛なり」と。牛の去勢されたもの。）〇錎沒（釋文に「字林に猶ほ陷の字のごとし」と。深く沈むこと。）〇鶩揚（鶩は釋文に「一本に驚に作る」と。驚は奔、馳することで、水中から馳せ揚る意。）〇憚赫千里（釋文に「千里皆懼るを言ふ」と。林希逸曰く「憚赫は驚恐せしむるなり」と。）〇輇才諷說之徒

波臣(釋文に「司馬云ふ、大海の臣を謂ふと」。林希逸は「水官と曰はんがごとし」といふ。)　○常與(林希逸曰く「常の時相ひ與るものなり」と。即ち水をいふ。)　○然活耳(奚侗曰く「然るが若くんば則ち活く可きなり」と。)

任公子爲大鉤巨緇、五十犗以爲餌、蹲乎會稽、投竿東海、旦旦而釣。期年不得魚。已而大魚食之、牽巨鉤。錎沒而下、騖揚而奮鬐。白波若山、海水震蕩、聲侔鬼神、憚赫千里。任公子得若魚、離而腊之。自淛河以東、蒼梧已北、莫不厭若魚者。已而後世輇才諷說之徒、皆驚而相告也。夫揭竿累、趣灌瀆、守鯢鮒、其於得大魚難矣。飾小說以干縣令、其於大達亦遠矣。是以未嘗聞任氏之風俗、其不可與經於世亦遠矣。

訓讀　任公子、大鉤巨緇を爲り、五十犗を以て餌と爲し、會稽に蹲まり、竿を東海に投じて、旦旦にして釣る。期年にして魚を得ず。已にして大魚之を食ひ、巨鉤を牽く。錎沒して下り、騖揚して鬐を奮ふ。白波山の若く、海水震蕩して、聲、鬼神に侔しく、千里を憚赫す。任公子若き魚を得、離きて之を腊にす。淛河より以東、蒼梧より已北、若き魚に厭かざるもの莫し。已にして後世輇才諷說の徒、皆驚いて相告ぐるなり。夫れ竿累を揭げ、灌

周、顧視すれば、車轍中に鮒魚あり、周、之に問うて曰く、鮒魚來れ、子は何する者ぞやと。對へて曰く、我は東海の波臣なり、君豈に斗升の水あつて我を活かさんかと。周曰く、諾、我れ且に南、吳越の王に遊ばんとす。西江の水を激して、子を迎ふる、可ならんかと。鮒魚忿然として色を作して曰く、吾れ我が常與を失ひ、我れ處る所なし。吾れ斗升の水を得ば然かも活きんのみ。君乃ち此を言ふ、曾て早く我を枯魚の肆に索めんには如かずと。

大意 有名な話の一節である。人は當に緩急宜しきに從つて爲すべきことが有ることを說く。

通釋 莊子は家が貧しかつた。或る時、監河侯の處へ米粟を借りに往つた。監河侯が曰ふには「宜しい、但し暫く待て、これから領地の百姓達から稅金を取り立てた上で、三百金を貸與しようと思ふ。それで宜しいか」。莊子は怫然として顏色を易へて言つた。「私が昨日こゝへ參る時、途中で私に呼びかける者があつた。振りかへつて見ると、往來の車轍の跡の僅かな水溜りに一尾の鮒がゐた。私は之に向つて『鮒よ、汝は一體何にものだ』と聞いた。すると彼は『私は東海の波臣です。何とかあなたは斗升の水を持つて來て私を生かして下さいませんか』と言つた。私はそこで答へた。『宜しい、私はこれから南方吳越の王に遊說してから、西江の水を激して來て、汝を迎へようと思ふが、それでどうだ』。鮒魚は之を聞いて、忿然色をなして怒つて言つた。『私は今必須の水を失つて處る所がない。たゞ斗升の水さへ得れば活きられるのだ。然かも君のやうに氣の永いことを言つてゐては、まあ、早く私の死んだ形骸を乾魚店に行つてお索めになつた方がましです』と。あなたの今のお話は此と同じではありませんか」。

語釋 監河侯（釋文に曰く「說苑に魏の文侯に作る」と。林希逸曰く「說苑に曰く、魏の文侯なりと。亦必ずしも然らず。或は是れ監河の官、侯を以て之をするか、然らずんば則ち侯は是れ其の姓なり」と。）○邑金（采邑の租稅の金をいふ。）○

○鷕淳（成疏に曰く、「猶ほ怵惕のごとし」と。林希逸は之を歔延して自らからざるの意なり」といふ。今之を採る。）　○慰暋沈屯（釋文に「慰は鬱なり、暋は悶なり。司馬云ふ、沈は深なり、屯は難なりと」。沈屯は險難に沈淪する意であらう。）　○月固不勝火（林希逸曰く、「月は性なり。衆人の生、其の天に得たるもの全し。此れ至和の理、猶月の如く然り。但し物慾のために汨まされて、其の災火の如し。故に月たるもの之に勝つこと能はず。遂に和を焚くに至る。）　○僨然而道盡（又曰く、「僨然とは仆敗の義なり。道とは生道を謂ふ。道盡くとは、則ち形神之と俱に盡くるなり」と。之に從ふ。）

莊周家貧。故往貸粟於監河侯。監河侯曰、諾、我將得邑金。將貸子三百金、可乎。莊周忿然作色曰、周昨來、有中道而呼者。周顧視、車轍中有鮒魚焉。周問之曰、鮒魚來、子何爲者邪。對曰、我東海之波臣也、君豈有斗升之水而活我哉。周曰、諾、我且南遊吳越之王。激西江之水而迎子、可乎。鮒魚忿然作色曰、吾失我常與、我無所處。吾得斗升之水然活耳。君乃言此、曾不如早索我於枯魚之肆。

訓讀 莊周、家貧なり。故に往いて粟を監河侯に貸る。監河侯曰く、諾、我れ將に邑金を得んとす。將に子に三百金を貸さんとす、可ならんかと。莊周忿然として色を作して曰く、周、昨來るとき、中道にして呼ぶものあり。

て刑戮に遇ひ、其の屍は江に流された。萇弘は蜀に放たれて自殺した。蜀人が之を哀んで、其の血を保存して三年經つたら、化して碧玉と爲つてゐた。其の赤誠是の如くであつて、而かも其の君からは信ぜられなかつた。又親としては其の子の孝養を欲せぬものはないが、しかし孝子必ずしも親に愛せらるゝものとは限つてゐない。されば孝己は繼母の難に遇つて憂死し、曾參は父母の憎しみを受けて常に悲んだ。是れ皆孝にして愛せられないものである。木と木と摩擦すると火を發して燒き、金は堅いものだが、火と守りあへば、金は熔けて流れるのである。陰陽調和を失つて錯雜すると、天地の氣が伸びずに亂れて、雷となり、霆となつて相轟き、雨中に電火が起つて大槐を燒くことがある。斯くの如く、天災地變に遇ふか、又は人事の憂患に遇ふか、人は兩天秤にかけられたやうで、全く逃がるゝ由もない。常に畏懼して、心の安んずることがなく、心の動いて定まらざることは、空中に懸る旗の如くである。則ち鬱悶し、沈淪し、外物に執して、利害の念常に摩擦し合つて、火を生ずることが甚だ多い。大抵の人は此の火によつて、内心の和を燒き盡くすのである。性の靜明なることは月の如くであるが、物欲の火には勝たずして、遂に焚き滅ぼされる。斯くて性命の情は全く毀損せられて、生道は盡き果てゝ、形神倶に亡んでしまふ。

語釋 外物（林西仲曰く「外より來る所の禍福なり」と。外物を身外の事と解するのを通說とするも、今は林西仲に從ふ。） ○惡來（成疏に曰く「惡來は紂の佞臣なり」と。史記の殷本紀に依ると、惡來は有力の士で紂に仕へ、諸侯を毀讒した。武王が紂を伐つた時、併せて之を殺したといふ。） ○化爲レ碧（釋文に「呂氏春秋に、其の血を藏すること三年、化して碧玉となる」と。弘が忠にして流されたのを恨んで、腹を切つて死んだ。蜀人之に感じて、匱を以て其の血を盛る。三年したら化して碧玉となつた。精誠の至りといはれてゐる。） ○孝己憂（釋文に「李云ふ、殷の高宗の太子と」。繼母の難に遭ひ憂苦して死すといふ。） ○曾參悲（成疏に曰く「曾參は至孝、而かも父母之を憎む。常に父母の擲つに遭ひ、死地に鄰せり。故に悲泣するなり」と。） ○天地大絯（釋文に曰く、「絯は音駭」。陸樹芝曰く「絯は束なり。天地方に且に物に絯せらると。是れ牽絆して解けざる意」と。天地の氣が鬱して伸びずに紛亂すること。） ○焚二大槐一（雷火のために樹木を燒く義。林希逸曰く「槐と曰ふは、槐は能く火を生ず。故に槐を以て之を言ふ」と。）

屯、利害相摩、生火甚多。衆人焚和。月固不勝火。於是乎有僓然而道盡。

訓讀　外物は必とすべからず。故に龍逢は誅せられ、比干は戮せられ、箕子は狂し、惡來は死し、桀紂は亡ぶ。人主其の臣の忠なるを欲せざること莫くして、忠未だ必ずしも信ぜられず、故に伍員は江に流され、萇弘は蜀に死し、其の血を藏する三年にして化して碧と爲る。人の親、其の子の孝を欲せざること莫し、而して孝未だ必ずしも愛せられず、故に孝己は憂へて曾參は悲しむ。木と木と相摩すれば則ち然え、金と火と相守れば則ち流る。陰陽錯行すれば、則ち天地大に絯く、是に於てか雷あり霆あり、水中に火あつて、乃ち大槐を焚く。甚憂の兩陷するあつて而して逃るゝ所なし、螴蜳、成るを得ず、心、天地の閒に懸るが若し。慰暋沈屯、利害相摩して、火を生ずること甚だ多し。衆人和を焚く。月固より火に勝たず。是に於てか僓然たることありて、道盡く。

大意　外物の我々に齎す所のものは、因果の理甚だ定まらないものであるが、悲しい哉、人は此の外物に執して、尊い性命を焚き盡くすものである。

通釋　凡て外より來る禍福は一向に當てになるものでない。何となれば大忠臣たる龍逢は誅せられ、比干は戮せられ、箕子は佯つて狂人となつて僅かに生命を保つた。又佞臣惡來は殺され、暴君たる桀紂は亡ぼされた。外より來る應報の一定の標準なきことかくの如くで、善惡共に其の終を全うしてゐない。凡そ人主として臣の忠節を欲しない者はないが、其の忠臣必ずしも君の信任を得るとは限つてゐない。故に、伍子胥は吳王夫差を諫めて、却つ

雜篇　外物第二十六

叙説　元來外物たる因果報應の理も甚だ定まらないであるが、悲しい哉人間は此の外界の事象に執着して自然の眞知を失ふ。篇中に或は大知を說き、或は無用の用を論じ、或は心の天遊を說いて、外物の拘束を脱して無爲の玄境に去來することを述べてゐる。最後に不言の眞人を得て、之と語らんかなの希望を殘し、現代に其の人無きを悲しんだのは此の一篇を總べて餘りあるものだ。

外物不可必。故龍逢誅、比干戮、箕子狂、惡來死、桀紂亡。人主莫不欲其臣之忠、而忠未必信。故伍員流於江、萇弘死於蜀、藏其血三年而化爲碧。人親莫不欲其子之孝、而孝未必愛。故孝己憂而曾參悲。木與木相摩則然。金與火相守則流。陰陽錯行、則天地大絯、於是乎有雷有霆、水中有火、乃焚大槐。有甚憂兩陷而無所逃、螴蜳不得成。心若懸於天地之閒。慰暋沈

徂み留むることは出來ない。死生は眼前に去來するもので其の理は遠くないが、しかし其の理を觀ることは出來ない。或は道の主宰を認め、或は無爲を唱ふるも、人の疑惑の假りて生ずる所である。今吾れ道の本源に立つて、根本を見れば其の往くこと窮りなく、枝葉を見れば、其の來ること亦止むことなく、本末往來して窮りあるものでない。既に無窮無止にして終始生滅なき以上、到底言葉を以て表現し得る所でなく、たゞ萬物と理を一にして、其の唯一絶對の理に歸するより外に仕方がない。道の主宰を認むるか、認めないかは、議論の因つて起る本であつて、未だ物と終始して離脱することは出來ない。道は本來有にも非ず、無にも非ず、有無を絶したものである。道といふ名すら便宜上の假名にすぎない。だから道に主宰が有らうが、無からうが、それは一部分に偏した見方であつて、大道に何の關する所が有らうや、何も關しない。均しく言つて言語にわたるも、果して見得した所があつての上なら、終日道を語るも、道を離れない。均しく言語にわたつても、果して見る所が無かつたら、終日道を語るも、全く物を離れず、外物の間に彷徨して道を去ること遠い。本來道なるものは物の至極である。之を言默の間に求むるも盡すに足らない。非言非默にして、心に其の妙諦を覺得するより外に方法はない。須らく語默を離れて、無極の中に存する道の働き、即ち無極中の有極の理を發見すべきである。」

【語釋】已死不レ可レ徂（釋文に曰く「徂は一本阻に作る」と。成疏に曰く「忽然として死して、何の礙阻するところか有らん」と）○言之無也（言語の及ぶ所に非ざるを云ふ●）○在二物一曲一（物の一邊、一局部に飽在するの意である。）

有極。

訓讀 使むるものあるは則ち實、爲すある莫ければ則ち虛。名有り實あるは、是れ物の居。名なく實なきは、物の虛に在り。言ふべく意ふべく、言へば愈ゝ疏なり。未だ生ぜざるは忌むべからず。已に死するは徂むべからず。死生は遠きにあらざるなり、理は覩るべからず。之を使むるものあると、之を爲すある莫きとは、疑の假る所のみ。吾れ之を本に觀れば、其の往くや窮りなく、吾れ之を末に求むれば、其の來るや止むなし。窮り無く止むなきは、言の無きなり、物と理を同じうす。使むるものあると爲すあるなきとは、言の本なり、物と終始す。道は有りとすべからず。有は無しとすべからず。道の名たり、假りて而して行ふ所、使むるものあると爲すある莫きとは、物の一曲にあり、夫れ大方に胡をか爲さん。言つて足れば、則ち終日言つて盡く道ならん。言つて足らざれば、則ち終日言つて盡く物ならん。道は物の極なり。言默以て載すに足らず。言に非ず默に非ずして、其の有極を議せよと。

大意 有無の念、虛實の相を離れたる大道の眞相を說き、非言非默の閒に之を妙得すべきを說く。

通釋 或使の說は、物の主宰たることを認めたもので實に執し、莫爲は道の無を以てするもので虛に拘はつてゐる。名あり、實あるものは、是れ物の中に在るものである。名無く、實なきものは名實共に無にして、物の虛の中に在るものである。何れにしても言葉や意志を以て道を見んとするもので、言意を働かせば、愈ゝ道と相去ること遠くなる。生死亦自ら道のまゝにして、未だ生まれざるものを、人が忌み止むることは出來ない。既に死んだ者を、

るのは、此の現象界の物其のものを離れることの出來ないものであつて、終にそれすら過つたものである。

【語釋】季眞接子（成疏に曰く「季子接子は並に齊の賢人なり。倶に稷下に遊ぶ。故に二賢に託して、理の爲すことなきや、爲さしむるものなるやを明かにす」と。郭慶藩は二子の考證を評說するも、要するに確かな證據のある人ではない。）○或使（兪樾曰く「或は有なり」と。上の莫爲に對して有爲と云ふべき所で、主宰者の有ることを意味す。）○不能以意其所將爲（意の下に悦字ありとして、或は「以」を補ひ、或は「解」を入るゝ說があるが、このまゝでも解釋するに苦しまない。卽ち其の言語に依つて、何を爲さんとするかを臆度することはむづかしいの意。）○精至於無倫（精は細な、倫は類であつて、其の精微比類なき意。）○不可圍（其の外から圍むことの出來ない意味である。秋水篇に、「至大は圍むべからず」とある。）

或使則實、莫爲則虛。有名有實、是物之居。無名無實、在物之虛。可言可意、言而愈疏。未生不可忌。已死不可徂。死生非遠也、理不可覩。或之使、莫之爲、疑之所假。吾觀之本、其往無窮。吾求之末、其來無止。無窮無止、言之無也。與物同理。或使莫爲、言之本也、與物終始。道不可有。有不可無。道之爲名、所假而行。或使莫爲、在物一曲、夫胡爲於大方。言而足、則終日言而盡道。言而不足、則終日言而盡物。道物之極。言默不足以載。非言非默、議其

以意其所將爲。斯而析之、精至於無倫、大至於不可圍。或之使、莫之爲、未免於物而終以爲過。

訓讀 少知曰く、季眞の爲すある莫きと、接子の使しむるものあると、二家の議、孰れか其の情に正しく、孰れか其の理に偏ねきと。太公調曰く、鷄鳴狗吠、是れ人の知る所、大知ありと雖も、言を以て其の自ら化する所を讀むこと能はず。又以て其の將に爲さんとする所を意ふ能はず。斯にして之を析てば、精は倫なきに至り、大は圍むべからざるに至る。之を使むるものあると之を爲すある莫きと、未だ物に免れずして、而して終に以て過たり。

大意 大道の言説有無の見を絶したる絶對至妙の働きなることを説く。

通釋 少知が又問うた。「季眞が道は無爲にして萬物遇然に生ずるものといひ、接子が道は冥々の中に主宰する者があるといふが、一體此の二家の説は、何れが其の眞實に當り、普遍の理を得たものであるか、御敎へが願ひ度い」。太公調は次の如く答へた。「鷄が鳴き、犬が吠へるのは誰も知る所であるが、如何に大知の人でも、其の聲を聞いて、鷄が何に依つて鳴き、犬が何に依つて吠へるやうに造化せられたかを知ることはむつかしい。又其の鷄鳴や犬吠をきいて彼等が一體何を爲さんとしてゐるかを想ひ量かることは出來ない。斯く極く卑近な禽獸ですら然うであるから、況して道に至つては言ふまでもない。道の至妙な働きに至つては、之を分析すれば無倫の至小にまで至り、大にしては抱擁すべからざる至大のものとなるのである。畢竟するに道は無爲なるか、有爲なるか等と議論す

し、陰陽四時の消長によつて自然の内に萬物は生ずるものである。欲惡去就の起ることも、雌雄の相合し相離るゝことも、此の自然の消長の法則の中に活在してゐる。安危相易り、禍福相生じ、緩急互に交代し、聚散又巡り來つて已むことがない。是れ皆天地陰陽の相感應する結果である。是等は皆名と實と相求めることが出來、其の精微をも皆誌るすことが出來る。斯く四時の順序よく運行して相治め、陰陽が生起消長し互に相制使して、窮まれば則ち反り、終れば則ち復始まるは、萬物自然なるところであつて、有るまゝの狀態である。言葉を以て盡すことの出來る所、知を以て至り得る所は、たゞ此の形而下の物を窮むるのみで、まだ自然の妙理に至らない。故に眞に道を得た所の人は、物の廢棄消滅を追はず、從つて其の生起する由來を尋ねることもしない。一切無に歸し、自然そのまゝとなるのである。こゝに至つて言論も亦止まつてしまふのである。

語釋 相蓋（兪樾曰く「蓋は當に盍んで害と爲すべし、爾雅釋言に、蓋は割裂なり」と。即ち陰陽相害する意で、下の相治と相對す。）○橋起（成疏に曰く「起る貌なり」と。起ることの高くはつきりしてゐる意である。）○此名實之可レ紀、精之可レ志也（成疏に曰く「誌は記なり。夫れ陰陽の內、天地の間、實たり、名有り。故に綱すべく紀す可し」と。即ち相對界のことは、紀すべく誌るすことが出來るの意。）○橋運之相使（橋は前の橋起の橋である。陰陽が互に起つて制し合つて循還するの意である。）

少知曰、季眞之莫レ爲、接子之或レ使、二家之議、孰正二於其情一、孰偏二於其理一。太公調曰、鷄鳴狗吠、是人之所レ知、雖レ有二大知一、不レ能下以レ言讀中其所二自化一。又不レ能上

相治。四時相代、相生相殺。欲惡去就、於是橋起、雌雄片合、於是庸有、安危相易、禍福相生、緩急相摩、聚散以成。此名實之可紀、精之可志也。隨序之相理、橋運之相使、窮則反、終則始。此物之所有。言之所盡、知之所至、極物而已。覩道之人、不隨其所廢、不原其所起。此議之所止。

訓讀 少知曰く、四方の內、六合の裏、萬物の生ずる所惡にか起ると。太公調曰く、陰陽相照らし、相蓋ひ相治む。四時相代はり、相生じ相殺す。欲惡去就、是に於て橋起し、雌雄片合、是に於て庸に有り、安危相易はり、禍福相生じ、緩急相摩し、聚散以て成る。此れ名實の紀すべく、精の志すべきなり。隨序の相理め、橋運の相使ふ、窮まれば則ち反り、終れば則ち始まる。此れ物の有る所なり。言の盡くす所、知の至る所は、物を極むるのみ。道を覩るの人は、其の廢する所に隨はず、其の起る所を原ねず。此れ議の止まる所なりと。

大意 前節を繼いで更に、萬象は自然の順行の中に生滅流轉するものであつて、得道の人は此の理を悟つて無爲であることを說く。

通釋 少知又問うた。「四方の內、六合の裡、卽ち此の宇宙間に生ずる所の森羅萬象は何處から起つて來るものであるか」。太公調は又次の如く答へた。「陰陽が相應じ、相合し、相消長し、四時が相代つて春生秋殺し、夏去冬來

陰陽は氣の大なるものなり。道は之が公たり、其の大に因つて、以て號して之を讀まば則ち可なり。已に之あり、乃ち將た比するを得んや。則ち若し斯を以て辯ぜば、譬へば猶ほ狗馬のごとし。其の及ばざること遠しと。

大意　前節をうけて、至道の廣大にして、言葉を以て説明し難きことを論ず。

通釋　少知は又「然らば之を道と謂つてよいか」と問うた。太公調は之に答へて言つた。「いやさうは參らぬ。今譬へば、宇宙間の物を計るに、其の數無限にして決して萬といふ數に止まらないが、之を限つて萬物と言ふのは、假りに名づけて號したまでゞある。されば天地は形の大きなものであり、陰陽は氣の大なるものである。そして道は此の大なる天地陰陽を包含して公平に統ぶるものであつて、其の至大なることは人知の測り知り難きところである。故に其の公大なる點から、姑らく道の名をかりて呼ぶことはよいが、已に道と云ふ以上、直ちに之を以て眞の道の公大に比することは出來ない。道は無名無形にして凡てを絶したものである。然るに此の吾人の呼ぶ所の道を以て眞の道に比較して論ずるなら、宛も狗と馬の大小とひとしく、大なる相違である。まして丘里の言などゝとは同日の談に非らざるものである。

語釋　期（成疏に曰く「限なり」と。林希逸は「期は約なり、約して之を言ふ」と。）○因其大以號而讀之則可也云云（道の本質の公平至大なことから、假りに名づけて道と呼ぶならまづよいが、既に道と言ふ上は、眞の道より一歩去つたものであるとの意である。其の大に因てを、丘里の言を受けて、丘里の言は公大なる故から推して、假りに道と名づけるのはよいが、既に人の言論なるが故に、道を去ること大に遠いと解する説もある。通じないことはないが、今ｌ採らない。）

少知曰、四方之內、六合之裏、萬物之所生惡起。太公調曰、陰陽相照、相蓋

語釋　少知問於太公調（成疏に曰く「智照狡劣、之を少知と謂ふ。太は大なり。公は正なり。道德廣大、公正にして私無く、復能く群物に調順す。故に之を太公調といふ。二人を假設して以て道理を論ず」と。）　○丘里之言（釋文に「李云ふ、四井を邑と爲す、四邑を丘と爲す。五家を鄰と爲す。五鄰を里と爲す、古は鄰里井邑土風同じからず、猶今の鄉曲各々自ら方俗有り、物の齊同ならざるが如しと」。林西仲曰く「丘里の言とは猶いはゆる公論のごとし」と。即ち種々の說のあるのを一團となした所の輿論ともいふべきものである。）　○是以自レ外入者云云（林西仲曰く「夫れ既に天下を合併して以て公と爲す、則ち當に執距の意有るべからず。外より入る者とは、言を聽くものなり。人の言を聽き、吾が心主とする所有りと雖も、一己の見を執定すべからず。中より出づる者は、言を立つる者なり。言を立て訓を垂る、正を取ること有りと雖も、他人の意を距逆すべからず。此の如くして、方に異を合して同に歸すべし」と。）　○天不レ賜（釋文に曰く「賜は與なり」と。賜與する意である。）　○禍福淳淳至（郭注に曰く「流行反覆」と。）　○自殉殊レ面（古來異論が多くて決し難い。成疏に曰く「殉は逐なり、面は向なり。夫れ彼此是非、紛然として固執す。故に各々已見を逐うて向ふ所同じからざるなり」と。今此の說に從ふ。）　○木石同レ壇（成疏に曰く「壇は基なり」と。林希逸曰く「同壇は同地なり」と。草木岩石皆地を同じくしてここに大山が形成する意である。今林希逸の說に從ふ。）

少知曰、然則謂之道足乎。太公調曰、不然。今計物之數、不止於萬、而期曰萬物者、以數之多者號而讀之也。是故天地者形之大者也、陰陽者氣之大者也。道者爲之公。因其大以號而讀之則可也。已有之矣。乃將得比哉。則若以斯辯、譬猶狗馬。其不及遠矣。

訓讀　少知曰く、然らば則ち之を道と謂つて足らんかと。太公調曰く、然らず。今、物の數を計るに、萬に止まらずして、期して萬物と曰ふは、數の多きものを以て、號して之を讀むなり。是の故に天地は形の大なるものなり、

異を合せて公と爲すのである。既に天下を併せて公となつた以上、萬物の外より入り來るものは、卽ち人の言を聽いても吾が心に主とする所有るが、一己の見を固執するものでなくよく之を同和し、又自分から出す所のものは、卽ち自分が言ふことに於いて其の內容が正しくあつても、如何なる他の異なるものをも距ぎ逆ふことがない。たとへば、春夏秋冬の四時の如く、各ゝ氣候を異にしてゐるが、天は其の自然に任せて何れにも偏して與みすることがないから、四時よく循環して一歲が成り立つのである。又五等の官は、各々其の掌る所を殊にするものであつて、君主は其の官に凡てを任じて偏私するところがないから、始めてよく治まるのである。大人は文武の二道に於て、各ゝ偏私することなく其の用に適するが故に德が全く備はり、萬物は各ゝ理を殊にするものであるが、大道は公にして私せざるが故に名はない。從つて爲すこともない。是れ反つて爲すことなくして、而かも萬物爲さゞることなきの自然の働きの有るものである。時と世とは常に變化して定まらず、禍福も反覆して至るものであつて、宛も塞翁の馬に等しい。而して今に拂りて禍となるも、後には宜しきに從つて福となるものもある。自ら私見を固執して向ふ所を異にするから、一方に於て正しくとも、一方に於て差ふこともある。大人は皆是等を合併して公と爲すもので、之を譬へば、宛も大澤の如く、其の中に異種無數の百材を有して、而かも萬物各度を保ちて混然として大澤を爲すが如く、又大山を觀るに、木石各ゝ異なるも、同じく地を均しくして混然と大山を爲してゐるやうである。斯くの如く異中同あり、同中異ありて、大自然の運行の中に抱擁されてゐる。是れを丘里の言といふのである。

以て風俗を爲せるなり。異を合して以て同と爲し、同を散じて以と異と爲す。今馬の百體を指して馬を得ず、而して馬前に係がるれば、其の百體を立てゝ之を馬と謂ふなり。是の故に丘山は卑きを積んで高きを爲し、江河は、水を合して大を爲す、大人合併して公を爲す。是を以て外より入るものは、主あれども而かも執らず。中より出づるものは、正あれども而かも距まず。四時氣を殊にして、天は賜はず、故に歳成る。五官職を殊にして、君は私せず。故に國治まる。文武大人賜はず、故に德備はる。萬物は理を殊にして、道は私せず、故に名なし。名なきが故に爲すことなく、爲すこと無くして爲さゞること無し。時に終始あり、世に變化あり、禍福淳淳として至る、拂る所あるものも宜しき所あり。自ら殉へ面を殊にすれば、正しき所あるものも差ふ所あり。大澤に比すれば、百材皆度あり。大山に觀れば、木石壇を同じくす。此を之れ丘里の言と謂ふと。

大意　丘里の言を說明して、萬物を包含して、初めて眞の働きを爲す所の大自然の妙理、即ち大人の得た公道、公知を說き出すのである。本章、五節は分けて解す。

通釋　少知は或る時太公調に對つて問うた。「丘里の言といふのは如何なる意味であるか」。太公調は次の如く答へた。「丘里とは、十姓の家、百人の人を合して、以て一つの風俗をなすものである。凡て物は異つた種々の物を合せて同と爲し、此の同を離散すれば、又種々の異つたものとなる。之を譬へば、今馬の百體を分つて、其の一部分づゝを稱して馬と爲すことは出來ない、而かも馬を眼前に繫げば、其の百體を指して馬といふやうなものである。これと同じ理由で、丘山は低いのが積み重つて高きを爲し、江河は多くの水が流れ合して大を爲し、大人は群小の

とは猶今の召對と言はんがごとしと。史鰌が靈公の妻三人と混浴して居る所に伺候して、其の醜狀を見て大に恥づと說く人もあるが、從ひ難い。入浴とは別の時に伺候した時、靈公が賢人を敬するの禮を盡すと解すべきであらう。）　○不馮其子、靈公奪而里之（林西仲曰く「馮は托なり、里は葬る所なり。銘の意は、謂らく、原葬の子孫は託すべからず。後世靈公なる者有り、奪つて葬所と爲すならんと。此は靈公の諡は前定たるを言ふなり」と。）

少知問於太公調曰、何謂丘里之言。太公調曰、丘里者、合十姓百名而以爲風俗也。合異以爲同、散同以爲異。今指馬之百體而不得馬、而係馬於前者、立其百體而謂之馬也。是故丘山積卑而爲高、江河合水而爲大、大人合併而爲公。是以自外入者、有主而不執。由中出者、有正而不距。四時殊氣、天不賜、故歲成。五官殊職、君不私、故國治。文武大人不賜、故德備。萬物殊理、道不私、故無名。無名故無爲。無爲而無不爲。時有終始、世有變化。禍福淳淳至、有所拂者而有所宜。自殉殊面、有所正者有所差。比於大澤、百材皆度。觀乎大山、木石同壇。此之謂丘里之言。

【訓讀】少知は太公調に問うて曰く、何をか丘里の言と謂ふと。太公調曰く、丘里なるものは、十姓百名を合して、

大意 凡て人事は自然に前以て定まつてゐるもので、人爲の如何ともすべからざることを說く。

通釋 孔子が太史官の大弢と伯常騫と狶韋に問うたことがある「衞の靈公は酒を飮み樂に耽つて、國家の政をきかず、又狩獵に出て網や矢で鳥獸を捕ることを事としてゐて、諸侯の交際にも應じない。かゝる無道の君に靈公と諡したる譯は一體何であらうか」。大弢は言つた。「それは國民の是とする所に因つて附けたものである」。伯常騫は言つた。「あの靈公は三人の妻が有つて、之と一緒に入浴するほどの濫行をした。しかし大夫の史鰌が奉御して王の前に進む時は、人をして其の幣帛を執つて扶けしむる程に尊敬した。靈公は慢らにして無作法なことも甚しいが、一方賢人を見ること亦斯の如く愼しみ深い所もある。是れ亂行の中に一の損せざる所の有る者であつて、此の故に靈公と諡せられたのである」。狶韋は最後に言つた。「かの靈公の死に當つて、祖先からの故墓に葬らうとして卜したところが不吉であつた。更に砂丘の地に葬らんとして卜した所が吉であつた。依つて砂丘の地を掘つて數仞の所に達すると、一つの石の棺槨を得た。之を洗つて視るとそれに銘が彫りつけてある。『其の子孫に憑り託すことは出來ない。靈公が奪つて此處に處ることゝなる』とあつた。即ち靈公の靈と諡せらるゝのは、未生以前からの久しい間の約束であつた。人の力に依つて勝手に名づけたものではない。此の二人の者はどうして此の事を識り得ようや、知らないのである」。

語釋 太史大弢伯常騫狶韋（成疏に曰く「太史とは官號なり。下の三人は皆史官の姓名なり」と。勿論三人の事に就いて詳細なことは分らない。）○田獵畢弋（成疏に曰く「畢は大綱なり。弋は繩に箭を繋して射るなり」と。田は狩獵にして畢弋は其の道具を指す。）○同濫而浴（釋文に曰く「濫は浴器なり」と。一の浴槽に混浴するのである。濫を「みだりにす」と訓ずる說あるも今は採らない。）○史鰌奉御（成疏に曰く「姓は史、字は魚、衞の賢大夫なり」。林希逸曰く「奉御

騫曰、夫靈公有妻三人、同濫而浴。史鰌奉御而進所、搏幣而扶翼。其慢若彼之甚也、見賢人若此其肅也。是其所以爲靈公也。豨韋曰、夫靈公也死、卜葬於故墓不吉、卜葬於沙丘而吉。掘之數仞、得石槨焉。洗而視之、有銘焉。曰、不馮其子、靈公奪而里之。夫靈公之爲靈也久矣。之二人何足以識之。

訓讀 仲尼、太史大弢、伯常騫、豨韋に問うて曰く、夫れ衞の靈公飲酒湛樂して、國家の政を聽かず、田獵畢弋して諸侯の際に應ぜず。其の靈公となす所以のものは何ぞやと。大弢曰く、是れ是に因れりと。伯常騫曰く、夫れ靈公に妻三人あり、濫を同じくして浴す。史鰌奉御して所に進めば、幣を搏りて扶翼せしむ。其の慢彼の若く之れ甚しく、賢人を見ること此の若く其れ肅めり。是れ其の靈公たる所以なりと。豨韋曰く、夫れ靈公の死する、故墓に葬るを卜して不吉なり、沙丘に葬るを卜すれば吉なり。之を掘ること數仞、石槨を得たり。洗つて之を視れば銘あり。曰く、其の子に馮られず、靈公奪つて之に里すと。夫れ靈公の靈たるや久し。之の二人、何ぞ以て之を識るに足らんやと。

大意 區々たる人智の絶對的知に比して頼むに足らざることを説く。

通釋 衞の蘧伯玉といふ賢者は、常に進みて止まず、其の齡六十になるまで、六十遍も變化した。そして未だ一度も、之を是なりと肯定するに始まつて、それを非なりと否定することに終らないことはなかつた。だから今の是とする所も、過去五十九年間に非とした所ではないと決定することは出來ない。又來年になつて變化するかも知れない。凡て萬物には生ずることがあるけれども、人は其の生ずることのみを見て其の根本を究め見る者はない。萬物の出づることを見ても、其の出て來る門を見る者はない。然るに人は其の知の知る所だけを尊んで、然かも其の人知の知り得ざる所を恃みて、始め知ることの出來る大知を知るものはない。何と大きな惑と謂ふべきではないか。あゝ已みなん、斯く言ふも、やはり自分は相對的の知を脫することが出來ないではないか。我が言ふ所は眞に然りとすべきものか、然りとすべからざるものか、全く言語に絶したる眞知であらうか、どうか分つたものでない。

語釋 大疑（林西仲曰く「疑は猶惑のごとし」と。疑を疑の字義に解する說あるも、今は採らない。） ○此所謂然與然乎（林希逸曰く「疑の辭なり。之を然りと謂ふか、而かも其の然りとする所、果して然りや」と。此の句に諸家の說一定でないが、今は林希逸の說に從ふ。）

仲尼問所太史大弢・伯常騫・狶韋曰、夫衞靈公飲酒湛樂、不聽國家之政。田獵畢弋、不應諸侯之際。其所以爲靈公者何邪。大弢曰、是因是也。伯常

語釋 一形失其形者退而自責（奚黙曰く「朱註に、形は當に是れ一物なるべし」と。卽ち一物でも其の性分に虧くるところあれば、其の過を自分に歸するのである。）○匿爲物而愚不識（林希逸曰く「其の物を蔽ふて言はずして、知らざるを以て愚と爲す」と。兪樾の説に依れば、釋文の一本に愚を過に作るを引きて、過は恐らく過の字の誤りならん。過は廣雅釋詁には責なりといふ。故に「識らざるを責む」と讀むべきだといふ。一説と爲すに足ると雖も、今は林希逸の説に從つて本文通りに通解す。）○日出多僞、士民安敢不僞（林希逸曰く「上に在るの人、其の出す所の攻令、一日一日に僞る。士民安ぞ僞らざることを得んや」と。）

蘧伯玉行年六十而六十化。未嘗不始於是之而卒詘之以非也。未知今之所謂是之非五十九非也。萬物有乎生而莫見其根。有乎出而莫見其門。人皆尊其知之所知、而莫知恃其知之所不知而後知。可不謂大疑乎。已乎已乎。且無所逃。此則所謂然與然乎。

訓讀 蘧伯玉、行年六十にして六十化す。未だ嘗て之を是とするに始まつて、之を詘くるに非を以てするに卒らずんばあらざるなり。未だ知らず、今の所謂是の五十九の非にあらざることを。萬物の生ずることある、而かも其の根を見ること莫し。出づることあり、而かも其の門を見ること莫し。人皆其の知の知る所を尊んで、而かも其の知の知らざる所を恃んで、而る後に知ることを知る莫し。大疑と謂はざるべけんや。已みなんか已みなんか。且に逃るゝ所なし。此れ則ち所謂然るか然らんや。

して識らざるを愚とし、大に難きを爲して敢へてせざるを罪し、重く任を爲して勝へざるを罰し、其の塗を遠くして至らざるを誅す。民知力竭くれば、則ち僞りを以て之に繼ぐ。日ゝに出でゝ僞多ければ、士民安んぞ敢へて僞らざらん。夫れ力足らざれば則ち僞り、知足らざれば則ち欺き、財足らざれば則ち盜む。盜竊の行、誰に於て責めて可ならんやと。

大意 前節をうけて、民の欺僞竊盜の如き不善の行をするのも、上に在る者のやり方が惡い爲であることを說く。

通釋 古の人に君たる者は、理に合うた得とすべきことが有れば、其の原因は民に在りと爲し、理を失つた惡いことは、其の原因を自分に在るものとした。又正しきことは民が正しいからとなし、枉がつたことは其の責めは己に在るものとなした。故に一物でも、苟も其の形を失ふことが有ると、退いて自分を反省し責めたものである。然るに現今はさうではない。大に物事を覆ひ匿しておいて、之を識らないものを愚となし、大に行ひ難き法律などを作つておいて、之を行はない者は罪して行くのである。人の力を辨へずに、重き任を與へて、之に堪へない者を罰し、人の足力を量らず、塗を遠くして期限までに至らないと刑に處するのである。民の知も竭き、力も盡くれば、遂には之に繼ぐに僞りを以てするに至る。斯くの如くして僞り欺く者が日々にませば、天下の士民之に倣つて僞らない者があらうか。だから、力が足らないと僞り、知が十分でないと僞り、財が不足すれば僞り盜み、欺僞竊盜を爲して憚らないやうになる。斯樣に不善の行が續出するのは、そも〳〵誰の罪であらうか」と。

になつた。今天下の政を爲す者は、人の病む所の榮辱の別を立て、人の爭ふ所の財貨を聚めて、然かも人々を貧窮に陥れて苦しめ、休養する時すら無からしむる有様である。斯樣な政治をやつてゐて、こんな刑罰に處せられないやうに欲しても、どうして出來やうや全く不可能である。

語釋 柏矩（成疏に曰く「柏は姓、矩は名、懐道の士にして、老子の門人なり」と。） ○辜人（釋文に「辜は罪なり。李云ふ、應に死すべきの人なりと」。俞樾は之を其の義を失ふものとなして、辜は辜磔を謂ふと解す。即ちハリツケに會つた人である。）
○推而强レ之（林西仲曰く「手を以て推して仆たしむるなり」と。强は彊と同じであるから、「タオス」と訓ずる説もあるが、從ひ難い。）

古之君レ人者、以レ得爲レ在レ民、以レ失爲レ在レ己、以レ正爲レ在レ民、以レ枉爲レ在レ己。故一形有下失二其形一者上、退而自責。今則不レ然。匿爲レ物而愚レ不レ識、大爲レ難而罪レ不レ敢、重爲レ任而罰レ不レ勝、遠二其塗一而誅レ不レ至。民知力竭、則以レ僞繼レ之。日出多レ僞、士民安敢不レ僞。夫力不レ足則僞、知不レ足則欺、財不レ足則盜。盜竊之行、於レ誰責而可乎。

訓讀 古の人に君たるものは、得を以て民に在りと爲し、失を以て己に在りと爲し、正を以て民に在りと爲し、枉を以て己に在りと爲す。故に一形も其の形を失ふものあれば、退いて自ら責む。今は則ち然らず。匿して物を爲

又之を請ふ。老聃曰く、汝將に何くより始めんとすると。曰く、齊より始めんと。齊に至り辜人を見、推して之を强ひ、朝服を解いて之を幕し、天に號んで之を哭す。曰く、子や子や、天下、大菑あり。子獨り先づ之に離れりと。曰く、盜を爲すこと莫かりしや、人を殺すを爲すこと莫かりしや。榮辱立つて然る後病む所を觀、貨財聚まりて、然る後爭ふ所を觀る。今人の病む所を立て、人の爭ふ所を聚め、人の身を窮困せしめ、休む時なからしめて、此に至る無からんことを欲すとも得んや。

大意 老子の徒柏矩の言を借りて、榮辱名利は聖人の分を立て、別を說くが爲に起り、人々之に惑ひて罪せらるゝことを說く。此の章、二節に分けて解す。

通釋 柏矩は老子に就いて學んだが、或る時老子に向つて言つた。「これから天下を遊歷して吾が道を行ひ度いと思ひます。どうかお許しが願ひ度い」。老子は答へて言つた。「已めよ、天下は何處へ行くも、こゝと同じで別に變つた所はない」。柏矩は更にお許しを願つた。已むなく老子は、「然らば汝は一體何處から始めようとするのか」と聞いた。柏矩は、「齊より始める積りであります」と答へた。柏矩は遂に齊に往つた。そして死刑になつてゐる人を見て、手を以て之を推し起し、自分の朝服を脫いで、死人を覆ひ、天を仰ぎ、號泣して曰つた。「おゝ汝よ、天下に大災があつて、汝がまづ其の災禍に罹つたのか、まことに氣の毒だ。抑も汝は盜を働いたのではないか、それとも亦人を殺したのではないか。太古至德純朴の世には、病ひも、爭ひも無かつたのであるが、後に聖人なる者が出て、榮辱の境を立て、賞罰の別を作つてから、人は初めて病むやうになり、財貨が聚められて人は初めて爭ひを生ずるやう

擾（釋文に「司馬云ふ、擾は動なり」と。丁寧に動くことである。） ○遁其天云云（成疏に曰く「自然の理を逃れ、淳和の性を散じ、眞實の情を滅ぼし、淳樸の道を失ふ者は、多く有爲に滯る故なり」と。又「以衆爲故」を一句として「故」を上に續けて讀む説もあるが、今は採らない。） ○萑葦蒹葭（釋文に曰く「萑は叢類、葦は蘆なり。蒹は藨なり、葭も亦蘆なり」と。即ち水邊に生ずる雜草をいふ。） ○始萌以扶吾形、尋擢吾性（林希逸曰く「尋は常なり、擢は拔なり」と。林西仲曰く「言ふ心は其の性地、荒穢衆欲叢生、始は吾が形を扶け、以て其の耳目の養を遂げ、隨て即ち吾が虚靜の本性を潜拔して以て病に底するなり」と。） ○並潰漏發（潰は肉の腐り崩れること、釋文に「李云ふ、精氣散泄し上は潰え下は漏れ、出づる所を擇ばざるなりと」。諸所に肉が腐敗したゞれて、膿液が流れ出づること。） ○漂疽（釋文に曰く、「瘡を病みて膿出ずるなり」と。） ○疥癰（疥は疥癬即ち寄生虫によつて出來るヒゼンを言ふ。癰とは成疏に「疽の類なり」とあり。） ○溲膏（釋文に「司馬云ふ、虚勞の人尿上に肥水沫を生ずるを謂ふなりと」。成疏には「溺精なり」といふ。小便の中に精液の漏れ出づることを謂ふ。）

伯矩學於老聃。曰、請之天下遊。老聃曰、已矣、天下猶是也。又請之。老聃曰、汝將何始。曰、始於齊。至齊、見辜人焉。推而強之、解朝服而幕之、號天而哭之。曰、子乎子乎、天下有大菑。子獨先離之。曰、莫爲盜、莫爲殺人。榮辱立、然後覩所病、貨財聚、然後覩所爭。今立人之所病、聚人之所爭、窮困人之身、使無休時。欲無至此得乎。

訓讀 柏矩は老聃に學ぶ。曰く、請ふ天下に之いて遊ばんと。老聃曰く、已めよ、天下猶ほ是のごときなりと。

略に附してはならない。民を治むるならば能く心を用ひて混亂に陥れてはならない。以前に私が稻を作つたことがある。耕作をするにぞんざいにして粗末にしたら、其の報いとして稻もろくに實らなく、粗末な米が取り入れられた。又耘つても十分心を用ひないで、目茶苦茶にしたゝめに、田は荒れ果てゝ其の收穫は少かつた。そこで其の翌年は全く法を改めて、田を深く耕して、入念に鋤き耕したら、稻は良く繁茂して收穫も多く、年中飽食することが出來た。政治の道に於ても別に異なる所でないと思ふ」と。莊子が之を聞いて、直ちに之を身を脩める喩として次のやうに言つた。「現今世人が其の身心を治める有樣は宛も長梧の封人の謂ふ所に似てゐる。其の自然の理を遁れ、其の本性から離れ、其の眞實の情をなくして了つて、其の精神まで失つてしまうのは、いろ／＼と心を外物に使つて作爲することが多いためである。故に其の天性を粗略にする者は、忽ち欲念俗惡の心が叢り生じて、宛も葦や蘆などの雜草が禾を害する如く、始めは其の肉體を扶けて官能の欲を遂げしめるが、尋いで吾が本性までも擢き取つて了ふものである。其の結果を譬へて言へば、あちらからもこちらからも、肉が腐り、臭液が漏れて、處もきらはない。又種々の腫物が身體に出來て、熱が心にこもつて、便からは精液が混つて出て來るやうなものである。全く身心を腐敗し盡くすものだ」。

語釋 長梧封人（釋文に曰く「長梧とは地名なり、封人とは封疆を守るの人」と。齊物論に長梧子なる人見ゆ。蓋し同人であらう。）○子牢（釋文に「司馬云ふ、即ち琴牢、孔子の弟子」と。郭慶藩曰く「琴張は孔子の弟子、經傳中に琴牢に作るものなし。惟孔子家語に、弟子に琴張有り、一名は牢、字は子開、亦の字は、衞人なり」と。しかし家語も魏の王肅の僞作であるとの定評に從へば、據るに足らない。詳細なことは知り得べくもない。）○鹵莽滅裂（釋文に「司馬云ふ、鹵莽とは麤粗なり。滅裂とは其の草を斷ずるなり」と」。林西仲曰く「鹵莽は土魂大にして草根疎んなるなり。滅裂とは草類を滅ぼして之を腐らすなり」と。共に一説とするに足る。）○變齊（釋文に「司馬云ふ、變は更なり、法る所を變更するを謂ふ。齊は同なりと」。舊歳の法を變更するを謂ふ。）○熟

形、理其心、多有似封人之所謂。遁其天、離其性、滅其情、亡其神、以衆爲。故鹵莽其性者、欲惡之孽、爲性萑葦蒹葭。始萌以扶吾形、尋擢吾性、竝潰漏發、不擇所出。漂疽疥癰内熱溲膏是也。

訓讀 長梧の封人子牢に問うて曰く、君政を爲すに、鹵莽なること勿れ、民を治むるに、滅裂なること勿れ。昔に予禾を爲り、耕して之を鹵莽にすれば、則ち其の實も亦鹵莽にして予に報い、芸りて之を滅裂にすれば、其の實亦滅裂して予に報いたり。予來年は變齊し、其の耕を深くして之を熟耰するに、其の禾は繁にして以て滋く、予終年厭飱せりと。莊子之を聞いて曰く、今は人の其の形を治め、其の心を理むる、多く封人の謂ふ所に似たる有り。其の天を遁れ、其の性を離れ、其の情を滅し、其の神を亡ぼすは衆爲を以てなり。故に其の性を鹵莽にするものは、欲惡の孽、性の萑葦蒹葭と爲る。始めは萌して以て吾が形を扶け、尋いで吾が性を擢き、竝潰漏發して、出づる所を擇ばず、漂疽疥癰内熱溲膏、是れなりと。

大意 農業の法を以て政治の愼むべきことを說き、更に喩を轉じて、外物のため吾人の心性を害ふてはならぬことを說く。

通釋 長梧といふ境域地方を守る役人が孔子の門人子牢に向つて斯う語つた。「若し君が政を爲すなら決して粗

路は往いて之を呼んで來ようと請ふたが、孔子は之を許さずして言つた。「止めよ、彼は俺が道を行はんとするのを自ら自分を世に顯はすものだとしてゐる。又俺が楚に往くことを知つてゐる。故に俺を楚王に薦めて召さしめる者だとしてゐる。だから彼は俺を辯佞の者とするであらう。斯樣な人は、佞人に對しては其の言葉を聞くすら羞づるものである。まして面り其の身を見ることなどは思ひもよらない。それにどうしてぢつとして家などに止まつてゐやう、最早必ず家には居まいと思ふ」。子路は強いて往つて視たが、果して逃れ去つて、其の家はからつぽであつた。

語釋 漿（釋文に「李云ふ、漿を賣る家と。司馬云ふ、逆旅の舍、菰蔣草を以て之を覆へるを謂ふなりと」。漿とは飲物の總稱である。故に酒などを賣る家と思ふ。） ○登レ極（釋文に「司馬云ふ、極とは屋棟なり、之に升りて以て觀るなりと。」林希逸なども、「望之也」と注してゐる。思ふに隱者にして孔子の來るのを屋根の棟に昇つて望見することは、考へられない。屋根を葺いてゐたといふ說もある。共に確說となすに足らない。） ○稯稯（林西仲曰く「髮亂れて整はざる貌」と。釋文に「李云ふ、聚る貌と」。頭髮のぼう〳〵として隱者らしい容貌と解すべきであらう。） ○自藏二於畔一（釋文に「王云ふ、田農の業を脩むと」。壟畔に隱遁して農に從ふのである。） ○其聲銷（郭注に曰く「其の名を損するなり」と。） ○陸沈は（釋文に「司馬云ふ、當に顯はる可くして反つて隱るゝなり。水無くして沈むが如きなりと」。山中に隱遁せずして、世俗の間に隱るゝを謂ふ。いはゆる大隱は市に隱るゝなりの義である。） ○市南宜僚（徐無鬼篇に見ゆ。）

長梧封人問二子牢一曰、君爲レ政焉勿二鹵莽一、治レ民焉勿二滅裂一。昔予爲レ禾、耕而鹵二莽之一、則其實亦鹵莽而報レ予、芸而滅二裂之一、其實亦滅裂而報レ予。予來年變レ齊、深二其耕一而熟二耰之一、其禾繁以滋、予終年厭レ飧。莊子聞レ之曰、今人之治二其

【訓讀】孔子楚に之き、蟻丘の漿に舍る。其の鄰に夫妻臣妾の極に登るものあり。子路曰く、是の稯稯たるは何爲るものぞやと。仲尼曰く、是れ聖人の僕なり。是れ自ら民に埋もれ、自ら畔に藏れたり。其の聲は銷え、其の志は窮りなし。其の口言ふと雖も、其の心は未だ嘗て言はず。方に且に世と違つて、心之と與に俱にするを屑しとせざらんとす、是れ陸沈なるものなり。是れ其れ市南宜僚かと。子路往いて之を召さんと請ふ。孔子曰く、已めよ。彼れ丘の己を著すを知れり。丘の楚に適くを知れり、丘を以て必ず楚王をして己を召さしむると爲さん。彼れ且に丘を以て佞人と爲さんとす。夫れ然るが若きものは、其の佞人に於けるや、其の言を聞くをも羞づ、而るを況んや親しく其の身を見るをや。而るを何を以て存することをせんと。子路往いて之を視れば、其の室虛し。

【大意】孔子の言を引いて、内に樂むことを知る者は、外に富貴名利を求めざるものであることを說く。

【通釋】孔子が楚に往く途中、蟻丘といふ山の傍にある飲物を賣る家に泊つた時、其の鄰に夫婦から婢僕に至るまで共に屋根の棟に登つてゐるものがあつた。門人の子路が之を怪んで問うた「あの毛髮のぼう／＼と亂れてゐるのは何者で御座いませう」。孔子は答へて言つた「あれは聖人の徒である。而して自ら民間に埋もれ、自ら田畝の間に藏れて榮華を求めない者である。故に其の名聲は消えて世の中からちやほやされないが、其の志は宇宙の窮り無き所に遊び、其の口に言ふ所は世人と同じやうであるが、眞に悟つた無爲の大道は深く心に存して未だ曾て言つたことがない。方に此の世俗と相背いて、之と共に行動するを屑しとしないのであらう。是れいはゆる陸上に居て水中に深く沒する者といふべきで、即ち人中の隱者である。かの市南の宜僚ではなからうかと思ふ」。之を聞いて子

之を戴晉人の前に吹聽するのは、宛も劍頭の小孔を吹く如く、聖も其の聖を失つて全く音聲の出すべきものもなく到底お話にはならぬと思ひます」。

語釋 通達之國（郭注に曰く「人迹の及ぶ所を通達と爲す。今の四海の内を謂ふなり」と。即ち人の棲み得る世界とも言ふべき範圍の概念。こゝでは中國を指す。）○若存若亡乎（成疏に曰く「存とは有なり、亡とは無なり」と。即ち微小にして有るか無いか分らんやうだとの意。）○惝然（成疏に曰く「悵恨の貌なり」と。釋文に李云ふ、「惝は惘なり」と。惝然として自己を失つた貌である。）○嗃（釋文に「管聲なり。廣雅に云ふ、鳴なりと」。即ち笛の如く鳴る音をいふ。）○劍首（釋文に「司馬云ふ、劍環頭の小孔なりと」。）○吷（釋文に「司馬云ふ、風の過ぐるが如しと」。たゞ風の通過する時の音である。）

孔子之楚、舍於蟻丘之漿。其鄰有夫妻臣妾登極者。子路曰、是稯稯何爲者邪。仲尼曰、是聖人僕也。是自埋於民、自藏於畔。其聲銷、其志無窮。其口雖言、其心未嘗言。方且與世違、而心不屑與之俱。是陸沈者也。是其市南宜僚邪。子路請往召之。孔子曰、已矣。彼知丘之著於己也。知丘之適楚也、以丘爲必使楚王之召己也。彼且以丘爲佞人也。夫若然者、其於佞人也、羞聞其言、而況親見其身乎。而何以爲存。子路往視之、其室虛矣。

「蝸牛といふものが有るが、君には御存じで御座いますか」。王曰く「知つてゐる」戴晉人曰く「蝸牛の左の角に國を構へてゐる者があつて、之を觸氏といひ、右の角に國を作つてゐる者があつて、之を蠻氏と稱した。此の觸氏と蠻氏とが時々領土を爭ひ合つて戰爭を起し、死者數萬を出し、敵の敗北し逃ぐる者を逐ふこと十五日にして、やつと引き還したといふことであります」。王は之を聞いて「何んだ、そんな話は嘘ごとであらう」と言つた。戴晉人は云ふ。「いや決して嘘言ではありません。どうか君の爲めに其の實際たるをお話し申し度いと思ひます 抑ゝ君におかれては、此の四方上下の大宇宙は窮あるものと思はれますか」。王は曰く「無窮のものと思ふ」。戴晉人曰く、一心を無窮の大宇宙に遊ばすことを知つて、而して反つて此の人迹の及ぶだけの中國を御覽になれば、至つて微細なもので、有るとも、無いとも分らぬ位ではありませんか」。王は之を聞いて、「如何にもさうだ」と答へた。戴晉人は更に語をついで云つた。「海內人迹の通ずる所、いはゆる四海の中に魏といふ一つの諸侯があつて、其の魏と國中に梁といふ都があり、更に又其の都の中に王が居るのである。だから王も宇宙の大に比べて見ると、極めて微々たるもので、あの蝸牛角上の蠻觸と擇ぶ所はありますまい。王はこれと大小の別有りと謂はれますか、如何でありますか」。王は、「成程尤もだ。別に差別はない」と答へた。戴晉人は退出してしまつた。惠王は獨り悄然として氣の拔けたやうな樣子であつた。戴晉人が退いたから惠子が立ち代つて王に御目にかゝつた。すると王は「あの人は實に大人物である。堯舜の如き聖人と雖も、遠く及ぶまい」と言つた。惠子は之に答へて言つた。「竹管を吹けばヒユウと鳴るが、劍首の小孔を吹けばたゞスウといふだけで音を成しません。堯舜は世俗の人の譽むる所であるが、今

不足以當之。惠子曰、夫吹管也、猶有嗃也、吹劍首者、吷而已矣。堯舜人之所譽也。道堯舜於戴晉人之前、譬猶一吷也。

訓讀 惠子之を聞て戴晉人を見えしむ。戴晉人曰く、所謂蝸なるものあり、君之を知れりやと。曰く然り、蝸の左角に國するものあり、觸氏と曰ふ。蝸の右角に國するものあり、蠻氏と曰ふ。時に相與に地を爭うて戰ふ、伏尸數萬、北ぐるを逐ふこと旬有五日にして、而して後反ると。君曰く噫其れ虛言かと。曰く、臣請ふ君の爲めに之を實にせん。君、四方上下に在りて窮まりありと以意ふやと。君曰く窮まりなしと。曰く、心を無窮に遊ばしむるを知つて、反つて通達の國に在るは、存するが若く亡きが若きかと。君曰く然りと。曰く、通達の中に魏あり、魏中に梁あり、梁中に王あり。王と蠻氏と辯ありやと。君曰く辯なしと。客出でゝ、君惝然として亡ふことあるが若きなり。客出でゝ、惠子見ゆ。君曰く、客は大人なり、聖人も以て之に當るに足らずと。惠子曰く、夫れ筦を吹くや、猶ほ嗃たるあるなり、劍首を吹く者吷たるのみ。堯舜は人の譽むる所なり。堯舜を戴晉人の前に道ふは、譬へば猶ほ一吷のごときなりとと。

大意 前段をうけて、戴晉人の蝸牛角上の說話を以て、國を爭ふことが、宇宙の大に比べると如何につまらない事であるかを說く。

通釋 宰相の惠子が之を聞いて、戴晉人といふ賢者を王に見えさせた。そこで戴晉人は君に向つて問答を始めた。

「然らば何うしたら善いのだ」と聞いた。すると華子は、「君はどうか道を求められよ、道を求められる外に何の術も法も御座いません」と言つた。

語釈 魏瑩（釈文に「司馬云ふ、魏の恵王なりと」。） ○田侯牟（釈文に「司馬云ふ、田侯は斉の威王なり。名は牟、桓公の子なりと」。） ○犀首（釈文に「魏の官名なり。司馬云ふ、今の虎牙将軍の如し。公孫衍此の官たりと」。） ○忌也出走（成疏に曰く「姓は田、名は忌、斉の将なり」と。田忌は有名な武将である。） ○扶其背（釈文に「三蒼に云ふ、扶は撃なりと」。田忌出走の背後から撃つの意。） ○季子（成疏に曰く「季は姓なり、子とは徳の称にして、魏の賢臣なり」と。蘇秦だといふ説があるが、信ずるに足らない。） ○華子（成疏に曰く「姓は華、亦魏の賢臣なり」と。老荘の道を得た人であらう。前に出る人物と共に確かなことは分らない。）

惠子聞之而見戴晉人。戴晉人曰、有所謂蝸者、君知之乎。曰、然。有國於蝸之左角者、曰觸氏。有國於蝸之右角者、曰蠻氏。時相與爭地而戰。伏尸數萬、逐北旬有五日而後反。君曰、噫、其虛言與。曰、臣請爲君實之。君以意在四方上下有窮乎。君曰、無窮。曰、知遊心於無窮、而反在通達之國、若存若亡乎。君曰、然。曰、通達之中有魏、於魏中有梁、於梁中有王。王與蠻氏有辯乎。君曰、無辯。客出。而君惝然若有亡也。客出、惠子見。君曰、客大人也、聖人

君其の道を求めんのみと。

大意 齊の家臣が王に向つて説く異説を擧げて、道を求めることの必要を説き來り、後の戴晋人と惠王との問答を起す伏線としたものである。此の章、二節に分けて解す。

通釋 魏の惠王が齊の威王が盟約したが、後威王が之に背いたので、惠王は怒つて刺客を遣つて威王を暗殺せしめんとした。魏の犀首の官たる公孫衍が之を聞いて惠王の行爲を恥ぢ君に向つて言つた。「君は苟も萬乘の主でありながら、一匹夫の力に依つて讎を報ぜんとし給ふのですか。私は兵二十萬を請ひ受けて、君の爲めに齊を攻め、其の人民を捕虜とし、其の牛馬を繋いで牽き來り、齊君をして憤怒のため、心熱を背に發せしめ、然る後其の國城を拔き取りませう。あの齊の將軍の田忌が畏れて出奔したら、其の背部から攻撃して、脊骨を打ち折いて、ひどくやつつけてやりませう」。儒者の季子が犀首の此の言を聞いて又之を恥として言つた。「譬へば十仞の城を築かんとして築くこと既に十仞、出來上つてしまつたものを又壞してしまつたら、工事に當る人民を無暗に苦しめるのみである。之に同じく我が魏の國は兵を用ひざること既に七年、庶民安堵して皆業を樂んでをります。是れ王業の基である。然るにかの公孫衍は戰を好む者で、切角出來かけた王業を破壞し、民を苦しめる亂人である。だから君は衍の言などに耳を傾けてはいけません」。道家の華子なる者が、季子の王業の説を聞いて又大に恥として王に向つて言つた。「善く齊を伐たうといふ者はもとより亂人であるが、かと言つて善く伐つこと勿れといふ者も亦亂人である。更に又、伐つ者も伐たざる者も共に亂人なりと言ふ者も、やはり亂人であります」。魏の王は何んのことか分らないので

其牛馬、使其君內熱發於背、然後拔其國。忌也出走、然後抶其背、折其脊。季子聞而恥之曰、築十仞之城、城者既十仞矣、則又壞之、此胥靡之所苦也。今兵不起七年矣、此王之基也。衍亂人、不可聽也。華子聞而醜之曰、善言伐齊者亂人也。善言勿伐者、亦亂人也。謂伐之與不伐亂人也者、又亂人也。君曰、然則若何。曰、君求其道而已矣。

訓讀　魏瑩は田侯牟と約して、田侯牟之に背く。魏瑩怒り、將に人をして之を刺さしめんとす。犀首聞いて之を恥づ。曰く、君は萬乘の君たり。而るを匹夫を以て讎に從はんや。衍請ふ甲二十萬を受け、君の爲めに之を攻めん。其の人民を虜にし、其の牛馬を係ぎ、其の君をして內熱背に發せしめて、然る後其の國を拔かん。忌や出で走らば、然る後其の背を抶ち、其の脊を折らんと。季子聞いて之を恥ぢて曰く、十仞の城を築き、城くもの既に十仞なり、則ち又之を壞たば、此れ胥靡の苦しむ所なり。今は兵起らざること七年、此れ王の基なり。衍は亂人なり。聽く可らざるなりと。華子聞いて之を醜として曰く、善く齊を伐つを言ふものは亂人なり。善く伐つこと勿れと言ふものも亦亂人なり。之を伐つと伐たざるとを亂人なりと謂ふものも、又亂人なり。君曰く、然らば則ち若何と。曰く、

師傅とした。湯王は登恆を師として之に從つたが、その師に束縛さるゝことなく、自由に道を行ひ得たのは、萬物自成の自然に隨ふことを得たからである。故に湯王はそのために聖王の名を博したのである。しかし名といふものは元來餘計な法で無用の長物である。人はこの名があるが爲に、是非善惡の兩端の見を生じて自然に法る旨から遠ざかるのである。孔子が思慮を盡して禮樂の敎を說いたのも、それが爲に人の師傅たるの名を得たもので、自然の道に從つたものではない。故に容成子は曰つてゐる。「歲は元來日の集りで、日から成り立つものである。同樣に內が無ければ外もなく、元來外は內あつて生ずるもので、內の主觀を去れば、外なる概念も從つて消滅する。本來無差別にして無有の別もなく、自然それ自體、そのまゝのものである。」

語釋　冉相氏（成疏に曰く「冉相氏は三皇以前の無爲の皇帝なり」と。）　○環中（齊物論篇に見ゆ。參照せよ。）　○目與レ物化者一不レ化者也（一は或は本性と云ひ、或は心と云ふも、今は「少しも」の意にとつて、物の變化に從つて化する者は、實は自然の流轉のまゝであつて少しも變化があるのではないの意に解す。）　○司御門尹登恆（成疏に曰く「姓は門、名は尹、官號なり。姓は登、名は恆」と。林希逸は曰く「湯の伊尹に於ける、學んで而して後之を臣とす。莊子識の一句を把て、却て名を改め字を換へて、其の官を以て司御となし、又門尹登恆と曰ふ。皆是、此の詭怪の說話を爲す」と。司御を官とし門尹を姓となし、登恆を名となす說もある。共に林希逸の說の如く、詭怪の說であつて確かなことは分らない。）　○贏法（林希逸曰く「贏は除なり、剩なり。言ふ此の名の世間に在るは是れ剩法なり。猶長物と言はんがごとし」と。）　○容成子（釋文に曰く「老子の師なり」と。愈樾の考證に依れば、漢書藝文志に、陰陽家に容成子十四篇あり、房中家に容成陰陽二十六卷あり、即ち老子の師である。しかし列子に依ると、黃帝の師に容成子ありといひ、曆を作つた事があるから、此の容成子は即ち黃帝の師たる人であらうと云ふ。）

魏瑩與二田侯牟一約、田侯牟背レ之。魏瑩怒、將レ使二人刺一レ之。犀首聞而恥レ之曰、君爲二萬乘之君一也。而以二匹夫一從レ讎。衍請受二甲二十萬一、爲レ君攻レ之。虜二其人民一、係

より始めあらず、未だ始めより物あらず。世と偕に行いて替れず、行く所之れ備りて洫れず、其の之に合ふや、之を若何んせん。湯の其の司御門尹登恒を得るや、之が爲に之を傅とす。從ひ師として囿せられざるは、其の成るに隨ふを得たればなり。之が爲に其の名を司る、之の名は贏法たり。其の兩見を得たり。仲尼の慮を盡くすも、之が爲に之に傅たり。容成氏曰く、日を除けば歳なく、內無ければ外無しと。

大意 無爲自然の大道を得た聖人は物の自成其のまゝに從ふものであることを說いて、名あるは已に其の道の眞なるものではないことを論ず。

通釋 古の聖王冉相氏は其の虛中の至理、卽ち眞空の理を悟つて、萬物の自成に隨從して滯ることなく、其の萬物に接するや、變轉無窮で、終始もなく、時間もなく本體に卽して現象の移るまゝに從つた。斯く常に萬象と一體となつて變化して窮りないのは、言葉をかへて言へば、少しも變化しない、常住不變の當體と言ふべきである。人々は何ぜ此の空と無の本體に歸り宿らないであらうか。天然自然を師として、而かも自然の妙諦に徹し得ないのは、心が外に馳せて外物に殉ずるからである。まして自ら外物に殉はうと思つて物に殉つたのでは、どうにもならない。常に外物の驅使に任ずる外ないのである。それ聖人と言ふ者は、始めから天もなければ、人もなく、又始めもなければ、物もないのである。たゞ自然の順行そのまゝである。故に世の中に伍して相共に移り變つて行つて、而かもそのために廢れるものでなく、爲すことは悉く備り完うされて而かも少しも自己を壞らない。斯くの如き聖人の道に合致するには如何にしたならよからうか。昔、殷の湯王が、其の司御の官に在つた門尹登恒といふ者を得て之を

光とは便ち是れ此の意なり」と。）（以二十仞之臺一懸二衆閒一者也（林希逸は「縣は樂を張るなり。衆は縣の多きなり。間は猶ほ庸間はつて作ると言はんがごとし」と云ひて　十仭の高所に在つて、奏樂すれば、世俗の耳目を聳動せしめる如く、古の聖人が自然無爲に從へば、自ら高臺に處る如しと、解してゐるが、今はたゞ高臺を衆人の間に懸けて、見通しの出來る樣に、心目神通した者の洞見貫通の喜悦は如何ばかりと解することにした。）

冉相氏得二其環中一以隨レ成。與レ物無レ終無レ始、無レ幾無レ時。日與レ物化者、一不レ化者也。闔二嘗舍一レ之。夫師レ天而不レ得レ師レ天、與レ物皆殉、其以爲レ事也、若レ之何。夫聖人未二始有一レ天、未二始有一レ人、未二始有一レ始、未二始有一レ物。與レ世偕行而不レ替、所レ行之備而不レ洫、其合レ之也、若レ之何。湯得二其司御門尹登恆一爲二之傅一レ之。從レ師而不レ囿。得二其隨成一。爲レ之司二其名一之名嬴法。得二其兩見一。仲尼之盡レ慮爲二之傅一レ之。容成氏曰、徐レ日無レ歲、無レ內無レ外。

訓讀　冉相氏其の環中を得て以て成るに隨ふ、物と與に終り無く始め無く、幾無く時無し。日に物と與に化するものは、一も化せざるなり、闔ぞ嘗みに之に舍らざる。夫れ天を師として天を師とするを得ざるは、物と皆殉へばなり、其の以て事を爲すや、之を若何せん。夫れ聖人は未だ始めより天あらず、未だ始めより人あらず、未だ始め

ても、之を聞くと、之を聞かないとに拘はらず、其の美を喜ぶことも限りがなく、人の其の美を愛好することも限りないといふのは、其の美が自然のまゝだからである。之と同じやうに、聖人は人を愛するから、人から聖人の美名を與へるのである。若し聖人に其の人を愛することを告げなかつたら、聖人自身は人を愛することも知らない。其の人を愛するを知らうと、知るまいとに拘らず、又聞かうが、聞くまいが、そんなことには頓着なく、聖人は限りなく人を愛し、人も其の愛さるゝまゝに安じて限りないのは、其の愛が自然のまゝの現れであるからである。若し今長途の旅から歸つて、舊國舊都を望見したら、きつと嬉しいであらう。其の丘陵は草木が茂つて何もかもそれに隱れ、目に入るものはほんの十中其の一二に止まる位に荒涼となつてしまつてゐても實に心は喜悅の情に堪へないものである。況して求道の人が、一旦豁然として自己の本性を覺り、其の見聞せんとした極地を見聞し得たら如何に喜悅の情を催すものであらう。且又十仞の臺を衆人の閒に建てゝ之に上つて見通す如く、歷然として萬物を洞見し得たなら實に歡喜の極に達するであらう。

語釋 達綢繆（釋文に曰く「綢繆は猶纏綿の如きなり」と。成疏には「結縛なり」といふ。我等を束縛する外的の煩惱に通達すること。）○復命搖作（釋文に曰く「搖は動なり、萬物動作生長各々天然あり、則ち是れ其の命に復するなり」と。天の命ずる所の本性に反つて、其の動作無心にして天に合する意。）○命之也（釋文に曰く「命名なり」と。之に命名する意である。）○生而美者、人與之鑑（郭注及び釋文共に、鑑は「鏡なり」として、生れながらに美なる者、卽ち萬物を有りのまゝに寫す所の者に、名づけて鑑といふ名を與ふとして、鑑の性能の自然なるまゝに、善惡美醜をうつして、誤らないことに說明してゐる。勿論是れでも通ずるが、今は生而美者を人として解釋することにした。）○暢然（釋文に曰く「喜悅の貌なり」と。）○舊國舊都、望之暢然云云、（釋文に「司馬云ふ、緡とは盛なりと」。林希逸曰く「久しく旅して歸て其の舊國都を見ては、必ず暢然の意有り。言は感ずる所有るなり。たとひ其の舊國の中に入るも、人物已に變して、丘陵の上に草木皆荒穢緜合して、之を昔日に比するに、十にして其の九を失へども、但一分相似たる處あれば、猶且暢然として感ずること有らん。而るを況んや、道を求むるの人。忽然として自悟して、其の自ら見る所を見、其の自ら聞く所を聞くことを得んものをや。皆本然固有の物能く喜ばざらんや。佛氏の所謂、本來の面目、本地の風

ることあるなり、之を若何せん。生れながらにして美なるもの、人之に鑑を與へ、告げざれば則ち其の人よりも美なるを知らざるなり。若しくは之を知り、若しくは之を知らず、若しくは之を聞き、若しくは之を聞かざるも、其の喜ぶべきや終に已むこと無く、人の之を好するも亦已むこと無きは、性なればなり。聖人の人を愛するや、人之に名を與へ、告げざれば則ち其の人を愛するを知らざるなり。若しくは之を知り、若しくは之を知らず。若しくは之を聞き、若しくは之を聞かざるも、其の人を愛するや終に已むこと無く、人の之に安んずるも亦已むことなきは、性なればなり。舊國舊都、之を望めば暢然たり、丘陵草木の緡して、之に入るもの十に九ならしむと雖も、猶ほ之れ暢然たり。況んや見しを見、聞きしを聞くものをや。十仞の臺の衆閒に縣るものを以てするをや。

大意　美人の譬を以て得道の聖人は自然のまゝの働きであることを說き、舊國に歸るの喜びを叙して、人間の本性に復歸するの歡喜を述べる。

通釋　得道の聖人は事物の束縛を脫し、萬物に周偏して物我一體となるのである。而かもどうしてかうなるのか其の譯を知らないのは、全く天性自然のまゝであるからである。天の命ずる所に從つて動作し、天を以て師として自然に則るのみである。世人が之に命じて聖人となすのである。若し意を動かせ、心を用ひて知の足らないのを憂ふるやうであれば、其の行ふ所は幾許もなく、知には限りがあるから、時には行ふことが出來なくて止む所があらう。それでもどうとも致し方がない。之を譬ふるに、生れながらに美しい人でも、人が之に鏡を與へて其の美しいことを告げなかつたら、其の自分の人よりも美しいことを知らないであらう。此の美を知つてゐても、又知らなく

つたことである。）○其於人也、樂道之通（一に又「道」を「物」に作る。しかし前句に「於物也」として物我の心通を說いたから、此の句に於ては更に一步を高めて道との心通を云々するのが順序と思ふ。故に「物之通」はとらない。）○彼其乎歸居（此の句も亦讀方に異說があつて、「彼れ其れ歸居して」となす說がある。今は從はない。東條一堂曰く「其は期の訛なり、彼は閑休を指す」と。今は此の說に從つて、自然に復歸して安居隱棲することを期す、卽ち歸居を以て其の心とするの意に解す。）

聖人達綢繆、周盡一體矣。而不知其然、性也。復命搖作、而以天爲師。人則從而命之也。憂乎知、而所行恆無幾、時其有止也。若之何。生而美者、人與之鑑、不告則不知其美於人也。若知之、若不知之、若聞之、若不聞之、其可喜也終無已。人之好之亦無已、性也。聖人之愛人也、人與之名、不告則不知其愛人也。若知之、若不知之、若聞之、若不聞之、其愛人也終無已。人之安之亦無已、性也。舊國舊都、望之暢然。雖使丘陵草木之緡、入之者十九、猶之暢然。況見見聞聞者也。以十仞之臺縣衆閒者也。

訓讀 聖人綢繆に達し、周盡して一體たり。而して其の然るを知らざるは、性なればなり。命に復つて搖作して、天を以て師と爲す。人は則ち從つて之に命ずるなり。知に憂へて、行ふ所は恆に幾ばくも無くして、時に其れ止ま

仕へんとするは之と同じく恐らく出來ないであらう。且楚王の人となりは、狀貌は尊嚴であつて、人の罪に對しては容赦なく、宛も猛虎の如き人である。故に楚王を說くには、佞人辯才の人か、さなくば正德の人でなくては、之を動かすことは出來まい。但聖人は其の窮した時には家人をして其の貧窮の苦を忘れしめ、出世して王公に仕へた時には王公をして爵祿を忘れて權威を振ふことを卑下せしめ、其の外物に接しては之に捉はれることなく、物我融通の境地に立つて樂むことが出來、其の人と對しては、共に眞の大道に通ぜんことを樂んで自己の眞實を沒却しない。故に聖人は、或は無言にして良く人を心醉せしめ、人と並び立つて相交る間に、自然に人を化して父子の宜しきが如くならしめる。彼れ公閱休は此の聖人に當る人であつて、自ら隱遁安居に安んじて、然かも其の德の及ぶ所は宇宙を一にして何れにも達するのである。斯くの如く、夷節の德無くして知あるものと、公閱休の如く無爲得道の大人との、人心に及ぼす所は遙かに隔りのあるものである。だから公閱休を待つて、王に推薦してもらつたら宜ろしからう。」

語釋　則陽（成疏に曰く「姓は彭、名は陽、字は則陽、魯人なり。諸侯に游事し、後、楚に入りて楚の文王に事へんと欲す」と。）　○夷節、王果（釋文に「夷節は楚の臣。司馬云ふ、王果は楚の賢人なりと」。）　○何不レ譚（成疏に曰く「譚は猶說と稱するごとし」と。又「談なり」といふ說もある。なぜ說いて薦めて與れないかの意。）　○擉（釋文に「司馬云ふ、刺なりと」。扠を以て物を泥中に刺して捕へる意。）　○樊（釋文に「李云ふ、傍なりと。司馬云ふ、陰なりと。廣雅に云ふ、邊なりと」。共に「ホトリ」の意であらう。）　○不ニ自許以レ之神ニ其交ニ（此の一句は讀方は幾種にも分れ、從つて之を解くや紛々として歸する所がない。或は「不自許」の三字で切り、或は「其交」の二字を下の「固顚冥乎富貴之地」につけて解する說もある。今は凡ての舊解を離れて此の一句を自然のまゝに眺め、前後の關係上、神を自然の意味にとつて、前の德なくして私智を働かせ、後の富貴の地に迷沒するの兩者に關して、最も妥當な讀方をつけたつもりである。私智を働かす結果、自然のまゝに人との交際が出來ない、全自己を投げ出して之に許し、自然に其の交を爲し得ないと解することにした。）　○顚冥（成疏に曰く「迷沒なり」と。スツカリ迷つて落ち込むの意。）　○暍者反ニ冬乎冷風ニ（暍は音「エツ」、釋文に「字林に云ふ、暑を傷むなり」と。暑氣に病む者が、冬になつて風を反さんとする如く時を誤

なして化して父子の宜あらしむ。彼れ歸居に其して、其の施す所を一閒にす、其の人心に於けるもの、是の若く其れ遠し。故に曰く、公閱休を待てと。

大意　則陽の仕進を求むるを借りて、聖人は仕進榮達を求めず、而かも人を感化し、自然の道に合することを說く前提とす。本章、三節に分けて解す。

通釋　魯の則陽が楚に遊んだ時、夷節といふ楚の臣が之を王に紹介して用ひるやうに說いたが、楚王はまだ則陽に面會しようともいはない。夷節は已むなく王の前を退いて家へ歸つてしまつた。則陽はそこで、楚の賢人と云はれてゐる王果に會つて賴んで「先生はなぜ私の事を王に話して推薦して下さいませんか」と云つた。王果は「俺に賴むより公閱休の方が更によからう」と答へた。則陽は之を聞いて「公閱休とは一體どんな人ですか」と問うた。王果は答へて次の如く述べた。「公閱休は冬は河で鼈を刺して捕へ、夏は山のほとりに休息してゐる。通行の人が問ふと、此處が彼の安宅であると言つてゐる。公閱休は無欲恬淡の隱者だから、此の人ならあなたを王に薦め得るかも知れない。かの夷節すらあなたを推薦して王に用ひしむることが出來なかつたから、まして私などでは駄目です。思ふに、夷節の性格は、德なくして私智のみ働かせ、其の人との交際に當つても自らを許して自然のまゝにしつくりと意氣投合することなく、巧みに人意を迎合する。元來彼の心は富貴名達の境にさ迷つてゐる。だから彼は人と共に德を助長するに非ずして、反つて其の德を消滅さすものである。凍えた者が春になつてから衣を借り、暑さに當つて病んでゐる者が、冬になつてから冷風をもつて其の暑氣を救はんとしても追つ付かない。夷節に因つて進み

撓焉。故聖人其窮也、使家人忘其貧、其達也、使王公忘爵祿而化卑。其於物也、與之爲娛矣、其於人也、樂道之通而保己焉。故或不言而飮人以和。與人竝立而使人化父子之宜。彼其乎歸居、而一閒其所施。其於人心者若是其遠也。故曰、待公閱休。

訓讀 則陽楚に遊ぶ。夷節之を王に言ふ、王未だ之を見ず。夷節歸る。彭陽王果を見て曰く、夫子何ぞ我を王に譚せざると。王果曰く、我は公閱休に若かずと。彭陽曰く、公閱休とは奚するものぞやと。曰く、冬は則ち鼈を江に擉へ、夏は則ち山樊に休ふ。過つて問ふものあれば、曰く、此れ予が宅なりと。夫れ夷節已に能はず、而るを況んや我をや。吾れ又夷節に若かず。夫れ夷節の人と爲りや、德なくして知あり、自ら許して、之を以て其の交を神にせず、固より富貴の地に顚冥す、相助くるに德を以てするに非ずして、相助けて消するなり。夫の凍者の衣を春に假り、暍者の夏に冷風を反す。夫れ楚王の人と爲りや、形尊くして嚴。其の罪に於けるや、赦す無きこと虎の如し。佞人正德に非ずんば、其れ孰か能く撓まさん。故に聖人、其の窮するや、家人をして其の貧を忘れしめ、其の達するや、王公をして爵祿を忘れて卑きに化せしむ。其の物に於けるや、之と與に娛しみを爲し、其の人に於けるや、道の通を樂しんで己を保つ。故に或は言はずして、人に飮ましむるに和を以てし、人と與に竝び立つて、人

雜篇　則陽第二十五

叙説　此の篇の大意は、大道の當に悟らねばならないものであることを前提として、而かも大道なるものは、自然無爲、人知以上のもので、非言非默の中に其の妙諦を悟得するより外はない。一歩でも言説に亙り、有無の見に墮すれば、直ちに大道の妙域より離れて遠きものであることを詳說したのである。

則陽遊於楚。夷節言之於王、王未之見。夷節歸。彭陽見王果曰、夫子何不譚我於王。王果曰、我不若公閱休。彭陽曰、公閱休奚爲者邪。曰、冬則擉鼈於江、夏則休乎山樊。有過而問者、曰、此予宅也。夫夷節已不能、而況我乎。吾又不若夷節。夫夷節之爲人也、無德而有知、不自許以之神其交、固顚冥乎富貴之地。非相助以德、相助消也。夫凍者假衣於春、暍者反冬乎冷風。夫楚王之爲人也、形尊而嚴。其於罪也、無赦如虎。非佞人正德、其孰能

【訓読】其の之を問ふや、以て崖ありとすべからざれども、而も以て崖なしとすべからず。頡滑實あり、古今代へずして、而も以て虧くべからず、則ち大揚搉ありと謂はざるべけんや。闔ぞ亦是を問はずしてやまん。奚ぞ惑ふこと然く爲る。惑はざるを以て惑へるを解き、惑はざるに復らば、是れ尚くは大に惑はじと。

【大意】大道は常住顯著なるを以て、早く之を悟つて不惑の境に至れば、是れ究極の理想の眞人であることを說く。

【通釋】大道の如何なるものかを問ふに、際崖ありとするもいけない。又際崖無しとするも亦道の本體を得たとは云へない。大道は際崖の有無を超越したものである。又大道は昇降上下、旋回變轉して捉ふるところが無いやうで而かも確固たる事實の存するものである。古今に亙つて更代なく、一毫の損し缺くる所の無いものである。故に道は著名にして顯昭なるものと謂ふべきである。どうして此の道の大作用を問ふことを爲さずして、久しく惑ひ惱むべきであらう。早く此の理を悟つて、不惑の境に至つて、惑迷を轉じ、以て惑はない所の本性に復歸することを得たなら、是をこそ不惑の大眞人と稱するのである。

【語釋】頡滑有レ實（釋文に「向云ふ、頡滑は錯亂を謂ふなりと」、林希逸曰く「頡は戾なり、滑は旋轉なり。造物の妙、捉摸する所なきを言ふ」と。） ○揚搉（釋文に「向云ふ、搉略して之を揚顯するなり」と。東條保曰く「古今註に、揚は擧なり、搉は引なり。擧げて之を引き、其の趣を陳ぶ」と。林西仲之を延いて曰く「大に明著有つて、擧げて之を引く者有るが如しと謂はざる可けんや」と。今此の說に從ふ。） ○闔不二亦問一レ是已（成疏に曰く「闔は何不也なり」と。何ぞ又之を問はずして惑ふことを爲すやの意。）

照明となり、之に冥合すれば樞要を得るのである。自然の大道、卽ち主宰者なるものは、未始有無以前にあるもので、之を悟るは無爲にならなくてはならぬ。故に之を解き知つて尙解き知らざるもの丶如く、之を解き知らざる如くして、眞に之を知り得るのである。

語釋　善博也（釋文に「李云ふ、行くこと廣遠なりと」。心廣く體胖かの意にとつて安全の意に解する說あるも今は採らず。）○大一通ㇾ之（郭注に曰く「道なり」と。天下篇に曰く「至大外無き之を大一と謂ふ」と。卽ち大一とは天の働き、道の本體を謂ふ。道は萬物に通ずるものとの意である。）○大陰解ㇾ之（成疏には「中なり」と謂ひ、林希逸は「亦靜なり」とふ。其の靜定を得れば解せざる所なきの意である。）○大目視ㇾ之（一方を偏視せず、絕對の境に立つて見るの意であらう。郭注には「萬物の自ら見るを用ふ、亦大目なり」と。）○大均緣ㇾ之（大均とは寓言篇の天均と同じく、齊物論の天鈞とも亦通ず。成疏に曰く「緣は順なり、大に順ずれば、則ち物物各々の性足りて均平なり」と。）○大方體ㇾ之（林希逸曰く「大方は永虛なり、大方は窮無し、混然として一體なりと」と。一方に偏せず、四通八達す。之を心に體すれば、偏執することがないの意である。）○大信稽ㇾ之（成疏に曰く「信は實なり、稽は至なり、循つて之に任ずれば、各々其の實に至る。斯れ大信たり」と。自然は變化窮りなく、信なき如くにして、而かも其の中に信を有してゐる。故に之に依つて自然の眞相に稽へ至ることが出來る。）○大宗持ㇾ之（自然の變化、生滅して常なきも、本源は常住にして定まつてゐるものである。自然に順應すれば此の大定を持し得て自由なる意であらう。）○循有ㇾ照（成疏に曰く「循は順なり、其の天然に從へば、智自ら明照なり」と。自然に循へば、吉凶禍福の事が自ら明白となるを言ふのである。）○盡有ㇾ天（能く天理を盡くすといふ說と、人事を極盡すれば、そこに天道ありとなす說とあるが、今は前者に從ふ。）○始有ㇾ彼（始は太初、卽ち大道である。大道は天地創造以前より存在してゐるの意である。）

其問ㇾ之也、不ㇾ可二以有一ㇾ崖、而不ㇾ可二以無一ㇾ崖。頡滑有ㇾ實。古今不ㇾ代、而不ㇾ可二以虧一。則可ㇾ不ㇾ謂ㇾ有二大揚搉一乎。闔不二亦問一ㇾ是已。奚惑然爲。以ㇾ不ㇾ惑解ㇾ惑、復二於不一ㇾ惑、是尙大不ㇾ惑。

ゐ後に天の謂ふ所を知るなり。大一を知り、大陰を知り、大目を知り、大均を知り、大方を知り、大信を知り、大定を知るは、至れり。大一之を通じ、大陰之を解き、大目之を視、大均之に緣り、大方之を體し、大信之を稽へ、大定之を持す。盡きて天あり、循うて照あり、冥に樞あり、始めに彼あり、則ち其の之を解くや、之を解かざるものに似、其の之を知るや、之を知らざるに似るなり。知らずして而る後に之を知る。

大意 大自然の絶大なる作用を說いて、此の作用運行に順應すれば、人事悉く安定することを述ぶ。

通釋 以上のやうな譯で、國を亡ぼしたり、誅戮の刑に處せられるものが絶えないのは、下に述ぶることを講求しないからである。足の地を踐むことは極めて僅少の部分であるが、其の踐まない他の廣い場所を恃んでこそ始めて博く自由に步行し得るのである。之と同じく、人の知は極めて微小であるが、其の知らない所を恃んで始めて大自然の語る所を聞き得るのである。天の大作用、卽ち大一、大陰、大目、大均、大方、大信、大定の七つを知る者はまことに至れり盡せりと謂ふべきものである。いはゆる大一とは渾然たる一氣、未だ分れない無物以前の大道にして、萬物に神通すべきものである。大陰とは寂靜無爲にして、感ずることが出來ないものであるが其の至靜の境に至れば萬事に融會すべきものである。大目とは既に分れて名のあるものも、之を見ること自然のまゝに從ふ。大均とは萬物自然變化して窮りなきことであり、大方とは廣大不偏、四通八達のことであり、大信とはあやまることなきを以て萬物を稽へ得られるものであり、大定とは自然に順つて毫も違ふことなく安定してゐることであつて、是等は皆大自然の働きである。凡そ物にはすべて自然の性があつて、之に從へば能く天道を盡くし、之に順へば事理

なり一と註す。駢拇篇に「鳧脛短しと雖も之を續がば即ち憂へん。鶴脛は長しと雖も之を斷たば則ち悲しまん」と同じく、自然に從ひ、人爲を加ふべからざるをいふ。）　○請只（秦鼎曰く「沈註に只は止なり。或は曰く、請只は猶縱使の如し」と。傳寫の訛誤ならんも、今は縱使の說に從ひてタトヒと讀む。）　（水之守レ土也審云云（林希逸曰く「守るとは相離れざるなり。審は定なり、信なり、決定して此の如しと謂ふなり」と。是の三句は是れ一意なり。天地の間、自然一定の理、決「サダ」めて易ふべからず」と。）　○心之於レ殉也殆（殉は成疏には「逐なり」といふ。殉を徇に作り、「營なり」と註する說もある。今はたゞ徒に殉ずるの心あるは却つて物に拘はつて危しの意に解す。）　○凡能其於レ府也殆（能は機能である。耳目及び心を指す。府は靈府、即ち精神を謂ふ。凡て機能は外物に接して精神を危くし易いの意。）　○禍之長也茲萃（郭注に曰く「萃は聚なり」と。禍の益く長じて多く聚るの意である。）

故有亡國戮民無已、不知問是也。故足之於地也踐、雖踐恃其所不蹍、而後善博也。人之知也少、雖少恃其所不知、而後知天之所謂也。知大一、知大陰、知大目、知大均、知大方、知大信、知大定、至矣。大一通之、大陰解之、大目視之、大均緣之、大方體之、大信稽之、大定持之。盡有天、循有照、冥有樞、始有彼。則其解之也、似不解之者、其知之也、似不知之也。不知而後知之。

訓讀　故に亡國戮民あつて已むことなきは、是を問ふことを知らざればなり。故に足の地に於けるや踐む、踐むと雖も、其の蹍まざる所を恃んで、而る後に善く博きなり。人の知や少、少と雖も、其の知らざる所を恃んで、而

を損するものである。かく河を損し害ふところの風と日が常に河を守つて之を損してゐても、そのために河が少しも亂れず損しないといふのは、源泉より不斷の供給あるを恃んで流れるからである。水は土を守つて離れず、微隙より出でゝ微隙に入り、影は常に人を守つて離れず、人の動きに從つて動く、物は造物主を守つて離れることがない。是れ悉く自然の法則に決定せられ、又それに安んずるものである。若し人爲をもつて爲せば、目は其の明のために外物に拘束せられて危險であり、耳は其の聽覺のために外物に牽かれて危なく、心は其の明知のために物に殉ぜんとして、却つて外物に執着して危險である。かく凡ての機能は皆一の靈府から出でゝゐるから、外物に接して其の靈府を外物の爲めに亂される危險がある。此等の危險を曉らずに、旣に外物に拘束せられてしまつてからは、之を改めんとしても、復及ぶべくもなく、其の禍は日々に長育して益々聚つて來るものである。それに反對して本性に歸らんには、反省内察の修養の功に繇るより外はない。而して其の結果は一朝一夕の事でなく、久しい間を經て始めて成就するものである。斯くの如く目耳口鼻等の感覺は我々の本性を損し危險に陷らしめ易いものであるにも拘らず、人々は此の耳目の聰明や、心知の働きを無上の寶として、之を尊重してゐるが、亦誠に悲しむべき愚かなことではないか。

【語釋】甲楯（甲はヨロヒ、楯はタテ、兵卒の義に用ひたものである。）○種（釋文に曰く「越の大夫の名なり。吳越春秋に云ふ、姓は文、字は少禽」と。）○唯種也不レ知三其身之所二以愁一（成疏に曰く「勾踐大に敗れ、兵唯三千、走つて會稽山に上る。亡滅遠きに非ず。而して種密謀深く亡の時に存すべきを知り、當時嬬めて吳と和し、後二十二年にして吳を滅せり。夫れ狡兎死して良狗烹られ、敵國滅びて忠臣亡ぶ。歟其れ然るなり。吳を平ぐるの後、范蠡越を去つて江海に遊び、名を變じ姓を易へ、光を韜み迹を晦ます。卽ち陶朱公是れなり。大夫種は去らず、勾踐の誅する所となる。但國の亡以て存すべきを知りて、身の必ず死するを愆ふるを知らざるなり。字は亦種に作る者あり。」）○鶴脛有レ所レ節解レ之也悲（節は適なり。解は林希逸は「斷

乎。

訓讀　勾踐や、甲楯三千を以て、會稽に棲む、唯種や、能く亡ぶるの存する所以たるを知る、唯種や、其の身の愁ふる所以を知らず。故に曰く、鴟目適する所あり、鶴脛節する所あり、之を解けば悲しむと。故に曰く、風の河を過ぐるや損することあり、日の河を過ぐるや損することあり、請只、風と日と相與に河を守らしむるも、而かも河は以て未だ始めより其れ攖れずと爲すなりと。源を恃んで往くものなればなり。故に水の土を守るや審なり、影の人を守るや審なり、物の物を守るや審なり。故に目の明に於けるや殆く、耳の聰に於けるや殆く、心の殉に於けるや殆し。凡そ能は、其の府に於てや殆し。殆きの成るや改むるに給ばず、禍の長ずるや茲に萃る。其の反るや功に緣り、其の果や久しきを待つ。而るに人以て己の寶と爲す、亦悲しからずや。

大意　人知の恃むに足らないことを說き、自然のまゝに行へば、何の障りも、危險もないことを論ず。

通釋　かの越王勾踐が、呉王夫差のために敗れ、殘兵三千と會稽山に逃げた時に、其の謀臣たる大夫の種のみは、越の今亡びるのは良く存する所以なることを知つて呉に降り、不日遂に呉を亡ぼした。しかし越王が天下に覇を稱ふるや、種が讒言のために誅戮せられたが、卽ち彼はまだ其の愁を招くの所以を知らなかつた。故に諺にも曰ふではないか、鴟の目は夜にのみ適し、鶴の脛も長いけれども自ら節度の有るもので、之を切れば悲しむのであらうと。又曰ふ。風が河面を吹く時は水氣を吹きとばして河を損滅させ、日が河面を照せば、是れ又水蒸氣が立ち昇つて河

ろゝが如きのみ」と。鱶は至微なるもまだ知を無くすることが出來ない。羊は尠なるもまだ意を捨てることが出來ない。眞人は棄知捨意、しかも魚の水を得て悠々と自得するやうであるとの意である。）　○以レ目視レ目、以レ耳聽レ耳、以レ心復レ心（焦竑曰く「目を以て目を視ることは我を以て視ざるなり。耳を以て耳を聽くとは我を以て聽かざるなり。心を以て心に復すとは我を以て復せざるなり」。人は惟我有れば則ち物に循ふこと能はず、其の平を失する者多し」と。五臟の働きのまゝに任じて外界の物象に觸れて我執を生じないことをいふ。）　○菫（釋文に「司馬云ふ、烏頭、風冷痺を治すと」林希逸曰く「川烏なり」と。毒草である。）　○桔梗（釋文に「司馬云ふ桔梗は心腹血瘀瘕痺を治す」と。草の名である。）　○鷄𪆁（釋文に「司馬云ふ、雞頭なり、一名は芡、藕子と合せ、散と爲して之を服せば年を延ぶと」。草名である。）　○豕零（釋文に「司馬本に豕嚢に作つて云ふ、一名豬苓、根は豬卵に似たり。以て渇を治す可しと」同じく草の名である。）　○是時爲レ帝者也（郭慶藩曰く「案ずるに時とは更なり。帝とは主なり。堇桔梗雞𪆁豕零更〻主と相爲るを言ふなり」と。毒草も藥草も其の得失を異にして、病知に應じて相互に主となるを言ふのである。）

勾踐也。以二甲楯三千一棲二於會稽一。唯種也、能知二亡之所一以存。唯種也、不レ知二其身之所一以愁。故曰、鴟目有レ所レ適。鶴脛有レ所レ節、解レ之也悲。故曰、風之過レ河也有レ損焉、日之過レ河也有レ損焉。請只風與レ日相與守レ河、而河以爲レ未二始其攖一也。恃レ源而往者也。故水之守レ土也審、影之守レ人也審、物之守レ物也審。故目之於レ明也殆、耳之於レ聽也殆、心之於レ殉也殆。凡能其於レ府也殆。殆之成也不レ給レ改。禍之長也茲萃。其反也緣レ功。其果也待レ久。而人以爲二己寶一。不二亦悲一

心に復す。然るが若きものは、其の平や繩、其の變や循。古の眞人は、天を以て之を待ち、人を以て天に入らず。
古の眞人は、之を得るや生なれば、之を失ふや死、之を得るや死なれば、之を失ふや生。藥や其の實は菫なり、桔梗なり、雞廱なり、豕零なり。是れ時に帝たるものなり、何ぞ勝て言ふべけん。

【大意】古の眞人の死生一如、自然無爲の游化の妙諦を說く。

【通釋】蟻は微小なもので猶知を存してゐるけれども、眞人は其の微なる處を取つて其の知を棄て、魚は江湖に在つて能く水を忘れ無心となつて、しかも計を得たものであるから、眞人は之に倣つて其の計を得、羊は柔順なるも猶意を存するが、眞人は其の柔なるところを取つて意を棄て、事物を全く相忘るゝのである。目はたゞ目で見るだけで色を忘れ、耳はたゞ耳で聽くだけで聲を忘れ、心は外物に牽かれずして、内自ら心に復歸して其の本性を保つ。斯くの如く見聞思慮一に自然に任せて、ひたすら自我を捨て去つてしまへば、心は常に平和にして直繩の如く、其の動いて變に應ずるにも專ら自然に從ふのである。古の眞人は天の自然の道を以て事物を保ち、人爲を以て此の自然の大道を亂さない。古の眞人は、之を得ることを以て生となせば、其の失ふことを死となし、其の得を以て死となせば、其の失を以て生となす。死生畢竟一にして得失の執す可きものがない。之を譬へば藥の如きもので、其の實は菫も、桔梗も、雞廱も、豕零も何等貴賤上下の差別なく、夫々の效能に依て其の時の病に夫々適應するを以一主とすると同じである。こゝには其の一例を擧げたのみであるが、其の他は一々言ふに勝へない。

【語釋】於レ蟻棄レ知、於レ魚得レ計、於レ羊棄レ意（林西仲曰く「蟻は至微、羊は至順、而かも未だ無知無意なること能はず、眞人は其の微にして且つ柔なる者を取り以て自ら居る。而して其の知と意とを棄つること魚の水を忘

大意 眞人は親疎の情を著はすことなく、唯自然の去來にまかして人爲を加ふるものでないことを說く。

通釋 それだから神人といふ者は、衆人の聚り寄つて來ることを好まない。大勢集まればどうしても情に於て和合しない所があつて、其の結果心を害ふこととなる。故に天下の人に對して、特に親しむこともなければ、又特に疎んずることもなく、たゞ己の德を養ひ、內に包藏するところの和氣を溫ためて、自然の去來に順ふのを誠の眞人と謂ふのである。

語釋 衆至則不比、不比則不利也（成疏に曰く「比とは和なり」と。林西仲曰く、「比は合なり、人既に衆ければ情も亦一ならず、其の合を得難きなり。合はざれば則ち未だ相背くことを免れず、利となる所以に非ず」と。比を親み合ふとなして、眞人と衆人の關系に解し、眞人が衆人と親み合はず、又此人が衆人を愛利せずとなす說あるも今は從はず。）○抱德煬和（成疏に曰く「煬は溫なり」と、林希逸曰く「煬は內に自ら溫暖するの意なり」と。）

於蟻棄知、於魚得計、於羊棄意。以目視目、以耳聽耳、以心復心。若然者、其平也繩、其變也循。古之眞人、以天待之、不以人入天。古之眞人、得之也生、失之也死、得之也死、失之也生。藥也、其實菫也、桔梗也、雞壅也、豕零也。是時爲帝者也、何可勝言。

訓讀 蟻に於て知を棄て、魚に於て計を得、羊に於て意を棄つ。目を以て目を視、耳を以て耳を聽き、心を以て

十萬の民家が出來てしまつた。そこで堯は舜の賢を聞いて、不毛の地に居る舜を拔擢して「どうか來て恩澤を萬民に蒙らせてくれ」といつた。舜は不毛の地から出で來て天子となつた。しかし既に年は老い、耳目の聰明は衰へてしまつても、歸休して安息することも出來ず、心身共に疲れ倦んで其の性命を傷つけてしまつた。此の如き輩を名づけて巻婁といふのである。

語釋　暖姝。濡需。巻婁（林希逸曰く「暖姝は淺見にして自ら喜ぶの意なり。濡需は濡滯して需待する所あり。勢利に貪着するの人なり。巻婁とは傴僂として自ら苦むの貌なり」と。林西仲に從へば、當時は此の三語は併せ用ひられたもので、必ずしも訓古穿鑿する必要はない。莊子は最後の巻婁を引かんが爲に併せて前二段を說いたものであるといつてゐる。意味は大體林希逸の注に從ふべきである。）○疏鬣（林希逸曰く「豕の毛なり」と。まだらな毛といふ意味。）○奎蹏曲隈（林希逸曰く「奎蹏は蹄の勢奎ぎに似たり。曲隈は蹄の曲れる處なり」と。釋文に「向云ふ、曲隈は股間なりと」。次に直ぐ乳間股脚とあるから向說は信じ難い。今は林希逸の說をとることにする。）○此以域進、此以域退（成疏に曰く「域とは境界なり。蝨は則ち豕に逐うて有無し、人は則ち境に隨つて榮樂す。故之を域に進退すと謂ふなり」と。進退共に自己の見聞する世俗の狭い境域から脫し得ない意である。）○鄧之虛（釋文に「向云ふ、鄧は邑名」と。虛は一本に又墟に作る。鄧と云ふ墟址をいふ。）○童土（釋文に「向云ふ、童土は地草木無きなり」と。不毛の土地である。）

是以神人惡衆至。衆至則不比、不比則不利也。故無所甚親、無所甚疏、抱德煬和、以順天下。此謂眞人。

訓讀　是を以て神人は衆の至るを惡む。衆至れば則ち比せず、比せざれば則ち利せざるなり。故に甚だ親なる所なく、甚だ疎なる所なく、德を抱き和を煬めて、以つて天下に順ふ。此を眞人と謂ふ。

成し、鄧の虚に至つて、十有萬家あり。堯は舜の賢を聞いて、之を童土の地に擧ぐ。曰く、冀はくは其の來るの澤を得んと。舜は童土の地に擧げられ、年齒長じ、聰明衰ふるも、而かも休歸するを得ず。所謂卷婁なるものなり。

大意 虛無の大道、自然無爲の妙諦を悟らない者を、暖姝、濡需、卷婁の三つに分けて、世人の淺見を開かんとするの説である。

通釋 思ふに此の世の中にある所のつまらない識見を分けて三つとなすことが出來る。卽ち暖姝なる者があり、濡需なる者があり、卷婁なる者がある。いはゆる暖姝なるものは、淺見自ら滿足する徒であつて、一先生の説を學べば、之を以て自ら許し、喜び滿足して、道の本源は虛無の大道なることを知らないのである。故に暖姝といふのである。濡需といふ者は、豕に寄生する蝨に喩ふべきもので、あの豕の疎毛の間を擇んで、廣大な宮殿苑囿と心得、蹄の折れ曲つた處や、乳房股脚などの閒を擇んで居て、自ら安樂なる家屋、便利な住居と心得てゐる。屠者が一度臂を奮つて豕を打ち殺し、草を布き火をつけて燒くときは、己の身も豕と一緒に燒き殺さるゝといふことを知らない。これは己の住む境地のみに拘泥せられて、其の境遇と死生進退を共にするもので、人世の富貴利達の閒にあくせくして、此の外に廣大なる自然の道のあることを知らぬものである。かゝる輩を濡需といふのである。次に卷婁なる者は、まづ舜のやうな人を指すのである。抑々羊肉は蟻を慕はないが、蟻は羊肉を慕ふものである。蟻が羊肉を慕ひ求めるのは、羊肉が腥いからである。それと同じく、舜も仁義などゝいふ腥い行をするからして、民が悦んで集まるのである。舜は三度も其の居る所を移したけれども、人民は愈ゝ聚つて來て、鄧と云ふ墟に居る時には

豕蝨是也。擇疏鬣、自以爲廣宮大囿、奎蹄曲隈、乳閒股脚、自以爲安室利處。不知屠者之一旦鼓臂、布草操煙火、而己與豕俱焦也。此以域進、此以域退。此其所謂濡需者也。卷婁者舜也。羊肉不慕蟻。蟻慕羊肉。羊肉羶也。舜有羶行、百姓悅之。故三徙成都、至鄧之虛、而十有萬家。堯聞舜之賢、擧之童土之地。曰、冀得其來之澤。舜擧乎童土之地、年齒長矣、聰明衰矣、而不得休歸。所謂卷婁者也。

訓讀　暖姝なるものあり、濡需なるものあり、卷婁なるものあり。所謂暖姝なるものは一先生の言を學べば、則ち暖暖姝姝として私かに自ら說ぶなり。自ら以て足れりと爲して、未だ未だ始めより物あらざるを知らざるなり。是を以て暖姝なる者と謂ふなり。濡需なるものは、豕蝨是れなり、疏鬣を擇んで、自ら以て廣宮大囿と爲し、奎蹄曲隈、乳閒股脚を、自ら以て安室利處と爲す。屠者の一旦臂を鼓し草を布き、煙火を操れば、己は豕と倶に焦ぐるを知らざるなり。此れ域を以て進み、此れ域を以て退く。此れ其の所謂濡需なるものなり。卷婁なるものは舜なり。羊肉は蟻を慕はずして、蟻は羊肉を慕ふ。羊肉羶ければなり。舜に羶行あり、百姓之を悅ぶ。故に三徙して都を

を避けて何處かへ逃れて行かうと思ふのだ」と答へた。齧缺は更に「どう云ふ譯だ」と尋ねた。許由は之に對へて曰つた「彼の堯は營々として政を勤め、仁愛を施してゐるが、俺は天下の物笑ひとならねばよいがと心配してゐる。且あの堯の政治の極まる所は、後世人々が相食むやうになるであらう。元來民は聚め難いものでなく、之を愛すれば親しみ近づき、之に利を與へれば到り參じ、之を譽むれば勤め勵むものであるが、之に反して其の惡む所をすれば忽ち散ずるものである。愛利は仁義より出づるものであるが、自然に仁義を行うて仁義の生む所の結果を捐てゝ顧みない者は寡く、仁義に依つて自ら利せんとする者は多い。仁義の行は大抵中心の誠から出ないで、僞りの仁義になり易くて、畢竟かの貪婪者に利器を假すことに過ぎないのである。是れは宛も一人の意見から出た斷制を持て、天下を利せんとするもので、譬へば一刀を以て萬物を割かんとする如く、彼此共に害を蒙るものである。彼の堯は、賢人の天下を利することのみを知つて、其の實却つて天下を害ふものであることを知らない。此の至妙の道は、たゞ賢者以上に超出する者のみ、よく之を知り得るのである。

語釋　畜畜然仁（釋文に「王云ふ、鄙愛勤勞の貌」と。をくせくとして仁を行ふ。）　○且假夫禽貪者器（釋文に「司馬云ふ、禽の貪なる者は殺害極りなく、仁義の貪なる者は、傷害窮り無し」と。郭注に曰く「仁義見る可くんば則ち夫の貪なる者は、將に斯の器を假りて以て其の志を獲る」と。即ち禽獸の如く貪欲なる者に利器を假すことゝなるの意である。）　○猶一覘也（郭注及び成疏には「覘は闚なり」といひ、釋文に「司馬云ふ、覘は暫見の貌」と。今は前說に從つて解。）

有暖姝者、有濡需者、有卷婁者。所謂暖姝者、學一先生之言、則暖暖姝姝而私自說也。自以爲足矣、而未知未始有物也。是以謂暖姝者也。濡需者、

爲天下笑。後世其人與人相食與。夫民不難聚也。愛之則親、利之則至、譽之則勸、致其所惡則散。愛利出乎仁義、捐仁義者寡、利仁義者衆。夫仁義之行、唯且無誠、且假夫禽貪者器。是以一人之斷制利天下、譬之猶一覕也。夫堯知賢人之利天下也、而不知其賊天下也。夫唯外乎賢者知之矣。

訓讀 齧缺、許由に遇ふ。曰く、子將に奚くに之かんとすると。曰く、將に堯を逃れんとすと。曰く、奚の謂ぞやと。曰く、夫れ堯は畜畜然として仁なり。吾れ其の天下の笑とならんことを恐る。後世其れ人と人と相食まんか。夫れ民は聚め難からざるなり。之を愛すれば則ち親しみ、之を利すれば則ち至り、之を譽むれば則ち勸み、其の惡む所を致せば則ち散ず。愛利は仁義に出づ、仁義を捐つるものは寡く、仁義を利するものは衆し。夫れ仁義の行は、唯且つ誠なくして、且に夫の禽貪者に器を假さんとす。是れ一人の斷制を以て天下を利せんとす。之を譬へば猶ほ一覕のごときなりと。夫れ堯は賢人の天下を利するを知つて、而して其の天下を賊ふを知らざるなり。夫れ唯賢を外にする者にして之を知らん。

大意 許由の堯の天下を避けて遁棲する理由として、人爲に依る仁義を否定するのである。

通釋 齧缺が許由に出遇つたから「お前は今から何處へ行かうとするのか」と尋ねた。許由は「俺はまさに堯帝

無幾何而使捆之於燕。盜得之於道。全而鬻之則難。不若刖之則易。於是刖而鬻之於齊。適當渠公之街。然身食肉而終。

訓讀 幾何もなくして捆をして燕に之かしむ。盜之を道に得て、全くして之を鬻ぐは則ち難し、之を刖るの則ち易きに若かず、是に於て刖つて之を齊に鬻ぐ。適ま渠公の街に當る。然かも身は肉を食つて終れり。

大意 前節を受けて、捆は酒肉を食ふ身となつたが、天爲の然らしむるところ、遂に足を斬られて不具者になつた事を叙す。

通釋 其の後間もなく、捆を燕の國に往かしたところが、途中で盜賊に捕へられてしまつた。賊は彼の身體を全くして賣るのは逃亡の恐れがあるから、足を切る方が仕事がし易いといふので、遂に足を切つて之を齊に賣りつけてしまつた。たま〳〵之を買つた人は、渠公といふ金持ちであつて、捆は之に代つて街を治め、一生肉を食ふ身となつて終つた。

語釋 適當渠公之街（此の句は古來異說紛然として歸する所がない。或は渠公は齊の富室にして街正たりといひ、或は署者にして捆之に使はれて食肉の生活をするといひ、或は渠公は楚の葉公の類で齊の封國の一であつて、捆は門番となるといふ。今は試みに渠公を齊の金持ちで、街正といふ役を勤めてゐた。捆が之に代ると解することにした。）

齧缺遇許由曰、子將奚之。曰、將逃堯。曰、奚謂邪。曰、夫堯畜畜然仁。吾恐其

通釋 子綦は九方歅に向つて言つた。「歅よ、汝は其の淺見では俺の悲しみ泣く譯をどうして知らうや、知ることは出來まい。今汝の言ふ所の梱の幸福といふのは、唯々酒を飲み、肉を食ふことに盡きてゐるではないか。汝は酒食を得るを幸福であると知つてゐるが、其の由つて來る所の原因を知らないではないか。牧畜を營んだことのないのに、牝羊が家屋の西北の隅に生じ、田獵を好んでしたことのないのに、鶉が家の東北隅に生じたならば、汝は之を怪しまない譯にはゆくまい。梱が酒肉の美を得る理由が無いのに得られるのは怪しい事ではないか。凡そ俺が吾が子と平常遊ぶ所は無爲自然の天地であつて、天に順つて樂をもとめ、地に順つて食を得るのである。俺は吾が子と共に、世事を爲さず、智謀を用ひず、怪異な行をなさず、たゞ天地の誠に乘じて外物のために心を亂だすことなく、全く從容として天地の自然に任かして、事の宜しきを得るや否やも知らず、無爲自然に消遙してゐる。然るに今汝の言ふやうに吾が子梱に幸福などが來るといふ世俗の償報などのあるのは、怪しいことである。凡そ怪異な徴のあるのは、必ず奇怪な行が有るためであらう。今吾と吾か子は何も怪異なくして、而かもかかる怪徴の著はるゝのは、恐らく天の與へたものであらう。人爲は逃れ得るも、天爲は如何ともし難いものである。梱が故なくして酒肉の幸福を得れば、又之に伴つて故なくして災禍が身に及ぶであらう。だから俺は悲しみ泣くのである。

語釋 牂(釋文に爾雅を引いて曰く「牂は牝羊なり」と。) ○奧(釋文に曰く「西南隅、未の地なり」と。) ○宎(釋文に「司馬云ふ、東北隅なり」と。) ○吾與レ之邀ニ樂於天一(釋文に曰く「邀は遇なり」と。天に順つて自ら樂しむの意である。) ○乘ニ天地之誠一(逍遙遊篇には「乘天地之正」の語あり。成疏には「誠は實なり」といふ。天地自然のまゝに順ふことである。) ○一委蛇、而不ㇾ與ㇾ之爲ㇾ事所ㇾ宜(成疏に曰く「委蛇とは猶縱任のごときなり」と。林希逸曰く「一に自然に循ふなり」と。卽ち從容として自然の運行に任じて、事の宜しきと、宜しからざるとを問はず、すべて自然のまゝに順ふことである。)

吾所與吾子遊者、遊於天地。吾與之邀樂於天、吾與之邀食於地。吾不與之爲事、不與之爲謀、不與之爲怪、吾與之乘天地之誠、而不以物與之相攖、吾與之一委蛇、而不與之爲事所宜。今也然有世俗之償焉。凡有怪徵者、必有怪行。殆乎、非我與吾子之罪。幾天與之也。吾以是泣也。

訓讀 子綦曰く、歅女何ぞ以て之を識るに足らん。梱の祥や、酒肉の鼻口に入るに盡く。而何ぞ以て其の自つて來る所を知るに足らん。吾未だ嘗て牧を爲さざるに、牂は奥に生じ、未だ嘗て田を好まざるに、鶉は宎に生ず。若怪しむなきは何ぞや。吾れ吾が子と遊ぶ所のものは、天地に遊ぶなり。吾れ之と樂を天に邀へ、吾れ之と食を地に邀ふ。吾れ之と事を爲さず、之と謀を爲さず、之と怪を爲さず、吾れ之と天地の誠に乘じて、物を以て之を相攖らず、吾れ之と一委蛇して、而して之と事の宜しき所を爲さず。今や然かも世俗の償あり。凡そ怪徵あるものは、必ず怪行あればなり。殆いかな、我と吾が子との罪にあらず。幾んど天之を與ふるなり。吾れ是れを以て泣くなりと。

大意 子綦は天爲の如何とも爲し難きことを說き、以て梱の身に及ぶ禍を豫想して、今の詳相の喜ぶべきものでないことを述べる。

大意 子綦と相者九方歅との問答を叙して、次節の子綦の論説の伏線としたのである。

通釋 子綦に八人の子供があつたが、或る時、之を前に列ばせて、九方歅といふ卜者を召して人相を觀さした。子綦は九方歅に向つて「私のために一つ子供の人相を視て貰い度い。どれが最も幸運で御座いましようか」と尋ねた。九方歅は「梱が最も祥福の相が有る」と言つた。子綦は非常に驚喜して「どんな祥兆が相に見えてゐるか」と聞いた。九方歅は「梱は國君と同じ美食をなして一生を安樂に終へるであらう」と答へた。子綦は之を聞いてさつと悦びの色を失せて、涙を流しさめ／＼と泣いて曰つた。「吾が子はなぜそんな不幸になるであらうか」。九方歅は之を見て子綦の意を知らないから、子綦をたしなめる如く言つた。「國君と同じ美食をなすの地位になれば、其の富貴の恩澤は自然と三族の末まで及ぶであらう。まして父母が其の惠澤を蒙るのは申すまでもない。然るに今あなたが之を聞いて泣かれるのは、折角向いて來た幸運を妨止せられるものである。されば子は祥善の相あるも、父たるあなたは不祥の相でありますね。」

語釋 子綦（成疏には楚の司馬子綦となす。しかし前に度々出て來た南郭子綦と同じ人を指すのであらう。）○九方歅（釋文に曰く「善く馬と人を相す、淮南子には九方皐に作る」と。）○瞿然（釋文に「司馬云ふ、喜ぶ貌」と。李云ふ「驚視の貌」と。庚桑楚篇には懼然とあつたが、共に驚駭の意である。）○索然（釋文に「司馬云ふ、涕下る貌」と。さめ／＼と涙を流す形容であらう。）○三族（成疏に依れば、父族、母族、妻族をいふ。）

子綦曰、歅、汝何足以識之。而梱祥邪、盡於酒肉、入於鼻口矣。而何足以知其所自來。吾未嘗爲牧、而牂生於奧、未嘗好田、而鶉生於宎。若勿怪、何邪。

語釋 知二大備一者、無レ求無レ失無レ棄、不三以レ物易二己一也（林西仲曰く「性分の中萬物皆備はる。何の外に假て求と曰はん。何の遺忘する所あって失と曰はん、何の舍済す可きあって棄と曰はん。是の故に大備を知る者は、物を以て己を喪はず、之を當身に反して各々足るなり」と。其の自ら備るを知る者は、知足の德に安住して、物を逐うて心を奪はれないの意である。）○循レ古而不レ摩（釋文に「王云ふ、摩とは消滅なり」と。郭注に曰く「常性に順って自ら至るのみ」摩拭するに非ず」と。古は釋文には古之道となせども、古の道では分明でない。老子の所謂純朴なる太古の意ではなからうか。自然の太古の純朴なるまゝに順つて、自分を摩拂する所がないの意である。）

子綦有二八子一、陳二諸前一、召二九方歅一曰、爲レ我相二吾子一、孰爲レ祥。九方歅曰、梱也爲レ祥。子綦瞿然喜曰、奚若。曰、梱也將下與二國君一同食以終中其身上。子綦索然出レ涕曰、吾子何爲以至二於是極一也。九方歅曰、夫與二國君一同食、澤及二三族一、而況於二父母一乎。今夫子聞レ之而泣、是禦レ福也。子則祥矣。父則不祥。

訓讀 子綦に八子あり、諸を前に陳ね、九方歅を召して曰く、我が爲めに相せよ、吾が子孰れか祥たらんと。九方歅曰く、梱や祥たりと。子綦瞿然として喜んで曰く、奚若と。曰く、梱や將に國君と同食して、以て其の身を終へんとすと。子綦索然として涕を出して曰く、吾が子何すれぞ以て是の極に至れるやと。九方歅曰く、夫れ國君と同食すれば、澤三族に及ぶ、而るを況んや父母に於てをや。今、夫子之を聞いて泣く、是れ福を禦ぐなり。子は則ち祥なり。父は則ち不祥なりと。

無レ棄、不三以レ物易二己一也。反レ己而不レ窮、循レ古而不レ摩。大人之誠。

訓讀 狗は善く吠ゆるを以て良となさず、人は善く言ふを以て賢と爲さず、而るを況んや大と爲るをや。夫れ、大と爲れば以て大と爲るに足らず、而るを況んや德と爲るをや。夫れ大に備はるは、天地に若くは莫し。然れども奚をか求めんや、而かも大に備はれり。大に備はるを知るものは、求むるなく失ふなく棄つるなく、物を以て己に易へざるなり。己に反つて而して窮まらず、古に循つて而して摩せず、大人の誠ありと。

大意 眞の大人は無名の者にして、しかも自然のまゝに備へた德に順つて行動する者であることを說く。

通釋 狗は善く吠へるからとて良犬と云へない。人は善く辯ずるからといつて賢人と稱することは出來ない。まして大人と言ふことは出來ない。大といふも眞の大人は名が立たないから、既に大人と爲せば、最早眞の大人とすることは出來ない。まして德を全くした人と稱することは出來ない。大に備つてゐるといふことは天地に越すものはない。然かも何も自ら求めて備つたのではなく、自然のまゝである。自然のまゝにして大に備つたのである。我々人間も此の理と同じく、自分に大に備つてゐることを悟つた者は、別に求めることもなく、失ふこともなく、又棄てることもない。卽ち外物を以て自己の本來具有してゐる性命に易へないのである。斯く自己の眞性の自然に反つたならば萬物皆具つて窮る所なく、心知を用ふることなく、古の純朴なるまゝに循つて摩したり拭つたりすることの無いものである。是れを大人の誠を具へた人といふべきである。

之れ大人と謂ふ。

大意 絶對唯一の大道に徹した大人の働きを叙して、儒墨を以て名とする所のものを排す。

通釋 絶對至妙な道は、これから出て來た諸々の德と同じものではない。知に依て知る能はざる所のものは、如何なる雄辯を以てしても、到底之を言說することは出來ない。然るに今の儒墨を以て名とするものは、學派を立て大道を分ち、强ひて知を以て其學術を天下に致さんとしてゐる。道德を亂し、是非の論を立つるのみで實に禍も甚しい。蓋し大海が、あの幾百かの東流する河川を辭せずして之を容れてゐるのは、廣大の至りであり、聖人が道の絶對に立つて天地を包含し、其恩澤を四海に及ぼすのも絶大の極みである。しかも其功は無名にして之を受くる者は誰の力に依つてかくなるのであるかも知らない。是の故に生きて爵位もないし、死んでから諡號をも受けない、實利も身には聚まらないし、其名聲も世に顯れない。これでこそ眞に大人と稱せられるのである。

語釋 道之所レ一者、德不レ能レ同也（林希逸曰く「道之所一とは自然なる者なり。德は之を得て己に在るものなり」と。自然の道、一なる絶對と、四端萬善の名のある所の德とは異なるものである。） ○名若二儒墨一而凶矣（林西仲曰く「儒墨各々分名有り、而して言辯に曉々たり。是れ道の一とする所に總じて、知の知らざる所に休まること能はず。己を誤り、人を誤る。豈凶ならざらんや」と。）

狗不下以二善吠一爲上レ良、人不下以二善言一爲上レ賢、而況爲レ大乎。夫爲レ大不レ足二以爲一レ大、而況爲レ德乎。夫大備矣、莫レ若二天地一。然奚求焉、而大備矣。知二大備一者、無レ求、無レ失

であつて道の一にして未だ分れざる本源に歸入し、言は其の知の及ぶ範圍に止まつてそれ以上に言及しないといふことは、まことに至り極まれるものと言ふべきである。

【語釋】 觴レ之（釋文に「李云ふ、觴は酒器の總稱なり」と。成疏には「酒を以て之を燕するを謂ふ」と、宴會を設けることをいふ。） ○孫叔敖、市南宜僚（釋文に依れば二人とも共に孔子を去ること遠く、寄言の人なりと言つてゐる。） ○古之人乎於レ此言已（俊樹芝曰く「仲尼が今人の見に非らざるを發して、之が爲めに言を乞ふなり」と。古之人を孔子と解してゐるのは少し穿ちすぎた感がする。今は文字通り古人として解釋する。古の人は聖人を意味す。） ○市南宜僚弄レ丸（釋文には司馬の言を引いて説明してゐるが、莊子の寓言に屬するもので確かなことは分らない。宜僚は常によく丸を弄して、八個は空中に在り、一個は手中にあつたといふ。） ○孫叔敖（宜僚の丸を弄すると同樣で寓言の部に屬すべきである。釋文には「羽は舞する者の執る所なり」と言つてゐる。） ○丘願有二喙三尺一（諸説紛々として歸するところを知らない。陸長庚曰く「凡て鳥の喙長き者は多く言ふ能はず、鶴雀一の類の如し」と。思ふに言語を發することの出來ないやうに長い喙を持ち度いの意であらう。） ○彼之謂二不道之道一（彼とは宜僚と孫叔敖を指したものである。下の數句、齊物論に見ゆ。參照。）

道之所レ一者、德不レ能レ同也。知之所レ不レ能レ知者、辯不レ能レ擧也。名若二儒墨一而凶矣。故海不レ辭二東流一、大之至也。聖人幷二包天地一、澤及二天下一、而不レ知二其誰氏一。是故生無レ爵、死無レ謚、實不レ聚、名不レ立。此之謂二大人一。

【訓讀】 道の一なる所のものは、德同じうすること能はざるなり。知の知ること能はざる所のものは、辯擧ぐること能はざるなり。名儒墨の若きあるは凶なり。故に海は東流を辭せず、大の至りなり。聖人は天地を幷包し、澤、天下に及び、而して其誰氏なるを知らず。是の故に生きて爵なく、死して謚なく、實は聚らず、名は立たず、此を

此に於て言ふのみと。曰く、丘や不言の言を聞けり。未だ之を嘗て言はず、此に於てか之を言はん。市南宜僚丸を弄して、兩家の難解け、孫叔敖甘寢して羽を秉つて、郢人兵を投ず。丘願はくば喙の三尺あらんことを。彼を之れ不道の道と謂ひ、此を之れ不言の辯と謂ふ。故に德は道の一なる所に總べられ、而して言は知の知らざる所に休するは、至れり。

大意 孔子の言を借りて、不言の敎、不言の辯、卽ち無爲に治まるの大道を說く。

通釋 孔子が楚へ住つた時、楚王は宴會を開いて之を饗應した。其の時楚の令尹孫叔敖は大杯を持つて立ち、市南宜僚は酒を受けて之を地にこぼして祭つた。楚王の曰ふには「古人は宴會の際には言を以て相戒めたといふ事であるから、どうか此の際一言承り度い」と。孔子は之に對へて曰つた「私は不言の敎といふことを聞いてゐるが未だ一度も人に語つたことはない。今此の機會にお話し申しませう。楚の白公勝が亂をなし令尹子西司馬子期を殺さんとして、市南宜僚に與せんことを求めた時、宜僚は丸を弄して戯れてゐて使者に應接しなかつた爲に和解が出來て、子西子期の二家は難を免れた。孫叔敖は何の爲す所もなく時には安臥し、時には扇をはた〳〵と使つてゐてしかも敵國來り侵さず、國人治つて、楚の都、郢の人は武器を捨てゝ安らかに暮らしたのである。共に不言の功の然らしむる所である。私もどうか三尺もある喙となつて、言ふことが出來なくなり、この二子のやうに不言の敎を垂れて見たいものである」。市南宜僚と孫叔敖とは、言に發せずして而かも道を得たもので、之を不道の道と言ふべきであり、孔子は多く言はずして而かも其の意を盡してゐる。實に不言の辯と言ふべきである。故に人の德が完全

に又、人の悲みを悲むことを知つて、自分の悲みを悲み省ることの出來ない己を悲み戒めた。斯くて後、一日一日と世の中の係累から遠ざかつて、遂に今のやうな枯木死灰の如き狀態に爲ることが出來たのである。」

語釋　南伯子綦(齊物論には南郭子綦に作り、寓言篇には東郭子綦に作つてゐるが皆同じである。)　○顏成子(子綦の門人。齊物論及び、寓言篇には顏成子游に作つてゐる。)　○夫子物之尤也(林西仲曰く「物の尤とは、人物の中に於て傑して最と爲す者を言ふなり」と。)　○田禾(盧文昭曰く「即ち齊の太公和なり」と。先祖の完が桓公に仕へてから、代々齊に仕へたが、數世して和に至つて、遂に國を簒奪して齊君となつた。田齊の始の君である。)　○我必先之、彼故知之。我必賣之。彼故鬻之(成疏に曰く「我が聲名先に在り、故に物をして我を知らしむ。我便ち是れ名聲を賣る。故に田禾見て之を販す」と。我に形迹の見るべきものゝあるが爲に、遂に彼をして、之を知らしめ、又之を利用せしむるに至るの意である。)

仲尼之楚。楚王觴之。孫叔敖執爵而立、市南宜僚受酒而祭。曰、古之人乎、於此言已。曰、丘也、聞不言之言矣。未之嘗言。於此乎言之。市南宜僚弄丸、而兩家之難解。孫叔敖甘寢秉羽、而郢人投兵。丘願有喙三尺。彼之謂不道之道。此之謂不言之辯。故德總乎道之所一、而言休乎知之所不知、至矣。

訓讀　仲尼楚に之く。楚王之を觴す。孫叔敖は爵を執りて立ち、市南宜僚は酒を受けて祭る。曰く、古の人か、

彼故に之を霧げるなり。若し我にして之を有せずんば、彼れ惡んぞ得て之を知らん。若し我にして之を賣らずんば、彼惡んぞ得て之れを霧がん。嗟乎我人の自ら喪ふものを悲しむ。吾又夫の人を悲しむものを悲しむ、吾又夫の人の悲しむを悲しむものを悲しむと。其の後にして日に遠ざかれりと。

大意 南伯子綦が枯木死灰の如き狀態になるには、名を離れ、心を靜かにして自己反省をすべきであることを說く。

通釋 南伯子綦は机に倚りかゝつて坐し、天を仰いで深い呼吸をしてゐた。門人の顏成子が偶々その部屋に入つて來て、先生子綦の樣子を見て問うた。「先生は人物中の最も優れた御方と信じてゐますが、今先生を見るに、形は全く枯木の如く、心は死灰の如くで、まことに人間離れのした御樣子に拜見出來ますが、どうしたならそんな風になれませうか。」子綦は之に答へて言つた。「俺が嘗て山穴の中に居て自ら心を養つてゐた時に、齊王の田禾が俺の有德を聞いて一度會ひに來た。ところが齊の人民は之を聞いて王が賢者の見えたことを三度も賀したのである。之を見て俺は大に恥ぢた。何となれば、あの名利の念に厚い齊王が俺に會ひに來たのは、畢竟俺の方で名利に心が動いてゐたのであらう。だから彼が俺を知つて面會に來たのだ。俺が我が德を賣るの念があつたから、彼が俺をひさいだのだらう。若し俺に名が無かつたら彼の俺を知る由もなく、俺が德を賣らなかつたら、彼が之を買つて衆人の慶賀を得る理由ともならなかつたのであらう。名の著はれるのは實の喪びる所以である。あゝ俺は初は人の自分自らを喪つた者を見て悲んだ。更に又其の自分を喪つた人を見て悲んで、自分を反省しない人のために悲んだ。尙更

て國中の人は皆顏不疑の德を稱贊するに至つた。

語釋　恂然棄而走（成疏に曰く「恂とは怖れ懼るゝなり」釋文に司馬云ふ「恂は遽なり」と。今は成疏に從ふ。）○深蓁（成疏に曰く「蓁とは棘叢なり」と。草木の茂れる所である。）○委蛇攫抓（林西仲曰く「委蛇は猶ほ轉の貌、攫抓は板援の貌」と。身輕に枝から枝へ飛び廻る形容である。）○敏給搏ニ捷矢一（林西仲曰く「給は績なり、捷は速なり、矢注いて速かなりと雖も、狙猶能く攫つなり」と 風を切つて飛び來る矢を手にてうけとめるのである。）○相者趨射レ之（釋文に「司馬云ふ、相者とは王を佐けて獵する者なり」と。趨は促急なり。」王の左右に居る者を促しせきたてゝ、之を射さすのである。）○助ニ其色一（釋文に曰く、「助は本又鋤に作る」と。草を鋤き取る如し、其の驕色を除き去ることである。）

南伯子綦隱レ几而坐、仰レ天而噓。顏成子入見曰、夫子物之尤也。形固可レ使レ若ニ槁骸一、心固可レ使レ若ニ死灰一乎。曰、吾嘗居ニ山穴之中一矣。當ニ是時一也、田禾一覩レ我、而齊國之衆三賀レ之。我必先レ之、彼故知レ之。我必賣レ之、彼故鬻レ之。若我而不レ有レ之、彼惡得而知レ之。若我而不レ賣レ之、彼惡得而鬻レ之。嗟乎我悲ニ人之自喪一者。吾又悲ニ夫悲レ人者一。吾又悲下夫悲ニ人之悲一者上。其後而日遠矣。

訓讀　南伯子綦几に隱つて坐し、天を仰いで噓す。顏成子入つて見て曰く 夫子は物の尤なり、形は固より槁骸の若くならしむべく、心は固より死灰の若くならしむべきかと。曰く、吾嘗て山穴の中に居る。是の時に當つてや、田禾一たび我を覩て、齊國の衆、三たび之を賀せり。我必ず之に先んず、彼故に之を知れるなり。我必ず之を賣る、

稱レ之。

訓讀 呉王江に浮び、狙の山に登る。衆狙之を見て、恂然として棄てゝ走り、深蓁に逃る。一狙あり、委蛇攫抓して、巧を王に見めす。王之を射る。敏給にして捷矢を搏つ。王は相者に命じて趨つて之を射しむ。狙執死す。王顧みて其の友顏不疑に謂つて曰く、之の狙や、其の巧に伐り其の便を恃みて、以て予に敖り、以て此の殛に至れるなり。之を戒めよや。嗟乎、汝の色を以て人に驕ることなかれよやと。顏不疑歸つて董梧を師とし、以て其の色を助き、樂を去り顯を辭す。三年にして國人之を稱す。

大意 狙の横死をかりて、驕傲を戒め、且才智に任ずることの其の性命を害ふものであることを說く。

通釋 呉王が嘗て出遊をして舟を江に浮べ、それから又狙の澤山居る山に登つた時に、多くの猿は之を見て駭いて逃げ、其の遊んでゐた處を棄てゝ、深い林の中に隱れてしまつた。たゞ一匹のみ居殘つて、枝につかまつたり、樹を攀ぢたり、樣々の巧みなる行動を誇る如く王に見せびらかした。そこで王が之を射つたところが、敏捷にも其の勢のある矢を手づかみにしてしまつた。依て王は左右の臣に命じて、交ゝ之に矢を集中せしめたために、流石の狙もその矢を手に執つたまゝ斃れた。王は友人の顏不疑を顧みて言つた「此の狙は己の巧みなる行動に誇り、其の敏捷を恃んで自ら敖つたがために、遂に斯かる果敢なき最後を遂げるに至つた。實に戒しむべきである。お前も得意の狀を顏色に出して人に傲り驕ぶることの無きやうに心掛けよ」と。顏不疑は歸つて後、董梧を師として、其の驕り亢ぶる色を除き去り、利益や樂しみを捨て去り、名の顯れることを辭して深く自ら養つた。かくて三年にし

於不己若者不比之。又一聞人之過、終身不忘。使之治國、上且鉤乎君、下且逆乎民。其得罪於君也、將弗久矣。公曰、然則孰可。對曰、勿已則隰朋可。其爲人也、上忘而下畔。愧不若黃帝、而哀不己若者。以德分人謂之聖。以財分人謂之賢。以賢臨人、未有得人者也。以賢下人、未有不得人者也。其於國有不聞也。其於家有不見也。勿已則隰朋可。

訓讀　管仲病あり。桓公之を問うて曰く、仲父の病病なり。謂まずと云ふべけんや。大病に至らば、則ち寡人悪か國を屬して可ならんと。管仲曰く、公誰にか與へんと欲すると。公曰く鮑叔牙と。曰く、不可なり。其の人と爲り絜廉の善士なり。其の己に若かざるものに於て之と比せず。又一たび人の過ちを聞けば、終身忘れず。之をして國を治めしめば、上は且に君に鉤かんとし、下は且に民に逆らはんとす。其の罪を君に得るや、將に久しからざらんとす。公曰く、然らば則ち孰れか可ならんと。對へて曰く、已むなくんば則ち隰朋可なり。其の人と爲りや、上忘れて而して下畔く。黃帝に若かざるを愧ぢて、己に若かざるものを哀れむ。德を以て人に分つ、之を聖と謂ふ。財を以て人に分つ之を賢と謂ふ。賢を以て人に臨めば、未だ人を得る者あらざるなり。賢を以て人に下れば、未だ

る。

通釋 莊子がある時送葬の途中、惠子の墓を過ぎてしきりに懷舊の情を催したので、從者を振り返つて之に向つて言つた。「嘗て楚の都の郢の人が、白土を鼻の頭に塗つたことがあつた。その白土もほんの少しで薄いことは蠅の翼のやうであつた。匠石をして斤で之をけづり取らした。匠石は斤を打ち振つて其の勢は今にも風を卷き起すやうであつたが、郢の人は泰然としてゐた。匠石は白土を全くけづりとつてしまつて、然かも鼻先には少しの傷もつけなかつたといふことである。宋の元君が之を聞いて匠石を召して、『試に寡人のためにもう一度鼻先をけづつて見よ』と命じた。匠石は答へて『私は以前は上手にやつたものでありますが、しかし最う其の對手が亡くなりましたので、今は技巧を施す所が無くなりました』と云つて辭してしまつた。匠石の妙技も相手があつて始めて出來るやうに、惠子が此の世に居てこそ俺の辯舌も用ふることが出來るといふものだ。今や彼れが死んでしまつて、議論の相手を失つたから、俺の辯舌も用が無くなつたのは誠に遺憾至極である。」

語釋 堊漫二其鼻端一（成疏に曰く「堊は白善土なり」と、即ち壁に塗る白土であえ。漫とは釋文に李云ふ「猶塗のごときなり」と。）　○臣之質死久矣（奚侗曰く「物必ず有つて後文施すべし。郢人旣に死し、立ちて容をりはざる者無し、故に之れ質死すと謂ふ」と。成疏には「質は對なり」といふ。即ち對手となるものを指す。）

管仲有レ病。桓公問レ之曰、仲父之病病矣。可レ不レ謂云。至二於大病一、則寡人惡乎屬レ國而可。管仲曰、公誰欲レ與。公曰、鮑叔牙。曰、不可。其爲レ人絜廉善士也。其

鼻にかけて人に臨めば、到底人心を得ることは出來ません。その反對に自ら其の賢を忘れて人にへり下れば、人望は期せずして其の人に集まるものであります。國家を治むるに當つても、家を齊ふるに際しても、明察を事とせず見ざる所もあり、聞かざる所もあつて、而かも大體を綜覽して、虛心無爲であることが大切である。此の點に於てまづ／＼私の後任者を必ず擇べと申されますなら、隰朋が宜しいと存じます。」

語釋　仲父之病病矣（成疏に曰く「病病とは、是れ病極重なり」と。）　○可不謂云（列子の力命篇には謂を諱に作る。これに從つて改めた本もあるが、今は從はず。）　○大病（釋文に曰く「大病とは死を謂ふなり」と。）　○不比之（林西仲曰く「之と竝立せざるなり」と、仲間とならないのだ。）　○上且鉤乎君（釋文に曰く「鉤は反なり、亦拘に作る」と。逆らふの意である。）　○隰朋（成疏に曰く「姓は隰、名は朋、齊の賢人なり」と。）　○上忘而下畔（釋文に曰く「上に在つては自ら高しとせず、下に於て背むく者無きを言ふなり」と。王先謙は列子の力命篇には畔の上に不の字あるを引いて、下畔かずと言つてゐる。林希逸は「畔は離遠して下に求むることなきなり」といつてゐる。蓋し明賢不誇らないから、下たる人民からも忘れ遠ざかられてゐるの意と解して通ずると思ふ。）

吳王浮於江、登乎狙之山。衆狙見之、恂然棄而走、逃於深蓁。有一狙焉、委蛇攫抓、見巧乎王。王射之。敏給搏捷矢。王命相者趨射之。狙執死。王顧謂其友顏不疑曰、之狙也、伐其巧、恃其便、以敖予、以至此殛也。戒之哉。嗟乎無以汝色驕人哉。顏不疑歸、而師董梧、以助其色、去樂辭顯。三年而國人

人を得ざる者あらざるなり。其の國に於ける聞かざるあるなり。其の家に於て見ざるあるなり。已むなくんば則ち隰朋可なりと。

大意 管仲が桓公に向つて爲政の要職に當る人は、淸廉潔白の士でもいけないし、明智の人でもいけない。無爲虛心の人を必要とすることを說く。

通釋 管仲が病氣をした時、其の君齊の桓公が見舞に來て、其の後任者に就いて問うた。「仲父よ、お前の病氣は重態のやうであるが、若し萬一のことがあつた曉は、寡人は誰に一國の政治を托したら宜からうか。」管仲は「君の御內意は誰の御積りで御座いますか」と尋ねた。すると桓公は「さう鮑叔牙が良いかと思つてゐる」と對へた。管仲は云つた。「それはいけません。一體鮑叔牙の人物性格は、實に淸廉潔白の善士であります。己より見劣りのする人は一切斥けて仲間にならないし、又一たび人の過失を聞けば終身忘れないといふ人物であります。されば若し彼に此の國家の政治を執らせたならば、上に向つては忠直を以て君の怒を招き、下に向つては淸明を以て民の意に逆らはんと致しまして、間もなく罪を君に得ることでありませう。」そこで桓公は「然らば誰が一體適任であるか」と問うた。管仲は之に答へて言つた。「是非申し上げよと仰せられますなら、まあ隰朋が適當の人物でありませう。隰朋の人と爲りは、上たる君からは忘れられ、下たる人民からは之を戴くことを忘れられてゐる。自分自らは黃帝に若かざることを愧ぢ、又一方は己に若かない者を憫れむといふ人であります。自分獨りに其の德を有せずして之を人に分ち與へるを聖といひ、財産を獨占することなくして、之を人に分ち與へるのを賢と申しますが、己が賢を

○楚人寄而蹢閽者云々（此の一句も古來難解の所で諸說交々其の歸する所を知らない。今は假りに林希逸の說に從ふたとゝする。曰く「寄は客なり、楚に蹢閽の人有りて外國に寄寓して自ら歸ること能はず、舟に附いて歸る。方に岸に至る、此の夜半に即ち舟人と爭ふことあり。其の己を濟するの恩を忘れて、已に仇怨を造成す。岸は岸なり。未だ始より岸を離れずとは、言は之を載せて來る。舟未だ岸を離れず、又久しきに非らずして之を忘るゝなり。（中略）其の鬭ふ時に於て、後も亦自ら以て是となすなり」と。）

莊子送葬、過惠子之墓、顧謂從者曰、郢人堊漫其鼻端若蠅翼。使匠石斲之。匠石運斤成風。聽而斲之。盡堊而鼻不傷。郢人立不失容。宋元君聞之、召匠石曰、嘗試爲寡人爲之。匠石曰、臣則嘗能斲之、雖然臣之質死久矣。自夫子之死也、吾無以爲質矣。吾無與言之矣。

訓讀　莊子葬を送り、惠子の墓を過ぎて、顧みて從者に謂つて曰く、郢人、堊もて其の鼻端を漫る、蠅翼の若し。匠石をして之を斲らしむ。匠石斤を運らし風を成す。聽して之を斲らしむ。堊を盡せども、鼻傷かず。郢人立つて容を失はず。宋の元君之を聞き、匠石を召して曰く、嘗試に寡人の爲めに之を爲せと。匠石曰く、臣は則ち嘗て能く之を斲れり、然りと雖も臣の質は死すること久しと。夫子の死せしより、吾れ以て質と爲すべき無し、吾れ與に之を言ふべき無しと。

大意　莊子が惠子の才を惜みて其の死後追懷の情を禁じ得なかつたことを、匠石に喩へて門人に語つたのであ

以て俺を屈服しようとしてゐるが、未だ一度も俺の所說を非となして勝つた事はない。だから俺の方が是といふべきではないか、どうです」と。之を聞いて莊子は譬を設けて云つた。「齊人に其の子を無理に宋に行かして門番にした者があつた。昔は門番は必ず足を斬られた者を使つたものであるから、其の子を門番にする爲めに足を斬つて不具にしてしまつた。無慈悲も甚だしい。しかもこんな人は鈃や鐘といふやうな樂器を買つた時には、丁寧に束ね縛つて破損しないやうにするのであるが、實に物を愛することの當を失つたものである。又迷ひ子を探すに近く州鄕のあたりを尋ねて、遠く境域を出てまでも搜し求めなかつたら、恐らく見出すことの出來ないことがあらう。君が大道を悟らずして、諸學者の閒に混つて、自ら勝を制して誇らんとしてゐるのも是等三者の輕重をわきまへない者と異ならない。又楚の人で異鄕の地に寄寓して他の家の門番となつたが、或る時人無き時分に逃げ歸らうとして渡場まで行つた。そして直ちに舟人と喧嘩をするならば、舟はまだ岸を離れない中に、はや舟人と怨を結んでしまつた者である。自分の舟人に賴り助けてもらふ者であることも忘れて、自らを是として舟人と爭つて怨みを買ふのは愚の至りではないか。君が自說を是して儒墨の他學派と爭ふのも、宛も此の楚人の如く自分の立場を悟らないものと謂ふべきではないか。

【語釋】齊人蹢二子於宋一者、其命レ閽也不レ以レ完（陸樹芝曰く「循本に蹢とは躑躅して行いて進まざる貌、禮記に云ふ、蹢躅焉、踟躕焉」と。閽人は門番である。此の一節は諸說皆明解を缺いてゐる。思ふに齊人が、自分の子を無理に宋にやつて門番とするに、其の足を切つて閽人となして、其の閽人の風習に合せしめ、且逃げ歸ることを防いだのであつて、其の大切な身體を毀傷して省みない意であらう。）○鈃鐘（釋文に字林を引いて云ふ「鈃は小鐘に似て長頸なり」、又云ふ、壺に似て大なりと。」共に樂器である。）○唐子（釋文に曰く「失亡の子を謂ふなり」と。）○遺類（釋文に曰く「遺は亡なり、其の種類を亡ふの故なり。惠施は道に畔き辯を好む。猶齊人の子を遠ざけて鐘を愛するか如きなり」と。俞樾は有遺類矣夫と一句にしてゐるか、今は舊說に從ふ。）

なり」と、異説があつて確かなことは分らない。)　○詧遽(釋文に「李云ふ、詧遽は人の姓名なりと。一に云ふ、周初の時人なり」と。やはり莊子寓言中の人で確かなことは勿論分らない。)　○廢二一於堂一(釋文に曰く「廢は置なり」と。)

惠子曰、今夫儒墨楊秉、且方與我以辯、相拂以辭、相鎭以聲、而未始吾非也、則奚若矣。莊子曰、齊人蹢子於宋者、其命閽也不以完、其求鈃鍾也以束縛、其求唐子也、而未始出域、有遺類矣。夫楚人寄而蹢閽者。夜半於無人之時、而與舟人鬬。未始離於岑、而足以造於怨也。

訓讀　惠子曰く、今夫れ儒墨楊秉、且つ方に我れと以て辯じ、相拂ふに辭を以てし、相鎭むるに聲を以てして、而して未だ始めより吾を非とせずんば、則ち奚若んと。莊子曰く、齊人の子を宋に蹢かすものあり、其の閽に命ぜらるゝや、完を以てせず、其の鈃鍾を求むるや、束縛を以てす。其の唐子を求めて、未だ始めより域を出でざれば、遺類あり。夫の楚人、寄して蹢閽する者あり。夜半人無きの時に於て、舟人と鬬ふ、未だ始めより岑を離れずして、以て怨を造すに足れりと。

大意　前節の續きであつて、莊子が惠子の狹い見解に立て籠つて論爭をしてゐる愚を說くのである。

通釋　惠子答へて曰つた。「かの儒墨楊秉の四派の學者達は、目下盛に俺と辯論し、言辭を以て相逆らひ、名聲を

ろしい」と答へた。そこで莊子は又問うた。「然らば承りたいが、今儒家、墨家、楊朱、公孫龍の四學派に君を加へて五派となるが、果して此の中何れが是で、何れが非であらうか。それともかの魯遽の如きものではなからうか。魯遽の弟子が先生に向つて『私は先生の秘道を體得しました。だから私は冬にでも火を用ひずに鼎で粥を炊ぎ、夏の暑さにもよく氷を造ることが出來ます』と言つた時に、魯遽は卽ち『天地陰陽の運行を見ると、冬至の日には陽氣が旣に發し、夏至の日には陰氣が已に生じてゐるものである。だから汝はたゞ陽を以て陽を召して冬に火なくして炊ぎ、陰を以て陰を召して夏にも氷を造るといふのは、何等不思議なことはない。まだ吾が道に達したものとは云へない。俺は汝に我が至道を語り聞かさう』と答へた。そこで二つの琴を持ち出して其の調子を合せ、一を堂に置き、一を室に置いた。そして魯遽が室中の琴を鼓して宮音を發すると、堂上の琴も之に和して宮音を出して鳴り、角音を以て彈ずると又角音を出して之に和して振動した。これは唯二面の琴が音律が同じであつたから、其の音が相應じたのみで何等珍らしいことはない。若し今かりに一本の絃の調子を改めたら、宮商角徵羽の五音は亂れて了ふ。そして之を彈けば二十五絃は皆動いて正しい音は出ない。是れ始から其の聲音には變りはないけれども、和して相應ずるのは、音に主となるものがあつて、他が之に隨つて應ずるからである。君と他の四派との議論も之と同じく、君が彼れ此れと言ふから先方も對應して來るのであつて、君が自ら止めてしまへば、先方も止めるであらう。君自らを是とし、彼等の說を非とするのはまだ至道を得たものとは言へないではないか。」

語釋　射者非前期而中（郭注に曰く「期せずして中る、誤って中つる者を謂ふ」と。成疏には「期は準的なり」と謂ひ、「期準無くして誤って一物に中つる」と解すれども今は郭注に從ふ。）　○儒墨楊秉（成疏に曰く「秉は公孫龍の字

弦皆動、未始異於聲、而音之君已。且若是者邪。

訓讀 莊子曰く、射者の前期するにあらずして中るを、之れを善射と謂はゞ、天下皆羿なり。可ならんかと。惠子曰く。可なりと。莊子曰く、天下公是あるにあらざるなり。而して各〻其の是とする所を是とせば、天下皆堯なり。可ならんかと。惠子曰く、可なりと。莊子曰く、然らば則ち儒墨楊秉四、夫子と與に五たり、果して孰れか是なるや。或は魯遽の若き者か。其の弟子曰く、我れ夫子の道を得たり。吾れ能く冬鼎に爨ぎて、夏氷を造ると。魯遽曰く、是れ直陽を以て陽を召き、陰を以て陰を召くのみ。吾が所謂道にあらざるなり。吾れ子に吾が道を示さんかと。是に於てか之れが爲めに瑟を調へ、一を堂に廢き、一を室に廢く。宮を鼓すれば宮動き、角を鼓すれば角動けり。音律同じければなり。夫れ或は一弦を改め調ふれば、五音に於て當ること無きなり。之を鼓すれば二十五弦皆動く、未だ始めより聲に異なるあらずして、而して音の君あればのみ。且つ是の若きものかと。

大意 莊子と惠子との問答である。前にも度〻出て來てゐるが、こゝは是非の立て方の說である。しかし弟子の言だけに前出のものに對しては見劣りがする。

通釋 莊子が惠子に對つて問うた。「弓を射る人が豫期せずに偶然的中さした場合に、之を弓道の達人といふことが出來るならば、天下は皆羿の如き名人のみであるが、斯う稱して可いかどうだ。」惠子は「可ろしい」と答へた。莊子又曰つた。「世の中には公是といふもの、卽ち普遍的に是とせられる標準は無いのに、各々自ら其の是とするところを是なりと認めたら、天下は皆堯の如き賢人のみである筈である。斯ういうて可いか、どうだ」。惠子は「よ

すろ人もある。今は林希逸の說に從ふ。）○不比（林希逸曰く「比は和樂なり」とい比を花と通じて流と解する說あるも今は從はず。）○權勢不尤、則夸者悲（尤は成玄英は「甚なり」といふ。夸者とは虛名なりと注せられ權勢が、甚しくないと虛名を貪り求める人は悲しみなげくの意である。）○勢物之徒樂變（林希逸曰く「勢物之徒とは即ち富貴の門に依り附く者なり、樂變とは變詐を以て樂と爲すなり」と。勢に依り物に依り附いて何事かを爲さんとする輩は、有爲變易のあるのを樂しむの意である。）

○此皆順比於歲、不物於易者也（異論の多い所で解し難い。林希逸は、「百物の生成は皆其の序に順比す。其の變易する所は皆物の自由なる所に非ず」と解き、王先謙は「歲時と順つて相追逐し、一息の停ること無し。各自ら一物に囿せられて相易ふる能はず」といつてゐる。共に說き得て妙とは云へない。本文を靜讀すれば、林希逸のやうに、物が自由に變易するものでなく、自然の大原則に從ふとのみ解しては、此皆の二字が死んでしまう。王先謙のやうに、人が一物に拘束せられるとするのもうがちすぎた感がする。依つて今は是等を離れて通釋の如く解した。）

莊子曰、射者非前期而中、謂之善射、天下皆羿也。可乎。惠子曰、可。莊子曰、天下非有公是也。而各是其所是、天下皆堯也。可乎。惠子曰、可。莊子曰、然則儒墨楊秉四、與夫子爲五。果孰是邪。或者若魯遽者邪。其弟子曰、我得夫子之道矣。吾能冬爨鼎而夏造冰矣。魯遽曰、是直以陽召陽、以陰召陰。非吾所謂道也。吾示子乎吾道。於是乎爲之調瑟、廢一於堂、廢一於室。鼓宮宮動、鼓角角動。音律同矣。夫或改調一弦、於五音無當也。鼓之二十五

ある士は、官爵を得るを以て榮譽となし、筋肉強き壯士は、人の勝へ難き所に勝へて之を矜り、勇氣ある士は自ら憂患に遇うて益々奮ひ、兵器を持ち、甲冑を着けた軍人は征戰を樂しみ、隱居して身を苦しめ世に出ない枯槁の士は、意を聲名に留め、法律をやつてゐる士は、其の條規に依つて事を治めんことを求め、禮樂を重んずる人は動作の容儀を飾り、仁義を貴ぶ士は、人との交際を以て重しとなしてゐる。農夫は開墾耕種の事がないと和樂しないし、商人は商賣の事がないと和し樂しまない。百姓は朝夕財を積んで爲すべき仕事があれば勉め勵み、工業に從事する人は、機械の巧妙なものがあつて、精巧なる製作を得ると、自ら壯として其の能を誇る。金錢財寶を澤山積むことが出來ないと、貪欲な者は憂へ悲しむし、權勢が第一となつて人に過ぎないと、驕り亢ぶる者は悲しむ。富貴に依附する徒は變詐を以て樂みとなし、世の事變を悅ぶものであつて、自分の用ひられ得る時世に遭遇すると、種々の事に服して、安靜にして無爲になつてゐることは出來ない。此等の人は皆歲時變遷の序を追つて、營々汲々として一時も休むことのない者で、物の自ら變易する自然のまゝのやうに天地に消遙するものでない。そして其の肉體や其の本性を馳せて、外物を追求するに忙がしく、外境の事柄に心を淪溺させてしまつて、終身無爲の本原に反ることは出來ないのである。實に悲しむべきことである。

語釋　察士無凌誶之事則不樂（察士とは釋文に「李云ふ、察は識なり」と。兪樾の説に從ふと、察には嚴急の意があるといふ。凌は釋文に「李云ふ、相凌轢するを謂ふ」と林希逸曰く「誶は訊なり」と。凌誶は人を凌ぎ詰問訊求するの意である。）　○招世之士興朝（林西仲曰く「世に招搖し以て自ら明はすなり」と。即ち高く揚りて世の中に自ら顯はるゝことを好む人で、朝廷に立つのである。）　○中民之士榮官（陸樹芝曰く「按ずるに中民とは、上天民に非らず、下凡民に非ず、民の中に在る者なり。榮官とは位有るを以て榮と爲すなり」と。此の說從ふべきである。）　○枯槁之士宿名（林希逸曰く「枯槁とは隱士なり。宿名とは意を聲名に留むるなり」と。宿は縮の借字として縮め取るなりと注するの說を採つて、名を取ると解

則夸者悲。勢物之徒樂變、遭時有所用、不能無爲也。此皆順比於歳、不物於易者也。馳其形性、潛之萬物、終身不反。悲夫。

訓讀 知士、思慮の變なければ、則ち樂しまず。辯士、談說の序なければ、則ち樂しまず。察士、凌誶の事無ければ、則ち樂しまず。皆物に囿せらるゝものなり。招世の士は朝に興り、中民の士は官に榮し、筋力の士は難に矜り、勇敢の士は患に奮ひ、兵革の士は戰を樂しみ、枯槁の士は名に宿し、法律の士は治を廣め、禮樂の士は容を敬し、仁義の士は際を貴ぶ。農夫は草萊の事なければ則ち比せず、商賈は市井の事なければ則ち比せず。庶人は旦暮の業あれば則ち勸み、百工は器械の巧あれば則ち壯なり。錢財積まざれば則ち貪者憂へ、權勢尤ならざれば則ち夸者悲む。勢物の徒は變を樂しむ、時の用ふる所あるに遭へば、無爲なること能はざるなり。此れ皆歳に順比して易ふるに物たらざるものなり。其の形性を馳せて、之れを萬物に潛め、終身反らず。悲しいかな。

大意 世の中の智能を働し外物を追ふの輩は、凡てそれに拘束され、外境に使役せられて、無爲になつて本性に歸れないのを悲み說く。

通釋 知謀の士は知を弄するが故に、思慮の變化がないと樂まず、辯舌の士は論談して條理をなさねば樂まず、明察を誇るの士は、人に凌いで他の欠點をあばいて、事理を分析することがないと樂しまない。是れ即ち知辯察といふ外物に囚はれて性命を失つたものである。名譽を好む人は朝廷に立つて政務にあたり、一官一職に適する材能

へたものである。具茨之山は釋文には司馬を引いて、「榮陽密縣の東に在り、今は泰隗山と名づく」と云つてゐる。）　○方明爲御云云（七人は皆寓言の人物である。御は車の左に在つて馬を御す。驂は車の右に在つて陪乘することである。前馬は馬の前導であり、後車は車の後から從ふことをいふ。）　○至於襄城之野。七聖皆迷、（郭注に曰く「聖は名なり、名生じて物迷ふ。大隗に之かんと欲すと雖も、其れ得べけんや」と。成疏には「今の汝州に襄城縣あつた、泰隗山の南に在るといつてゐる。蓋し七竅鑿たれて渾沌死すの類で、聖知ある間は迷ふて眞の道を悟り得ぬ義である」。）　○遊六合之內（六合とは上下四方である。成疏には、「六合之內とは、囂塵之裏を謂ふなり」といつてゐる。塵俗の裡に居て世間名利の事に奔走するを言ふ。）　○瞀病（釋文に「李曰く風眩の說」と、目の眩するを云ふ。目の眩するは、心の亂るゝに由る。故に外物のために自己の性命の毀損するの意味を持つてゐる。）　○乘日之車（釋文に「司馬云ふ、日を以て車と爲すなり」と。郭注には「日出で、遊び、日入つて息す」と言てゐる。自然に生きて人爲を用ひないことである。）　○病少痊、（釋文に「李云ふ、痊は除なり」と。病の癒ゆるをいふ。）　○稱天師而退（郭注に曰く「夫の天然を師とし而して其の過分を去れば、則ち大隗至る」と。天師とは大宗師にして、大隗即ち至道なるを以て、聖言を悟りたる黄帝には、最早大隗に遇ふの必要なく退いたのである。）

知士無思慮之變、則不樂。辯士無談說之序、則不樂。察士無淩誶之事、則不樂。皆囿於物者也。招世之士興朝、中民之士榮官、筋力之士矜難、勇敢之士奮患、兵革之士樂戰、枯槁之士宿名、法律之士廣治、禮樂之士敬容、仁義之士貴際。農夫無草萊之事、則不比、商賈無市井之事、則不比、庶人有旦暮之業則勸、百工有器械之巧則壯。錢財不積、則貪者憂、權勢不尤、

た。「汝は具茨の山を知つて居るか。」童子は曰く「知つてゐる。」又問うた。「汝は大隗の居る所を知つてゐるか。」童子は「知つてゐる」と答へた。是に於いて黃帝は大に歎じて言つた。「さても異な子供だ。具茨の山を知るばかりでなく、大隗の居る所をも知つてゐる。恐らくこれは道を體得した者であらう。就いてはどうか、天下を治める道を聞き度いものであるが、如何。」童子は之に答へて曰く「天下を治めるのも、要するに一身を治めると同じく、今たゞ自分が此の野原に馬を牧してゐるやうなものである。自分は年少の時からあの世間に生をうけて、塵俗の裡にまみれてゐたが、適〻眩暈の病氣を起した。其の時長者が自分に向つて、汝は自然の裡に去つて、太陽のあの光りの車に乘つて襄城の野に遊べと敎へてくれた。自分は今其の敎を奉じてゐたら、疾も少しく癒えたから、又重ねてこれからは、世俗の塵埃を離れて、造物者の自然の懷に遊ばうと思ふ。彼の天下を治めるのも、恐らくは又斯くの如きもので、何も別の方法を用ふることはない。」黃帝は又尋ねた。「勿論天下を治めることは、汝の務むべきことではあるまい。しかし汝は有道者であるから、敢へて問ふのだが。是非一つ天下統治の要旨が聞き度いものだ。」童子は辭して答へないから、黃帝は强ひて尋ねた。童子はやつと答へて曰つた。「天下を治める道も馬を牧する術と何等異なる所でない。馬の天性にまかせて、自然のまゝに養ふべきである。その天性を害する銜や、鞭を去ることが大切である。天下を治める方法も、これと同じで、人民の本性を害するやうな、仁義禮智の人爲を去つて無爲にまかすべきだ。」黃帝は此の言葉を聞いて、再拜稽首し、之を尊んで天師と稱して立ち去つた。

【語釋】黃帝將ㇾ見ニ大隗乎具茨之山ニ（黃帝は軒轅氏といつてゐるが老莊學者に依つて理想的に立てた太古の聖天子であらう。大隗は釋文に或は神名と言ひ、或は大道と言つてゐる。廣大で隗然として冷寂なる義であるから、大道を人に喩

訓讀 黃帝、將に大隗を具茨の山に見んとす。方明御たり、昌寓驂乘し、張若・謵朋前馬たり、昆閽・滑稽後車たり。襄城の野に至る。七聖皆迷ふ。塗を問ふ所無し。適〻牧馬の童子に遇うて塗を問ふ。曰く、若具茨の山を知るかと。曰く然りと。若大隗の存する所を知るかと。曰く然りと。黃帝曰く、異なるかな小童、徒に具茨の山を知るのみならず、又大隗の存する所を知れり。請ふ天下を爲むることを問はんと。小童曰く、夫れ天下を爲むるものも、亦此の若きのみ又奚をか事とせん。予少きよりして自ら六合の內に遊ぶ。予、適〻瞀病あり。長者ありて予に敎へて曰く、若日の車に乘じて、襄城の野に遊べと。今予が病少しく痊ゆ。予又且に復六合の外に遊ばんとす。夫れ天下を爲むるも亦此の若きのみ。予又奚をか事とせむと。黃帝曰く、夫れ天下を爲むるものは、則ち誠に吾子の事にあらじ。然りと雖も、請ふ、天下を爲むることを問はんと。小童辭す。黃帝又問ふ。小童曰く、夫れ天下を爲むるものも、亦奚ぞ以て馬を牧するものに異ならんや。亦其の馬を害するものを去るのみと。黃帝再拜稽首、天師と稱して退く。

大意 黃帝と童子の寓言を設けて、天下統治の大道は仁義禮智の人爲を去つて無爲自然に任ずるに在ることを說く。

通釋 黃帝は大隗が具茨の山に居るときいて之を訪はんとして出かけた。方明は御車となり、昌寓は副乘となり、張若と謵朋とは前驅となり、昆閽と滑稽とは後從となつて、襄城の野まで行つたが、七人の聖者は皆道に迷ふて、問ふべき所もなく甚だ當惑してしまつた。たま〳〵馬を牧する一人の童子に出遇つた。そこで早速童子に尋ね

あろ。）

黃帝將見大隗乎具茨之山。方明爲御、昌寓驂乘、張若謵朋前馬、昆閽滑稽後車。至於襄城之野。七聖皆迷。無所問塗。適遇牧馬童子。問塗焉。曰、若知具茨之山乎。曰、然。若知大隗之所存乎。曰、然。黃帝曰、異哉小童。非徒知具茨之山、又知大隗之所存。請問爲天下。小童曰、夫爲天下者、亦若此而已矣。又奚事焉。予少而自遊於六合之內。予適有瞀病。有長者教予曰、若乘日之車、而遊於襄城之野。今予病少痊。予又且復遊於六合之外。夫爲天下、亦若此而已。予又奚事焉。黃帝曰、夫爲天下者、則誠非吾子之事。雖然、請問爲天下。小童辭。黃帝又問。小童曰、夫爲天下者、亦奚以異乎牧馬者哉。亦去其害馬者而已矣。黃帝再拜稽首。稱天師而退。

うなことをなさいますな。巧計をめぐらし、智謀をかまへ、爭鬪をなして、以つて人に勝たんとするやうなことをなさいますな。それ他國の士民を殺し、他の土地を奪ひ併せて、私欲私神を養ふは、他に勝つたやうではあるが、實は此の爲めに胸中は亂れ傷ついて、其の戰勝果して何れに在るか分らないのであります。君のお心に若し此の戰勝の事が有りませんでしたら結構で御座います。何も申す事はありません。だがまだ〳〵御心中を推察しますと、仁義戰勝の形迹に拘束せられてゐられるやうで御座います。何卒胸中の誠を修め、天地無私の眞情に順應して、民心を攪亂させないやうにして頂き度う御座います。斯くなれば世の中は無事太平にして、民の死も從つて免るゝ譯であります。何も君が殊更兵戰をお偃めになるにも及ばないのであります。

語釋　凡成レ美惡器也（郭注に曰く「美前になれば、僞後に生ず。故に美を成す者は、乃ち惡の器なり」と。又林西仲は「蓋し仁義は本美名なり。而して之を爲すこと中よりせざれば、未だ流れて僞に之くことを免れず」と言つてゐる。）○成固有レ伐（伐は舊來或は攻伐と解し、或は敗と解し、其の說一定せざるも、自らの功を稱する義に解して、仁義をなして、以て其の仁義に誇ると釋するのが、最も穩當ではないかと思ふ。）○無レ盛ニ鶴列於麗譙之閒ニ云々（郭注に曰く、「鶴列とは陳兵なり、麗譙とは高樓なり」と。釋文に曰く、「司馬季皆云ふ。麗譙は樓の觀名なりと。錙壇は壇名なり」と。林希逸之を說明して曰く「鶴列は猶魚麗の類の如し、兵陣の名なり、徒は步兵なり。驥は騎卒なり、麗譙は宮樓の門なり。錙壇は祭祀の地なり。古人は祭祀するに、必ず路寢に於てす。此は宮の内を言ふなり。其の意は蓋し曰ふ、君の心を用ふること、若し物と鬪はゞ、則ち一室の内皆步兵騎卒の前に列陣して、爭奪の境界に非らずと云ふこと無きが如し」と。其の心の内を透視して說き得て妙なる如く思はれるが、稍穿ちすぎてゐると思ふ。說文には、「土を封ずるを壇と曰ふ。錙壇の宮は軍壘を謂ふ」と曰つてゐる。前の武侯が民に仁にし、兵を偃すといふのを受けてゐるから、今は稍〻字義に拘はれた感もあるが、通釋の如く解することゝする。）○無レ藏ニ逆於得ニ（成疏に曰く「逆心を包藏して得るに苟くもすること勿れ」と。即ち利得のために非理の心を抱くことなかれの意である。）○君若勿已矣（此の一句は讀み方が區々として一定しない。「君若シ已ムコトナクンバ」と讀む說が一番多いが、斯く讀むと後が續かない。そして矣の字が邪魔となる。今は林西仲の意見に從つて讀むことにした。西仲は之を釋して曰く「言は君若し此の戰勝の事を爲すことなくんば則ち已みなん」と。）○應ニ天地之情ニ而勿レ攖（成疏に曰く「攖は擾なり。法を穿作し、黎民を擾攖することなかれ」と。天地自然の實情に順應して、人爲を勞して民の心を亂し騷がすことをするなの意で

が神とを養ふものは、其の戰は、孰れか善にして、勝の惡くにか在ることを知らず。君若し勿くんば已みなん。胸中の誠を修め、以て天地の情に應じて、攖ること勿れ。夫れ民の死已に脫す、君將た惡にか夫の兵を偃するを用ひんやと。

大意 武侯と徐無鬼の問答、人爲的に仁義を行はんとするは眞の道でないことを說く。

通釋 武侯曰く「私が先生にお目にかゝり度いと思つてゐたのは久しい間で御座います。今幸に其の敎を聞き大に悟る所が有りました。私は今後は大に民を愛護し、義のために兵戰を息めて了はうと思ひます。どんなものでありませうか。」徐無鬼は答へて曰く「それはいけません。抑も有意的に仁を爲さんが爲めに民を愛するのは、畢竟民を害するの始めであり、有意的に義の爲めに兵戰を偃めんとするのは、結局は兵戰を起す本であります。君が若しさういふ考で愛民息兵をやられるならば、何事も殆ど成功は出來ません。凡べて善を爲し美を成さんとする心は、其の裡に諸惡を藏した器物の如きものであります。君が仁義を爲すと雖も、其の心に既に美事なりと爲すの念あらば、徒らに僞仁僞義に流れて了ふのでありませう。眞の仁義は、其の形迹なきものであります。然るに既に仁義の念を藏し、仁義の形式を以て天下の事物を律せんとすれば、必ず從つて仁義の形迹を造るものであり、既に仁義にして成る所あれば、誇りの心を生ずるものであり、外境の形迹に心を勞するが故に、事情變ずれば又從つて兵を起し戰ひを開くに至るものであります。されば君におかれては、必ず兵陣を城の望樓の閒に集めて戰備を盛んにすることをなさいますな。人馬步騎を壘塞に配置することをなさいますな。理非の心を藏して苟くも得んとするや

民害民之始也。爲義偃兵、造兵之本也。君自此爲之、則殆不成。凡成美、惡器也。君雖爲仁義、幾且僞哉。形固造形、成固有伐、變固外戰。君亦必無盛鶴列於麗譙之閒、無徒驥於錙壇之宮、無藏逆於得、無以巧勝人、無以謀勝人、無以戰勝人。夫殺人之士民、兼人之土地、以養吾私與吾神者、其戰不知孰善勝之惡乎在。君若勿已矣、修胸中之誠、以應天地之情而勿攖。夫民死已脫矣。君將惡乎用夫偃兵哉。

訓讀　武侯曰く、先生を見んと欲すること久し。吾民を愛して、義の爲めに兵を偃せんと欲す。それ可ならんかと。徐無鬼曰く、不可なり。民を愛するは、民を害するの始めなり。義の爲めに兵を偃するは、兵を造るの本なり。君此より之を爲さば、則ち殆ど成らざらん。凡そ美を成すは、惡器なり。君仁義を爲すと雖も、幾ど且に僞ならんとする哉。形すれば固より形を造り、成せば固より伐あり、變ずれば固より外に戰ふ。君亦必ず鶴列を麗譙の閒に盛んにすること無く、錙壇の宮に徒驥すること無く、逆を得に藏することなく、巧を以て人に勝つこと無く、謀を以て人に勝つこと無く、戰ひを以て人に勝つこと無かれ。夫れ人の士民を殺し、人の土地を兼ね、以て吾が私と吾

ん。高きに登つたからとて、身丈けが長いとすることも出來ず、低きに居たからとて、身丈が短いとすることも出來ない。然るに君は一人萬乘の主となり、國民の膏血を搾つて己が耳目口鼻を養ひ、以て眼前の快樂を逐うて見えるやうですが、本然の良心はもと〳〵そんなものでなく、君の眞の心神は決してそれを許さないと存じます。彼の本然の良心なるものは、衆と和樂することを好み、人を苦しめて自ら私するの姦を惡くむものであります。私せんとする姦邪の心は、卽ち是れ良心に對する一種の病氣であります。君には此の病に罹られて、未だ自覺されないやうでありますから、私はそれを慰め參らせ度いと思つて參つたのであります。君が、それ程困苦しお病ひなされてゐる所以は何で御座いませうか、お伺ひ申し度いもので御座います。」

語釋　食芧栗（芧は橡に通じて「クヌギ」の木である。卽ち橡の實たるドングリや栗を食物とすること。齊物論にも狙公賦芧とある。）　○以賓寡人久矣（釋文に曰く「本或は擯に作る。司馬云ふ、擯は棄なり」と、吾を見棄てゝ訪はざりしことゝ久しの意である。）　○其寡人亦有社稷之福邪（釋文に「李云ふ、善言嘉謀以て社稷を利すべきを謂ふなりと。」私も亦私の國家の幸福となる御言葉を聞くことを得させらるかとの意。）　○天地之養也一（林希逸は曰く「養者生なり、天地の間に生ず。此れ皆人なり。故に曰く、天地の養や一と、言は同なり。高きに登る、長しと爲さず。下に居る、短しと爲さず。貴賤なきの喩なり」と。卽ち養は生なりと解して、人の義となせども今は從はず。養は養なり、卽ち天地が萬物を養ふの意にとる。）　○夫神者不自許也（陸樹芝曰く「神は心の神明なり、民、厲して自ら養へば、神明の內慙竟安んじ難し。是れ自ら許さざるなり」と。明解從ふべきである。）　○姦病也（釋文に「王云ふ、姦とは明を以て邪に從ふなり」と。陸樹芝曰く「姦は亂たり。聲色臭味の塵を以て、其の六根を蔭し、其の天和を賊す。夫れ病む所以なり」と。林希逸は「自ら私するなり」と曰つてゐる。上の「和を好む」に對するところから見ると、「自ら私す」と解するのが最も妥當ではないかと思ふ。今は之に從ふ。）　○唯君所病之何也（此の句は讀方諸說ありて明解を缺く。曰く「唯君の病む所は何ぞ」と、曰く「唯君病む所をいかがする」と。今は「唯君之を病む所は何ぞや」と讀んで、心神を勞し病む所以を問ふの語と解す。）

武侯曰、欲見先生久矣。吾欲愛民而爲義偃兵。其可乎。徐無鬼曰、不可。愛

賤に生る、未だ嘗て敢へて君の酒肉を飲食せんとせず、將に來つて君を勞せんとするなりと。君曰く、何ぞや、奚ぞ寡人を勞するやと。曰く、君の神と形とを勞すと。武侯曰く、何の謂ぞやと。徐無鬼曰く、天地の養や一。高きに登つて以て長と爲すべからず、下に居つて以て短と爲すべからず。君獨り萬乘の主と爲り、以て一國の民を苦しめ以て耳目鼻口を養ふ。夫の神なるものは自ら許さざるなり。夫の神なるものは、和を好んで姦を惡む。夫れ姦は病なり。故に之を勞す。唯〻君之を病む所は何ぞやと。

大意 徐無鬼又他日武侯に謁しての問答で、武侯の酒池肉林の病に陷つてゐるのを悟らしめんが爲の序論である。

通釋 他日又徐無鬼が來て武侯に謁した。武侯は曰つた「先生は山林の間に隱居して、芧や栗を食つたり、葱や韮等に滿足して、寡人を俗物として擯斥し、敢へてお會ひ下さらうともせられなかつたが、今態々來られたのは、老いて山林の勞苦に堪えざるためか、又酒肉の滋味を求めんためか、但しは善言嘉謀を以て寡人の國を利せしめんが爲か、一體何故でありますか。」徐無鬼答へて曰く「私は元來貧賤に生れて、未だ嘗て君の酒肉を飲食した經驗もありませんし、從つて欲しいとも思つたことはありません。たゞ君を勞ひ、お慰めし度いが爲に參つたのであります」武侯は之を聞いて、「何んと云はれますか、どういふ譯で寡人を勞はうとせられるのですか。」と問うた。徐無鬼は「君の精神と肉體とを勞はんが爲であります」と云つた。武侯は「それは如何なる謂でありますか」と尋ねた。徐無鬼答へて曰く「天地が一切の物を養ふは一であつて、貴賤高下の區別を以て厚薄の差をつけることはありませ

はんと欲する貌なり。位は出なり。止るなり」と。踶は跆踶など〻も熟し、往きつ戻りつすること。）○跫然（釋文に「司馬云ふ、跫の貌」と、林西仲曰く「空中足音の響なり」と。今は林西仲の説に從ふ。）○久矣夫、莫下以二眞人之言一謦上欬吾君之側上乎（林希逸曰く「此の意は蓋し言ふ、武侯は〻然の眞離失すること已に久し。略々此の語を聞いて、空谷に逃れて足音を聞くが如し。喜ぶ所以なり。禪家に所謂・久參家に還ると云ふは是れなり」と。）○謦欬（釋文に「李云ふ、謦欬とは言笑に喩ふ」と。林希逸は喉中の聲と云ふ　咳や聲のかすかなもの〻意に解するを穩當と思ふ。）

徐無鬼見武侯。武侯曰、先生居山林、食芧栗、厭葱韭、以賓寡人久矣。夫今老邪。其欲干酒肉之味邪。其寡人亦有社稷之福邪。徐無鬼曰、無鬼生於貧賤、未嘗敢飲食君之酒肉、將來勞君也。君曰、何哉、奚勞寡人。曰、勞君之神與形。武侯曰、何謂邪。徐無鬼曰、天地之養也一。登高不可以爲長。居下不可以爲短。君獨爲萬乘之主、以苦一國之民、以養耳目鼻口。夫神者不自許也。夫神者好和而惡姦。夫姦病也。故勞之。唯君所病之何也。

訓讀　徐無鬼、武侯に見ゆ。武侯曰く、先生山林に居り、芧栗を食ひ、葱韭に厭き、以て寡人を賓つること久し。夫れ今、老いたるか、其れ酒肉の味を干めんと欲するか。其れ寡人も亦社稷の福ありやと。徐無鬼曰く、無鬼貧

悦んで笑はれた事はありません。一體全體、先生は何事を說いて、吾が君をこんなに悦ばせられたのでありますか。」徐無鬼は、「俺は、たゞ狗馬の良否を相する術をお話し申したのみだ」と答へた。女商は怪しんで「たつたそれだけの事ですか」と問うた。徐無鬼は之に對へて曰つた。「お前はあの遠く越の地方を流浪した人の話を聞かないか。彼は國を去つてから數日の後には、其の知己に遇へば喜んで。國を去つてから數月の後になると、嘗て國內で見知つたことのある位の人に遇つても喜んだ。更に一年も經つて、懷鄕の念漸く深くなつて、母國人に似た者を見ても非常に喜んだ。是れ卽ち自分の國を離れ、同鄕人と會はないこと愈ゝ久しければ、其の國人を戀ふの情は愈ゝ深くなる爲めではないか。かの人跡稀れな空谷に隱遁してゐる者が、アカザの如き雜草が茂り重つて、やつと鼪鼬の通り得る位の徑も塞いでゐる荒凉たる中に、往きつ戻りつして寂莫の情をひし／＼と胸に覺えてゐる時には、遙かに人の足音を聞いただけでさへも非常に喜び勇むものである。況して、面のあたり兄弟緣者の聲を聞いたならば、其の喜悅の情は如何ばかりであらう。吾が君が眞人の謦欬に接しなかつたことは、實に久しい間であつた。だから俺が一度會ふと、大に悅に入られたのだが、どうだ其の譯は分るであらう」。

語釋　横說レ之。從說レ之（林希逸曰く「從横は反覆して鋪說するの意なり。詩書を横となし、六弢を從と爲すに泥むべからず」と。横縱論議の意である。）〇金板六弢（林希逸曰く「金版六弢は卽ち太公が兵法なり、此の書今尙に藏む。故に金版と曰ふ。猶ほ金匱石室と曰ふが如し」と。六弢とは釋文に曰く「本又六韜に作る」と。卽ち太公の六韜は、文武虎豹龍犬の六つである。）〇越之流人（越は南方の今の福建省地方を指す。流人は必ずしも刑をうけて流された人と局限せなくてもよからう。林希逸の「流人とは國を去つて流落するの人なり」と云へるに從ふことゝする。）〇見レ似レ人者一而喜矣（成疏に曰く「國を去つて周年、適く所漸く遠し、故に鄕里の人に似たるを見て歡喜す」と。蓋し人情の赴く所古今の差別はない。）〇夫逃二虛空一者云云（林西仲曰く「虛空とは空谷なり。柱は塞なり。鼪鼬の徑は、山蹊の間、鼪鼬の由る處なり。而藜藋之を塞ぐ。蒼茫知るべし」と、逕は釋文は又徑に作る。司馬云ふ、「徑道なり」と。）〇踉二位其空一（林希逸曰く「踉は卽、類篇に曰く行

謦欬吾君之側乎。

訓讀 徐無鬼出づ。女商曰く、先生獨り何を以てか吾が君に說ける。吾が吾が君に說く所以の者は、横に之を說けば、則ち詩書禮樂を以てし、從に之を說けば、則ち金板六弢を以てし、事に奉じて大に功あるもの、數を爲すべからず。而して吾が君未だ嘗て齒を啓かず。今は先生何を以てか吾君に說いて、吾君をして說ばしむること此の若きかと。徐無鬼曰く、吾れ直之れに吾が狗馬を相するを告げしのみと。女商曰く、是の若きかと。曰く、子は夫の越の流人を聞かずや。國を去ること數日、其の知る所を見て喜ぶ。國を去ること旬月、嘗て國中に見し所の者を見て喜ぶ。期年に及ぶや、人に似たるものを見て喜ぶ。亦人を去ること滋ゝ久しくして、人を思ふこと滋ゝ深からずや。夫の虛空に逃るゝ者、藜藋鼪鼬の逕に柱る。其の空に踉位すれば、人の足音跫然たるを聞いて喜ぶ。而るを況んや昆弟親戚の其の側に謦欬する者をや。久しいかな、眞人の言を以て、吾が君の側に謦咳すること莫きやと。

大意 徐無鬼は武侯の喜悅した所以は、久しく聞くことを得なかつた眞人の言を申し上げた爲だと引例を巧みにして說明する。

通釋 徐無鬼が君の前から引き下つて女商に會ふと、女商は徐無鬼に問うた。「先生は一體何を吾が君に說かれましたか。私が平素君に申し上げてゐる所は、時には詩書禮樂の道德を以てし、時には金板六弢の太公の兵法を以てして、横說縱說、事局に當つて大に功を奏したことは、實に數へきれない位でありますのに、吾が君は未だ一度も

所ある狗の狀をいふのであらう。）　○上之質若レ亡。其一ニ（釋文に曰く、「一とは身なり。精神不動、其の身無きがごときを謂ふ」と。蓋し齊物論の「嗒焉として其の耦を喪ふに似たり」と同意である。）　○直者中レ繩云云（陽文め成疏も馬の形體に就いて曰つて、繩鉤規矩を馬の姿體に配してゐる。林西仲は「其の動の渠度に合ふを言ふ。舊齒背頭目に分つは、太だ泥めり」と云つてゐる。今は此の說に從ふ。）　○若レ郵若レ失（釋文に曰く「郵は音傴、失は司馬本には佚に作る。李云ふ、郵失は皆驚悚飛ぶが如きなり」と。林希逸は闊然の意なりと曰つてゐる。卽ち智慮を勞さないで茫然として心身を失ふのを云ふ。）　○超軼絕塵（成疏に曰く「軼は過なり。馳走迅速、霎馬を超過す。疾きこと迅風の若し。塵埃遠く隔つ」と。又解し得て妙か。）

徐無鬼出。女商曰、先生獨何以說二吾君一乎。吾所三以說二吾君一者、橫說レ之、則以二詩書禮樂一、從說レ之、則以二金板六弢一。奉レ事而大有レ功者、不レ可レ爲レ數。而吾君未二嘗啓一レ齒。今先生何以說二吾君一、使二吾君說一若レ此乎。徐無鬼曰、吾直告二之吾相一狗馬耳。女商曰、若是乎。曰、不レ聞二夫越之流人一乎。去レ國數日、見二其所一レ知而喜。去レ國旬月、見下所二嘗見一於國中上者喜。及二期年一也、見二似レ人者一而喜矣。不二亦去レ人滋久、思レ人滋深一乎。夫逃二虛空一者、藜藋柱二乎鼪鼬之逕一、踉二位其空一、聞二人足音跫然一而喜矣。而況乎昆弟親戚之謦二欬其側一者乎。久矣夫、莫下以二眞人之言一

外なか〳〵其の安きを得難いものであります。それ故に私は君を勞らひ導き度いと思つてをるので御座います、私などは君から慰勞せられる何物も持つてはをりません。」武侯は不機嫌な顏をして何も答へない。やゝ暫くして徐無鬼は更に語を繼いて云つた。「今試に私が狗の品質善惡を判別したことを君にお話し申して見ませう。性質劣等な狗は、餌を得て飽食すればそれで滿足するもので、譬へば猫が鼠を捕へて飽食して滿足すると其の德は一斑であります。性質中等の狗は常に凝然として日を視つめるやうに首を擧げて意氣高遠な所があります。更に上等の狗質を持つものは、精神は靜定して宛も其の身を失へるが如くであります。又私の馬の品質性相を判定するものは更に得意とする所でありますから、序に申し上げて見ませう。其の馬の動作が、直行する時は直きこと繩墨に當り、曲がる時は鉤にかなひ、方なる時は直角に折れて矩にかなひ、圓るく旋囘する時は規に合ふ。斯く其の直曲方圓に從つて、夫々繩鉤規矩に合致するやうに訓練出來た馬を國中第一の馬と稱します。しかし未だ天下第一の馬には及びません。抑も天下第一の馬には自然に成る所の材があつて、其の狀は宛かも、憂ふるが如く、失ふ所あるが如く、而かも悠然として其の身をも喪うてゐるやうであります。斯くの如き馬こそ、羣馬に超絕して、奔放絕塵、一たび走つて、其の止まる所を知らざるものであります。」之を聞いて武侯は大に悅んで莞爾として笑はれた。

語釋 徐無鬼（釋文に曰く「緡山の人、魏の隱士なり」と。姓は徐、無鬼は字である。）○女商（魏の幸臣、即ち私臨の臣である。）○黜ニ耆欲一掔ニ好惡一（釋文に曰く、「黜は退なり。掔は徂云ふ、引去なり」と。司馬云ふ「牽なり」と。嗜欲好惡の情を退け除く意。）○超然不レ對（釋文に「司馬云ふ、超然は猶悵然のごときなり」と、其の言を悅ばず、徐無鬼の言に超然として耳をかさゞる如くして對へないのである。）○是狸德也（兪樾曰く、「廣雅釋獸に狸は猫なりと。猫の鼠を捕ふる、飽いて止む。故に曰く、狸德なりと」、今兪樾の說に從つて狸を猫と解す。）○中之質若レ視レ日（釋文に「司馬云ふ、視日とは瞻遠なり」と。成疏に依れば「意氣高遠にして望んで日を視るが如し」と云ふ。食物のみに心を捉はれず、心中何か思ふ

說而笑。

【訓讀】徐無鬼、女商に因つて魏の武侯に見ゆ。武侯之を勞して曰く、先生病めり、山林の勞に苦しむ。故に乃ち肯へて寡人を見るかと。徐無鬼曰く、我は則ち君を勞せんとす。君何の我を勞することかあらん。君將に耆欲を盈て、好惡を長ぜんとせば、則ち性命の情病まん。君將に耆欲を黜け好惡を掔けんとせば、則ち耳目病まん。我將に君を勞せんとす、君何の我を勞することかあらんと。武侯超然として對へず。少して徐無鬼曰く、嘗に君に吾が狗を相するを語げん。下の質は執飽して止む。是れ狸德なり。中の質は日を視るが若し。上の質は其の一を亡ふが若し。吾が狗を相するは又吾が馬を相するに若かざるなり。吾が馬を相する、直きは繩に中り曲れるは鉤に中り方なるは矩に中り圓なるは規に中るは是れ國馬なり。未だ天下の馬に若かざるなり。天下の馬は成材あり。邮ふが若く失ふが若く、其の一を喪ふが若し。是の若きものは、超軼絕塵して、其の所を知らずと。武侯大に說んで笑ふ。

【大意】徐無鬼が魏の武侯に會つて、狗や馬の例話を引いて、喪身全生の無爲の大道を說き起すのである。

【通釋】徐無鬼が女商のてびきで魏の武侯に見えた。武侯は之を勞うて言つた。「先生は久しく山林に勤苦して隱遁の生活に疲れたが爲に予に會はれに來られたのですか。」徐無鬼が答へて言ふには「私の方こそ君を勞はうと存じて參つたのであります。私には別に君から勞らひ、いたわつて頂くことは有りません。君が若し嗜欲を滿足させ、好惡の情を增長させれば、其の爲めに性命の本質は傷れ病むこととなりませう。それかと云つて、若し又、嗜欲を除き、好惡の情を抑へんとすれば、其の爲めに耳目は樂しむ所なくて、反つて病み傷かれることになります。內

雜篇　徐無鬼第二十四

敘說　此の篇亦聖知を去つて自然に任すべきを論ず。

徐無鬼因女商見魏武侯。武侯勞之曰、先生病矣。苦於山林之勞。故乃肯見於寡人。徐無鬼曰、我則勞於君。君有何勞於我。君將盈耆欲、長好惡、則性命之情病矣。君將黜耆欲、掔好惡、則耳目病矣。我將勞君、君有何勞於我。武侯超然不對。少焉徐無鬼曰、嘗語君吾相狗也。下之質、執飽而止。是狸德也。中之質、若視日。上之質、若亡其一。吾相狗、又不若吾相馬也。吾相馬、直者中繩、曲者中鉤、方者中矩、圓者中規、是國馬也。而未若天下馬也。天下馬有成材。若卹若失、若喪其一。若是者、超軼絕塵、不知其所。武侯大

囚人が高所に登つても懼れないのは、最早死生を忘れて超越してゐるからである。道を修むるに、反復習熟して眞に我が爲にし、その道を人に餽つて人の爲にしようなどゝしない人は、人といふ對立を忘れることが出來る。人を忘れて、純全なる自已になり切つた者が即ち天人、天人共に巧なる者である。此の人は尊敬しても喜ばず、侮つても怒らないが、此の敬侮に依つて自分の感情を亂さないのは、惟自然の和に合する者にして始めて出來るものである。怒つても、其の怒が無心より出づるときは、怒らざるより出づる怒である。爲しても、其の爲すや無心より出づれば、爲すこと無きより出づる爲である。故に靜ならんと欲せば其の氣を平かにし、心を神靈ならんと欲せば、其の心を順にして物事に忤うてはならぬ。爲すことが皆當らんことを欲せば、已むことを得ざるに依つて爲さねばならぬ。即ち此の已むことを得ずして爲す、無爲に依つて爲すのが、眞の聖人の道である。

語釋　介者拸レ畫外ニ非譽ニ也（成疏に「介は刖なり」と、刖は斷足にて、古の肉刑の名である。又「拸は去なり」、「畫は装なり」と。容貌を美しくして装飾することを去るのである。異説あれども今は從はず。）○胥靡（釋文に司馬云ふ「刑徒の人なり」と。即ち死刑になる人をいふ。）○不レ餽（釋文に「廣雅に云ふ、餽は遺なり」と。餽は「愧なり」となす説あれども今は採らず。）○忘レ人因以爲ニ天人一矣（成疏卒に曰く「其の天道の性にて、人道の情を忘る。因つて自然の理に合するなり」と。此の天人は前節の天に巧、人に工なる者、即ち天人に巧みなる全人を受けたものである。）○緣ニ於不レ得レ已（成疏に曰く「緣は順なり」と。不得已は慣用ひられた詞であつて、老莊學としては大切なものである。必然の要求といふ意味であらう。）

羊皮を以て之を楚に贖ふ、又云ふ百里奚は五色の皮裘を好む。故に其の好む所に因るなり」と。此の一節又異說多し。今はしばらく釋文の說に從つて他は採らず。）

介者拸畫、外非譽也。胥靡登高而不懼、遺死生也。夫復謵不餽而忘人。忘人因以爲天人矣。故敬之不喜、侮之而不怒者、惟同乎天和者爲然。出怒不怒、則怒出於不怒矣。出爲無爲、則爲出於無爲矣。欲靜則平氣。欲神則順心。有爲也、欲當則緣於不得已。不得已之類、聖人之道。

訓讀 介者の畫を拸るゝは、非譽を外にすればなり。胥靡の高きに登つて懼れざるは、死生を遺るればなり。夫れ復謵して餽らざるは人を忘るゝなり。人を忘れて因つて以て天人と爲す。故に之を敬すれども喜ばず、之を侮れども怒らざるものは、惟ゞ天和に同じきもの然りと爲す。怒を出して怒らざれば、則ち怒は怒らざるより出づ。爲を出して爲すこと無ければ、則ち爲、爲すことなきより出づ。靜を欲せば則ち氣を平にす。神を欲せば則ち心を順にす。爲すこと有つて當らんと欲せば、則ち已むことを得ざるに緣る。已むことを得ざるの類は聖人の道なり。

大意 無心無爲より出づる聖人の絕對的の道を說く。

通釋 足を斬られた不具者が、裝飾を去つて用ひないのは、世間の毀譽を外にして顧みないからである。徒刑の

一雀適羿。羿必得之、威也。以天下爲之籠、則雀無所逃。是故湯以胞人籠伊尹、秦穆公以五羊之皮籠百里奚。是故非以其所好籠之、而可得者無有也。

訓讀　一雀羿に適く、羿必ず之を得るは威なり、天下を以て之が籠と爲せば、則ち雀逃るゝ所なし。是の故に湯は胞人を以て伊尹を籠し、秦の穆公は五羊の皮を以て百里奚を籠す。是の故に、其の好む所を以て、之を籠するに非ずして、得べきものは有ること無きなり。

大意　人爲より自然の赴く所に從ふことの宜しき所以を說く。

通釋　若し雀が羿の前に適けば、羿は必ず之を射落すのである。是れ其の射術の威力に依るものである。しかし雀が羿に近寄らなかつたら、羿の妙技も施しやうがない。宇宙を以て籠となし、雀を皆其の中に入れて、一として逃れることのないのには及ばない。此の故に湯は伊尹の好む所に從つて、料理番として之をとり入れ、秦の穆公は五羊の皮を以て百里奚を手に入れてしまつた。凡て世の中の事は、其の好む所に從つて行ふのでなかつたら、成功することは出來ない。

語釋　是故湯以胞人籠伊尹、秦穆公以五羊之皮籠百里奚（釋文に曰く「胞本又庖に作る。伊尹厨を好む、故に湯用ひて庖人と爲す。百里奚は秦を好む、而かも宛に拘はる。故に秦穆公は五

訓讀 羿は微に中つるに工なれども、人をして已を譽むること無からしむるに拙し。聖人は天に工にして人に拙し。夫れ天に工にして人に良きものは、唯全人之を能くす。唯蟲能く蟲たり、唯蟲能く天たり。全人の天を惡むは人の天を惡むなり。而るを況んや吾が天をや人をや。

大意 全德の人の天稟に本づく自然のまゝの働きを述ぶ。

通釋 羿は弓の名人で、微細な物を射中てることは巧みであつたが、人をして已を譽めしめないやうにするには拙なかつた。聖人なる者は天即ち自然に合致するには巧みなるも、天下より受くる名を逃れ得ざるが故に、人に對して拙ない者である。天人に對して共に巧みなる者は、たゞ全德の人のみ能く爲し得る所である。かの蟲などは能く其の性に率ひ、飛ぶべきは飛び、鳴くべきは鳴いて、蟲は蟲として、鳥は鳥として、一に天稟の能を盡すものである。全德の人が天を惡むといふのは、所謂人の知に本づく天を惡みきらふのである。況して天人を已に屬して、吾が天とか吾が人とか云ふに至つては誠に以ての外である。

語釋 ○羿工二乎中一レ微（林希逸曰く「微は妙なり、射の中る、微妙に至る」と。陸樹芝曰く「羿の射能く微物に中つ」と。後者の穩かなるをとる。）○夫工二乎天一而俍二乎人一者、唯全人能レ之（釋文に崔云ふ「良は工なり」と。郭注は全人は卽ち聖人なりといひ、成疏には「全人は神人なり」と云ふ。後人互に二說を採りて議論あれど、今は成疏に從つて、天人共に巧なる者を全人、至人、神人といひて、聖人の上に出づる者とす。）○惟蟲能蟲、惟蟲能天（釋文に、曰く「本に唯は雖に作る。下句も亦爾り、蟲自ら能く蟲爲たる者は天なるを言ふなり」と。唯と雖何れにしても通ず、しかし唯と作る方が其の意を得たやうに思はる。）○全人惡レ天、惡二人之天一（林希逸曰く「天の名有れば則ち人の名あり。故に曰く、全人天を惡むとは、其の名有ることを樂しまざるなり」と。此の一節も異說紛々たれど、今は林希逸の說に從つて、全人は人の知に本づく所謂名のある天を惡むのであると解す。）

るは、宛も嬰兒の能く物を視ると雖も、而も十分に認識することが出來ないやうなものである。已むを得ざる結果、即ち必然的に動かねばならぬ事に從つて動くを德と謂ひ、其の動くや悉く眞我に非ざる無きを治と謂ふ。德と治は其の名は相反する働きの如く聞ゆるも、其の實は相合するものである。

語釋　徹二志之勃一(林希逸曰く「徹は撤と同じ」と。成疏に曰く「俗勃は亂なり」と。志を亂す所の外物を撤去するのである。)　○解二心之謬一(成疏に曰く「謬は繫縛なり」と。林西仲曰く「謬は差謬なり」と。今は後者に從ふ。心を謬とす所の原因を解除するのである。)　○道者德之欽也(林希逸曰く「欽とは持守して恭敬するなり」と。其の他異說は澤山あるが、欽は元來恭敬を意味し、專制的な君主などを尊敬して欽字を用ひてゐる。いはゆる德の持つ絶對的な或る力を指して欽と解しては無理だらうか。)　○生者德之光也(成疏に曰く「天地の大德を生と曰ふ。故に萬物を生化するは、盛德の光華なり」と。生とは德の發現、即ち德の顯現たる光華といふべき程の意であらう。)　○性者生之質也(成疏に曰く「質は本なり、自然の性は是れ生を稟くるの本なり」と。即ち宇宙の生成の本質は性である。性あつて始めて生成の活物となるものである。宋儒の言葉を借りれば性は理である。本然の性である。)　○知者之所レ不レ知、猶レ睨也(異說の多い所である。此の知を智者の知として、知を用ふるも、猶制限あること斜視の一方のみを視る如しとなす說あるも、前の知者接也、知者謨也を受けてゐるから、直ちに此の知を眞知と解するは隱かでない。前と同樣の人の知と解して、人知の道の本體を見ることの出來ないのは、猶睨の如しと說くことにする。睨は林希逸曰く「嬰兒の視る、而かも視る所無きを睨といふ」と。ただ網膜に寫るのみで、眞に確知せざる意である。)　○動無レ非レ我、之謂レ治(成疏に曰く「性に率つて動き、我を捨て物に效はざれば正理に合す。故に亂れず」と。これは裏面から說いてゐる。我は眞我にして、て眞我を離れなかつたら、亂れ動いることはない。即ち治である。)　○名相反而實相順也(已むを得ずして動くのは德であり、其の動くや眞我即ち道を離れないのを治といふ。德と明と其の名は異なるが、其の實たる意義に於いては相合するのである。)

羿工二乎中一微、而拙四日使三人無二己譽一。聖人工二乎天一而拙二乎人一。夫工二乎天一而俍二乎人一者、唯全人能之。唯蟲能レ蟲、唯蟲能天。全人惡レ天、惡二人之天一。而況吾天乎人乎。

與知能、六つのものは道を塞ぐなり。此の四つの六の者、胸中を盪せざれば則ち正し。正しければ則ち靜、靜なれば則ち明、明なれば則ち虛、虛なれば則ち爲すことなくして爲さゞることなきなり。道なるものは德の欽なり、生なるものは德の光なり、性なるものは生の質なり、性の動く、之を爲と謂ひ、爲の僞る、之を失と謂ふ。知者は接はり、知者は謨る、知者の知らざる所は、猶ほ睨のごときなり。動くに已むを得ざるを以てするを、之れ德と謂ひ、動いて我に非ざるなきを、之れ治と謂ふ。名は相反すれども、實は相順ふなり。

大意　心志を亂し道德を閉塞する所の煩惱を說き、進んで道德の本質眞知の當體を論ず。

通釋　志を亂し、心をあやまらせる所のものを解き去り、德の累ひとなり、道を塞ぎ妨ぐるものを除去して、自然の働きに任すべきである。富、貴、權、威、名、利の六つの者は志を亂し、容貌、動作、顏色、言語、氣調、情意の六つの者は心を誤らしめる者であり、憎惡、貪慾、喜悅、憤怒、哀傷、歡樂の六つは德の累らひとなり、去、就、取、與、知慧、才能の六つは道を塞ぐものである。以上の四種の六害が胸中を動亂することが無かつたら、心神は則ち平正である。心神平正なれば自ら靜、靜なれば自ら明、明なれば自ら虛となる。虛なれば則ち恬淡無爲である。無爲にして而も萬事に應じて爲さゞるなきものである。道とは德の持守して恭敬なる當體であり、生とは德の發現した光華そのものである。性は生命活動の本質であり、性が外物に感じて發動した結果が即ち爲である。性の發動そのものは絕對なるものであるが、之に人爲即ち知を加へると僞となり、僞は遂に性の眞を失ふに至る。知なるものは事物に接し、計慮を廻らすものである。しかも其の知なるものが本質を知る能はざ

語釋 蹍二市人之足一（蹍は釋文に「司馬云ふ、蹈なりと。廣雅に云ふ、履なり」と。市井往來の人の足を踏むのである。）○放鷔（陸樹芝曰く、「放鷔とは不謹なり」と。不注意にて粗忽するをいふ。）○兄則以レ嫗（王先謙が宣穎を引いて云ふ「兄の足を蹍めば、則ち必ずしも辭謝して罪を引かず、但嘔嫗「クウ」して之を憐むのみ」と。即ち息を吹きかけて撫でさするのである。）○大親則已（成疏には親にして子の足を踏むに作る。林希逸林西仲等皆之を從へども、今は從はず。親の足を踏むと解す。）○至信辟レ金（辟は釋文に曰く「除なり」と。金玉とは信の質である。至信なれば、却つて形式上の金玉などはいらないの意である。）

徹二志之勃一、解二心之謬一、去二德之累一、達二道之塞一。貴富顯嚴名利、六者、勃レ志也。容動色理氣意、六者、謬レ心也。惡欲喜怒哀樂、六者、累レ德也。去就取與知能、六者、塞レ道也。此四六者、不レ盪二胸中一則正。正則靜、靜則明、明則虛、虛則無爲而無レ不レ爲也。道者德之欽也。生者德之光也。性者生之質也。性之動、謂二之爲一、爲之僞、謂二之失一。知者接也、知者謨也。知者之所レ不レ知、猶レ睨也。動以レ不レ得レ已、之謂レ德、動無レ非レ我、之謂レ治。名相反而實相順也。

訓讀 志の勃を徹し、心の謬を解き、德の累を去り、道の塞を達す。貴富顯嚴名利、六つのものは志を勃かすなり。容動色理氣意、六つのものは心を謬らすなり。惡欲喜怒哀樂、六つのものは德を累はすなり。去就取

じて已まざるなり」と。其の勢に乘じて是非の見を立つるやうに至るの意である。）

蹍市人之足、則辭以放驁、兄則以嫗、大親則已矣。故曰、至禮有不人、至義不物、至知不謀、至仁無親。至信辟金。

訓讀 市人の足を蹍めば、則ち辭するに放驁を以てし、兄は則ち嫗を以てし、大親は則ち已む。故に曰く、至禮は人とせざるあり、至義は物とせず、至知は謀らず、至仁は親なし。至信は金を辟くと。

大意 足を踐むの一例を設けて仁義禮知信の至極を說く。

通釋 今誤つて往來の市中の人の足を踏めば、其の粗忽不注意をお詫びするけれども、兄の足を踏んでも、一寸撫でゝやる位でお詫びなどしない。又親の足を踏んだ時は、詫びも撫でもせず、そのまゝに濟ましてしまふものである。是れ其の情極めて親しきがためである。故に古語に曰く。至極の禮なるものは自他の觀念なく、人を人として揖讓の禮をしないが、而かも自然と其の中に次序はある。至極の義は物を物とせずして、而かも自然に宜しきに合ふ。至極の知は謀慮を用ひずして、而かも自然に覺る。至極の仁は特に親愛することなくして、而かも汎く愛し親みの及ぶものである。至極の信は質として交はす金玉の符を待たずして、而かも自然に誠實に合するものである。

閒、互に移りて一定しない。是を移是といふ。こゝに假に移是を論ぜんとするも、定分のない是非の論などは言ふべき價値のないものである。しかしながら又知らねばならぬものである。譬へばかの臘祭にあたつて、牛の腸や足趾などはいらないものであるが、それかといつて取り去つては犧牲にならない。又家室を觀る者は祖廟や座敷などの正廳を見れば十分と思ふが、又偃息の小室や厠へも行つて見て、始めて家の全體を知るやうなものである。移是を論ずるはつまらない心の勞作と思ふけれども、こゝに移是を擧げて、試みに說明しよう。抑も移是とは生を以て本なりと爲し、知を以て師なりとなすに依つて生ずるものである。其の結果は名實の分を立て、己を以て實となし、人をして己に節を盡さしめるやうになり、其の爲に又死を以て節に酬いんとするに至るものである。斯く是非名實の分に執着する爲に、用不用を以て知愚の見を立て、窮達を以て榮辱の分るゝ所となす。移是の見に固執すること、實に現代人の通弊である。宛も蟬と鳩とが、大鵬の志を知らずして笑ふの類に同じく、是れ各〻其の是とする所を是として人を非とするの小見小知といふべきである。

語釋　有レ生黬也（釋文に「字林云ふ、黬は釜底の黑なり」と。生は元來幻相にして釜の底墨の火をうけて明滅する如きものである。）　○披然曰二移是一（林希逸曰く「披とは分なり、既に分別有れば、各其の私に私す。既に其の私を私すれは、各々其の是とす。而していはゆる是なるものは移る。移は不定なり」と。分別して是非を生ずるも、定分なくして是非相移るを移是と曰ふ。）　○雖レ然不レ可レ知者也（郭注に曰く「其の移を言はず、則ち其の移知るべからず」と。此の注に依つては前に移是は言ふ所に非ずといひ、雖然と受けた文としては稍解し難い。今試みに牧野謙次郎氏が巖井文の、「可知の閒、恐らくは一不の字を脱せん」を引くのを肯定して、通釋の如く解をすることにした。）　○臘者之有二膍胲一、可レ散而不レ可レ散也。（釋文に「司馬云ふ、臘は牛百葉なりと。胲は足の大指なり」と。成疏に曰く「臘祭の時牲牢甚だ備はる、四肢五藏に至るまで皆陳設す。祭事既に訖つて、復之を散ずるに方つては、散を以て是と爲す。其の祭未だ了らざれば則ち散ずべからず。則ち散を以て不是となす。是れ是と不是、移是常なきを知る」と。今は成疏に從はず。）　○偃（郭注に曰く「偃とは屏厠を謂ふ」と。休息の室及び厠をいふ。）　○因以乘二是非一（成疏に曰く「其の知を飾とするの心に因つて、是非の用に乘ず」と。泰鼎は沈注を引いて曰く「乘は算乘の乘、相乘

言移是。是以生爲本、以知爲師、因以乘是非。果有名實。因以己爲質。使人以爲己節、因以死償節。若然者、以用爲知。以不用爲愚。以徹爲名。以窮爲辱。移是今之人也。是蜩與鷽鳩同於同也。

訓讀 生あるは黬なり。披然たるを移是と曰ふ。嘗に移是を言はんも、言ふ所にあらず。然りと雖も知るべからざる者なり。臘者の膍胲ある、散ずべくして散ずべからざるなり。室を觀るものは、寢廟に周くして、又其の偃に適く。是が爲めに移是を擧ぐ。請ふ嘗みに移是を言はん。是れ生を以て本と爲し、知を以て師と爲し、因りて以て是非に乘ず。果して名實ありとし、因りて己を以て質と爲す。人をして以て己に節を爲さしむれば、因りて死を以て節を償ふ。然るが若きものは、用を以て知と爲し、不用を以て愚と爲し、徹を以て名と爲し、窮を以て辱と爲す。移是は今の人なり。是れ蜩と鷽鳩と、同に同するなり。

大意 是非の分に固執したる移是なるものは、言を左右して論ずべき資格はないが、一歩退いて是非不定の大見識を說述す。

通釋 生なるものは氣の聚合に過ぎない、喩へば釜の底に附着する鍋墨に火が燻生せらるゝが如きものである。是非は無差別のものであるが、強ひて之を分別して、此を是とし、彼を非とするも、元來定分なくして、是非の

無なれども、已に生なるものが出で、又忽焉として死に變ずる者であるといふ。即ち無を以て首となし、生を以て胴となし、死を以て尾となすのである。誰人か有無死生一なるの玄道を知り守る者があらうや、若し知る人あらば、我は此の人を求めて學友たらんと思ふが、斯かる人などは有り得ないと云ふ。以上の三者は其の有無死生に就いての見解は異なるけれども、胸中に差別の念無き點に於いては一つである。恰も宗家を一とする公族の如きものである。楚の公族の中、昭氏景氏の二人は朝に立つて皇室を輔佐する點に於いて秀で、甲氏は封土の大を以て著れてゐるやうなもので、三氏各ゝ異なる所であるが、其の本は即ち一である。

語釋　將以レ生爲レ喪也。以レ死爲レ反也（林希逸曰く「喪は旅寓なり。齊物に曰く、弱喪にして歸ることを知らずと。生を以て喪となすは、即ち形を宇内に寓するの意なり」と。成疏に曰く「喪は失なり。流俗の人は生を以て得と爲し死を以て喪と爲す。今迷情に反らんと欲す。故に生を以て喪となす。其の無なるを以てなり。死を以て反となし、空寂に反る。未だ至妙を盡さずと雖も、猶死生を齊くす」と。）　○是以分已（郭注に曰く「之を均しくせんと欲すと雖も、然れども已に分るゝなり」と。死生を齊しくすと雖も既に死の分を見る者にして、常有の迷ひは無いが、しかし生死の分別を立つるのである。）　○孰知ニ有無死生之一守一者（陸樹芝曰く、「既にして生有り死有り、但自ら有ること無し、而かも生にして死、總て合して一體と爲す、生死の分有りと雖も、而かも之を守ること一の若し。則ち亦至れる者に次ぐ」と。即ち有無生死の一體たるを悟つて、之を守つて生死を以つて得喪と爲さざるを知るを云ふ。）　○昭景也著レ戴也云云（陸樹芝曰く、「戴は職任なり、著戴とは、其の戴する所の官に著る。因りて以て姓と爲す、封は封邑なり。其の封ずる所の地に著る。因つて以て姓と爲す、」と。林西仲曰く「譬へば楚の公族、昭景は戴を以て著れ、甲氏は封を以て著る」と。其の他異說多きも、林西仲の簡にして要を得たるに從ふ。）

有レ生黬也。披然曰ニ移是一。嘗言ニ移是一、非レ所レ言也。雖レ然不レ可レ知者也。臘者之有ニ膍胲一、可レ散而不レ可レ散也。觀レ室者、周ニ於寢廟一、又適ニ其偃一焉。爲レ是擧ニ移是一。請嘗

有、既而有生。生俄而死。以無有爲首、以生爲體、以死爲尻。孰知有無死生之一守者。吾與之爲友。是三者雖異、公族也。昭景也著戴也、甲氏也著封也。非一也。

訓讀　古の人、其の知至る所あり、悪くにか至る。以て未だ始めより物あらずと爲すものあり、至れり盡せり、以て加ふべからず。其の次は、以て物ありと爲す、將に生を以て喪となし、死を以て反ると爲さんとするなり。是を以て分るゝのみ。其の次は曰く、始めは有ること無く、既にして生あり。生俄かにして死す。有ること無きを以て首と爲し、生を以て體と爲し、死を以て尻と爲す。孰か有無死生の一守なるを知るものぞ。吾れ之と友たらんと。是の三つの者は異なりと雖も公族なり。昭景や戴に著れ、甲氏や封に著る。一に非ざるなり。

大意　得道の度に差別あるを説く。

通釋　古の道を得た人は其の知大に至る所があつた。如何なる狀態かと云へば、まづ第一に萬物皆無にして、宇宙の本源は有に非ずと爲す者がある。誠に其の知は無無の玄道を知れる者にして、其の知は實に至れり盡せりであつて、復此の上に加ふべきものはない。第二は物有りと爲す者である。まさに生を以て眞より喪はれたものと爲し、死を以て眞に歸するものとせんとする者である。然しこれは既に生死の分別を立てた者である。第三は太始は

れども處る所なく、長ずることあれども本末終始ない。生ずることあつて而も入る竅なきは即ち充つるのである。充ち實ちてゐて、而も處るべき場所なきもの、是れを宇といふ。即ち上下四方の空間である。長ずることあつて、而も終始なきもの、是れを宙といふ。即ち古往今來を貫く時間である。斯く生死出入あつて而も其の形の見るべきものなきは、悉く是れ自然の道に出づるが爲めである。故に之を天門といふ。天門は無である。而も萬物悉く此の無なる天門より出づ。有は有を以て有なりと爲すことは出來ない。畢竟有は無に出づるものである。然れども其の萬物の母なる無も亦有ることなし。無も亦無なり。是れ道の至妙なる所にして、聖人は常に此の無無の絶對境に隱れてゐるものである。

【語釋】憯（説文に曰く「慘毒なり」と。憯と慘と同じ、傷害の意なり。）○道通二其分一也云々（郭注に曰く「成毀は常分無く、而かも道皆通ず」と。成疏に曰く「夫れ姮物の氣を受くる各々崖限有り、姸醜善惡梟けて毀成を分つ。而かも此れを之れ成と謂ひ、彼れを之れ毀と謂ふ。道以て之を通ず。備足せざるは無し」と。成毀生滅を通じて一なるものを道といふ。）○出而不レ反見二其鬼一云云（林西仲曰く「道既に通じて一たり、故に機に出でゝ生ず。固より鬼に非ず。然れども其の出でゝ一往して反らざるを觀るに、即ち其の必ず死して鬼となるを見る可し。蓋し機に出でれいて歸する所を得。即ち死を得るの謂なり」と。）○出無レ本、入無レ竅（釋文に曰く「出は生なり、入は死なり。本は始まり、竅は孔なり」と。生死は其の本づく所なく。歸する所なき意である。）○本剽（釋文に崔云ふ「剽は末なり」と。本末終始なり。）○宇宙（釋文に「三蒼に云ふ、四方上下を宇と爲す、往古來今を宙と曰ふ」と。）

古之人、其知有レ所レ至矣。惡乎至。有下以爲二未始有一レ物者上。至矣、盡矣。弗レ可二以加一矣。其次以爲レ有レ物矣。將二以レ生爲一レ喪也、以レ死爲レ反也。是以分已。其次曰、始無

ものを以て、形なきものに象つて定まる。出づるや本なく、入るや竅なし。實つること有れども處るなく、長ずること有れども本剽なし。出づる所あつて竅なきものは實つるあり。實つること有つて處なきものは宇なり。長ずること有つて本剽なきものは宙なり。生に有り、死に有り、出づるに有り、入るに有り、入出して其の形を見ること無き、是を天門と謂ふ。天門なるものは有ること無きなり、萬物有ること無きに出づ。有るは有を以て有となすこと能はず、必ず有ること無きに出づ。而して一有ること無きも有ること無し。聖人是に藏る。

大意　成毀生滅は道の顯現にして元來これ一、而も此の道なるものは無益の絶對境なることを論ず。

通釋　兵器は能く人を害すれども一念不愼の志の慘害に過ぎるものでなく、鏌鎁の利劍も遙かに及ぶものでない。又我が身の賊は陰陽より大なるはなく、天地何處に行くと雖も逃るゝ所がない。しかし元來は陰陽が我が身に寇するのではなく、實は吾人の心の然らしむる所である。道なるものは成毀善惡の分を通じて一となすものである。一方に成れば一方に毀れ、一方に備はれば一方に備はらざること、是れ道の當體なるに、而も其の成毀生滅の理を知らない。故に分を惡むのは、分れたが故に備へんことを求むるがためであり、備を惡むのは、其の備を備として不備に對照するからである。更に生死の大道に就いて曰はんに、造化の大海より出でゝ而も反らざれば何時か其の身は滅するに至る。これを鬼といふ。人生れて鬼となる。即ち毀を得るを死といふ。身は滅しても其の生時の業力は天地に實ちてゐるものである。即ちこれ鬼と一である。斯く有形の者の理を以て無形に類推すれば、こゝに成毀生滅の理は確乎と定まつて來る。其の生ずるや本づく所なく、其の死するや入るべき竅もない。充實する所あ

心則使之也。道通其分也。其成也、毀也、所惡乎分者、其分也以備。所以惡乎備者、其有以備。故出而不反、見其鬼。出而得、是謂得死。滅而有實、鬼之一也。以有形者象無形者而定矣。出無本、入無竅。有實而無乎處、有長而無本剽。有所出而無竅者有實。有實而無乎處者宇也。有長而無本剽者、宙也。有乎生、有乎死、有乎出、有乎入、入出而無見其形、是謂天門。天門者無有也。萬物出乎無有。有不能以有爲有、必出乎無有。而無有一無有。聖人藏乎是。

訓讀　兵は志より憯なるは莫く、鏌鋣を下と爲す。寇は陰陽より大なるは莫く、天地の閒に逃るゝ所なし。陰陽之を賊ふに非ず、心則ち之をせしむるなり。道は其の分を通ずるなり。其の成るや毀るゝや、分に惡む所のものは、其の分るゝや以て備へんとすればなり。備はるに惡む所以のものは、其の以て備はることあればなり。故に出でゝ反らざれば、其の鬼を見る。出でゝ是を得るを、死を得と謂ふ。滅して實つるあるは、鬼と一なり。形ある

名迹なく、己が心を外に向つて明ならんとする者は、其の心遂に外物を廣く求取せんとするに至る。心を無名の道に遊ばしめる者は、常に心に天光を發す。心をして心外の名利に馳せしめる者は、一個の商人に過ぎない。他より之を見れば宛も跂つてゐる如く危險極まるけれども、當人は泰然として愧づる色もない。之に反して物に應じて其の究極の理を得る者は、衆人之に歸入して自他一となることが出來る。かの物と共に苟且し、外物に逐はれて營々するものは、己れ自らも容れることは出來ない。況して他を包容することなどは思ひもよらない。人を容るゝことの出來ない者には人の親しみ近づくものはない。人の親しみなつく者無くば、天下到る所眞に孤獨である。

語釋　不レ見二其誠一己而發（釋文に曰く「自ら其の内を照らさずして外馳するを謂ふ。」郭注には「此れ妄りに發作するなり」といふ。）○業入而不レ舍（業は既なり。林西仲曰く「既に不誠の中に入れば、又其の故轍を舍つること能はず、屢々變更して以て自ら掩飾す。惟其の失を成すのみ」と。）○券レ内者行二乎無名一（郭注に曰く「券は分なり」と。林希逸曰く「求むる所我が分内に在り。即ち孟子が所謂、求むれば則ち之を得、求め内に在るものなり」と。釋文に崔云ふ「券は分明なり」と。異說區々たれども、今は釋文の說に從ふ。）○志二乎期費一（釋文に「廣雅云ふ、期は卒なり、費は耗なり」と。林西仲曰く「期費とは博取廣求の意」と。兪樾は期は綦に通ずとなし「キハム」と讀み、財用を窮極する義となす。蓋し外物を廣く追求して心を消耗さす意であらう。）○唯庸有レ光（林希逸曰く「庸は常なり、光常に在るなり」と。庸は即ち平常の意。）○人見二其跂一、猶之魁然（釋文に曰く「魁とは安なり」と。林西仲曰く「人已に其の跂立安からざるを見るも、乃ち彼猶魁然として自ら大とするなり」と。人之を危ぶむも自ら安んじて羞愧すべき所なきを云ふ。）○與レ物窮者物入焉（成疏に曰く「理を窮め性を盡す者は、外物の之に歸依する所と爲るなり」と。郭注に曰く「窮は終始を謂ふ」と。又此を逐ひて窮めんとすれば物已に其の中に入つて、虛靈の府を攪亂するものと解する說あれど、今は前者に從ふ。）○與レ物且者（釋文に曰く「且は始なり」と。兪樾曰く、「且は即ち苟且の且」と。後說に從ふ。）○無レ親者盡レ人（成疏に曰く「褊狹容れざれば則ち親愛無し、既に親愛無ければ則ち盡く是れ他人なり」と。林希逸曰く「人にして親無きときは人道絕つ」と。蓋し親愛の情なくして、天下悉く他人、孤獨身となるの義であらう。）

兵莫レ憯二於志一、鏌鋣爲レ下。寇莫レ大二於陰陽一、無レ所レ逃二於天地之閒一。非二陰陽賊一レ之、

志乎期費者、唯賈人也。人見其跂、猶之魁然。與物窮者物入焉。與物且者、其身之不能容。焉能容人。不能容人者無親。無親者盡人。

訓讀 其の己に誠なるを見ずして發すれば、發する每に當らず。業に入つて舍てざれば、更はる每に失を爲す、不善を顯明の中に爲すものは、人得て之を誅す。不善を幽閒の中に爲すものは、鬼得て之を誅す。人に明に、鬼に明なるものにして、然る後能く獨行す。內に券するものは無名に行ひ、外に券するものは期費に志す。無名に行ふものは、唯庸として光あり。期費に志すものは唯賈人なり。人其の跂つを見れども、猶は之を魁然たりとす。物と窮まるものは物入る。物と且するものは、其の身だも容るゝこと能はず。焉んぞ能く人を容れん。人を容るゝこと能はざるものは親なし。親なきものは人を盡くす。

大意 心に誠を得た人と得ざる人との差を說く。

通釋 自己を至誠の域に迄達せずして事に發すれば、事々に理に當ることが出來ない。既に己を誠にすることなくして事を發するの妄見に陷つて改め捨てたかつたら、知慮によつて屢々變更するも、其の度每に失敗を招くのである。凡そ顯明の中に於いて不善を爲す者は、人が之を誅し、又幽闇の裡に於いて不善を爲す者は、鬼神之を罰することが出來て、幽明共に決して逃れ得るものでない。此の人の誅罰と鬼神の懲戒とを明知して、幽明とも共に心に愧づる所無き者にして、始めて能く獨行して懼れなきものである。己が心を明らかにして自適する者は獨行して

て、物に應じ時に從つて心を生じ、又常に中心恭敬の念を存して、それを人に推し及ぼすやうにする。是くの如くして而も萬惡の振りかゝつて來るのは、そは必然の天命であつて人力の爲す所でない。しかし斯く時に從ひ命に安んずれば、たとひ萬惡至るも己が渾然大成の德を亂すことは出來ない。又すべての外物事象も己が心靈を使すことは出來ない。而して吾人の心、即ち靈府は常に主持する所のあるものである。而も其の主持する所以の道を知らなかつたならば、心に持する所有る即ち確乎たる心にはなれないものである。

語釋 備レ物以將レ形（釋文に曰く「將は順なり」と。事物を具へて成形の自然に順ふのである。將を「養なり」と解する說あるも今は從はず。）○藏二不虞一以生レ心（林希逸曰く「不虞とは計度せざるなり。思慮せざるなり。退いて不思慮の地に藏して、其の心物に應ずるなり、時に隨つて生ず」と。即ち禪宗の不思量底に於いて思量するの當體ではなからうか。）○不レ足二以滑一レ成（成疏に曰く「滑は亂なり、道を體し眞を會し、時に安んじ命に達す。縱へ萬惡に遭ふも、以て大成の心を亂すに足らず」と。）○不レ可レ內二於靈臺一（郭注に曰く「靈臺とは心なり」。成疏に曰く「心に靈知あれば能く住持する所あつて迷妄入ること能はず。」）○靈臺者有レ持云云（異說區々として取捨に苦しむ所の一節である。泰鼎は沈注の、曹洞禪の五祖下に於ける神秀と慧能の悟道の喝を引いて曰く「身は是れ菩提樹、明鏡臺の如しとは、靈臺なり。時時勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむること莫れとは、之を持する所以なり。菩提本樹に非ず、明鏡亦臺に非ずとは、持する所以を知らざるなり。本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かんとは、持すべからざるなり」と。解し得て妙なりと雖ども、稍過ぎたるの感がする。今は試みに本文に從つて直解して通釋することにした。）

不レ見二其誠己一而發、每レ發而不レ當。業入而不レ舍、每レ更爲レ失。爲二不善乎顯明之中一者、人得而誅レ之。爲二不善乎幽閒之中一者、鬼得而誅レ之。明二乎人一、明二乎鬼一者、然後能獨行。券二內一者、行二乎無名一。券二外一者、志二乎期費一。行二乎無名一者、唯庸有レ光。

なく、強ひて何事でも推し行はんとすれば、造化の力、自然の威力は其の人を亡すに至る。

語釋 宇泰定（釋文に「王云ふ、宇とは器宇なり、器宇の開泰なれば則ち靜定なるを謂ふ」と。即ち心胸の泰然として定まれるをいふ。）　○發二乎天光一（陸樹芝曰く「天光とは天物の光なり」と。成疏に曰く「德宇安泰にして靜定なる者は、其の心を發し物を照す。自然の智光に由るなり」と。）　○人見二其人一（郭注に曰く「天光自ら發すれば人は則ち其の人を見らはし、物は其の物を見らはす。物各々自ら見はれて彼の泰然として定まる所以を見はさざるなり」と。此の一句は異說甚だ多きも、郭注の見の字を「アラハス」と讀んで、天光を發すれば、萬物皆其の眞性を具顯するの意と解し度い。斯く讀んで始めて下の天民天子が生きて來ると思ふ。）　○人舍レ之（林希逸曰く「舍は止なり、歸なり」と。林西仲曰く「人舍を解して人歸に作り、天子を解して、出でゝ世を御すに作る。便ち庚桑子の釋然たらずの意と自ら相矛盾す」と。今はしばらく林希逸の說に從ふ。）　○天鈞（齊物論篇に見ゆ。造化の謂なり。）

備レ物以將レ形、藏二不虞一以生レ心、敬レ中以達レ彼。若レ是而萬惡至者、皆天也、而非レ人也。不レ足二以滑一レ成、不レ可レ內二於靈臺一。靈臺者有レ持。而不レ知二其所一レ持、而不レ可レ持者也。

訓讀 物を備へて以て形を將ひ、不虞を藏して以て心を生じ、中に敬して以て彼に達す。是くの若くにして萬惡至るものは、皆天にして、人にあらざるなり。以て成を滑すに足らず、靈臺に內るべからず。靈臺なるものは持することあり。而も其の持する所を知らざれば、持すべからざるものなり。

大意 心宇泰定の後をうけて吾人の心靈の妙諦を說く。

通釋 萬物を備へ設けて其の形成のまゝに順ひ、知を藏して、事物に接せざる前に豫め計度することなくし

能學也、行者行其所不能行也、辯者辯其所不能辯也。知止其所不能知、至矣。若有不即是者、天鈞敗之。

訓讀 宇の泰定なるものは、天光を發す。天光を發するものは、人其の人を見す。人修むることあるもの、乃ち今にして恆あり。恆あるものは人之に舍り、天之を助く。人の舍る所は之を天民と謂ひ、天の助くる所は之を天子と謂ふ。學者は其の學ぶこと能はざる所を學ばんとし、行者は其の行ふこと能はざる所を行はんとし、辯者は其の辯ずること能はざる所を辯ぜんとするなり。知は其の知ること能はざる所に止まるは、至れり。若し是に即かざるものあれば、天鈞之を敗る。

大意 人は須らく自然の常德を體得すべきを說く。

通釋 心宇の泰然として靜定せる者は、天然の光輝を發するものである。天光を發する者にして始めて人は眞我を顯現するものである。人にして修養怠らない者は、遂に此の境地に至つて悠久にして不變なる德を具へるものである。自然からの常德を體得した者は人の歸向する所となり、天の助ける所となる者である。斯く天民の倶に贊仰する所、之を天民と謂ひ、又天子と謂ふ。今の一般社會の狀態を見るに、學者は學ぶこと能はざるものを學ばんとし、行ふ者は行ふこと能はざる所を强ひて行はんとし、辯ずる者は辯じ得ざる所をも辯ぜんとして自然を破壞してゐる。知といふものは、其の知る能はざる所に至つて止まることを以つて知の至上とする。若し一人之に從ふこと

曰く「いや違ふ。衞生の經に依つて迷盲を晴らすことは、これ學んで悟るもので、譬へば春光和順に依つてあの氷が解け、凍えをゆるめる樣なものである。かの大道に悟入したものは、衆人と交つて此の社會に生活し、相共に天惠を享樂し、日々人物利害の中に在つて而かも心を攖すことなく、又人と共に怪異な事を爲さず、謀議をめぐらさず、別に何か事を起すといふやうな事もせず、無爲にして累らひを離れ、無知にして自然の中に去來するのである。是れが即ち至人の生を衞る常道と謂ふものだ。」南榮趎は更に「然らばこれが則ち至人の德の究極でありますか」と尋ねた。老子の曰ふのには「いやまだ／＼だ。俺は已に汝に告げて赤子になりきれと曰つたが、あの赤子は動けども爲す所を知らず、行けども往く所を認識しない。身は枯木の枝の如く、心は死灰の如く、心身共に外物のために動くことがない。是の如くなつて始めて禍福の外に超然たることが出來る。斯くなればどうして世人の受けるやうな災患などあらうや決してない。

語釋　至人之德（至人は前に解釋してゐる。德とは純全の本體そのものにして、衞生は病を去る所以の法であるから自ら相異なるものである。）　○交食乎地（兪樾は交は邀なりと解し、「モトム」の意に解するが、今は釋文の「崔云ふ、交は倶なり、李云ふ、共なり」一に從つて、こもごも一緒になつての意とす。）　○攖（釋文に「廣雅に云ふ亂なり」と。成疏には擾亂と解す。「みだす」意である。）　○能兒子乎（郭注に曰く「此の言を以て至らずと爲すに非らず。但能く聞いて學ぶ者は自ら至るに非らざるのみ。苟も自ら至らざれば、則ち至言を聞くと雖も、適に以て經と爲すべし。何ぞ至るを得べけんや。故に學者は至らず、至る者は學ばざるなり」と。成疏に曰く「能くとは獎勵の辭なり」と。蓋し爲學を離れて嬰兒に復歸するの意である。）

宇泰定者、發乎天光。發乎天光者、人見其人。人有修者、乃今有恆。有恆者、人舍之、天助之。人之所舍、謂之天民。天之所助、謂之天子。學者學其所不

者。相與交食乎地、而交樂乎天。不以人物利害相攖、不相與爲怪、不相與爲謀、不相與爲事。翛然而往、侗然而來。是謂衞生之經已。曰、然則是至乎。曰、未也。吾固告汝曰、能兒子乎。兒子動不知所爲、行不知所之、身若槁木之枝、而心若死灰。若是者禍亦不至、福亦不來。禍福無有。惡有人災也。

訓讀 南榮趎曰く、然らば則ち是れ至人の德のみかと。曰く非なり。是れ乃ち所謂氷解凍釋なるものなり。夫れ至人なるものは、相與に交〻地に食ひ、而して交〻天を樂しむ。人物利害を以て相攖らず、相與に怪を爲さず、相與に謀を爲さず、相與に事を爲さず。翛然として往き、侗然として來る。是を衞生の經と謂ふのみと。曰く、然らば則ち是れ至れるかと。曰く未だしなり。吾れ固より汝に告げて曰く、能く兒子たらんかと。兒子は動けども爲す所を知らず、行けども之く所を知らず、身槁木の枝の若くにして、心死灰の若し。是の若きものは禍も亦至らず。福も亦來らず。禍福あること無し。惡んぞ人災あらんや。

大意 衞生の經と至人の德との微妙なる差異を說く。

通釋 南榮趎問うて曰く「然らばあの大道を悟つた至人の德も畢竟衞生の經に止まるもので御座いますか」。老子

分際を知り、能く知足の道を解し、能く人に倣ふことを已めて自己に求め、能く物に累はさるゝことなく、無知無心となり、以て赤子の如く心身の勞作を捨てゝ、無爲に自適することである。かの赤子が、一日泣き續けても聲の嗄れないのは、聲の自然にまかせるためで、所謂淳和の至りだからである。終日手を握り締めてゐても硬くかゞまらないのは、其の德自然に合するがためである。終日物を視つめて而かも瞬せないのは、目の自然にまかせて心が外物に移り動かないがためである。斯樣に全く無心の狀になり切つて、往けども其の行く所を知らず、居れども其の爲す所を知らず、一切の念慮を抛擲して、萬事に隨應して流のまゝに推し移つてゆくことが即ち是れ衞生の常道である。」

語釋　衞生(釋文に「李云ふ、其の生を防衞して道に合せしむるなり」と。即ち前に述べた全形抱生の要道である。)　○能抱レ一乎云云(焦竑曰く「能抱一能勿失は即ち道德經の所謂營魄を載せ一を抱いて、能く離るゝ勿き」なり。無卜筮而知吉凶は即ち「戸を出でずして天下を知り、牖を窺はずして天を見る」なり。能止とは即ち「止まるを知る」なり。能已は即ち「足るを知る」なり。舍諸人而求諸己は即ち「自ら知る者は明、自ら勝つ者は強き」なり。翛然とは即ち「汎として其れ左右すべき」なり。侗然とは即ち「渾として其れ濁るが若き」なり。兒子とは即ち「氣を專らにし柔を致して能く嬰兒なるなり」と。蓋し焦竑は此の一節の出所を老子道德經に求めてゐる。是とすべきである。)　○翛然(郭注に曰く「停迹無きなり」と。林西仲曰く「累はさるゝ所無きなり」と。今は林氏の說に從ふ。)　○侗然(成疏に曰く「物に順つて心無きなり」と。林西仲は「一知る所無きなり」と曰ふ。無智の意である。)　○終日嗥而嗌不レ嗄(釋文に曰く「嗥は又本號に作る。嗌は崔云ふ。喉なり。嗄は又本嗄に作る」と。林西仲曰く「長哭を嗥と曰ひ、聲の啞するを嗄と曰ふ」と。終日泣き叫んで聲の出なくなる意である。)　○終日握而手不レ掜(釋文に曰く「掜は廣雅に云ふ捉なり」と。兪樾は說文に掜の字なし、鯢の字の手を以て言ふに從つて魚を變じて掜と爲す。拳曲せざるなりと曰つてゐる。)　○不レ瞚(釋文に曰く「瞚は又瞬に作る。舜動なり。本或は瞚に作る」と。またゝきせないことである。)　○委蛇(郭注に曰く「斯に之に順ふなり」と。物に接して無心にして委曲隨順する意である。)

南榮趎曰、然則是至人之德已乎。曰、非也。是乃所レ謂冰解凍釋者。夫至人

レ知レ所レ之、居不レ知レ所レ爲、與レ物委蛇而同二其波一。是衞生之經已。

訓讀 南榮趎曰く、里人病あり、里人之を問ふに、病者能く其の病を言ふ。然らば其の病を病めるもの猶ほ未だ病まざるなり。趎が大道を聞くが若きは、譬へば猶ほ藥を飲んで以て病を加ふるがごときなり。趎願はくは衞生の經を聞かんのみと。老子曰く、衞生の經、能く一を抱かんか。能く失ふこと勿らんか。能く卜筮すること無くして吉凶を知らんか。能く止まらんか。能く已まんか。能く諸を人に舍てゝ、諸を己に求めんか。能く翛然たらんか。能く侗然たらんか。能く兒子たらんか。兒子は終日嘷びても嗌嗄れず、和の至りなり。終日握りても手掜せざるは、其の德を共にすればなり。終日視れども目瞚かざるは、偏へに外にあらざればなり。行けども之く所を知らず、居れども爲す所を知らず、物と委蛇して、其の波を同じくす。是れ衞生の經のみと。

大意 老子南榮趎の請に應じて衞生の經を說く。

通釋 南榮趎曰く「今村に病人があつて村の人が之を見舞ふに、其の病人は能く自ら其の容態を述べ得る程ならば、其の病の病たるを知る者であつて、十分治す見込みがあります。しかし私の如きは、先生から大道を承はれば益々惑ひ苦しんで、却つて藥を飲んで一層病の重きを加ふるやうなものであります。何卒私のために、心性の上に於ける衞生の常法をお說き下さいませ。」依つて老子答へて曰く「即ち衞生の常道とは、能く純一の氣を守り、天稟の性德を失ふことなく、卜筮することなくして道を履めば吉、物に徇へば凶なるの理を知り、能く己の止るべき

其の働きを止めるより外にない。若し內外に束縛せられゝば、耳目は聲色に眩惑せられ、心は內に惑亂して、たとへ道德を持する者でも長く堪えることは出來ない。況して道に依倣して行はんとするやうな未だ純熟の地位に至らぬものでは尚更ではないか」。

語釋 請入就レ舍云々（成疏に云ふ「既に問ふ所を失ひ、情識芒然たり。是に於て退きて家中に就き思惟すること旬日、好む所の道德を徵求し、惡む所の仁義を遣徐し、未だ道に契する能はず。是を以て悲愁して、其の益を請ふことを庶ひ、仍りて老子を見る」と。）○津津乎猶有レ惡也（釋文に曰く「津津崖本に律律に作りて云ふ、惡の貌と。有惡也は李云ふ惡計未だ盡きざるなりと。津々とは佳味に遇つて口中に唾液の出づる樣だから、心中にまだ〱萬事を好惡せんとする惡弊を存じてゐるの意であらう。）○外韄（釋文に「李云ふ、韄は縛なりと。三倉に云ふ、佩刀の靶革なり」と。卽ち繫縛の義である。）○內揵外韄（釋文に「向云ふ、揵は閉なり」と。陸樹芝曰く「開閉の意也」と。郭注に曰く「耳目は外なり、心術は內なり。夫れ形を全くし生を抱くは、其の心術を忘れ、其の耳目を遣るゝに若くはなし。若し乃ち聲色外に韄すれば、則ち心術を內に塞ぎ、欲惡內に韄すれば、則ち耳目を外に喪ふ。必ず得る無く失ふ無くして、而る後逝ずと爲すなり」と。）

南榮趎曰、里人有レ病。里人問レ之、病者能言二其病一。然其病レ病者猶未レ病也。若三趎之聞二大道一、譬猶二飮レ藥以加一レ病也。趎願聞二衞生之經一而已矣。老子曰、衞生之經、能抱レ一乎。能勿レ失乎。能無二卜筮一而知二吉凶一乎。能止乎。能已乎。能舍二諸人一而求二諸己一乎。能翛然乎。能侗然乎。能兒子乎。兒子終日嘷而嗌不レ嗄、和之至也。終日握而手不レ掜、共二其德一也。終日視而目不レ瞚、偏不レ在レ外也。行不

內捷。內韄者、不レ可ニ繆而捉一。將外繆。外內韄者、道德不レ能レ持。而況放レ道而行者乎。

【訓讀】南榮趎、請ひ入つて舍に就く。其の好む所を召き、其の惡む所を去らんとして、十日自ら愁ふ。復老子に見ゆ。老子曰く、汝自ら灑濯すること孰せりや、鬱鬱乎たり。然り而して其の中、津津乎として猶ほ惡あるなり。夫れ外韄せらるゝものは、繁くして捉るべからず。將た內捷せんのみ。內韄せらるゝものは繆うて捉るべからず。將た外繆せんのみ。外內韄せらるゝものは、道德だも持する能はず、而るを況んや道に放つて行ふ者をやと。

【大意】南榮趎の自修の有樣を見て、老子は更に道に入るの困難なるを說く。

【通釋】南榮趎は老子に請うて學舍に入り、老子の敎ふる所を本として、其の是とする所の道を求め、其の非とするところの仁義の念を去らんとして、苦しみ惱むこと十日に及んで、又老子にお目にかゝつた。老子は南榮趎の求道の行にやつれた顏を見て曰ふには「汝は自ら是とする所を求め、非とする所を去つて、舊汚を洗ひ心身を潔めんと修行をしたやうだが、果して其の功を成し得たか。今汝の容子を見ると、鬱々として未だ寧一ならざる所があるやうだ。そして猶心中に小節を脫し切れない惡弊を藏してゐるやうに見える。それ耳目を外に馳せて聲色を逐ふ者は、事物が繁多だから、その耳目を捕へて奔馳することを防がんとしても出來ない。將に心を閉ぢて去來する萬物から遠ざかれ。心を以て是非を判じ循はんとすれば、心は結ぼれて其の本體を捉へることは出來ない。將に耳目を閉ぢて

緣でお教へを頂き度いもので御座います」。老子は教へて曰ふには「俺は先刻汝の眉睫の閒を見て、汝は幾多の疑問を抱いてゐて、まだ／＼道を體得してゐないと知つたが、今汝の言葉を聞いて益〻確實となつた。今の汝の區々として精神を勞し、道を得んとあせつてゐる有樣は、宛も失神の狀態になつて父母を喪へる者が、竿を揭げてそれを目標として、茫々たる大海に父母を尋ね求めんとするやうだ。汝は誠に其の本心を失つて歸る所を知らない者だ。悶々として常に憂へて往く所を知らない。此の如く汝は汝の本然の性情に立ち歸らんとしても、仁義知などに迷はされて眞の道に入るの由のない者だ、全く氣の毒な憐れなことだ。

語釋　贏糧（贏は釋文に方言を引いて曰く「贏は擔なり」支那の旅をする者は、今でも都會を一歩離れて田舍に入ると、食糧や夜具を持つ行かなくてはならぬ。旅屋といつても部屋を貸せるのみだ。糧を擔つてゆくことに今も昔も變りはない。）　○唯（成疏に云ふ「唯は直ちに敬し應ずるの聲なり」と。素直に「ハイ」と返事する意である。）　○矍然（驚きの貌である。慶藩の說に依れば、瞿然と同じで其の正字は䀠に作る。目を擧げて驚く意味で、瞿も懼も皆借字であると曰つてゐる。）　○朱愚（林希逸は「朱は專なり、朱愚は顓蒙の如し」といふ。成疏に云ふ「朱愚は猶專愚の如し。無知の貌なり」と。大馬鹿といふ意であらう。）　○不知乎云云（林希逸曰く「若し智を用ふるに心あれば、則ち反つて我が身の累をなす。此の意は蓋し謂らく、無心も既に不可なり。有心も亦不可なり。卽ち釋氏の所謂、恁麼もまた得ず、不恁麼もまた得ずの如し。其の仁義を言ふ處も亦同じ」と。）　○眉睫之閒（釋文に釋名を引いて曰く「睫は目毛なり」と。今の眉宇の間の意であらう。）　○規規然（釋文に「李云ふ、失神の貌」と。又一に云ふ、細小の貌」と。こゝでは前者に解した方が穩當である。）　○惘惘乎（林希逸曰く「憂愁して自得せざるなり」と。惘とは失意の意味で、ボヤツトして心中に得る所のない意味である。）

南榮趎請入就舍。召其所好、去其所惡、十日自愁。復見老子。老子曰、汝自灑濯、孰哉。鬱鬱乎。然而其中津津乎猶有惡也。夫外韄者、不可繁而捉。將

して父母を喪ひて、竿を掲げて諸を海に求むるが若きなり。汝は亡人なる哉、惘惘乎たり。汝は汝の情性に反らんと欲すれども、入るに由なし、憐むべき哉と。

大意 南榮趎と老子との問答、老子は南榮趎の智仁義に拘束せられてゐるのを巧みに道破してゐる。

通釋 南榮趎は糧食を負ひ、七日七夜を費して老子の許に行つて教を乞うた。老子は問うた。「汝は庚桑楚の所から來たのか。」南榮趎は「はい左樣で御座います」と答へた。老子は「汝はどうしてそんなに澤山の人と一緒に來たのか」と問うた。南榮趎は老子の意中が分らないから、驚いて異やしみ乍ら後を振返つて見た。其の有樣を見て老子は「汝は予の言ふことが解らないらしいな」と曰つた。斯く云はれても南榮趎は倘其の意を理解するに苦しんで、首を低れて大に愧ぢ入つたが、やがて老子を仰ぎ見て歎息して申すには「私は今先生の御詞を承つて、茫然として答ふる所を忘れてしまひ、又つひお尋ねし度いと思つてゐた事も失念して仕舞ひました」。そこで老子は又「汝の曰つてゐることはどう云ふ意味なのか」と尋ねた。南榮趎はやつと答へて曰ふやう「若し私が不知であつたら人々は私を馬鹿と申します。それかといつて知を働かして世に立てば反つて我が軀を愁へしめるやうになります。仁を去つて不仁になれば人を害し、反對に仁の行をすれば又果らはしい事が起つて私は苦しみ愁へることになります。同樣に不義をすれば自分は良くても他人を傷つけることになり、義をなせば心は常に驅使せられて自己を惱ますものとなります。斯くの如くどちらを行つても悉く苦の種ですが、一體どうすれば之を切り拔けてうまく行くことが出來ませうか。此の三者は私の常に患へ惱んでゐる所であります。どうぞ私が庚桑楚の弟子であるといふ御

也。南榮趎曰、不知乎、人謂我朱愚。知乎、反愁我軀。不仁則害人、仁則反愁我身。不義則傷彼、義則反愁我已。我安逃此而可。此三言者。趎之所患也。願因楚而問之。老子曰、向吾見若眉睫之閒、吾因以得汝矣。今汝又言而信之。若規規然若喪父母、揭竿而求諸海也。汝亡人哉。惘惘乎。汝欲反汝情性、而無由入。可憐哉。

訓讀 南榮趎糧を贏ひ、七日七夜、老子の所に至る。老子曰く、子は楚の所より來れるかと。南榮趎曰く、唯と。老子曰く、子何ぞ人と與に偕に來るの衆きやと。南榮趎、懼然として其の後を顧みる。老子曰く、子は吾が謂ふ所を知らざるかと。南榮趎俯して慙ぢ、仰いで歎じて曰く、今は吾れ吾が答を忘る。因つて吾が問を失へりと。老子曰く、何の謂ぞやと。南榮趎曰く、不知ならんか、人我を朱愚と謂ふ。知ならんか、反つて我が軀を愁へしむ。不仁なれば則ち人を害し、仁なれば則ち反つて我が身を愁へしむ。不義なれば則ち彼を傷り、義なれば則ち反つて我を愁へしむのみ。我れ安んぞ此を逃れて可ならん。此の三言は趎の患ふる所なり。願はくは楚に因つて之を問はんと。老子曰く、向に吾れ若が眉睫の閒を見て吾れ因つて以て汝を得たり。今汝又言つて之を信にす。若は規規然と

語に斯う言つてゐる。かの小蜂は豆に居る青蟲を化育することは出來ない。又體の小さい越の鷄は鵠卵を孵化することが出來ないけれど、體の大きい魯の鷄は勿論これが出來る。越鷄と魯鷄と共に鷄であるから、卵を孵化することの出來る性能に異なる所はないが、斯くの如く能と不能とあるは、固より其の才に大小があるからである。今俺の才は小にして、汝を教化するに足らぬ者である。汝はこれから南方に行つて老子の許に參つて教を受けたが宜しからう。」

語釋　南榮趎（趎は釋文に音疇「チユウ」又は「シユ」に作つてゐる。南榮は姓趎は名、庚桑楚の弟子である。釋文によると趎は漢書古今人表には疇、儔、又壽に作つてゐる。又淮南子には幬に作ると云つてゐる。）○䠞然（驚起の貌である。）○抱ニ汝生一（兪樾曰く「釋名に、抱は保なり、相親保するなり。是れ抱と保と義通ず。抱汝生とは即ち保汝生なり」と。陸樹之曰く「抱生とは神を疲せざるなり」と。即ち精神を疲勞せしめず、生命の保全を計ることである。）○形之與レ形亦辟矣（辟は釋文に「開なり」と。林希逸曰く、「我が形と人の形と亦皆開明して蔽ふ所なし」と。形から見れば耳目心皆閉づる所なく人と異なることがないとの意である。）○物或間レ之邪（物とは物欲である。物欲のために隔て蔽はれてゐるのであらうかの意。）○奔蜂不レ能レ化ニ藿蠋一（奔蜂は土蜂である。藿蠋は豆中の大きな青蟲である。奔蜂は細腰にして能く桑虫を化して已の子となすも、藿蠋を化することは出來ない。）○越鷄[illegible]鷄（釋文に「司馬云ふ、越鷄は小鷄なり、魯鷄は大鷄なり、今の蜀鷄なりと」。一說には越鷄は荊鷄なりともいふ。）○其德非レ不レ同也（成疏に曰く「夫れ鷄に五德有り。頭に冠を戴くは禮なり。足に距有るは義なり。食を得て相呼ぶは仁なり。時を知るは智なり。敵を見て能く距ぐは勇なり」と。即ち鷄の持つ性能には變りのないことをいふ。）

南榮趎贏レ糧、七日七夜、至ニ老子之所一。老子曰、子自ニ楚之所一來乎。南榮趎曰、唯。老子曰、子何與レ人偕來之衆也。南榮趎懼然顧ニ其後一。老子曰、子不レ知ニ吾所レ謂乎。南榮趎俯而慙、仰而歎曰、今者吾忘ニ吾答一、因失ニ吾問一。老子曰、何謂

く奔蜂は藿蠋を化する能はず。越鷄は鵠卵を伏すること能はざれど、魯鷄は固より能くす。鷄と鷄と、其の德同じからざるにあらざるなり。能と不能とあるものは、其の才固より巨小あればなり。今、吾れ才小なり。以て子を化するに足らず、子胡ぞ南のかた老子に見えざると。

大意 南榮趎の質問に對して庚桑楚が全生保身の道を說く。

通釋 弟子の一人南榮趎は驚いて感激の面持ちで坐を正しうして問うた。「私の如きは已に老境に入つてしまつた者ですが、どんな風にして學業を受けたなら、先生の申さるゝやうな身を深渺の境に逍遙さすといふ御言葉を實現することが出來ませうか。」庚桑楚答へて曰く「汝の形骸を全くして身體を安全に保ち、汝の生命を損ふことなく精神を安らかに持つて、つまらぬことに思慮をくよ〳〵と勞するな。斯くすること三年に及んだなら、きつと俺の言葉通りになれる。」南榮趎更に曰く、「目そのものゝ形は各人異なる所はないが、盲者は自然と見ることが出來ない。耳の形そのものは異ならないが、聾者は自ら聞くことが出來ない。心そのものは各人異ならないのに、狂者は自ら事理を會得することが出來ない。そうして私は今私の目耳心凡て閉づる所なく闢いてをりますのに、猶物欲のために隔てられてゐる爲か、道を求めて未だ體得することが出來ません。今先生は私に向つて汝の身體生命を安全に保持し、其の思慮をあくせくと疲勞せしむるなと仰せられましたし、又私も勉めて其の意を悟つて道を得んとしてゐますが、徒らに先生の聲が耳に達するのみで、十分會得出來ないのはどうしたもので御座いませう。」そこで庚桑子は更に敎へて言つた「俺の汝に告ぐる辭はもう盡きた。此の上言ふ可きこともないが、更に一言附け加ふれば、古

也。而聾者不能自聞。心之與形、吾不知其異也。而狂者不能自得。形之與形亦辟矣。而物或間之邪、欲相求、而不能相得。今謂趎曰、全汝形、抱汝生、勿使汝思慮營營。趎勉聞道達耳矣。庚桑子曰、辭盡矣。曰、奔蜂不能化藿蠋、越鷄不能伏鵠卵、魯鷄固能矣。鷄之與鷄、其德非不同也。有能與不能者、其才固有巨小也。今吾才小。不足以化子。子胡不南見老子。

訓讀 南榮趎、蹴然として坐を正して曰く、趎の年の若きは已に長ぜり、將に惡にか業を託して以て此の言に及ばんやと。庚桑子曰く、汝の形を全うし、汝の生を抱き、汝の思慮をして營營たらしむることなかれ。此の若きこと三年ならば、則ち以て此の言に及ぶべきなりと。南榮趎曰く、目と形と、吾れ其の異なるを知らざるなり。而して盲者自ら見ること能はず。耳と形と、吾れ其の異なるを知らざるなり。而して聾者は自ら聞くこと能はず。心と形と、吾れ其の異なるを知らざるなり。而して狂者は自ら得ること能はず。形と形と、亦辟きたり。而して物或は之を閒つるか、相求めんと欲すれども相得ること能はず。今、趎に謂つて曰く、汝の形を全うし、汝の生を抱き、汝の思慮をして營營たらしむることなかれと。趎は勉めて道を聞いて耳に達せんと。庚桑子曰く、辭盡くせり。曰

して父を殺し、臣にして遂に君を弑するに至り、又白晝に盜をなし、日中に垣を破り忍ぶ込むの甚しきに至るものである。俺は今汝等に大亂の源を聞かせよう。卽ち禍亂の本はあの堯舜の間に生ずるもので、其の末弊は千世の後に遺るものである。そして千歲の後には其の弊は益々甚だしく、必ず人と人と相食むやうになるであらう。」

語釋　尋常之溝（釋文に曰く「八尺を尋と曰ひ、尋に倍するを常と曰ふ。尋常の溝は則ち周禮の洫澮の廣深なり。洫は廣深八尺。澮は廣さ二尋、深さ二仭なり」と。卽ち田畝の間に在る小溝をいふ。）　○鯢鰌爲二之制一（鯢は兩棲動物の山椒魚をいふ。しかしこゝでは鯢鰌は小魚の謂である。制とは釋文に廣雅に折也といひ、曲折の意にとり、王は猘にするの意に解してゐる。今は試みに王說に從つて、自由に槃み得る意に取る。）　○步仭之丘陵（釋文に曰く「六尺を步と爲し、七尺を仭と爲す。廣さ一步、高さ一仭なり」と。廣さ一步は解し難い。高さ六七尺の丘といふ意味であらう。）　○蘖狐爲二之祥一（釋文に「李云ふ、祥は怪なりと。王云ふ、野狐之に依て妖祥を爲すなりと」。林西仲曰く「祥は妖孽なり」と。卽ち野狐が安住して災異を爲す意であらう。）　○介而離レ山（介は獨なり。俞樾曰く「方言に獸偶無きを介と曰ふ。一本分に作る。非なり」と。郭慶藩は介は分の誤寫なりと雖も今は從はず。單獨で山を下つて里に出るの意とす。）　○函車之獸（釋文に「函音は含」と。成疏に曰く「其の獸極大にして口能く車を含む」と。口に車を含む位の大獸をいふ。）　○碭而失レ水（釋文に曰く「碭溢して水を失ふを謂ふ」。碭は宕なり。過ぎて水を失ふ意である。）　○簡レ髮而櫛。數レ米而炊（陸樹之曰く、「髮を簡びて櫛るが如くんば、豈能く周きを盡さんや、米を數へて炊けば、豈能く飽くことを盡さんや、以て世を濟ふと云ふ、果して何ぞ濟はんや」と。卽ちこせ〳〵した些細なる小細工をいふ。）　○之數物者（成疏に曰く「賢を擧げ知に任ずる等を謂ふなり」と。堯舜卽ち儒敎の如き仁義禮智を尊ぶ敎を指す。）　○日中穴レ阫（釋文に裴曰く「阫は牆なり」と。郭慶藩は阫と培と同じと云ひ、淮南子の高誘注の「培は後屋の牆なり」を引く。日中に牆を破つて人家に侵入する意である。）

南榮趎蹵然正レ坐曰、若二趎之年一者已長矣。將二惡乎託一レ業、以及二此言一邪。庚桑子曰、全二汝形一、抱二汝生一、無レ使二汝思慮營營一。若レ此三年、則可三以及二此言一也。南榮趎曰、目之與レ形、吾不レ知二其異一也。而盲者不レ能二自見一。耳之與レ形、吾不レ知二其異一

爲してゐるやうに、すべて小は小なりに、それ相應のものを持つて滿足するものであります。且又賢者を尊び、能者に位を授け、社會のために善と福利を先にすることは、古の堯舜も亦同じであります。固より畏壘の如き地の人々ですから堯舜などの道に從つて自己の福利を計つて呉れる人を尊貴し、其の人を治者と仰ぎたいと思ふのは當然であります。先生も此の理を思うて畏壘の民の希望を聞き入れられては如何で御座いますか。」又庚桑子が之を駁して曰ふには「汝等もつと前へ出よ。よく聞かせることがある。車を口に容れる程の大獸も獨り山を離れて里に出れば、罔罟の患を免れることが出來ない。舟を呑みほす位の大魚も跳び過つて地上に出れば、蟻さへも之を苦しめ得る。故に鳥獸は高山を厭ふことなく、魚鼈は益々深からんことを求めて厭はない。皆夫々其の身を守つて自らを完うせんがためである。況して身體性命を完うする人は、深山幽遠を厭はず、其の身を隱匿して人に知られないやうに欲するものである。汝等の云ふ堯舜の二人の如きは、居る所は小くて身を藏するに足らず、何等稱揚する價値のない者である。堯舜の智辯を弄し、是非を區別することは、譬へば垣墻を破つて美しい庭に態々蓬蒿を植ゑつけるやうなもので、其の處置を誤つてゐること甚しいものだ。又其の賢を貴び、能に任ずと言ふけれども、それは宛も、髮の毛を一本づゝ擇んで櫛を入れ、米を一粒づゝ數へて炊ぐやうなもので、誠にこせ〳〵とした方法だ。あんな事でどうして世を濟ふことが出來ようや。のみならずあのやうに賢者を擧げれば、民は必ず擧用せられんとして競爭し、智者を任用すれば、民は益々智を磨いて、人を欺き盜みをもするやうになる。教に此の智とか賢とかの數物は、皆民心を淳朴にし、其の情を厚くするに足らずして、却つて民は愈々競うて利に走り、其の極は遂に子に

訓讀 弟子曰く、然らず。夫れ尋常の溝、巨魚其の體を還らす所なくして、鯢鰌之が制を爲す。步仭の丘陵、巨獸其の軀を隱す所なくして、孽狐之が祥を爲す。且つ夫れ賢を尊び能に授け、善と利とを先にするは、古の堯舜より以て然り、而るを況んや畏壘の民をや。夫子亦聽けと。庚桑子曰く、小子來れ。夫れ函車の獸介して山を離るれば、則ち罔罟の患を免れず。吞舟の魚、碭して水を失へば、則ち蟻能く之を苦しむ。故に鳥獸は高きを厭はず、魚鼈は深きを厭はず、夫れ其の形生を全くするの人は、其の身を藏すること、深眇なるを厭はざるのみ。且夫の二子なる者、又何ぞ以て稱揚するに足らんや。是れ其の辯に於けるや、將に妄りに垣墻を鑿つて、而して蓬蒿を殖ゑんとするなり。髮を簡びて櫛り、米を數へて炊ぐ。竊竊乎として、又何ぞ以て世を濟ふに足らんや。賢を擧ぐれば則ち民相軋り、知に任ずれば則ち民相盜む。之の數物のものは、以て民を厚くするに足らず。民の利に於けるや甚だ勤む、子として父を殺すあり、臣として君を殺すあり、正晝に盜を爲し、日中に阫に穴す。吾れ汝に大亂の本を語げん。必ず堯舜の閒に生じて、其の末千世の後に存す。千世の後、其れ必ず人と人と相食むものあらんと。

大意 弟子が庚桑楚に向つて畏壘の君となるべきを勸め、庚桑楚は又堯舜の爲す所却つて禍亂の源なることを論じて其の無爲全生の道を說く。

通釋 弟子達は更に庚桑楚に向つて言つた。「いえ、さうでは御座いますまい。かの尋常の狹い小溝では鯨のやうな大魚は其の體な動かす餘地もないけれども、鯢や鰌などの小魚は自由にとび跳ねて樂むことが出來る。又高さ六七尺位の丘陵では、巨獸は其の軀を匿すことも出來ないから棲息しないが、小狐などは反つてこゝに住んで災異を

弟子曰、不然。夫尋常之溝、巨魚無所還其體、而鯢鰌爲之制。步仭之丘陵、巨獸無所隱其軀、而蘖狐爲之祥。且夫尊賢授能、先善與利、自古堯舜以然。而況畏壘之民乎。夫子亦聽矣。庚桑子曰、小子來。夫函車之獸、介而離山、則不免於罔罟之患。吞舟之魚、碭而失水、則蟻能苦之。故鳥獸不厭高、魚鼈不厭深。夫全其形生之人、藏其身也、不厭深眇而已矣。且夫二子者、又何足以稱揚哉。是其於辯也、將妄鑿垣墻而殖蓬蒿也。簡髮而櫛、數米而炊。竊竊乎、又何足以濟世哉。擧賢則民相軋、任知則民相盜。之數物者、不足以厚民。民之於利甚勤。子有殺父、臣有殺君。正晝爲盜、日中穴阫。吾語汝大亂之本、必生於堯舜之閒、其末存乎千世之後。千世之後、其必有人與人相食者也。

じ秋は萬物實る。この事たるや春や秋が自ら勝手に爲すのではなく、自然の大道に由つて行はるゝ必然の現象である。俺の聞く所に據ると、眞に道を得た人は、其の身は方丈の室に閑居して、寂然として爲す所がない。而も百姓は亦自然の性に率ふのみで賢愚不肖の區別を立てゝ誰に歸向しようとも考へず、一切を忘れて大道に從ふものであるといふことである。然るに今畏壘の小民どもは俺を賢なりとして禮拜し、又尊んで君として仰がうとしてゐる所を見ると、俺の道を修すること猶淺いためで人の目に附き易く從つて標的とされるのであらう。だから今俺は老子の道を學びながら、老子の言つた教旨に合致出來ないので、大に恥ぢて塞ぎ込んでゐるのである。

語釋　役（釋文に「司馬云ふ、役とは學徒弟子なり」と。廣雅に云ふ「役は使なり」と。」成疏に云ふ「役とは門人の稱なり。古人の師に事ふるや、其の驅使に共して艱危を憚らず。故に役と稱するなり。」）　○庚桑楚（釋文に「司馬云ふ、楚は名、庚桑は姓なり」と。兪樾曰く「列子仲尼篇に老聃の弟子亢倉子なる者有り。」）　○偏得（林希逸曰く「偏得は獨得なり」と。成疏に云ふ「老君は大聖、弟子極めて多し。門人の中庚桑楚最も勝る。故に偏得と稱するなり」と。）　○畏壘（釋文に「李云ふ、山名なりと。」或は魯に在り、或は梁州に在りといつてゐる。）　○晝然知者（林希逸は曰く「晝然とは分明の意なり」と。郭注には「晝然として知を飾る」とある。即ちはつきりした知識を有する者の意である。）　○挈然仁者（林希逸曰く「挈然とは慈柔の意なり」と。郭注には「挈然として仁に矜る」とある。即ち挈は提挈で、手をとつて人を助ける仁愛の意である。）　○擁腫鞅掌（郭注に云ふ「擁腫は朴なり、鞅掌は自得なり」と。釋文に「崔云ふ、擁腫は無知の貌、鞅掌は不仁の意」と。林西仲は「擁腫は無川の木なり。鞅掌は儀容を爲さず」と云つてゐる。蓋し擁腫は淳朴無知にして、鞅掌は儀容に拘らず自得した所に從つて動ゝる意である。）　○日計レ之而不レ足、歲計レ之而有レ餘（林西仲曰く「其の小利近功無く久らして方に其の益有るを見るを言ふなり」と。）　○尸而祝レ之、社而稷レ之（尸は「カタシロ」神の身代に立つ者。祝は祭を司る者、即ち君主。社は土地の神、稷は五穀の神。即ち神の如く尊敬して君主とせんとする意である。）　○南面而不ニ釋然ニ（林希逸曰く「南面と必ず其の居る所南に向ふなり」と。林西仲曰く「南面は下文の不釋老聃之言と兩相呼應す。言は老子を南望して愧あるなり」と。）　○尸ニ居環堵之室ニ（成疏に云ふ「死尸の寂泊たるが如し、故に尸居と言ふ」と。釋文によるに、堵は一丈、環はめぐらすの意で、即ち四方一丈の小室をいふ。）
○其杓之人邪（杓は音は的、即ち標的の意にして、尊敬されて君主といふ標的となることを欲しない意である。郭注に曰く「物の標的と爲るを欲せず」と。）

を穢せざるかと。庚桑子之を聞いて、南面して釋然たらず。弟子之を異しむ。庚桑子曰く、弟子何ぞ予を異しむ。夫れ春氣發して百草生じ、正に秋を得て萬寶成る。夫れ春と秋と、豈に得て然ることなからんや。大道已に行はる。吾れ聞く、至人は環堵の室に尸居して、百姓猖狂如き往く所を知らずと。今は畏壘の細民を以て、竊竊焉として予を賢人の閒に俎豆せんと欲す。我は其れ杓の人か。吾是を以て老聃の言に釋けずと。

【大意】庚桑楚が其の民から尊奉せらるゝを聞き、自分の未だ小なるを慨嘆して、老聃の教の深遠なる所を說き出さんとする伏線である。

【通釋】老子の弟子に庚桑楚といふ者があつて、獨り老子の道を最もよく學び得て、北の方畏壘の山に住んでゐたが、其の僕の中の物事に就いてはつきりした知のある者は去り、其の婢妾の情深くてやさしい仁ある者は遠ざけてしまひ、淳卜な知なき者と居り、外貌を繕ろはず儀禮に拘はらずせつせと働く者のみを使つてゐた。三年居ると畏壘の地は大に豐かに穰つたので、其處の人民は相與に語り合つて言つた。「庚桑子の始めて來た時は誠に不思議なことをする者だと驚き怪しんだが、今其の功を見るに、日々之を計れば稱するに足らぬやうであるが、一年の久しきに亘つて考へて見ると其の功は斯くの如く餘りある程である。彼はまづ聖人と謂つてよい人であらう。吾々は皆して彼を尊敬して此の地の君として仰がうではないか。」庚桑子はこの事を聞いて、南に向つて坐し、何か心に釋けざるものがある如く塞ぎ込んでゐた。弟子達は之を不審に思つた。そこで庚桑子は之を喩して次の如く言つた。「お前等は何故に俺を異しむのだ。それ春期が發動して百草生じ、秋に至れば萬物は實を結んで成熟する。春は萬物生

者去之、其妾之挈然仁者遠之、擁腫之與居、鞅掌之爲使。居三年、畏壘大穰。畏壘之民相與言曰、庚桑子之始來、吾灑然異之。今吾日計之而不足、歲計之而有餘。庶幾其聖人乎。子胡不相與尸而祝之、社而稷之乎。庚桑子聞之、南面而不釋然。弟子異之。庚桑子曰、弟子何異於予。夫春氣發而百草生、正得秋而萬實成。夫春與秋、豈無得而然哉。大道已行矣。吾聞至人尸居環堵之室、而百姓猖狂、不知所如往。今以畏壘之細民、而竊竊焉欲俎豆予於賢人之閒。我其杓之人邪。吾是以不釋於老聃之言。

〔訓讀〕老聃の役に、庚桑楚といふ者あり。老聃の道を偏得して、以て北のかた畏壘の山に居る。其の臣の畫然として知あるものは之を去り、其の妾の挈然として仁なるものは之を遠ざけ、擁腫と與に居り、鞅掌を使と爲す。居ること三年、畏壘大いに穰る。畏壘の民相與に言つて曰く、庚桑子の始め來れる、吾れ灑然として之を異とす。今吾日に之を計つて足らず、歲に之を計つて餘りあり。庶幾ど其れ聖人か、子胡ぞ相與に尸して之を祝し、社して之

雜篇 庚桑楚第二十三

【敍說】晉時の莊子校定者には雜篇を立てぬもの（崔本、向本）もあつたが郭象は舊本（司馬本、孟氏本）に從つて雜篇を設けて居る。內外篇に漏れたものを此に蒐めたのであらう、從つて內容も蕪雜淺陋で採るに足らぬものが多い、殊に讓王、盜跖、說劍、漁父などの諸篇は既に定評がある。從つて古來諸家の注解書も多く省に從つて居る、故に內容は淺くとも其の解釋には却つて苦しむ個所が少くない。されば本書に在つては出來るだけ忠實に解釋を施して後學の便を計ることにして置いた。

さて本篇庚桑楚の名は文首に老聃之役有二庚桑楚者一とあるを採つたのである。以下の諸篇亦外篇と同じく多くは篇首の二字乃至三字を採りて名となす、從つて篇名には何の意味もない。一篇の意は庚桑楚と南榮趎との問答に始まる。しかし庚桑楚の敎ふる所は未だ其の至道に至らざるを以て、南榮趎は其の敎へに從つて南方に行つて老子に會ふ。老子之に說くに全生保身の術を以てし、藏身深渺の妙所を擧げ、全人至人の道德を釋し、無爲無心、不レ得レ已に出ずる所の妙諦を以てして居る。全篇、章を分たず、假りに分節して解說す。

老聃之役、有二庚桑楚者一。偏得二老聃之道一、以北居二畏壘之山一。其臣之畫然知

如何に究め盡しても、それは極めて淺薄なものに止るであらう。

語釋　無レ有レ所レ將、無レ有レ所レ迎（將は送なり。成疏に云ふ「聖人は鏡の如く送らず迎へず」と。）○外化而內不レ化（宣穎云ふ「物と偕に逝けども天君は動かず」と。）○內化而外不レ化（王先謙云ふ「心神搖佚して物に凝滯す」と。）○與レ物化者一不レ化者也（郭注に云ふ「常に無心なるが故に一たびも化せず。一たびも化せざれば乃ち能く物と化す」と。）○安化安不レ化（成疏に云ふ「聖人は無心にして、物に隨つて流轉す。故に化と不化と、則ち安んじて之に任す。既に分別無ければ、曾ち概意せず」と。）○靡（順なり。）○必與レ之莫レ多（郭象云ふ、將らず迎へきれば則ち足りて止ると。化に任せて彼我損益の別を沒すれば、何しにか足らざる所あらんとなり。）○狶韋氏（外物篇を見よ。）○囿（苑の垣有るもの。音イウ。閫圃宮室等は何れも自他の區別を立てゝ占有の限界を明かにする所以である。）○圃（音ホ、ハタと訓ず。）○虀（音セイ。クダクと訓ず。郭注には和なりと云へど、從はず。）○聖人處レ物不レ傷レ物（宣穎云ふ「是非に心無きなり」と。）○皋壤（王先謙云ふ。「平原なり」と。）○遇（知の遇ふ所なり。）○齊ニ知之所一レ知則淺矣（宣穎云ふ「必ず知の知る所を以て之を齊しうして、皆知らざる無からしめんと欲す。豈道を見る物の爲ならんや」と。）

立て籠り、只管自分の主張を正しいものとして人の主張を非議して、お互に排斥し合つて居る。斯の樣に上古から次第に時代が下るに從つて、益〻自我に偏執する程度が高くなつて來たが、況して現今の人達はなほ一層甚しいものがある。然るに聖人は事物の間に處しても、その性分に任せて傷ふことがなく、從つて事物も亦之に累を及ぼすことは出來ない。唯〻斯の樣に事物を傷ふことのない者であつて始めて能く此の社會に在つて人と應接して、是非同異の對立の外に超然たることが出來るのである。山林や平原などの美しい景色は、好んで人の遊び樂しむ所であるが、人は此處に遊んで居る間は欣然として樂しむけれども、其の樂が未だ終らない前に、もはや哀愁が襲つて來る。外境の事物に動かされて哀樂する者は、常にこの通りであつて、哀樂の去來するに隨つて悲喜の情を催して、之を禦ぐことも止めることも出來ない。これは卽ち內化して外化することが出來ないからである。何と哀しむべきことではないか。要するに、人間の生涯に於て哀樂の出來事に遭ふのは、云はゞ旅籠に宿る旅人のやうなもので、常住するものではない。人間の智惠や能力には限りがある。智惠の及ぶ所は知ることが出來るが。智惠の及ばない所は知ることが出來ず、能力の及ぶ限りの事は出來るが、能力以上のことは出來ない。人には皆知らない所があり、出來ない事があるが、それは人間たる以上、誰しも免れることの出來ないものである。然るに己の淺い智惠や小さな分別を用ひて、免れない所を免れて、殘る隈なく知り盡し爲し果さうとするのは、眞の道理に暗いからで、何と悲しむべきことであらう。若しも眞にそれを求めようとするならば、有爲言說を超越した自然の道に冥合するより他に途は無い。卽ち究竟至極の言爲は、有爲相待の言爲を離れた所に見出されるであらう。通常の知に依つて

大意　此の章は、孔子が顏淵に道を說き、是非の見は本來定住するものではなく、凡て物に役せられたる人心の造作する所に過ぎぬ。人は宜しく知能の及ばざる所に強ひて及ぼさんとするの愚を已めて、心を自然に遊ばしめるべきである。古來聖人は能く至道を體して無心至順に、總ての爭を超脫したることを說く。

語釋　顏淵が或る時孔子に向つて曰ふには「私は嘗て先生から承つたことがあります。それは、道を悟つた人は往くものを送らず、來るものを迎へないといふことでありましたが、何うすればこの送らず迎へざる無心の境地に逍遙することが出來ませうか。」孔子が答へて曰ふには「昔の人は純樸で道に合つて居たから、外境の事物に心を奪られず、その爲すが儘に任せたから、外は外界の變化に順ひ、又心は外界の事物を送迎しないから、內心は凝靜清徹で變化しなかつた、之に反して今の人は、內心は事物を逐うて不斷に變化動搖し、外には己を以て事物を制しようとして化に順ふことが出來ない。外境の事物の變化のまゝに任せるものは、事物に順ふより他はないのであるから、一面から觀れば之を不化とも謂へる。從つて內外倶に化せざるものであるが、要するに化も無く不化も無く、唯ゝ自然に任すばかりであつて、自分の計らひを以て事物を將迎して心を勞らすことはないので、常に無限の充足を見出すことが出來る。あの狶韋氏は苑囿を造り、黃帝は圃畦を作つて、自分の占有する境界を明かにして、自然の鳥獸を捕へて畜ひ、人工の蔬菜を藝ゑて自分の享樂に充てたが、猶ほ未だ人と樂を頒つことを忘れなかつたが、舜や湯武に至つては、妄に壯麗な宮室を營んで之を專有して、他人の自由に出入することを禁じてしまつた。更に當時の所謂君子達、中にも儒家や墨家の學者などゝ云はれる人々に至つては、皆自分一家の主張を樹てゝその中に

不能禦。其去弗能止。悲夫。世人直爲物逆旅耳。夫知遇而不知所不遇。知能能而不能所不能。無知無能者固人之所不免也。夫務免乎人之所不免者、豈不亦悲哉。至言去言、至爲去爲。齊知之所知則淺矣。

訓讀　顏淵、仲尼に問うて曰く、回、嘗て諸を夫子に聞けり。曰く、將る所あるなく、迎ふる所あるなしと。回敢へて其の遊を問ふと。仲尼曰く、古の人は、外化して、內化せず。今の人は、內化して、外化せず、物と與に化するものは、一も化せざるものなり。安にか化し安にか化せざる、安にか之と相靡ふ、必ず之と多きこと莫らんや、狶韋氏の囿、黃帝の圃、有虞氏の宮、湯武の室、君子の人、若くは儒墨者の師、故より是非を以て相䪡せり、而るを況んや今の人をや、聖人物に處して物を傷らず、物を傷らざるものは、物も亦傷ること能はざるなり、唯よ傷る所なきものにして、能く人と相將迎することを爲さん。山林か皐壤か、我をして欣欣然として樂しましむるか、樂み未だ畢らざるに、哀又之に繼がん。哀樂の來るや吾れ禦ぐこと能はず、其の去るや止むること能はず、悲しいかな。世人は直物の逆旅たるのみ。夫れ遇ふを知れども遇はざる所を知らず。能くするを能くすることを知れども、能くせざる所を能くせず。無知無能は固より人の免れざる所なり。夫れ人の免れざる所を免れんことを務むるものは、豈に亦悲しからずや。至言は言を去り、至爲は爲を去る。知の知る所を齊しうせんとすれば、則ち淺しと。

レ之（郭象云ふ「虚心以て命を待つ、斯れ神受くるなり」と。）〇不レ神者（神靈なる作らきなき者とは、形象に拘る人間の思考を云ふ。）〇無レ古無レ今（林西仲云ふ「太極未分の圖を畫き出す。一圈の空寂、先と後と無く、首と尾と無し、未だ子孫有らずして子孫有りとせば可ならんや」と。）〇死生有レ待邪、皆有レ所ニ一體ニ（成疏に云ふ「死は獨り化するなり、死既に生に待たず、故に生も亦死を待たざるを知る。死生聚散、各ゝ自ら一體を成すのみ。故に因待する所無し」と。又林希逸云ふ「纔に生の字あれば則ち死ノ字有り。是れ生に因て後一の死の字を生ずるなり。纔に死の字有れば則ち生の字有り。是れ死の名に因て後其の生を死とするものなり。死生の待つ所は一體のみ。一體とは猶ほ一本のごとし、即ち一理なり、即ち造化の自然なり」と。姑く存して參考に便す。）〇物レ物者非レ物（物をして物たらしめる者は即ち造化の道なり道は物に非ず。）〇猶ニ其有レ物也無已（上の猶有其物の狀態が無窮に連續するを云ふ。）〇聖人之愛レ人也終無レ已（聖人は德天地に配し、道自然に合するが故に、その人を愛するや、四海を窮め五代を通じて無限なることを得るなり。）

顏淵問ニ乎仲尼ニ曰、回嘗聞ニ諸夫子ニ。曰、無レ有レ所レ將、無レ有レ所レ迎。回敢問ニ其遊ニ。仲尼曰、古之人、外化而內不レ化、今之人、內化而外不レ化。與レ物化者、一不レ化者也。安化安不レ化、安與レ之相靡、必與レ之莫レ多。狶韋氏之囿、黃帝之圃、有虞氏之宮、湯武之室、君子之人、若儒墨者師、故以ニ是非ニ相䪡也、而況今之人乎。聖人處レ物不レ傷レ物、不レ傷レ物者、物亦不レ能レ傷也、唯無レ所レ傷者、爲ニ能與レ人相將迎。山林與、皐壤與、使ニ我欣欣然而樂ニ與、樂未レ畢也、哀又繼レ之、哀樂之來、吾

とでありませうか。」そこで孔子が曰ふには「昨日汝が昭然と理會したのは、胸の中が廓然として居つて、從つて神靈な作らきを具へた虚心な狀態で聞いたからである。然るに今日は眛然として解らないといふのは、要らぬ不神な汝の思考の力などに賴つて考へ求めようとするからであらう。抑ゝ天地創造の以前に於ては、古も無く、今も無く、始も無く、終も無く、唯ゝ混沌たるばかりである。未だ子孫も無いのにそれが有るとするやうに、無いものを有るやうに考へるから譯が解らなくなるのだ。」冉求は何も答へなかつた。孔子は更に言葉を繼いで曰ふには「止めよ。汝今暫く口を開くな。さて又生死に就いて言ふならば、生から死を觀れば、死を生とすることは出來ず、又死の立場から生を觀れば、生を以て死とすることは出來ず、生は即ち生であり、死は即ち死である。死は生に待つものではなく、生も亦死に待つものではない、生死各ゝ獨自に變化してゆく現象である。天地に先だつて生ずる物があると云ふのは、果して物といふべきものであらうか。天地に先だつて在るもの、それは唯、物を物として主宰する所のもの、即ち道に他ならぬ。達は物ではなく、死生古今終始は無い。物は物から生ずるものであるから物に先だつことは出來ない。既にそこに物が在るからである。物に先だつて存在するものは道より他には無く、道が有つて後に始めて一切萬物が生じて來たのである。已に物が有れば更に又物を生じて、斯くして一切萬物の生々することは無限に已むことはないが、これを主宰するものは言ふ迄もなく道そのものである。又人間の社會に於て聖人は窮りなく人を愛するものであるが、それは無限に生々して已むことのない自然の道に傚つたものである。

【語釋】未レ有二天地一（老子第二十五章に、物有り混成す。天地に先だちて生ず。寂たり寥たり、獨立して改めず、周行して殆からず、以て天下の母たるべし。吾其の名を知らず、之に字して道と曰ふ云云とあるを參照すべし。）（神者先受

訓讀 冉求、仲尼に問うて曰く、未だ天地あらざるとき知るべきやと。仲尼曰く、可なり、古猶ほ今のごときなり。冉求問を失うて退く。明日復見えて曰く、昔者吾れ問ふ、未だ天地あらざるとき知るべきやと。夫子曰く、可なり、古猶ほ今のごときなりと。昔者、吾れ昭然たり、今日吾れ昧然たり。敢へて問ふ、何の謂ぞやと。仲尼曰く、昔の昭然たるや、神たるもの先づ之を受けたればなり。今の昧然たるや、且つ又神ならざるもの求むるが爲めか。古なく今なく、始めなく終なし。未だ子孫あらずして、子孫ありとせば、可ならんやと。冉求未だ對へず。仲尼曰く、已めよ。未だ應へざれ。生を以て死を生とせず、死を以て生を死とせず。死生、待つことあらんや、皆一體なる所あり。天地に先だつて生ずるものあり、物ならんや。物を物とするものは、物にあらず。物、出づれば物に先だつことを得ざるは、猶ほ其れ物あればなり。猶ほ其れ物あれば已むことなし。聖人の人を愛するや、終に已むことなきものは、亦乃ち是に取れるものなりと。

大意 此の章は、冉求が孔子に、未だ天地の創造せられざる以前のことを問へるに對して、孔子が古のなほ今のごときことを說き、更に聖人が自然の道に順つて人を愛することを說く。

通釋 冉求が或る時孔子に向つて尋ねて曰ふには「未だ天地の創造されない以前のことが知れませうか」。孔子が答へて曰ふには「それは知れる。昔も今も變りはないのだ」。冉求は再び尋ねようともせずにその儘退出したが、その翌日また見えて尋ねて曰ふには「昨日私が天地創造以前のことをお尋ねして、先生のお言葉を承つた時には、昭然としてよく解りましたが、今日になつて見ると、昧然として譯が解らなくなりました、これは一體何うしたこ

之に賴り資いないものは無いやうになるであらう。

語釋 大馬（成疏に云ふ「大馬は官號、楚の大司馬なり」と。）○捶レ鉤（捶は打鍛なり、鉤は帶鉤、腰帶の端に在る鉤なり。）○不レ失二毫芒一（毫芒ほどの蹉失も無きなり。）○有レ守（守とは守り持つ所。王念孫は「守は卽ち道の字」と云へり。）○用レ之者（技術を云ふ。）○無レ不レ用者云云（成疏に云ふ「老に至るまで長く其の鉤を捶ふるの用を得る所以のものは、心を用ひて他物を觀察せざるに假り賴るが故なり。夫れ不用を假りて用と爲すすら、尙年を終ふるを得。況んや體道の聖人は、用無く不用無きが故に能く大用を成す。萬物の資り稟くること亦宜ならずや」と、前節に謂ふ所の無無の無限なる活動を表す。）

冉求問於仲尼曰、未有天地可知邪。仲尼曰、可、古猶今也。冉求失問而退。明日復見曰、昔者吾問、未有天地可知乎。夫子曰、可、古猶今也。昔者吾昭然、今日吾昧然。敢問何謂也。仲尼曰、昔之昭然也、神者先受之。今之昧然也、且又爲不神者求邪。無古無今、無始無終。未有子孫而有子孫、可乎。冉求未對。仲尼曰、已矣。未應矣。不以生生死、不以死死生。死生有待邪。皆有所一體。有先天地生者物邪。物物者非物。物出不得先物也、猶其有物也。猶其有物也無已。聖人之愛人也終無已者。亦乃取於是者也。

也、以長得其用、而況乎無不用者乎、物孰不資焉。

訓讀 大馬の、鉤を捶ふるもの、年八十なれども、毫芒を失はず。大馬曰く、子の巧なる道あるかと。曰く、臣、守ることあるなり。臣の年二十にして鉤を捶ふるを好む。物に於いて視ることなきなり。鉤にあらざれば察することなきなりと。是れ之を用ふるものは、用ひざるものを假りて、以て長く其の用ふることを得たるなり。而るを況んや用ひざること無きものをや、物孰れか資らざらんや。

大意 此の章は、大司馬の工人にて帶鉤を鍛へるに巧なる者の說話を假り來つて、道の自然に合致すべきことを說く。

通釋 楚の國の大司馬の下の工人に帶鉤を鍛へる者があつたが、年が八十に及んでも益〻その技術は老練を加へて、毫芒ほどの仕損じさへもしなかつた。そこで大司馬が之に向つて「お前の技巧がそんなに勝れて居るのは、何か然るべき道があるのか」と尋ねると、工人は「私には特別な道がある譯ではありませんが、唯〻私には常も心に守る所があります。私は若い二十歳の頃から此の帶鉤を鍛へる仕事が好きで、他の物には目も與れず唯〻帶鉤ばかり觀て居りました」と答へた。これはその技術を用ひる場合に、心を外の物に奪はれずに、只管帶鉤ばかりに集注して、老年に至るまで、之を一つの事に用ひることが出來たが爲に、斯程まで巧妙な技術を修得したのである。こんな小さな技術に於てさへも然うであるから、況して、道の自然を體して無限の作きを得たならば、一切の物は皆

通釋 光曜が無有に向つて尋ねて曰ふには「君は有るのか、それとも有ることもないのか。」無有は何の返事もしなかつた。そこで光曜は熟く〱と無有の狀貌を視やると、如何にも深遠空寂たる有樣で、終日之を視つめても姿は見えず、耳を傾けても聲も聞えず、手で摶つても體に當らなかつた。光曜は歎じて曰つた。「あゝ何と至極なものであることか。誰か能く此の樣な妙境に入ることが出來ようぞ。自分は此迄に無といふものゝあることは悟ることが出來たが、未だその無さへも無いといふことは悟ることが出來ない。有無すべて有ることなしといふことは、玄德の人でなければ到底悟ることは出來ない。自分の樣に有とか無とかいふ一邊に拘る者には何うして斯くの如き幽玄な境界に入ることが出來やうぞ」。

語釋 光曜、無有（成疏に云ふ「光曜とは是れ能視の智なり、無有とは所觀の境なり、智は能く照察す故に假に光曜と名づく。境は體空寂なり、故に假に無有と名づけしなり。而して智に明暗あり、境に深淺無し、故に智を以て境に問ふ、有りや、無しや」と。）○光曜不レ得レ問（兪樾はこの上に「無有弗應也」の五字を脱すと云へり。）○孰視（孰は音ジュク、熟の古文。）○窅然（深遠の貌。一に云ふ、無無の狀なりと。）○視レ之而不レ見（以下三句老子第十四章に出づ。）○至矣……此哉（成疏に云ふ「光明照曜なるは其の智尙淺し。唯〻能く無を得、有を喪ひたるも、未だ雙つながら有無を遣ること能はず。故に無有の至深なる、誰か能く此くの如く玄妙なりやと歎ずるなり」と。林西仲云ふ「光曜は能く無たるも、無無たること能はず、尙ほ無の一邊に落つる所以なり。旣に無に落つれば、則ち無の有する所と爲る。淸淨の中に於て一物を着了す。何に從つてか窅然空然。不見不聞の地位に至らんや」と。）

大馬之捶レ鉤者、年八十矣、而不レ失二豪芒一。大馬曰、子巧與、有レ道與。曰、臣有レ守也。臣之年二十而好レ捶レ鉤。於レ物無レ視也。非レ鉤無レ察也。是用レ之者、假二不レ用者一

其の名と爲す」と。） ○吾不レ知（又云ふ「泰清知を以て道を問ひ、無窮終ふるに不知を以てす。道の形聲を離れて亦言知を以て求むべからざるを明にせんと欲するなり」と。） ○數（名數なり。屬性と云はんが如し。） ○道之可ニ以貴一（成疏に又云ふ「貴くしては帝王と爲り、賤くしては僕隷と爲り、約聚しては生となり、分散しては死と爲る。數は乃ち極り爲し。此に之を略言するは、名あらずして名あり、數あらずして數あるを明かにせんと欲するなり」と。） ○弗レ知内矣、知レ之外矣（知らざるは理に合す、故に深玄にして内に處る。之を知るは道に乖く、故に粗淺にして外に疏んぜらる。（成疏に據る）） ○宇宙（天地四方を宇と云ひ、往古來今を宙と云ふ。） ○崑崙（高山の名、道の高遠なるに喩ふ。） ○大虚（虚無深玄の道る指す。）

光曜問ニ乎無有一曰、夫子有乎、其無レ有乎。光曜不レ得レ問、而孰ニ視其狀貌一、窅然空然。終日視レ之而不レ見、聽レ之而不レ聞、搏レ之而不レ得也。光曜曰、至矣、其孰能至レ此乎。予能有レ無矣、而未レ能レ無レ無也。及レ爲レ無レ有矣、何從至レ此哉。

訓讀 光曜、無有に問うて曰く、夫子は有るか、其れ有ること無きかと。光曜問ふことを得ずして、其の狀貌を孰視するに、窅然たり。空然たり。終日之を視れども見えず、之を聽けども聞えず、之を搏てども得ざるなり。光曜曰く、至れり、其れ孰れか能く此に至らんや。予能く無有れども、未だ無無きこと能はざるなり。有ること無しと爲すに及びては、何に從つて此に至らんや。

大意 此の章は、光曜と無有と兩個の假設的人物の問答に托して、無の境を踰えて、更に一歩を進めて無無の域に至るのが幽玄なる道の至極なる所以を說く。

く、知つてをるのは淺い。知らないのは理に合つて內であり、知つて居るのは道に乘いて外である。」之を聞いて泰淸は、其の返答が未だ終らない中に歎息して曰ふには「知らないのが却つて知るのであり、知ることが却つて知らないことであらうか。誰か此の不知の知たる玄境を知る者があらう。」無始が曰ふには「道は耳を以て聞くことの出來ないものである。耳に聞いた時、最早それは眞の道ではない。道は眼を以て見ることは出來ない。眼に見た時は最早道ではない。又道は言葉を以て言表すことは出來ない。口に出して說明すれば最早眞の道を離れてをる。一切の物を物として形造つて、而も己自らは形を有たぬものであるといふことが解れば、それこそ道が形容を與へて限定すべきものでないといふ所以である。」無始は更に語を繼いで曰ふには「道とは何んなものかと問はれた場合に、之に應をする者は、未だ眞に道を知つて居ない者である。道を問く者も亦未だその眞髓を聞くことは出來ない。結局、道は問答に依つて理解されるものではない。問くことの出來ないものを强ひて問くのは、恰度空虛に向つて責め付けるやうなものであり、應へることの出來ないものを强ひて應へるのは、未だ中心に道を得て居ないものである。中心に道を得て居ないで强ひて言說によつて道を知らうとする者は、謂はゞ無內を以て問窮を待つやうなもので、斯樣な者は、外には宇宙が道に由つて生ずる所以を洞察することが出來ず、內には道が本來虛無である妙理を察知することが出來ず、從つて高遠の境地に登り、深玄の世界に逍遙して、道と冥合することは到底出來ないのである。」

語釋　泰淸、無窮、無爲、無始（何れも假設的人物の寓名である。成疏に云ふ「夫れ至道は宏曠、恬淡淸虛、囊括無窮なり、故に泰淸、無窮を以て名と爲す」と。又云ふ「至道は玄通、寂寞無爲、隨迎不測、無終無始なり、故に無窮、無始に寄せて

へば非なり。形を形するの、形せざるを知るか。道は當に名くべからずと。無始曰く、道を問ふことあつて、之に應ふるものは、道を知らざるなり。道を問ふものと雖も、亦未だ道を聞かず。道は問ふことなく、問ふも應ふることなし。問ふことなきに之を問ふは、是れ窮を問ふなり、應ふることなきに之に應ふるは、是れ內なきなり。內無きを以て窮を問ふを待つ。是の若き者は、外、宇宙を觀ず、內、大初を知らず、是を以て崑崙を過ぎず、大虛に遊ばずと。

大意 此の一節には、泰清、無窮、無爲、無始四人の假設的人物をして、道に就て問答せしめて、知るは乃ち知らず、不知の知が眞の知なる所以を說く。

通釋 さて泰清と云へるものが、弇堈の說を聞いて更に無窮に向つて尋ねて曰ふには「君は道を知つて居るか。」無窮が答へて曰ふには「自分は知らない。」次に又無爲に向つて尋ねると、無爲が曰ふには「自分は道を知つて居る」。そこで泰清が重ねて曰ふには「君が道に就て領解して居る所で、何かきまつた道の屬性とでも云ふべきものを擧げることが出來るか。」無爲が曰ふには「有る。」泰清が曰ふには「ではその屬性とは何ういふものか。」無爲が曰ふには「道は貴くしては帝王と爲り。賤くしては僕隷と爲り、約聚しては生と爲り、分散しては死と爲るので、貴賤約散し、無窮に融通して、特殊のものに偏することはない。これが自分の理會して居る道の屬性である。」さて泰清は此の言葉を齎して無始の見解を質して曰ふには「あの無窮は道を知らず、無爲は道を知つて居る。是の樣に兩者は全く相異つてをるが、君はその孰らが是で孰らが非であると思ふか。」無始が答へて曰ふには「知らないのは深

乎。孰知不知之知。無始曰、道不可聞、聞而非也、道不可見、見而非也。道不可言、言而非也。知形形之不形乎。道不當名。無始曰、有問道而應之者、不知道也。雖問道者、亦未聞道。道無問。問無應。無問問之、是問窮也。無應應之、是無內也。以無內待問窮。若是者、外不觀乎宇宙、內不知乎大初、是以不過乎崑崙、不遊乎大虛。

訓讀 是に於て泰淸、無窮に問うて曰く、子、道を知るかと。無窮曰く、吾れ知らずと。又無爲に問ふ。無爲曰く、吾れ道を知れりと。曰く、子の道を知る、亦數ありやと。曰く、有りと。曰く、其の數若何と。無爲曰く、吾れ道の以て貴かるべく、以て賤しかるべく、以て約すべく、以て散ずべきを知る。此れ吾が道の數を知る所以なりと。泰淸之の言を以て、無始に問うて曰く、是の若きは則ち無窮の知らざると、無爲の知ると、孰れか是にして而して孰れか非なりやと。無始曰く、知らざるは深し、之を知るは淺し。知らざるは內なり、之を知るは外なりと。是に於て泰淸中ばにして歎じて曰く、知らざるは乃ち知るか、知るは乃ち知らざるか。孰れか知らざるの知るを知らんと。無始曰く、道は聞くべからず、聞けば非なり。道は見るべからず、見れば非なり。道は言ふべからず、言

くことも出來ないものである。人が道を論じては之を冥々と名づけるが、冥々と云ふ以上、相對的な言說を以て之を論ずることは出來ないのであつて、論じた時には最早眞實の道ではなくなるのだ。」

語釋　婀荷甘（姓は婀、荷甘はその字。）　○神農（成疏に「三皇の一人に非ずして、後世の同名の人物なり」と云へり。）　○老龍吉（又云ふ「亦是れ號なり」と。）　○隱（ヨルと訓ず。憑と同じ。）　○瞑（眠なり。）　○奓（音シヤ、オシヒラクと訓ず。）　○曝然（音ハク、杖を放つの聲。）　○天（老龍吉を指す。成玄英云ふ「自然の德有るが故に、之を呼んで天と曰ふ」と。）　○夫子（老龍吉なり。）　○弇堈弔（弇は音エン。堈は音カウ。李頤云ふ「弇剛は道を體せる人、弔は其の名なり」と。宣穎云ふ「弇堈來り弔するなり」と。今前說に從ふ。）　○繫（屬なり、歸依して宗主と仰ぐ意なり。）　○狂言（秦鼎云ふ「至言は常人の理解し得ざるものなれば、之を狂言と云ふ」と）　○視之無形、聽之無聲（成疏に云ふ「夫れ玄道は虛漠にして妙體は希夷なり。色あらず聲あらず、視を絕し聽を絕す」と。故に體道の人は眞性に反つて、無形に視、無聲に聽くなり。）　○冥々（言說を全く絕したる道は、冥々といふ形容すらも附すべきに非ざるを云ふ。）　○所以論道而非道也（郭象云ふ「冥々も猶ほ復た道に非ず。道の名づくること無きを明かにするなり」と、如何なる形容をも許容せざるを云ふ。）

於是泰淸問乎無窮曰、子知道乎。無窮曰、吾不知。又問乎無爲。無爲曰、吾知道。曰、子之知道、亦有數乎。曰、有。曰、其數若何。無爲曰、吾知道之可以貴、可以賤、可以約、可以散。此吾所以知道之數也。泰淸以之言也、問乎無始曰、若是則無窮之弗知、與無爲之知、孰是而孰非乎。無始曰、不知深矣、知之淺矣。弗知內矣、知之外矣。於是泰淸中而歎曰、不知乃知乎、知乃不知

なるを知る。故に予を棄てゝ死せるのみ。夫子予を發く所の狂言なくして死せる夫と。弇堈弔之を聞いて曰く、夫れ道を體するものは、天下の君子の繫る所。今、道に於て秋毫の端、萬分して未だ一に處るを得ざるものにして、猶ほ其の狂言を藏して、死せるを知る、又況んや夫の道を體するものをや。之を無形に視、之を無聲に聽く、人の論ずるものに於ては、之を冥冥と謂ふ。道を論ずる所以にして道にあらざるなりと。

大意 神農が晝寢したる時に、婀荷甘が師の老龍吉の死を報告せるに對して、神農の言へる語を、弇堈が聞いてその道に非ざることを論じ、眞の道は言說を絕したる冥々に在ることを說く。次節と合せもて一章となす。

通釋 婀荷甘と神農とが同じく老龍吉といふ人を先生として學んだ。或る日神農が机に倚りかゝり、戶を閉めて晝寢をして居ると、婀荷甘が日中に戶を推し開いて入つて來て、先生の老龍が死んだことを話した。神農はそれを聞いて机をたよりに杖を手にして立ち上つたが、やがて杖をカラリと投げ出して笑ひながら云つた『あゝ、天とも仰ぐ先生の老龍は、自分がねぢけてひがんで居り、又なまけてみだりがましいことを承知だから、自分を棄てゝ死なれたのだ。老龍は自分を啓發すべき大言を示さずに死んでしまはれたのか。さてさて歎かはしいことだ。』所が弇堈弔と云ふ人がこの事を聞いて曰ふには「抑ゝかの道を體得する者は、天下の君子が歸服して宗主と仰ぐ人である。然るに今神農の言つた言葉を聞いて見ると、至道に就いては卯の毛の尖の萬分の一ほども知つて居ないやうな者であり乍ら、猶且つ老龍が至大の言葉を藏して死んだことを知る程であるから、況して道を體得した人に在つては、一層その見る所が高いことであらう。道は人の通常の感覺では、その形を視ることも出來ないし、その聲を聞

ば卽ち道在り。故に物と涯際無し」と。一說に物を物とするとは聖人を云ふとなす。亦通ずるに似たり。）○際（成疏に云ふ「際は崖畔なり」と。カギリと訓ず。對立的關係なり。）○物際（物と物との間に在る相對的關係を云ふ。集解に云ふ「一物には則ち涯際有り。特に之を物際と謂ふのみ。烏んぞ道と云ふべけんや」と。）○不際之際、際之不際（又云ふ「道は本と不際なれども物際に見られ、物際に見らるれども仍ほ是れ不際なりと。）○盈虛（富貴貧賤を云ふ。）○彼爲盈虛非盈虛（彼とはかの道なり。盈虛は道によつて生ずる現象であるが道そのものではないと。）

婀荷甘與神農同學於老龍吉。神農隱几闔戶晝瞑。婀荷甘日中奓戶而入曰、老龍死矣。神農隱几擁杖而起、曝然放杖而笑曰、天知予僻陋慢訑。故棄予而死已矣。夫子無所發予之狂言而死矣夫。堈弇弔聞之曰、夫體道者、天下之君子所繫焉。今於道秋毫之端、萬分未得處一焉。而猶知藏其狂言而死、又況夫體道者乎。視之無形、聽之無聲。於人之論者謂之冥冥。所以論道而非道也。

訓讀　婀荷甘、神農と與に同じく老龍吉に學ぶ。神農、几に隱り戶を闔ぢて晝瞑す。婀荷甘、日中に戶を奓いて入つて曰く、老龍死せりと。神農几に隱り杖を擁して起ち、曝然として杖を放つて笑つて曰く、天、予が僻陋慢訑

到る所に遍滿して、事物を離れて別個に存在するものではない。であるから道と事物との間には彼我の際りはない。但〻事物相互の間には夫〻自他の區別が立てられるので、之を物際と名付ける。併しこれは決して道ではない。そこで道は本來不際であるけれども、其の生じた事物に就いて見れば際があり、事物の際も道が之を生ずるといふ立場から觀れば不際であつて、道と事物とは相離れて考へられるものではない。此の道は諸〻の事物を統貫秩理する玄妙な理法であつて、事物の間には、貧富、老病、終始、生死等の樣々な現象が起つて來るが、それは決して事物が自ら爲すのではなくて、自然の道が然らしめるのである。併し乍ら、盈虛本末などが直ちに道其物ではない。」

語釋　東郭子（成疏に云ふ「居東郭に在り、故に東郭子と號す。則ち無擇の師東郭順子なり」と。）　○無レ所レ不レ在（道は到る所に遍滿して、何物の中にも存在せざる所なきを云ふ。莊子の一元的汎神論の世界觀を窺ふべき所なり。）　○期（指定すること。）　○螻（音ロウ、ケラなり。）　○螻蟻、瓦甓、屎溺（螻蟻は生命・活動は有れども、極めて下等の動物、稊稗は生命あるのみにて活動なきもの、瓦甓は唯〻形あるのみ、屎溺に至つては衆人の嫌惡する所のものなり。）　○正獲（成疏に云ふ「正は官號、則ち今の市令なり。獲は名なり」と。）　○監市（市場の監督者。一に云ふ「屠卒なり」と。）　○履レ豨（脚を以て豕の體を踐みて其の肥瘦を知るなり。）　○況（タトフと訓ず、比較類推する意。）　○必（期必するなり。物の所在を特殊のものに限定するを云ふ。）　○無二乎逃一レ物（道が物を離れた超絶的な存在であるとする勿れとなり。）　○大言（成疏に云ふ「至道は理なり、大言は敎なり」と。）　○無何有之宮（無何有とは一物も有ること無きを云ふ。至道虛無の鄕なり。）　○同合（林西仲云ふ「萬を合して一となす」と。萬物一體と觀ずるなり。）　○澹（恬澹の澹にして、心の安定せること、自ら靜なるなり。）　○漠（成疏に云ふ「寂寞なり」と。郭慶藩云ふ「漠も亦[illegible]なり」と。）　○調而閒乎（調は調和不戾の貌、閒は暇閒自適の貌。）　○寥（音レウ、空虛なり。）　○無レ往焉而不レ知二其所一レ至（郭象云ふ「志苟くも寥然たらば則ち往く所無し。往くこと無きが故に往くとして其の至る所を知らず」と。）　○彷二徨乎馮閎一（成疏に云ふ「彷徨は是れ放任の名、馮閎は是れ虛曠の貌」と。）　○大知入焉而不レ知二其所一レ窮（林西仲云ふ「絶頂の聰慧其の中に入ること有りと雖も、總て其の何れか窮極する所なるやを知らず、是れ道の無際なること定指すべからず云云と。大知は或は大聖知の人が能く寂寥虛曠の理に契會するの意に解すれども、姑く林氏の說に從ふ。）　○物レ物者、與レ物無レ際（王先謙云ふ「物を物とするものは道なり。物在れ

要を得て、他の部分が類推されるやうなもので、道が糞尿のやうな下等なものにさへ在ることが解れば、その他のもつと高等なものに在ることは、云はなくても自ら明かである。斯樣に道は何物にも存在しないといふことはないのだから、或る特殊な物に限定して之を求めようとしてはならない。若し之を一物に求めようとすれば、却つて道を知ることは出來ない。宇宙間にある限りのものは、何物も道を離れた存在するものはないので、道が萬物を逃れて別に獨立して在るものと思つてはならない。此の二つは別々に考へることは出來ないものである。究竟の道とは斯樣なものであるが、大言の敎も亦その通りである。例へば周、徧、咸の三字は、その名は異つて居るが、その實は同一で、何れも皆道の徧在することを表した言葉である。試みに君と一緒に無何有の鄕に逍遙して、彼此物我の對立を去つてしまつて、萬物一體の立場に立つて、窮る所の無い至道に就て論じて見よう。試みに君と共に有爲の計らひを棄て、恬澹として心を安靜に保ち、寂寞として心を淸淨に潔め、よく調和して悠々自適して、心を妄動せしめないやうにしよう。是の時に當つて心は少しも妄りに外境に依つて動かされないから、心の活動は自ら寂寥となる。從つて心は物に順つて自然に動くばかりで、こちらから或る物に向つて往くことはないが、それ故にこそ何方に向つて往つても窮る所が解らぬ。或は又心の活動が去つて復た來ても、それは變に應じ、物に隨つて移るので、一事一物に執着して一所に止住することはない。斯くの如く心の活動は忽ち往き忽ち來つて、無限に反覆往來して終極することが無く。廣大虛無の世界に逍遙自適するのである。此の境地は何れ程聰慧な知識を以て窺つても、その際限を窮め盡すことは出來ない。さてかの道は一切の事物をして事物たらしめて之を主宰する。而も道は

彷徨して、大知入るとも、而かも其の窮まる所を知らじ。物を物とする者は、物と際なし。而して物の際あるものは、所謂物際なるものなり。不際の際は、際の不際なるものなり。盈虚衰殺を謂はんに、彼は盈虚を爲せども盈虚にあらず、彼は衰殺を爲せども衰殺にあらず、彼は本末を爲せども本末にあらず、彼は積散を爲せども積散にあらざるなりと。

大意 此の章は、莊子が東郭子との問答に於て、道が隨所に遍在することを述べ、更に道の無限なる作きとを說く。

通釋 東郭子が或る時莊子に向つて尋ねて曰ふには「所謂る道といふものは何處に在るのか。」莊子が答へて曰ふには「道は何處にでも存在しないといふ所はない」と。東郭子が更に尋ねて曰ふには、「何處に在るかといふことをはつきり指し示してもらひたい。」莊子が曰ふには「螻や蟻にも在る。」東郭子は驚いて「そんな下等なものにも在るのか」と云ふと、莊子は「稊や稗の中にも在る」と答へた。東郭子は愈〻驚いて「そんな一層卑しいものにも在るのか」と云ふと、莊子は更に「瓦や甓にも在る」と答へた。東郭子は益〻意外に思つて、「愈〻以て卑いものではないか」と云ふと、莊子は今度は、「糞尿の中にも在る。」と答へた。東郭子は最早呆然としてしまつて何とも應へなかつた。そこで莊子は更に續けて云つた。「君の質問が道の本質に觸れて居ないから、從へて自分の答も亦末に走つたのである。たとへて云へば、市場を管理する役人が、市場の監督者に向つて豕の肥えて居るか居ないかを尋ねた場合に、その監督者が豕の體を脚で蹈み付けて答へたとすると、臀とか脚とか、卑しい部分になればなる程よく

不知其所至。去不來、不知其所止。吾已往來焉、而不知其所終。彷徨乎馮閎、大知入焉而不知其所窮。物物者、與物無際。而物有際者、所謂物際者也。不際之際。際之不際者也。謂盈虛衰殺、彼爲盈虛非盈虛、彼爲衰殺非衰殺、彼爲本末非本末、彼爲積散非積散也。

訓讀 東郭子、莊子に問うて曰く、所謂道は惡にか在ると。莊子曰く。在らざる所なしと。東郭子曰く、期して後、可なりと。莊子曰く、螻蟻に在りと。曰く、何ぞ其れ下れるやと。曰く、稊稗に在りと。曰く、何ぞ其れ愈〻下れるやと。曰く、瓦甓に在りと。曰く、何ぞ其れ愈〻甚しきやと。曰く、屎溺に在りと。東郭子應へず。莊子曰く、夫子の問や、固より質に及ばず。正獲の監市に豨を履むを問ふや、下る每に愈〻況ふ。汝唯〻必とすること莫れ、物を逃るゝことなかれ。至道は是の若し、大言も亦然り、周、徧、咸の三者は、名を異にして實を同じうす、其の指一なり。嘗みに相與に無何有の宮に遊び、同合して終窮する所なきを論ぜんか。嘗みに相與に無爲ならんか。澹にして靜ならんか、漠にして淸ならんか、調にして閒ならんか。寥たるのみ吾が志。往くこと無くして、其の至る所を知らず。去つて來れども、其の止まる所を知らず。吾れ已に往來して、其の終る所を知らず。憑閎に

なことはしない。口に出して彼此と論ずる者は、未だ眞に到達しないのである。抑〻かの至道は見聞言說を絕したもので、何何に目を正しくして明に視覩はさうとしても値ふことは出來ず、聰慧な辯舌を弄するよりは、沈默を守り、銳敏な耳を傾けて聽くよりは、之を塞いで聞かない方が勝つてをる。人間の智辯感覺を棄て去つて、心神を奔逐することをせず、專ら道の自然に合するのを大得と謂ふのである。」

語釋　不形之形（無形の至道より化して有形の物を生ずること。）○大得（林希逸云ふ「深造なり」と。深く道の祕奧に體達するを云ふ。）○將レ至（道に至らんとするなり。）○値（アフと訓ず、會遇なり。）○見、辯、聞（何れの人の有爲相對的な認識を云ふ。內篇齊物論にも、「大辯は言はず。」と云へり。）

東郭子問於莊子曰、所謂道惡乎在。莊子曰、無所不在。東郭子曰、期而後可。莊子曰、在螻蟻。曰、何其下邪。曰、在稊稗。曰、何其愈下邪。曰、在瓦甓。曰、何其愈甚邪。曰、在屎溺。東郭子不應。莊子曰、夫子之問也、固不及質。正獲之問於監市履豨也、每下愈況。汝唯莫必、無乎逃物。至道若是、大言亦然。周徧咸三者、異名同實。其指一也。嘗相與遊乎無何有之宮、同合而論、無所終窮乎。嘗相與無爲乎。澹而靜乎、漠而淸乎、調而閒乎。寥已吾志。無往焉而

ひ、恰も自分の家に歸るかのやうに考へる。そこで始めて無に大歸することが出來るのである。

語釋 白駒(成疏に云ふ「白駒は駿馬なり。」亦言ふ、日(光線)なり」と。) ○忽然(人生が須らくの間にして忽ち經過するを云ふ。) ○注然、勃然(物の生ずる貌。奚侗云ふ「注然とは水の下きに注ぐが如く。勃然とは苗の勃として興るが如きを謂ふ」と。) ○油然、漻然(漻は音リウ。共に物の死滅する貌。奚侗又云ふ「油は由と同じ、油然とは違忤すること無きの貌。漻は寥と同じ、漻然とは靜寂の貌」と。) ○天弢、天袠(弢は音タウ。弓を容れる嚢。袠は音チツ、衣を容れる嚢。自然の生死に執着してその爲に束縛せらるるに喩ふ。) ○紛乎宛乎(成疏に云ふ「紛綸宛轉なり、並びに釋散の貌」と。) ○魂魄將往、乃身從之(魂魄は精神なり。人の死するや、魂魄は天に往き、骨肉は土に歸す。) ○大歸(本源の無に復歸すること。死を云ふ。)

不形之形、形之不形、是人之所同知也。非將至之所務也、此衆人之所同論也、彼至則不論、論則不至。明見無値、辯不若默、道不可聞、聞不若塞、此謂大得。

訓讀 不形の形、形の不形は、是れ人の同じく知る所なり。將に至らんとするの務むる所にあらず、此れ衆人の同じく論ずる所なり、彼れ至れば則ち論ぜず、論ずれば則ち至らず。明かに見れば値ふこと無し、辯するは默するに若かず、道は聞くべからず、聞くは塞ぐに若かず、此を之れ大得と謂ふと。

通釋 無形の無から有形の物を生じ、有形の物は無形の無に還るといふことは、一般の人が誰も知つて居る卑近なことで、道に至らんとする達人の務める所ではない。又これは衆人が皆論議する所であるが、道に至る者はそん

り。）○奚足以爲堯桀之是非（壽夭の差別ありとするも同じく百年の人生である。道より見れば云ふに足らざる須臾の人生の中に、何を苦しんでか喋々是非善惡の別を論ずる必要があらう。宜しく絶對の境涯に反るべきである。）○果蓏（桃李の如く樹に生る實を果と云ひ、瓜弧の如く地に生る實を蓏と云ふ。）○齒（次第、秩序を云ふ。）○遇之而不違（郭象云ふ「遇ふ所に順ふなり」と。之とは外境を指す。）○調而應之德也云云（成疏に云ふ「庶物を調和し、順つて之に應ずるは上德なり。前境に偶對し、機に逗ひ物に應ずるは聖道なり」と。）

人生天地之閒、若白駒過郤、忽然而已。注然勃然莫不出焉、油然漻然莫不入焉。已化而生、又化而死。生物哀之、人類悲之。解其天弢、墮其天袠、紛乎宛乎、魂魄將往、乃身從之、乃大歸乎。

訓讀 人の天地の閒に生まるゝ、白駒の郤を過ぐるが若く、忽然たるのみ。注然勃然として、焉に出でざることなく、油然漻然として、焉に入らざることなし。已に化して生じ、又化して死す。生物之を哀しみ、人類之を悲しむ。其の天弢を解き、其の天袠を墮て、紛乎宛乎、魂魄將に往かんとして、乃ち身之に從ふ、乃ち大歸か。

通釋 さて人が天地の閒に生を享けて居る閒は、恰も駿馬が物の隙閒を馳り過ぎるやうに、倏忽の閒に過ぎ去つてしまふ。或は注然勃然として生じ、或は油然漻然として滅び、生死の變化は反覆循環して窮まる所を知らぬ。然るに生物はその死を哀しみ、人間も亦之を悲しむが、これは生死の繫縛から未だ脫することが出來ないものである。此の束縛から脫却して、宛轉として化に順つて心を用ひて、魂魄が將に去らうとすれば、骨肉が之と共に從

訓讀　中國に人あり、陰にあらず陽にあらず、天地の閒に處る。直に且らく人と爲るも、將に宗に反らんとす。本より之を觀れば、生は喑醷の物なり、壽夭ありと雖も、相去ること幾何ぞ。須臾の說なり。奚ぞ以て堯桀の是非を爲すに足らんや。果蓏にも理あり。人倫、難しと雖も、相齒する所以なり。聖人之に遭ひて違はず、之を過ぎて守らず、調へて之に應ずるは德なり、偶ひて之に應ずるは道なり。帝の興る所、王の起る所なり。

通釋　こゝに一人の聖人がある。その人は陰陽を超越し、生死を忘却して、姑く人の相を假りて天地の閒に居るが、今や將に事物を生じない前の根本の初に反らうとするのである。此の萬物の根本である立場から觀れば、生といふのも唯ゞ夫は氣の聚つたもので、一時の現象に過ぎない、やがては宗本に反るものである。たとへその閒に壽命の長短があつたとしても、果して幾干の差があるのか。無量の大年から觀れば畢竟刹那の爭に過ぎない、此の須臾の人の世に、何とて堯を聖帝とし、桀を惡王とするといふやうな、區々たる是非の論議に拘つて居る必要があらう。草や木の實のやうな、どんなに微細な物にでも、自然に從つて存在する以上、皆夫ゞ然るべき理があるやうに、人類の社會には亦人の道がある。たゞ人には精神の活動があるので煩雜ではあるけれども、人閒生活の秩序を立てるもので、當然免れることの出來ないものである。それで悟道の聖人はその遭ふ所のものに順つて逆はず、その過ぎ去るものに任せて強て守らず、去就送迎する事物に應接して、よく虛心に和合するのであるが、それは卽ち至上の道德であり、そして亦帝王の興起する所以である。

語釋　中國有レ人焉（又云ふ「中國に人有りとは聖人を謂ふなり」と。中國とは中華と同じく支那本土九州を云ふ。）○宗（萬物未生以前の根本なり。）○喑醷（音インアイ。郭象云ふ「聚氣なり」と。人生は氣の聚合なりと云ふな

して山の如く高大に、終るかと思へば忽ち復た始まり、萬物を運載して各〻之を載量しながらも、自らの計らひを雜へずして乏しくないといふのは、是こそ君子の道とする所であるが、それに決して遠く外に在るものではなく、近く己の内に在るものである。一切萬物が皆往つて之に資り、萬物をして萬物たらしめながら、而も自らは常に缺けることを知らないといふのは即ちかの道であらう。

語釋 博之不ニ必知一（人間の博學な知識必ずしも道の立場より觀たる知者ではなく、以て道を知るには足らぬ。老子第八十一章の「善なる者は辯ぜず、辯ずる者は善ならず、知る者は博からず、博き者は知らず。」と同じ意なり。）○聖人以斷レ之矣（之とは小智の小辯を云ふ老子も亦「聖を絶ち智を棄つれば、民の利百倍す。」（第十九章と云へり。））○益レ之而不レ加レ益云云（成疏に云ふ「博智辯譽も其の明を益さず、沈默面牆も其の損を加へず、所謂る增さず減らず、損無く益無きものは聖人の妙體なり。故に保つて之を愛す」と。）○淵々（深き貌。）○巍々（高大の貌。）○運ニ量萬物一而不レ匱（運量とは運用度量するなり。郭象云ふ「物を用ひて己を役せず、故に匱しからざるなり」と。）○萬物皆往資焉而不レ匱（莊子因に云ふ「運量するに無心にして、萬物皆往きて、資りて始まり資りて生じて、終窮有ることなし。方に道の至極たり」と。）

中國有レ人焉、非レ陰非レ陽、處ニ於天地之閒一。直且爲レ人、將レ反ニ於宗一。自レ本觀レ之、生者喑醷物也、雖レ有ニ壽夭一、相去幾何。須臾之說也。奚足ニ以爲ニ堯桀之是非一。果蓏有レ理。人倫雖レ難、所ニ以相齒一。聖人遭レ之而不レ違、過レ之而不レ守。調而應レ之德也。偶而應レ之道也。帝之所レ興、王之所レ起也。

ず。」とあるを參照すべし。）

且夫博之不必知、辯之不必慧、聖人以斷之矣。若夫益之而不加益、損之而不加損者、聖人之所保也。淵淵乎其若海、巍巍乎其終則復始也。運量萬物而不匱、則君子之道。彼其外與。萬物皆往資焉而不匱、此其道與。

訓讀　且夫れ博の必ずしも知ならず、辯の必ずしも慧ならざる。聖人以に之を斷てり。若し夫れ之を益して益を加へず、之を損して損を加へざるものは、聖人の保つ所なり。淵淵乎として其れ海の若く、巍巍乎として、其れ終れば則ち復た始まるなり。萬物を運量して匱しからざるは、則ち君子の道なり。彼は其れ外ならんや。萬物皆往いて資つて匱きず、此れ其れ道か。

通釋　さて又かの道の限り無く廣大なことは、人閒のどんなに該博な知識でも之を知り盡すことが出來ないし、どんなに聰慧な辯舌でも之を說明する役には立たない。であるから道を悟つた聖人は、智慧や辯舌などは棄てゝしまつて、そんなものに賴らうとはせず唯ゞ自然に任すだけである。如何に博學知辯であらうとも、其の爲に明を益すでもなく、如何に沈默無言を守らうとも、其の爲に明を損ふものでもなく、損益增減を超越して、外境の事物に依つて眞我を動かされないといふのは、正に悟道の人の保有する境地である。淵々として海の如く深遠に、巍々と

るが、その生れて來る時も何處から出て來たかといふ迹方もなく、又その死んで往く時にも何處に止るのか際限が解らぬ。出入する門もなく、住り宿る房もなく、廣大な道路のやうに四達自在であつて、限定することは出來ない。この靈妙な至道に順つて自然に合する者は、肢體も健かに思慮も滯らず、耳目も曇らない。心を用ひても、無心であるから勞れず、物に接つても、巧まないから何方へ向いても無礙自在である。此の道は此の上無く尊いもので、天も之を得なければ高くなれず、地も之を得なければ廣くなれず、日月も其の力を待たなければ運行することが出來ず、萬物も之に賴らなければ昌えることが出來ない。此等はすべて道の功用である。

語釋 晏閒（閑暇なること。） ○疏瀹（音ソヤク。成疏に云ふ、「猶ほ洒濯のごとし」と。） ○澡雪（又云ふ「猶ほ精潔のごとし」と。洗ひ淸むること。） ○掊擊（掊は音ホウ、ウツと訓ず。打破すること。） ○窅然（窅は音エウ、フカシと訓ず。深遠の貌。） ○崖略（成疏に云ふ「崖は分なり」と、林西仲云ふ、「崖は邊際なり」と。大凡、大略の意なり。） ○昭々生二於冥々一（昭々は形質を具へて明白に見得るもの。冥々は無形にして測知し難き造化を云ふ。） ○有倫（倫は類なり。分別し得べき百般の物なり。） ○精神生二於道一（精神は成疏に云ふ「情智神識の心」と。人の靈心は玄妙の道に根ざすを云ふ。） ○形本生二於精一（宣穎云ふ「本は質幹なり」と。形體は男女兩性の精氣が和合することに依つて生ずるなり。） ○九竅（竅は音ケウ、空なり、孔なり。耳目鼻口兩陰を云ふ。九穴を具へたるものとは卽ち人類及び獸類を指す。） ○八竅（魚獸蟲等の類を云ふ。） ○胎生、卵生（胎生とは母體の胎內にて生長したる後に生るゝを云ひ、卵生とは卵子の儘母體の外に出づるを云ふ。佛家に於ては四生と云ひ、生物の發生を胎、卵、濕、化の四種に分類せり。） ○其來無レ迹（迹とは形有りて見るべきものゝ意、形迹、迹方なり。何處より生じ來れるかといふ迹方の無きを云ふ。） ○其往無レ崖（往は死に往くこと。崖は崖際なり。林希逸云ふ。「造化の閒。去る者、來る者、地の尋逐すべき無し」と。） ○無レ門無レ房（門は出入する所、房は止住する所、造化の出づる所、歸する所の知るべからざるに喩ふ。） ○四達之皇々也（四達は四路の四方に通ずること。皇々は廣大の貌。死生の去來に任せたるを云ふなり。） ○邀（兪樾云ふ「說文に邀字無し。彳の部に、徼は順なり、卽ち今の邀字なり」と。シタガフと訓ず。成玄英は、遇なりと云へども從はず。） ○恂達（恂は通なり。通達して礙滯せざるなり。） ○用レ心不レ勞（無心の心は用ひても勞せず、自然に順ふを云ふ。） ○應レ物無レ方（應は應接すること。方は成疏に方所と云ふ。林希逸又云ふ「無方とは不定なり」と。萬境に應じて機に臨んで融通自在なるなり。） ○天不レ得不レ高云云（得は道を得るなり。天地日月より、下萬物に至る迄、皆道を待つて各々その自性を得るを云ふ。老子の第三十九章に、「天一を得て以て淸く、地一を得て以て寧く、神一を得て以て靈に、谷一を得て以て盈ち、萬物一を得て以て生

るや方なし。天得ざれば高からず、地得ざれば廣からず。日月得ざれば行かず、萬物得ざれば昌えず、此れ其れ道か。

【大意】孔子が老子に至道を問ふことを敍し、先づ、萬物は凡て自然に生ずれども卵生胎生相易ふべからざることを說き、次に、物の生死の迹を尋ぬべからざるに就て至道の大なることを述べ、次に、天地自然の道を以て物の本根となす所以、次に、人身の上に觀取せられる至道の奇迹、次に、果蓏と人類とを對照して帝王の政治の無爲なること、次に、人類の生死は常無く、唯ゝ眞に道を得たる者のみ能く眞性に反ること、最後に、至道を求めんとする者は、宜しく辯論を棄て、多聞を棄てゝ、靜默して達すべきこと等を說く。五節に分つて解說す。

【通釋】孔子が或る時老子に向つて道を問うて曰ふには「今日は閑ですから、あの至極の道に就いて詳しく承りたいと思ひます。」そこで老子は諄々として說明した。「お前があの究竟の道を知らうとするならば、先づ思慮意念を愼んで心身を淸淨にし、精神を洗ひ潔め、普惠分別を打ち破つてしまはねばならぬ。抑ゝ道は深遠玄妙なもので、到底言葉に依つて云ひ表すことの出來るものではないが、お前の爲にその大體の所を語つて聞かせよう。さて、昭々として明かに見ることの出來るものは、本來測り知ることの出來ない冥々の裡から生じ、形質を具へた一切の物は、無形の自然から生じ、人の精神は本源の道から生じ、その形體は男女兩性の精氣が交はることに依つて生じ、斯くして一切の物は形を具へて相生ずる。而して九竅を有する人獸の類は胎生し、魚鳥の如く八竅のものは卵生するが、それは自然に然う定められてをるので、之を易へることは出來ない。斯樣にして宇宙の閒には無限に物を生ず

孔子問於老聃曰、今日晏閒、敢問至道。老聃曰、汝齋戒。疏瀹而心、澡雪而精神、掊擊而知。夫道窅然難言哉。將爲汝言其崖略。夫昭昭生於冥冥、有倫生於無形、精神生於道。形本生於精、而萬物以形相生。故九竅者胎生、八竅者卵生。其來無迹、其往無崖。無門無房、四達之皇皇也。邀於此者、四肢彊、思慮恂達、耳目聰明。其用心不勞、其應物無方。天不得不高、地不得不廣。日月不得不行、萬物不得不昌。此其道與。

訓讀　孔子、老聃に問うて曰く、今日晏閒なり。敢へて至道を問ふと。老聃曰く、汝齋戒して而の心を疏瀹し、而の精神を澡雪し、而の知を掊擊せよ。夫れ道は窅然として言ひ難きかな。將に汝が爲めに其の崖略を言はんとす。夫れ昭昭は冥冥に生じ、有倫は無形に生じ、精神は道に生ず。形の本は精に生じて、萬物、形を以て相生ず。故に九竅なるものは胎生し、八竅なるものは卵生す。其の來るや迹なく、其の往くや崖なし。門なく房なく、四達して皇皇たり。此に邀ふものは四肢彊く、思慮恂達にして耳目聰明なり。其の心を用ふるや勞せず、其の物に應ず

「汝の身でさへも實は汝のものではないのに、どうしてあの道を有つなどゝ云ふことが出來ようか」と答へた。舜が重ねて「我々の身體が果して我々の有するものでないとするならば、一體誰が之を有するのか」と尋ねると、丞が答へて曰ふには「それは天地陰陽の氣が聚積して、假に汝の身體を形成して居るに過ぎない。從つて汝の生存といふことも汝の有するものではなく、陰陽の二氣が相和して生じたものであり、汝の性命も亦汝のものではなくて、天地自然の理に循つて賦與せられたものである。又人間の生涯は父が死ねば子が代り、子が死ねば孫が繼ぐといふ樣に、代々相禪るのであるが、それも云はゞ蟬が殼を脫けるのと同じことで、子と云ひ、孫と云ふのも汝のものではなくて、自然に造られた蟬脫のやうなものである。かくて人は生ける限り不斷に行住飮食をつゞけてゆくものであるが、果して誰が何處へ往くのか、誰が何を持つて居るのか、誰が如何なる味を味つて居るのか到底知ることは出來ない。それは皆自ら爲るのではなくて、別に爲さしめるものがあるので、それは卽ち天地健動の氣に他ならぬ。汝の一身を擧げて、皆汝のものでないのに、何うしてあの道に執着して、之を汝の身內に私有することが出來ようか。」

語釋　丞（成疏に云ふ「古の得道の人、舜の師なり」と。一說に云ふ「官名なり」と。）　○道可㆓得而有㆒乎（萬物を生成する虛通の道を吾が身の內にも有つことが出來ようか、と問ふなり。）　○天地之委形（委は兪樾云ふ「司馬云ふ、委は積なりと、義に於て未だ合せず。國策の高注に、委は付なりと云ひ、左傳（成公二年）の杜注に、委は屬なりと云ふ。天地の委形とは、天地の付屬せる所の形を謂ふなり。下の三の委の字、並びに同じ」。委とは付屬、賦與の意なり。）　○蛻（音ゼイ。凡そ蟲類の脫した皮を皆蛻と云ふ。ヌケガラなり。）　行不レ知レ所レ往云云（王先謙云ふ「一生の中、行けば則ち往くことあれども、究に往く所を知らず、處れば則ち持することあれども、究に持する所を知らず、食へば味ふことあれども、究に味ふ所を知らず。皆自然に然るを云ふ。）　○彊陽氣（林西仲云ふ「彊陽とは即ち健動の義、天地之を以て物を生ずるものなり」と。）

舜問乎丞曰、道可得而有乎。曰、汝身非汝有也。汝何得有夫道。舜曰、吾身非吾有也、孰有之哉。曰、是天地之委形也。生非汝有、是天地之委和也。性命非汝有、是天地之委順也。孫子非汝有。是天地之委蛻也。故行不知所往、處不知所持、食不知所味。天地之彊陽氣也。又胡可得而有邪。

訓讀 舜、丞に問うて曰く、道得て有すべきかと。曰く、汝の身すら、汝の有にあらざるなり。汝何ぞ夫の道を有するを得んと。舜曰く、吾が身、吾が有にあらずんば、孰れか之を有するやと。曰く、是れ天地の委形なり。生、汝の有にあらず、是れ天地の委和なり。性命、汝の有にあらず、是れ天地の委順なり。孫子、汝の有にあらず。是れ天地の委蛻なり。故に行いて往く所を知らず。處つて持する所を知らず。食うて味ふ所を知らず。天地の彊陽氣なり。又胡ぞ得て、有すべけんやと。

大意 この章は、舜が丞に道を問ふに就て、我が身も我が有に非ざるが故に、此の身に貪着して有とするは妄である。況んや道に於ては猶ほ然るべきことを說く。

通釋 舜が或時丞といふ人に向つて「道は我々の身の内に有することが出來るであらうか」と尋ねると、丞は

被衣大に說び、行歌して之を去つて曰く、形は槁骸の若く、心は死灰の若し。眞にして其れ實に知れり、故を以て自ら持せず。媒媒晦晦、無心にして與に謀るべからず。彼れ何人ぞやと。

大意 此の一節は、齧缺と被衣と兩個の知道の至人が、相與に道を語るの說話に藉りて、人をして悟る所あらしめんとす。

通釋 齧缺が被衣に道を問うた時に、被衣は答へて云つた。「齧缺よ、お前の形容を端正にし、お前の視線を專一にして、妄に動き妄に視ることを止めよ。然うすれば自然の和氣がお前の身の內に溢れるであらう。又お前の知慮を棄てお前の意度を一つにして、妄に心を勞することを止めよ。然うすればお前の心は虛靜になつて、精神が自ら來つて舍るであらう。そして玄妙の德がお前の身を潤して美しくし、無極の道がお前の心の中に住ふやうになるであらう。お前はあの生れたばかりの犢のやうに、虛心坦懷に物を視て、『何故』とか『如何にして』などゝ追求することを止めよ。」その言葉が未だ終るか終らない中に、齧缺は何時の間にか居睡をして居たので、被衣はそれを見て非常に悅んで、歌を歌ひながら立ち去つた。その歌は「姿は枯れた木のやうに、心は灰にも似て居る。眞實の理を知り乍ら、光をつゝみ知慧を忘れて、與に謀ることは出來ぬ。さても彼は何者であらう」と云ふのであつた。

語釋 天和(天とは自然を云ふ。) ○攝(收攝するなり。ヲサムと訓ず。) ○神將ニ來舍ニ(內篇人間世に見ゆ。) ○瞳焉(成疏に云ふ「無知直視の貌」と。) ○新生之犢(無知無心なるに引ける喩ふなり。老子の所謂嬰兒と併せ看るべし。) ○槁骸(枯れたる木。) ○死灰(冷えたる灰。) ○不ニ以レ故自持ニ(成疏に云ふ「自ら事故に矜持せざるなり」と。) ○媒々晦々(媒は音マイ、昧と同じ、晦々と同じくクラキ貌。) ○無心而不レ可ニ與謀ニ(成疏に云ふ「媒々晦々として照を息め明を遺れ、心を忘れ知を忘れて、謀議すべからず、凡の識る所に非ず。故に彼何人ぞやと云ふなり」と。)

レ作（成疏に云ふ「夫れ聖人は兩儀の覆載に合し、萬物の生成に同ず。是の故に口に言ふ所無く、心に作す所無し」と。）〇觀ニ於天地ニ（天地の覆載に就て深い觀察を加へその德に合するを云ふ。）〇彼神明至精與ニ彼百化物ニ（上の彼は道を指し、下の彼は萬物を指す。神明は神聖明靈な道の作らきを形容する語。）〇已死生方圓、莫レ知ニ其根ー也（宇宙萬有の生滅の變化、方圓の形相、何れも皆自然の德の相であり、而もそれらをして然らしめる所以の根本的主宰者の何物であるかを知ることは出來ない。）〇扁然（徧生の貌。萬物が生成して宇宙の間に充滿せるを云ふ。）〇六合（天地四方、全宇宙を云ふ。）〇內（至道の內を云ふ。）〇秋毫（秋の頃脫け代った獸の毛の如く、微小なる物。道は宇宙の大より微塵の末に至るまで、隨處に遍滿するを云ふ。）〇沈浮（消長、屈伸と同じ。）〇不レ故（故は舊物となること。不故とは日に新なるを云ふ。）〇惛然（音コン、又はビン。昏くして明かならざること。道が無きに似て有るを云ふ。）〇油然（無心なる貌。經典釋文には「給惜する所無きなり。」と云ひ、又林希逸は「生意なり。」とも云へり。）〇畜而不レ知（畜は音キク。養なり。萬物は物によって生育せられながら。而も自らはそれを知らざるなり。）

齧缺問ニ道ヲ乎被衣ニ。被衣曰ク、若正ニシクシ汝ノ形ヲ、一ニセヨ汝ノ視ヲ。天和將レ至ラント。攝シ汝ノ知ヲ、一ニセヨ汝ノ度ヲ。神將ニ來リ舍ラント。德將レ爲ラント汝ノ美ト、道將レ爲ラント汝ノ居ト。汝瞳焉トシテ如ニ新生之犢ノ、而無レ求ムルコト其ノ故ヲ。言未ダレ卒ラ、齧缺睡寐ス。被衣大ニ說ビ、行歌シテ而去ツテ之ヲ曰ク、形若ニ槁骸ノ、心若ニ死灰ノ、眞ニシテ其ノ實知レリ、不ニ以レ故ヲ自ラ持セ。媒媒晦晦、無心ニシテ而不レ可カラニ與ニ謀ル。彼何人ゾ哉。

【訓讀】齧缺、道を被衣に問ふ。被衣曰く、若、汝の形を正しくし、汝の視を一にせよ、天和、將に至らんとす。汝の知を攝し、汝の度を一にせよ。神將に來り舍らんとす。德、將に汝の美と爲らんとす、道、將に汝の居と爲らんとす。汝瞳焉として新生の犢の如かれ、而して其の故を求むることなかれと。言未だ卒らざるに、齧缺睡寐す。

敍べたことはなく、四時は一定の明法があつて代る〴〵消長するけれども、未だ嘗て評讃をしたことはなく、又萬物は生成の理があつて常に生滅するけれども、未だ嘗て說明を試みたことはない。至聖の達人は能くこの天地の美を溯原し、萬物の理に通達して居るから、自然に任せて作爲を弄しない。是れこそ卽ち天地を洞觀してその德に冥合するの謂である。今惟ふに、かの神靈精妙な道は、一切萬物を生じて、その聚散變化に隨つて遷移するものである。死に往くものは、自ら死に、生れ來るものは自ら生れ、圓いものは自ら圓く、四角なものは自ら四角であるので。誰かそれらのものをして然らしめる所以の根本を知るものがあらう。そして又萬物は扁然として宇宙に充ち滿ちて、千古以來常に其の通りであるが、それは自然の道に順ふ爲である。あの無限に大きな宇宙でさへも、道の內を離れて在るものではなく、又小さな細い卯の毛でも、矢張道があつて始めて其の體を爲すことが出來るので、斯くして一切萬物は浮沈昇降して常に變化して、日夜に新なものになつて行き、陰陽四時も運行して熄まず、各〻其の次第に從つて屈伸するが、此等は皆道によつて然うなるのである。而も道そのものは昧然として無いやうに見えて嚴然として有り、油然として無心で、形象を示さないけれども神通自在であり、又萬物は此の道に養はれて居りながら而もその然る所以に氣が附かぬ。此の道こそ所謂宇宙萬有の根本であり、此の道理に達する者であつて始めて眞に自然の至道を觀ることが出來るのである。

語釋　大美（成疏に云ふ「夫れ二儀の覆載は其の功最も美はし」と。最も歎美すべき大功といふ意。）　○不言（天地は美はしき覆載の大功があり乍ら、自らは一言もそれを言はない。）　○四時有二明法一而不レ議（四時の変代することは一定の明らかな法則に從って行はれるものであるけれども、自らは未だ嘗てそれに就て評議しない。此の數句は論語に孔子の云へる「天何をか言はんや、四時行はれ、百物生ず云云」。（陽貨）と軌を同じうするものである。）　○至人無レ爲、大聖不

彼神明至精、與彼百化、物已死生方圓、莫知其根也。扁然而萬物。自古以固存。六合爲巨、未離其內。秋毫爲小、待之成體。天下莫不沈浮、終身不故。陰陽四時運行、各得其序。惛然若亡而存、油然不形而神。萬物畜而不知。此之謂本根。可以觀於天矣。

訓讀 天地、大美あれども言はず、四時、明法あれども議せず、萬物、成理あれども說かず。聖人なる者は、天地の美に原づいて、萬物の理に達す。是の故に至人は爲すことなく、大聖は作さずと、天地に觀るの謂ひなり。今、彼の神明至精、彼の百化の物と、已に死生方圓にして、其の根を知ること莫きなり。扁然として萬物古より以て固より存す。六合、巨たれども、未だ其の內を離れず。秋毫、小たれども、之を待つて體を成す。天下沈浮せざること莫くして、終身故ならず。陰陽四時運行して各〻其の序を得。惛然として、亡きが若くにして存し、油然として、形せずして神なり。萬物畜はれて知らず、此を之れ本根と謂ふ。以て天を觀るべし。

大意 上文の根に歸るとあるを承けて、萬物死生の理を論じて、終に本源に歸することを說く。

通釋 天地は覆載の大功を具へ、無爲にして能く萬物の生を遂げしめるけれども、未だ嘗て言を發して其の功を

中ごろ、告げんと欲して、之を忘れたるなり。今、予、若に問ふに、若、之を知れり、奚の故にか近からざると。黄帝曰く、彼は其れ眞に是なり、其の知らざるを以てなり。此は其れ之に似たり、其の之を忘れたるを以てなり。予と若と、終に近からず、其の之を知れるを以てなりと。狂屈之を聞いて、黄帝を以て知言と爲す。

通釋　以上の敎を聞いて知が黄帝に向つて曰ふには「俺が無爲謂に尋ねた時に、彼は答へなかつたが、それは答へないのではなくて、何う答へてよいか解らなかつたのである。次に狂屈に尋ねたが、彼は何か云はうとしたが、中途で言を斷つてしまつた。彼は云はないのではなくて、云はうとしたけれども忘れてしまつたのである。然るに今君に尋ねると、君はよく之を知つて居た。それを何故却つて道に近くないといふのか」と。そこで黄帝は「あの無爲謂こそ眞に道を知る者だといふのは、彼が無知の知といふ道の眞髓を得て居るからである。又狂屈が道に近いといつたのは、彼がまだ道の眞諦を得て居らず、言葉を以て說明しようとしたが、中途で說明すべき言葉を忘れたからであり、更に俺と君とが結局道に近くないといふのは、色々と智惠や理屈を弄んで、言葉の末に拘はれて、眞の道には遠く及ばないからである」と答へた。此の言葉を聞いて、知はなるほど眞理を道破した言葉であると思つた。

天地有大美而不言、四時有明法而不議、萬物有成理而不說。聖人者、原天地之美、而達萬物之理。是故至人無爲大聖不作、觀於天地之謂也。今

る者は之を生ずのみ。夫れ禮は往來を尙び、更に相浮僞し、華藻德を亂る。眞實に非ざるなり」と。）　○失ㇾ道而後德云云（老子第三十八章に「道を失ひて後に德あり。德を失ひて後に仁あり。仁を失ひて後に義あり。義を失ひて後に禮あり、夫れ禮は忠信の薄にして亂の首なり云云」とあり。又同第十八章に「大道廢れて仁義あり、智慧出でゝ大僞あり」と見ゆ。）　○爲ㇾ道者日損（損とは華僞を損減するを云ふ。老子第四十八章にも、學を爲せば日に益し、道を爲せば日に損す。之を損して又損し、以て爲すこと無きに至る」とあり。）　○欲ㇾ復ㇾ歸ㇾ根（又老子第十六章に「夫れ物の芸芸たる各々其の根に歸る。根に歸るを靜と曰ひ、靜を命に復ると曰ひ、命に復るを常と曰ひ、常を知るを明と云ふ」とあり。又、無物に復歸す、（第十四章）、嬰兒に復歸す（第二十八章）、無極に復歸す、（同上）などゝなるを參照すべし。）　○死之徒（徒は黨なり。同類の意。此の語は老子第五十章に出づ。）　○紀（紀綱なり、大本たる主宰者を云ふ。）　○人之生氣之聚也（生死を氣の聚散に依る現象とするは、佛家が地水火風の四大（四元素）の假合を以て說くのと相似たるものあり。）　○死生爲ㇾ徒（死と生とが同類の現象たることを悟る、即ち死生一如と觀ずるなり。）　○臭腐復化爲神奇（美醜は本來定め無きものである。昨日の美は今日の醜となり、我の醜とする所は他の美とする所である。人は斯かる相對的差別に執着すべきではない。）

知謂黃帝曰、吾問無爲謂、無爲謂不應我、非不我應、不知應我也。吾問狂屈、狂屈中欲告我而不我告。非不我告、中欲告而忘之也。今予問乎若、若知之、奚故不近。黃帝曰、彼其眞是也、以其不知也。此其似之也、以其忘之也。予與若終不近也、以其知之也。狂屈聞之、以黃帝爲知言。

訓讀　知、黃帝に謂つて曰く、吾れ無爲謂に問ふに、無爲謂、我に應へず、我に應へざるにあらず、我に應ふるを知らざるなり。吾れ狂屈に問ふに、狂屈、中ごろ、我に告げんと欲して、我に告げず、我に告げざるにあらず、

に滅じこれを繰返し繰返しして遂に全く人爲を離れ、是に始めて自然の大道に順つて、飜つて無限の大活動をすることゝなる』と云ふ訓があるのだ。今や世を擧げて皆本來の無名の樸を散じて、彫琢の跡を存して器物となつて居る。それでは萬物の根本たる無極の道に復び歸らうとしても容易に出來ることではない。唯大聖人だけは人爲を棄てゝ仁義禮などに拘るものではないから夫が容易に出來るのだ。さて又人の最も迷ひ易いのは生死の問題であるが、生と死とは決して類を異にする現象ではなく、死は卽ち生の第一歩である。斯くして死生始終は無限に反覆して窮りないものであるが、何者に依つて主宰されて居るかは些しも解らぬ。唯謂はゞ、人が生れると云ふのは氣が聚つたのであつて、氣が聚れば生となり、その聚つた氣が散れば死となるとでも云はうか。既に生死が氣の聚散に依つて起る同じ種類の現象に過ぎないことを知つて、死生一如であると悟つた以上は、何もその爲に心を苦しめる所はない。從つて萬物を通じて其の理に變りのあらう筈はない。然るに人は物の美醜を差別して、春、花が爛漫と咲き亂れて美しければ之を神奇と考へ、秋、葉が落寞と散り敷けば之を臭腐と感ずる。けれども臭腐は復た變じて神奇となり、神奇は復た化して臭腐となつてしまふ。故に古語にも『天下の萬物は凡て一氣の展開である』と云つてある。至道を體得した聖人は此の理を悟つて居るから、死生禍福を分別せず、自然に任せて專ら一を貴ぶのである。」

語釋　知者不レ言、言者不レ知(老子第五十六章に出づ。)　○行二不言敎一(老子第二章に「聖人は無爲の事に處り、不言の敎を行ふ」とあり。)　○道不レ可レ致(致は得なり。至道は言辭を以て得べからず、自然に任すに在るを云ふ。)　○仁可レ爲也、義可レ虧也、禮相僞也(成疏に云ふ「夫れ至仁は親無し。而るに今偏愛の仁を行ふ者は、適々有爲たるべきのみ。夫れ裁非斷割するは、適々虧殘すべし。大全に非ざるなり。大全な

若し死生、徒たらば、吾れ又何をか患へん。故に萬物は一なり。是れ其の美とする所のものは神奇たり。其の惡む所のものは臭腐たり。臭腐復た化して神奇たり。神奇復た化して臭腐たり。故に曰く、天下を通じて一氣のみと。聖人故に一を貴ぶと。

通釋 知は又もや尋ねることが出來ないで帝宮に反り、黄帝に見えて先の問を發すると、黄帝は「思無く慮なく始めて道を知り、處無く服無くして始めて道に安んじ、從ふ所なく道る所無くして始めて道を得ることが出來る。此等のものを凡て棄てゝしまつた時に始めて眞の道は顯はれて來るであらう」と答へた。すると知が更に黄帝に向つて「これで俺と君とはもはや道を知つた譯であるが、あの無爲謂と狂屈とは知らなかつた。一體どちらが正しいのだらう」と尋ねると、黄帝が答へて曰ふには「あの無爲謂こそ眞に正しい道を知つて居る者だ。狂屈は稍ゝそれに近いものではあるが、俺と君とはとても遠く及ばないものだ。思ふに、本當に道を知つて居る者は言葉を出さず、彼此と口に出す者は眞實の理を知らないものだ。それ故に聖人は不言の教を行ふのである。抑ゝ至道は自然であつて、言葉に依つて窮められるものではなく、至徳もまた自然であつて、形迹に依つて求められるものではない。世上の所謂仁は博愛に務めんとして有爲に陷り、義は正邪を分別しようとする所に虧損を生じ、又禮は表面の形式に流れて虛僞に墮する。斯樣なものは何れも至徳を亂るものである。故に『道が失はれて後始めて徳が生じ、徳が失はれて後始めて仁が生じ、更に仁を失つて後義が生じ、義が失はれて後始めて禮が生ずる。禮とは道の實なき空ろな華であり、凡ゆる虛僞の源となつて世を亂す始である』と云ひ、又『道を修める者は、上べの華僞を日に日

之徒、死也生之始、孰知其紀。人之生、氣之聚也。聚則爲生、散則爲死。若死生爲徒、吾又何患。故萬物一也。是其所美者爲神奇。其所惡者爲臭腐。臭腐復化爲神奇。神奇復化爲臭腐。故曰、通天下一氣耳。聖人故貴一。

訓讀　知問ふことを得ず。帝宮に反り。黃帝に見えて問ふ。黃帝曰く、思ふことなく、慮ることなくして、始めて道を知り、處ることなく、服することなくして始めて道に安んじ、從ることなく、道ることなくして始めて道を得んと。知、黃帝に問うて曰く、我と若とは之を知り、彼と彼とは知らざるなり。其れ孰れか是なるやと。黃帝曰く、彼の無爲謂は眞に是なり、狂屈は之に似たり。我と汝とは終に近からざるなり。夫れ知るものは言はず、言ふものは知らず、故に聖人不言の敎を行へり。道は致すべからず、德は至るべからず、仁は爲すべきなり、義は虧くべきなり、禮は相僞るなり。故に曰く、道を失うて而して後、德あり。德を失うて而して後、仁あり。仁を失うて而して後、義あり。義を失うて而して後、禮あり。禮なるものは道の華にして亂の首なりと。故に曰く、道を爲むる者は日に損す、之を損して又之を損し、以て爲すこと無きに至る、爲すこと無くして爲さざること無しと。今已に物となつて、根に復歸せんと欲するも、亦難からずや、其の易きや。其れ唯ゞ大人のみか。生や死の徒、死や生の始めなり、孰れか其の紀を知らん。人の生は氣の聚りなり。聚まれば則ち生と爲り、散ずれば則ち死となる、

知不得問。反於帝宮、見黄帝而問焉。黄帝曰、無思無慮始知道、無處無服始安道、無從無道始得道。知問黄帝曰、我與若知之、彼與彼不知也。其孰是邪。黄帝曰、彼無爲謂眞是也、狂屈似之。我與汝終不近也。夫知者不言、言者不知、故聖人行不言之教。道不可致、徳不可至、仁可爲也、義可虧也、禮相僞也。故曰、失道而後徳。失徳而後仁。失仁而後義。失義而後禮。禮者道之華而亂之首也。故曰、爲道者日損、損之又損之、以至於無爲。無爲而無不爲也。今已爲物也、欲復歸根、不亦難乎。其易也、其唯大人乎。生也死

語釋 知（知識を表す。成疏に云ふ「此の章、並びに假に姓名を立てゝ言に寓して理を明かにす」と。） ○北（又云ふ「北は是れ幽冥の域」と。逍遙遊冒頭の北冥の鯤を參照すべし。） ○玄水（又云ふ「水又幽昧の方」と） ○隱弅（弅は高く土の盛り上りたる貌。成疏に又云ふ「隱なれば則ち深遠にして知り難く、弅なれば則ち彰然として見るべし。至道の玄絶にして顯晦常無きを明かにせんと欲す。故に此の言に寄せて以て其の義を彰すなり」と。） ○無爲謂（自然の意を托せる寓言的人物の名なり。） ○思、慮（思慮は思考念慮、精粗の別のみ。） ○服（習なり。） ○白水（成疏に云ふ「白は是れ潔素の色、南は是れ顯明の方」と。） ○狐闋（又云ふ、狐は疑似夷猶、闋は空靜無物なりと） ○狂屈（又云ふ「猖狂妄行、掘として槁木の如し。斯の義を表さんと欲す、故に狂屈と曰ふ」と。） ○唉（音アイ、應ずる聲なり。）

ん、何くに從り何くに道らば則ち道を得んと。三たび問へども無爲謂答へざるなり。答へざるに非ず、答を知らざるなり。知、問ふことを得ず、白水の南に反り、孤闋の上に登つて、狂屈を睹たり。知、之の言を以て、狂屈に問ふ。狂屈曰く、唉、予之を知れり、將に若に語らんとすと。中ごろ、言はんと欲して、其の言はんと欲する所を忘る。

大意　知、無爲謂、狂屈三人の假設的人物を借り來り、更に黃帝の說を出して道の秘奧を說き、知る者は言はず、言ふ者は知らざるの意を述べ、有爲の知を棄絕して思慮を省き、生死一如、萬物一氣なることを觀じて、道の本體に參すべきことを論ず。三節に分つて解く。

通釋　知が或る時北の方、玄水の邊に遊び、隱弅の丘に登つて、偶〻無爲謂といふ者に逢つたので、之に向つて問うた。「自分は君に尋ねたいことがある。如何なることを思ひ、如何なることを慮つたならば道を知ることが出來るか。如何なる處に居り、如何なることを行つたならば道に安んずることが出來るか。又、如何なるものに從ひ、如何なる道を取つたならば道を得ることが出來るか」と、三たびまでも繰返して尋ねたけれども、無爲謂は一言も返事をしなかつた。それは答へないのではなくて、何と答へてよいか解らないのであつた。遂に知は問ふことが出來ずに、その儘白水の南に反つて孤闋の丘に上つて、狂屈といふ者に逢つたので、前と同じことを尋ねると、狂屈は「俺はそのことを好く知つて居るから、君に話して聞かせよう」と云つて、さて何事か語り出したが、途中で其の言はうと思つて居ることを忘れてしまつて答へなかつた。

外篇　知北遊第二十二

叙説 有爲有知を去つて、道の眞を體すべきことを論ず。東郭子との問答に於ては、莊子が道の偏在性を認むる汎神論的世界觀を窺ふに足るであらう。

知北遊於玄水之上、登隱弅之丘、而適遭無爲謂焉。知謂無爲謂曰、予欲有問乎若。何思何慮則知道、何處何服則安道、何從何道則得道。三問而無爲謂不答也。非不答、不知答也。知不得問、反於白水之南、登狐闋之上、而睹狂屈焉。知以之言也問乎狂屈。狂屈曰、唉、予知之、將語若。中欲言而忘其所欲言。

訓讀 知、北のかた、玄水の上に遊び、隱弅の丘に登つて、適〻無爲謂に遭ふ。知、無爲謂に謂つて曰く、吾れ若に問ふことあらんと欲す。何を思ひ何を慮らば、則ち道を知らん、何くに處り、何を服とせば則ち道に安んぜ

訓讀 楚王、凡君と與に坐す。少くあつて楚王の左右、凡亡ぶと曰ふもの三たびす。凡君曰く、凡の亡ぶるや、以て吾が存を喪ふに足らず。夫れ凡の亡ぶる、以て吾が存を喪ふに足らざるときは、則ち楚の存する、以て存を存とするに足らず。是に由つて之を觀れば、則ち凡未だ始めより亡びずして、而して楚未だ始めより存せざるなりと。

大意 此の章は、存亡は我と關係なく、從つて我の存亡も亦國民と關係のないことを說く。

通釋 楚王が凡といふ國の君主と對坐して話して居つたが、やゝ少時經つた後に、楚王の左右の侍臣に、三度まで「凡の國は滅亡するであらう」と云ふ者があつた。凡君は之を聞いて曰ふには「凡の國が亡びたとても吾が身に體得して居る所の大道を失ふことはない。凡の國は滅びても道を失ふに足らないと同時に、楚は猶存して居るけれども、存すべきものを存するには足らない。斯くの如く觀じ來る時には、凡は未だ始から亡びるといふ譯もなく、楚は未だ始から存するといふ理もないので、畢竟自分が重んずる所は道であつて、國家の有無の如きは敢て道の存亡に係るものではなく、從つて自分の心に介するに足らないのだ。」

語釋 ○三（三度曰へるなり。郭象は亡國の徵三ケ條を擧げたりと云ひ、愈越は三人なりと云ふ。俱に通ずるに似たれど今從はず。）○凡之亡、不レ足三以喪二吾存一、則楚之存、不レ足二以存一レ存（得存亡を遺れたる者に於ては、亡も以て亡と爲すに足らず、存も以て存と爲すに足らず。存亡とは心中に得喪の觀念あるより生ずるものであるが、既に得喪の觀念を離れ去れば從つて存も無く亡も無く。亡者必ずしも亡びず、存者必ずしも存せず、道を以て觀れば存亡得喪は更に有ることなきものである。故に其の下に更に凡未二始亡一而楚未二始存一也と云へるなり。）

も濡れず、卑賤微細な地位に處るとも病み憊れず、天地の閒に充滿して加損する所がない。外的事物の爲に自己を損ふことがないから、爵祿を人に與へても、己の身には愈々無形の寶が具つて盡きることがない。」

語釋 令尹（楚の官名、上卿にして國政を執るもの。論語には子文（鬪穀於菟）の事として同樣の記事を載す（公冶長）。）○鼻閒栩々然（栩は音キョ、又はク。歡暢の貌。外界の得喪に依つて心を動かさずして、鼻のあたりに心氣平靜なる氣象が溢れたるなり。）○用レ心（修養の工夫。）○其來不レ可レ卻、其去不レ可レ止（富貴榮華の來るものは拒まず、去るものは追はず、皆其の自然に任すのみ。）○得失之非レ我（窮通得喪は命の自然にして吾が關はる所に非ずとして一心を憂へしめざるなり。）○其在レ彼邪亡ニ乎我一、在レ我邪亡ニ乎彼一（其の貴ぶべきことが令尹の位の上に在るならば、此自身の上には無くして、我とは無關係である。從つて宰相と爲るも我自ら喜ぶには足らず。若し又我自身の上に在るならば、官職の上には無く、從つて宰相と爲るも、將又罷めらるゝも我自身の上に何等の得失を加へることにはならない。）○躊躇、四顧（躊躇とは成疏に「逸豫自得の貌」とあり。四顧とは前段に所謂八極に揮斥するなり。方に萬物に躊躇し宇宙に揮斥せんとするに於ては、何ぞ人世の貴賤尊卑の如き瑣事に心を留むる餘裕があらうや。故に心を動かされずして栩々然たるなりとの意。）○知者不レ得レ說（所謂知者がその言說を以て說破せんとするも不可能なり。）○濫（美色を以て誘惑するなり。）○伏羲黃帝不レ得レ友（五帝三王すらも友として交るに足らず。莊子の書に於てはその立論の趨く所、往々にしてその宗とする老子黃帝すらも貶して顧みざるが如きこと少からざるなり。）○無レ變ニ乎己一（生死の問題は人世の大事なるも猶且つ我が心を變移するに足らず。）○無レ介（介は障礙するなり。）○充ニ滿天地一（其の德天地に合して損せざるなり。）○既以與レ人己愈有（老子第八十一章にも既以與レ人己愈多とあり。）

楚王與ニ凡君一坐。少焉楚王左右曰ニ凡亡者三一。凡君曰、凡之亡也、不レ足ニ以喪一ニ吾存一。夫凡之亡、不レ足ニ以喪一ニ吾存一、則楚之存、不レ足ニ以存一レ存。由レ是觀レ之、則凡未ニ始亡一、而楚未ニ始存一也。

本より何等加損するものでない所以を述べたものである。

通釋 肩吾が孫叔敖に向つて尋ねて曰ふには「君は三たび楚の宰相となつたが、別に之を榮譽とも思はず、又三たび其の職を罷められても毫も憂へる氣色がない。そこで自分は始の內は君を疑つたが、今君の鼻の所を見ると、如何にも栩々然とのんびりして心氣平靜の相がある。君は心を如何樣に用ひて修養したのか。」孫叔敖が答へて曰ふには「自分は何も人に勝つた所があるのではない。思ふに、富貴利達の來るのは自然であつて卻くべきものではなく、又それが去るのも亦自然であつて引き止むべきものではない。一得一失皆我自ら爲す所ではない。故に自分は憂へないまでゞある。且つ自分が宰相となつた時には人は貴んでくれるが、その貴いことそのものは宰相といふ官に在るのか、將た又自分自身の上に在るのかわからぬ。若し官職の上に在るとするならば自分の上には無いのだから、從つて宰相となつても自ら喜ぶには足らない。若し又自分の上に在るとするならば官職の上には無いのだから、從つて罷められても憂ふるには足らないので、宰相の位などは自分の上には何の得失をも齎しては來ないのである。自分はまさに悠々自得、八方を高視して萬物に磅礴せんとして居るのであるから、何うして人間の所謂富貴貧賤などに心を留めてをる暇があらう。」後孔子が之を聞いて曰ふには「古の眞人は、人格至高であるから、如何なる知者も辯智を以て說服することが出來ず、美人も淫色を以て誘惑することが出來ず、盜賊も武力を以て劫剝することが出來ず、伏羲黃帝でさへも交遊することが出來ず、死生の大事すらも其の心を變易することが出來ない。況して世の爵祿などは云ふに足らないのである。斯くの如き人は、其の心神は、太山を經るも礙らず、淵泉に入る

人、知者不得說、美人不得濫、盜人不得刦、伏羲黃帝不得友。死生亦大矣。而無變乎己、況爵祿乎。若然者、其神經乎大山而無介、入乎淵泉而不濡、處卑細而不憊、充滿天地。既以與人己愈有。

訓讀 肩吾、孫叔敖に問うて曰く、子三たび令尹と爲つて、而して榮華とせず。三たび之を去れども憂色なし。吾れ始めや子を疑へり。今、子の鼻閒を視るに栩栩然たり。子の心を用ふること獨り奈何と。孫叔敖曰く、吾れ何を以て人に過ぎんや。吾れ以へらく、其の來るや卻くべからず、其の去るや止むべからずと。吾れ得失の我に非ざるを以爲うて、憂色なきのみ。我れ何を以て人に過ぎんや。且知らず、其の彼に在るか、其の我に在るか、其の彼に在らんか我に亡く、我に在らんか彼に亡きを。方に將に躊躇し、方に將に四顧す。何ぞ人の貴しとし人の賤しとするに至るの暇あらんやと。仲尼之を聞いて曰く、古の眞人は、知者も說くことを得ず、美人も濫ることを得ず、盜人も刦すことを得ず、伏羲黃帝も友とすることを得ず。死生亦大なり、而も己に變なし、況や爵祿をや。然るが若き者は、其の神大山を經とも介せらるゝなく、淵泉に入るとも濡れず、卑細に處るとも憊れず、天地に充滿す。既に以て人に與へて、己れ愈ゝ有り。

大意 此の章は、上文の「貴きこと我に在りて、變に失はず」とあるのを承けて、外界の事物は眞の我に於ては

ことでは弓を射ても的に中てることは到底覺束ない」と。

語釋 貫（鏑なり。） ○措杯水其肘上（措は置なり。列子は射を善くするが故に、其の射に當つては、左手は微動だもせず、杯に水を容れて其の上に置くも潑らざるなり。） ○適矢復沓（矢は去なり。沓は重なり。前の矢が今去つたかと思へば、忽ち次の矢が弦上に重つて在るなり。） ○寓（寄なり。） ○象人（木土の偶人。凝然として動かざることは、恰も木や土を以て作つた人形の如し。） ○射之射（射の術は巧であるが、畢竟有心の射たることを免れない。） ○不射之射（弓を射ながらその射を忘れたる忘懷無心の射を云ふ。） ○仞（七尺を仞と云ふ。） ○若（汝なり。） ○背（淵を背にして山に面するなり。） ○逡巡（すさりあし。） ○伏地汗流至踵（列子は恐怖の餘り頭を擧げ得ずして地に伏し、冷汗は流れて踵に至るほどであつた。） ○上闚青天、下潛黃泉、揮斥八極（至德の人は上は青天の頂を窮め、下は黃泉の底をも極め、宇宙の間到らぬ所もなく、八方に自由自在に飛翔するなり。揮斥は縱放に同じ。） ○怵然（音ジュツ。恐なり。心懼るゝ貌。） ○恂目之志（恂は慄なり。心懼れて眼が眩むなり。志とは氣持、樣子といふほどの意。） ○中（的に中てること、即ち射術。）

肩吾問於孫叔敖曰、子三爲令尹而不榮華。三去之而無憂色。吾始也疑子。今視子之鼻間栩栩然。子之用心獨奈何。孫叔敖曰、吾何以過人哉。吾以其來不可卻也、其去不可止也。吾以爲得失之非我也、而無憂色而已矣。我何以過人哉。且不知其在彼乎、其在我乎、其在彼邪亡乎我、在我邪亡乎彼。方將躊躇、方將四顧。何暇至乎人貴人賤哉。仲尼聞之曰、古之眞

と。

進ましむ。禦寇、地に伏し、汗流れて踵に至る。伯昏無人曰く、夫れ至人なるものは、上、靑天を闚ひ、下、黃泉を潛り、八極に揮斥して、神氣變ぜず。今、汝、怵然として、恂目の志あり、爾の中るに於けるや、殆いかな

大意 此は上文の「心を惠へしむるに足らざる」の意を承けて、射に心あるは不射の射に非ざることを論ず。

通釋 列子が伯昏無人の爲に弓を射た時に、弓を鏃のところまで一杯に引き絞れば、左の手と肘とが一直線に平かになつて、杯に水を容れて肘の上に置いても傾かないほどであつた。矢を發つのに、たつた今一矢放つたかと思ふと、忽ち次の矢が弦の上に來り、弦上に在る矢が去つたかと思ふと、早や又新しい矢が弦の上に運ばれてあるといふやうに、矢を繼ぐことが極めて神速である。是の時に當つて列子の體は丁度木偶のやうで、身動きもしなかつた。伯昏無人は之を見て曰ふには「汝は成程射に巧ではあるが、畢竟有心の射に過ぎない。射るといふことを全く忘れて了つて射る無心の射ではない。今試みに汝と一緒に高山に登つて危石を踏み、百仞の淵に臨まうと思ふが、それでも汝は能く射るか。」斯う云ひ畢つて伯昏無人は先づ自ら高山に登り、危石を踏み、百仞の淵に臨んで、山に面し淵を背にして逡巡し、而も踵は三分の二ほども崖から出て淵の方に垂れて、非常に危險な位置に立つて、やがて列子を揮いて此處へ來いと云ふと、列子は恐れ入つて地に平伏し、恐怖の餘り汗が流れて踵に及んだ。そこで伯昏無人が列子に向つて戒めて曰ふには「抑ゝ至德の人は、上は靑天を闚ひ、下は黃泉を潛り、八方に自由自在に飛躍して、神氣顏色少しも變るといふことはない。然るに今汝は怵然として心懼れ眼眩む樣子である。そんな

須ニ（循は順なり。斯須は須臾なり。郭象云ふ「斯須とは、百姓の情當に悟るべくして未だ悟らざるの頃なり。故に文王循つて之を發して以て其の大信に合せるなり」と。）

列禦寇爲伯昏無人射。引之盈貫。措杯水其肘上發之。適矢復沓、方矢復寓。當是時、猶象人也。伯昏無人曰、是射之射、非不射之射也。嘗與汝登高山、履危石、臨百仞之淵、若能射乎。於是遂登高山、履危石、臨百仞之淵、背逡巡、足二分垂在外、揖禦寇而進之。禦寇伏地、汗流至踵。伯昏無人曰、夫至人者、上闚青天、下潛黃泉、揮斥八極、神氣不變。今汝怵然有恂目之志、爾於中也殆矣夫。

訓讀 列禦寇、伯昏無人の爲めに射る。之を引いて貫に盈つ。杯水を其肘上に措いて、之を發つ。適に矢はなつて復た沓なり、方に矢はなつて復た寓す。是の時に當つて、猶ほ象人のごときなり。伯昏無人曰く、是れ射の射なり。不射の射に非ざるなり。嘗に汝と與に高山に登り、危石を履み、百仞の淵に臨まば、若能く射んかと。是に於て遂に高山に登り、危石を履み、百仞の淵に臨む。背、逡巡し、足二分垂れて外に在り、禦寇を揖して之を

範と仰ぎ、自らは北面して弟子の位地に就いて恭しく尋ねて「この立派な政治を廣く天下に推し及ぼし得られませうか。」と曰へば、然るに長老は何も解らぬやうな容子をして返辭もせず、取り止めもない不明瞭な挨拶をして、朝に文王の命を聞いて、其の夜遽に遁れ去つて、其れ限りその後竟に何うなつたか消息が絶えてしまつた。さて之に就いて顏淵が孔子に質問して曰ふには「文王はまだ德の至らぬ人でありませうか。既に其の人物の賢德を認めて居り乍ら、何故に之を夢に托したのですか。」孔子が答へて曰ふには「お默りなさい。汝は多くを言ふな。文王は諸大夫に任して自ら任ぜず、既に十分に心を盡して居られるのだ。決して格別論評非難すべき所はない。その夢に托したのは、唯ゞ一時の方便として民衆の從ひ易いやうに其の常情に順はれたまでのことである。」

語釋　觀(遊觀なり、アソブと訓ず。)　○其釣莫レ釣(下の釣は常人一般の釣なり。その一人の男は普通のするやうな釣をしない。)　○非下持二其釣一有レ釣者上(釣或は德者といふことに拘はれて釣をしてをるのではない。)　○常釣也(平常斯くの如き樣子にて悠々自適、釣の趣を樂しむなり。)　○終而釋レ之(そのまゝにして捨て置くこと。)　○不レ忍三百姓之無二天也(天の萬物を覆蔭するが如く、萬民の依頼すべき國政を委任するに足る人物が無くして、國亂れ政荒れて、民の艱難に遭ふを見るは心中に忍びざるものあり。)　○旦(翌朝。)　○昔者(昨夜。)　○良人(賢者。)　○顚(音ゼン、髯と同じ。)　○駁馬而偏朱蹄(駁は雜駁、馬の毛並まだらなるを云ふ。偏朱蹄は林希逸云ふ、其の蹄只一隻のみ朱きなりと。)　○先君王(亡き文王の父。即ち季歷なり。その生存の日、色黑く、髯多く、好んで駁馬に乘りたりと云ふ。)　○蹙然(驚き懼るゝ貌。)　○丈人(長老の稱。)　○偏令(秦鼎云ふ、偏は特なり、猶ほ一令のごとしと。)　○斔斛(斔は臾と同じ、音ユ、六斗四升の量目。斛は音コク、古くは十斗を斛といふ。こゝは量を計る器を云ふ。)　○列士壞レ植(列士は朝廷に列する衆多の士、植は行列、散群は黨群を解散して養はざること。朋黨を樹立せざるを云ふ。)　○不レ成レ德(政治上の功績があつても、自ら其の功に居て誇ることをしない。)　○尙レ同(尙ほ上と同じ、タフトブと訓ず。老子の所謂其の光を和げ、其の塵に同じうするの意なり。)　○北面而問(天子は南面して王たり、臣下は北面して之に事ふ。弟子の師に事ふるも亦同じ。こゝは弟子の禮を執るなり。)　○泛然(明言せざるなり。)　○朝令而夜遁(朝に文王の命を聞いて、其の夜は俄に遁れ去るなり。朝と云ひ夜と云ふは、遁れ去ることの速きを云ふ。)　○何以レ夢爲乎(陸樹芝云ふ、必ずこれを夢に託して以て諸大夫に信にす。猶ほを用ふるがごときに似たり。疑ふらくは未だ天下の至德たらざるなり。と。)　○循二斯

者や輔弼の大臣などが猜疑して安心しないことを慮れて、其の儘に打捨てゝ置かうとも思つた　しかし乍ら蒼天の下土を覆蔭するやうに萬民の倚頼すべき國事を托する者の無いのは如何にも忍びなかつた。そこで一計を案じて、翌日の朝多くの大夫を集めて之と相談した。そして曰ふには「自分は昨夜夢に、色の黑い、そして髯を蓄へた賢者が、一蹄だけ赤い駁色の馬に乘つて來て、自分に告げて「汝の國をあの臧の長老に托せよ。さうすれば國も善く治まり、民の苦も癒えるであらう。」と云つたが、何うしたものであらう。」そこで多くの大夫達は驚き懼れて申し上げた「それは誠に恐れ多いことであります。その方は多分亡き御先君でゐらせられませう。」文王が曰ふには「然らば念の爲に其の吉凶を卜つて見よう。」諸大夫が曰ふには「先君が我が現在の御主君に御命じになつた所であれば、もはや少しも疑ふべき所はない。早速其の御告の通りになされたが好いでせう。何も今更卜つて見るには及びますまい。」斯くして文王は諸の大夫達の協贊を得て、遂にかの臧の長老を迎へて、之に國政を授けた所が、その長老は法典を少しも變更することもせず、又一令をも發布しなかつた。斯くて三年經つた後、文王が國内の政狀を視察して見ると、朝廷に列する士分の者達は從來の如く朋黨を立てず、長官たる者は政事上の治績を己の成功とせずして互に讓り合ひ、度量衡も正しく遠近の人皆軌を同じくして、隣國の諸侯の國人も皆厚く信用して、其の國に來るのに彼等自身の計器を携へては來なかつた。惟ふに列士が分烈朋黨しないのは大同團結を貴ぶ爲であり、長官が政治上の成功を讓り合ふのは、衆と務を同じくして協心するが爲であり、他國の計器が國境の内へ入つて來ないのは、天下の諸侯が相信じて、同じ律を以て度量衡を制定するが爲である。是に於て文王は此の長老の賢德に服して大師

諸大夫曰く、先君の命なり、王其れ宅無からん、又何ぞトせんと。遂に臧の丈人を迎へて、之に政を授く。典法更むることなく、偏令出すこと無し。三年にして文王國に觀れば、則ち列士、植を壞り羣を散じ、官に長たるもの德を成さず。斔斛敢へて四境に入らず。列士、植を壞り、羣を散ずるは、則ち同を尙ぶなり。官に長たるもの德を成さざるは、則ち務を同じうするなり、斔斛敢へて四境に入らざるは、則ち諸侯二心なきなり。文王是に於て以て太師と爲し、北面して問うて曰く、政以て天下に及ぼすべきかと。臧の丈人昧然として應ぜず、泛然として辭す。朝に令して夜遁れ、終身聞ゆること無し。顏淵仲尼に問うて曰く、文王は其れ猶ほ未だしか。又何ぞ夢を以てせんやと。仲尼曰く、默せよ、汝言ふこと無かれ。夫れ文王之を盡くせり、而るを又何ぞ論刺せん、彼直以て斯須に循へる也と。

大意 此の章は上文の至人の句を承けて、至人を擧げて夢に託して斯須の權を用ふるを論ず。林西仲曰く「文王機械を用ひ、仲尼斯須に徇ふ。鄙夫と雖も猶之を稱するを羞づ。此等の議論、此等の筆法、乃ち敢て莊に擬す。吾其の是れ何の心なるを知らざるなり。」

通釋 周の文王が渭水に程近い臧といふ所に遊んだ時に、一人の男が釣を垂れてをるのを見たが、その樣子を見ると、眞に釣をして居るのではなく、即ち他の人のやうに何うかして魚を獲ようとして釣竿を堅く持つて凝つと待つて居るのではなく、たゞ平生此の邊に釣を垂れてその趣を娯んで居るばかりで、魚の獲れるか獲れないかは些しも意に介しないかのやうであつた。文王は彼に感じ入つて、之を擧用して國政を委任しようとしたが、同族の長

而授之政。典法無更、偏令無出。三年文王觀於國、則列士壞植散羣、長官者不成德。斔斛不敢入於四境。列士壞植散羣、則尚同也。長官者不成德、則同務也。斔斛不敢入於四境、則諸侯無二心也。文王於是焉以爲太師、北面而問曰、政可以及天下乎。臧丈人昧然而不應。泛然而辭。朝令而夜遁、終身無聞。顏淵問於仲尼曰、文王其猶未邪。又何以夢爲乎。仲尼曰默、汝無言。夫文王盡之也、而又何論刺焉、彼直以循斯須也。

訓讀 文王、臧に觀ぶ。一丈夫の釣するを見る、而して其の釣、釣ること莫し。其の釣を持して釣ることあるものに非ず。常に釣れり。文王擧げて之に政を授けんと欲すれば、大臣父兄の安んぜらんことを恐るゝなり。終にして之を釋かんと欲すれば、百姓の天なきに忍びざるなり。是に於て旦にして之を大夫に屬して曰く、昔者寡人夢に、良人の黑色にして頾あり、駁馬の而かも偏朱蹄なるに乘れるを見る。號して曰く、而の政を臧の丈人に寓せよ、民瘳ゆることあるに庶幾からんと。諸大夫蹵然として曰く、先君王なりと。文王曰く、然らば則ち之を卜せんと。

に入り切れない爲に外に在る者が半數もあつた。すると其の時一人の畫工が後れ馳せにやつて來たが、その容子は如何にも悠々と落着き拂つて徐ろに歩き、命を受けて會釋はしたが、其の場に竝んで立たうともせず、その儘宿舍に入つて了つた。元君が怪しんで人を遣つてその樣子を視させると、正に衣を解き兩足を投げ出して裸體になつて、毫も憚る氣色がなかつた。元君は大いに感心して「それでこそ、彼こそ眞の畫工である。」と云つた。

語釋　衆史皆至（多くの畫家皆到來す。）○在外者半（人數多き爲、室外に溢れ居るもの半數あるなり。）○儃々然（音タン、寛閑の貌。ゆつたりとして遽らざる貌。）○槃礴（音ハンハク。箕踞なり。兩足を投げ出すなり。）○臝（音ラ、裸と同じ。赤肌を露すなり。）

文王觀於臧。見一丈夫釣。而其釣莫釣。非持其釣有釣者也。常釣也。文王欲擧而授之政。而恐大臣父兄之弗安也。欲終而釋之。而不忍百姓之無天也。於是旦而屬之大夫曰、昔者寡人夢、見良人黑色而頓、乘駁馬而偏朱蹄。號曰、寓而政於臧丈人、庶幾乎民有瘳乎。諸大夫蹵然曰、先君王也。文王曰、然則卜之。諸大夫曰、先君之命。王其無它、又何卜焉。遂迎臧丈人

に人を感動せしめることが出來たのである。

語釋 百里奚（姓は孟、字は百里奚。秦の賢人なり。本と虞の人。虞秦に亡ぼされ、遂に秦國に入る。初め未だ用ひらるゝに遭はざるや、貧賤にして牛を飯ひ、牛を飯ふに安んじ、身甚だ肥悦、富貴を忘る。故に爵祿心に入らざりき。後穆公其の賢なるを知り、委すに國事を以てして、都て猜疑せず。（成疏に據る。））

宋元君將畫圖。衆史皆至。受揖而立、舐筆和墨、在外者半。有一史後至者。儃儃然不趨、受揖不立。因之舍。公使人視之、則解衣槃礴贏。君曰、可矣。是眞畫者也。

訓讀 宋の元君、將に畫圖せんとす。衆史皆至る。揖を受けて立ち、筆を舐り、墨を和し、外に在るもの半なり。一史の後れて至るものあり。儃儃然として趨らず、揖を受けて立たず。因つて舍に行く。公、人をして之を視しむれば、則ち衣を解いて槃礴して贏す。君曰く、可なり。是れ眞の畫者なりと。

大意 此の章は畫を描く者に託して、眞の達道の人を相するには、外形的の容飾を以てすべからざることを說く。

通釋 宋の元君が或る時畫をかゝせようとして多くの畫工を集めた。畫工達は皆聚つて來て、命を受けて一禮して立ち上り、筆を舐つたり、墨を加減したりして、我こそはといふ意氣込を示して居り、而して競爭者が多くて內

其の議論は千變萬化、縱横自在で、窮る所がなかつた。そこで莊子は哀公に向つて云つた「今こそ好くお解りになりましたらう。此の廣い魯の國を以てしても眞の儒者は唯〻一人に過ぎない。決して多いとは云へますまい。」

語釋 方(術なり。) ○擧二魯國一而儒服。何謂レ少乎(哀公は庸暗の君主にして眞相を洞察せず、たゞ衣冠服裝に依つて判斷せるなり。) ○圜冠、句履(圜音エン、圓形の冠。支那の上代人は天員地方なりとせり。故に頭に圓形の冠を戴くは、天員を知るの象徴なり。句は音ク、方なり。足に方形の履を穿つは、地方を知るの象徴なり。) ○緩二佩玦一者事至而斷(緩は五色の條縄。之に穿つて玉玦を佩びて飾とす。玦は決なり。環形の玉の一點連續せざるもの、決斷を意味す。) ○一丈夫(孔子を指す。) ○千轉萬變而不レ窮(孔子の議論する所が縱横自在に變化して窮極するところを知らず。)

百里奚爵祿不レ入二於心一。故飯レ牛而牛肥、使下秦穆公忘二其賤一與中之政上也。有虞氏死生不レ入二於心一、故足三以動二人一。

訓讀 百里奚、爵祿心に入らず。故に牛を飯ひて牛肥え、秦の穆公をして、其の賤を忘れて、之に政を與へしめたり。有虞氏、死生心に入らず、故に以て人を動すに足りき。

大意 此は上文の「喜怒哀樂其の胷次に入らざる」の意を證す。

通釋 百里奚といふ人は、尊い爵位や高い俸祿も決して其の意に介しなかつた。それ故に牛を畜つてその牛がよく肥えたので、秦の穆公をして、彼の身分の賤しいことをも忘れて國政を任ぜしむるに至つた。又古の帝舜有虞氏は、頑迷な父母の爲に屢〻殺されようとしたが、彼は死生を心に留めず至誠を以て一貫して之に事へた。それ故

大意 身に體得すべき道の達否は必ずしもその人の外觀的服飾に據つて判定すべからざることを說く。成玄英は「莊子は是れ六國の時の人、魏の惠王・齊の威王と時を同じうし、魯の哀公を去ること一百二十年。此に魯の哀公に見ゆと言ふが如き者は蓋し寓言のみ。」と云つてをるが、林西仲の「忽ちにして此の段を挿むこと、洵に謂無きに屬す。細に文氣を味ふに、洵に莊叟の筆に非ず。何ぞ必ずしも年世の相違するを以て疑ふことを爲さんや。」と云へるに從ふべし。

通釋 莊子が魯の哀公に見えた時に、哀公が曰ふには「我が魯の國には儒者が多くして、先生の道を學ぶ者は少い。」莊子が曰ふには「いえ、魯には儒者は少い筈です。」哀公が曰ふには「魯の國の者共は殘らず擧つて儒服を着て居るのに、何故儒者が少いと言ふのか。」莊子が曰ふには「私はかういふことを承つてをります。あの儒者が圓形の冠を頭に戴いて天に象るのは、天時を知るの象徵であり、方形の履を足に穿いて地に法るのは、地形を知るの象徵であり、又五色の絲で貫いて玦といふ玉を佩びて居るのは、事に遇つて決斷する意味を表章したものださうでありますが、然しながら君子にして眞に其の道を有するものは、必ずしも之を表象するの服を作らず、又其の服を着て居る者が必ずしも道を知つて居るとは限りません。君が若し私の申し上げる言葉を疑はしくお考へになるならば、國中に布令を出して、儒の道を知らずして儒服を着くる者は死刑に處すると仰つて御覽なさい。」そこで哀公は之を聞いて早速國中に其の通り發令したが、その後五日經つて魯の國中に敢て儒服を着ける者が無いやうになつた。所が唯〻一人の男子があつて、儒服して魯公の門に立つたので、哀公は之を召し入れて國事を尋ねてみると、

未必知其道也。公固以爲不然、何不號於國中曰、無此道而爲此服者、其罪死。於是哀公號之五日、而魯國無敢儒服者。獨有一丈夫、儒服而立乎公門。公卽召而問以國事。千轉萬變而不窮。莊子曰、以魯國而儒者一人耳、可謂多乎。

訓讀 莊子、魯の哀公に見ゆ。哀公曰く、魯には儒士多く、先生の方を爲すもの少しと。莊子曰く、魯には儒少しと。哀公曰く、魯國を擧げて儒服す。何ぞ少しと謂はんやと。莊子曰く、周、之を聞く、儒者の、圜冠を冠むるものは、天の時を知り、句履を履むものは、地の形を知り、佩玦を緩うするものは、事至つて斷ずと。君子其の道あるものは、未だ必ずしも其の服を爲さざるなり。其の服を爲すものは、未だ必ずしも其の道を知らざるなり。公固に以て然らずとせば、何ぞ國中に號して此の道なくして此の服を爲すものは、其の罪死せんと曰はざる。是に於て、哀公之を號すること五日にして、魯國敢へて儒服するもの無し。獨り一丈夫あり、儒服して公門に立つ。公卽ち召して問ふに國事を以てす。千轉萬變して窮らず。莊子曰く、魯國を以てして儒者一人のみ、多しと謂ふべけんやと。

たのでありますが、古の君子にして誰か能く言說を離れて之を假らないものがありませうや。」老子が曰ふには「いや然うでない。かの水は人が勝手に用ひてをるが酌めども渇きないのは、水自ら之を爲すのではなくして、その本質が自ら然らしむるのである。至人の德に於けるも亦之と同じく、自らは修めずして而も他物は之に親しみ近づいて離れることが出來ないのである。それは恰も天の自ら高く、地の自ら厚く、日月の自ら明かなるが如く、すべて自然であつて、何も特別に修爲すといふのではない。」孔子が退出して後、顏回に向つて曰ふには「自分が道に於けるのは恰も醯甕の中の蟲のやうなものである。先生がその蓋を開けて下さらなかつたならば、自分は何時迄もその小さな中に在つて天の大全を知らずに終つたことであらう。今こそ先生に會つて其の道を聞いて、自分はこれ迄の迷夢から醒めて大自然の道を悟ることが出來た。」

語釋　○孰能說焉（說は免なり。其の德天地に匹敵する老子に於てすら猶且つ至言を假りて心を修養するのである。然れば古の君子にして誰か能く言說を遺れて之を假らないものがあらう。）　○汋（汋は取なり、酌と同じ。）　○醯雞（音カイケイ。甕中の蟲。井蛙の見といふに同じ。小天地に跼蹐して天地の大全を知らざるに喩ふ。）　○發吾覆也（覆は瓿の蓋。蒙を啓くと同じ。）

莊子見魯哀公。哀公曰、魯多儒士、少爲先生方者。莊子曰、魯少儒。哀公曰、舉魯國而儒服。何謂少乎。莊子曰、周聞之、儒者冠圓冠者、知天時。履句屨者、知地形。緩佩玦者、事至而斷。君子有其道者、未必爲其服也。爲其服者、

終始は晝夜に均し。死生も滑亂すること能はず。況んや得喪禍福生崖の事をや。愈々以て懷に介するに足らざるなりと。)　○滑(亂なり。)　○棄レ隷者(隷は隷僕なり。)　○不レ失二於變一(變は小變なり。小變の爲に我の貴きことを失はざるを云ふ。)

孔子曰、夫子德配二天地一。而猶假二至言一以修レ心。古之君子、孰能說焉。老聃曰、不レ然。夫水之於レ汋也、無レ爲而才自然矣。至人之於レ德也、不レ修而物不レ能レ離焉。若二天之自高、地之自厚、日月之自明一。夫何修焉。孔子出。以告二顏回一曰、丘之於レ道也、其猶二醯鷄一與。微三夫子之發二吾覆一也、吾不レ知二天地之大全一也。

訓讀　孔子曰く、夫子、德天地に配す。而して猶ほ至言を假りて以て心を修む。古の君子、孰か能く說かんと。老聃曰く、然らず。夫れ、水の汋に於けるや、爲す無くして、才自ら然るなり。至人の德に於けるや、修めずして物離るゝこと能はず。天の自ら高く、地の自ら厚く、日月の自ら明なるが若し。夫れ何をか修めんと。孔子出づ。以て顏回に告げて曰く、丘の道に於けるや、其れ猶ほ醯鷄のごときか。夫子の吾が覆を發く微りせば、吾は天地の大全を知らざりしならんと。

通釋　孔子が曰ふには「先生の至德なること天地と合する底のものを以てして、而も猶ほ至言を假りて修養され

る」と。孔子が又尋ねて曰ふには「其の域にまで到達するには何ういふ方法に從つたらよいでせうか。」老子が曰ふには「かの草を常食とする動物は己の棲む藪澤を易へることを厭はず、水中に生活する蟲は其の池沼を易へることを厭はない。それは居處を移してもその固より定まつた飲食の資はなほ存して、環境の小變には遭つても固有の大常は依然として失はれないからである。既にその大常を失はない以上は、從つて喜怒哀樂の感情は其の胸中に入つて來ないのである。思ふに天下は萬物萬化の一に歸する所であつて、此の點を悟つて自ら之と合致するならば、茲に天下萬物と合體して、自分の肉體の各部は恰も塵垢と同じくみなされて、特に之を貴ぶこともなく、之に執着することもない。又死生終始などは恰も晝夜の交代するのと同樣に考へられて、此等のものに依つて心を亂されるといふことがない。況して世上の得失禍福等微々たる事柄に於ては云ふ迄もない。かの賤しい奴僕を棄てることを泥土の如くする者は、我が彼よりも貴いことを知つてをるが爲である。今若し最も貴かるべき道が我に備つて在ることを知るならば、外界の事物の雜多なる變化の如きものは到底我が内に在る至美至樂を失ふに足らない。且つ此等の變化の相尋ぐことは萬古斯くの如きもので變轉して極ることなく、何物も我が心を憂へしむるに足らない。斯かる逍遙遊の境地は世俗の人は解することが出來ずして、唯々既に道を履み得た者のみが能く悟り得る所のものである。」

【語釋】○至美至樂（道は最も貴きもの、故に至美至樂と云ふ。無美の美、無樂の樂とも云ふべき境地なり。）○方（道なり。）○草食之獸、不レ疾レ易レ藪（草を常食とする獸は、己の棲む藪澤を易へて他に移ることを厭はない。藪は易り、水は易つて舊と異るも、之は僅少の變化であつて、藪たると水たるとに變りはなく、大體の據りどころを誤らなければ、草獸たることの眞の大常を失はないから、敢て移り住むことを患へないのである。）○胷次（次は中なり。胷中に入らずとは、喜怒哀樂等の感情によつて心が動かされないこと。）○天下也者、萬物之所レ一也云々（成玄英云ふ、夫れ天地萬物、其の體二ならず。斯の趣に達する者は、故に能く混同す。是を以て物我皆空、百體將に塵垢と爲らんとす。死生は虚幻の如く、

變而不失其大常也、喜怒哀樂、不入於胷次。夫天下也者、萬物之所一也。得其所一而同焉、則四支百體、將爲塵垢、而死生終始、將爲晝夜。而莫之能滑。而況得喪禍福之所介乎。棄隷者、若棄泥塗、知身貴於隷也。貴在於我而不失於變、且萬化而未始有極也。夫孰足以患心已。爲道者解乎此。

訓讀 孔子曰く、是に遊ばむことを請問すと。老聃曰く、夫れ是を得れば至美至樂なり。至美を得て至樂に遊ぶ、之を至人と謂ふと。孔子曰く、願はくば其の方を聞かむと。曰く、草食の獸は、藪を易ふることを疾まず、水生の蟲は、淵を易ふることを疾まず。小變を行へども、其の大常を失はざれば、喜怒哀樂、胷次に入らず。夫れ天下は萬物の一にする所なり。其の一なる所を得て焉に同じうすれば、則ち四支百體、將に塵垢と爲らむとし、死生終始、將に晝夜と爲らむとす。而して之を能く滑すことなし。而るを況や得喪禍福の介なる所をや。隷を棄つる者の泥塗を棄つるが如きは身隷より貴きことを知ればなり。貴きこと我に在りて變に失はず、且萬化して未だ始より極まり有らざるなり。夫れ孰か以て心を患へしむるに足らんや。道を爲むるものは此を解せり。

通釋 そこで孔子は更に「その境地に遊ぶには何うしたらよいでせうか」と問ふた。老子が答へて曰ふには「さても斯の道を體得する時には 至美至樂の境地に入る。この至美を得て 至樂に遊ぶ人を名づけて 至人といふのであ

まり、月に變つて、天地自然の造化の爲は暫くも停ることなく相繼いで行はれるけれども、其の効果を明かに捕捉することは出來ない。萬物の發生は無物に萌し、其の死滅は未往に歸する、死生終始、反覆往來して窮りないのであるが、そこにはかゝる現象變化を主宰する本源が存在するのであつて、是れこそ即ち道であり、物の初めである。これより他に果して何物が斯くの如き宗主と爲り得るものがあらうぞ。」

語釋 新沐（沐は髮を洗ふなり。新にとは、今洗つたばかりといふほどの意。） ○慹然似レ非レ人（音テフ、不動の貌。枯木の如く凝つとして動かざるなり。） ○便（便坐なり。） ○遺レ物離レ人而立二於獨一（萬物を遺れ、人類を離れて超然物外に獨立するなり。） ○遊二心於物之初一（成疏に云ふ、初は本なり。心を物の初に遊ばしむれば則ち神を妙本に凝す。夫れ道は萬物を通生す。故に道を名づけて物の初と爲す。所以に形は槁木に同じく、心は死灰の若きなりと。物の初めとは、所謂父母未生前と云ふに同じ。） ○口辟（口開きて合はざるを辟と云ふ。） ○將（林西仲云ふ、將とは且に然らんとして、未だ必せざるの詞と。彷彿たる概要の所なり。） ○至陰肅々、至陽赫々（肅々は陰氣にして寒く、赫々は陽氣にして熱し。） ○肅々出二乎天一、赫々發二乎地一。兩者交通成レ和、而物生焉（肅々として寒冷なる陰氣は天より出で、赫々として暑熱なる陽氣は地より發す。即ち陽中陰あり、陰中に陽あるなり。萬物未生の初は混然たる一氣であるが、之が分れて陰陽の二氣となり。而して陰陽互に其の根と爲り、二氣交々相通じ相和して天地和合を爲し、茲に萬物が發生する。） ○消息滿虛、一晦一明（陰陽二氣の相交錯する所に凡ゆる現象變化を生ずる。消息とは陰氣が消滅し陽氣が生息すること。消長、屈伸と同じ。滿虛は自然の氣が夏に滿ち冬に虛となるを云ふ。四時の推移を指す。晦は夜、明は晝、晝夜の交代を云ふ。此等の諸々の現象の中に在て、之を主宰し、之が紀綱となつて居る何物か、即ち道が存在するのであるが、その形象は限定することを許さない。而もその造化の爲は日に月に改まつて、暫くも停滯しないが、其の功を明に認識することは出來ない。） ○非レ是也、且孰爲二之宗一（是は道を指す。宗は宗主、凡ゆる現象變化を司る主宰者なり。）

孔子曰、請問遊レ是。老聃曰、夫得レ是至美至樂也。得二至美一而遊二乎至樂一。謂二之至人一。孔子曰、願聞二其方一。曰、草食之獸、不レ疾レ易レ藪。水生之蟲、不レ疾レ易レ淵。行二小

紀を爲して、其の形を見ることなし。消息滿虛、一晦一明、日に改まり月に化し、日に爲す所有りて、其の功を見ることなし。生は萌す所有り、死は歸する所有り、終始無端に相反して、其の窮まる所を知ることなし。是に非ずんば且孰か之が宗と爲らむと。

大意　心を不死に存しようとするならば、必ず先づ心を未生に遊ばしめるべきことを說く。三節に分つて解く。

通釋　孔子が或る時老子と會見した。適〻老子は髮を洗つて日に乾かさうとして居た時で、恰も枯木の樣に凝つとして動かず、人でないかのやうに見えた。そこで孔子は折を見計らつて待つて居たが、間もなく會談して曰ふには「私は目が眩惑したのでせうか。先刻の先生の御體は兀然として枯木の如く、物を遺れ人を離れて超然獨立して居られるやうに見受けられました。」老子が曰ふには「自分は物の初め、即ち萬物を生ずる前の道體の境地に遊んだのだ」と。孔子が更に尋ねて曰ふには「それは何ういふ意味ですか。」老子が曰ふには「眞の道といふものは、心に知らうとしても心は困しんで知ることが出來ず、又言說を用ひようとして口を闢いても之を云ひ表はすことの出來ないものであるが、試みに汝の爲に先づ大略それに彷彿たる所を語つて聞かせよう。抑〻至陰は肅々として嚴冷に、至陽は赫々として光明なものである。而して其の肅々たるものは天より出で、其の赫々たるものは地より發し、陽の中に陰があり、陰の中に陽を含み、陰陽互に相根ざして、この兩者が交〻相通じ中和を致して玆に始めて萬物が發生する。其の閉或は何物かゞあつて之を主宰し支配して居るやうであるが、其の形は見ることが出來ない。四時の推移に伴れて寒暑の氣は絕えず盈虛し、日月の運行と共に或は晦く或は明るく晝夜の別を生じ、日に改

見曰、丘也眩與。其信然與。向者先生形體掘若槁木、似遺物離人而立於獨也。老聃曰、吾遊心於物之初。孔子曰、何謂邪。曰、心困焉而不能知、口辟焉而不能言、嘗爲女議乎其將。至陰肅肅、至陽赫赫、肅肅出乎天、赫赫發乎地。兩者交通成和、而物生焉。或爲之紀、而莫見其形。消息滿虛、一晦一明、日改月化、日有所爲、而莫見其功。生有所乎萌、死有所乎歸。始終相反乎無端。而莫知乎其所窮。非是也、且孰爲之宗。

訓讀 孔子老聃に見ゆ。老聃新に沐す。方に將に髮を被りて乾かさんとす。慹然として人に非ざるに似たり。孔子便して之を待つ。少焉ありて見えて曰く、丘や眩するか。其れ信に然るか。向者に先生の形體は、掘として槁木の如く、物を遺れ人を離れて獨に立てるに似たりと。老聃曰く、吾は心を物の初に遊ばしむと。孔子曰く、何の謂ぞやと。曰く、心困焉として知ること能はず、口辟焉として言ふこと能はず、嘗みに女の爲に其の將を議せん。至陰は肅肅たり、至陽は赫赫たり、肅肅は天に出で、赫赫は地に發す。兩者交通して和を成して、物生ず。或は之が

の神變絕妙なるに喩ふ。）　○瞠ニ若乎後一（追隨することが出來ずして、唯々後に在つて目を見はるのみ。瞠は直視の貌。）　○不レ言而信（孔子は口に物言はずとも自然に眞實があり、衆人自ら孔子を信ずるなり。）　○不レ比而周（孔子は特に私親することなくとも、人々は自ら之と親しむなり。比は周禮の「五家爲レ比」の比にて親附の義なり。周は說文に「密也」とあり、散用すれば共に人と親密にする意なれど、對用すれば比は私にして、周は公なり。論語にも「子曰く、君子は周して比せず、小人は比して周せず。」（爲政）とあり。朱子の註に、「周は普遍なり、比は偏黨なり。」と云ひ、孔安國の註にも、「忠信を周となし、阿黨を比となす。」とあるを參照すべし。）　○無レ器而民踏ニ乎前一（器は尊い爵位。孔子は人君の位無くして民衆がその前に踏み聚るを云ふ。）

○心死（心が本然の眞を失つて滅びるを心死といふ。形迹に拘滯して造化と倶にする能はざることを云ふ。人の最も尊く、且つ萬物に勝過する所以のものは心に在るので、心の滅亡は人として最も哀しむべきことなりといふなり。）　○人死（人の肉體形骸の死亡なり。心死に死すれば猶輕しといふなり。）　○日（太陽を以て萬物を主宰する造化に喩へて云ふ。）　○比方（林希逸云ふ、比方とは數ふ可きなりと。即ち日出づれば萬物各々其の相を顯はして、一々之を指點し得るを云ふ。）　○有レ目有レ趾者（目を有ち足を有つもの。之を生物一般と解する說もあるが、姑く單に之を人類と解する說に從ふ。）待レ是、是出、是入（是は何れも太陽を指す。）　○有レ待也而死、有レ待也而生（有待は上の待是の待なり。こゝは造化を待つなり。天地の一切萬物はその生死存亡悉く造化の道を待つて行はれるを云ふ。）　○成レ形（人間たるの成形なり。）　○不レ化以待レ盡（已に吾々が天地の成形を受けて人と生れたる以上は、何等の作爲をなさずして、自然に任せてその盡きるのを待つべし。）　○效レ物而動（效は倣なり、模倣なり。物とは事物なり。他の事物に倣倣して動作して、その間一點の私心をも挾まざるを云ふ。）　○日夜無レ隙（變化隙なく、日夜に新にして終る所を知らず。）

○薰然其成レ形（薰然は自動なり。自然に人の形體を禀けて生ずるを云ふ。）　○知レ命不レ能レ規ニ乎其前一（生死存亡は一に天命であることを知つても、事前に豫測することは出來ない。）　○日徂（成疏に云ふ、徂は往なり。時變に達し、能く預め規模を作さず、日々に新なるに體す、是の故に化と倶に往くなりと。）　○與レ汝交ニ一臂一而失レ之（郭象云ふ、夫れ變化は執へて留むべからず、故に臂を執へて相守ると雖も、停らしむること能はずと。交臂は、纔に片臂を交へる許の短い時と解する說もあるが、今は採らず。）　○著（顯著の著、見なり。アラハル、と訓ず。）　○唐肆（唐肆は空肆なり 空園を唐園と云ふが如し。馬の去來常無き市に、常に馬を求め得ると思ふは、恰も舟に刻して劍を求むるが如く、拘るの甚しきものである。若し人が形骸に泥んで、これこそ眞の道なりと思ふならば、亦之と同じものがあるであらう。）　○服（郭象云ふ、思存するの謂なりと。人の思惟の作用を云ふ。）　○忘（過ぎ去ることの速なるを云ふ。）　○吾有ニ不レ忘者一存（變化の道は日夜に暫くも停ることはないが、而もその間に於て始めから去來することなく儼として存するものがある。即ち眞我である。）

孔子見ニ老聃一。老聃新ニ沐ス。方ニ將ニ被リテレ髮ヲ而乾カサントス。慹テフ然トシテ似タリレ非ザルニレ人ニ。孔子便シテ而待ツレ之ヲ。少シバラクアリテ焉

ず、自然に任せてその盡きるのを待ち、其の閒はすべて他の事物に依つて行動して一點の私心をも挾まず、人の一身の往來消長は、日々夜々に變化して閒隙なく、その終止する所を知らず、唯々自然に人の形體を稟けて生死皆天命であることを知つても、事前に於て豫め之を規り知ることは出來ない。凡てこれ自然である。故に自分に於ては此の如くして自然の化と倶に日々に移つて往くばかりである。終身汝と臂を交へて相守つても、竟に之を執へて停らしめることは出來ず、遂に相失ふに至るのである。これは何と哀むべきことではないか。然るに汝は唯々自分の言動の顯著なる方向、即ち自分の行迹の目に見えるものばかりを見て、目に見ることの出來ない或るものを見ない。即ちかの道は停滯して迹を止めるものではなくして必ず無に歸するものであるのに、汝は依然として之を有の中に求めて居るから道に到達することが出來ない。汝の見る所のあの迹とは已に盡きてしまつて過去に屬するものに過ぎないのだ。譬へて言へば、恰も馬を求めるのに、市場の外形的建物に捉はれて、既に解散してしまつた後の空肆に求めるのと同じことであつて、到底得ることは出來ない。一體吾々人閒の思惟の作用は我といふものに本くものであるが、聖賢を問はず常に變化して、自分の我も汝の我も過ぎ去ることの甚だ迅速なもので、故き我は忽然として去つて新しき我が忽然として來り、昨日の我は既に今日の我ではなく去來常無きものであるが、然もその閒に於て一貫して去來しないものがあつて存する。即ち眞我である。之を覺りさへすれば何も哀しむ必要はないであらう。」

語釋 夫子步亦步（顏淵が孔子の爲す所を學ばんとして及ばざることを、馬の馳せるのに譬へて云ふ。） ○奔逸絕塵（馬が極めて神速に馳せて、塵一つ立てず恰も空を飛ぶが如きを云ふ。所謂天馬空を行き一塵驚かざるものなり。孔子の道

びもつかないので、只後に瞠若として目を視張つて居るばかりであります。」孔子が反問して曰はれるには「顏回よ、それは何の事か。」顏淵が重ねて曰ふには「それは卽ち先生がお歩きになれば私も亦歩き、先生が何か仰せになれば私も亦口を開き、先生が小走りになされば私も亦小走りにし、先生が辯論をなされば私も亦辯論をし、先生がお驅けになれば私も亦驅け、先生が道に就てお話しになれば私も亦道を談ずるといふことであります。然るに先生が奔逸絶塵と極めて速にお走りになる時には、私は只後に瞠若たるばかりであると申し上げたのは、先生は自ら何も言はれなくとも人が自然に先生を信じ、先生の方から親まうとなされなくとも人が自然に親しみ、先生には何等貴い名譽や地位が有るのでもないのに人が自然に歸依して居りますが、而もそれが何故であるかといふことが解りません。兎に角私などの到底企て及ぶことの出來ないやうな偉大なる點があるからでありませう。」すると孔子が曰はれるには「さて〳〵其の點は篤と考察しなければならない所である。抑〻人生には樣々な悲哀があるが、中にも心の全く亡び失はれることより大きな哀は無い。而して人の生命の盡きる肉體的な死は其の次である。あの太陽を見よ。旦に東方に出て夕に西山に沒する。日が既に昇るに及んで、萬物は燦然として輝き、歷然として一々之を指點することが出來る。又目あり足ある人類は、日の出づるのを待つて始めて夫々の仕事をし、生息を遂げるのである。從つて、日が出れば存し、日が沒すれば亡びるといふやうに、人事の存亡は一に日の出入に係つて居る。獨り人類のみならず、萬物が道に待つ所のあるのも亦この通りで、恰も人事の日に於けるが如く、その生死存亡皆之に循ひ、之を待つてするものである。吾々は一度び天地の成形を受けた以上は、我自ら之を化し亡すことをなさ

り。夫子趨れば亦趨るとは、夫子辯ずれば亦辯ずるなり。夫子馳すれば亦馳すとは、夫子道を言へば回亦道を言ふなり。奔逸絶塵するに及んで、回、後に瞠若たりとは、夫子は言はずして信に、比せずして周に、器なくして民前に蹈んで、然る所以を知らざるのみと。仲尼曰く、惡、察せざるべけんや。夫れ哀は心死より大なるはなく、而して人死亦之に次ぐ。日、東方に出でゝ西極に入る。萬物、比方せざることなし。目あり趾あるもの、是を待つて、後、功を成す。是れ出づれば則ち存し、是れ入れば則ち亡ぶ。萬物も亦然り、待つあつて死し、待つあつて生ず。吾れ一たび其の成形を受けて、化せずして以て盡くるを待ち、物に效うて動かば、日夜隙なうして其の終る所を知らざらん。薫然として其れ形を成す、命を知るも其の前に規ること能はず。丘是を以て日〻に徂く。吾れ終身汝と一臂を交へて之を失ふなり、哀しまざるべけんや。女殆ど吾が著るゝ所以に著るゝのみ、彼は已に盡きたり。而るを、女之を求めて以て有りと爲す。是れ馬を唐肆に求むるなり。吾の女を服するや甚だ忘る。女の吾を服するや亦甚だ忘れよ。然りと雖も、汝奚ぞ患へん。故の吾を忘ると雖も、吾には忘れざる者有りて存せりと。

大意　孔子と顔淵との問答に藉りて、孔子の大は爲すべきも、不言而信底の化は爲すべからず、然る所以を知らずして後に瞠若たることを叙し、形迹を離れて直に造化の樞機に參すべきを説く。

通釋　顔淵が孔子に尋ねて曰ふには「私はすべて先生の爲さる通りにして、先生がお歩きになれば私も亦歩き、先生が小走りにおいでになれば私も亦小走りにゆき、先生が速くお馳せになれば私も亦同様に速く馳せるのでありますが、先生が宛も天馬の空を行くかの樣に、奔逸して塵を見せないほど神速にお走りになる時には、私は到底及

逸絕塵、而回瞠若乎後者、夫子不言而信、不比而周、無器而民蹈乎前、而不知所以然而已矣。仲尼曰、惡、可不察歟。夫哀莫大於心死、而人死亦次之。日出東方、而入於西極。萬物莫不比方。有目有趾者、待是而後成功。是出則存、是入則亡。萬物亦然、有待也而死、有待也而生。吾一受其成形、而不化以待盡、效物而動、日夜無隙而不知其所終。薰然其成形、知命不能規乎其前。丘以是日徂。吾終身與汝交一臂而失之、可不哀與。女殆著乎吾所以著也、彼已盡矣。而女求之以爲有。是求馬於唐肆也。吾服女也甚忘。女服吾也亦甚忘。雖然女奚患焉。雖忘乎故吾、吾有不忘者存。

訓讀　顔淵、仲尼に問うて曰く、夫子歩すれば亦歩し、夫子趨れば亦趨り、夫子馳すれば亦馳す。夫子奔逸絶塵して、回、後に瞠若たりと。夫子曰く、回、何の謂ぞやと。曰く、夫子歩すれば亦歩すとは、夫子言へば亦言ふな

したのである。」丁度其の頃孔子は豫てから雪子に面會することを望んで居て、漸く其の機會を得たのに、いよいよ雪子に會つて見ると一言も發しないので、子路が不審に思つて其の理由を尋ねた。すると孔子は「あの雪子のやうな人は、一見して直に其の身に道の存在して居ることが判るから、何も此の上無用な言説を須ひるには及ばないのだ」と答へた。

語釋 溫伯雪子（姓は溫、名は伯、字は雪子。楚の道を懷ける人。）○中國（楚は所謂南方荊蠻の地なるが故に、魯を指して中國と云ふ。）○明ニ乎禮義一（外面的、形式的な禮儀作法には通曉す。）○陋ニ於知ニ人心一（陋は拙なり。外形、末學に趨つて、本體、本心に昧きを云ふ。）○振（動なり、起なり。ヒラクと訓ず。即ち啓發すること。）○一成レ規一成レ矩（規は圓形を畫く器、矩は方形を畫く器。標準、法度等の意。即ち魯の客人の進退は、一擧一動規矩法則に適つて亂れざるなり。）○一若レ龍一若レ虎（林希逸云ふ、龍虎は文章を成すなり、と。客人の威容堂々乎として、風采の美しいこと。）○其諫レ我也似レ子（客人の我を諫むるや、惻惻の語言を以て兢々として子の父を諫めるが如くするなり。）○其道レ我也似レ父（客人の我を教へ導くことの深切なるは、恰も諄々として子を戒むる父の如し。）○仲尼見レ之而不レ言（孔子雪子を見て已に其の心奥を知るが故に一言をも發せざるなり。）○目撃而道存矣（一見として已に道の存することを知るが故に、更に無用の言説を須ひる要なきを云ふ。孔子と雪子の間、既に心中の秘奥を通じて遺憾なし。是れ即ち言語を忘るゝ所以、不言の教なり。唯々子路は未だその域に達せざるが故に之を問ふなり。）

顏淵問ニ於仲尼一曰、夫子步亦步、夫子趨亦趨、夫子馳亦馳、夫子奔逸絶塵、而回瞠ニ若乎後一矣。夫子曰、回、何謂邪。曰、夫子步亦步也、夫子言亦言也。夫子趨亦趨也、夫子辯亦辯也。夫子馳亦馳也、夫子言レ道回亦言レ道也。及ニ奔

大意 此の章は、道德に不言の敎があり、之を學ばんとする者は、まさに意を得て言を忘るゝの妙諦を知るべきことを說く。

通釋 溫伯雪子が齊の國へ往く道すがら魯の國に宿つた時に、魯の國の者で面會を請ふ者があつた。すると雪子は「それはお斷りする。一體自分は、魯の國の君子達は人爲的な禮儀作法はよく心得て居るが、性來陋劣である爲に、これのみに拘つて、人間の本心を知るには拙いと聞いて居るから、さういふ人には會ひたくない」と云つて、之を拒絕した。やがて齊の國へ往つてその歸り路に再び魯の地に宿を借ると、過ぐる日の人が復た訪ねて來て面會を求めた。そこで雪子は「先日も自分に會ひたいと云ひ、今度又還る時にも態ゝさう云つて來て居る。これほど迄に熱心であるからには、屹度何か自分に益する所があるに違ひない」と云つて、出てその客に面會した。頓て室に入つて歎息を漏した。翌日も亦客に會つて、まだ同じやうに歎息したので、その召使の者が不思議に思つて尋ねて曰ふには「貴方はあの客人に面會なさる度毎に、その後で必ず室へ入つて歎息なさるのは何ういふ譯ですか。」雪子が答へて曰ふには「それではお前にその理由を話して聞かせよう。抑も此の魯の國の君子達は、外面的な坐作進退の禮節はよく辨へて居るが、眞實の人間の本心を知るには拙い。先日自分に面會した人は、その進退は一々規矩準繩に適つて、その從容とした容止は恰も龍虎の如く文彩に富んで居る。さうして自分に諫告するには子の父に於けるが如く、又自分を誘導するには父の子に對するが如く、如何にも尊卑の懸隔を整然と立て、禮儀を飾つて居るが、それらは皆本心から出たものではなく、餘りに空々しい形式に過ぎて居るので、自分は其の弊の甚しいのを歎息

固告子矣、中國之民、明乎禮義、而陋乎知人心。昔之見我者、進退一成規。一成矩。從容一若龍、一若虎。其諫我也似子、其道我也似父。是以歎也。仲尼見之而不言。子路曰、吾子欲見溫伯雪子久矣。見之而不言、何邪。仲尼曰、若夫人者、目擊而道存矣、亦不可以容聲矣。

訓讀 溫伯雪子、齊に適き、魯に舍る。魯人之を見んと請ふものあり。溫伯雪子曰く、不可なり。吾聞く、中國の君子、禮義に明にして、人心を知るに陋しと。吾れ見るを欲せざるなりと。齊に至り、反りて魯に舍る。是の人又見んことを請ふ。溫伯雪子曰く、往くや我を見んことを蘄め、今や又我を見んことを蘄む。是れ必ず以て我を振くこと有らんと。出でゝ客を見、入つて歎ず。明日客を見、又入つて歎ず。其の僕曰く、之の客を見る每に、必ず入つて歎ずるは何ぞやと。曰く、吾れ固より子に告げたり、中國の民は、禮義に明にして、人心を知るに陋しと。昔の我を見る者、進退一は規を成し、一は矩を成す。從容たること一は龍の若く、一は虎の若し。其の我を諫むるや子に似、其の我を導くや父に似たり。是を以て歎ずるなりと。仲尼之を見て言はず。子路曰く、吾子、溫伯雪子を見んと欲するや久し。之を見て言はざるは、何ぞやと。仲尼曰く、夫の人の若きものは、目擊して道、存せり、亦以て聲を容るべからずと。

貌だけは具へて居るけれども、精神の缺けたものである。今にして思へば魏の國君たる人爵などは、眞に自分の身にとつて累となるばかりである。」

語釋　田子方（姓は田、名は無擇、一に無斁に作る、字は子方。魏の賢人にして文侯の師なり。莊子も亦嘗て之に就いて學んだことがあるといふ。）　○稱（稱美、推稱の意。）　○谿工（姓は谿、名は工。田子方と同鄉の者、亦魏の賢人なり。）　○當（道を論ずるの言が肯綮に中るなり。）　○東郭順子（姓は東郭、其の居が郭の東に在り、因て姓とす。名は順子。田子方の師なり。）　○其爲レ人也眞（東郭順子の人と爲りが純眞たること。純眞とは自然に任して、天眞の自然を得ること。）　○人貌而天（顏容は人であるが心は天の如く虛無なり。）　○虛緣而葆レ眞（緣は順なり。心を虛しうして能く物に順ふを云ふ。葆は保なり。眞を保つて其の眞を養ふを云ふ。）　○淸而容レ物（淸は淸廉、淸白。容は寬容なり。）　○物無レ道（世間の無道の物、邪僻の人に對しては、己の態度を正しくして、無言の裡に之を善に移し、人の邪意を消滅せしめる。郭象云ふ。曠然淸虛、己を正しうするのみ、物邪自ら消すと。）　○儻然（茫然自失する貌。）　○吾所レ學者眞土梗耳（土梗は土を以て造れる偶、雨に遇へば忽ちにして壞散す。所謂聖知の言、仁義の行の如きものは恰もこの土偶の如く、至つて粗雜なもので、天衣無縫とも稱すべき天眞の前には忽ち解散し盡すに喩へて云ふ。）　○累（眞性の爲に係累となるを云ふ。）

溫伯雪子適齊、舍於魯。魯人有請見之者。溫伯雪子曰、不可。吾聞中國之君子、明乎禮義。而陋於知人心。吾不欲見也。至於齊、反舍於魯。是人也又請見。溫伯雪子曰、往也蘄見我、今也又蘄見我。是必有以振我也。出而見客、入而歎。明日見客、又入而歎。其僕曰、每見之客也、必入而歎、何邪。曰、吾

通釋 田子方が或る時魏の文侯の前に侍つて居つた時に、屢〻谿工といふ人物の賢いことを稱揚した。すると文侯は「その谿工といふのは汝の先生か」と問ふた。田子方は「いゝえ然うではありません。彼は私と同郷の者でありますが、彼の道に就いて論ずる所が屢〻肯綮に中つてをるので、私は彼を譽めるのであります」と答へた。文侯が重ねて曰ふには「それならば汝には先生は無いのか。」子方が曰ふには「あります」と。文侯が云ふには「汝の先生といふのは一體誰だ。」子方が曰ふには「東郭順子といふ人であります。」文侯が曰ふには「それならば汝は何故これ迄一度もその順子のことを稱揚しないのか。」子方が曰ふには「あの順子の人と爲りは、此の上もなく純眞で少しも飾り氣が無く、容貌は人であるけれども、心は天と合一して居り、自然の大徳を具へて己を虛しくし、物に順つて天眞を失はず、淸廉であり乍ら而も能く萬物を包容し、人に無道な行があつても、之に向つて言葉を以て責めるといふやうなことはなく、唯〻自分の容を正しくして、彼をして自ら感悟して不肖の念を自然に消滅させるやうに致します。このやうに不言の裡に大きな感化力を持つてをる順子は、その徳が餘りにも大きくて、私の如き者には到底彼を稱揚するなど〻云ふことは出來ませんから、今まで噂をしなかつたのであります。」子方が退出した後、文侯は茫然自失して終日無言の儘であつたが、頓て御前に侍つてをる臣下の者を召して曰ふには「あゝ、全徳の君子には遠く及ばない。あの順子は道徳完全な大人君子である。始め自分は聖智の言や、仁義の行を以て究極のものだと考へて居つたが、今子方の先生順子の事を聞くに及んで、自分の形體は解散して動くことさへ出來ず、自分の口は鉗んで了つて言ふべき言葉も無い。自分が今日まで學んで來た所のものは、云はゞ眞に土偶の如きもので、

之意也消。無擇何足以稱之。子方出。文侯儻然終日不言。召前立臣而語之曰、遠矣、全德之君子。始吾以聖知之言、仁義之行、爲至矣。吾聞子方之師、吾形解而不欲動。口鉗而不欲言。吾所學者眞土梗耳、夫魏眞爲我累耳。

訓讀　田子方、魏の文侯に侍坐し、數〻谿工を稱す。文侯曰く、谿工は子の師かと。子方曰く、非なり、無擇の里人なり。道を稱へて數〻當る。故に無擇之を稱すと。文侯曰く、然らば則ち子には師無きやと。子方曰く、有りと。曰く、子の師は誰ぞやと。子方曰く、東郭順子なりと。文侯曰く、然らば則ち、夫子何の故に未だ嘗て之を稱せざると。子方曰く、其の人となりや眞、人貌にして天、虛緣にして眞を葆ち、淸にして物を容る。物、道無ければ、容を正しうして以て之を悟し、人の意をして消せしむ。無擇、何ぞ以て之を稱するに足らんと。子方出づ。文侯儻然として終日言はず。前に立てる臣を召して之に語つて曰く、遠し、全德の君子。始め、吾れ聖知の言、仁義の行を以て至れりと爲す。吾、子方の師を聞いて、吾が形解けて動くことを欲せず。口鉗みて言ふことを欲せず。吾が學ぶ所のものは、眞に土梗のみ、夫れ魏は眞に我が累たるのみと。

大意　此の章は、眞の道は精深に在り、世の俗學者流の粗迹は到底言ふに足らざることを論ず。

外篇　田子方二十一

叙説　道は天人の閒に分見して死生の外に獨存する。而も之を言辯形迹の閒に求めることは出來ない。全德の君子は此の道を心に存し、能くその眞を保つ。然るに世上の人を見るに、皆その糟粕を取つてその精華を遺れ、その形迹に拘つてその神理を喪ふてをる。宜しく得喪禍福は云ふも更なり、死生存亡を忘却し去つて四肢百體を視ること塵垢の如くし、心を物初に遊ばしめて至美至樂の境に到達せんことを期すべきことを論ず。篇中の東郭順子、溫伯雪子の如き、皆所謂有道の人である。之を讀むに當つて內篇の大宗師篇を併せ看れば、一層瞭然理會することが出來るであらう。

田子方侍坐於魏文侯。數稱谿工。文侯曰、谿工子之師邪。子方曰、非也、無擇之里人也。稱道數當。故無擇稱之。文侯曰、然則子無師邪。子方曰、有。曰、子之師誰邪。子方曰、東郭順子。文侯曰、然則夫子何故未嘗稱之。子方曰、其爲人也眞、人貌而天、虛緣而葆眞、淸而容物。物無道、正容以悟之、使人

惡、吾不知其惡也。陽子曰、弟子記之。行賢而去自賢之行、安往而不愛哉。

訓讀　陽子宋に之いて、逆旅に宿す。逆旅の人、妾二人あり。其の一人は美、其の一人は惡、惡なる者貴ばれて美なる者賤しまる。陽子其の故を問ふ。逆旅の小子對へて曰く、其の美なるものは自ら美とす、吾れ其の美を知らざるなり。其の惡なるものは自ら惡とす、吾れ其の惡を知らざるなりと。陽子曰く、弟子之を記せよ。行賢にして自ら賢とするの行を去らば、安くに往くとして愛せられざらんやと。

大意　此の章は、自ら賢とするの行を去るべきことを論ず。

通釋　陽子が宋の國へ往つて旅舍に泊つた時に、其の家の主人に二人の妾があつたが、一人は容色美しく、一人は醜かつた。然るにその醜い方が愛せられて、美しい方が賤まれて居つた。陽子は不審に思つて其の理由を尋ねると、旅舍の主人が答へて曰ふには「あの美し方の女は自ら其の美しさを鼻にかけて驕ぶつて居るので、私は厭氣がさして別に美しいとも感じません。ですがあの醜い方の女は自ら其の不器量なことを知つて謙遜して居るので、その優しい心根に感じて容の醜いことも忘れてしまふのです」と。陽子は之を聞いて側の弟子達に向つて戒めて曰ふには「お前達はよく之を記憶しておけ、人に賢れた行をして、而も自ら賢なりと矜るやうな態度をなくしてしまつたならば、何處へ往つても愛せられないことはないであらう」と。

語釋　逆旅小子（旅舍の主人を指す。甕谷云ふ、其美者自美云云とは自ら是れ逆旅の主人の語にして、決して、小子（賤者、給仕などを云ふ。）の言に非ず。逆旅の小子とは宜しく逆旅の人に作るべしと。）

鵲は自分の額に觸れて栗林に入つて其の眞性を忘れ、自分は遂に栗林の番人に栗盜人と疑はれて罵られるやうな恥辱を蒙つた。それ故自分は其の事を愧ぢ悔いて、久しく庭にも出ないのだ」と云つた。

語釋 彫陵之樊（彫陵は栗園の名、樊は藩なり、マガキと訓ず。）○異鵲（種類の異つた見慣れぬカササギ。）○目大運寸（運は員なり。目の大さは回り一寸あり。）○感（觸なり。）○顙（額なり。）○翼殷不レ逝（殷は大なり。逝は往なり。大なる翼を有ち乍ら高く飛ばざるなり。）○蹇レ裳躩歩（蹇裳は衣裳をたぐり上げること。躩歩は疾行なり。足を速めて歩むこと。）○彈（彈き弓。）○留（伺候すること。ウカヾフなり。）○執レ翳（翳は隱なり、蔽なり。司馬彪云ふ、草を執りて自ら翳ふなりと。）○見レ得而忘二其形一（蟬を得んことにのみ目を注け、心を奪はれて、己の身の異鵲に狙はれて居ることに氣付かざるなり。）○利レ之（我が利として之に付け入るなり。）○眞（性命の眞。）○怵然（驚き惕る〻貌。）○物固相累、二類相召也（召は招と同じ。凡ての物は元來相累はし、利害の二類は互に招き合ふものなり。郭注に云ふ、相ひに利を爲すものは恒に相ひに累を爲すと。又云ふ、夫れ物に欲あるものは、物も亦之を欲することありと。斯くて欲を環つて互に相害ふに至るを云ふ。）○虞人（栗園を守る番人。）○逐而誶レ之（番人は莊子の逃げ出したのを見て、栗盜人と誤認して後を逐ひかけて罵り問ふた。）○不レ庭（庭は司馬彪云ふ、出て庭中に座するなりと。）○守レ形而忘レ身（林希逸云ふ、形を守るとは生を養ふものなり。我れ生を養ふの學を爲せしに、忽ち鵲を逐ふに因つて其の身を忘れたり。是れ慾を以て其の理を汨れるなりと。）○觀二於濁水一而迷二於淸淵一（濁水は物に動かされて利を逐ふに喩へ、淸淵は物外に逍遙して玄覽するに喩へたるなり。異鵲を見て之を獲んとして心を奪はれて、己の眞性を失ひたるを云ふ。）○夫子（成疏に云ふ、莊周老聃を師とす。故に老子を稱して夫子と爲すなりと。）○入二其俗一從二其俗一（聖人達者は塵に同じうし俗に入るものなり。而して世俗には諸々の禁令あり。故に其の俗に入れば其の禁令に從ふなり。然るに今莊子は彫陵に遊んで栗を盜むと疑はれたが、此は物欲に迷ふて輕々しく憲綱を犯したるものなりとして自ら悔い責めたるなり。（成疏））

陽子之レ宋ニ、宿ニ於逆旅ニ。逆旅ノ人有リ妾二人。其ノ一人ハ美、其ノ一人ハ惡。惡ナル者ハ貴バレテ而美ナル者ハ賤マル。陽子問フ其ノ故ヲ。逆旅ノ小子對ヘテ曰ク、其ノ美ナル者ハ自ラ美トス、吾レ不レ知ラ其ノ美ヲ也。其ノ惡ナル者ハ自ラ

の翼の大きさは七尺、目は圓さ一寸ほどもあつた。その鵲は莊子の額に當つて栗の木の林の中に止つた。莊子は之を見て熟ゝ考へるに「あの樣に大きな翼を持ち乍ら高く飛ぶことも出來ず、あの樣に圓い目を持ち乍らよく視ることが出來ないといふのは、一體何ういふ鳥であらう」と、獨り斯く考へつゝ、衣裳をまくり上げ足を早めて歩いて、彈弓を把つて之を仕留めようと伺つて居た。その時フト又一方を見ると、一匹の蟬がよい木蔭に隱れて、其の身を忘れて樂しんで居たのに、蟷螂が草葉の蔭に身を潜めて、ソツと其の蟬を捕らうとして、專ら其の方にばかり心を奪られて、自分の身を忘れて居ると、先刻の異しい鵲はそれに乘じて之を獲ようとして、又そのことに心を奪はれて、自分の眞性を忘れ、自分が莊子に狙はれて居ることに氣が付かなかつた。莊子は此の樣を見て、怵然として驚き惕れて「あゝ、何と恐しいことであらう。凡ての物は本來互に相累はし、利害の二類は互に相招き合ふものである。物欲といふのは恐しいものである」と云ひ棄てゝ、彈弓を抛げ棄てゝ逃げ歸つた。すると栗林の番人は、莊子を栗盗人と間違へて、莊子の後を逐ひかけて罵つた。頓て家へ歸つて後、莊子は思を潜め、考に耽つて、その後三箇月ばかり、庭先までも出なかつた。そこで弟子の藺且が不思議に思つて「先生は此の頃少しもお庭へお出ましになりませんが、何うなさいましたのですか」と尋ねると、莊子の答に「自分は平生から生を養ふことを學んでおき乍ら、一旦異しい鵲を見ると、忽ち自分の身を忘れて仕舞つた。恰度濁水に見とれて清淵に迷ふやうに、人欲を以て物に動かされて天道の自然を汚してしまつた。且つ自分は先生の老子から、其の俗に入つては其の俗に從つて、其の土地の禁令を破つてはならないといふことを聞いて居る。然るに今、自分は彫陵に遊んで己の身を忘れ、

眞。栗林虞人以吾爲戮。吾所以不庭也。

訓讀 莊周雕陵の樊に遊ぶ。一異鵲の南方より來るものを覩る。翼の廣さ七尺、目の大さ運寸、周の顙に感れて、栗林に集まる。莊周曰く、此れ何の鳥ぞや。翼殷なれども逝かず。目大なれども、覩ずと。裳を蹇げて躩歩し、彈を執つて之を留めんとす。覩れば、一蟬方に美陰を得て、其の身を忘れ、螳蜋翳を執りて之を搏たんとし、得るを見て其の形を忘れ、異鵲從つて之を利し、利を見て其の眞を忘る。莊周怵然として曰く、噫、物固より相累はし、二類相召くなりと。彈を捐てゝ反り走る。虞人逐ひて之を誶る。莊周反り入つて、三月庭せず。藺且從つて之を問ふ。夫子何爲れぞ、頃間甚だ庭せざるやと。莊周曰く、吾れ形を守つて身を忘れ、濁水を觀て、清淵に迷へり。且つ吾れ諸を夫子に聞く。曰く、其の俗に入れば其の俗に從ふと。今吾れ雕陵に遊んで吾が身を忘れ、異鵲吾が顙に感れ栗林に游んで眞を忘る。栗林の虞人吾を以て戮を爲せり。吾が庭せざる所以なりと。

大意 此の章は物の利益を逐ふ者は、必ず己の害を忘れて禍に罹ることを論ず。宣穎の評に曰く「接連して數層の妙境を寫し出し、人をして目視るに及ばざるの趣有らしむ。蟬一層なり、螳螂一層なり、異鵲また一層なり。己に數層の上に、又虞人逐誶の一層を轉出して當身に收入す。幽を窮め險を涉るの後、又一勝に轉ずるが如し。眞に文家の樂事なり。」

通釋 莊子が或る日彫陵といふ所の籬に遊んだ時に、フト一種異つた鵲が南の方から飛んで來るのを見たが、そ

○正而待レ之而已耳（死生終始を遺れてたゞ正眞を抱守して自然の化を待つべきのみ。）○有レ人天也、有レ天亦天也（人は天の生ずる所、天も亦造化の爲す所、人天共に自然なり。）○人之不能レ有レ天、性也（宣穎云ふ「人或は其の天を全有すること、能はざるは性分の加損する所あるを以ての故なり」と。）○晏然體逝而終矣（晏は安なり。宣穎云ふ「天は日に逝いて停らず。聖人は安然として其の日に逝く者を體して其の身を終ふ。又惡くに己を以て天と抗するもの有らんや。此れ人と天と一なる所以なり」と。化に順つて逝き、自然に任せて終つて心を擾すことなきを云ふなり。）

莊周遊二乎雕陵之樊一。覩二一異鵲自二南方一來者一。翼廣七尺、目大運寸、感二周之顙一而集二於栗林一。莊周曰、此何鳥哉。翼殷不レ逝。目大不レ覩。蹇レ裳躩步、執レ彈而留レ之。覩二一蟬方得二美蔭一而忘一其身一。螳蜋執レ翳而搏レ之、見レ得而忘二其形一。異鵲從而利レ之、見レ利而忘二其眞一。莊周怵然曰、噫、物固相累、二類相召也。捐レ彈而反走。虞人逐而誶レ之。莊周反入、三月不レ庭。藺且從而問レ之。夫子何爲頃間甚不レ庭乎。莊周曰、吾守レ形而忘レ身、觀二於濁水一而迷二於清淵一。且吾聞二諸夫子一、曰、入二其俗一從二其俗一。今吾遊二於雕陵一而忘二吾身一、異鵲感二吾顙一、遊二於栗林一而忘

に順はない爲である。然るに聖人に在つては終始不二、死生一如の理に通じて居るから、安んじて化と倶に往き、自然に任せて終るので、即ち天と合一したものと云ふべきである。」

語釋 槁木、槁枝（林西仲云ふ、槁木は几なり、槁枝は策なりと。） ○猋氏之風（炎氏は神農氏。猋氏の風とは猋氏の頌なり。） ○無レ數（節奏無きこと。） ○無二宮角一（五音に合はざること。） ○犂然有レ當二於人之心一（犂然は田を犂く時土の釋然たるを云ふ。當は適當してよく合ふなり。節奏聲調は無くとも自然に人の心に適當せるなり。） ○端拱還目（端拱は端然として手を拱いて立つ。還目、音セン、睛を轉じて見ること。） ○恐二其廣レ己而造レ大也、愛レ己而造ヒ哀也（其は顏回を指す。己とは孔子自ら謂ふなり。造は至なり。己の道德を推し廣めて大に至らんことを求め、己が身を愛して自ら危難を招き哀しむに至つてかゝる歌を謳つて居るものと顏回が思ひ誤らんことを危惧するなり。自廣、自愛共に己に執着してその累を受ける所以である。） ○無レ受二天損一易（自然の爲せる損を受けて窮阨に處しても、安んじて樂を改めないことは易い。命に安んずるなり。） ○無レ受二人益一難（人爲の益即ち富貴榮華を受け乍ら常に心を擾さずに保つことは難い。即ち富貴に淫せられ、貧賤に移されるものである。） ○無二始而非一レ卒也（卒は終なり。成疏に云ふ、今に於て始となるものは、昨に於て終となる。始無く終無く、生無く死無きことを明かにせんと欲す。既に死無く生無くんば、何んぞ窮塞に之れ哀しむことあらんやと。終始交々相代つて變化極りなきことを云ふなり。） ○人與レ天一也、夫今之歌者其誰乎（人と天とは皆自然に基づいて居るのだから、其の自然に任せたならば、今歌ふてをる歌も果して我が歌ふのか天が歌ふのか判らない。物我を兼ね忘れた境地である。） ○窮桎不レ行（窮困して通ぜざるなり。） ○天地之行也、運物之泄也（泄は發なり。窮通倶に命なることは、天地の氣が流行し、萬物を運動せしめ、之を發生するのを遏めることの出來ないのと同じである、何れも皆自然に過ぎない。） ○與レ之偕逝（之は造化の自然なり。偕は倶、逝は往なり。化に順つて倶に往くこと。） ○不二敢去一レ之（之は君主の命、君命逃る所無きを云ふ。） ○初用四達（初用は初進なり。初進の時四方に障礙なく順境に立つこと。） ○物之所レ利、乃非レ己也（これは身外の物から受ける利益であつて、己が本來具有せる所のものではない。） ○盜、竊（共に爵祿に對して云ふ。吾が本有に非ざる爵祿を取るは、恰も盜竊の行と異らず。） ○鷾鴯（音イジ、燕なり。） ○不二給視一（あまねく視回さず。或は不給は不暇、視回すに暇あらざるの意とす。亦通ず。） ○賓（日賓、日に卿へたもの。） ○襲（入なり。） ○社稷存レ焉爾（燕が人を畏れ乍ら而も人家に入らざれば巣を構へる所無きは、恰も社稷の神を一度或る場所に奠祭すれば、容易に他に移すことの出來ざるが如きものである。人益を受く可からざることを知り乍ら、此の世間を離るゝこと能はざるに喩へたるなり。（林西仲に據る。）） ○化其萬化而不レ知二其禪一レ之者（禪は代なり。道は一切萬有を生じて變化窮りなく、日夜に新陳代謝して停らないものであるが、人はその中に在つてそれが如何にして行はれるかを知らぬ。） ○焉知二其所一レ終、焉知二其所一レ始（林西仲云ふ、「一氣禪りて萬化窮り無し。誰か之を爲すやを知らず。或は之を益して損し、或は之を損して益す。其の始を知ること莫し、是の故に先迎すべからず。其の終を知ることなし、是の故に預待すべからざるなり」と。）

迄のことである。君子や賢人は竊に爵祿を取るといふやうなことはしないものである。而るに吾獨り安然として來るに任せて之を取るのは何故であるか。見よ、あの燕といふ鳥は輕妙であつて、鳥の中でも害を避ける智慧の最も勝れたものである。人の家に入つて巣を作らうとして、適當な所を得なければ、洽く視回すまでもなく飛び出して、口に啣へた物を落しても、其の儘拾ひもせずに飛び去つて了ふけれども燕は此の樣に人を畏れ乍らも、結局人家に據らなければならないのは、燕といふものは人家を離れては他に身を安んずべき地がないからであつて、恰も社稷の神々を一度鎭坐してしまへば、復たび他の處へ移すことが出來ないやうなものである。要するに人は人爲の益を受くべきではないと知つては居るけれども、人間の社會に處してゆく以上已むを得ないのである。そして燕が人に據つて人に害せられないやうに、人も亦人生に在つて富貴を受けて、而も人から災を受けないといふことは易いことではない。」顏回が又尋ねて曰ふには「それでは始は卽ち終であるとは何ういふことですか。」孔子が曰ふには「かの道は一切萬物を生じて變化窮りなく、人はその萬化の中に在り乍ら、その新陳代謝が如何にして行はれるか知ることは出來ない。現在すら猶且つ解らないのに、どうしてその日夜に相代つて新たなる變化の何時始まり、そして何時終るかを知ることが出來るものであらう。唯ゞ正眞を守つて自然の化を待つより他はないのだ。」顏回は又重ねて曰ふには「では最後に人と天とが一つであるとは何ういふことですか。」孔子が曰ふには「人が此の世に生れ出づるのは、自分の力ではなくして自然に依つて生ずるのであり、天も亦自然に依るので、人天共に皆自然である。けれども人が往々にして天與の自然の儘を保つことが出來ないのは、自ら人性の上に加損する所があつて自然

であつた。そこで傍に居た弟子の顔回は居住ひを正しくし、手を拱き、瞳を轉じて孔子の方を窺つた。すると孔子は、顔回が誤解して、孔子が自ら己の道德を廣めて大に至らんことを求め、己の身を愛して危難に遇ひ哀に至つてかゝる歌を歌ふと思ふことを虞れて顔回に向つて曰ふには「回よ、天の自然の損を受けて窮阨に陷つても安んじて樂しんでゐるのは難しいことではないが、人爲の益を受けて富貴榮達に居る時に常に心を擾さずに平靜を保つのは容易に出來ることではない。又物の始めは卽ち終であつて變化の窮り無いことを知つて、心を以て物を逐はず、且つ人と天とは畢竟一つであつて皆自然に本づいてゐるのだから、其の自然に任せて了へば、今歌つて居る歌も果して誰が歌つて居るのか。人か、天か。必ずしも我ではないのだ。」そこで顔回が尋ねて曰ふには「自然の損を受けて動搖しないのは易いといふのは何ういふことですか。」孔子が曰ふには、「飢渴寒暑の患に遭ひ、窮塞して打開することが出來なくなるのも皆是れ天命であつて、恰度、天地が絕えず運行し、萬物が一旦發泄するや中途で之を止めることが出來ないのと同じことであつて、唯ゞ造化に順つて倶に行くより外はないといふことを謂つたものである。人臣たる者は、君命を受けては之を逃れ去らない。臣としての道を執り行ふ者すら猶且つさうである。況して天から命ぜられる窮阨に於いては云ふ迄もないことで、唯ゞ之に處して樂しむより外はないのだ。」顔回は重ねて尋ねて曰ふには「それでは人爲の利益を受けないことが難しいとは何ういふことですか。」孔子が答へて曰ふには「人が初めて進まうとする時に、何れの方にも障礙が無く、極めて順境に立つて限りなく爵祿が已に加はるのは、此は外から來る利益であつて、自分が本來有つて居るものではない。唯ゞ吾が命の偶然外に存するものがあつて然うなつた

り。夫れ今の歌ふものは其れ誰ぞやと。回曰く、敢て天損を受くること無きの易きを問ふと。仲尼曰く、饑渇寒暑、窮桎して行はれざるは、天地の行なり、運物の泄なり。之と偕に遊くの謂を言ふなり。人臣たるものは、敢へて之を去らず、臣の道を執るも猶ほ是の若し、而るを況んや天に待つ所以をやと。何をか人の益を受くること無きは難しと謂ふと。仲尼曰く、始め用ひて四達し、爵祿並び至つて窮まらず。物の利する所は、乃ち己に非ざるなり。吾が命の外に在るものあればなり。君子盜を爲さず、賢人竊を爲さず、吾れ若うて之を取るは何ぞや。故に曰く、鳥は鷾鴯より知なるは莫し、目の宜しく處るべからざる所は、給視せず。其の實を落すと雖も、之を棄てゝ走る。其の人を畏るゝや、而かも諸を人の間に襲るは、社稷焉に存せるのみと。何をか始めとして卒に非ざることなしと謂ふと。仲尼曰く、化は其れ萬化して、其の之を禪るものを知らず。焉んぞ其の終る所を知らん。焉んぞ其の始まる所を知らん。正にして之を待たんのみと。何をか人と天と一なりと謂ふやと。仲尼曰く、人あるは天なり。天あるも亦天なり、人の天あること能はざるは性なり。聖人は晏然として、體逝して終ると。

〔大意〕此の章も亦窮通の命なることを知つて、安んじて時と倶に化し、人天合一の極致を悟つて、之に處るべきことを論ず。

〔通釋〕孔子が陳蔡の間に困窮して、七日の間も火食しなかつたほどであつたが、泰然自若として左手は机に凭りかゝり、右手に策を撃ち拍子をとつて神農氏の歌を歌つた。其の器具はあつても節奏は無く、其の聲はあつても五音を備へなかつたが、拍子木の聲と歌ふ聲とが恰も犂で田を耕す時のやうに、釋然と分別して、人の心に適ふやう

言與之偕逝之謂也。爲人臣者不敢去之、執臣之道猶若是。而況乎所以待天乎。何謂無受人益難。仲尼曰、始用四達、爵祿並至而不窮。物之所利、乃非己也。吾命有在外者也。君子不爲盜、賢人不爲竊。吾若取之何哉。故曰、鳥莫知於鷾鴯。目之所不宜處不給視。雖落其實、棄之而走。其畏人也、而襲諸人閒、社稷存焉爾。何謂無始而非卒。仲尼曰。化其萬化而不知其禪之者。焉知其所終。焉知其所始。正而待之而已耳。何謂人與天一邪。仲尼曰、有人天也、有天亦天也。人之不能有天、性也。聖人晏然體逝而終矣。

訓讀　孔子、陳蔡の閒に窮して、七日火食せず。左、槁木に據り、右、槁枝を擊つて、焱氏の風を歌ふ。其の具あつて、其の數なく、其の聲あつて、宮角なし。木聲と人聲と、犁然として人の心に當ることあり。顏回、端拱還目して之を窺ふ。仲尼、其の己を廣くして大とするに造り、己を愛して哀に造らんことを恐る。曰く、回、天の損を受くること無きは易く、人の益を受くること無きは難し。始として卒に非ざること無きなり。人と天と一な

つたからではなくて、その身をおいて居る狀勢が不便な爲に技能を十分に發揮することが出來ないからである。今斯くの如き暗君亂臣ばかりの時世に在つては、傭れないやうにと思つても出來ることではない。あの忠臣比干が紂王の無道を諫めて心を剖かれたことを見てもわかることである。」

語釋　大布(粗布なり。)　○正レ緳係レ履(緳は腰帶、正は結なり。係履は履の弊れたのを繩で縛り付けること。)　○騰猿(木登りする猿。)　○枏梓豫章(枏は音ナン、楠なり。梓は梓、豫章は楠の一種。何れも端直の好木なり。)　○攬蔓(把捉すること。)　○王長(自大、自得の貌。)　○雖二羿逢蒙一不レ能二眄睨一也(羿は古の射を善くせる人、逢蒙はその弟子。眄睨は狙ふ意。害すること能はざるを云ふ。)　賢人の時に遭ひ地を得たるに喩ふ。)　○柘棘枳枸(柘は音シヤ。ツゲと訓ず。棘はイバラ。枳枸はカラタチ。皆刺のある惡木なり。士の亂世に逢へるに喩へて云ふ。)　○急(窘迫危難を云ふ。)　○不レ柔(柔輭に動作するを得ざるなり。)　○處レ勢(身を處する所の狀勢なり。)　○比干剖レ心(殷の紂王無道暴戾にして忠臣比干の諷諫せしを怒り、其の心を剖きて殺せる故事。)　○徵(徵驗なり。)

孔子窮二於陳蔡之閒一、七日不二火食一。左據二槁木一、右擊二槁枝一、而歌二猋氏之風一。有二其具一而無二其數一、有二其聲一而無二宮角一。木聲與二人聲一、犁然有レ當二於人之心一。顏回端拱還レ目而窺レ之。仲尼恐二其廣レ己而造レ大也、愛レ己而造レ哀也。曰、回、無レ受二天損一易。無レ受二人益一難。無レ始而非レ卒也。人與レ天一也。夫今之歌者其誰乎。回曰、敢問下無レ受二天損一易上。仲尼曰、饑渴寒暑、窮桎不レ行、天地之行也、運物之泄也。

子曰く、貧なり、憊れたるに非ざるなり。士の道德有つて行ふこと能はざるは憊れたるなり。衣弊れ、履穿ちたるは、貧なり、憊れたるに非ざるなり。此れ所謂時に遇ふに非ざるなり。王獨り夫の騰猿を見ずや。其の柟梓豫章を得るや、其の枝に攬蔓して、其の閒に王長す、羿・蓬蒙と雖も、眄睨すること能はず。其の柘棘枳枸の閒を得るに及んでや、危行側視、振動悼慄す。此れ筋骨急を加へて柔ならざることあるに非ざるなり。勢に處ること便ならずして、未だ以て其の能を逞しくするに足らざればなり。今、昏上亂相の閒に處りて、憊るゝこと無からんと欲すとも、奚ぞ得べけんや。此れ比干の心を剖かるゝ、徵あるかなと。

大意 此の一章は道德に處するものは形を以て論ずべからざることを說く。

通釋 莊子が或る日、所々補綴をした粗布を衣て、帶を結び、壞れかゝつた履を繩で縛り付けて、如何にも貧弱な風采で魏の惠王を訪問すると、惠王が之を眺めて曰ふには「先生は何うしてそんなに病み憊れたのか。」莊子が答へて曰ふには「これは貧であつて憊ではない。士たる者が內に道德を懷き乍ら之を實現することが出來ないのは憊れたと云ふべきであるが、着物が破れ、履物に穴が明いてゐたとて、貧しいとは云へるが憊れたとは云へない。唯それは所謂時に遭はないのである。王樣よ、あの木に騰る猿を御存じであらう。あの猿といふものは、柟、梓、豫章のやうな屈強な好い木を得て、其の枝につかまつて得意になつて居る時には、昔の射の上手な羿や、其の弟子の蓬蒙などでさへも到底之を射留めることは出來ない。所が柘、棘、枳枸のやうに刺の生えた惡い木を得た場合には、びく〳〵して歩き、側をじろ〳〵と視て、ぶる〳〵慄えながら畏怖して居る。これは危難の爲に身體が硬くな

○徐行翔佯（悠揚迫らず徐ろに歩み、逍遥自得せるなり。）　○乃命（舊本眞冷に作る。）　○不レ離、不レ勞（物情の自然に順へば、即ち道と共に萬物に合する所以で物と對立せず、率直であれば心を安排に勞することがない。）　○絶レ學捐レ書（有爲の學問を棄て、聖迹の書を抛つたり。）　○形莫レ如レ緣（形は我が形體。緣は成玄英云ふ、「形順なれば則ち常に物の性に合す」と。緣は順なり。）　○揖（拱揖の禮。）　○其愛益加レ進（從來の形式的虚文は捨てられて、却つて深い眞意が流露した。）　○情莫レ若レ率（率は率直、眞率の意。成玄英云ふ、「率なれば則ち用ひて弊なし」と。）　○不ニ求レ文以待一レ形（既に不離不勞、天然眞率であれば、更に身外の禮文を以て我が形體を修飾するの要なきなり。）

莊子衣ニ大布一而補レ之、正レ緳係レ履、而過ニ魏王一。魏王曰、何先生之憊邪。莊子曰、貧也、非レ憊也。士有ニ道德一不レ能レ行、憊也。衣弊履穿、貧也、非レ憊也。此所レ謂非レ遭レ時也。王獨不レ見ニ夫騰猿一乎。其得ニ柟梓豫章一也、攬ニ蔓其枝一、而王ニ長其閒一、雖ニ羿蓬蒙一不レ能ニ眄睨一也。及三其得二柘棘枳枸之閒一也、危行側視、振動悼慄。此筋骨非レ有ニ加レ急而不一レ柔也。處レ勢不レ便、未レ足三以逞二其能一也。今處ニ昏上亂相之閒一、而欲レ無レ憊。奚可レ得邪。此比干之見レ剖レ心徵也夫。

訓讀　莊子大布を衣て之を補ひ、緳を正し履を係けて、魏王に過ぎる。魏王曰く、何ぞ先生の憊れたるやと。莊

して離れるのだ。君の門弟交友の去つてゆくのも亦此の類であらう。」孔子は之を聞いて「御教訓は謹んで承りました。」と云つて、やがて徐行逍遙して自分の家に歸つて、それから後は學問を絶ち書物を抛つて了ひ、弟子達も揖讓の禮を行はなくなつたが、師弟の愛は益ゝ加はつた。他日又子桑雽は斯う曰つた「昔、舜が將に死なんとする時に、禹に命じて「汝、よく心せよ。我が形體は物情の自然に順ふに若くはなく、情は率直なるに若くはない。自然に順へば、外圓滿にして他の人物と離反せず、率直であれば、内方正にして其の性に逆はず、斯くして離れず勞せずして自然に任せたならば、身外の文飾を以て我が形體を飾るに及ばない。固より更に他の物に資る要は毫しもないのである」と云つたが、是こそ本當に世に處し、人と交つて身を全うすることの出來る道である。」

語釋　子桑雽（姓は桑、名は雽。隱者なり。或は内篇大宗師の子桑戸と同一人なりとも云ふ。）　○再逐二於魯一（孔子は魯に仕へた時、三都を墮つの策を獻じて成らず、爲に去つて衞に行く。時に魯の定公十三年、孔子年五十六歲。後哀公十一年六十九歲を以て還る迄凡そ十四年の間諸國を歷遊した。その間魯に反ること兩度あり。故に孔子が其生涯を通じて國を去つたのは三度である。こゝ再逐と云ふのは必ずしも其の實數なるや否やを問ふの要は無い。但し、子桑雽との問答を、陳蔡の間の厄（哀公六年、孔子六十四歲）を距ること遠からざる間の出來事とすれば、その數に合ふ。）　○伐二樹於宋一（孔子が哀公二年再び魯を去つて衞に適き、久しからずして去り、曹を過ぎて宋に適き、弟子と共に禮を大樹の下に習つた。時に宋の司馬桓魋なる者が孔子を害せんとして其の樹を拔いた。孔子は「天德を予に生ぜり。桓魋其れ予を如何せん。」（論語、述而）と云つて、自若たるものがあつた。）　○削二迹於衞一（衞から追放せられるなり。孔子は衞に往來せしこと數度あり。歡迎せられざりしことは「孔子魯衞に悅ばれず。」（孟子萬章上）とあるに依るも明かである。）　○窮二於商周一（宋は殷の後、こゝに商とは宋を指す。孔子が宋及周に在つて遂に用ひられるに至らなかつたので之を窮と云ふ。）　○林回（姓は林、名は回、假の賢人なり。）　○假人之亡（假は國の名。成玄英は、晉に亡さると云へり。亡は亡命なり。）　○爲二其布一與（布は泉布。價の爲とすれば、赤子を賣つて得る所のものは千金に及ばぬ。）　○累（厄介になること。）　○以レ利合（利といふ點を通じて結合されたもの。）　○以レ天屬（屬は連續なり。亦結合の意。璧は利を以て結合せられた人爲的なものであるが、父子の關係は天倫を以て連續する先天的結合である。）　○迫（近なり。さしせまること。）　○遠（懸絶せること。）　○君子之交淡若レ水、小人之交甘若レ醴（人口に膾炙せる語なり。醴はアマザケ。君子は利欲の念無きが故にその交情は淡泊であり、それ故に又道に合し、從つて深く相結んで離れることがない。小人の利合醴交の徒は正に之に反して、利害相背くに到れば俄に絶交するに到る。利を以て合するものは、親きに似て實は淺薄なる結合に過ぎない。）

處世の要諦を論ず。林西仲の評に曰く「此の段、己を虚しうするに根ざし來る。言ふこゝろは、人と交を定むるには、亦當に文を去つて質に任せ、相屬するに天を以てすべきなり。末に忽ち別に一段を起し、斷に似、續に似たり。古穆奇奥にして、變幻測ることなし。」

通釋 孔子が子桑雽に向つて尋ねて曰ふには「自分は一度ならず二度までも本國の魯から逐ひ出され、宋に行けば樹を伐られ、衛に行けば追放せられ、商周では窮乏に遭ひ、陳蔡の間では圍まれた。斯の様に到る所で災難に遭つて、親しかつた人達との交も益々疎くなつて仕舞ひ、門弟や朋友なども皆離れてゆくばかりであるが、一體これは何ういふ譯だらう。」子桑雽が答へて曰ふには「君は假といふ國の人の亡命した話を聞いて知つて居るだらう。假の林回といふ人は價千金もする玉を打棄てゝ、赤子を背に負うて走つた。或人が之を見て不思議に思つて「價値から見れば、赤子などは賣つても幾程にもならないし、又係累といふ點から云つても、赤子は厄介千萬なものである。然るに千金の玉を棄てゝ赤子を負うて走るのは何うした譯か」と尋ねると、林回は之に答へて「玉といふものはもと利を以て合つたものであるが、赤子は天を以て吾に屬したものである。抑々利を以て合ふものは、一朝窮禍患害に遇つて危急の際に臨めば相棄てゝしまふが、天倫を以て屬した肉親は、かゝる危急の際に臨めば相頼つて決して離れないものである」と云つた。さて天倫の相頼るのと、利合の相棄てるのとは、全く懸け離れたことである。且又君子の交は淡々として水の如く、小人の交は甘くして醴の如くである。而して君子の交は淡きが故に愈々親しく、之に反して小人の交は甘きが爲にやがて絶交してしまふ。故無くして合つたものは、又故無く

死、命禹曰、汝戒之哉。形莫如緣、情莫若率。緣則不離。率則不勞。不離不勞、則不求文以待形。不求文以待形、固不待物。

訓讀 孔子子桑雽に問うて曰く、吾再び魯より逐はれ、樹を宋に伐られ、迹を衞に削られ、商周に窮し、陳蔡の間に圍まる。吾此の數患を犯して、親交益〻疎く、徒友益〻散ぜり、何ぞやと。子桑雽曰く、子獨り假人の亡げしを聞かずや。林回千金の璧を棄てゝ、赤子を負うて趨る。或人曰く、其の布の爲めか、赤子の布寡し、其の累の爲めか、赤子の累多し、千金の璧を棄てゝ、赤子を負うて趨るは何ぞやと。林回曰く、彼は利を以て合ひ、此は天を以て屬せるなり。夫れ利を以て合ふものは、窮禍患害に迫つて相棄つるなり。天を以て屬するものは、窮禍患害に迫つて相收むるなり。夫れ相收むると相棄つると亦遠し。且つ君子の交りは淡くして水の若く、小人の交りは甘くして醴の若し。君子は淡くして以て親しみ、小人は甘くして以て絶つ。彼の故なくして以て合ふものは、則ち故なくして以て離ると。孔子曰く、敬んで命を聞くと。徐行翔佯して歸り、學を絶ち書を捐て、弟子の前に挹すること無きも、其の愛益〻進むことを加へたり。異日桑雽又曰く、舜の將に死せんとする、禹に命じて曰く、汝之を戒めよや、形は緣るに若くは莫く、情は率なるに若くは莫しと。緣れば則ち離れず、率へば則ち勞せず。離れず勞せざれば、則ち文を求めて以て形を待たず。文を求めて以て形を待たざれば、固より物を待たずと。

大意 上文の功名を棄つるの意を承けて、友と交るに當つては、宜しく天を以て屬するの意を用ふべきを說き、

限りは患禍は永久に免れることが出來ないであらう。）○逃二於大澤一（世俗との交渉を斷つて山澤の中に逃れ去るなり。）○衣二裘褐一、食二杼栗一（皮の着物や短衣を着け、橡の實や栗の實を食べて、美衣美食を求めず、無心平虛の生活をした事なり。）○行（行列。）○鳥獸不レ惡而況人乎（虛心坦懷に對すれば、鳥獸すらも之を怪しみ畏れず、況してや人類に於ては勿論のことである、是れこそ災害を免れて能く不死なる所以の道である。）

孔子問二子桑雩一曰、吾再逐二於魯一、伐二樹於宋一、削二迹於衞一、窮二於商周一、圍二於陳蔡之閒一。吾犯二此數患一。親交益疏、徒友益散、何與。子桑雩曰、子獨不レ聞二假人之亡一與。林回棄二千金之璧一、負二赤子一而趨。或曰、爲二其布一與、赤子之布寡矣、爲二其累一與、赤子之累多矣、棄二千金之璧一、負二赤子一而趨何也。林回曰、彼以レ利合。此以レ天屬也。夫以レ利合者、迫二窮禍患害一相棄也。以レ天屬者、迫二窮禍患害一相收也。夫相收之與二相棄一亦遠矣。且君子之交淡若レ水、小人之交甘若レ醴。君子淡以親、小人甘以絕。彼無レ故以合者、則無レ故以離。孔子曰、敬聞レ命矣。徐行翔佯而歸、絕レ學捐レ書、弟子無レ挹二於前一、其愛益加レ進。異日桑雩又曰、舜之將二

な御訓誡であります」と曰つて、忽ち友人の交遊を謝絶し、弟子には暇を與へて、唯一人大澤のほとりに隱れ住み、皮の衣服を身に纏ひ、木の實を食つて虚心無欲な生活をしたので、獸の群に入つても群を亂さず、鳥の群に入つても列を亂さないやうになつた。斯の樣に德が高くなれば、異類の鳥獸すら畏れ惡まないのであるから、況して同類である所の人閒に於ては云ふ迄もないことであらう。

語釋　孔子、圍二於陳蔡之閒一七日不二火食一(楚の昭王が孔子を招いたので、孔子は魯から楚へ行かうとした。途中陳蔡兩國の閒にさしかゝつた時、兩國人の爲に迫害を受けて圍まれ、一行の者は飢餓困窮して、七日の閒も火を通したものを口にしないほどであつた。魯公六年、孔子六十四歲のことである。孔子の陳蔡の難のことは、秋水、讓王篇にも見えるなほ荀子(宥坐)、史記(孔子世家)、墨子(非儒)、呂氏春秋(愼人、任數)、論語(衞靈公)等を參照すべし。)　○大公任(大公は長老の稱。或は大夫の稱ともいふ。名は任。)　○引援而飛(仲間と連れ立つて群り飛ぶなり。)　○翂々翐々(共にのつそりとして高く飛ぶ能はざる形容。)　○意怠(玄鳥、ツバメなり。)　○迫脅而棲(敢て獨り棲まず、翼を收めて衆鳥の中に在つて群り住むを云ふ。)　○緖(林希逸云ふ、緖は棄餘なりと。殘された餘りもの。)　○直木先伐、甘井先竭(眞直な木は善い木材が採れる爲に先づ伐られ、水の甘い井戸は人に好まれるが爲に先づ飲み干される。何物によらず、凡て材あり用あるものはその爲に却つて身を滅す禍を招くことゝなる。)　○飾レ知以驚レ愚、修レ身以明レ汙(飾るとは他人に示し誇らんとする爲である。己の知惠を飾り人にひけらかして俗愚の意表に出で、自分の德を積んでその對照によつて他人の汚れて居るのを明かに目立たしめる。)　○揭二日月一而行(上の如きことは恰も光り輝く日月を揭げて步くが如く、自己の知德を衒耀し、人の耳目を聳動するもので、頓てそれが己の身に災禍を招く所以である。)　○大成(其の德を大成するの意。成疏に云ふ、「大成の人とは即ち老子なり」と。)　○自伐者無レ功(自ら己の功に伐るものは却つてその功を失ふに至る。伐はホコルと訓ず。老子第二十四章參照。)　○還二與衆人一(功名を己の專有とせず推して人に與へ、衆人と共に有するなり。)　○道流而不二明居一、得行而不二名處一(流は流行なり。其の道が天下に偏く流行し充滿しても、自ら光を韜み輝を匿して、顯然と有道の位地に立たざるなり。得は集韻に德行の得なり、と云ふ、德と同じ。其の德が廣く世間に傳播しても、その名聲を恃んで自ら名譽の位地に居らざるなり。)　○純々常々(純々は純一なり。常々は平常なり。塵に同じうするの意。)　○乃比レ狂(狂人は無智無欲で自ら矜飾することのないのを引いて喩とする。)　○削レ迹損レ勢不レ爲二功名一(己の爲した行爲、功績の痕迹を晦まして、何時迄も其の上に居らず、權勢などは弊履の如く棄てゝ顧みず、功名富貴に意を留めざるなり。)　○無レ責二於人一、人亦無レ責焉(人物各々其の自然に任せて、己の能に伐つて人の不能を顯すが如きことをせず、然る時は人も亦斯くの如くして己を責めざるなり。)　○至人不レ聞、子何喜哉(抑々至德の人は世閒の名聞を求めるものではない。然るに君は既に聖哲と云はれる身であり乍ら、何故聲名を好むのか。さる

て聞かせよう。東海に意怠といふ鳥が居るが、翂々翐々として自ら高く飛ぶことが出來ず、頗る無能のやうであるが、飛ぶ時には必ず仲間のものを引連れて飛び、棲む時には翼を連ねて衆群と一緒に棲み、進む時は前に立たず、退く時は後に立たず、食ふ時には順序に從つて敢て他に先んじやうとせず、必ず餘り物を取つて嘗めるやうにする。それ故其の行列にも斥けられず、人間にも害せられず、さういふ患といふものからは全く免れて居る。抑々眞直な木は立派な木材が得られるので第一に伐り倒されるし、水の甘い井戸は人が喜んで飲む爲に先づ干し竭されて了ふ。それは用の多い爲である。自分が意ふに、君も亦之と同じ樣に、自分の智惠を飾り立てゝ愚人達を驚かし、自分の身を修養して他人の汚れを目立つやうにし、昭々として日月を掲げて行くやうに、著しく人の目に附き、人の耳を驚かしたが爲に此の災に罹つたのである。嘗て自分が大德の人から聞く所に據ると、「自ら己の功に伐る者は却つて功を失ひ、功を成して退かないものは必ず失敗し、名を成してそこに止るものは必ず虧ける。」といふことである。誰か能く自ら己の成功と名聲とを辭して私せず、之を衆人に歸し與へ得るものがあらうか。それは道を備へた大德の人でなければ出來ないことである。其の道が周流して天下に徧滿しても、而も光を韜み輝を匿して其の明に居らず、其の德が盛んに世に行はれても、而も名を藏し迹を晦して其の名に居らず、心を純一にし、行を平凡にして、無心にして更に自ら矜り飾らないことは恰も狂人の如くし、痕迹を晦し權勢を棄てゝ深く自ら韜晦して心を功名に留めず、人を責めず、又人に責められることもない。斯くの如き至德の人は世間の名聞を求めようとするものではない。然るに君は何故之を喜んで自ら災を招いたのであるか。」孔子は之を聞いて「誠に結構

と。子死を惡むかと。曰く然りと。任曰く、予嘗みに不死の道を言はん。東海に鳥あり、名づけて意怠と曰ふ。其の鳥たるや、翂翂翐翐として能なきに似たり。引援して飛び、迫脅して棲み、進むに敢て前と爲らず、退くに敢て後と爲らず。食ふに敢て先づ嘗めず、必ず其の緒を取る。是の故に其の行列に斥けられずして、外人卒に害するを得ず。是を以て患を免かる。直木は先づ伐られ、甘井は先づ竭く。子、其れ意ふに、知を飾つて以て愚を驚かし、身を修めて以て汙を明かにし、昭昭乎として日月を揭げて行くが如くなりしならん、故に免れざるなり。昔は吾之を大成の人に聞くに、曰く、自ら伐るものは功なく、功の成るものは墮れ、名の成るものは虧くと。孰れか能く功と名とを去つて、衆人に還し與へんや。道流るれども明に居らず、得行はるれども名に處らず、純純常常として、乃ち狂に比す。迹を削り勢を捐てゝ、功名を爲さず。是の故に人に責むること無く、人亦責むることなし。至人は聞せず、子何ぞ喜ばんやと。孔子曰く、善い哉と。其の交遊を辭し、其の弟子を去り、大澤に逃れ、裘褐を衣、杼栗を食ふ。獸に入るも羣を亂らず、鳥に入るも行を亂らず。鳥獸だも惡まず、而るを況んや人をや。

大意 孔子が陳蔡の難に遭ひし時、大公任と問答せし事を叙し、上文を承けて、功名を以て意と爲さず、迹無くして化する時は患なきことを論ず。

通釋 孔子が陳蔡の閒に圍まれた時には、七日の閒煮たものを食べなかつた。其の時大公任といふ人が孔子の所へ行つて慰問して曰ふには「君は今にも死にさうだ。」孔子が曰ふに「然うです。」大公任が重ねて曰ふには「君は死といふことは嫌ひか。」孔子が曰ふに「嫌ひです。」すると大公任が曰ふには「然らば、今試みに不死の道を語つ

死乎。曰、然。任曰、予嘗言不死之道。東海有鳥焉。名曰意怠。其爲鳥也、翂翂翐翐而似無能。引援而飛、迫脅而棲、進不敢爲前、退不敢爲後。食不敢先嘗、必取其緒。是故其行列不斥、而外人卒不得害。是以免於患。直木先伐、甘井先竭。子其意者飾知以驚愚、修身以明汙、昭昭乎如揭日月而行。故不免也。昔吾聞之大成之人、曰、自伐者無功、功成者墮、名成者虧。孰能去功與名、而還與衆人。道流而不明居、得行而不名處。純純常常、乃比於狂。削迹捐勢、不爲功名。是故無責於人、人亦無責焉。至人不聞、子何喜哉。孔子曰、善哉。辭其交遊、去其弟子、逃於大澤、衣裘褐、食杼栗。入獸不亂羣、入鳥不亂行。鳥獸不惡、而況人乎。

訓讀　孔子陳蔡の閒に圍まれ。七日火食せず。大公任往きて之を弔して曰く、子幾ど死せんかと。曰く、然り

私は唯〻自然の理に循つて始終純一にして、其の閒他の雜念を挾まなかつたばかりで、特別に何も方法を用ひた譯ではありません。私の聞く所に據れば、玉の圭角を彫り琢いて、自然の純朴に復歸せよといふことで、私情を滅して意見を起さず、思慮を排して狐疑を止め、無心になつて、去來するもの〻自然に任せて送迎することなく、來る者は拒まず、往く者は止めず、頑強にして我に背く者は之に任せて逆はず、柔順にして我に附く者は亦之に任せて強ひず、すべて其の各々をして力の自ら盡すが儘に任せて、敢て自分の計らひを加へません。それ故に朝夕不斷に民の稅金を徵集しても、それが自然であるが爲に卯の毛程も人を傷けるといふことがありません。その爲に仕事も捗つたのであります。私如き者に於てすら猶且つ然うでありますが、況して大道を得た者に於ては猶更のことでありませう。」

語釋 北宮奢（衞の大夫、北宮に居り、因て號とす。名は奢。）○三月而成（落成の速きを云ふ。）○上下之縣（縣とは鐘を懸ける架。所謂編鐘で、上下二層に分れ、各々六個宛あり。）○一之閒無二敢設一（一は純一なり。自然の道理に循つて終始純一にしてその閒餘念を雜へざるなり。一向、專念。）○既彫既琢、復二歸於朴一（玉を彫琢して圭角を取るのは、華を去つて自然の質朴に復歸するのである。）○侗乎其無レ識（侗乎は無情の貌。たゞ只管其の純朴に任すのみなるを云ふ。）○儻乎其怠疑（儻乎は無慮なり。怠は退、疑は狐疑なり。狐疑思慮の如き一切之を去るを云ふ。）○萃乎芒乎其送レ往而迎レ來（成疏に云ふ、萃は聚なり。言ふこゝろは、物の萃聚芒然として物の去來を知らず、亦迎送せざるなり。各々物に任せ、又芒昧恍惚、心的當無く、其の迎送に隨ひ、物の往來に任すなりと。）○彊梁（頑強にして我に背くもの。）○曲傅（柔順にして己に附くもの。或は曲傳に作る。）○因二其自窮一（林西仲云ふ、其の力の自ら盡す所に因つて、之に堪えざる所を強ひずと。）○毫毛不レ挫（不斷に賦斂するも皆自然に出づるものであるが故に、寸毫も民を傷害せざるなり。）○大塗（塗は道なり。自然の大道を云ふ。）

孔子圍二於陳蔡之閒一、七日不二火食一。大公任往弔レ之曰、子幾死乎。曰、然。子惡

琢、復歸於朴。侗乎其無識、儻乎其怠疑。萃乎芒乎、其送往而迎來。來者勿禁、往者勿止。從其彊梁、隨其曲傅、因其自窮。故朝夕賦斂而毫毛不挫。而況有大塗者乎。

訓讀　北宮奢、衞の靈公の爲めに賦斂して以て鐘を爲る。壇を郭門の外に爲り、三月にして上下の縣を成す。王子慶忌、見て問うて曰く、子何の術をか設けたると。奢曰く、一の閒、敢へて設くる無し。奢之を聞く、既に雕し既に琢し、朴に復歸すと。侗乎として其れ識るなく、儻乎として其れ怠疑す。萃乎芒乎として、其れ往を送つて來を迎ふ。來るものは禁ずることなく、往くものは止むることなし。其の彊梁に從ひ、其の曲傅に隨ひ、其の自窮に因る。故に朝夕賦斂すれども毫毛も挫かず。而るを況んや大塗あるものをやと。

大意　己を虚しくして行へば重斂も病とならざることを論じ、大道を備へたる者に在つては其の行爲が自然に順應するものなるを說く。

通釋　北宮奢といふ者が衞の靈公の爲に人民から税金を取り立て〻鐘を鑄て、先づ祭をする爲に、祭壇を郭門の外に作り、僅に三箇月の閒に鐘を懸ける架を造り上げた。其の時王子の慶忌がその餘りに早いのを見て不審に思つて尋ねて曰ふには「汝は一體何んな方法を用ひてこんなに早く落成させたのか。」すると北宮奢が答へて曰ふには

ことはありますまい。然し、若し一人でも其の舟に人が乗つて居たならば、之を呼つて、其の舟を開かせるか退かせるかするでせう。其の時一度呼んでも應へをせず、二度呼んでも返辭をしなければ、三度目にはもう腹を立てゝ怒罵の聲を放つことでありませう。前には怒らないで今怒るのは、前には舟が虚で相手が無かつたのに、今度は實で相手があるからであります。其と同じ様に、人が能く已を虚しうして事物に逆らはずして悠々世に處すことが出來るならば、何物も之を害することはないでせう。」

語釋 彼其道遠而險云云（迷悟聖凡の隔ることは恰も魯越の相遠きに似たるを云ふ。） ○形倨（高貴な地位を恃んで倨りたかぶるを云ふ。） ○留居（欲に循つて留居滯守するを云ふ。） ○以爲二君車一（郭象云ふ、形と物と與に、心と物と化す。斯れ物に寄て自ら載るなりと。形骸を外にすることとそのことが直ちに虚無の樂土へ往く乘物と爲る。） ○雖レ無レ糧而乃足（欲望を離るゝことそのことが即ち無限の充足を齎し來る。郭象云ふ、所謂る足ることを知れば則ち足らざる所無きなりと。） ○望レ之而不レ見二其崖一、愈往而不レ知二其所一レ窮（一たび江を渉つて海に浮ぶ時は、之を望めども際涯を知らず、往けども往けども果しなく、たゞ漂渺たる大海あるのみである。海とは廣大幽遠にして局限すべからざる道を表す。） ○送レ君者皆自レ崖而反（郭註に云ふ、君の欲絶たば則ち民各々反つて其の分を守らんと。） ○君自レ此遠矣（超然萬物の上に獨立して、道德の鄕に遊ぶことが出來る。） ○有レ人者累、見レ有二於人一者憂（人を有つ者は之を已に私しようとして我が身の病累として了ひ、人に有たれる者も亦人に役用せられて、鬼神を敬ひ人を恤むなど、民の爲に驅役して已の憂患を招く。） ○大莫之國（大莫は大無。虚無の境地。） ○方レ舟（舟を二艘並べること。） ○惼心（褊狹性急なり。） ○張歙（張は開、歙は歛なり。） ○惡聲（罵辱の言葉、惡口雜言。）

北宮奢爲衞靈公賦斂以爲鐘。爲壇乎郭門之外、三月而成上下之縣。王子慶忌見而問焉曰、子何術之設。奢曰、一之閒、無敢設也。奢聞之、既雕既

ばなり。人能く己を虚にして以て世に遊ばば、其れ孰れか能く之を害せんと。

通釋 魯君が云ふには「その建德の國といふのは、道が遠く險しくて、又幾山河に隔てられて居るといふのに、今自分には舟や車の用意が無い。何うしたら宜からうか。」市南子が曰ふには「殿樣よ、貴方の高貴な地位を恃んで倨りたかぶることなく、身を忘れ國を忘れて了へば、其の地位に拘束せられず圓轉して何物にも阻止せられることがないから、之を車として乘つて行かれたら宜いでせう。」魯君が曰ふには「あの建德の國は、道程遙かに隔つて、住む人も居ないといふでは自分は其處へ行つて一體誰と隣り合つて住ふのか。又自分には糧食が無いから、何うして行き着くことが出來ようか。」市南子が曰ふには「殿樣よ、貴方の費用を少くし、貴方の慾望を寡くすれば、糧食が無くとも足りるであらう。又江山の險を仰せられますが、若しも貴方が一たび江を渉り越えて大海に浮び出て、涯しもなく渺茫たる有樣を望み、往けども往けども愈〻其の窮まる所を知らず、貴方を送る者が皆岸から還り去つて了つたならば、貴方は超然世を離れて、獨り遠く自由無礙の境地に到ることが出來るでありませう。斯くの如く、すべて人を有ち衆人の心を得て國を有つ者は國を有つの累があり、人に有たれ處人に望を囑せられて君たる者は亦君としての憂が伴ふものであります。それ故古の明君堯は、天下に主となつたけれども、人を有つ意志もなく、又人に有たれんとするのでもなかつたのであります。願はくば貴方も亦堯に倣つて、貴方の累と憂とを除いて仕舞つて、唯〻道ばかりを友として、大莫の國、即ち大無の鄕に遊ばれたが宜しうございませう。譬へば舟を二艘方べて河を濟る時に、その一方が虚舟であつて、我が舟に衝突して來た場合には、如何に性急な人が居ても怒るやうな

之累、除君之憂、而獨與道遊於大莫之國。方舟而濟於河、有虛船來觸舟、雖有惼心之人不怒。有一人在其上、則呼張歙之。一呼而不聞、再呼而不聞、於是三呼邪、則必以惡聲隨之。向也不怒而今也怒者、向也虛而今實也。人能虛己以遊世、其孰能害之。

訓讀 君曰く、彼は其の道遠くして險、又江山あり。我に舟車なし、奈何せんと。市南子曰く、君形倨なく、留居なくして、以て君が車と爲せと。君曰く、彼は其の道幽遠にして人なし。吾れ誰と與にか鄰を爲さん。吾に糧なし、我に食なし、安んか得て至らんと。市南子曰く、君の費を少うし、君の欲を寡うせば、糧なしと雖も、乃ち足らん。君其れ江を涉りて、海に浮ばば、之を望んで其の崖を見ず、愈ゝ往いて其の窮まる所を知らざらん。君を送るもの皆崖よりして反らば、君、此より遠ざからん。故に人を有つものは累ひ、人に有たるゝものは憂ふ。故に堯は人を有つにあらず、人に有たるゝにも非ざるなり。吾れ願はくば君の累を去り、君の憂を除き、而して獨り道と與に大莫の國に遊ばんことを。舟を方べて河を濟るに、虛船あり、來つて舟に觸るれば、惼心の人ありと雖も怒らじ。一人其の上に在る有らば、則ち呼んで則ち之を張歙せしむ。一たび呼んで聞かず、再び呼んで聞かず、是に於て三呼せんか、則ち必ず惡聲を以て之に隨はん。向には怒らずして今は怒るものは、向には虛にして今は實なれ

肥え太れること。文は文章にて、毛並の美しきを云ふ。）○靜（靜居なり。）○隱約（隱は痛、約は窮、困窮するなり。）○胥二疏於江湖之上一而求レ食焉（たとへ飢渇困窮しても輕々しく人に近かず、遠く人里を離れた江湖の上に食物を漁るなり。胥は相、疏は疏遠にて、トホザカルと訓ず。）○機辟（置罘なり。獸を捕へるワナ。）○今魯國獨非二君之皮一邪（豐狐文豹は已に何の罪なきも、唯〻其の毛皮の美しきが爲に災を招く。今魯君が魯國を有つことに因つて災患を招くのは、恰も孤豹の皮に於けるが如きものである。）○建德之國（魯を距ること遙か南の方に當つて存在するといふ假設の無爲の理想國。一說に身毒、即ち今の印度を指すとも云ふ。）○刳レ形去レ皮灑レ心去レ欲（形を刳るとは身を忘るゝなり。皮を去るとは國土を遺るゝなり。心を灑ふとは人智を棄つるなり。欲を去るとは貪欲を離るゝなり。）○不レ知二義之所一レ適（如何にすれば義に適ふかといふことを知らず、是非の分別がない。）○知レ作而不レ知レ藏（私欲少きが爲に、唯〻耕作することだけを知つて、多きを貪つて貯藏することをしない。）○猖狂妄行而蹈二乎大方一（猖狂は無心なり。妄行は混跡なり。無心に行動して跡を晦まし、而も自然の大道に合す。）○不レ知二禮之所一レ將（將は行なり。如何なる場合に如何なる禮儀を行ふべきかを辨へない。）○其生可レ樂其死可レ葬（生きて居る限りは吾が生を樂しみ、死ねば之を葬つて、終始自然に任すなり。）○去レ國損レ俗、與レ道相輔而行（國を捨て俗を棄て一切の欲を擲つて胸中を蕩除して無爲の至道と相輔導して行くなり。）

君曰、彼其道遠而險、又有二江山一。我無二舟車一、奈何。市南子曰、君無二形倨一、無二留居一、以爲二君車一。君曰、彼其道幽遠而無レ人。吾誰與爲レ鄰。吾無レ糧、我無レ食、安得而至焉。市南子曰、少二君之費一、寡二君之欲一、雖レ無レ糧而乃足。君其涉二於江一而浮二於海一、望レ之而不レ見二其崖一、愈往而不レ知二其所一レ窮。送レ君者皆自レ崖而反、君自レ此遠矣。故有レ人者累、見レ有二於人一者憂。故堯非レ有レ人、非レ見レ有二於人一也。吾願去二君

は、深い山林の閒に棲み、巖穴の奥に隱れて、あの樣に靜かにして居り、夜出て歩き晝は穴の中に居て、あの樣に用心深くし、饑渇困窮しても猶且つ輕々しく人里に近附かず、遠く江湖の上を漁つて食を求めて、あの樣に謀を定めて、水も漏さぬやうに一身の防禦に注意してさへも、網や罠にかゝるのは、何も狐豹に罪があるわけではなく、唯ゞ其の皮が美しい爲に己の身に災を招くのであります。今魯の國は殿樣にとつては此の皮のやうなもので、其の爲に色々心配なさるのは、魯の君たる以上は已むを得ないことであります。そこで必ず患難を免れようとなさるならば、外には形を刳り皮を剝いで、一身を忘れ國家を忘れて仕舞ひ、内には心を洗ひ欲を離れて、智惠や欲望を捨てゝ仕舞つて、無人の野、即ち道德の鄕に遊ぶのが肝要であります。あの遠い南越の地方に建德の國と呼ぶ一つの邑があります。そこに住む人々は愚昧であり又朴訥であつて、私心とか利欲の念といふものが少く、唯ゞ耕作することを知つて居るばかりで貯藏することは知らず、人に物を與へても其の報酬を取らうともせず、何が義に適ふか否かといふ分別もなく、禮儀を行ふべきところを辨へても居らず、己が思ふ儘に無心に振舞つて跡を殘さず、而も自然の道に適つて居り、生きては樂しみ、死ねば葬り、時に安んじ順に處して、世俗の哀樂を超越した樂園であります。願はくば殿樣も魯國を去り世俗を棄てゝ、至樂無爲の道と相輔け合つて、其處へ行かれたら宜うございませう。」

語釋 市南宜僚（姓は熊、名は宜僚、市南に居り、因て號と爲す。楚の賢人なり。） ○先王之道、先君之業（成疏に云ふ、「先王とは王季、文王を謂ひ、先君とは周公、伯禽を謂ふ」と。） ○居然（依然と同じ。） ○君之除レ患之術淺矣（其の身を有し其の國に矜る限りは、如何に鬼神を敬ひ賢者を尙んで政治に努むるとも、患難は愈ゝ深くなるばかりであらう。それは敬鬼尊賢など極めて淺薄な方法に依るからである。） ○豐狐文豹（豐は大なり、よく

訓讀 市南の宜僚、魯侯に見ゆ。魯侯、憂色あり。市南子曰く、君の憂色あるは何ぞやと。魯侯曰く、吾れ先王の道を學び、先君の業を修む。吾れ鬼を敬し賢を尊び、親ら之を行ひて、須臾くも離れ居ること無し。然かも患を免れず。吾れ是を以て憂ふと。市南子曰く、君の患を除くの術淺し。夫れ豐狐文豹、山林に棲み、巖穴に伏するは、靜なり。夜行き晝居るは、戒なり。饑渴隱約すと雖も、猶ほ且江湖の上に胥疏りて食を求むるは、定なり。然れども、且罔羅機辟の患を免れず。是れ何の罪か之れ有らんや。其の皮之が災を爲せばなり。今、魯國は獨り君の皮に非ずや。吾れ願はくば、君が形を刳りて皮を去り、心を灑ひて欲を去り、而して無人の野に遊ばんことを。南越に邑あり、名けて建德の國と爲す。其の民は愚にして朴、私少うして欲寡く、作すことを知つて藏することを知らず、與ふれども其の報を求めず、義の適ふ所を知らず、禮の將ふ所を知らず、猖狂妄行して、大方を蹈む、其の生樂しむべく、其の死葬るべし。吾れ願はくば、君が、國を去り俗を捐て、道と相輔けて行かんことをと。

大意 魯侯と市南の宜僚との問答に託して、上の道德の鄕に遊ぶものゝ累なきことを論ず。二節に分けて解く。

通釋 市南の宜僚なる者が魯君に見えた時に、魯君は心配さうな顏をして居たので、市南子が尋ねて曰ふには「殿樣は何事か心配さうな御容子であるが、如何なさいましたのですか。」魯君が答へて曰ふには「自分は先王の道を學び、先君の業を修め、又鬼神を敬ひ、賢者を尊んで、親切に之を行ひ、暫くの閒も之を離れずして政治に努力して居り乍ら、依然として色々の患難が起つて來るから、それで此の樣に心配して居るのだ。」市南子が曰ふには「それは殿樣の患難を除かうとなさる方法が淺いからであります。あの善く肥えた大狐や、文斑の美しい豹など

集散して互に相鬩ぐ、何物か能く之を必然とし得るものがあらう。）　○志（記憶するなり。）　○其唯道德之鄕乎（人事常無く必然として恃むべきものは無い。唯々自然に順つて無爲なる道德の鄕に遊ぶもののみは能く災禍を免れるであらう。）

市南宜僚、見魯侯。魯侯有憂色。市南子曰、君有憂色何也。魯侯曰、吾學先王之道、修先君之業。吾敬鬼尊賢、親而行之、無須臾離居。然不免於患。吾是以憂。市南子曰、君之除患之術淺矣。夫豐狐文豹、棲於山林、伏於巖穴、靜也。夜行晝居、戒也。雖饑渴隱約、猶且胥疏於江湖之上而求食焉、定也。然且不免於罔羅機辟之患。是何罪之有哉。其皮爲之災也。今魯國獨非君之皮邪。吾願君刳形去皮、灑心去欲、而遊於無人之野。南越有邑焉、名爲建德之國。其民愚而朴、少私而寡欲、知作而不知藏、與而不求其報、不知義之所適、不知禮之所將、猖狂妄行、而蹈乎大方、其生可樂、其死可葬。吾願君去國捐俗、與道相輔而行。

は龍と爲つて天上を飛び、或は蛇と爲つて地に潜る如く屈伸自在であつて、物に應じ時に隨つて變化して、專ら一物に拘泥して偏滯することなく、或は上り或は下つて凝滯せず、廣く他と和同することを以て己の度量とし、心を萬物の祖である道に遊ばしめ、物を物として使ひ、物の爲に物として使はれることがないから、外境に累はされることはない。是れ即ち上古の聖王たる神農黃帝の法則である。然るに萬物の實情、人事の常態を見るに然うではなく、合へば離され、成れば毀たれ圭角があれば挫き折られ、尊ければ兎や角と批評せられ、爲すことがあれば虧き損ぜられ、賢ければ人に謀られ、不肖であれば人に欺かれ、材と不材と何れにしても患累を受けることを免れない。何と悲むべきことではないか。汝等弟子達よ。善く之を心に記憶せよ。唯〻自然の道德の境地に在る者のみが獨り中正を得て災禍を免れることが出來るものである。」

語釋　以二不材一得レ終二其天年一（其の無用なるが爲に天與の壽を全うし得るなり。已に屢〻之を說けり。林西仲曰く「內篇の人間世、不材の用を說くこと至詳にして且つ悉せり。此に又不材累を受くの處より一段の議論を發出して、道德に歸本す。自ら駁し、自ら解して、言下に遺蘊無し」）　○故人（故舊、古き昵近の友人。）　○烹（豨谷曰く、「烹、享と通ず。鴈を殺して以て莊子を饗するを謂ふなり」と。もてなすこと。）　○將レ處二夫材與一不材一之閒上（材にも非ず不材にも非ざる兩者の中閒に居らんとするなり。）　○材與二不材一之閒、似レ之而非也、故未レ免二乎累一（材は有爲であり、不材は無爲の境地である。而も無爲に捉はれる時は頓て有爲と異らず、何れも一方に偏することを免れない。兩者の閒は中道であるが、中に固執する限り畢竟有爲に墮して仕舞ふ。道に似て實は然らざるものである。斯かる閒は終に未だ患累を受けることを免れないのである。）　○乘（林西仲云ふ、乘とは猶ほ騎乘のごとし、所謂身を寓くなりと。）　○浮遊（秦鼎云ふ、「浮遊とは、意を其の閒に用ひずして、其の之く所に任すを謂ふなり」と。全く自然なるを云ふ。）　○一龍一蛇（龍は天空を飛行し、蛇は地中を潛行す。出處屈伸定まる所なく自在に變通し、時に隨ひ物に應じて凝滯せず、その可に適して止むを云ふ。）　○專爲（一事一物に偏滯するを云ふ。）　○一上一下（或は上り、或は下る、飛潛と同じ。）　○以レ和爲レ量（和は老子の所謂和光同塵の和なり。量は度量なり。）　○萬物之祖（萬物造化の祖宗、即ち道を指す。）　○物レ物（物を物として己の爲に使役するなり。）　○人倫之傳（倫は類なり。傳は習なり。人類の傳習。世閒日常の狀態を云ふ。）　○廉（廉隅の廉、圭角あるなり。）　○胡可二得而必一乎（人事常に定らず、興廢

然らず、合へば則ち離れ、成れば則ち毀たれ、廉は則ち挫かれ、尊は則ち議せられ、爲すこと有れば則ち虧かれ、賢は則ち謀られ、不肖は則ち欺かる。胡ぞ得て必すべけんや。悲しい夫。弟子之を志るせ。其れ唯ゞ道德の鄕かと。

大意　此の一章は、材は有用を以て傷けられ、不材は無用の爲に亡を招く。唯ゞ道德の鄕に遊ぶ者のみは、此の兩者を絕して全く累を免るゝことを論ず。

通釋　莊子が或る時山中を通つて、大木の枝葉の茂つて居るのを見たが、木を伐り出す杣がその傍に立つたまゝで、其の木だけは伐り倒さなかつた。そこで怪んで其の理由を尋ねると「之を伐つても役に立たないからだ」と答へた。莊子は之を聞いて曰ふには「此の大木は無用のお蔭で却つて天年の壽を全うすることが出來るのだ。」さて莊子が山を降つて舊い昵近な者の家に宿ると、其の知人は非常に喜び迎へて、家僮に云ひ附けて鴈を殺させて御馳走した。其の時家僮が「鴈は二羽居りますが、一羽は能く鳴き、一羽は鳴きません。一體どちらを殺しませうか」と伺つた。主人は「その鳴かない方を殺せ」と命じた。翌日になつて弟子が莊子に向つて此の事を質問して曰ふには「昨日見た山の中の木は、その無用であるが爲に天壽を全うすることが出來ましたが、今此の家へ來て見ると、主人の鴈は役に立たぬといふので殺されて仕舞ひました。先生は一體どちらの方を善いとお思ひになりますか。」莊子は之を聞いて笑つて曰ふには「自分は用と無用、材と不材との中間に居ようと思ふ。然し材と不材との間は、道に似て實は道に非ざるものである。故に未だ累を受けることを免れない。若し夫れ道德に乘じて世外に浮游する者は、これとは異つて、材と不材、用と無用の二偏を忘れて、可もなく否もなく、譽もなく訾もなく、或

然。無譽無訾、一龍一蛇、與時俱化而無肯專爲。一上一下以和爲量、浮遊乎萬物之祖、物物而不物於物。則胡可得而累邪。此神農黄帝之法則也。若夫萬物之情、人倫之傳、則不然、合則離、成則毀、廉則挫、尊則議、有爲則虧、賢則謀、不肖則欺。胡可得而必乎哉。悲夫。弟子志之。其唯道徳之郷乎。

訓讀 莊子山中に行き、大木の枝葉盛茂せるを見る。木を伐るもの、其の旁に止まるも、取らざるなり。其の故を問へば、曰く、用ふべき所なしと。莊子曰く、此の木不材を以て其の天年を終ふるを得たりと。莊子山より出でて、故人の家に舍る。故人喜び、豎子に命じて、鴈を殺して之れを烹せしむ。豎子請うて曰く、其の一は能く鳴き、其の一は鳴くこと能はず。請ふ奚れをか殺さんと。主人曰く、鳴くこと能はざるものを殺せと。明日弟子莊子に問うて曰く、昨日山中の木は、不材を以て其の天年を終ふることを得。今主人の鴈は、不材を以て死す。先生將に何れに處らんとすると。莊子笑つて曰く、周は將に夫の材と不材との閒に處らんとす。材と不材との閒は、之に似て而して非なり。故に未だ累を免れず。若し夫れ道徳に乘じて浮游する者は則ち然らず。譽もなく訾もなく、一龍一蛇、時と倶に化して、肯へて專ら爲すこと無し。一上一下、和を以て量と爲す、萬物の祖に浮游して、物を物として物に物とせられず。則ち胡ぞ得て累はすべけんや。此れ神農黄帝の法則なり。若し夫れ萬物の情、人倫の傳は、則ち

外篇 山木第二十

叙説 此の篇は世に處して患を免るゝの道を論じたもので、時に順つて己を虚しくし、我執を去つて自ら賢とする心を離るれば、能く累患無きに至る。是れ即ち處世の要諦であることを説く。内篇人間世を參看すべし。

莊子行於山中、見大木枝葉盛茂。伐木者止其旁、而不取也。問其故、曰、無所可用。莊子曰、此木以不材得終其天年。莊子出於山、舍於故人之家。故人喜、命豎子殺鴈而烹之。豎子請曰、其一能鳴、其一不能鳴。請奚殺。主人曰、殺不能鳴者。明日弟子問於莊子曰、昨日山中之木、以不材得終其天年。今主人之鴈、以不材死。先生將何處。莊子笑曰、周將處夫材與不材之閒。材與不材之閒、似之而非也。故未免乎累。若夫乘道德而浮遊者則不

通釋 そこで弟子が曰ふには「それは先生の責任ではありませぬ。なぜならば、孫子の言ふことが正しくて、先生の仰せが間違つて居たならば、間違つて居ることはどんなことがあつても正しいことを惑はすことが出來ませぬし、又孫子の言ふことが間違つて居て先生の仰せが正しいとすれば、彼は始めから惑うて來たのであるから此の上惑うたにしても、何も先生には罪がありませぬ。」扁子が曰ふには「然う云ふものではない。昔、或る鳥が魯の郊外に降りた。魯の殿樣は大變喜んで、太牢とて牛羊豚の三品の揃つた料理を作つて饗宴し、且つ九韶とて舜の音樂を奏して樂ましめた。處が鳥は反つて心配し出し果ては目がくらんで、折角の御馳走を少しもたべず、遂に死んで仕舞つたと云ふ話である。之が其の人間を養ふ道を以て鳥を養ふ不自然なことゝ謂ふのである。之に引きかへ、鳥を養ふ道を以て鳥を養ふ者になると、之を深林に棲ませ或は江湖に浮べ、其の自ら食ふに任かせ、凡て鳥の性に順つて、のんびり自得せしむるのである。之が乃ち平凡なる常道即ち自然の道なのである。さて彼れ孫休は見る所卑くして聞く所亦少なき人物であるのに、至人の德を告げたのは、小鼠を載せるに車馬を以てし、雀を樂しませるに鐘鼓を用ふるのと同じことで、彼はどんなにか驚きタマゲタことであらう。」

語釋 昔者有レ鳥止二於魯郊一云云（此の寓話は既に至樂篇に見ゆ、文やゝ異なる、兪樾によれば脱字ありと云ふ。同篇を參看。） ○則平陸而已矣（陳壽昌曰く「陸は道なり。平常の道を言ふ。鳥養を以て鳥を養ふ者は是に過ぎざるなり。」） ○款啓（釋文に「李云ふ、款は空なり、啓は開なり、空の開くが如く、見る所小なるなり」と。）

言非邪、先生所言是邪。彼固惑而來矣。又奚罪焉。扁子曰、不然、昔者有鳥止於魯郊。魯君說之、爲具太牢以饗之、奏九韶以樂之。鳥乃始憂悲眩視、不敢飮食。此之謂以己養養鳥也。若夫以鳥養養鳥者、宜棲之深林、浮之江湖、食之以委蛇、則平陸而已矣。今休款啓寡聞之民也。吾告以至人之德。譬之若載鼷以車馬、樂鴳以鐘鼓也。彼又惡能無驚乎哉。

訓讀　弟子曰く、然らず。孫子の言ふ所是か、先生の言ふ所非か。非は固より是を惑はすこと能はず。孫子の言ふ所非か、先生の言ふ所是か。彼れ固より惑うて來れり。又奚ぞ罪あらんと。扁子曰く、然らず、昔、鳥あり、魯郊に止まる、魯君之を說び、爲めに太牢を具へて以て之を饗し、九韶を奏して以て之を樂しましむ。鳥乃ち始めて憂悲眩視して、敢へて飮食せず。此を之れ己が養を以て鳥を養ふと謂ふなり。若し夫れ鳥の養を以て鳥を養ふものは、宜しく之を深林に棲ませ、之を江湖に浮べ、之に食はせて以て委蛇せしむべし、則ち平陸ならんのみ。今休は款啓寡聞の民なり。吾れ告ぐるに至人の德を以てす。之を譬へば、鼷を載するに車馬を以てし、鴳を樂しましむるに鐘鼓を以てするが若きなり。彼れ又惡んぞ能く驚くことなからんやと。

ず、君に事ふれば不遇にして用ひられず、郷里からは排斥せられ州郡からは追放せられると云ふ有樣、一體私は天に對して何の罪があつて、此のやうな運命に遇ふのでしやうか。」扁子が云ふには「汝は至德の人の行を聞いたことがあるであらう。內は肝膽を始めとして凡ての內臟機關を忘れ、外は耳目等の外部的機關を忘れて、一切の誘惑から超脫し、全く無念無想、俗世間の外に優遊し、無爲恬淡の行に自適して居る。これ所謂自ら事を爲してゐ其の能を恃まず、物を長じ育てゝも主宰者たるの功に居らぬものである。然るに汝は知を飾つて衆愚を驚かし、自ら行を修めて他人の汚行を目に立つやうにし、己を炫耀して恰も日や月を揭げて行く如く人の耳目を聳動して居る。汝が其の身體を滿足に保ち、耳目等の九穴を無事に具へ、中途でツンボ、メクラや、ビッコ、キザリにもならずして人並の仲間に這入つて居るのはまだしも幸である。それに天などを怨むとはもつての外だ、サッサと出て行つて仕舞へ。」そこで孫子は出て行つたが、扁子は自分の部屋に歸つて坐し、暫くして天を仰いで歎息した。側に居た弟子が問うて曰ふには「先生は何を歎息なさるのですか。」扁子が曰ふには「先き程、孫休が來た時、俺は彼に至人の德を話してやつたが、彼は其の廣大なるに驚いて益々疑惑に陷りはせぬかと心配して居るのだ。」

語釋　踵レ門而詫二子扁慶子一（成疏には扁、名は子慶、魯の賢人、孫休の師なりとあり。扁上の子は尊稱、子列子の子の如し。踵は成疏には頻なりとあり、即ちシキリに至る意。詫は成疏には告なり歎なりとあり、宣注には怪み問ふとあり。今宣に從ふ。）　○賓二於鄕里一（賓は擯に通ず。排斥せらるゝこと。）　○忘二其肝膽一云云（此の四句、大宗師篇に出づ。芒然は無心の貌。）○爲而不レ恃、長而不レ宰（老子に見ゆ。秦闕曰く、孫子の問ふ所、皆爲して恃み、長じて宰す。故に之に答ふること此の如しと。宣注に「性に率つて能を恃まず、物を長じて功に居らず」とあり。）　○修レ身以明レ汙（宣注に「身を修めて以て人の汙を明かにす」とあり。和光同塵の反對なり。）

弟子曰、不レ然。孫子之所レ言是邪、先生之所レ言非邪。非固不レ能レ惑レ是。孫子所

休來、吾告之以至人之德。吾恐其驚而遂至於惑也。

訓讀　孫休といふものあり。門に踵つて子扁慶子に詫げて曰く、休、鄕に居て修まらずと謂はれず、難に臨んで勇ならずと謂はれず、然かも原に田つくれば歲に遇はず、君に事ふれば世に遇はず、鄕里に賓けられ、州部に逐はるゝは、則ち胡ぞ天に罪ありてか、休は惡んぞ此の命に遇へると。扁子曰く、子獨り夫の至人の自ら行ふことを聞かずや。其の肝膽を忘れ、其の耳目を遺れ、芒然として塵垢の外に彷徨し、無事の業に逍遙す。是を爲して恃まず、長じて宰せずと謂ふ。今汝知を飾つて以て愚を驚かし、身を修めて以て汗を明かにす、昭昭乎として日月を揭げて行くが若きなり。汝、而の形軀を全うし、而の九竅を具へ、中道にして聾盲跛蹇に夭せらるゝことなくして、人數に比するを得るは、亦幸なり。又何ぞ天を之れ怨むに暇あらんや。子往けと。孫子出づ。扁子入つて坐し、間く有つて、天を仰いで歎ず。弟子問うて曰く、先生何爲れぞ歎ずるやと。扁子曰く、向きには休來る、吾れ之に告ぐるに至人の德を以てす。吾れ其の驚いて遂に惑ふに至らんことを恐ると。

大意　此の章、生を全うするの道は至人に非ざれば知る能はず、亦至人に非ざれば語る可からざるを說き、一篇の總束となす。二節に分けて解く。

通釋　孫休と云へる者あり、子扁慶子と云ふ賢人の門に至り、怪み問うて曰ふには「私は鄕里に居ては、行が修まらぬと謂はれたことがなく、難事に臨んでは臆病だと謂はれたことがない。然るに野原で耕作すれば豐年に遇は

兩ながら忘れて略んど心を留めず、即ち所謂（養生主篇）官知止つて神欲行はるゝなり。」）○靈臺一而不レ桎（靈臺は心なり。宣云ふ、神凝つて拘束の苦なしと。）○不ニ內變一、不ニ外從一、事會之適也（內變外從は一意、外境を追ふて心が動搖すること。會之適とは遇ふ所に順つて安んずる意。郭云ふ、遇ふ所にして安んず、故に變從する所なしと。）○始ニ乎適一云云（郭云ふ、適を識る者は猶ほ未だ適せざるなりと。宣亦云ふ、適を知る時は其の適淺し。適を忘るるの適は斯ち化すと。）

有ニ孫休者一。踵レ門而詫ニ子扁慶子一曰、休居レ鄕不レ見レ謂レ不レ修。臨レ難不レ見レ謂レ不レ勇。然而田レ原不レ遇レ歲、事レ君不レ遇レ世、賓ニ於鄕里一、逐ニ於州部一、則胡罪ニ乎天一哉、休惡遇ニ此命一也。扁子曰、子獨不レ聞ニ夫至人之自行一邪。忘ニ其肝膽一、遺ニ其耳目一、芒然彷ニ徨乎塵垢之外一、逍ニ遙乎無事之業一。是謂ニ爲而不一レ恃、長而不レ宰。今汝飾レ知以驚レ愚、修レ身以明レ汙、昭昭乎若下揭ニ日月一而行上也。汝得レ全ニ而形軀一、具ニ而九竅一、無ニ中道夭ニ於聾盲跛蹇一、而比中於人數上、亦幸矣。又何暇ニ乎天之怨一哉。子往矣。孫子出。扁子入坐、有レ閒、仰レ天而歎。弟子問曰、先生何爲歎乎。扁子曰、向者

適也、忘レ要、帶之適也、知忘二是非一、心之適也。不二內變一、不二外從一、事會之適也。始二乎適一、而未三嘗不二適者、忘レ適之適也。

訓讀　工倕旋して規矩を蓋ふ。指物と化して、心を以て稽へず。故に其の靈臺一にして桎せられず。足を忘るゝは、履の適なり、要を忘るゝは帶の適なり、知是非を忘るゝは心の適なり。內變ぜず、外從はざるは、事會の適なり。適に始まつて、未だ嘗て適せずんばあらざる者は、適を忘るゝの適なり。

大意　達生の道は物と相忘るゝに在るを說く。章旨大同小異。

通釋　昔堯の時に工倕と云へる名工があつた。手を運らして圖を引くことは規矩を用ふる以上であつた。其の指は細工物と同化して自然に動き、心に考へることがない。故に其の心は專一にして物によつて拘束せらるゝことなく自由自在である。一體、足のあることを忘れるのは履が足によく合つて居るからであり、腰を忘れるのは帶の工合がよいからであり、知が是非の別を忘れるのは心が自然に適つて居るからである。心が外事を追つて變動しないのは會ふ所に順つて安んじて居るからである。之を要するに始めて自適の境地に達した時は、猶ほ自適と云ふことが念頭にあるから、まだ本當に自適して居るのではない。處が自適の境に遊ぶこと久しく、常に自適することを忘る。これが眞の自適である。

語釋　旋而蓋二規矩一（宣注に「蓋は猶ほ過ぐるの如し。之を掩過するを謂ふなり。」たゞ手を以て運せば巧みなること規矩に過ぐ精の至なり。」）　○指與レ物化而不三以レ心稽一（物は製作物なり。口義に「手と物と

と。之をして鉤すること百にして反らしむ。顏闔之に遇ふ。入つて見えて曰く、稷の馬將に敗れんとすと。公密して應へず。少焉して果して敗れて反る。公曰く、子何を以てか之を知れると。曰く、其の馬力竭きたり、而して猶ほ求む、故に曰く、敗ると。

大意 此の章は自然に逆ふことの生を害するを明にす。

通釋 東野稷と云へるもの、馭者の術を以て莊公に見え、仕官せんことを求めた。試みに馭せしむるに、進むも退くも墨繩の直なるが如く、左に旋り右に轉ずるは恰もコンパスを以て圓を畫けるが如くであつた。莊公は之を見て感嘆し、織物の模樣でも其の巧妙には及ばぬと思ひ、更に稷に百度旋廻して反るやうに命じた。家來の顏闔が途中で之に遇ひ、御殿に來つて莊公に見えて「稷の馬は今に倒れるであらう。」と曰つたが、公はだまつて居て之に答へなかつた。しばらくすると、先き程顏闔から云つたやうに、馬が倒れたので稷が反つて來た。そこで莊公が顏闔に向つて曰ふには「汝は何うしてそれを豫知したのだ。」顏闔は「馬の力が盡きて居るのに、なほ無理に乘り廻はして居たから倒れると曰つたのであります」と答へた。

語釋 莊公（或は魯君、或は衞君、と何國の君たるを知らず。荀子哀公篇に此の事を載せて、莊公を定公に作り。顏闔を顏淵に作る。） ○文弗レ過也（釋文に「司馬云ふ、織組の文に過ぐるを謂ふと。」）、○鉤百而反（宣注に「鉤く之を驅ること鉤の如く、百遍にして後反らしむ。」） ○顏闔（人間世篇に顏闔將レ傅二衞靈公太子一と見ゆ、莊公は或は衞の君か。） ○公密（密は默なり、信ぜず、故に默然たり。）

工倕旋シテ而蓋フ二規矩ヲ一。指與レ物化シテ、而不二以テレ心ヲ稽ヘ一。故ニ其ノ靈臺一ニシテ而不レ桎セラレ。忘ルヽハ足ヲ、履之

心の境に到る。この時に當つては最早や朝廷など云ふものは考へになく、其の工夫に專心になり、外物の心を亂すものは消えて仕舞ひます。そこで山林に入り、木の性質と云ひ格好と云ひ、自然に申し分のないのを見出し、頭の中で實物の懸木を描き成して、それから始めて製作にかゝります。若しさう云ふ木が見つからない時には中止することにして居ます。されば細工は加へますが、もと／＼木の自然性に因つて製作しますから、出來上つたものに少しも不自然な點がありません。私の作物が鬼神の作かと疑はるゝのはこれが爲めであります。」

語釋　梓慶（梓人は大工、職業を以て名とす。前に見えたる匠石庖丁の類なり。）○鐻（鐘や太鼓をかける架木。）○不敢懷慶賞爵祿（宣注に云ふ、「利を忘る」と。）○不敢懷非譽巧拙（又云ふ、「名を忘る」と。）○輒然忘吾有四肢形體也（又云ふ、「輒然は猶ほ忽然の如し。忘吾有四肢形體とは我を忘るゝなり」と。）○無公朝（又云ふ、「勢を忘れ、公家の爲めに之を削らざるが如きなり」と。）○外滑消（林西仲曰く、「外事の吾が心を滑亂するもの倶に消するなり」と。）○然後成見鐻（見は現なり、見鐻とは實物の架木。實物の架木を頭の中で考案し、描き出すこと。宣穎曰く恍乎として一成鐻目に在りと。此の解之を得たり。）○則以天合天（成疏に「機變、人工を加ふと雖も、木性常に自然に因る。乱に以て天に合するなり」とあり。）

東野稷以御見莊公。進退中繩、左右旋中規。莊公以爲文弗過也。使之鉤百而反。顏闔遇之。入見曰、稷之馬將敗。公密而不應。少焉果敗而反。公曰、子何以知之。曰、其馬力竭矣、而猶求焉。故曰敗。

訓讀　東野稷、御を以て莊公に見ゆ。進退繩に中り、左右の旋は規に中る。莊公以爲へらく、文も過ぎざるなり

【訓讀】梓慶、木を削つて鐻を爲る。鐻成る。見るもの驚いて鬼神の猶しとす。魯侯見て問うて、曰く、子何の術か以て爲れるやと。對へて曰く、臣は工人なり、何の術か之れ有らん。然りと雖も、一あり。臣將に鐻を爲らんとすれば、未だ嘗て敢へて以て氣を耗せざるなり。必ず齊して以て心を靜にす。齊すること三日にして、敢へて慶賞爵祿を懷はず、齊すること五日、敢へて非譽巧拙を懷はず。齊すること七日、輒然として吾が四枝形體あるを忘るゝなり。是の時に當つてや、公朝なし。其の巧は專にして外滑消す。然る後山林に入り天性の形軀至れるを觀る。然る後見鐻を成し、然る後手を加ふ。然らざれば則ち已む。則ち天を以て天に合す。器の神に疑はしき所以のものは、其れ是れかと。

【大意】此の章、亦達生の道は專ら自然に順ふを説く、宣穎曰く、一技すら猶ほ神を以て遇し、而る後妙なり。生を養ふ知るべしと。

【通釋】魯の名工に梓慶と云ふものあり。或る時木を削つて鐘や太鼓などを懸ける木を作つたが、それが出來上るや、見る人は驚嘆して神業のやうに思つた。魯の殿樣が之を見て問うて曰はれるには「汝何う云ふ術があつて之を作つたのだ。」梓慶がお答へして曰ふには「私は賤しい大工風情です。何もこれぞと云ふ術があるのではありませぬ。ですがたゞ一つあります。乃ち私が懸木を作らうとする時には、元氣一ぱいになり、決してしほ垂れて居りませぬ。必ず齋戒して心を安靜に致します。三日も齋戒致しますと、決して賞祿などを思はなくなり、五日も齋戒しますと、作の巧拙や、世間の評判を思はなくなり、七日も齋戒をつゞけますと、忽然として我が身を忘れ、無我無

が故卽ち習慣である、水中で成長して水中で安心して居るのが天性であり、水中を自然に泳ぎながら何うして泳げるのだやら吾れ自らそれが分らぬのが天命である。されば何をするにも私心を用ひず、天性に任せるのが其の道に悟入する所以であると存じます。」

語釋　吾始乎故、長乎性、成乎命(成疏に「我れ初始に陵陸に生れ、遂に陵と故舊となり、長大しは水中に泳ぎ、習ひて性を成す。心懼憚なく情を恣まゝにし放任して遂に自然の天命に同ず」とあり。)
○與齊俱入、與汩偕出(齊は水の旋入するなり、即ち渦巻のことなり。汩は水の回伏して涌出するなり、即ち水の湧き立つことあり。)

梓慶削木爲鐻。鐻成。見者驚猶鬼神。魯侯見而問焉、曰、子何術以爲焉。對曰、臣工人、何術之有。雖然、有一焉。臣將爲鐻、未嘗敢以耗氣也。必齊以靜心。齊三日、而不敢懷慶賞爵祿。齊五日、不敢懷非譽巧拙。齊七日、輒然忘吾有四枝形體也。當是時也、無公朝。其巧專而外滑消。然後入山林、觀天性、形軀至矣。然後成見鐻、然後加手焉。不然則已。則以天合天。器之所以疑神者、其是與。

成ると謂ふ。曰く、吾れ陵に生れて陵に安んずるは故なり。水に長じて水に安んずるは性なり。吾れ然る所以を知らずして然るは、命なりと。

大意 此の章、呂梁の一丈夫の言に托して、自然に從へば物（激流奔湍と雖も）傷つくること能はざるを說く。此の章亦列子黃帝篇に見ゆ。

通釋 孔子が嘗て呂梁と云へる所に遊んだが、そこには三十尋ばかりの瀧があつて、其の下流四十里ほどの間は流沫渦卷き、魚類も龜類も泳ぐことが出來ぬ位である。然るに一人の男が、そこで泳いで居たので、孔子は何か困つたことがあつて身投したものと思つて、弟子をやつて流について下り、之を救はせようとしたが、數百歩も行くと、其の男は水から出で、髮を亂したまゝ歌を歌いながら堤の下でぶら〳〵して居た。孔子は其の男の側へやつて來て、尋ねて曰ふには「私はこんな急流を泳ぐ處から見てお前を鬼神か何かに違いないと思つて居たが、よく觀るとヤハリ人間だ。よくもまあ、泳いだものだ。お前に聞きたいのだが、一體水を泳ぐに道があるのかい。」其の男の曰ふには「ありませんよ、泳ぐ道なぞと云ふものはありません。たゞ私は始め陵に生れて陵と故舊となつたが、段々長じて水中で泳ぎ、習が性となり、今では泳いで居ながら泳いで居るとは思はぬ程自然的になりました。今では私は泳ぐ時に渦と共に水底に入り湧き立つ水と共に水面に出で、凡て水の流に從つて少しも己が意を交へません。これが自在に泳ぐやうになつたわけで、外に何も理由はありません。」そこで孔子が更に尋ねて「お前が今申した故に始まり、性に長じ、命に成るとは一體何う云ふことか。」其の男が曰ふには「吾々が陵に生れて陵に安んじ暮すの

丈夫游之。以爲有苦而欲死也。使弟子並流而拯之。數百步而出。被髮行歌、而游於塘下。孔子從而問焉、曰、吾以子爲鬼、察子則人也。請問蹈水有道乎。曰、亡。吾無道。吾始乎故、長乎性、成乎命。與齊倶入、與汨偕出、從水之道而不爲私焉、此吾所以蹈之也。孔子曰、何謂始乎故、長乎性、成乎命。曰、吾生於陵而安於陵、故也。長於水而安於水、性也。不知吾所以然而然、命也。

訓讀 孔子呂梁に觀ぶ。懸水三十仭、流沫四十里、黿鼉魚鼈の游ぐこと能はざる所なり。一丈夫の之を游ぐを見る。以爲へらく苦しきこと有つて死せんと欲するなりと。弟子をして流に並んで之を拯はしむ。數百步にして出づ。被髮行歌して、塘下に游ぶ。孔子從つて問うて、曰く、吾れ子を以て鬼と爲す、子を察れば則ち人なり。請問す水を蹈む道あるかと。曰く、亡し。吾に道なし。吾れ故に始まり、性に長じ、命に成る。齊と倶に入り、汨と偕に出で、水の道に從つて私を爲さず、此れ吾が之を蹈む所以なりと。孔子曰く、何をか故に始まり、性に長じ、命に

氣を恃むと。十日にして又問ふ。曰く、未だしなり。猶ほ疾視して氣を盛んにすと。十日にして又問ふ。曰く、幾し、鷄鳴くものありと雖も、已に變ずることなし。之を望むに木鷄に似たり。其の德全し。異鷄敢へて應ずるもの無く、反つて走ると。猶ほ嚮景に應ずと。十日にして又問ふ。曰く、未だしなり。

大意　此の章、闘鷄を假りて、生命の情に達して、神を藏し氣を守るものゝ天下に敵なきを述ぶ。此の章亦列子黄帝篇に見ゆ。

通釋　紀渻子と云ふものが或る王樣の爲めに闘鷄を養つた所が、十日ほど經つと王樣が尋ねて曰はれるには「鷄はもう蹴合に使へるか、何うだ。」紀渻子が「無暗に空元氣を恃んで威張つて居りますから、まだいけません。」又十日ほど經つと王樣が「もう何うだ。」紀渻子が「まだ中々です。敵鷄の聲を聞いたり、姿をチラリと見たゞけで直に蹴合に應じようとする位です。」更に又十日も立つと王樣が「まだかい。」「まだ〳〵。敵を見ると、にらみ付けて怒り出します。」又々十日も立つて問はれると、紀渻子が「もうよろしい。敵鷄が鳴いて戰を挑んでも、泰然として居て、樣子が變りません。まるで木の鷄のやうに見えます。其の神全く、其の德は完備しました。これなら外の鷄はトテモ相手になれず一目見て逃げ反つて仕舞ひます。」

語釋　爲レ王（釋文に「司馬云ふ齊王なりと」。成疏亦之に從ふ。然れども列子黄帝篇は周宣王となす。未だ何れか是なるを知なす。）○鷄已乎（列子には鷄下、已上に可闘の二字あり。朱得之は已を以て可の誤となす。）○虛憍（實なくして自ら矜る故に虛と云ふ。）○應二嚮景一（敵鷄の聲の嚮を聞き、形の影を見た丈でも直に飛びかゝらんとするなり。）○幾矣（近なり。或は盡と訓ず亦通ず。）

孔子觀二於呂梁一。縣水三十仞、流沫四十里、黿鼉魚鼈之所レ不レ能レ游也。見二

魔物である委蛇とは何んな樣子のものであるか。」皇子の告敖がお對へして曰ふには「委蛇は其の大さ轂の如く、長さは轅の如く、紫の衣を著け、朱の冠を戴き、雷や車の聲を嫌ひ、常に其の首を延ばして立つて居るもので、之を見た者は覇者になれると云ふことであります。」桓公は之を聞いて大に喜び笑ひながら「この方の見たものは確かに其の委蛇と云ふ魔物であつた」と曰ひ、そこで床を拂つて衣冠をあらため、告敖と話をして居る中に、何時の間にやら病氣が直つて仕舞つた。

語釋 誒詒(釋文に「李云ふ、魂魄を失ふなりと。」因には「皆言に從ふ、應に譆語噫語となして解すべしと。」今林氏に從ふ。)　○忿滀(因に云ふ「鬱結なり。」)　○沈(釋文に「司馬云ふ、沈水汙泥なりと。」)　○煩壤(因に云ふ「糞掃の余積なり。」)　○公曰、請問委陀之狀何如(桓公さきに澤中に於て鬼を見るを以ての故に、澤の鬼たる委蛇の狀を問ふなり。)　○殆ニ乎覇一(殆は近なり、一の覇字、桓公の病を癒えしむるに余りあり。皇子告敖は眞に良醫國能、生命の情に通達する者。林西仲曰く、「此の語極めて桓公平日の心事に投合す。之を聞いて未だ病んで癒えざるものあらず」と。)　○囅然(成疏に「喜び笑ふ貌」とあり。)　○此寡人之所レ見者也(林西仲曰く、「桓公の見る所、未だ必ずしも即ち是れ比の物ならず。是れ英雄の人を欺き人心を皷動する處」と。)

紀渻子爲レ王養ニ鬪鷄一。十日而問、鷄已乎。曰、未也。方虛憍而恃レ氣。十日又問。曰、未也。猶應ニ嚮景一。十日又問。曰、未也。猶疾視而盛レ氣。十日又問。曰、幾矣。鷄雖レ有ニ鳴者一、已無レ變矣。望レ之似ニ木鷄一矣。其德全矣。異鷄無ニ敢應者一、反走矣。

訓讀 紀渻子、王の爲めに鬪鷄を養ふ。十日にして問ふ、鷄已にするかと。曰く、未だしなり。方に虛憍にして

たるに殆しと。桓公囅然として笑つて曰く、此れ寡人の見る所のものなりと。是に於て衣冠を正しうして之と坐す。日を終へずして病の去るを知らざるなり。

大意 此の章、桓公の一話を借りて人が生を傷ふは、皆己れ自ら之を爲すのであつて、外物が之を傷ふのではないことを明かにす。

通釋 齊の桓公が或る澤中に於て狩をした時、管仲が馭者をして居た。桓公は魔物を見たので、心に大に怖れ管仲の手をたゝいて曰ふには「汝は何か見なかつたか。」管仲は對へて曰ふには「私は何も見ません。」桓公は宮廷に歸つてから、囈語を云つて病となり、數日外出しなかつた。時に齊の士に皇子告敖と云ふ者があつたが、病中の公に向つて曰ふには「公の病氣は御自身の氣から起つたのであつて、魔物の所爲ではありません。元來吾々の體内に鬱結した氣が散じて反らないと心に物足らぬ感を起させ、氣が上つて下らないと、怒りつぽくなり、下つて上らないと、忘れつぽくなり、上らず下らず、身體の中程にうろつき、胸につかへると、病氣を起すものであります。つまり公の御病氣もこの氣の爲めであつて魔物の所爲ではありません。」桓公が曰はれるには「それで病の原因は分つたが、然し魔物と云ふものは有るであらうか、何うだらう。」告敖が曰ふには「それは有るのでありまして、泥溝の中には履といふ魔物が居り、竈には髻と曰ふ魔物が居り、屋敷内の塵埃には雷霆と曰ふ魔物が居り、家の東北方の隅には陪阿鮭蠪と曰ふ魔物が居り、西北方の隅には泆陽と曰ふ魔物が居り、水中には罔象、丘には峷、山には夔、野には彷徨、澤には委蛇と名づくる魔物が居るのであります。」桓公が曰はれるには「それでは更に諄ねるが澤中の

者、則泆陽處之。水有罔象。丘有峷。山有夔。野有彷徨。澤有委蛇。公曰、請問委蛇之狀何如。皇子曰、委蛇其大如轂、其長如轅、紫衣而朱冠、其爲物也、惡聞雷車之聲。則捧其首而立。見之者殆乎霸。桓公囅然而笑曰、此寡人之所見者也。於是正衣冠與之坐。不終日而不知病之去也。

訓讀 桓公澤に田す、管仲御す、鬼を見る。公管仲の手を撫して曰く、仲父何をか見ると。對へて曰く、臣見る所なしと。公反り、誒詒して病を爲し、數日出でず。齊の士に皇子告敖なるものあり。曰く、公則ち自ら傷る、鬼惡んぞ能く公を傷らんや。夫れ忿滀の氣、散じて反らざれば、則ち不足を爲す。上つて下らざれば、則ち人をして善く怒らしむ。下つて上らざれば、則ち人をして善く忘れしむ。上らず下らず、身に中して心に當たれば、則ち病を爲すと。桓公曰く、然らば則ち鬼あるかと。曰く有り、沈に履あり。竈に髻あり。戸内の煩壤に、雷霆之に處る。東北方の下には、陪阿鮭蠪之に躍る。西北方の下には、則ち泆陽之に處る。水に罔象あり。丘に峷あり。山に夔あり。野に彷徨あり。澤に委蛇あり。公曰く、請問す、委蛇の狀何如と。皇子曰く、委蛇其の大さ轂の如く、其の長さ轅の如し、紫衣にして朱冠、其の物たるや、雷車の聲を聞くを惡む。則ち其の首を捧げて立つ。之を見る者は覇

糟を食つて豚小屋の中に置かれる方が優遇して殺されるよりも遙かにましだと曰ふであらう。かやうな人でも自分自身の爲めを考へる場合には苟くも生きて高位尊爵さへ得れば身は刑戮に處せられてもかまはぬと思ふ。豚の爲めに謀る時は地位や物質を斥け、自分の爲めに謀る時には死んでも之を取らうと思ふ。豚と自分と取捨を異にするのは一體何う云ふ譯だらう。

語釋 祝宗人（祭祀の官、我が國の神官。）○玄端（禮服。）○牢筴（因に云ふ、豕柵なりと。豚を飼くオリ。）○豢（養りな。）○死於豚楯之上、聚僂之中則爲之（諸解あり。林西仲は羅勉道に從つて說く、今之に從ふ。豚楯は畫盾なり、聚僂は曲薄なり、物を捲聚する所以の者なり。刑戮せられて此に置かるゝを言ふなりと。則は而に同じ。爲之とは軒冕の尊を得んとするを云ふ。一本死下於上に得字あり。今は因本による。）○去之取之（之字は三月の養、軒冕の尊を指す、即は地位物質を意味す。）

桓公田於澤、管仲御、見鬼焉。公撫管仲之手曰、仲父何見。對曰、臣無所見。公反。誒詒爲病、數日不出。齊士有皇子告敖者。曰、公則自傷、鬼惡能傷公。夫忿滀之氣。散而不反、則爲不足。上而不下、則使人善怒。下而不上、則使人善忘。不上不下、中身當心、則爲病。桓公曰、然則有鬼乎。曰、有。沈有履。竈有髻。戶內之煩壤、雷霆處之。東北方之下者、陪阿鮭蠪躍之。西北方之下、

藉白茅、加汝肩尻乎彫俎之上。則汝爲之乎。爲彘謀曰、不如食以糠糟、而錯之牢筴之中。自爲謀苟生有軒冕之尊、死於豚楯之上、聚僂之中、則爲之。爲彘謀則去之、自爲謀則取之。所異彘者何也。

訓讀　祝宗人、玄端して以て牢筴に臨み、彘に說いて曰く、汝奚ぞ死を惡まん。吾れ將に三月汝を豢ひ、十日戒し、三日齋し、白茅を藉いて、汝の肩尻を彫俎の上に加へんとす。則ち汝之を爲さんかと。彘の爲めに謀らば曰はん、食ふに糠糟を以てして、之を牢筴の中に錯かるゝに如かずと。自ら爲めに謀れば、則ち苟くも生きて軒冕の尊あらば、豚楯の上、聚僂の中に死すとも、則ち之を爲す。彘の爲めに謀れば則ち之を去り、自ら爲めに謀れば則ち之を取る。彘に異なる所のものは何ぞや。

大意　此の章、高位尊爵の爲めに達生の道を誤るを歎ず。秋水篇の神龜章と異曲同調なり、參照すべし。或は此の章を以て上章に合するものあれども是に非ず。

通釋　或る神主が禮服をつけて豚小屋へ行き、豚に向つて曰ふには「汝は何も死ぬことをいやがる必要はない。俺が三月の間美食を以て汝を養ひ、十日も身を淸め三日も物忌みし、白い茅を敷いて、汝を料理して肩や尻の肉を彫刻した俎の上に載せて神に供へようとするが、汝は之を欲するか何うか。」豚の身の爲めを考へる場合には糠や

つたが、不幸にも餓虎に遇つて食ひ殺されました。又張毅と云ふ者がありましたが、大家小家の別なく奔走伺候して居たが、行年四十にして熱病にかゝつて死にました。つまり單豹は無慾恬淡で、能く其の內を養つたが其の外を養ふことを怠つた爲めに虎に食はれ、張毅は東奔西走、其の外を養ふことに力めたが、內の養ひを忘れた爲めに病に犯されたのであります。つまり此の二人の者は前の牧羊の譬によると、其の後れたものを鞭たなかつたのであります。孔子も「內を養ふに偏することなく、外を養ふに片よることなく、枯木の如く無心にして中央に立ち、此の三者がうまく行けば、其の人こそ至人の名をほしいまゝにすることが出來る。」と曰つて居られる。あの物騒な路上で十人の中で一人でも殺されたら、其の後は父子兄弟互に警戒して、必ず徒卒を多勢つれて始めて出かけるやうになります。處がもつと〳〵人が畏るべきは寢室の中や飲食の間にあることを知らねばならぬのでありますが、その邊の警戒を爲すのに氣のつかぬのは外にのみ氣をつけて內を怠つたことで、大きな過であります。」

語釋　學レ生（釋文に、「司馬云ふ、養生の道を學ぶなり」と。）　○拔篲（篲、はゝき。）　○夫子（開之が祝腎を謂つて夫子と爲す。）　○高門縣薄（正義に云ふ、「高門は大家なり。薄は簾なり。簾薄を懸けて以て門を蔽ふ、小家なり」と。）　○無レ不レ走也（又云ふ、「奔競して生を營み、以て溫飽を求む」と。）　○無二入而藏一（又云ふ、「內に偏せず」と。入而藏とは單豹の如く內を養ふこと過ぐるを謂ふ。）　○無二出而陽一（又云ふ、「外に偏せず、陽とは外に向ふの義なり」と。出而陽とは張毅の如く外を養ふに過ぐるを謂ふ。）　○柴二立其中央一（又云ふ、「槁木の孤立するが若く、無心にして中を得るなり。內外、中に適ふ時は亦所謂後るゝなし」と。）　○其名必極（又云ふ、「功全く德備はり、至人と稱せられん」と。）　○畏塗者（又云ふ、「險阻の路」と。）

祝宗人玄端以臨二牢筴一、說レ彘曰、汝奚惡レ死。吾將三三月豢レ汝、十日戒、三日齋、

ふ。張毅といふものあり。高門縣薄、走らざること無きなり。行年四十にして、内熱の病ありて以て死す。豹は其の内を養ひて、虎其の外を食ひ、毅は其の外を養ひて病其の内を攻む。此の二子の者は、皆其の後るゝを鞭たざるものなり。仲尼曰く、入りて藏るゝこと無かれ、出で陽るゝこと無かれ、其の中央に柴立せよ。三者若し得ば、其の名必ず極まらんと。夫れ畏塗なるもの、十に一人を殺せば、則ち父子兄弟相戒むるなり。必ず卒徒を盛んにして、後敢へて出づ、亦知ならずや。人の畏を取る所のものは、衽席の上、飲食の閒なり。而して之が戒を爲すを知らざるものは過なりと。

大意　上章に外重き者は内拙しとあるを受けて、生を養ふの道は外を怠らず、内を忘れず能く其の中を得るものなりと說く。

通釋　田開之と云ふ者が周の威公に見えた時、威公が尋ねて曰ふには「あの祝腎は養生の道を學んで居ると云ふことだが、そこ許は彼れの門に遊んで居るから何か聞いて居るであらう。」田開之が答へて曰ふには「私は箒を持つて先生の門庭に侍するのみで、養生の道などに就いては何も承つて居りません。」威公が曰ふには「田子よ、謙遜するな、どうか是非聞かして呉れ。」そこで開之が曰ふには「私が先生から聞く所によると、善く生を養ふ者は羊を飼ふやうなもので、羊を牧場へつれて行く時に後れたものを視ると之を鞭で打つと同じことであるとの話でありました。」威公が曰ふには「それは何う云ふわけだ。」田開之の曰ふには「魯の國に單豹と云ふ者がありました。山中に隱遁し、たゞ水を飲みて生活し、人と利を爭ふことなく、行年七十になつても小供のやうなツヤ〳〵した顏色であ

嬰兒之色。不幸遇餓虎。餓虎殺而食之。有張毅者。高門縣薄、無不走也。行年四十而有內熱之病以死。豹養其內、而虎食其外、毅養其外、而病攻其內。此二子者、皆不鞭其後者也。仲尼曰、無入而藏、無出而陽、柴立其中央。三者若得、其名必極。夫畏塗者十殺一人、則父子兄弟相戒也。必盛卒徒而後敢出焉。不亦知乎。人之所取畏者、衽席之上、飲食之閒。而不知爲之戒者過也。

訓讀 田開之、周の威公に見ゆ。威公曰く、吾れ聞く祝腎は生を學ぶと。吾子は祝腎と遊ぶ、亦何をか聞けると。田開之曰く、開之は拔篲を操つて以て門庭に侍するのみ、亦何をか夫子に聞かんと。威公曰く、田子讓ること無かれ。寡人願はくば之を聞かんと。開之曰く、之を夫子に聞く。曰く、善く生を養ふものは、羊を牧ふが若く然り。其の後るゝものを視て之を鞭つと。威公曰く、何の謂ぞやと。田開之曰く、魯に單豹といふものあり。巖居して水飲し、民と利を共にせず。行年七十にして、猶ほ嬰兒の色あり。不幸にして餓虎に遇ふ。餓虎殺して之を食

る。又かの水をもぐる者が始めから舟など眼中になくて容易く之を操るのは、彼は深淵を視ること丘陵の如く、舟の覆へるのも丁度車が坂であと退りする位に思つて居る。顚覆退却種々樣々の困難が目前に頻々とやつて來ても平氣で念頭に置かない。だから如何なる場合に於ても常に綽々として心中餘裕があるのだ。賭射のかけ物に瓦器の如き値の安い物を用ひると惜まないから巧く的中するし、帶鉤を賭けると多少氣に懸るから中ることが少く、黃金を賭けると愈〻心配の爲に心が亂れるから中らない。其の技術は同一であるが惜む所があると外物たる賭物を重んずるため心が技術に專一にならないから中らぬのである。すべて外を重んずると內は必ず拙くなるものだ。」

語釋 觴深（宋國にある淵の名。形が酒杯に似て居るから名けた。）○沒人（泳ぎの達人で水中をもぐる者。）○覆卻萬方（方は種類の意。兪樾は方を並にと訓じて下句に屬し、萬の下に物の字を脫すとして列子を引いて考證して居る。）○舍（心を斥す。）○注（射をいふ。瓦、鉤、黃金は賭けて勝負を爭ふ物。）○鉤（帶鉤、オビガネ。）○殙（クラシと訓じ、心くらみて亂れること。）○矜（ヲシムと訓じ、愛惜の意。）

田開之見周威公。威公曰、吾聞祝腎學生。吾子與祝腎遊、亦何聞焉。田開之曰、開之操拔篲以侍門庭、亦何聞於夫子。威公曰、田子無讓。寡人願聞之。開之曰、聞之夫子。曰、善養生者、若牧羊然。視其後者而鞭之。威公曰、何謂也。田開之曰、魯有單豹者。巖居而水飲、不與民共利。行年七十而猶有

訓讀 顏淵仲尼に問うて曰く、吾れ嘗て觴深の淵を濟る。津人舟を操ること神のごとし。吾れ問うて曰く、舟を操ること學ぶべきかと。曰く可。善く游ぐものは數〻すれば能くす。乃ち夫の沒人の若きは、則ち未だ嘗て舟を見ずして、便ち之れを操るなりと。吾れ問へども吾に告げず。敢へて問ふ何の謂ぞや。仲尼曰く、善く游ぐ者の數〻して能くするは、水を忘るればなり。乃ち夫の沒人の未だ嘗て舟を見ずして、便ち之れを操るが若きは、彼は淵を視ること陵の若く、舟の覆るを視ること、猶ほ其の車の卻くがごときなり。覆卻萬方前に陳なれども、而かも、其の舍に入るを得ず、惡に往くとしてか暇あらざらん。瓦を以て注とすれば巧に、鉤を以て注とすれば憚り、黃金を以て注とすれば殙し。其の巧は一なり、而して矜む所あれば、則ち外を重んずればなり。凡そ外重きものは、內拙しと。

大意 此の章、水を忘れると舟を操ること自由自在であることを說いて、生を忘れ事を棄てると心勞せずして自ら餘裕あることを證したのである。亦列子黃帝篇に見ゆ。

通釋 顏淵が孔子に尋ねて曰ふに、「私が嘗て觴深といふ淵を渡つたとき、渡守が舟を操ること神の如く巧妙であつたので、私は舟を操る方法は學び得るものかと問ひました。すると彼は曰ふ、學び得るです。泳ぎの上手な者が屢〻舟を操ることを練習すれば出來るやうになるが、かの水をもぐる程の水練の達人になると、始めから舟など眼中にないから容易く之を操るですと。私は其の理由を問ひましたが彼は告げなかつたが、どういふ意味でせう。」孔子が曰はれるに、「泳ぎの上手な者が度々練習して操舟術に上達するのは練習の結果水といふものを忘れるからであ

の羽以外如何なる物にも眼はくれぬ。だからどうして取り逃がすことがあらうか。」孔子はそこで顧みて弟子に謂はれた。「志を用ふること專一であれば精神凝定して動き擾れることはないといふが、あの痀僂の老人の事であらう。」

語釋　痀僂（腰の曲ったさまで「セムシ」のこと。）　○承蜩（承は拯と同じく「取る」の意。蜩は蟬。竿の頭に黐（モチ）を付けて蟬を取るのである。）　○五六月（五六ケ月の間と見る説もある。）　○橛株拘（集釋に詳しく考證してあるが要するに橛株は斷株。拘は根に近い盤錯の處。次の槁木之枝と共に堅實不動の意である。）　○反側（反は身をひるがへす。側はそばだてること。變動の意。）　○凝於神（兪樾は列子を引いて凝は疑の誤だとして鬼神と相似たる意として居るが、それでもよい。）　○丈人（老人の稱。丈は杖に通じ、老人は杖を持つからいふ。）

顏淵問仲尼曰、吾嘗濟乎觴深之淵。津人操舟若神。吾問焉曰、操舟可學邪。曰、可。善游者數能。若乃夫沒人、則未嘗見舟而便操之也。吾問焉而不吾告。敢問何謂也。仲尼曰、善游者數能、忘水也。若乃夫沒人之未嘗見舟、而便操之也、彼視淵若陵、視舟之覆猶其車卻也。覆卻萬方陳乎前、而不得入其舍。惡往而不暇。以瓦注者巧、以鉤注者憚、以黃金注者殙。其巧一也、而有所矜、則重外也。凡外重者內拙。

而不得。孔子顧謂弟子曰、用志不分、乃凝於神。其痀僂丈人之謂乎。

訓讀 仲尼、楚に適き、林中に出でゝ、痀僂の者の蜩を承る、猶ほ之を掇ふがごときを見る。仲尼曰く、子巧なるかな。道あるか。曰く我に道あるなり。五六月丸二つを累ねて墜ちざれば、則ち失ふもの錙銖。三つを累ねて墜ちざれば則ち失ふもの十に一。五つを累ねて墜ちざれば、猶ほ之を掇ふがごときなり。吾の身を置くや、橛株の拘まるが若く、吾の臂を執るや、槁木の枝のごとし。天地の大、萬物の多と雖も、而も唯蜩翼をのみ之れ知る。吾反せず側せず、萬物を以て蜩の翼に易へず。何爲れぞ得ざらんや。孔子顧みて弟子に謂つて曰く、志を用ふること分れざれば、乃ち神を凝らしむと。其れ痀僂丈人の謂か。

大意 上章の純氣之守の意を例證す。此の章亦列子黄帝篇に見ゆ。

通釋 孔子が楚に往くとき林の中を通りかゝつてセムシの人が丁度物を拾ふが如くに竿で蟬を捕つて居るのを見た。孔子が曰ふに「貴公は實にうまいものだが、何か秘術があるかい。」痀僂がいふ、「ある。先づ蟬の出る五六月頃二個の丸を竿の先に重ねる練習をする。そして落ちないやうになれば蟬を捕るに仕そこなひが極めて僅かである。次に三個重ねて落ちないやうになると、捕り損ひは十の中一つ位次に五個重ねて落ちないと、恰も拾ふが如く蟬が捕れる。拙者が體を構へる樣子は切株のわだかまれる如く臂を使ふ樣子は枯木の枝の如く固定して動かない。天地大なりと雖も萬物多しと雖も只蟬の羽を知るのみで決して他に心を向け身をひるがへしたりそばだてたりせず、蟬

あらう。

語釋　子列子（上の子の字は後學が先師を尊ぶの稱。列子は列禦寇である。）○關尹（姓は尹、名は喜、函谷關の令で老子の弟子。）○潛行不ㇾ窒（どんな堅い物の中でも自由にくぐつて行つて障碍されない。窒は「ふさがる」と訓ず。）○列（比、類などの意。）○物何以相遠（物と物とは互に相近似して居る。千差萬別だが大同小異である。一本に物與ㇾ物何以相遠とあるが意は同じ。）○色（形貌聲色の略で物質の意。）○物之造二乎不形一（物之は物の中での意。造は至る。未だ形なき無物の始に到る。）止二乎無ㇾ所ㇾ化（變化を超越した境地に止る。）○處二乎不淫之度一（淫は過度。不淫之度は適度。性分自然の適度に安んじて過度でないこと。）○藏二乎無端之紀一（端緒なき無始無終の大道の法則中に入る。）○合二其德一（物の誘惑の爲に散じないやうに、常に一を抱く意。）○物之所ㇾ造（造は成る。物の造化する所の意。自然を指す。）○天守（自然の道を守ること。）○郤（隙と同じ。）○犯ㇾ害（害に觸れる。害に罹ること。）○遻（音「ゴ」、忤と同じく逆ふこと。つき當るぶつかるなどの意。）○藏二於天一（藏乎無端之紀と同じ。）○鏌干（莫邪と干將。古の名劍の名。もと人名で莫邪は干將の妻、呉王闔閭の臣。夫妻で二劍を鍛へて一を干將一を莫邪と名けた。）○忮心（忮は害也、逆也。）○飄瓦（飄は落也。）○開二人之天一（開は開發發揮の意。人之天は智巧果敢を斥す。）○天之天（純氣の守。無爲自然を斥す。）○開ㇾ天者德生、開ㇾ人者賊生（因に云ふ「開天者は性の動なり。開人者は知の用なり。德生は上の平均を承け、賊生は上の攻戰殺戮を承く。」）○不ㇾ厭二其天一（自然を厭はない。即ち常に守ること。）○不ㇾ忽二於人一（人爲を忽せにしない。即ち愼しんで輕用しないこと。）

仲尼適ㇾ楚、出二於林中一、見二痀僂者承ㇾ蜩、猶ㇾ掇ㇾ之也。仲尼曰、子巧乎、有ㇾ道邪。曰、我有ㇾ道也。五六月累二丸二一而不ㇾ墜、則失者錙銖。累ㇾ三而不ㇾ墜、則失者十一。累ㇾ五而不ㇾ墜、猶ㇾ掇ㇾ之也。吾處ㇾ身也、若二橛株拘一。吾執ㇾ臂也、若二槁木之枝一。雖二天地之大、萬物之多一、而唯蜩翼之知。吾不ㇾ反不ㇾ側、不下以二萬物一易中蜩之翼上。何爲

之を窮め盡して形象と變化とを超越する者は、如何なる外物も之に對して止め妨げる事は出來ない。斯かる人は常に性分の適度に安んじ、無始無窮に循環する法則に冥合し萬物の終始し流轉する所の自然と共に動き其の性を純一にし、其の氣を養つて衰耗せず、其の德を一つに合聚して散せず、以て物の成る所の自然の大道に通じ造化の本體に達しようとする。斯くの如き人は天道の自然を守ること全くして其の精神に乘ずべき隙間がないから外物はどこからも侵し入ることが出來ない。一體醉漢が車から墜ちると、たとひ傷をして病んでも死ぬやうなことはない。醉漢の骨格關節だからとて普通人と同樣であるのに、害に係ることは人と異るのは、無我無心にして其の精神が全き故である。車に乘つたことも知らぬが、落ちたことも知らぬ。死生驚懼さへ其の心中に考へて居ないから、物にぶつかつても平氣で恐れない。彼は酒の力で精神の全きを得てさへ斯の通りである。まして天道の自然と合一することによつて精神の全きを得る者に於ては猶更である。聖人は精神を無爲自然の天眞に置き少しも人爲がないから外物は之を傷けることが出來ないのである。例へば讎を復する者でも仇敵の持つ名劍までも憎んで折るやうなことはしない。又如何に害心ある者でも屋根から落ちた瓦が當つたのを怨むといふことはない。是れ劍や瓦は無心だから害を招かないのである。人亦無心ならば天下不平なく、すべて均平である。故に攻伐戰爭の亂なく、殺戮の刑罰無き平和の狀態は此の無心自然の道に由るからである。智惠勇敢の如き人の心を發揮するを務めずして、無爲自然の天性を發揮するに務むべし。自然を守る者は德生じて天下均平であり、智勇を用ひる者は害生じて攻戰殺戮起る。無爲自然を厭はずして常に守り、智勇人爲を愼しんで忽せにしないならば、民皆化して各〻其の天眞を得るに至るで

以て物の造る所に通ぜんとす。夫れ是の若きものは、其の天守全く其の神郤なし、物奚よりか入らんや。夫れ醉者の車より墜つる、疾むと雖も死せず。骨節人と同じうして、犯害人と異なるは、其の神全ければなり。乘るも亦知らざるなり。墜つるも亦知らざるなり。死生驚懼、其の胸中に入らず。是の故に物に遻うて慴れず。彼れ全きを酒に得るも、而かも猶ほ是の如し。而るを況んや全きを天に得るをや。聖人は天に藏る、故に之を能く傷くること莫きなり。讐を復する者も鏌干を折らず、忮心あるものと雖も飄瓦を怨みず。是を以て天下均平なり。故に攻戰の亂なく、殺戮の刑なきものは、此の道に由ればなり。人の天を開かずして、天の天を開く。天を開くものは德生じ、人を開くものは賊生す。其の天を厭はず、人を忽せにせざれば、民其の眞を以ふるに幾し。

大意 純眞なる至人の境界を寫して上章の精而又精、反以相レ天の意を證す。章首より物莫二之能傷一也に至るまで列子黄帝篇に見え、文や丶異なる。參看。

通釋 列子が關尹に問うて曰ふに「至德の人は潛行して金石に入つても塞がり障ることなく、火を蹈んでも熱からず、萬物の上に行つても自若として懼れないといひますが、どうしてそんなに成つたのですか、伺ひたい。」關尹が曰ふに「これは純眞の氣を守つて居るからである。智惠や勇敢などで物に勝たうとするの類ではない。坐に着け、詳しく汝に話さう。凡そ容貌形象音聲色彩ある者は皆物である。物と物とは互に相去ること遠くない。何れも皆物の先に立つて物を制するに足る者はない。是れ他なし、色や形に止まり、之を離れて超越することが出來ぬからである。しかし物の中で未だ形無きの始に到り變化しない境地に止まる者がある。即ち人である。此の道を得て

疾不死。骨節與人同、而犯害與人異、其神全也。乘亦不知也、墜亦不知也。死生驚懼、不入乎其胸中。是故遻物而不慴。彼得全於酒、而猶若是。而況得全於天乎。聖人藏於天、故莫之能傷也。復讐者不折鏌干、雖有忮心者、不怨飄瓦。是以天下均平。故無攻戰之亂、無殺戮之刑者、由此道也。不開人之天、而開天之天。開天者德生、開人者賊生。不厭其天、不忽於人、民幾乎以其眞。

訓讀 子列子關尹に問うて曰く、至人潛行すれども窒がらず、火を蹈めども熱からず、萬物の上に行けども慄れずと。請問す、何を以て此に至れると。關尹曰く、是れ純氣の守なり。知巧果敢の列に非ず。居れ予女に語らん。凡そ貌象聲色あるものは皆物なり。物何ぞ以て相遠からん、夫れ奚ぞ以て先に至るに足らん。是れ色のみ。則ち物の不形に造りて、化する所なきに止まるあり。夫の是を得て、之を窮むるものは、物焉んぞ得て止めんや。彼將に不淫の度に處りて、無端の紀に藏れ、萬物の終始する所に遊び、其の性を壹にし、其の氣を養ひ、其の德を合せて、

語釋　○生之情（人の得る所から生といひ天の付する所から命といふ。情は實即ち眞相の意。）　○無レ離レ形（形に執着する。隨つて之を全うしようと務める。）　○棄レ世（世外に避けるのでなく、世に生存して世事を忘れ世事を以て心を累はさない意。）　○與レ彼更生（彼は造化即ち自然を指す。更生は日新の意。即ち萬物は自然の大道によりて日夜に更まり生じて生化窮まりなし。我亦之と與に日日に新にして自然と一致して行く。要するに生化を自然に任せること。）　○幾（自然の大道に幾しの意。郭注には幾は盡と解し疏に盡二道之元妙一とあるが今莊子因に從ふ。）　○事奚足レ棄、而生奚足レ遺（二句莊子因に從つて問辭として通釋した。「なぜ棄てるに足るほどの價値があるか、又なぜ忘れるに足るだけの價値があるか即ち棄てたり忘れたりせねばならねか」の意で、次の意を喚び起すのである。一説反語として「棄てたり忘れたりするほどの價値なし。況や思ふには足らぬ」と解するのは連絡上無理な點があるから取らぬ。）　○精復（累ひなく正平になれば精神が自然の狀態に復歸したのである。）　○能移（造化自然と更生する意。莊子因に能入レ無出レ有而生、變化如二薪盡而火無一レ窮也。とある通り物に隨つて漸滅しないこと。）　○合則成レ體、散則成レ始（天地陰陽の二氣合聚すれば萬物形體を成して生じ、二氣離散すれば無物未生の始に反る。）　○精而又精（精中の最精、極致に到る意。）

子列子問二關尹一曰、至人潛行不レ窒、蹈レ火不レ熱、行二乎萬物之上一而不レ慄。請問何以至二於此一。關尹曰、是純氣之守也。非二知巧果敢之列一。居、予語レ女。凡有二貌象聲色一者、皆物也。物何以相遠。夫奚足以至乎先。是色而已。則物之造二乎不形一、而止二乎無一レ所レ化。夫得レ是而窮レ之者、物焉得而止焉。彼將レ處二乎不淫之度一、而藏二乎無端之紀一、遊二乎萬物之所一レ終始一、壹二其性一、養二其氣一、合二其德一、以通二乎物之所一レ造。夫若レ是者、其天守全、其神無レ郤。物奚自入焉。夫醉者之墜レ車、雖

通釋 生命の眞實に通じた者は、生のどうすることも出來ない所卽ち分外の事を欲求しないし、又智の及ばない所までも思慮することを務めない。一般に形體を養ふには第一に形體の養たる衣食の物質を以てする。然し物質が餘りあつても形體の養はれない者がある。(富貴にして夭折するが如きはそれである) 又生ある以上必ず第一に形體を全うしようとするのが世俗の見であるが、形體は全くとも死んだのと同然な者がある。(行屍走肉の如きものはそれである) 一體生れて來ることを拒むことは出來ず、死することも防ぐことが出來ないのが生命の實情である。ところが悲しむべきは、世俗一般には形體さへ養へば生を保つことが出來ると思つて居る。しかし何程形體を養つても決して生を保つといふことは出來ないから、世間の事は爲すに足らぬ。爲すに足らなくても爲さなければならないのは世俗的生活上止むを得ないが爲である。若し形體の爲にするのを免れようとするなら、世を棄てるが一番よい。世を棄てれば累ひがない。累ひがなければ心正しく平かで自然の狀態になる。さうなると彼の造化と步調を合せて日に日に新生して無窮なるを得る。さうなればもう至道に近い者である。事は何故に捨てねばならぬか、生は何故忘れねばならないか。事を捨てれば形體は勞することなく、生を忘れると精神全きを得るからである。斯くして形體全く精神自然に復れば天地造化と合一する。天地は萬物を生ずる根本である。天地陰陽の二氣相合すれば形體を成し、二氣散ずれば未生無物の始に歸る。唯形體と精神と倶に全き者のみ能く造化と共に日新更生するから無窮に推移する者と謂へる。斯くの如くにして遂に修養の極致に到達すると、天より生じた人間なれど本に反つて天地の化育を贊助するに至るのである。

形全精復、與天爲一。天地者萬物之父母也。合則成體、散則成始。形精不虧、是謂能移。精而又精、反相天。

訓讀　生の情に達するものは、生の以て爲す無き所を務めず。命の情に達するものは、知の奈何ともする無き所を務めず。形を養ふには必ず之が物を先にす。物餘りあつて形の養はれざるもの之あり。生あれば必ず形を離るゝこと無きを先にす。形離れずして生亡するもの之あり。生の來るや卻くること能はず、其の去るや止むること能はず。悲しいかな、世の人以爲へらく、形を養へば以て生を存するに足れりと。而かも形を養ふも、果して以て生を存するに足らず、則ち世奚ぞ爲すに足らんや。爲すに足らずと雖も、而かも爲さざるべからざるものは、其の免れざるが爲めなり。夫れ形の爲めにするを免れんと欲するものは、世を棄つるに如くは莫し。世を棄つれば則ち累なし。累なければ則ち正平なり。正平なれば則ち彼と更生す。更生すれば則ち幾し。事奚ぞ棄つるに足るか。生奚ぞ遺るゝに足るか。事を棄つれば則ち形勞せず、生を遺るれば則ち精虧けざればなり。夫れ形全く精復すれば、天と一たり。天地は萬物の父母なり。合へば則ち體を成し、散ずれば則ち始めを成す。形精虧けず、是を能く移ると謂ふ。精にして又精なれば、反つて以て天を相く。

大意　此の章、全篇の總論である。生命の眞實に達する者は、世を棄て生を忘れる。だから却つて形勞せず神全うして天地造化と合一するといふのである。

外篇 達生第十九

叙説 形體を忘れて生命の情に達すれば、天と一となり、至人の域に至ることを論ず。後段に達世の道を併せ説く。首章最も含蓄あり、自餘の諸章は之が注脚である。

達生之情者、不務生之所無以爲。達命之情者、不務知之所無奈何。養形必先之物。物有餘而形不養者有之矣。有生必先無離形。形不離而生亡者有之矣。生之來不能卻、其去不能止。悲夫、世之人以爲養形足以存生。而養形果不足以存生、則世奚足爲哉。雖不足爲而不可不爲者、其爲不免矣。夫欲免爲形者、莫如棄世。棄世則無累。無累則正平。正平則與彼更生。更生則幾矣。事奚足棄、而生奚足遺。棄事則形不勞、遺生則精不虧。夫

は胡蝶となる。一名胥といふ。又化して蟲となつて竈の下に生ずる。其狀は新に皮を脫いだやうである。其の名を鴝掇といふ。それが千日經つと鳥になる。乾餘骨と名ける。その沫は漸次種々の蟲に變化する。卽ち斯彌となり、食醯となり、頤輅となる。別に黃軦は九猷から、瞀芮は腐蠸から生ずる。羊奚といふ草は筍を生じない老竹と交合して青寧といふ蟲を生じ、青寧が豹を生じ、豹が馬を生じ、馬が人を生じ、人が又造化の大元たる無に歸する。斯くの如く萬物は皆大元の無から出て復無に歸ることを繰返して居るのである。」

語釋　道從（集釋に列子天瑞を引いて從は徙の誤といつて居る。徙は道傍である。）　○攓（拔く。）　○唯予云々（倒裝法。次の未嘗死、未嘗生也。と置き換へて意味を取ればよい。）　○養（補義に宣注を引いて養は憂なりといひ、爾雅も養は恙と通ずるといひ、爾雅釋詁に恙は憂なりとあるを引いて考證して次の歡と對せしめて居る。）　○種（物化の種類。）　○鼃（水上の微塵。）　○水土之際（水と土との間、即ち岸邊などの水底の水土相接するきは。）　○鼃蠙之衣（青苔の名で水中に在つて綿を張つたやうなもの。）　○陵屯（屯は阜。）　○陵舃（車前草。和名おほばこ。）　○鬱棲（糞壌即ち肥料。）　○烏足（草の名。一名黑草。）　○蠐螬（蝸虫。）　○胥（胡蝶の別名。）　○鴝掇（虫の名。俗に竈馬と名ける。）　○乾餘骨（鳥の名。）　○沫（口中のよだれ。）　○斯彌・食醯・頤輅・黃軦・九猷・瞀芮・腐蠸（皆虫の名。一說に瞀芮は爛草、腐蠸は螢なりと。）　○羊奚（草の名。）　○比（合する、交る意。）　○不筍久竹（筍は竹の子。筍を生じない老竹の意。）　○青寧（虫の名。）　○程（豹の別名。或は虫の名ともいふ。但し此に擧げた草や虫の名は現今の何に當るか盡くは分らない。また穿鑿する必要もない。）　○機（萬有發動の根元。造化を謂ふのである。而して造化は認識を超越せるもの即ち無である。）

死せず、未だ嘗て生れざるを。若果して養ふるか。予果して歡ぶか。種幾ばくか有る。水を得れば則ち㡭と爲り、水土の際を得れば、則ち鼃蠙の衣と爲り、陵屯に生ずれば則ち陵舃と爲り、陵舃欝棲を得れば、則ち烏足と爲る。烏足の根は蠐螬と爲り、其の葉は胡蝶と爲る。胡蝶は胥なり。化して蟲と爲り、竈下に生ず。其の狀脱するが若し、其の名を鴝掇と爲す。鴝掇は千日にして鳥と爲る。其の名を乾餘骨と爲す。乾餘骨の沫は斯彌と爲り、斯彌は食醯と爲る。頤輅は食醯に生じ、黄軦は九猷に生じ、瞀芮は腐蠸に生ず。羊奚は不箰の久竹に比して靑寧を生ず。靑寧は程を生じ、程は馬を生じ、馬は人を生ず。人又反つて機に入る。萬物皆機より出でて、皆機に入ると。

【大意】死生は一變化に過ぎず。俗に所謂死生なるものはない。故に死憂ふるに足らず生も歡ぶに足らない。物化の種類は實に無數であるが皆自然であつて造化の無から出て無に入ることを繰返すのみである。此の章、列子天瑞篇に見えて文稍ゝ異なる、參照。

【通釋】列子が旅行中路傍で食事をした。其の時百年も經つた髑髏を見つけ、蓬を抜いて之を指して曰ふに「死生などは未だ嘗て無いことで、自然の一變化に過ぎないといふ理を知つて居る者は唯我と汝とのみである。汝は死の狀態に在るが果して憂へるか、一向憂へて居ない。我は生の狀態に在るが果して歡ぶか、一向歡と思はぬ。死生は種々樣々の自然の變化の中の一狀態に過ぎないからである。一體變化の種類はどれ程あるか。實に多種多樣である。塵埃が水面に浮べば㡭となり、それが水底の水と土と相交るきはに近づくと鼃蠙の衣といふ苔になり、又それが岡に生じて陵舃といふ草になり、陵舃が肥料を得ると烏足といふ草になり、烏足の根は蠐螬といふ蟲になり、葉

○義設ニ於適一(義は宜と同じ。物各々性の適する所に隨つて宜しき道を設ける意。秦鼎の補義に名止ニ於實一、小不レ使ニ之懷一レ大、短不レ使ニ之汲一レ深也。義設ニ於適一、不レ奏ニ韶具一レ牢以養レ鳥也とある。) ○條達福持(條理が普く通じて、幸福が永久に保持される意。補義に條達則人不レ惑、福持則已可レ保とある。)

列子行食ニ於道從一。見ニ百歲髑髏一、攓レ蓬而指レ之曰、唯予與レ女知、而未ニ嘗死一、未ニ嘗生一也。若果養乎、予果歡乎。種有レ幾。得レ水則爲レ𢇁、得ニ水土之際一則爲ニ鼃蠙之衣一、生ニ於陵屯一則爲ニ陵舄一、得ニ鬱棲一則爲ニ烏足一。烏足之根爲ニ蠐螬一、其葉爲ニ胡蝶一。胡蝶胥也化而爲レ蟲、生ニ於竈下一。其狀若レ脫。其名爲ニ鴝掇一。鴝掇千日爲レ鳥。其名爲ニ乾餘骨一。乾餘骨之沫爲ニ斯彌一、斯彌爲ニ食醯一。頤輅生ニ乎食醯一、黃軦生ニ乎九猷一、瞀芮生ニ乎腐蠸一。羊奚比ニ乎不箰久竹一生ニ青寧一。青寧生レ程、程生レ馬、馬生レ人。人又反入ニ於機一。萬物皆出ニ於機一、皆入ニ於機一。

列子行いて道從に食す。百歲の髑髏を見、蓬を攓いて之を指して曰く、唯だ予と女とのみ知る、未だ嘗て

と云ふことだ。これは魯侯が己を養ふ方法を以て鳥を養ひ、鳥を養ふ方法を以て鳥を養つたのでないからである。一體鳥を養ふ方法で鳥を養ふには、之を深林に棲ませ、沙洲に遊ばせ、江湖に浮べ、之に鰌鰷を食はせ、鳥の仲間に隨つて止まり、自由に居らしむべきである。鳥は唯人の言葉を聞くのさへ嫌ふ、どうして彼のげうくしい音樂など聞かされてたまるものか。咸池・九韶などいふ善美を盡した堯舜の樂を若し洞庭の野で奏したら、鳥が聞けば驚いて飛び、獸が聞けば逃げ、魚が聞けば深く水底へ沈んで行く。人間だけは之を聞けば一同其の周圍を取りまいて觀るのである。魚は水に居つて生き、人は水に居れば死ぬ。彼等人間と魚とは、一は水を好み他は水を惡むといふやうに必ずお互に好嫌が違ふ。故に斯く生死の差が出來るのだ。だから古先聖王は人の能を一樣に律せずして之を器とし、同じ仕事を任せず各人の實情にかなふやうにした。そして各實際の才能に釣合つた名を得て實に過ぐるの名無からしめ、又各自性の適する所に隨つて宜しき道を設けた。是をこそ條理が普遍に通達して人惑はず、幸福は長く保持されて身安きを得る道と謂ふのである。」

語釋 褚（布の袋。） ○綆（釣瓶繩。二句齊侯の語るに足らざるを暗喩す。但し今の管子書中には此の語はない。） ○成（定まる意。） ○人惑則死（人は齊侯を指し死は回が殺される意。林西仲は捕手以て莊に擬せんと欲す何ぞ自ら殺らざるやとけなして居る位で、無理な語法である。或は死の字を他動詞として殺すと訓ずるも可。） ○御（迎へる。） ○觴（酒を飲ませる。） ○九韶（舜の樂で孔子が善美を盡すと許されたもの。） ○太牢（牛、羊、豕三牲の肉で此の上なき馳走の意。） ○膾（細かに切つた肉。） ○壇陸（壇は司馬本に澶に作る。水中の沙洲である。故に陸の字を附ける。） ○鰍（白魚の子。） ○行列（同類の列。） ○委蛇（のんびりと自得する貌。） ○譊々（かまびすしい貌。） ○咸池（堯の樂前に出づ。） ○人卒（人衆。） ○還（環と同じく、ぐるりを取まくこと。） ○彼必云々（成疏に「彼の人魚、性を稟くること各々別、好惡同じからず、故に死生斯く異なり」とあるに據つて通釋した。莊子因には「彼必相與異、其好惡故也。」とあつて原因が後になつて居るが何れでも通ずる。） ○名止於實（止は止於至善の止。名が實より過ぎることもなく及ばぬこともなく、きちんと一致すること。）

を一にせず。其の事を同じうせず。名は實に止まり、義は適に設く。是を之れ條達して福持すと謂ふと。

大意　孔子と子貢との問答に託し、人各性質材能が異つて居るから一樣に律するわけにいかぬ、各自其の適する所に應じて事に任じ、名實相合ふやうにすべきを論じたもの。林西仲曰く、此の一段、上下の文と絶えて相蒙らず。其の文の庸弱堪へず、醜態備さに見はる、憾むべしとなす。彼の贋作者、自ら欺くを覺らずして人を欺く。然れども緇繩の水に合へるすら、尙ほ能く之を辨ずる者あり。況んや魚目、珠に混ずる、安んぞ掩ふべけんやと。

通釋　顏淵が東の方、齊國に往かうとしたら、孔子が心配さうな顏付をして居た。子貢は席を下つて問うて曰ふに「お伺ひしますが、顏囘の齊に往くに就いて先生には御心配の御樣子でいらつしやるのは何ういふわけですか。」孔子が曰はれるに「よく聞いて吳れた。昔、管仲の言つた言葉に、非常にわしの氣に入つて居るのがある。卽ち斯うだ。『布の袋の小さいのは大きな物を容れることが出來ず、つるべ繩の短いのは深い井水を汲むことが出來ぬ』といふのだ。斯樣に言つた言葉の內容は天命は各定まる所があり、形體はそれ〲適する所があつて增減することは出來ないものだといふのである。そこでわしが心配するのは、囘が齊侯と堯・舜・黃帝の道を言ひ、重ねて燧人神農の言を說いたならば、齊侯は內、己の心に考へ求めても理解出來ないだらう。理解出來ないと疑惑を生ずる。すると囘の己に勝るのを怒つて必ず囘を殺すやうにならうといふことである。且つ汝も聞いて居るだらう。昔、海鳥が來て魯の東郊に止つたことがある。魯侯は迎へて之を宗廟中に宴し、舜の九韶の樂を奏し、牛羊豕を具へて馳走をした。所が鳥は却て目がくらみ、憂ひ悲しんで、敢て一片の肉も食はず、又一杯の酒も飲まず、三日で死んだ

處水而生、人處水而死。彼必相與異其好惡。故異也。故先聖不一其能、不同其事。名止於實、義設於適。是之謂條達而福持。

訓讀

顔淵東齊に之く。孔子憂色あり。子貢席を下つて問うて曰く、小子敢へて問ふ、回東齊に之く、夫子憂色あるは何ぞやと。孔子曰く、善いかな女の問や。昔管子言へるあり、丘甚だ之を善しとす。曰く、褚の小なるものは、以て大を懷くべからず。綆の短きものは、以て深きを汲むべからずと。夫れ是の若きものは、以爲へらく、命は成る所有つて、形は適する所あり、夫れ損益すべからずと。吾れ恐らくは回、齊公と堯舜黃帝の道を言つて、重ぬるに燧人神農の言を以てせば、彼れ將に內己に求めて得ざらんとす、得ざれば則ち惑ふ、人惑はば則ち死せんことを。且つ女獨り聞かずや。昔海鳥魯の郊に止まる。魯侯御へて之を廟に觴し、九韶を奏して以て樂と爲し、太牢を具へて以て膳と爲す。鳥乃ち眩視憂悲して、敢へて一臠を食はず、敢へて一杯を飲まず、三日にして死す。此れ己が養を以て鳥を養ふなり。鳥の養を以て鳥を養ふに非ざるなり。夫れ鳥の養を以て鳥を養ふものは、宜しく之を深林に栖ませ、之を壇陸に遊ばせ、之を江湖に浮べ、之に鰌鰷を食はせ、行列に隨つて止まり、委蛇して處らしむべし。彼は唯々人言をだも聞くことを惡む、奚ぞ夫の譊譊を以てせんや。咸池九韶の樂、之を洞庭の野に張れば、鳥は之を聞きて飛び、獸は之を聞きて走り、魚は之を聞きて下り入る。人卒は之を聞きて相與に還つて之を觀る。魚は水に處りて生き、人は水に處りて死す。彼れ必ず相與に其の好惡を異にす。故に異なるなり。故に先聖其の能

顏淵東之齊。孔子有憂色。子貢下席而問曰、小子敢問、回東之齊、夫子有憂色何邪。孔子曰、善哉女問。昔者管子有言、丘甚善之。曰、褚小者不可以懷大。綆短者不可以汲深。夫若是者、以爲命有所成、而形有所適也、夫不可損益。吾恐回與齊侯言堯舜黃帝之道、而重以燧人神農之言、彼將內求於己而不得、不得則惑、人惑則死。且女獨不聞邪。昔者海鳥止於魯郊。魯侯御而觴之於廟、奏九韶以爲樂、具太牢以爲膳。鳥乃眩視憂悲、不敢食一臠、不敢飲一杯、三日而死。此以己養養鳥也。非以鳥養養鳥也。夫以鳥養養鳥者、宜栖之深林、遊之壇陸、浮之江湖、食之鰌鰷、隨行列而止、委蛇而處。彼惟人言之惡聞、奚以夫譊譊爲哉。咸池九韶之樂、張之洞庭之野、鳥聞之而飛、獸聞之而走、魚聞之而下入。人卒聞之、相與還而觀之。魚

しく思つて縊れてでも死んだのか。或は衣食に乏しく凍えたり飢ゑたりして死んだのか。或は壽命が盡きて死んだのか。」かく言ひ終つて莊子は骸骨を引き寄せて、枕にして臥た。夜半に骸骨が夢に現はれて莊子に向つて曰ふに、「そなたの談ずることは辯士に似て居る。がいろ〳〵そなたの言ふ所は皆生きた人間のわづらひである。死ねば此のわづらひは無くなつてしまふ。處でそなたは死の說を聞きたいと思ふか。」莊子が曰ふ「聞きたい。」骸骨が曰ふに「死の世界では上に君なく下に臣なく、春夏秋冬の移り變りもなく、從容として天地と壽命を等しくして居る。南面の王者の樂でも之に勝ることは出來ない。」莊子は信じないで曰ふに「わしは壽命を司る神樣に賴んで、もう一度そこ許の形を生じ、骨や肉や皮膚を作り、そこ許の父母や妻子や鄕里の知人の所へ戻してやらうと思ふが、そこ許は希望するか、どうだ。」すると骸骨は深く眉をひそめ、鼻すぢをしかめて曰ふに「いや、わしはどうして南面の王者に等しい此の樂を棄てて、再び人間界の苦勞をしよう。眞平御免です。」

語釋 髐然（音カウゼン。釋文には白骨の貌枯形有るなりとあり。成疏に潤澤なき貌とあり。或は空虛にして堅固なる貌ともいふが、何れでも大した違はない。）〇撽（音ケウ。ウツと訓ず。旁擊の意。）〇馬棰（馬杖。）〇夫子（髑髏を呼んでいふ。）〇貪レ生（生命欲の深いこと。生に執着深きこと。）〇失理（自然の理に悖り酒色などに耽ること。）〇亡國之事（征戰の事。）〇斧鉞之誅（行陣に事を敗るの罪を以て誅殺せられたこと。）〇醜（恥辱。）〇春秋（壽命。）〇諸子所レ言（諸の字一本に視に作る。今諸の字に從つてモロ〳〵と訓ず。）〇從然（從容自得の貌。）〇以二天地一爲二春秋一（春秋は壽命の意。天地と其の年壽を同じうすること。）〇司命（天上に在つて生命を司る神。）〇知識（平生相識る所の人。）〇深矉（矉は顰と通じ、深く眉をひそめて愁ふること。）〇蹙頞（音シュクアツ。頞は鼻柱。鼻すぢをしかめて愁ふること。）

勞ヲ乎ト。

訓讀 莊子楚に行く。空髑髏を見る。髐然として形あり。撽つに馬捶を以てし、因つて之に問うて曰く、夫子生を貪り理を失うて、此と爲れるか。將た子、亡國の事、斧鉞の誅あつて、此と爲れるか。將た子、不善の行あり、父母妻子の醜を遺さんことを愧ぢて、此と爲れるか。將た子、凍餒の患あつて、此と爲れるか。將た子の春秋、故より此に及べるかと。是に於て語卒り、髑髏を援いて枕として臥す。夜半に髑髏、夢に見えて曰く、子の談ずるは辯者に似たり。諸〻子の言ふ所は、皆生人の累なり。死すれば則ち此れ無し。子死の說を聞かんと欲するかと。莊子曰く、然りと。髑髏曰く、死は上に君なく、下に臣なく、亦四事の事なし。從然として天地を以て春秋と爲す。南面王の樂みと雖も、過ぐる能はざるなりと。莊子信ぜずして曰く、吾れ司命をして、復た子の形を生じ、子の骨肉肌膚を爲り、子の父母妻子、閭里の知識に反さしめん。子之を欲するかと。髑髏、深矉蹙頞して曰く、吾れ安くんぞ能く南面王の樂みを棄てゝ、復た人間の勞を爲さんやと。

大意 髑髏の語を假りて死生の理を說き、無爲の樂を叙したのである。

通釋 莊子が楚に往つた。途中でからになつたしやりかうべを見た。ひからびて澤氣なく形だけある。莊子が鞭で打ちながら問うて曰ふに「そこ許は生の執着深く、道理を失つて嗜慾を恣にした爲に、こんなになつたのか。或は戰爭の際失敗でもして誅せられてこんなになつたのか。或は不善の行があつて父母妻子の醜名を殘すを愧か

○冥伯之丘（成疏に「冥は闇なり、伯は長なり、神智杳冥、物の長たるに堪ふるを言ふ」とあつて杳冥の所に喩へたのである。）　○崑崙之虚（崑崙は高山の名、玄遠に喩へたのである。虚は墟と同じで大いなる丘。）　○柳（瘤に通ず。一說に瘍といふも亦通ずる。或は柳の木といふ說あれども取らない。）　○蹷々然（音ケイ。驚動の貌。）　○塵垢也（一說に生を指すとするがそれでも通ずる。）　○化（一說に死と同じと曰ふが亦通ずる。）

莊子之楚。見空髑髏。髐然有形。撽以馬捶。因而問之曰、夫子貪生失理而爲此乎。將子有亡國之事、斧鉞之誅、而爲此乎。將子有不善之行、愧遺父母妻子之醜、而爲此乎。將子有凍餒之患、而爲此乎。將子之春秋故及此乎。於是語卒、援髑髏枕而臥。夜半髑髏見夢曰、子之談者似辯士。諸子所言、皆生人之累也。死則無此矣。子欲聞死之說乎。莊子曰、然。髑髏曰、死無君於上、無臣於下、亦無四時之事。從然以天地爲春秋。雖南面王樂、不能過也。莊子不信曰、吾使司命復生子形、爲子骨肉肌膚、反子父母妻子閭里知識。子欲之乎。髑髏深矉蹙頞曰、吾安能棄南面王樂、而復爲人間之

也。假レ之而生。生者塵垢也。死生爲二晝夜一。且吾與レ子觀レ化、而化及レ我、我又何惡焉。

訓讀　支離叔、滑介叔と、冥伯の丘、崑崙の虛、黃帝の休せし所に觀ぶ。俄にして柳其左肘に生ず。其の意、蹷然として之を惡む。支離叔曰く、子之を惡むか。滑介叔曰く、亡し、予何ぞ惡まん。生なるものは假借なり。之を假りて生ず。生ずるものは塵垢なり。死生は晝夜たり。且つ子と化を觀て、化我に及ぶ、我又何ぞ惡まん。

大意　達人は生は假り物で死生は晝夜のやうなものだと覺つて居るから、病が出ても憂へないことをいふ。亦大宗師篇より脫化す。

通釋　支離叔と滑介叔とが、冥伯の丘、崑崙の墟、即ち黃帝の曾て休息した所に遊んだが、俄に滑介叔の左の肘に瘤が出來た。それで其の心中驚いて如何にもいやなやうに見えた。支離叔が「貴公そんなに氣にするのか」と尋ねると、滑介叔が答へて曰ふこ、「否、予は何も氣にして居ない。一體人間の生は天地陰陽の氣を假りて成り立つたものである。瘤は又其の生を假りて生ずるのである。だから謂はば塵垢の集合に均しい。瘤はおろか、死生すら晝夜の如きものだ。且つ吾れ貴公とここに來て萬物の變化を觀、其の變化が我が身にも及んで瘤を生じたので、これ自然の作用であるから、何もいやがつて氣にしたりしないよ。」

語釋　支離叔(成疏に「支體離析以て形を忘るるを明かにするなり」と。「叔とは叔世(スヱノヨ)渙訛を寓して號して叔となす」と。人間世にも支離疏あり、參照。)　○滑介叔(成疏に「滑介は猶ほ滑稽の如し。滑稽挺特以て智を忘るるを謂ふ」とある。)

「いやさうぢやない。妻が今死んだばつかしといふ刹那には、そりや俺だつて獨り他人と異つて驚き慨かないといふことが何うして出來ようか。然しつくづくその生れぬ前を考へると本來知覺運動など所謂生といふことはない。ただ生が無いばかりでなく、本より形がない。形が無いのは勿論、もともと氣もないのだ。唯大道のぼうつとして認識の出來ない間にまじつて在つたが、自然の成行で變じて陰陽の二氣となり、氣が變じて形が出來、形が更に變じて生といふことがあるのだ。所で今又生が自然の成行で變じて死にゆくので、是れかの春夏秋冬の四季がくりかへしめぐり行くのと同樣である。妻は今正に安らかに天地といふ巨大な室に寢て居る。それに俺がやかましく聲を立てて附隨して哀哭するならば、如何にも天命を知らないやうに思へるから哭することは止めたのである。」

語釋 箕踞（成疏に「兩脚を垂れて簸箕の形の如くするなり」とある。）○鼓レ盆（成疏に「盆は瓦缶なり」とある。「ほとぎ」と訓ずる。）○與レ人居（人は妻を指す。）○死不レ哭亦足矣（足矣は可なの意で、莊子の主義上から、まあそれ位のことは可として許せるがといふ意。一說に亦足矣は亦非難攻擊するに足れりの意と見る。いづれでも通ずるが今前說に從つておく。）○始死（死んだ間際。）○槩然（慨然と同じで、驚嘆のさま。）○察二其始一（始は生れぬ前。）○雜二乎芒芴之閒一（恍惚渾沌たる中に混在する。）○相與（同樣に。）○偃然（安臥のさま。）○巨室（天地間を指す。）○嗷々然（かまびすしきさま。）

支離叔與滑介叔觀於冥伯之丘、崑崙之虛、黃帝之所休。俄而柳生其左肘。其意蹷蹷然惡之。支離叔曰、子惡之乎。滑介叔曰、亡。予何惡。生者假借

相與爲春秋冬夏四時行也。人且偃然寢於巨室、而我噭噭然隨而哭之、自以爲不通乎命。故止也。

【訓讀】莊子の妻死す、惠子之を弔ふ。莊子則ち方に箕踞して、盆を鼓して歌ふ。惠子曰く、人と與に居て、子を長じ身を老せり。死して哭せざる、亦足れり、又盆を鼓して歌ふは、亦甚しからずやと。莊子曰く、然らず。是れ其の始め死するや、我れ獨り何ぞ能く槩然たること無からんや。其の始めを察するに、本生なし。徒に生なきのみに非ずして、本形なし。徒に形なきのみに非ずして、本氣なし。芒芴の閒に雜はり、變じて氣あり。氣變じて形あり、形變じて生あり、今又變じて死に之く。是れ相與に春秋冬夏四時の行を爲せるなり。人且偃然として巨室に寢ぬ、而して我噭噭然として、隨つて之を哭せば、自ら以爲へらく、命に通せずと。故に止むるなりと。

【大意】此の章は命に通ずる者は、生必ずしも喜ぶべきにあらず、死必ずしも哀しむべきに非ぎるの理を知つて、死生を觀ること一の如くなるをいつたのである。大宗師篇より脫化す。參照。

【通釋】莊子の妻が死んだので、惠子が悔みに往つた。すると莊子はちやうど兩足を投げ出して、缶を叩いて歌つて居た。惠子が曰ふに「君は細君と一緒に住まつて子供を育て偕に年を取つて情愛頗る深い筈だ。然るに今その細君の死に際し、哀哭しないだけなら可い、又缶を叩いて歌ふに至つては、まああんまりぢやないか。」莊子が曰ふに

れは唯無爲にして始めて得られるのである。試みに之を論證してみよう。天は無爲だから淸いし、地は無爲だから寧いのである。そして此の兩つの無爲が相合して萬物が皆創造されて行くのである。その創造の始めはぼーつとしてどこからどうして出て來るのかわからず、又ぼーつとして其の形も認めることが出來ない。全く自然にして出で自然にして有るといふさまだ。而も萬物はどしく皆無爲からして繁殖してゆく。故に古語に「天地は無爲である。けれども爲さない所はない」と曰つてある。一般世俗の人この無爲の境地に悟入し至樂にして身を活かすの妙味を味ひ得るものは誰もなからう。

語釋 吾又未レ知（此の句意を上下にかけて見る。） ○誙々然（誙は音「カウ」、死に趣くさま。たとひ死んでも止められぬといふさま。） ○幾レ存（幾は「近し」の意。無爲なれば至樂活身其の中に在るに近しといふ意。換言すれば無爲なれば至樂活身といふ結果が自然に得られるといふ意。） ○芒乎芴乎（芒は茫に同じ、前に出づ。芴は音「コツ」忽と同じ。成疏に恍惚芒昧とあり、淮南原道高註に無形之象とある。要するにぼーつとしてわかりにくいさま。） ○無ニ從出一乎。無レ有レ象乎（二句の終の「乎」の字は「かな」の意。） ○職々（成疏に繁多の貌とある。）

莊子妻死。惠子弔レ之。莊子則方箕踞鼓レ盆而歌。惠子曰、與レ人居長レ子老レ身、死不レ哭亦足矣。又鼓レ盆而歌、不ニ亦甚一乎。莊子曰、不レ然。是其始死也、我獨何能無ニ槩然一。察ニ其始一而本無レ生。非ニ徒無一レ生也、而本無レ形。非ニ徒無一レ形也、而本無ニ氣一。雜ニ乎芒芴之間一、變而有レ氣。氣變而有レ形、形變而有レ生、今又變而之レ死。是

至譽は譽れなしと。天下の是非、果して未だ定むべからざるなり。然りと雖も、無爲以て是非を定むべし。至樂身を活かすは唯々無爲なれば存するに幾し。請ふ嘗試みに之を言はん。天は無爲、之を以て淸く、地は無爲、之を以て寧し。故に兩の無爲相合して、萬物皆化す。芒乎芴乎として、從つて出ること無きか。芴乎芒乎として、象有ること無きか、萬物職職として、皆無爲より殖す。故に曰く、天地は無爲なり。而して爲さざること無しと。人や孰れか能く無爲を得んや。

大意 至樂にして身を活かすは、唯無爲なるに在るを論じ、天地を引いて之を證したのである。

通釋 現今一般の人の爲す所と其の樂しむ所とは、どうもその樂しむ所が本當に樂しいものであるか、樂しくないものか、自分はまだ分り兼ねる。自分がかの一般人の樂しむ所を觀ると、天下擧つて富貴壽譽に趣く者、たとひ死に至つても是非がないといつたやうな風である。さうして皆それを樂しいと云ふが、予に取つてはまだ之を樂しいとは思はない。さうかといつてまんざら樂しまないわけでもない。然らば本當に樂しみといふものがあるか、又は無いかといふ問題になるが、吾は無爲を以て誠に樂しむべき境界とする。がこの無爲は又一般人の大に苦しむ所である。だから古語にも「眞の樂しみは世俗の所謂樂しみを超越したものであり、眞の譽れは世俗の譽れを超越したものである」と云つてある。で一般人の樂しみは眞の樂しみでなく、烈士の譽れとする所も眞の譽れでない。かう觀て來ると天下の是非の論も各自見る所が異るから一寸きまらないが、然し無爲即ち是非を超越した境に至れば、反つて公平に是非を定めることが出來る。眞の樂しみは心身を苦勞させないから身を活かすことになるが、そ

今俗之所ㇾ爲與㆓其所㆒ㇾ樂、吾又未ㇾ知、樂之果樂邪、果不ㇾ樂邪。吾觀㆓夫俗之所㆒ㇾ樂、擧ㇾ羣趣者誙誙然如ㇾ將ㇾ不ㇾ得ㇾ已、而皆曰ㇾ樂者、吾未㆓之樂㆒也。亦未㆓之不㆒ㇾ樂也。果有ㇾ樂無ㇾ有哉。吾以㆓無爲㆒誠樂矣。又俗之所㆓大苦㆒也。故曰、至樂無ㇾ樂、至譽無ㇾ譽。天下是非果未ㇾ可ㇾ定也。雖ㇾ然無爲可㆓以定㆒是非㆒。至樂活ㇾ身惟無爲幾ㇾ存。請嘗試言ㇾ之。天無爲以ㇾ之淸、地無爲以ㇾ之寧。故兩無爲相合、萬物皆化。芒乎芴乎無㆓從出㆒乎。芴乎芒乎而無ㇾ有ㇾ象乎。萬物職職、皆從㆓無爲㆒殖。故曰、天地無爲也。而無ㇾ不ㇾ爲也。人也孰能得㆓無爲㆒哉。

訓讀 今、俗の爲す所と、其の樂しむ所とは、吾れ又未だ知らず、樂しむの果して樂しきか、果して樂しからざるかを。吾れ夫の俗の樂しむ所を觀るに羣を擧げて趣くもの、誙誙然として將に已むことを得ざらんとするが如くにして、而して皆樂しと曰ふ者、吾れ未だ之を樂しとせざるなり。亦之を樂しまずんばあらざるなり。果して樂み有りや、有ること無しや。吾れ無爲を以て誠に樂しとす、又俗の大に苦しむ所なり。故に曰く、至樂は樂み無く、

通釋　一體富人は身を苦しめてせつせと働き、澤山財貨を積み重ねるけれども、盡く用ひることは出來ぬ。して見ると肉體の爲にするやうで却つて肉體を度外視して居る。又貴人は夜を日に繼いで職務の上について善否を思慮して殆ど休むひまがない。是亦その形體の爲に計るやうで却つて形體を疎んずることになる。又人が此の世に生れるには憂と倶に生れて來るものだから、憂は一生附きまとつて居る。然るに長壽の人は精神がぼけ、久しく憂へつつ死ぬことだけはしないで居る。何と之も苦しいことよ。是れ亦其の形體を疎遠に取扱ふものである。身を以て節義に殉する士は天下の爲に善と稱せられるけれども、肉體を害するのでつまり其の身を活かすことが出來ぬ。だから世に所謂善は眞に善であるか、或は眞に不善であるか、まだ輕々しく決められぬ。若し善ときめたら一方其の身を活かすことが出來ぬといふ矛盾が起る。若し不善と定めたら、一方人を活かすことが出來るといふ矛盾が生ずる。だから古語にも其の君に忠諫を申上げてお聽入れがなかつた場合には、君の御意に順從して爭ふなとある。故にかの伍子胥は諫爭したがために其の身が殺された。然し諫爭しなかつたら忠烈の名譽は得られなかつたらう。して見るとそこに眞に善があるか、或は善なきかどうも一寸分らない。

語釋　疾作(せつせと勞作する。)　○不レ得二盡用一(自分の身に必要なのは知れたものだから結局金の番人となる。)　○外矣(一説に的がはづれて居る意とするが、今は郭注に從つておく。)　○疏矣(一説に迂闊の意とするが、今は郭注に從つておく。)　○惛々(心昏きさま。老耄して精神がぼけたさま。)　○久憂(壽長きゆゑ憂ふる期間も亦長い。)　○遠矣(一説に迂遠の意とするが矢張成疏に從つておく。)　○列士(烈士と同じ。)　○蹲循(成疏に「猶ほ順從の如し」とあるに從つておく。集釋に逡巡と同じだとあるが、さうすれば退く意となる。)　○子胥(呉の忠臣、伍子胥、呉王夫差を諫めて、劒を賜はつて自殺した。前に出づ。)

何之苦也。其爲形也亦遠矣。列士爲天下見善矣、未足以活身。吾未知善之誠善邪、誠不善邪。若以爲善矣、不足活身。以爲不善矣、足以活人。故曰、忠諫不聽、蹲循勿爭。故夫子胥爭之以殘其形。不爭、名亦不成。誠有善無有哉。

訓讀 夫れ富む者は、身を苦しめて疾作し、多く財を積んで、盡く用ふるを得ず。其の形の爲にするや亦外なり。夫れ貴き者は、夜以て日に繼ぎ、善美を思慮す。其の形の爲にするや亦疏なり。人の生るゝや、憂と倶に生る。壽き者は惛惛として、久しく憂へて死せず、何ぞ之れ苦しきや。其の形の爲にするや、亦遠し。列士天下の爲に善とせらるゝも、未だ以て身を活かすに足らず。吾れ未だ知らず、善の誠に善なるか、誠に不善なるかを。若し以て善と爲さば、身を活かすに足らず。以て不善と爲さば、以て人を活かすに足れり。故に曰く、忠諫聽かれずんば、蹲循して爭ふ勿れと。故に夫の子胥之を爭うて以て其の形を殘ふ。爭はざれば名も亦成らず。誠に善有りや有ること無しや。

大意 世俗の尊重する富貴壽善は、性を養ひ身を活かすべき完全至上の樂しみでないことを明かにしたのである。

しむ所の者は、身安逸を得ず、口厚味を得ず、形美服を得ず、目好色を得ず、耳音聲を得ざるなり。若し得ざるときは、則ち大に憂へ以て懼る。其形の爲めにするや、亦愚なるかな。

大意　此の一節、世俗の苦樂は物質上に墮して眞を失ふを說く。

通釋　此の世に完全無上の樂しみといふものがあるか、ただしは無いか。それで以て此の性命を養つて活かしてゆけるやうな完全至上の樂しみが有るか、但しは無いだらうか。今至樂以て身を活さうと欲せば、何を爲し、何に依り、何を忌み避け、何に安んじ居り、何に就き從ひ、何を捨て去り、何を樂しみ好み、何を惡み嫌ふべきか。一體世俗の尊重する所の事は富貴壽善である。又樂しむ所の事は、身體安樂で、滋味を食ひ、美服を着、好い色を見、面白い音樂を聽くことである。又世俗の卑しみ厭ふ所の事は貧賤夭惡である。そして苦痛に感ずる所の事は、身が安逸を得ず、口に滋味を得ず、からだが美服を得ず、目に好い色を視ず、耳に面白い音樂を聽くを得ざることである。萬一それらが得られない場合には、大にくよくよ思ひ且つびくびくして居る。其の肉體の爲にのみ拘はつて居るのは、何と愚の骨頂であるわい。

語釋　壽善（壽は長命、善は善譽。）　○夭惡（壽善の對語で、夭はわか死、惡は惡評汚名。）　○爲レ形（肉體の爲にする、物質的であること。）

夫富者苦レ身疾作、多積レ財而不レ得二盡用一。其爲レ形也亦外矣。夫貴者夜以繼レ日、思二慮善否一。其爲レ形也亦疏矣。人之生也、與レ憂俱生。壽者惛惛、久憂不レ死、

外篇　至樂第十八

叙説　此の篇は至樂の眞義を叙す。死生變化は四時晝夜の如くすべて自然の流轉であるから、以て哀樂するに足らない。至樂は死生の哀樂を超越し全く自然に順つて絶對無樂の境地に住するに在るといふのである。

天下有至樂無有哉。有可以活身者無有哉。今奚爲奚據、奚避奚處、奚就奚去、奚樂奚惡。夫天下之所尊者、富貴壽善也。所樂者、身安厚味美服好色音聲也。所下者、貧賤夭惡也。所苦者、身不得安逸、口不得厚味、形不得美服、目不得好色、耳不得音聲。若不得者、則大憂以懼。其爲形也亦愚哉。

訓讀　天下に至樂有りや、有ること無しや。以て身を活かすべきもの有りや、有ること無しや。今奚をか爲し、奚にか據り、奚をか避け、奚にか處り、奚にか就き、奚をか去り、奚をか樂しみ、奚をか惡まん。夫れ天下の尊ぶ所の者は富貴壽善なり。樂しむ所の者は、身安く、厚味美服好色音聲なり。下とする所の者は、貧賤夭惡なり。苦

通釋 鯈魚(鯈は音にイウ、俗にハエと稱する小魚。) ○請循二其本一(枝葉の論を去つて根本に反る意。)

んと。惠子曰く、我は子に非ず、固より子を知らず。子は固より魚に非ざるなり。子の魚の樂しきを知らざるや、全しと。莊子曰く、請ふ其の本に循はん。子曰つて、女安んぞ魚の樂しきを知らんと云へるは、既に已に吾が之を知れるを知つて我に問へるなり。我之を濠上に知れりと。

大意 凡そ物論の囂々たるは大小貴賤を齊視する底の萬物一體觀を缺くによるといふのである。

通釋 莊子が或る日惠子と共に濠水といふ川の橋上に遊んだことがある。其の日は天氣がうららかで滿目皆喜ぶの觀があつた。莊子が曰ふには「ハエが如何にもゆつたりとして遊んで居るぢやないか、魚も樂しいと見える。」惠子が曰ふには「貴公は魚でないから魚の樂しんで居ることが分る筈はないぢやないか。」莊子が曰ふには「さういふ理窟からいふなら、そこ許は我輩でないから我輩が魚の樂しんで居ることを知らないといふことも分らん筈だ。」惠子が曰ふには「我が輩は貴公でないから勿論貴公の心理は分らない、それと同樣に貴公も魚でないから貴公が魚の樂を知り得ないことは確實である。」そこで莊子がいふには「理窟の末に捕はれないで、道理の根本に立ち返つて論じようではないか。最初そこ許は、貴公は魚でないから魚が樂しんで居るかどうかは分らないと主張せられたが、其の時そこ許は吾輩が知つて居ることを十分知つて居て吾輩に尋ねられたに過ぎない。卽ち單に理窟の爲めの理窟を云はれたに過ぎぬ。萬物一體、萬殊一如、各々類を異にすと雖も其の之を貫ける理は一のみ。故に吾輩は水の中へ這入つて魚にならなくても濠上に居たままで魚の樂を知ることが出來るのだ。そこ許も皮相的屁理窟ばかりこねまはして居ないで今少しく物の本質實體についてマナコをそそがれたがよい。」

ば止まらず、竹の實でなければ食はず、甘泉でなければ飲まぬ。處がここに鳶めが腐つた鼠を手に入れた。丁度鵷鶵が其の上を通り過ぎた。其の時鳶めが上を向いて鵷鶵を視て、腐鼠を奪はれるかと思つてカッと一聲怒鳴つたといふことだ。今貴公も亦、梁國の大臣の地位を奪はれるかと恐れて、おれに向つてカッと怒鳴らうと思ふのか。折角だがおれには大臣の位などは腐鼠も同然、そんな下らぬものは欲しがらないから安心し給へ。」

語釋 鵷鶵（成疏に「鸞鳳の屬、亦鳳の子を言ふ也」とあり、副墨に「鳳雛也」と見えて居る。）○鴟（鳶。）○嚇（司馬注に「嚇は其の聲を怒らす、其の已に奪はんことを恐れてなり」とある。腐鼠を奪はれようかと恐れて、鳶が鵷鶵を威すつもりで怒鳴つた聲である。）○練實（副墨に「竹の實也」とある。）○醴泉（甘くして醴のやうな味のある靈泉。又爾雅釋天には「甘雨時に降り萬物以て嘉す之を醴泉といふ」と見えて居る。）

莊子與惠子遊於濠梁之上。莊子曰、鯈魚出遊從容。是魚樂也。惠子曰、子非魚、安知魚之樂。莊子曰、子非我、安知我不知魚之樂。惠子曰、我非子、固不知子矣、子固非魚也。子之不知魚之樂全矣。莊子曰、請循其本。子曰、女安知魚樂云者、既已知吾知之而問我。我知之濠上也。

訓讀 莊子、惠子と濠梁の上に遊ぶ。莊子曰く、鯈魚出で遊びて從容たり。是れ魚の樂しむなりと、惠子曰く、子は魚に非ず。安んぞ魚の樂しきを知らんと。莊子曰く、子は我に非ず、安んぞ我が魚の樂しみを知らざるを知ら

國中、三日三夜。莊子往見之曰、南方有鳥、其名鵷鶵、子知之乎。夫鵷鶵發於南海、而飛於北海。非梧桐不止、非練實不食、非醴泉不飮。於是鴟得腐鼠。鵷鶵過之。仰而視之曰、嚇。今子欲以子之梁國而嚇我耶。

訓讀 惠子梁に相たり。莊子往いて之を見る。或る人惠子に謂つて曰く、莊子來り子に代りて相たらんと欲すと。是に於て惠子恐れて國中を搜すこと、三日三夜。莊子往いて之を見て曰く、南方に鳥あり、其の名は鵷鶵、子之を知るか。夫の鵷鶵は南海を發して北海に飛ぶ。梧桐に非ざれば止らず、練實に非ざれば食らはず、醴泉に非ざれば飮まず。是に於て鴟、腐鼠を得。鵷鶵之を過ぐ。仰いで之を視て曰く、嚇と。今、子、子の梁國を以て我を嚇せんと欲するかと。

大意 至人は超世俗的で、名利爭奪の一般世人と全然嗜好を異にするを說く。

通釋 宋人惠施は博學の人であつたが嘗て梁の惠王の大臣であつた。莊子は親しい仲なので往つて面會しようとした。或る人が惠子に向つて曰ふには「莊子は梁に來て王に用ひられ貴公に代つて梁の大臣になるつもりだ。」そこで惠子は恐れて人數を出して三日三夜國中を搜索した。すると莊子は惠子の所へ往つて面會して曰ふに「南方に鳥がある。其の名は鵷鶵といふ。貴公は知つて居るか。かの鵷鶵は南海を出發して北海に向つて飛ぶ。梧桐でなけれ

生きて尾を塗中に曳かんと。莊子曰く、往け、吾れ將に尾を塗中に曳かんとすと。

大意　郭注に曰ふ「性各〻安んずる所あるを言ふなり」と。呂注に曰ふ「莊子は死有るを知らざる者なり。而も此を云ふ者は、以て時の利に趨いて生を忘るるを救ふなり」と。余謂へらく「無用以て天年を全うするが無爲自然の大道に合一する所以だといふのであらう。」

通釋　莊子が濮水といふ川で釣をして居たら、楚の王樣がワザ〳〵大官二人を使者として先づ王樣の意を告げて曰はせるには「どうか御面倒ではあるが我が國内の政治をお任せ致したい。」之を聞いて莊子は釣竿を持つた儘振り向きもしないで曰ふには「おれはかういふ話を聞いて居る、お前たちの國にトに使ふ龜があつて、其の龜は死んでから何んでも三千年にもなるさうだ。それを王樣が布に包み函に入れ、大切に御廟にしまつて居られるといふことだ。處で其の龜はかやうに殺されて骨となつて大切に保存されるのを希望したであらうか、それともいつそそのまま尾を泥の中に曳きずつて居ても壽命を全うするのを希望したであらうか、お前たちはどう思ふ。」二人の役人が曰ふには「それは勿論生きて尾を泥の中で曳きずることを希望したでせう。」そこで莊子が曰ふに「サッサとお歸り、おれも尾を泥の中で曳いて終りたいと思ふわい。」

語釋　先焉（蠒に云ふ「先づ其の意を宣ぶるを謂ふ」と。何れ王自ら迎へに行くつもりであるが、先づ二大夫を使に立てて己の意を傳へたのである。）　○竟內（竟は境に同じ、國内をいふ。）　○神龜（卜用の龜、平常は宗廟に藏し、大事ある時に出して吉凶をトふものである。）

惠子相レ梁。莊子往見レ之。或謂二惠子一曰、莊子來欲三代レ子相二。於レ是惠子恐搜二於

始於玄冥（口義に無極の先に在るをいふとある。玄冥は所謂宇宙の本原無無無に當るもので認識を超越せるの名である。）○反於大通（口義に至道に歸するなりとある。通はあまねくゆきわたること。大通は萬物に通ずる大道、反は歸着する意。）○用管云云（窺天は天の廣狹を知らうとすること、指地は地を突き指して地の深淺を測らうとすること。）

○規々然（前節の規々然と意味が違ふ。成疏に規々は經營の貌とあり、宣注には小なる貌とあるから、こせこせと小才智を以て工夫するさまをいふのであらう。）○察（小明、小智。）○辯（詭辯、屁理屈。）○壽陵餘子（壽陵は燕の邑、餘子は成疏に弱齡未だ壯ならざるもの之を餘子と謂ふとあり。司馬注に未だ丁に應ぜざる夫を餘子と爲すとあり。郭慶藩も案ずるに餘子は民の子弟なりと云つて居るから、未成年者の意である。）○國能（趙の國都邯鄲の人の歩行ぶり。通義に邯鄲の行、濶歩麗容、人の觀を動かし、人の敬を起すとあり、又國能は其行動の態。他國に優る者を言ふとある。）○口呿（呿は開くこと、あいた口がふさがらぬこと。）

○舌擧（舌が釣りあがつて動かないから物が言へない。）

莊子釣於濮水。楚王使大夫二人往先焉。曰、願以竟內累矣。莊子持竿不顧。曰、吾聞楚有神龜。死已三千歲矣。王巾笥而藏之廟堂之上。此龜者、寧其死爲留骨而貴乎、寧其生而曳尾於塗中乎。二大夫曰、寧生而曳尾塗中。莊子曰、往矣。吾將曳尾於塗中。

訓讀 莊子濮水に釣す。楚王、大夫二人をして往いて先んぜしめて曰く、願はくは竟內を以て累はさんと。莊子竿を持して顧みずして曰く、吾れ聞く、楚に神龜あり、死して已に三千歲。王、巾笥にして之を廟堂の上に藏むと。此の龜は、寧ろ其れ死して骨を留めて貴ばれんか、寧ろ其れ生きて、尾を塗中に曳かんかと。二大夫曰く、寧ろ

これて一時の名を博し利を得て自ら快として居るやうな者は、是こそ前の話の井戸の中の蛙と同樣ぢやないか。且つ彼莊子の言は方に至深至廣、下は地中に至り上は九天に登る。縱は南のはても北のはてもなく、釋然と解けひろがつて四方に達し、測り知るべからざるはてに沒してしまふ。横は東の際涯もなく、西の際涯もなく、認識を超越せる玄冥から始まつて、あまねく萬物にゆきわたれる大道に歸着して居る。然るに貴公はこせこせと工夫して小才智の察と屁理窟の辯とを以て莊子の大道を求め硏めようとして居る。是はちやうど管を用ひて天をのぞいて其の廣さを見ようとし、錐を用ひて地を突き指して其の深さを測らうとするやうなもので、到底分る筈がない。まあ何とあまりに小さい考ではないか。それよりもさつさと歸り給へ。且つ貴公は獨りあの燕國の壽陵の少年が、趙國の都の邯鄲に行つて、都の歩きぶりを見習つた話を聞かないか。まだ趙國の都の歩きぶりが出來ないのに、又もとの壽陵の歩きぶりをも忘れ、どちらの歩行も出來ず、ただ四つばひになつて歸るより仕方がなかつたといふ。今貴公もさつさと歸つて往かないと、壽陵の餘子のやうに莊子の道が分らない中に貴公のもと學んだ所を忘れ、貴公の本領たる學術まで失つてしまふだらう。」さすがの公孫龍、あつけに取られて、開いた口がふさがらず、舌が引き釣つて物が言へず、そこでやつと其の場を逃げ出て走り去つた。

語釋　商蚷（小蟲の名、和名「ヤスデ」。成疏に商蚷は馬蚿なりとあり、司馬注に商蚷は虫の名、北燕にて之を馬蚿と謂ふとあるから、一名を馬蚿ともいふのである。）○一時之利（利は勝利の利で詭辯によつて一時の勝利を得、評判を取る意。）○跐二黄泉一登二大皇一（跐は音「シ」、「ふむ」と訓ず。黄泉は地中に在るから、道の深きに喩へた。大皇は天だから、高きに喩へた。）○無レ南無レ北（南北は縱で後にある東西は横であるが、しかし是は互文でどちらも東西南北の意である。）○奭然（釋然と同じく、解けひろがる貌。）○四解（解け散らばつて四方にひろがる。四方に達する。）○淪二於不測一（淪は沒の意「シヅム」と訓ずる。曠漠として測り知るべからざる四方のはてにまで入り込んで居る。）○

天、用錐指地也。不亦小乎。子往矣。且子獨不聞夫壽陵餘子之學行於邯鄲與。未得國能、又失其故行矣。直匍匐而歸耳。今子不去、將忘子之故、失子之業。公孫龍口呿而不合、舌擧而不下。乃逸而走。

訓讀 且つ夫れ知、是非の竟を知らずして、猶ほ莊子の言を觀んと欲するは、是れ猶ほ蚊に山を負はせ、商蚷に河を馳せしむるがごときなり。必ず任に勝へず。且つ夫れ知、極妙の言を論ずることを知らずして、一時の利に自適するものは、是れ埳井の鼃に非ずや。且彼は方に黃泉を跐みて大皇に登る。南なく北なく、奭然四解して、不測に淪む。東なく西なく、玄冥に始まりて、大通に反る。子乃ち規規然として、之を求むるに察を以てし、之を索むるに辯を以てす。是れ直に管を用ひて天を闚ひ、錐を用ひて地を指すなり。亦小ならずや。子往け、且つ子、獨り夫の餘子の、行を邯鄲に學びしを聞かずや。未だ國能を得ず、又其の故行を失ひ、直に匍匐して歸るのみ。今子去らずんば、將に子の故を忘れ、子の業を失はんとすと。公孫龍、口呿いて合はず、舌擧つて下らず。乃ち逸して走る。

通釋 且つ又、一體貴公の如く、其の智が未だ是と非との分界も分らない癖に、それでもなほ莊子の至言を觀察しようと欲するのは、丁度蚊に山を負はせ、商蚷に黃河を馳せ渡らせるやうなもので、きつと其の任に堪へないだらう。又貴公のやうに、其の智が淺薄で莊子の如き極めて玄妙な奧深い言を話すことを知らないで、唯屁理窟を

ある」と。ここに於て井中の蛙は之を聞いて、迚も想像も及ばぬ大きな話に驚いて、ぼうつと氣拔けしてしまつた。

語釋　埳井之鼃（埳は坎と同じく「アナ」と訓じ、地面の凹んだ所。埳井は淺く小さい井戸、若しくは單に井戸といふ意でよからう。一説にくづれ井戸とする、それは埳を陷るといふ意に見るのであらう。鼃は蛙の古字。）〇鼈（鼈ハ俗字、龜の類。）〇跳梁（梁は踉とも書く。勢よくとび上る。はねをどる。）〇井幹（井げた。）〇缺甃之崖（缺甃は缺け損じた敷瓦。崖は井戸端を意味する。）〇接レ腋（兩腋を水面に接觸する。）〇持レ頤（あごを水上に支持する。）〇蹶レ泥（泥中に跳躍する場合。）〇跗（足の甲。）〇還（顧る。）〇虷（井中に棲む細い赤虫。ぼうふらの類。）〇科斗（オタマジヤクシ。）〇一壑之水（壑は音「ガク」、凹んだうつろな所で、谷・溝・坑などの意味があるが、此處は坑の意、即ち井戸を指すのである。）〇跨跱（跨はまたがる跱は止まる。ここはおれの領分だとふんばつて占據すること。）〇縶（音「チフ」。司馬注に拘也とある。拘束せられる意。井戸が狹いから、くつついて自由がきかなくなること。）〇潦（音「ラウ」、普通「ニハカミヅ」と訓じ、降雨のため路上に溜り流れる水のことにいふが、此處は洪水の意。）〇崖不レ爲二加損一（崖は海岸、旱魃のために水量が減つて海岸が水面の低下を示したことがない。）〇頃久（頃は暫時、久は長時。即ち時間の長短。）〇進退（増減といふ意味。）〇適々然（釋文に音「タク」又「セキ」又「テキ」とある。今「テキ」を取る。釋文に適々規々は皆驚き視て自ら失ふ貌とある。成疏に適々は驚怖の貌とあり、口義に適々は猶ほ虩々の如しとあり、虩々は恐懼するさまだから、適々は驚いておぢける狀態であらう。）〇規々然（成疏に自失の貌と見えて居る。）

且夫知不レ知二是非之竟一、而猶欲レ觀二於莊子之言一、是猶レ使二蚊負一レ山、商蚷馳一レ河也。必不レ勝レ任矣。且夫知不レ知レ論二極妙之言一、而自二適一時之利一者、是非二埳井之鼃一與。且彼方跐二黃泉一而登二大皇一。無レ南無レ北、奭然四解、淪二於不測一。無レ東無レ西、始二於玄冥一、反二於大通一。子乃規規然、而求レ之以レ察、索レ之以レ辯。是直用レ管闚

足らず。千仞の高きも、以て其の深を極むるに足らず。禹の時十年に九潦せしも、而かも水爲めに益すことを加へず。湯の時八年に七旱せしも、而かも崖爲めに損することを加へず。夫れ頃久の爲めに推移せず、多少を以て進退せざるものは、此れ亦東海の大樂なりと。是に於て埳井の鼃之を聞き、適適然として驚き規規然として自失せり。

通釋 魏の公子牟、机にもたれて嘆息し、天を仰いで笑つて曰ふに「貴公は獨りあの小さい井戸の中の蛙についての話を聞かないか。あの蛙が東海に棲む大すつぽんに向つて曰ふには、『わしはほんとに愉快だ。わしは井げたの上にとび上り、中に入ればこはれた敷瓦のへりに休む。又水に行けば腋の下を水面に接して頤を水上に支持し、泥の中で泥を蹴つて跳躍すると足を沒し足の甲がかくれる。他の虷や蟹やおたまじやくしなどを顧るに、其快樂わしに及ぶものはない。其の上一つの窪地の水を獨占して、小井戸にふんばり止まつて居る精神的快樂は、これ亦無上である。先生何と時には來て井戸に入つて遊ばないかい』と。東海の鼈が招待に應じてやつて來て井戸へ入らうとしたが、左足がまだ入りきらぬに右の膝がもうつかへて動けない。そこでしりごみして退き、蛙に海の有様を告げて曰ふに『一體千里といへば非常な遠距離のやうに思ふが、それ位では東海の大さを擧げ盡すことは出來ない。又千仞といふと大さうな高さのやうに考へるが、それ位の高さでは到底東海の深さを言ひ盡すことは出來ない。禹の時に十年間に九回も洪水があつたが、而も東海の水はその爲めに少しでも增したといふことはなく、湯の時に八年間に七度も日でりがあつたが、而も東海の岸はその爲めに少しでも水量の低減を示したことがない。一體時間の長短に由つて變化することがなく、分量の多少に因つても增減しないのは、此れ亦わが東海の大なる快樂で

沒足滅跗。還虷蟹與科斗、莫吾能若也。且夫擅一壑之水、而跨跱埳井之樂、此亦至矣。夫子奚不時來入觀乎。東海之鱉左足未入、而右膝已縶矣。於是逡巡而卻、告之海曰、夫千里之遠、不足以擧其大。千仞之高、不足以極其深。禹之時、十年九潦、而水弗爲加益。湯之時、八年七旱、而崖不爲加損。夫不爲頃久推移、不以多少進退者、此亦東海之大樂也。於是埳井之鼃聞之、適適然驚、規規然自失也。

【訓讀】公子牟、机に隱つて大息し、天を仰いで笑つて曰く、子獨り夫の埳井の鼃を聞かざるか。東海の鱉に謂つて曰く、吾れ樂しいかな。吾れ井幹の上に跳梁し、入れば缺甃の崖に休ふ。水に赴けば則ち腋を接へ頤を持し、泥を蹶れば則ち足を沒し跗を滅す。虷蟹と科斗とを還りみるに、吾に能く若くこと莫きなり。且夫れ一壑の水を擅にして、而して埳井に跨跱するの樂、此れ亦至れり。夫子奚ぞ時に來り入つて觀ざると。東海の鱉、左足未だ入らずして、右膝已に縶す。是に於て逡巡して却き、之に海を告げて曰く、夫れ千里の遠きも、以て其の大を擧ぐるに

大意 此より以下三段は、當代辯論の雄、堅白同異の論を以て鳴らした公孫龍が、莊子の言を聞きて茫然として其の奇を異しみ、己の淺學を悟り更に莊子玄虛の大道に通ぜる魏牟について其の方を請うた話。林西仲は「莊叟人を貶し自ら擧むること此に至るなし恐らくは後人の贋筆ならむ」と曰つて居るが、恐らくさうであらう。

通釋 趙人公孫龍、魏の公子牟に問うて曰ふに「私は幼少の頃から、堯舜禹湯文王武王等の修己治人の道を學び、長じて仁義の行を明かに會得し、同異を一致せしめ、堅白石を別つて二物とし、さうでないのをさうだとし、不可なることを可と思はせ、詭辯を以てあらゆる學者の智惠を困らせ、あらゆる辯士の論を追窮し屈服せしめた。だから吾は已惚れて自ら此の上ない達人と思つて居た。處が今莊子の言を聞くと茫然自失實に不思議の感にうたれた。一體吾が議論の及ばないためか、それとも智惠のかなはないが爲か分らないが、兎に角もう吾は一語も口を開いて言ふことは出來ない。敢て莊子の道をお尋ねしたい。」

語釋 合二同異一（前にしば〳〵出づ。公孫龍一家の辯論法で、同をして異ならしめ、異をして同ならしめ、同と異とを合一せしめる、例へば鷲を鳥とし鳥を鷲とするの類。）○離二堅白一（堅白石は二つである。何となれば目が石を視て白いことはわかるが堅いことは分らぬ、又手が石に觸れて堅いことは分るが白いことは分らぬ、それで堅い石と白い石とはどこまでも別々に知覺し得るからといふのである。）○汒焉（茫然と同じで、自失の貌前出。）○開喙（喙は口である。口を開く所なしとは發言する能はざること。）○問二其方一（方は道である。莊子玄虛の大道を問ふの意。）

公子牟隱レ机大息、仰レ天而笑曰、子獨不レ聞二夫埳井之鼃一乎。謂二東海之鱉一曰、吾樂與。吾跳二梁乎井幹之上一、入休二乎缺甃之崖一。赴レ水則接レ腋持レ頤、蹶レ泥則

上げて退きませう」と。

語釋 匡(司馬云ふ、「宋は當に衞に作るべし、匡は衞の邑なり」と。)　○匝(音「サフ」「めぐる」と訓ず。)　○惙(音「テツ」「やむ」と訓ず。)　○兕(音「ジ」野牛に似て一角ある獸。)　○虎矣(始めに「來れ」と言つたから子路が近く來て孔子の前に立つた。それで「席に復れ」と言はれたのである。)　○吾命有所制矣(制は分限、制限などの意で、自然に制限されて居る、分限が定まつて居るといふこと。)　○陽虎(魯の臣であるが、嘗て匡で亂暴したから匡人が怨んで居た。處が孔子の容貌が陽虎に似て居たので、てつきり陽虎だと思つて取り圍んだのである。)

公孫龍問於魏牟曰、龍少學先王之道、長而明仁義之行、合同異、離堅白、然不然、可不可、困百家之知、窮衆口之辯。吾自以爲至達已。今吾聞莊子之言、汒焉異之。不知論之不及與。知之弗若與。今吾無所開吾喙。敢問其方。

訓讀 公孫龍、魏牟に問うて曰く、龍少うして先王の道を學び、長じて仁義の行を明かにし、同異を合せ、堅白を離ち、不然を然とし、不可を可とし、百家の知を困しめ、衆口の辯を窮む。吾れ自ら以爲へらく至達のみと。今吾れ莊子の言を聞き、汒焉として之を異しむ。知らず、論の及ばざるか。知の若かざるか、今吾れ吾が喙を開く所なし。敢へて其の方を問ふと。

通の時あるを知り、大難に臨んで懼れざるものは、聖人の勇なり。由處れ、吾が命制する所ありと。幾何も無くして、甲を將ゐる者進みて辭して曰く、陽虎と以爲へり、故に之を圍めり。今非なり、請ふ辭して退かんと。

【大意】前段を承けて、聖人は天に從ひ小に勝たざるを以て、能く大勝を爲すの例をあげたのである。

【通釋】孔子が匡の地に遊ばれた。其の時宋人が幾重もく之を取り圍んだけれども、孔子は琴を彈じ歌うて止まなかつた。子路は孔子のお部屋に入つて見えて曰ふに「かやうな危急の場合に、先生の樂しみ給ふのはどういふことですか」と。孔子が答へて曰はれるに「近う寄れ、吾今汝に話さう。我はずつと以前から窮することを忌み嫌つて居た。而るに窮するを免れないのは天命である。又ずつと以前から思ひ通りになることを欲し求めて居た。而るに思ひ通りにならないのは時勢である。堯舜の時代には人々各〻其の處を得て、天下に一人も窮する人はない。是は天下の人が皆知あるが爲ではない。桀紂の時代には天下に思ひ通りになる人は一人もない。是は天下の人悉く知がない爲ではない。時勢が丁度さうだからである。一體水中を行きて蛟龍を避けないのは漁父の勇氣である。陸上を行きて兕虎を避けないのは獵夫の勇氣である。白刃が目の前に交り閃めくとも、死を以て生と同樣に考へて平氣で居るのは義烈の士の勇である。處が窮塞の天命あるを知り通達の時勢あるを知り、大難に當つても從容としておそれないのは、これ聖人の勇である。由(子路の名)よ。席に復れ。吾が受けたる天命は、自然に分限が定まつて居て、人力でどうする事も出來ないぞ」と。間もなく兵を率ゐる隊長が來つて孔子の前に進んで無禮をことわつて曰ふには「あなたを陽虎と思つたから取り圍みましたが、今さうでないことが分つたから、何卒おことわりを申

子曰、來、吾語女。我諱窮久矣、而不免命也。求通久矣、而不得時也。當堯舜而天下無窮人。非知得也。當桀紂而天下無通人。非知失也。時勢適然。夫水行不避蛟龍者、漁父之勇也。陸行不避兕虎者、獵夫之勇也。白刃交於前、視死若生者、烈士之勇也。知窮之有命、知通之有時、臨大難而不懼者、聖人之勇也。由處矣、吾命有所制矣。無幾何、將甲者進辭曰、以爲陽虎也、故圍之。今非也、請辭而退。

訓讀 孔子匡に遊ぶ。宋人之を圍むこと數匝なれども、而も弦歌して輟まず。子路入つて見えて曰く、何ぞ夫子の娛しむやと。孔子曰く、來れ吾れ女に語げん。我れ窮を諱むや久し、而も免れざるは命なり。通を求むるや久し、而も得ざるは時なり。堯舜に當つて、天下に窮人なし、知の得たるに非ざるなり。桀紂に當つて、天下に通人なし。知の失に非ざるなり。時勢適に然ればなり。夫れ水行蛟龍を避けざるものは、漁父の勇なり、陸行兕虎を避けざるものは、獵夫の勇なり。白刃前に交るも、死を視ること生の若きものは、烈士の勇なり。窮の命あるを知り、

つて君の足の無いのに及ばないのは何故ぞ」と。蛇が答へて曰ふに「一體天然の發動は吾々の意志で變へることは出來ない。だから無心にして天然に任せておけば自由にあるくことが出來る。何も是を用ふる必要はない」と。次に蛇が風に向つて曰ふに「吾のあるくとき脊や肋を動かすのは、やはり形像があるのだ。處が君は蓬々として北海に吹き起り蓬々として南海に吹き入つて、すさまじい速力だが、而も何等形像を有しないのは何故ぞ」と。風が答へて曰ふに「さうだ吾蓬々と北海に起つて南海に入るのだ。然しながら人が指で我をつきさせば我は其の指を折ることは出來ぬから、つまり指が我に勝つわけだ、又人が足で我を踐めば我は其の足をどうすることも出來ぬから、矢張り足も我に勝つわけだ。斯くの如く我は弱い。けれどもかの大木を折り大屋を吹き飛ばすことは、唯我だけが爲し能ふのである。だから衆多の小なる者に勝たないが爲に、畢竟大勝を爲すのである。この大勝をなすことは人間界では唯至德の聖人が之を爲し能ふのみである」と。

語釋　蘷憐レ蚿（山海經に云ふ「東海の内に、流波の山あり。其の山に獸あり、狀牛の如く、蒼色にして角無く一足にして行く、聲音雷の如し。之を名けて蘷と曰ふ」と。憐は羨の意。蚿は百足蟲。ムカデのこと。）　○跉踔（音「シンタク」。一本足にて行くさま。跛行の如くピヨンピヨンと跳んで行くこと。）　○予無レ如矣（一本に予無如矣とある、さすれば「予にしくことなし」と讀む。今は予とあるに從ふ。如は經傳釋詞に如は猶奈のごとしとあり、尙書、揚雄法言等に其例多ければ、此處も「予いかんともする無し」と讀むことにして置く。）　○天機（天然、自然、天眞といふに同じ。）　○有レ似（似は形像の意。）　○蓬々然（風の聲。）　○指レ我（人が指で風をつきさすこと。）　○鰌レ我（鰌は音「シウ」、蹈と同じで、足で蹈むこと。）　○蜚（飛と同じ。）　○大勝（齊物論參照。）

孔子遊ニ於匡ニ。宋人圍レ之數匝、而弦歌不レ惙。子路入見曰、何夫子之娯也。孔

と。蛇風に謂つて曰く、予吾が脊脅を動かして行くは、則ち似あるなり。今子蓬蓬然として北海に起り、蓬蓬然として南海に入りて、似有る無きは何ぞやと。風曰く然り、予蓬蓬然として北海に起つて、南海に入るなり。然り而して我を指せば則ち我に勝ち、我を鰌むも亦我に勝つ。然りと雖も、夫の大木を折り大屋を蜚ばすものは、惟我れ能くするなり。故に衆小に勝たざるを以て大勝を爲す。大勝を爲すものは、惟ゞ聖人之を能くすと。

大意 至德の人は天機の易ふべからざるを知る。故に聰明をすて知慮をすて、人爲をすてて自然に任せる。已に自然に任せて萬物と共に爭はないから、衆小には勝たないが、萬物をして各ゞ其の處を得て、而も其の然る所以を知らざらしめるのは、これ萬物に乘じ萬物を御するので即ち大勝を爲す所以であることを說く。

通釋 夔といふ一足獸は、蚿(むかで)の足の多いのを羨み、蚿は寧ろ蛇の足無くして行くを羨み、蛇は又風の形無くして行くを羨み、風は動いて往かなけりやならぬのに目は動かないでも見得るから風は目を羨み、目は形ある者を知るのだが、心は形なき者を知り得るから目は心を羨む。夔が蚿に謂つて曰ふには「吾は一足でピョンピョンと跳んで行くので甚だ不自由だが、何とも致方がない。處で君だけは澤山の足をどうしてそんなに自由に使ひこなすか誠に羨ましいことだ」と。蚿が答へて曰ふには「否、さほど羨むほどのことではない。君は彼の唾はく者を見たらう。その吐くとき、別に大小のあるやうにと考へて吐くのではないが、大なる者は珠の如く小なる者は霧の如く、雜つて落ちる者の數は到底數へきれぬ。是れ天然のはずみである。これと同樣に今余は吾の天然の機關たる多くの足を自由に動かしても其の理由は知らない」と。今度は蚿が蛇に向つて曰ふには「吾は多くの足で行くのに却

珠、小者如霧、雜而下者、不可勝數也。今予動吾天機、而不知其所以然。蚿謂蛇曰、吾以衆足行、而不及子之無足、何也。蛇曰、夫天機之所動、何可易邪。吾安用足哉。蛇謂風曰、予動吾脊脅而行、則有似也。今子蓬蓬然起於北海、蓬蓬然入於南海、而似無有、何也。風曰、然、予蓬蓬然起於北海、而入於南海也。然而指我則勝我、鰌我亦勝我。雖然夫折大木、蜚大屋者、惟我能也。故以衆小不勝、爲大勝也。爲大勝者、惟聖人能之。

訓讀 夔は蚿を憐み、蚿は蛇を憐み、蛇は風を憐み、風は目を憐み、目は心を憐む。夔蚿に謂つて曰く、吾れ一足を以て趻踔して行く、予如かんともする無し。今子の衆足を使ふこと獨り奈何んと。蚿曰く、然らず。子は夫の唾はくものを見ざるか。噴けば則ち大なるもの珠の如く、小なるもの霧の如く、雜つて下るもの勝げて數ふべからざるなり。今予吾が天機を動かして、其の然る所以を知らずと。蚿蛇に謂つて曰く、吾れ衆足を以て行けども、而かも子の足無きに及ばざるは何ぞやと。蛇曰く、夫れ天機の動く所、何ぞ易ふべけんや。吾れ安んぞ足を用ひんや

「人爲を以て天眞の自然を失ふ勿れ。故意を以て造化の命じたまゝの自然を失ふ勿れ。名の爲に自然のまゝの德を失ふ勿れ」とある。此の三戒を謹み守つて失はない者、是を其の天眞に復ると謂ふのである。」

語釋　明二於權一（權は事物世相の變に乘じ機に應ずる道で、之に明かな者は常に宜しきを處することが出來る。しかし所謂權謀術數とか儒教などにいふ權道とは大に內容を異にし、一切の人爲を去つて自然に逆はぬやう全く順應して行く道で次に說く所がそれである。）○莫二之能害一也（至德の者は自然と冥合し自然に同化されて居るので害を厭うて避けたり利を欲して得ようとするやうな人爲的な考を持たぬから害に遇うても害と思はぬ。だから假に物が之を害したとても結局害とならない。全く自然物と同樣なものである。所謂無爲の狀態である。）○天在レ內、人在レ外（天は自然、人は人爲。修德の理想を述べた語で、自然の道を內心に悟得韜藏し、外に權を操つて人事の變に順應すること。自然の道を內心に蘊めるとは最後に所謂本來の天眞に復歸すると同意。）○德在二乎天一云云（德が人爲に在るのでなくして自然の天眞に在ること。即ち天眞の性を失はぬこと。天在內と同意。）○位二乎得一（得は德で自然の道を心に悟得したるもの、即ち天眞の本性である。位するとは、そこに落付いて居ることで、つまり其の性を失はないこと。）○蹢躅（テキチヨクと讀む、成疏に進退定まらざる貌とある、イイ、躑躅、蹢躅皆同じ。或は進め或は退く意で、ユキツモドリツすること。蹢躅而屈伸は縱橫自在動靜すべて權宜に合し自然のまゝに化すること。）○反レ要而語レ極（要は樞要、道の要點に反ること、即ち天眞を失はぬこと。極は極致で至極の處、大道の眞理の極致を語ること、既に天眞に居るゆゑ極を語るといふも默に乖かない。）○落二馬首一（落は絡と通ずるのでマトフと訓ずる。馬首にオモヅラをまとふこと。）○無二以レ故滅一レ命（故は故意、意志を以てすること。命は天眞の性を斥す、即ち造化自然の命じたものといふ意。故意にすることは即ち人爲であるから、人爲を以て天眞の性を失ふ勿れといふこと。人爲を用ふれば同時に天眞を亡失することになる。）○無二以レ得狥一レ名（得は矢張り德の意、無以名滅得と書いたのと同意であるが三つ目に變化を求めて句法をかへたのである。狥は正字通に身を以て物に從ふを狥と曰ふ殉と通ずとある、つまり一つを犧牲にして他の一つに從ふ意である。こゝでは名の爲に天眞の德を犧牲にする意で、結局名を以て德を滅すなかれといふ意味になる。）○反二其眞一（眞は天眞の意で、生れたまゝの自然の性に復歸するといふ意、老莊の理想は一切の人爲的知識技巧を去つて嬰兒の自然に復歸するに在る。所謂復性の說である。）

夔憐レ蚿、蚿憐レ蛇、蛇憐レ風、風憐レ目、目憐レ心。夔謂レ蚿曰、吾以二一足一趻踔而行、予無レ如矣。今子之使二衆足一、獨奈何。蚿曰、不レ然。子不レ見二夫唾者一乎。噴則大者如

何しに道を貴ぶのですか。」北海若答へて曰ふ「道を知つて居る者は必ず宇宙の眞理に通じて居る。宇宙の眞理に通じて居る者は必ず事物世相の變化に應ずる道に明るい。此の道に明るい者は變に乘じ機に應じて宜しきを處するから、外物の爲に己を害せられることなく、常に全きを得るのである。道を體得せる極處に達した人は、火も之を熱することが出來ず、水も溺らすことが出來ず、寒暑も禽獸も之を賊害することが出來ないといふが、これは至德の人は、水火等の物が己を害しないのを恃んで、物を輕蔑するといふのではない。安と危と兩行の理を知りわきまへて居るから、安を安と思つて落付き、危を危と思つてあわてるやうなことをしない、どちらでも同一視し、禍福幸不幸に於ても同樣別に區別を認めぬから、之に對して憂樂を感ぜず遇ふ所に隨つて平氣であり、去就進退も自然の化に隨つて、人爲を加へぬ樣に謹むから、何物も之を害することが出來ないといふ意味である。要するに至德の人は害を害と思はぬから、即ち利でも害でも區別は無いのだから之に害を加へる譯にいかぬのである。是の故に古語にも「自然なる道を內心に藏め、外に權を操つて人事の變に順應するのだ」と曰つてある。內心に自然の道を悟得蟠藏して居れば、自然(天)と人爲(人)との行を知り得る。恒に自然の道に本づき、自然の道を心に悟り得たる所の德に安居するときは、いかに事物世相は千變萬化するとも、それにつれてゆきつもどりつ或は屈み或は伸び、動靜云爲すべて時宜に合し、常に道の樞要を失はず、理の極致を語ることが出來るのだ。」そこで河伯が曰ふ「一體天とは何を謂ふのであるか、人とは何を謂ふのであるか。」北海若之に答へて曰ふ「例へば牛馬の足は四本だ、是を天と謂ふのである。馬の首に羈絆を絡ひ、牛の鼻を穿つて繩を附ける、是を人(人爲)と謂ふのである。故に古語にも

眞。二

訓讀　河伯曰く、然らば則ち何ぞ道を貴ぶか。北海若曰く、道を知る者は必ず理に達す。理に達する者は必ず權に明かなり。權に明かなる者は物を以て己を害せず。至德の者は火も熱する能はず、水も溺らす能はず、寒暑も害する能はず、禽獸も賊ふ能はずとは、其の之を薄んずるを謂ふに非ざるなり。安危を察し、禍福に寧んじ、去就を謹みて、之を能く害すること莫きを言ふなり。故に曰く、天內に在り、人外に在りと。德天に在れば、天人の行を知る。天に本づき、得に位すれば、躑躅として屈伸し、要に反つて極を語る。曰く、何をか天と謂ひ、何をか人と謂ふ。北海若曰く、牛馬四足、是を天と謂ひ、馬首を落ひ、牛鼻を穿つ、是を人と謂ふ。故に曰く、人を以て天を滅すこと無かれ。故を以て命を滅すこと無かれ。得を以て名に狥ふこと無かれと。謹み守つて失ふこと勿き、是を其の眞に反ると謂ふと。

大意　河伯が自然の化に任せるなら道を貴ぶ必要はあるまいと疑つたのに對し、北海若が道を內心に體得してこそ、眞に自然と冥合し、變化に應ずることが出來る理由を詳說し、最後に天人の關係を論じ、人欲の爲に天眞を失ふ勿れといふ意の三つの戒を述べて居る。終結の「反其眞」の一語は所謂畫龍點睛の語で、これあるが爲めに河伯と北海若との長い問答の意味が氷解するのである。

通釋　河伯問うて曰ふ、「若しお說のやうに自然の變化に任せてゆくなら、成り行きに放任しておけばよいのに、

と音義通ずる、ここではどこから神が來るか知るべからざる故に悠遠から來りて福を降すと見るのである。）○汎々乎（泛汎同字、成疏に普徧の貌とあり。釋文に又汎に作るとあり、廣雅釋々に溥なりと見えて居る。要するに至人の心境は普徧平等曠蕩無窮なることをいふのである。）

○畛域（畛は音シン。境界の意。）○兼二懷萬物一（兼懷は兼ね蔵める兼ね容れる義で、大聖慈悲萬物を包容して依估の愛のないこと、一視同仁であること。）○其孰承翼（承は丞に通じ「タスク」と訓ずる孰れを特別に愛してたすけようか、皆平等で對する。）

○無方（特定の方向が無いこと、一方を定むることが無いこと。禮記「左右就養無方」の注に方は猶常の如しとある。嚴乎としてから承翼せんまでの文を承けて、如上の心的狀態を形容した術語である。）○道無二終始一云々（道は絶對であるから時間空間を超越して居る。だから勿論無始無終で唯無窮の變化創造の繼續があるのみだ。其の一變化が物の死生である。隨つて生成だとか成功だとかいふ無窮の變化中の一時的の狀態は恃みにならないわけである。）○不レ位二乎其形一（盈虛常なければ物の形を一定不變と決められない。其の形に一定の位がない。此が一定の位だと定められぬ。）○年不レ可レ擧、時不レ可レ止（郭注に從つて「年は其の來るを取り擧げて去らしめることは出來ず、時は其の經過して行くのを止めるわけにいかない」と解したが、一說に古無く今無し故に年擧ぐべからず。去無く來無し故に時止むべからずとある。どちらでもよいと思ふ。）○大義之方（大義は大道を斥す。方はミチ、道理、眞理、法則。）○自化（造化の自然にまかせて變化して行くをいふ。）

河伯曰、然則何貴二於道一耶。北海若曰、知レ道者、必達二於理一。達レ理者、必明二於權一。明二於權一者、不下以レ物害上レ己。至德者、火弗レ能レ熱、水弗レ能レ溺、寒暑弗レ能レ害、禽獸弗レ能レ賊、非レ謂二其薄一之也。言下察二乎安危一、寧二於禍福一、謹二於去就一、莫中之能害上也。故曰、天在レ內、人在レ外。德在二乎天一。知二天人之行一、本二乎天一、位二乎得一、蹢躅而屈伸、反レ要而語レ極。曰、何謂レ天、何謂レ人。北海若曰、牛馬四足、是謂レ天、落二馬首一、穿二牛鼻一、是謂レ人。故曰、無下以レ人滅上レ天。無下以レ故滅上レ命。無下以レ得狥上レ名。謹守而勿レ失、是謂レ反二其

として四方の窮無く、どこが限界とも分らぬ如く、萬事を兼ね容れて一視同仁、孰れを特にたすけ愛するといふことが無い。かくの如き心的狀態を無方といふ。心が旣に無方の狀態になれば、萬物を觀ること同一平等で其の間に短長の差別は無い。どれも皆ひとしい。例へば鳧の脚も短でないし鶴の頸も長くないといふやうなものである。道は無始無終即ち終始を超越して居るが、物には死生即ち終始がある。しかし物の死生は無窮の道の一變化たるに過ぎぬので、隨つて生成だの成功だのいふことも恃みとしない。或時は虛しく或時は滿ち、ここに虛しくなれば彼處に滿ち萬物其の形を一定にして居る譯にいかぬ。年の來るを取り擧げて去らしめることは出來ず、時の流れをせき止めようとしても出來ぬ。陰氣消衰すれば陽氣盛長し、春夏に盈滿すれば秋冬に虛虧しそれが終つては始まり終つては始まりして無窮に創造變化が繼續されて行くことが直觀される。以上が大道の眞義を語り、萬物の玄理を論ずる所以である。抑々物の生ずるや生滅變化の迅速なること、いつも驅けはしつて居る如く、流轉變動の止むことなく、時の推移の絕え間はない。だから何事を爲し、何事を爲さないやうにすべきかといへば、固より造化の自然に任せて變化してゆくの外はない。爲ようか爲まいかなど人爲を加へれば道の自然を敗ることになるから。」

語釋　辭受趣舍（辭は辭讓でコトワルこと、受は受納でウケイレルこと、趣は趨と同じで進むこと、舍は退くこと、辭は受に對し、趣は舍に對す。取捨、進退、動靜云爲、出處行藏等世に處する機會を斥す。）　○反衍（貴賤合一して無差別となつた狀態を表現する術語、字義には異說が多い、成疏には猶反覆のごとし、本亦畔衍に作るとあり。李註には猶漫衍の如しとあり。郭慶藩は之に從ひ、宣注には猶汎衍の如し寬衍をいふとある。思ふに漫衍の意味で貴賤の階級なくなり、すべて平衍なるをいふのであらう。）　○無レ拘二而志一（而は汝の意、而女爾汝若乃皆一聲の轉で相通用する。貴賤の差別見に執はれて汝の志を拘束してはいかんの意。）　○謝施（多少の差別を絕したる狀態を表はす術語、字義に異說が多い。司馬注に謝は代なり、施は用なりとあるのを稍轉じて施用を謝絕するの意としておく、即ち施すと多少が生ずるが施を去ると多少が無くなる意。）　○無レ一二而行一（汝の行を一方に拘泥させるな。）　○參差（不齊の貌、一致しないこと。）　○繇々乎（音、イウ成疏に緜長の（ハルカニナガキ）貌とある。悠々

れ畛域する所無し。萬物を兼ね懷く、其れ孰れをか承翼せん。是を無方と謂ふ。萬物一齊孰れを短とし孰れを長とせん。道は終始無し、物は死生有り、其の成るを恃まず。一虛一滿其形を位とせず。年は擧ぐべからず、時は止むべからず、消息盈虛終れば則ち始る有り。是れ大義の方を語り、萬物の理を論ずる所以なり。物の生ずるや驟するが若く、馳するが若し。動くとして變ぜざる無く、時として移らざるなし。何をか爲さん何をか爲さざらん、夫れ固より將に自化せんとすと。

【大意】河伯既に道の理論的方面に就て教を受けたので、茲に實際的處世上の修養法を問ふ。北海若之に答へて、物に對して一方に拘泥するの見を去り、一視同仁公平なるべきこと、及び人爲を去り一切造化の自然のまゝに變化すべきことを教へたのである。

【通釋】河伯問うて曰ふ、「然らば我此の世に處するに何事を爲し何事を爲さざるやうにすべきか。あなたのお言葉によるとどうしてよいか分らなくなつてしまつたが、一體吾が辭讓と受納、進趣と退舍卽ち處世の心得は結局奈何にしたら宜しいか。」北海若答へて曰ふ、「絕對なる道の立場から觀ると、貴賤の差別は無い。是を反衍といふ。汝差別觀の立場からして汝の志を拘束し、貴賤の見に執はれてはならぬ。然かせば道と大に違ひ乖くであらう。同じく道の立場から觀れば、少多の區別も無い。是を謝施といふ。汝差別の見解を執つて汝の行をして一方に偏り拘泥させてはならぬ。さすれば道と一致しないであらう。心が絕對平等の道に立脚し、嚴然として恰も國家に於ける君主が公平にして私恩なきが如く、悠々として祭祀の場合の社神が、不公平に福祿を下し與ふるなきが如く、汎々

觀之、何貴何賤、是謂反衍。無拘而志、與道大蹇。何少何多、是謂謝施。無一而行、與道參差。嚴乎若國之有君、其無私德。繇繇乎若祭之有社、其無私福。汎汎乎其若四方之無窮、其無所畛域。兼懷萬物、其孰承翼。是謂無方。萬物一齊、孰短孰長。道無終始、物有死生、不恃其成。一虛一滿、不位乎其形。年不可擧、時不可止、消息盈虛、終則有始。是所以語大義之方、論萬物之理也。物之生也、若驟若馳。無動而不變、無時而不移。何爲乎、何不爲乎、夫固將自化。

訓讀　何伯曰く、然らば則ち我何をか爲さん、何をか爲さざらん。吾が辭受趣舍、吾終に奈何と。北海若曰く、道を以て之を觀れば何をか貴び何をか賤まん、是を反衍と謂ふ。而の志を拘する無かれ、道と大に蹇はん。何をか少とし何をか多とせん、是を謝施と謂ふ。而の行を一にする無かれ、道と參差せん。嚴乎として國の君有るが若く、其れ私德なし。繇々乎として祭の社有るが若く、其れ私福なし。汎々乎として其れ四方の窮り無きが若く、其

治亂相依るものだといふことが分らぬ者であると。是れは丁度天を尙んで地を認めず陰を尙んで陽を認めないのと同樣で其の說の成立しないことは明かである。何となれば天と地とは對立するもので互に一方が有つて他の一方も有ることになり、一方が無くなれば他の一方も自然消滅となる。陰と陽との對立も同樣であるからだ。然るにも拘はらず尙且つ一を執つて議論して止めないのは馬鹿者か若くは無理を通す者である。五帝は宗族相承けたり、或は他姓に讓つたりして其の禪り方を殊にし、夏殷周の三代は放伐したり世襲したりして其の繼續の法を殊にして居るが皆時に當り人意に合して居る。之に反して其の時勢にそむき其の時代の人心に逆つて禪讓放伐を行へば之を簒奪の人といふ。其の時勢に適當し其の時代思潮に合ふ樣に禪讓放伐を行ふ者を正義の徒といふ。斯くの如く是非貴賤小大等には一定の標準はないから是非の論を止めて沈默を守れよ河伯よ。汝、貴賤の分の由りて出づる所や小大の別の存する所をどうして知ることが出來やうか、到底分らないぞ。」

語釋　梁麗（異說が多い。司馬註には小船なりとある。崔註には屋棟なりとある。兪樾は詩、墨子、左傳、文選等を引き車の欄有る者といつた。郭慶藩は列子、文選、玉篇を引き椽柱の屬を謂ふ、材の大なる者と曰つて崔註に贊成して居る。玆には兪樾に從つて物く兵車の名として置いた。）　○騏驥驊騮（李註に皆駿馬なりと見えて居る。一々についていへば、騏はクロミドリの馬、說文に馬靑驪にて文博棊の如きものなりとある。博棊はすごろくのこま。驥は說文に千里の馬、孫陽相する所の者馬に從ふ冀聲とある。一說冀北の地から出るので倫意文字だといふ。驊は說文に載せず漢書地理志に「華騮綠耳の乘を得」とあつて師古の註に華騮は其色華の如く赤きを言ふと見えて居る。俗にいふアカウマ。騮はクリゲウマ。說文に赤馬にして黑髦尾馬に從ふ留聲とある。）　○鴟鵂（梟と同じ。フクロウ。）　○師レ是云云（師とするとは、尙ぶ、主とするなどの意。）　○貴賤之門、小大之家（門は出る所だから、貴賤の門は貴賤の區別の由つて出る所の意、家は人の居る場所だから、小大の家は小大の區別の存する所の意。）

河伯曰、然則我何爲乎、何不レ爲乎。吾辭受趣舍、吾終奈何。北海若曰、以レ道

訓讀 梁麗は以て城を衝くべきも、而も以て穴を窒ぐべからずとは、器を殊にするを言ふなり。騏驥驊騮一日にして千里を馳するも、鼠を捕ふることは狸狌に如かずとは、技を殊にするを言ふなり。鴟鵂は夜蚤を撮りて毫末を察すれども、晝出づれば目を瞋らすも丘山を見ずとは、性を殊にするを言ふなり。故に曰く、蓋し是を師として非なく、治を師として亂無からんか、是れ未だ天地の理萬物の情を明かにせざる者なりと。是れ猶天を師として地無く、陰を師として陽無きが如く、其の行ふべからざるや明かなり。然るに且つ語つて舍まざるは、愚に非ざれば則ち誣ふるなり。帝王禪を殊にし、三代繼を殊にす。其の時に差ひ其の俗に逆ふもの之を簒夫と謂ふ。其の時に當り其の俗に順ふもの之を義の徒と謂ふ。默々たれや河伯。女惡んぞ貴賤の門小大の家を知らんと。

大意 是非兩行し治亂相依るは、天地の理、萬物の實情である。故に大人は時に當り俗に順つて强ひて異を立てるやうな愚を爲さぬを說く。

通釋 梁麗といふ兵車は城を衝き破るには適するが、之で以て穴をふさぐことが出來ないといふのは、器物各其の用を異にするを言ふのである。駿馬は一日に千里を馳るけれども、鼠を捕ることは狸狌に及ばないといふのは、各々其の技能を殊にするを言ふのである。鴟鵂は夜分にはよく見え、蚤を捕りどんな微細な物でも、はつきり分るけれども、白晝出ると、目を張りひろげても、丘山の如き大きな物をも見る事が出來ないといふのは、他の生物と其の性を殊にするを言ふのである。斯くの如く物には能と不能是と非が並存する。故に自分は曰ふ、凡そ一偏に着して是を尙んで非を認めず、治を尙んで亂を認めなかつたならば、是はまだ天地の理萬物の實情は是非相待ち

し德行を議す」とある數の意に同じ。）　○功分定矣（功分は功用の性質、此の場合、分は性質器量などの意。定は決まる、はつきり分つて來るといふ意。）　○以レ趣觀レ之（趣は意の向ふ所で趣向とか主義とかの意になる。換言すれば是非の見解をなす一心の旨趣である。）　○因二其所一レ然云云（然りとする所は是とする所といふに同じく自分の是と思ふ所を斥す。一說「物皆是なる所あり非なる所あり、而も是非並び行はれて悖らず」と亦通ずる。が次の「堯桀の自ら然りとして」の句から見ると前說が分り易い。尤も「堯桀の自然にして」と訓めばよい。）　○趣操（趣は趣向、操は志操で、趣向主義として操る所のもの。）　○之噲讓而絕（史記燕召公世家に見ゆ。之は燕の相子之、噲は燕王の名、燕王噲を氣取つて國を其の相子之に讓り、民服せずして國亂れ、斉の宣王燕を伐ち噲を殺し、子之を斬る。）　○白公爭而滅（左傳哀公十六年に見ゆ。白公名は勝、其父は楚の太子であつたが讒者のために王位を繼がなかつたのを怨んで、後兵を起して反し遂に殺された。）　○貴賤有レ時（禪讓や戰爭の禮も堯舜湯武の時には貴いが之噲白公の時には賤しい。堯の如き仁德も桀のやうな暴行も或時は貴ばれ或時は賤まれる。堯桀は仁暴の代名詞で爭讓といふのと同意義、又貴賤といつて小大の意を兼ねて居る。宣穎曰く「數句を散策し貴賤に歸到す、貴賤時あり未だ以て常となすべからずんば則ち小大知るべし」と。）

梁麗可以衝城、而不可以窒穴、言殊器也。騏驥驊騮、一日而馳千里、捕鼠不如狸狌、言殊技也。鴟鵂夜撮蚤、察毫末、晝出瞋目而不見丘山、言殊性也。故曰、蓋師是而無非、師治而無亂乎、是未明天地之理、萬物之情者也。是猶師天而無地、師陰而無陽、其不可行明矣。然且語而不舍、非愚則誣也。帝王殊禪、三代殊繼。差其時、逆其俗者、謂之篡夫。當其時、順其俗者、謂之義之徒。默默乎河伯。女惡知貴賤之門、小大之家。

すれば毫末も丘山の如く大なることが分る。此の道理が分れば大小は畢竟相對上の差別に過ぎないことがはつきり見屆けられる。又物の功用の上から觀察すると功用の有る方面から見て有りとすれば萬物皆功用があるし無い方面からして之を無いとすれば萬物皆功用が無い。例へば目は視、耳は聽き騏驥は一日千里を馳るやうなのは功用の有る方で、耳は視ず目は聽かず騏驥は鼠を捕へないなどは無い方面である。斯くの如く功用の有無も亦關係的相對的であることは宛も東西が相反しながらも東有りて始めて西が成立ち東が無ければ西もないといふやうに相關的で相手次第であるが如きもので、此の理を知らば功用の性質が分る。又趣向卽ち主義の上から觀ると、物皆自分の是と思ふ所に因つて是とすればどれも是であり、其の反對に非と思ふ所に因つて之を非とすれば萬物皆非である。堯と桀とが各々自分の操る所を是として互に他を非とするが如きものである。此の理を知らば趣向卽ち操る所の主義も亦相對的なることがはつきり見屆けられる。昔堯や舜は帝位を讓つて帝たる尊貴を保ち、燕王噲は同樣に其の宰相子之に王位を讓つたが國滅び身絕えた。殷の湯王周の武王は戰爭して王と崇められたが、楚の白公は同樣に戰爭したが身は亡びた。して見ると戰爭や禪讓の禮も、堯の仁や桀の暴も、時によつては貴ばれもし時によつては賤まれもするから貴賤には一定の標準が無いのである。

語釋　若物之外云云（「若くは」は「或は」と同じ。物の外は其の物と他物との關係、例へば人が爵祿あつて始めて貴いとせられる類。物の內は物それ自身の性分、屬性である。）　○惡至而倪二貴賤一（惡は曷何安焉等と同じく「イヅクニカ」と訓む。何如なる處に至つて貴賤の限界をつけるか、何を標準として貴賤を區別するか。）　○以レ道觀レ之云云（道は絕對であり平等である。道の立ち場から視れば、物に貴賤小大の差別は無いから兩行して妨げない。差別は相對的見地から來るといふのである。）　○以レ差觀レ之（郭嵩燾の說に「差は萬物の等差也」とある。等差は等級「シナ」の意。成疏には「差は別なり」とあるが結局は同意に歸するが、文章解釋上から前說に從つておく。）　○差數（差數の數は「けぢめ」區別の意。易に「數度を制

ざることなく、其の非とする所に因つて之を非とするときは則ち萬物非ならざることなし。堯桀の自ら然りとして而して相非とするを知れば則ち趣操覩ゆ。昔者堯舜譲つて帝たり、之噲譲つて絶ゆ。湯武爭つて王たり、白公爭つて滅ぶ。此に由つて之を觀れば爭讓の禮、堯桀の行、貴賤時あり、未だ以て常となすべからざるなり。

訓讀 河伯が貴賤大小の限界を問ふに對して、北海若が先づ差別觀よりする種々の觀察法を擧げ、後貴賤大小皆一定のものでないことを説く。

通釋 河伯更に北海若に問うて曰ふ、「貴賤小大などは、物其れ自身の性分の内に在るか、それとも物以外の他との關係にあるか、一體如何なる點に至つて貴賤小大の限界を定むべきでせうか。」北海若答へて曰ふ、「絶對平等である所の道の立場から觀察すれば物に貴賤の差別は無い。が物の方から觀れば物各々貴いとして互に他を賤しむから貴賤といふ事が起つて來る。又世俗一般の觀察によれば位階爵祿の有無高下によつて貴賤を定めるから己自身には貴賤は無い。又萬物の等差の上から觀察すると、二物を比較して其の大なる所に從つて之を大とすれば何でも皆大である。例へば國は毫末より大きく四海は國より大きく天地は四海より大きいやうなものである。その反對に比較上小なる所に從つて之を小とすれば何でも皆小である。例へば四海は天地より小さく國は四海より小さく毫末は國より小さいやうなものである。斯くの如く其の大なる所によつて之を大とすれば天地以上大なるものがいくらでもある。そこで天地を其の以上數等大なるものに比すれば天地も稊末と同様小さなものだといふことが分る。また其の小なる所に因つて之を小とすれば毫末以下小なるものが無限にある。そこで毫末を其の以下數等小なるものに比

而有之、則萬物莫不有、因其所無而無之、則萬物莫不無。知東西之相反而不可以相無、則功分定矣。以趣觀之、因其所然而然之、則萬物莫不然、因其所非而非之、則萬物莫不非。知堯桀之自然而相非、則趣操覩矣。昔者堯舜讓而帝、之噲讓而絕。湯武爭而王、白公爭而滅。由此觀之、爭讓之禮、堯桀之行、貴賤有時、未可以爲常也。

訓讀 河伯曰く、若くは物の外、若くは物の內、惡くにか至りて貴賤を倪らん、惡くにか至りて小大を倪らんと。
北海若曰く、道を以て之を觀れば物に貴賤なし。物を以て之を觀れば自ら貴んで相賤しむ。俗を以て之を觀れば貴賤己に在らず。差を以て之を觀れば、其の大なる所に因つて之を大とするときは則ち萬物大ならざることなく、其の小なる所に因つて之を小とするときは則ち萬物小ならざることなし。天地の稊米たるを知り毫末の丘山たるを知れば則ち差數覩ゆ。功を以て之を觀れば其の有る所に因つて之を有りとするときは則ち萬物有らざることなく、其の無き所に因つて之を無しとするときは則ち萬物無からざることなし。東西の相反して而も以て相無かるべからざるを知れば則ち功分定まる。趣を以て之を觀れば、其の然りとする所に因つて之を然りとするときは則ち萬物然ら

居るから、自己といふ見地に執はれないといふことであるが、これ實に相對觀の區分を要約するの極、絕對平等觀に達したものである。」

語釋 門隷（門番と僕隷と、皆賤役にして利を求むる者。） ○事焉不レ借レ人（事々自ら爲して人の世話にならぬ、一說人に借さずと訓む。今前說に由る。） ○不レ賤二貪汚一（貪りて利にきたない人をも賤しいとせぬ。之を賤しむ者は反面の淸廉を貴ぶことになり。相對差別觀に執着するものである。） ○辟異（辟は僻でかたよること、異は俗にいふ「へん」なこと、すべて普通と異つてゐる變人の振舞をいふ。） ○戮耻（戮は書經に「頑戮有らん」とあつて刑罰をいふ、耻は恥辱、戮以外貶黜などの恥を斥す。） ○聞曰（「聞く所によると、古語にかく曰うてある」の意。） ○道人不レ聞（道を得た人は光を葆み功成りて居らず、それで名聲の世にあらはれ聞ゆることはない。） ○至德不レ得（得は德と通用する字。老子の「上德は德あらず」と同意で、至上の德は絕對無に歸するから德と名け、德と認めるやうな德はない。これが德だと認められるやうな德は眞の德ではない。） ○約分之至也（約分とは區分を要約すること、相對的差別點を取り去つて、平等に歸一することである。呂註に「人能く分を約するの至、分つ所無きに至る。此れ道人の聞えざる所以、至德の得あらざる所以、大人の己なき所以なり」とある。一說、外を捨てて自己分內に要約すること、人各分あり道人至德、大人は己の分內に止まり自ら大にせず、分を越えて外に求めず故に約分と云ふと。此れ義海に「大人己を虛しくして道德自ら歸す、分を越えて求むるに非ざるなり」とあるによつたのであるが暫く前說によつて解しておく。）

河伯曰、若物之外、若物之內、惡至而倪貴賤、惡至而倪小大。北海若曰、以道觀之、物無貴賤。以物觀之、自貴而相賤。以俗觀之、貴賤不在己。以差觀之、因其所大而大之、則萬物莫不大、因其所小而小之、則萬物莫不小。知天地之爲稊米也、知毫末之爲丘山也、則差數覩矣。以功觀之、因其所有

大意 前節の意を承けて絕對の至道を身に體する人は無爲自然で是非大小等の相對の一偏に拘泥しないことを說く。

通釋 北海若語を續けて曰ふ、「是の故に至道を體得した大人の行は無爲自然少しも我意私慾が加はらないから、勿論人を害するやうな仕打には出ないが、さりとて恩惠を施せども雨露の草木を惠むと同樣自ら其の恩惠を勝れりとして衒ふことがない。動いても自然の機に任せて動くので決して利の爲に動くのでないが、さりとて門番や僕隷を以て利益を貪る爲に動く者だとして賤しみ輕んずるやうなこともしない。知足安分、欲が無いから他人と貨財を爭奪するやうなことはないが、さりとて情を僞り辭を飾つて讓ることを勝れりとも思はぬ。事ある時人の力を借らないけれども、自分の力によつて生活して行くからとて伐ることもしないが、又必ずしも淸廉の一偏に着して人に借る貪汚の行を賤しいとすることもない。固より世外に超脫して居るから、行は俗人とちがつて居るけれども、わざと奇僻異樣な振舞をするのを能とせぬ。所爲は一般人のやり方に從ふので、かの口上手で諂ふ者をも別に賤しいと思はない。世上の高位厚祿を別に榮譽とも思はぬから、それを以て獎勵の手段とする事は出來ぬし、刑罰貶黜を受けても別に恥とも思はぬから、それを以て辱しめて懲戒する譯にもいかぬ。畢竟大人は是非細大すべて自然に行はれるに任せ、是非だとか小大だとか言つて差別すべきものでないといふことを知つて居るからである。聞く所によると、至道を體得した人は自己宣傳をやらぬから名聲世に顯はれ聞ゆることなく、至德の人は世俗の所謂仁義道德と名づけられるやうな德はなく。(德ありとするは眞の德でない) 道を得た大人は彼我の差別を超越して

語釋 自細視大云云（呂注に細より大を視る者は目力の及ばざる所たゞ盡さざるのみ、圍むべからざるに非ざるなり。大より細を視る者は蠛蠓蚊睫に棲む、之を視れども見えざるはたゞ明ならざるのみ、形なきに非ざるなりとある。）○垺大之殷也（垺は音「フ」七百里ある大郭をいふ、轉じて極大の意。徐注に音「フ」盛を謂なり、成疏に垺は殷大なりとある。殷は音樂の盛なる義から轉じて盛大の意とする。說文に樂を作すの盛なるを殷と稱す、㫒に從ふ鳥の聲とある。釋文には殷は衆なりとあるが今は說文に從つて解する。）○異便（便宜を異にす、大小の見る所便不便あるをいふ。）○勢之有也（勢は自然のありさま、又はなりゆきをいふ。有は有無の有で、自然の勢が有るからだ、自然の數が然らしむるのだといふ意。）

是故大人之行、不出乎害人、不多仁恩。動不爲利、不賤門隷。貨財弗爭、不多辭讓。事焉不借人、不多食乎力、不賤貪汚。行殊乎俗、不多辟異。爲在從衆、不賤佞諂。世之爵祿、不足以爲勸、戮恥不足以爲辱。知是非之不可爲分、細大之不可爲倪。聞曰、道人不聞、至德不得、大人無己。約分之至也。

訓讀 是の故に大人の行は、人を害するに出でざれども仁恩を多とせず。動いて利の爲にせざれども門隷を賤しとせず。貨財爭はざれども辭讓を多とせず。事ありて人に借らざれども力に食むを多とせず、貪汚を賤しとせず。行俗に殊なれども辟異を多とせず。爲すこと衆に從ふに在りて佞諂を賤しとせず。世の爵祿以て勸と爲すに足らず、戮恥以て辱と爲すに足らず。是非の分を爲すべからず、細大の倪を爲すべからざるを知ればなり。聞くに曰く、道人は聞えず、至德は得あらず、大人は己無しと。約分の至なりと。

も、畢竟相對有形の境地に着するもので、絶對無形の至道妙理は、言論意料の外に超越するものであると說く。

通釋　河伯が問うて曰ふには「世の議論する者は皆細小なる者の極點は形がなく、廣大なる者の極致は之を包み圍むことが出來ないと言つて居るが是は信に眞理でせうか。」北海若が答へて曰ふこは「一體小さいものから大きいものを視ると、どんなによく見ようとしても、視盡くすことが出來ぬ、然しそれは視力や視野の關係などからして視極めることが出來ないだけのことで、大さにはてしが無いのでは無い。之と反對に大きいものから小さいものを視ると、大きい目を益々大きく見張つても、やはり視力や視野の關係などからしてハッキリ視ることが出來ぬ。然しハッキリ視えなくても其の小さいものが形がないのではない。一體小の極く小を精と云ひ、大の極く大を垺と云つて居るが、此の極小の精から極大の垺に至るまでに物の大さに數限りなき差等があるから各々視るものと視らるゝものとの大小の關係上、視たり視られたりするのに便利（よく視える）であつたり、便利が惡る（よく視えぬ）かつたりする。これは物の形に大小の差がある以上、當然の成行である。一體精と云ひ粗と云ふ以上はそれが視える視えぬに頓着なく必ず形の有ることを豫定して居るのである。本當に形なき者は數量で分けたり、量つたりすることが出來ないものである。眞に包圍することの出來ない卽ち無限大の者は數量で窮め盡すことが出來ないものである。抑も言を以て論ぜられる程度の者は物の粗大なる者で、物の至つて精細なる者は言論を超越して居るが意を以て考へる事が出來る。これ等はまだ有形相對の境地に着するものである。かの言論を以て辯析すべからず、心意を以て思考すべからざる絶對無形の至道玄理は精粗などいふ有形の境を超越して居る。

て盈虚の變を視、得喪の理に達す、故に儻然として時を得るも欣と爲すにならず、偶爾として命を失ふも戚と爲すに足らずと。）　○明二乎坦塗一（死生一途の理に明かなること。）　○至細之倪（倪は端なり。）

河伯曰、世之議者、皆曰、至精無形、至大不可圍。是信情乎。北海若曰、夫自細視大者不盡、自大視細者不明。夫精小之微也、垺大之殷也。故異便、此勢之有也。夫精粗者、期於有形者也。無形者、數之所不能分也。不可圍者、數之所不能窮也。可以言論者、物之粗也。可以意致者、物之精也。言之所不能論、意之所不能察致者、不期精粗焉。

訓讀　河伯曰く、世の議する者皆曰く、至精は形なく、至大は圍むべからずと。是れ信に情なるかと。北海若曰く、夫れ細より大を視るものは盡さず、大より細を視るものは明かならず。夫れ精は小の微なり、垺は大の殷なり。故に便を異にす、此れ勢の有なり。夫れ精粗は有形を期する者なり。形無き者は數の分つこと能はざる所なり。圍むべからざる者は數の窮むること能はざる所なり。言を以て論ずべき者は物の粗なり。意を以て致すべき者は物の精なり。言の論ずる能はざる所、意の察致する能はざる所の者は精粗を期せず。

大意　河伯が至精至大の極點は無形なるかと問うたのに對して、北海若が精粗即細大は如何に極點に至ると

達觀し得るのは物量の無窮、空間の無限なることを悟了して居るが故である。又哲人は古今を認識して居るから、命長しと雖も生を厭うて煩悶することなく、命短しと雖も長壽を企望することがない、是れ時に定止なきこと即ち時間の無限なるを悟了して居る爲である。又哲人は天道の盈虚即ち榮枯盛衰の必然を察知し居るが故に成功しても喜ばず、失敗しても憂へない。是れ天分即ち運命と云ふものは常住なものでないことを悟つて居るからである。又哲人は生より死に至る道は坦々たる平路である、即ち死生不二の理に通達して居るから、生るゝも説ばず死するも哀しむことなし、是れ哲人は死生終始を以て固定的のものとなすべからざるを知るが故である。そも／＼人の知つて居る範圍は極めて制限されて居て、之を其の知らない範圍に比べて見るとトテも及びもつかぬ。又生は短かく死は長し、吾々が此の世に生を受けて居る間は極めて短かくて、未だ生を受けざる時間には比較にならぬ、然るに人は其の至小の智と時とを以て至大無窮の境域を追求せんとして居るが故に迷亂して自ら安んずることが出來ぬ。斯く觀じ來ればトテモ／＼人智を以て僅かに小なりと認めたる毫末を以て細小なものゝ極みであると決定したり、或は又人が小なる智慧を以て大なりと認めたる天地をば至大の境域を極め盡して居るものであると決定することは思ひもよらぬことである。」

語釋　物量無レ窮（量は物の形ばかりでなく能力をも含んだ意である。成疏に從へば、物には本末大小の別がない、處に適へば小も大となり適はざれば大も小となるの意。）　○分無レ常（分は得失禍福の如き天分、運命を云ふ。）　○終始無レ故（終始は猶ほ死生の如し。無窮無止無常無故とは言異りて意同じ、物もとより一定なきを言ふ。）　○證二曏今故一（郭象曰く、「曏は明なり、今故は猶ほ古今の如し」と。）　○遙而不レ悶、掇而不レ跂（成疏に云ふ、遙は長なり、掇は短なり。既に古今に古今なきを知れば壽夭に壽夭なきを知る。是の故に年命延長なるも終に生を厭ひて悒悶せず、稟齡夭促なるも亦遐壽を欣企せずと。）　○察二乎盈虚一（成疏に云ふ、夫れ天道既に盈虚あり、人事寧んぞ得喪なからんや。是を以

とせず、大なれども多しとせず。量の窮まりなきを知ればなり。今故を證曏す、故に遙かなれども悶えず、掇けれども跂たず、時の止むことなきを知ればなり。盈虚を察す、故に得れども喜ばず、失へども憂へず、分の常なきを知ればなり。坦塗を明にす、故に生るれども說ばず、死すれども禍とせず、終始の故とすべからざるを知ればなり。人の知る所を計るに、其の知らざる所に若かず。其の生の時は、未だ生れざるの時に若かず。其の至小を以て其の至大の域を窮めんことを求む。是の故に迷亂して自得すること能はざるなり。此に由つて之を觀れば、又何を以てか毫末の以て至細の倪を定むるに足るを知らん、又何を以てか天地の以て至大の域を窮むるに足るを知らんと。

大意 海若遂に眞諦をほのめかして、天地を至大とし毫末を至小とするが如きは畢竟小智から起る相對觀に過ぎない。哲人は達觀するから大小・今古・得失・禍福・死生・壽夭・遠近・長短・貴賤の差別界を超越して萬物一齊・萬殊一如の絕對觀に住するを說く。

通釋 そこで河伯が問うて曰ふには「お話の通りとすれば、吾々は天地を大きいものと定め、細毛の端を小さいものと定めてよいだらうか。」北海若が曰ふには「いや〱、一體物の器量にはもと大もなく小もないから之が小大を定めることは出來ぬ。又時間は無限であつて、流動して止むことがないから時に關して今だ昔だと定めることは出來ぬ。又得失禍福は固より一定して居るものでなく、死生存亡亦固定的のものでない。されば哲人は近きは勿論遠くまで見通して居るが故に小さい物でもツマラヌとは思はず、大きい物でも勝れて居るとは考へぬ。哲人がかく

士(釋文に李云ふ、任は能なりと。才能あり、器量ある人云ふ。)

河伯曰、然則吾大天地、而小毫末、可乎。北海若曰、否、夫物量無窮、時無止、分無常、終始無故。是故大知觀於遠近、故小而不寡、大而不多。知量無窮。證曏今故、故遙而不悶、掇而不跂、知時無止。察乎盈虛、故得而不喜、失而不憂、知分之無常也。明乎坦塗、故生而不說、死而不禍、知終始之不可故也。計人之所知、不若其所不知。其生之時、不若未生之時。以其至小、求窮其至大之域、是故迷亂而不能自得也。由此觀之、又何以知毫末之足以定至細之倪、又何以知天地之足以窮至大之域。

訓讀 河伯曰く、然らば則ち吾れ天地を大として、毫末を小とせば、可ならんかと。北海若曰く、否、夫れ物は量窮まりなく、時は止むこと無く、分は常なく、終始は故なし。是の故に大知は遠近を觀る、故に小なれども寡し

通釋 北海若は更に語を續けて云ふやう「獨り吾れ北海が天地の間に在るは猶ほ小石小木の大山に於けるが如きのみでない。あの四海卽ち世界が天地の間に在る樣を計り見るに蟻の穴が大澤中に在ると同樣である。又中國卽ち九州が全世界に於ける有樣を計つて見るに亦稊米が大倉中に在ると同樣である。凡そ事物の數を槪稱して萬物と謂つて居るが、吾々人類は僅かに其の萬數中の一たるに過ぎない。そして人類は九州だけで考へて見ても、凡そ穀物の生ずる所や舟車の通ずる所である以上は隅から隅まで果から果まで人の居らぬ所はないからして、各個人と云ふものは萬分の一中の一たるに過ぎない。して見ると各個人を萬物に比べて見ると細い毛のさきが馬の身體中に在る如きもので、實に眇たるものに過ぎない。處で古へ五帝が揖讓によつて帝位を繼承せられたことや三王が師を興して爭奪せられたことや、箕子・微子・比干の如き仁人が社稷を憂ひしことや、伊尹・傅說の如き器量人が天民の爲に勞苦せられたことなどは古來の大事件であるが、觀じ來れば何れも皆眇たる人の世の小さな出來事に過ぎない。又伯夷が眇たる君位を讓りて淸廉の名を得、孔子が六經を論述して博聞多識の聖人となつたことなども皆之に類似したことである。して見ると彼等が自ら賢れりと得意に思つて居ることは恰も汝が先きに小なる黃河の中で僅かな水量を得意がつて居たのと同樣で、誠に憫笑すべきことではないか。」

語釋 礨空（釋文には小穴ありとあり。一說には蟻塚。）○人卒云云（說多し。陸樹芝曰く、「天の覆ふ所、凡そ形容あるもの皆之を物と謂ふ、物を數する時は萬あり、而して人は萬物中の一物に過ぎず。地の載する所、人民は九州に布く、而して穀食の養を資りて以て生き、舟車の載を藉りて以て通ずる者、卒土皆人なり。則ち人は又衆人中の一人に過ぎず」と。卽ち卒を舊說の如く盡と解して別に新說を出したのである。兪樾に從へば、人卒の二字、未だ何の義たるかを詳にせず、疑ふらくは大卒（かほむね）の誤ならん、大卒は總計の辭、上の計字と其の義正に同じと。今は姑らく陸說に從つて解く。）○五帝之所レ連（釋文に崔云ふ、連續なりと、成疏に云ふ、五帝連接して揖讓すと。卽ち帝位を次から次へと讓つたこと。）○盡レ此矣（人物の範圍を出でないこと。）○任

計四海之在天地之閒也、不似礨空之在大澤乎。計中國之在海內、不似稊米之在太倉乎。號物之數謂之萬。人處一焉。人卒九州穀食之所生、舟車之所通、人處一焉。此其比萬物也、不似毫末之在於馬體乎。五帝之所連、三王之所爭、仁人之所憂、任士之所勞盡此矣。伯夷辭之以爲名、仲尼語之以爲博。此其自多也、不似爾向之自多於水乎。

訓讀 四海の天地の閒にあるを計るに、礨空の大澤に在るに似ずや。中國の海內に在るを計るに、稊米の大倉に在るに似ずや。物の數を號けて之を萬と謂ふ。人一に處る。人九州穀食の生ずる所、舟車の通ずる所を卒して、人一に處る。此れ其の萬物に比するや、毫末の馬體に在るに似ずや。五帝の連なる所、三王の爭ふ所、仁人の憂ふる所、任士の勞する所、此に盡く。伯夷は之を辭して以て名を爲し、仲尼は之を語りて以て博と爲る。此れ其の自ら多とするや、爾が向きに自ら水を多とするに似ずやと。

大意 海若更に、天地の大に比すればあらゆる物あらゆる事は毫末に過ぎないから自ら多とするに足らざるを說く。

ある。又田舍士に高尙な道理を說いても分からないのは卑近な敎が先入主となつて居るからである。か樣に凡てのものは環境の爲に支配されて、自ら大であり是であると考へて居るが、皆それは誤である。然るに汝は今までの居所であつた小さな河の岸から出かけて際限もなき大きな海を觀て、そこで汝自身の小さくて醜いことを覺つたのは流石に偉い、たしかに大道を語る資格がある。さて世の中で水の最も大なるは海に及ぶものはない。即ち無數の川が流れ込んで少しも止まらないが、それが溢れたと云ふことがない。又尾閭と名づくる海水を泄らす所があつて絕えず之を泄らして少しも止むことがないが、海がカラになつたことを聞かない。又春秋の季節によつて增減がなく、汎濫もなければ、旱魃もない。して見ると海は江河の流に比べて見ると其の大きいことは量り數へることが出來ぬ。か樣に大きくても此の方は未だ嘗て勝れたものだと自惚たことがないのは此の方自らから考へて居る、自分の形は廣大無邊なる天地より承け、其の氣は生育化育の本原である陰陽に受けて居る。自分が天地の間に在ることは恰も小石小木の大山に在るが如きもので其の小なることは比較にならぬ。かく此の方は常に自分は小さい／＼と思つて居るから、決して大きいなど〻得意になるやうなことはない。」

語釋　井鼃（王引之に從へは鼃は本魚に作る、後人之を改むと云ふも今は舊に從ふ。）　○拘二於虛一也（釋文の崔說には井中の空に拘はるとある、即ち虛を解して空虛となす。王念孫によれば虛は墟と同じ、墟は居なり、即ち居る所の地を云ふと。今王說に從ふ。）　○篤二於時一也（郭慶藩曰く、「篤は固なり、信じること固きを謂ふ」と。）　○曲士（釋文に司馬云ふ、鄕曲の士なりと、田舍人の意。一說には曲見の士、即ち物の曲部しか分からない小知小見の人の意。亦通ず。）　○尾閭（海水を泄らす所なり、碧海の東に在り、其の處に石あり廣さ四萬里厚さ四萬里、海水沃著すれば即ち焦ぐ故に一に沃焦と名づく。尾閭とは百川の下に在り故に尾と稱し、閭は聚なり、水聚族の處、故に閭と稱するなり。）　○自以比二形於天地一云云（以字は下の大山也まで管到す。東條一堂曰く、「比は次なり、猶ほ承と云はんが如し、或は以て比方と爲すは誤なり、若し比方となす時は下の受字と倫せず」と。）

盈。尾閭泄之、不知何時已、而不虛。春秋不變、水旱不知。此其過江河之流、不可爲量數。而吾未嘗以此自多者、自以比形於天地、而受氣於陰陽、吾在於天地之閒、猶小石小木之在大山也。方存乎見少、又奚以自多。

訓讀 北海若曰く、井鼃は以て海を語るべからざるは、虛に拘ればなり。夏蟲は以て氷を語るべからざるは、時に篤ければなり。曲士は以て道を語るべからざるは、敎に束ねらるればなり。今爾崖涘を出で、大海を觀て、乃ち爾の醜を知る。爾將に與に大理を語るべからんとす。天下の水、海より大なるは莫し。萬川の之に歸して、何れの時か止まるを知らざれども、而かも盈たず。尾閭之を泄し、何れの時か已むを知らざれども、而かも虛しからず。春秋變ぜず、水旱知らず。此れ其の江河の流に過ぐること量數を爲すべからず。而も吾未だ嘗て此を以て自ら多とせざるは、自ら以へらく、形を天地に比し、而して氣を陰陽に受く、吾の天地の閒に在るは、猶ほ小石小木の大山に在るがごとし。方に少を見るに存す、又奚ぞ以て自ら多とせん。

大意 北海若先づ、自ら其の分を知れる者は始めて大を語るに足るを說く。

語釋 そこで北海若が曰ふには「井戸の蛙に海のことを物語つても判らないのは井戸と云ふ狹い居所に拘はつて居るからである。又蟬の如き夏の蟲に氷のことを話しても分からないのは夏と云ふ一時のみを固執して居るからで

の高義を輕んずる大人の說を聞いたが、是れまで自分は之を信ずることが出來なかつた。然るに今そこ許の茫々として極なきを目擊して、始めて嘗て聞けることの虛妄でないことを悟つた。吾輩がそこ許の門に來なかつたならば、終身、大道の眞を知るを得ずして長く世の大道を得たる人々に笑はれたことであらう。」

語釋 秋水（釋文に李說を引いて水は春に生じて秋に壯なりと云ふ。秋即ち夏正の五六月、周の七八月なれば驟雨俄かに暴ぎ、水從つて盛なるなり。） ○灌レ河（河は河水即ち黄河を云ふ。） ○涇流（涇字に就いて說多し。姑らく林希逸に從つて濁なりと解す。） ○兩涘渚崖之間（涘は岸なり。渚崖に就いても說多し。姑らくナギサ、水際の義に解す。甕谷によれば渚崖は河中にある所の洲渚の崖なり、河の兩岸若しくは中間洲渚の崖に在りて猶ほ牛馬を辨ずる能はず故にしか云ふと。） ○不レ辨二牛馬一（遠くして見ること明かならず故にその牛なるや馬なるや分別する能はず。林西仲。以上の數句を許して云ふ、是れ水大に崖遠く、物を見ゆる模糊、一段の景況、摹寫眞に逼り、入手便ち奇と。） ○河伯（黄河の神なり。） ○旋二其面目一（容を斂めて愧づるの貌にて、今までの意氣揚々たる面目を急に變へ大に反省する意。） ○望洋（仰ぎ視るの貌。或は茫然自失の貌。） ○向レ若（若は下の北海若のことにて北海の神を云ふ。） ○聞レ道百（釋文に李云ふ、萬分の一なりと。即ち道を聞く少きを云ふなり。郭氏の集釋によれば百は多き意、即ち道を聞く多しと雖も其の窮なきを知らざれば自ら誤るの意と。今は舊說に從ふ。） ○少二仲尼之聞一云云（成疏に云ふ。世人仲尼の六經を刪定するを以て多聞博識と爲し、伯夷の國を讓るの淸廉は其の義重んずべし。復た通人達士あり、議論高談、伯夷の義を以て輕しと爲し、仲尼の聞を寡となすも、河伯嘗つて聞いて未だ之を信ぜざりしなり。今大海の宏博浩汗にして窮め難きを見て、方めて昔聞く所、諒にして虛ならざるを覺れりと。） ○大方之家（大方は大道なり。）

北海若曰、井鼃不可以語於海者、拘於虛也。夏蟲不可以語於氷者、篤於時也。曲士不可以語於道者、束於敎也。今爾出於崖涘、觀於大海、乃知爾醜。爾將可與語大理矣。天下之水、莫大於海。萬川歸之、不知何時止而不

信。今我睹子之難窮也。吾非至於子之門、則殆矣。吾長見笑於大方之家。

訓讀　秋水時に至り、百川河に灌ぐ。涇流の大、兩涘渚崖の閒、牛馬を辨ぜず。是に於てか河伯欣然として自ら喜び、天下の美を以て盡く己に在りと爲し、流に順つて東し、行いて北海に至る。東面して視るに、水端を見ず。是に於てか河伯始めて其の面目を旋らし、望洋として若に向つて歎じて曰く、野語に之れあり、曰く、道を聞くこと百にして己に若くもの莫しと以爲ふとは、我の謂なり。且夫れ我れ嘗て仲尼の聞を少しとし、而して伯夷の義を輕しとするものを聞く、始め吾れ信ぜざりき。今我れ子の窮め難きを睹る。吾れ子の門に至るに非ずんば則ち殆し。吾れ長く大方の家に笑はれんと。

大意　此の一節自己の大觀に自惚れた河伯が北海の絕大に遇つて自ら悟り兜を脫いで平伏するところ。秋が來ていつものやうに盛に水が流れ出し、川と云ふ川の水が悉く黃河に流れ込み、濁流の大なることは兩岸の水際にある牛馬をさへ見別けることが出來ぬ程の大觀である。そこで黃河の水神はいそ〳〵と喜んで、天下の美觀は盡く己に備つて居ると思ひ、得意になつて段々流に順つて東へ東へとやつて來て遂に北海に達した。さて東面して見渡せば淼漫として水際を見るを得ず。そこで河伯は今まで得意であつた顏付を急に變へて、北海の神である若を仰ぎ視て歎息して曰ふには「世の諺に僅かばかり物の道理を聞いて、もう俺れに及ぶものはないと自惚る者があるとあるが、是れは正しく我れ自身のことである。且つ又我は嘗て孔子の博聞を少しとし、伯夷

外篇秋水第十七

叙説 秋水一篇は莊生書中に於て最も名篇大作の一である。本篇は齊物論の意を敷衍したのであつて、大小貴賤死生禍福の如きは、相對觀より起る對立であつて、萬物一齊なりと達觀する時は、もと斯くの如き畛域あることなきを覺ることが出來る。即ち專ら小知小見を斥けて大道の眞に反るべきを論ず。林西仲曰く、この篇の大意は內篇齊物論より脫化し出で來る、立解の創闢は既に絕頂山巓に踞す。運詞變幻、復た天然の神斧を擅にす。此れ千古有數の文字、後人無數の法門を開くと。評し得て明快である。たゞ孔子遊匡と公孫龍問魏牟の二段は疑ふらくは後人の贋作であらう。

秋水時至、百川灌河。涇流之大、兩涘渚崖之閒、不辨牛馬。於是焉、河伯欣然自喜、以天下之美爲盡在己、順流而東、行至於北海。東面而視、不見水端。於是焉、河伯始旋其面目、望洋向若而歎曰、野語有之、曰、聞道百以爲莫己若者、我之謂也。且夫我嘗聞少仲尼之聞、而輕伯夷之義者。始吾弗

れ篇首の蔽蒙の民に應じて尤もよし。

【通釋】古の所謂志を得るとは高位高官を得て世に時めくと云ふ意味ではなくて、かゝる榮譽を以て其の樂みを外から增益しないのを謂ふのである。然るに今日謂ふ所の志を得るとは、地位名譽を得ると云ふ意味である。元來人の身に得る榮譽は固有の性命ではなくて、偶然外から來て寄留する物たるに過ぎない。從つて其の去來は常なく、來るも防ぐべからず、去るも止むべからず、恰も浮雲の如きものである。故に古人は榮譽の爲めに驕らず、貧窮の爲めに俗流に迎合せず、其の中心の悅樂は遇不遇によつて變ることがないから何等の憂がない。之が古の志を得た人の境界である。然るに今の志を得た人は地位名譽の如き寄留物が其の身から去ると怏々として樂まなくなる點から考へて觀ると、其の榮譽を得て樂しんで居る時でも常に心が荒んで居るものである。故に古語にも「外物の爲めに自己を亡ぼし、世俗の爲めに本然の性を失ふ者は、內外本末を倒置せる民と謂ふ」と曰つてある。

【語釋】軒冕（軒は車、冕は冠、大夫の用ふるもの。故に高位高官の意あり。）　○儻（成疏に、意外忽ち來るのみとあり。タマ〳〵と訓む、適に同じ。）　○彼與レ此同（郭云ふ、「彼此は軒冕と窮約とを謂ふ。」即ち遇と不遇とを謂ふ。）
○倒置之民（釋文に向云ふ、外を以て內を易ふ、倒置と謂ふべしと。秦鼎曰く、倒置猶ほ顚倒の如し、蔽蒙と相應ずと。）

○正己云々（上の危字に應す。成疏に「己の身、正道を履めば、作す所皆虚通なり。既にして順なく逆なく、哀を忘れ樂を忘れは、いたる所皆適なり、これ樂み全きものなり。至樂全くして然る後、志性得たり。」）

古之所謂得志者、非軒冕之謂也。謂其無以益其樂而已矣。今之所謂得志者、軒冕之謂也。軒冕在身、非性命也、物之儻來寄也。寄之其來不可圉、其去不可止。故不爲軒冕肆志、不爲窮約趨俗。其樂彼與此同、故無憂而已矣。今寄去則不樂。由是觀之、雖樂未嘗不荒也。故曰、喪己於物、失性於俗者、謂之倒置之民。

訓讀 古の所謂志を得るものは、軒冕の謂ひに非ざるなり。其の以て其の樂を益す無きを謂ふのみ。今の所謂志を得るものは、軒冕の謂なり。軒冕身に在るは性命に非ざるなり、物の儻ま來寄するなり。寄の其の來るや圉ぐ可からず、其の去るや止む可からず。故に軒冕の爲に志を肆まにせず、窮約の爲めに俗に趨かず。其の樂しみ、彼れと此れと同じ、故に憂ひ無きのみ。今、寄去れば則ち樂しまず。是に由つて之を觀れば、樂しむと雖も未だ嘗て荒まずんばあらざるなり。故に曰く、己を物に喪ひ、性を俗に失ふもの、之を倒置の民と謂ふと。

大意 上の得志の語を承けて、古の得志と今の得志との區別を明かにし、倒置の民と云ふ警語を以て結ぶ、是

古之存身者、不以辯飾知、不以知窮天下、不以知窮德、危然處其所而反其性已。又何爲哉。道固不小行、德固不小識。小識傷德、小行傷道。故曰、正己而已矣。樂全之謂得志。

訓讀 古の身を存するものは、辯を以て知を飾らず、知を以て天下を窮めず、知を以て德を窮めず、危然として其の所に處つて、其の性に反るのみ。又何をか爲さんや。道は固より小行ならず、德は固より小識ならず、小識は德を傷り、小行は道を傷る。故に曰く、己を正しうするのみ。樂全きを之れ志を得ると謂ふと。

大意 存身の道は己を正しうして本然の性に反へるに在りと說く。

通釋 古の身を存する者は、辯を以て知を飾つたり、知を以て天下の事物や自然の德性を究め盡さうとせず、獨り正しく、自己の境地に安住して、本然の性に立ち反へるのみで、何等の作爲を弄しないのである。元來大道は仁義の如き小なる行ではなく、大德はもとより是非の小見ではない、小見は反つて大德を傷つけ、小行は大道を害ふものである。故に古語にも「身を存するには己を正しうする以外に道はない。己さへ正しければ樂おのづから全く、之をば眞に志を得たりと謂ふ」と曰つてある。

語釋 危然（郭注には獨正の貌とあり。口義には危然處二其所一とは立つ所のもの高きなりとあり。即ち郭は危を正と解し、林は高と釋す、今郭に從ふ。） ○小行（仁義の小行を云ふ。） ○小識（是非の小見を云ふ。）

と雖も、其の德隱る。隱るゝは故より自ら隱さず。古の所謂隱士なるものは、其の身を伏して見さざるに非ざるなり。其の言を閉ぢて出さざるに非ざるなり。其の知を藏して發せざるに非ざるなり。時命大に謬ればなり。時命に當つて大に天下に行へば、則ち一に反つて迹無し。時命に當らずして大に天下に窮すれば、則ち根を深くし極を寧んじて待つ。此れ身を存するの道なり。

大意 衰世に於ける聖人存身の道を說く。

通釋 以上の事實に由つて觀ると、時代が下るに從つて、世の中に道が無くなり、道も亦世の中から離れ、世と道と互に離ればなれになり、有道の士も世を興すに由なく、世俗の人も道を興すに術がなくなつた。斯くなつては聖人が山林の中に隱れずして世に在つても、其の德は顯はれない。顯はれないのは聖人が自ら德を隱して居るのでなくて、世俗が之を認めないのである。古の隱士と云ふ者は其の身を山林に隱して世に現さないのではない。又其の口を閉じて言を出さないのでもなく、其の知を包み藏して發揮しないのでもない、たゞ時運の非なるが爲めに世に現はれないのである。苟もよい時に運りあつて、大に志を天下に行ふことを得たならば、必ず天下を至一の狀態に引き返へして有爲の迹方を止めないであらう。若しよい時世に運り合はずして、大に困窮したならば、確乎として本始の性命を保つて失ふことなく、靜かに時運の到來を待つ。これが明哲保身の道である。

語釋 隱故不二自隱一（呂注に「世と道と交々相喪ふ時は、聖人、世俗に遊べども之を知るものなし。固より已に隱る、なんぞ自ら山林の間に隱るゝを以て爲さんや。」） ○反レ一無レ迹（宣注に云ふ「至一の世に復へして形迹なし。」） ○深レ根寧レ極（因に云ふ「根極は性命を謂ふ。」）

したから、文華は質朴を滅ぼし、博學は心神を擾した。かくて民は惑ひ出して其の本始の性情に立ち反ることが出來ないやうになつた。

語釋　離レ道以レ善、險レ德以レ行（口義に「善の名ある時は道に違ざかる。行の見るべきある時は德、平易自然ならず。」）　○心與レ心識知（郭注は識を以て句す、是に非ず。兪樾曰く、「識知の二字連文、識と知と同義、故に之を連言するなり」と、是なり。）

由レ是觀レ之、世喪レ道矣、道喪レ世矣、世與レ道交相喪也、道之人何由興二乎世一、世亦何由興二乎道一哉。道無三以興二乎世一、世無三以興二乎道一。雖二聖人不一レ在二山林之中一、其德隱矣。隱故不二自隱一。古之所レ謂隱士者、非下伏二其身一而弗上レ見也。非下閉二其言一而不上レ出也。非下藏二其知一而不上レ發也。時命大謬也。當二時命一而大行二乎天下一、則反二一無一レ迹。不レ當二時命一而大窮二乎天下一、則深レ根寧レ極而待。此存レ身之道也。

訓讀　是に由つて之を觀れば、世は道を喪ひ、道は世を喪ひ、世と道と交も相喪ふなり。道の人何に由つて世を興さん、世亦何に由つて道を興さんや。道以て世を興すこと無く、世以て道を興すこと無し。聖人山林の中に在らず

性情而復其初。

訓讀 德の下衰するに逮び、燧人伏戲に及んで、始めて天下を爲む。是の故に順なれども一ならず。德又下衰して、神農黃帝に及んで、始めて天下を爲む。是の故に安なれども順ならず。德又下衰して、唐虞に及んで、始めて天下を爲む。治化の流を興し、淳を澆くし朴を散ず。道を離るゝに善を以てし、德を險にするに行を以てす。然る後性を去つて心に從ふ。心と心と識知して、以て天下を定むるに足らず。後る後之に附するに文を以てし、之に益すに博を以てす。文は質を滅し、博は心を溺らす。然る後民始めて惑亂して、以て其の性情に反りて、其の初めに復ること無し。

大意 時移り德衰へ、所謂俗學漸く盛にして、民惑亂し、其の初に復へること能はざるに至るを說く。

通釋 太古の世はかくの如く無爲自然であつたが、時の經過につれて人君の德が次第に衰へて、燧人氏や伏戲氏の代に及んで、始めて天下を治めることになつた。そこで人々は自然に順へども太古の如き至一の狀態は失はれた。更に德が衰へて神農氏や黃帝の世になると益知を用ひて天下を治めたから、天下は平安ではあつたが人々自然に順はぬやうになつた。更に又德が衰へて、堯舜の時代になると、愈以て心知を用ひて天下を治めた。即ち政治や敎化の流弊を興し、折角の淳朴の風を薄くし散じて仕舞ひ、善を爲すことによつて無爲の道から離れ、行を愼むことによつて德の自然性を失ふことになつた。かくして人々は益々自然の性情を去つて有爲の心に從ひ、互に心を用ひて相察知することになり、容易に天下を定めることが出來なくなつた。その上又文華と博學とを以て附益

當つてや、之を爲すこと莫くして、常に自然なり。

【大意】太古の世相を寫す。

【通釋】太古の君は混沌芒昧の中に處りて、天下の人民と共に恬淡寂漠無爲の道を得て居た。其の當時は陰陽の二氣は和ぎて靜かに、鬼神は擾れ祟らず、春夏秋冬の四時は順當であつて、萬物傷なはれず、諸々の生物は夭死せず生成發展することが出來た。從つて人に知ありと雖も、其の知を利用すべき所がなかつた。かゝる狀態を絕對唯一の境と謂ふ。此の絕對唯一の世に在つては人々は何等の作爲を用ひずして萬物常に自ら生成の化を遂げたのである。

【語釋】古之人（成疏に三皇の前、玄古名號なきの君を謂ふなり。）○混芒（釋文に「崔云ふ、混々芒々、未だ分れざる時なりと。」成疏には混沌芒昧となり。要するに太古蒙昧の世を云ふ。）○澹漠（成疏に恬憺寂漠無爲の道とあり。）○至一（成疏に「彼此を無爲に均しくし、是非を恬惔に混じ、物我不二故に之を至一と謂ふ。」絕對無差別平等の世の中。）○常自然（郭慶藩曰く、「自然は自ら成るを謂ふ」と。或は字の如く解するも通ず。）

逮德下衰、及燧人伏戲始爲天下。是故順而不一。德又下衰、及神農黃帝始爲天下。是故安而不順。德又下衰、及唐虞始爲天下、興治化之流、澆淳散朴。離道以善、險德以行。然後去性而從於心。心與心識知、而不足以定天下。然後附之以文、益之以博。文滅質、博溺心。然後民始惑亂、無以反其

以上の數者は古に在りては皆和理に本づき自然の性中より流れ出でたものであるのに、今其の本を忘れて、禮樂のみを專ら行はんとすれば天下は必ず亂れるであらう。凡そ、人々が禮樂などを以て強ひて他を正さんとして反つて自ら其の德を明かにしないならば、其の德は物を蓋ふに足らない。然るに、強いて之を蓋はんとすれば必ず物の本性を失つて天下は亂に至るのである。

【語釋】繕性於俗學（繕は治なり。俗學は儒墨の學を指す。一本俗字の上に更に俗の字あり、衍。）○滑欲於俗思（欲は心智なり、情慾の意に非ず。釋文の崔說には滑は治なりとあり、兪樾は之を是とす、詳しきは莊子平議について見よ。）○中純實而反乎情樂也（樂は音樂なり、主觀的方面について音樂を說明す。禮と曰ひ樂と曰ふ、鐘鼓をいはんやの意。）○信行容體而順乎文（因に「容體の行ふ所にまかせて其の自然の節文に順ふ」とあり。）○禮樂偏行（口義に「行に禮樂を求めて、其の本を知らず、故に偏行と曰ふ。猶ほ只一半を見得ずと言はんが如し。」）○彼正而蒙己德云云（諸說紛々從ふ所を知らず、今姑らく林西仲に從ふ。「言ふ心は天下の亂るゝ所以は彼れ人を正さんと欲して、先づ其の德を蔽蒙するを以てすれば、其の德以て物を蓋冒するに足らず。蓋冒するに足らざるの德を以てして之を蓋冒す、物の其の性を失ふ所以なり。」）

古之人、在混芒之中、與一世而得澹漠焉。當是時也、陰陽和靜、鬼神不擾、四時得節、萬物不傷、羣生不夭。人雖有知、無所用之。此之謂至一。當是時也、莫之爲而常自然。

【訓讀】古の人、混芒の中に在つて、一世と與にして、澹漠を得たり。是の時に當つてや、陰陽和靜、鬼神擾れず、四時節を得、萬物傷はれず、羣生夭せず。人知有りと雖も之を用ふる所なし。此を之れ至一と謂ふ。是の時に

【訓讀】性を俗學に繕めて、以て其の初めに復らんことを求め、欲を俗思に滑めて、以て其の明を致さんことを求むる、之を蔽蒙の民と謂ふ。古の道を治むるものは、恬を以て知を養ふ。生れながらにして知を以て爲すこと無きなり。之を知を以て恬を養ふと謂ふ。知と恬と交ゝ相養つて、和理其の性に出づ。夫れ德は和なり、道は理なり。德容れざること無きは仁なり。道、理ならざること無きは義なり。義明かにして物親しむは忠なり。中純實にして情に反るは樂なり。容體を行ふに信せて、文に順ふは禮なり。禮樂偏行すれば、則ち天下亂る。彼れ正さんとして己が德を蒙くすれば、德、則ち冒はず、冒はば則ち物必らず其の性を失ふなり。

【大意】俗學を以て性を繕め、俗思を以て知を治むるは愚昧の民、恬淡無爲を以て知を養ひ、知を以て恬淡の性を養ふは古の治道の士なるを說く。

【通釋】儒墨の如き俗學を以て性を治めて自然の本性に復歸せんことを求めたり、又俗惡な思想を以て心智を亂して心の明を得んことを求めたりするのを蔽蒙とて本然の性を蔽はれて理に蒙き愚かな民と謂ふ。古の道を治むる者は恬淡無爲を以て知を養つた、卽ち生れながらの本性に任かせて知巧を事としなかつた。かく知を事としないから知慧があつても恬淡の本性を損ずることがない、之をば知を以て恬を養ふと謂ふのだ。知慧と恬淡の本性とが互に相養ふことによつて、和理卽ち眞の道德が其の本性中より生じて來る。さて其の德が凡てを包容するを仁と謂ひ、凡ての場合に適つて居るのを義と謂ひ、義に明かであつて物が親しんで來るのを忠と謂ひ、中心が純粹質實であつて自然の情に反へるのを音樂と謂ひ、思ふがまゝに動作して自ら節度があり體裁のよいのを禮と謂ふのである。

外篇繕性第十六

叙説 此の篇、俗學と眞道、今と古との差別を明かにし、今を捨てゝ古に歸り、俗學を棄てゝ無爲恬淡の道に入るべきを論ず。林西仲曰く、此の篇、恬と知との二字を以て骨と作す。數段遞々說き下り、立論甚だ醇、華實並に茂る。且つ別に一種の秀色ありて、人をして賞心置かざらしむ。然れども細に尋繹を加ふれば未だ訓詁の氣あるを免れざるを覺ふ。殊に南華の筆に非ざるなりと。

繕性於俗學、以求復其初、滑欲於俗思、以求致其明、謂之蔽蒙之民。古之治道者、以恬養知。生而無以知爲也。謂之以知養恬。知與恬交相養、而和理出其性。夫德和也、道理也。德無不容仁也。道無不理義也。義明而物親忠也。中純實而反乎情樂也。信行容體而順乎文禮也。禮樂偏行、則天下亂矣。彼正而蒙己德、德則不冒、冒則物必失其性也。

太意 純素の道を體する眞人を說く。

通釋 今、吳や越から產する名劍を有するものは、箱の中へ秘藏して滅多に用ひず、此の上もなき寶として大切にする。處が虛靜無爲の心は其の至寶たること名劍の比ではない。蓋し此の心は四方に通達流動して極めざる所はない、即ち上は天際に達し、下は地中に蟠り、萬物を化育して其の妙力はトテモ名狀することは出來ぬ。故に之を名づけて天帝と同じ働きあると云ふ所から同帝と謂ふ。純精素朴の道はたゞ此の精神を守るに在る。之を守つて失ふことがなくば形神合して一となる。既に身神合一の妙境に到達する時は自ら自然の理に契合するのである。されば諺にも「俗人輩は利慾を重んじ、淸しの士は名節を重んじ、賢者は志を尙び、聖人は精即ち純素の道を貴ぶ」と曰はれて居る。さて素とは世の濁と混濁じても能く之と雜はることなく純白を保つものを謂ひ、純とは俗塵の內に居ても能く其の神を虧損することなく圓滿を保つものを謂ふ。能く此の純素の道を體得したものを眞人と謂ふのである。

語釋 干越之劍（釋文に「司馬云ふ、干は吳なり、吳越は善劍を出すと。」或は干を于に作り、于越は於越、即ち越のことなりとす。是に非ず。）○同帝（口義に「功用、天帝と同じきを謂ふ。」）○純素之道云云（雪に云ふ「純素は前文を總括す、解は下文に在り。純素の道は專ら以て神を守る。之を守りて失ふなく、純熟に至れば、則ち形神合一して相離れず。」）○一之精通、會二於天倫一（成疏に「倫は理なり、既に神と一たらば則ち精智無礙、故に自然の理に冥す。」）○素也者謂二其無レ所二與雜一也、純者謂二其不レ虧二其神一也（成疏に「迹を世物の中に混じて物と雜はるなきは至素なる者なり。變を囂塵の內に參へて其の神、虧かざるは至純なる者なり。豈に復た獨り高山の頂に立ち、手を林籟の間に拱して純素を稱せんや。」）

く、靜一にして動搖せず、恬淡にして無爲、自然のまに〳〵行動するのが、精神を養ふ道である」と曰つてある。

語釋 天德之象（天然自然の現象。） ○養神之道（宣穎曰く、「上數節を將て、都べて養神に歸す、是れ一篇の主」と。）

夫有干越之劍者、柙而藏之、不敢用也、寶之至也。精神四達並流、無所不極。上際於天、下蟠於地、化育萬物、不可爲象。其名爲同帝。純素之道、惟神是守。守而勿失、與神爲一。一之精通、合於天倫。野語有之曰、衆人重利、廉士重名、賢士尚志、聖人貴精。故素也者、謂其無所與雜也。純也者、謂其不虧其神也。能體純素、謂之眞人。

訓讀 夫れ干越の劍を有するものは、柙にして之を藏め、敢へて用ひず、寶とするの至なり。精神は四達並流して極めざる所なし。上は天に際し、下は地に蟠り、萬物を化育して、象を爲すべからず。其の名を同帝と爲す。純素の道は、唯ゞ神を是れ守る。守つて失ふことなければ、神と一たり。一の精、通じて天倫に合ふ。野語に之れあり、曰く、衆人は利を重んじ、廉士は名を重んじ、賢士は志を尙び、聖人は精を貴ぶと。故に素とは、其の與に雜はる所無きを謂ふなり。純とは、其の神を虧かざるを謂ふなり。能く純素を體する、之を眞人と謂ふ。

淡の至極であり、無爲無心、物に逆ふことなきは純淸の至極である。

語釋 一而不レ變(一は喜怒哀等を一體視して、その爲めに心が變動せぬこと。此の思想は内篇の隨所に見ゆ。)

故曰、形勞而不レ休則弊、精用而不レ已則勞、勞則竭。水之性不レ雜則淸、莫レ動則平、鬱閉而不レ流、亦不レ能レ淸。天德之象也。故曰、純粹而不レ雜、靜一而不レ變、淡而無爲。動而以天行。此養レ神之道也。

訓讀 故に曰く、形勞して休せざれば則ち弊え、精用ひて已まざれば則ち勞れ、勞るれば則ち竭くと。水の性、雜らざれば則ち淸く、動くこと莫ければ則ち平、鬱閉して流れざれば、亦淸むこと能はず。天德の象なり。故に曰く、純粹にして雜らず、靜一にして變ぜず、淡にして無爲、動いて以て天行す。此れ神を養ふの道なりと。

大意 虛靜無爲は養神の道なることを說く。

通釋 されば又古語に「外物と交り、之に逆らひて、肉體を法外に勞して休まない時は困弊し、精神を使役して止まない時は疲勞し、疲勞の果には心身ともに消耗して仕舞ふ」と曰つてある。そも〱人の心身は水の如きもので、水の本性は他物が雜らない時は淸く澄み、風などの爲めに動くことなき時は平坦で、四方が塞がれて流れ出る路がないと、腐敗して澄むことが出來ぬ。是れが自然の現象である。それ故に古語にも「心が純粹にして雜念な

を陰陽に付す。」以上四句皆天道篇に出づ。）　○不レ爲二福先一、不レ爲二禍始一（郭注に「唱ふる所なし」と。成疏に「夫れ善は福の先たり、惡は禍の始たり。既に善惡雙べ遣る、亦禍福兩つながら忘る、感じて後應ず、豈に先始を爲すものならんや」と）　○光矣而不レ燿（齊物論に滑疑之耀、聖人之所レ圖也とあり。又葆光とある句、參照。）　○去二知與一レ故（故は人爲なり。郭慶藩は詐なりと解す。）　○無二天災一、無二物累一、無二人非一、無二鬼責一（亦、天道篇に出づ、天災を天怨に作る。）　○其寢不レ夢云云（此の二句亦大宗師に見ゆ。）

故曰、悲樂者德之邪、喜怒者道之過、好惡者德之失。故心不レ憂樂、德之至也。一而不レ變、靜之至也。無レ所レ於レ忤、虛之至也。不レ與レ物交、淡之至也。無レ所レ於レ逆、粹之至也。

訓讀　故に曰く、悲樂は德の邪、喜怒は道の過、好惡は德の失と。故に心憂樂せざるは、德の至なり。一にして變ぜざるは、靜の至なり。忤ふに所無きは、虛の至なり。物と交らざるは、淡の至なり。逆ふに所なきは、粹の至なり。

大意　喜怒哀樂の差別的感情を超脫せるが聖人の心境であつて道德の至極なりと說く。

通釋　されば又古語に「哀樂は德の邪魔であり、喜怒は道の罪過であり、好惡は德の闕失である」と曰つてある。故に心に憂樂のないのは德の至極であり、喜怒を一樣に考へ、心變動することなきは靜寂の至極であり、好惡を忘れ自然にして物に逆ふことなきは虛無の至極であり、どこまでも無慾であつて、自ら求めて物と交涉しないのは恬

の先たらず、禍の始たらず。感じて後に應じ、迫つて後に動き、已むを得ずして後に起つ。知と故とを去りて、天の理に循ふと。故に天災なく、物累なく、人非なく、鬼責なし。其生は浮ぶが若く、其の死は休するが若し。思慮せず。豫謀せず、光ありて耀かさず、信ありて期せず。其の寢るや夢みず、其の覺むるや憂なし。其の神純粹、其の魂罷れず、虛無恬惔にして乃ち天德に合す。

大意 前節に引きつゞき聖人の云爲、皆天德に合するを述ぶ。

通釋 されば古語にも斯う曰つてある「聖人は生きてる間は自然に從つて行ひ、死ぬ時には物と共に變化して何の閡もない。其の動靜皆無心であつて陰陽の二氣と調和し、之に違ふことがない。又禍福兩ながら忘る、故に自ら其の首唱者とならない。凡て物に感じて後之に應じ、物迫り來りて始めて自ら動き、事已むを得ざるに至つて後起つて之を爲す。知巧と人爲とを去り、專ら自然の理法に循つて云爲す。」聖人の態度かくの如きが故に身に天災を受くることなく、物の累ひを蒙らず、人から誹られることなく。鬼神の祟を受くることがない。生きては流の間に〳〵浮ぶが如く、死しては恰も休息するが如く、全く死生を超越して心にかけることがない。すべて自然の成行に任せ、思慮智謀を用ひず、光あれども葆んで耀かさず、信實あれども結果を豫期することがない。其の寢るや夢みず、其の覺むるや憂なく、其の神魂は純淨にして用に應じて罷るゝことなく、虛心恬淡にして自然の德に合致して居る。

語釋 聖人之生也天行、其死也物化（郭注に「自然に任かせて運動し、蛻然として係くる所なし」と。） ○靜而與レ陰同レ德、動而與レ陽同レ波（又「動靜無心にして之

又「聖人は此の四德に安住す」と曰ってある。此に安住すれば心は平靜であり、平靜なれば恬淡である。平靜恬淡であれば憂患も入ることが出來ぬし、邪氣も侵すことが出來ぬ。されば其の德さへ完全ならば、精神は自ら圓滿無缺である。

語釋 若夫（轉換の辭、それとはことと變り。）○恬惔云云（惔は淡に同じ、天道篇には淡に作る。此の節一提下の四節は都て此の八箇の字を寫す」と。）○天地之平而道德之質（陳壽昌曰く、「平は定なり、定理を謂ふなり」と。天道篇には質を至に作る。）○故曰、聖人休、休焉則平易矣（樹得之曰く、休焉の二字倒置と。兪樾又曰く「休焉の二字は傳寫の誤倒、此れもと故曰聖人休焉、休則平易矣に作る」天道篇に故帝王聖人休焉、休則虛云云とあり、之に據れば此の說是なるが如し。休とは上の四德に休止するなり。）○其德全而神不虧（其德全とは恬淡無爲なるを云ふ神不虧とは憂患不能入云云を指す。而は則に同じ。）

故曰、聖人之生也天行、其死也物化。靜而與陰同德。動而與陽同波。不爲福先、不爲禍始。感而後應、迫而後動、不得已而後起。去知與故、循天之理。故無天災、無物累、無人非、無鬼責。其生若浮、其死若休。不思慮、不豫謀。光矣而不耀、信矣而不期。其寢不夢、其覺無憂。其神純粹、其魂不罷、虛無恬惔、乃合天德。

訓讀 故に曰く、聖人の生や天行、其の死や物化。靜にして陰と德を同じうし、動いて陽と波を同じうす。福

夫恬惔寂漠、虛無無爲、此天地之平、而道德之質也。故曰、聖人休。休焉則平易矣、平易則恬惔矣。平易恬惔則憂患不能入、邪氣不能襲。故其德全而神不虧。

訓讀 若し夫れ刻意せずして高く、仁義なくして修め、功名なくして治まり、江海なくして閒に、道引せずして壽ならば、忘れざる無きなり、有らざる無きなり。澹然として極無く、而して衆美之に從ふ。此れ天地の道、聖人の德なり。故に曰く、夫れ恬惔寂漠、虛無無爲は、此れ天地の平にして道德の質なりと。故に曰く、聖人は休すと。休すれば則ち平易、平易なれば則ち恬惔、平易恬惔なれば、則ち憂患入ること能はず、邪氣襲ふこと能はず。故に其の德全くして神虧けず。

大意 上に俗人の德を擧ぐるを承けて、此に聖人の德恬淡にして自然なるを述ぶ。

通釋 上に述べた五種の人々の所作とは全く違つて、心を鋭くせずして自ら高尙であり、仁義の行なくして自ら身修まり、功名なくして自ら天下治まり、江海に逃るゝことなくして自ら長閑であり、道引せずして自ら長命であるならば、萬物を忘れ、萬物自ら我に歸し、心は虛にして無窮に應じ、衆美自ら集る。此れこそ天地の道にして聖人の德である。故に古語にも「恬淡寂漠、虛無無爲は天地の定理にして道德の本質である」とあり、

の泰平を致さんことを願ひ、遊歴家居して、人を教誨する學者先生の好む所である。それから大功大名を立て、君臣上下の禮を正し、天下を善く治めるのに專らなのは、かの朝廷に仕へ、主君を尊くし、國家を強くし大功を立て敵國を併合する政治家の好む所である。それから又田舍に住み閒散な地位に居り、靜かな處で魚を釣りなどして何も爲すことなく呑氣なことのみをして居るのは、かの江海に遊び世を避け閑暇無事な人の好む所である。又深呼吸の法を行ひて、新鮮な空氣を吸ひ濁つた空氣を吐き出し、熊が木に上りて氣を吸ふが如く、鳥が頸を伸ばして鳴くが如き恰好をして强健法を行ひ、長生することのみに專念するのは、かの新鮮な氣を吸入して身體を養ひ彭祖のやうな長命を保つ者の好む所である。

語釋 刻意（釋文に「司馬云ふ、刻は削なり、其の意を峻にするなりと。」）　○怨誹（釋文に「李云ふ、世の無道を非り、己の不遇を怨むと。」）　○爲レ亢（釋文に「李云ふ、高きを亢と曰ふと。」偉（えら）がる、尊大ぶる。）　○枯槁赴レ淵者（楚の屈原の如き人なり。其の漁父の辭に、屈原既放、游二於江潭一、行二吟澤畔一、顔色憔悴、形容枯槁とあり。）　○推讓（人を推尊し自ら謙遜すること。）　○平世之士（世の泰平を望む人なり。或は平和の世の人と解す。是ならず。）　○吹呴呼吸、吐レ故納レ新（呴は前篇に魚相呴以レ濕とあり呴は吐の意なり、然れどもこゝは吹に對して用ふ、吸の意。成疏に「冷呼を吹きて故を吐き、暖吸を呴いて新を納ろ」とあり。自強術、健體術等に於ける深呼吸なり。）　○熊經鳥申（自強術などに於てする姿勢。釋文に「司馬云ふ、熊の樹に攀じて氣を引くが若く、鳥の嚬呻するが若しと」とあり。成疏は「熊の樹に攀じて自ら經す（ぶらさがる）るが如く、鳥、空を飛びて脚を伸すに類す。」）　○道引（道は導なり、成疏に「神氣を導引す」とあり。）　○彭祖壽考（彭祖は逍遙遊に出づ、考は壽なり。）

若夫不レ刻レ意而高、無二仁義一而修、無二功名一而治、無二江海一而閒、不二道引一而壽、無レ不レ忘也、無レ不レ有也。澹然無レ極而衆美從レ之。此天地之道、聖人之德也。故曰、

處、無爲而已矣。此江海之士、避世之人、閒暇者之所好也。吹呴呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣。此道引之士、養形之人、彭祖壽考者之所好也。

訓讀 意を刻し行を尙くし、世を離れ俗に異にし、高論怨誹、亢を爲すのみ。此れ山谷の士、世を非るの人、枯槁して淵に赴くものの好む所なり。仁義忠信を語り、恭儉推讓、修を爲すのみ。此れ平世の士、教誨の人、遊居する學者の好む所なり。大功を語り、大名を立て、君臣を禮し、上下を正し、治を爲すのみ。此れ朝廷の士、主を尊くし國を彊くするの人、功を致し幷兼するものの好む所なり。藪澤に就き、閒曠に處り、魚を閒處に釣り、無爲なるのみ。此れ江海の士、世を避くるの人、閒暇なるものの好む所なり。吹呴呼吸、故を吐き、新を納れ、熊經鳥申、壽を爲すのみ。此れ道引の士、形を養ふの人、彭祖壽考なるものの好む所なり。

大意 先づ五種の人々の所作をあげ、聖人養神の道を說く下準備となす。

通釋 心を尖銳くし、行を高尙にし、世間から離れ、人と違つた行をなし、高尙な議論をなし、世を怨み俗を誹り、己れ獨り偉さうにして居るばかりなのが、あの山谷に隱れ世間を非り形容枯槁して淵に投じて身を淸くする連中の好む所である。それから口を開けば仁義忠信を談じ、恭儉推讓、己を修めるのに心を專らにするのが、あ

外篇刻意第十五

叙説 此の篇、先づ五等の士を列擧して文を起し、純素の眞人に歸結す。恬淡寂寞虚無無爲は養神の道、之を體するを眞人と謂ふと説く。宣穎曰く、恬淡寂寞虚無無爲は是れ聖功の要領にして、養神の二字は則ち其の主張なり。精を貴び、純素を體すとは止だ是れ養神二字の換面なりと。林西仲曰く、此の篇、精神の理を發揮して微言玄著す。但其の行文の蹊經を細玩すれば、天道篇と一手に出づるが如し。此れは則ちほゞ波瀾少なきのみ。或は膚淺を以て其の僞作ならんことを疑ふ。此れ明眼者の言なりと。

刻意尚行、離世異俗、高論怨誹、爲亢而已矣。此山谷之士、非世之人、枯槁赴淵者之所好也。語仁義忠信、恭儉推讓、爲修而已矣。此平世之士、敎誨之人、遊居學者之所好也。語大功、立大名、禮君臣、正上下、爲治而已矣。此朝廷之士、尊主彊國之人、致功幷兼者之所好也。就藪澤、處閒曠、釣魚閒

形があつて自然に定まつた性命は變易することは出來ぬ、又時は自然に移りて止めることは出來ぬし、道は自然に流動して壅ぐことは出來ぬ。苟も自然の道を體得すれば行くとして不可なるなく、道を失へば行くとして可なるはない、要は自然の道を得るに在るのだ。」孔子は老子の教を聞きてから、三ヶ月も外出しないで思索に耽り再び老子に見えて曰ふには「私は遂に道を會得しました。あの烏鵲は交尾して子を生み、魚は沫を以て濕ほし合つて子を生み、蜂類は桑蟲を取り之を化して子となし、人間は弟を孕むと乳が出なくなつて兄が啼くと云ふ有樣である。此れ等は皆自然にして然るのであつて、人爲を以て律すべきでない。私は久しい間、造化と友とならないが、造化と友とならずして人を化することはトテモ出來ぬ、私が七十二君を說き廻つても一君も用ひて吳れなかつたのは、道を體得して居なかつたのに由る、今にしてそれが分つた。」老子が曰ふには「それでよろしい、確かに道の會得が出來た。目出度し〳〵。」

語釋　孰二知其故一(孰、一に熟に作る、同じ。故は事なり。)　○奸者七十二君(奸は干なり、求なり。七十二は數の多きをあらはす常語、實數に非ず。)　○鉤用(鉤は取なり、採用の意。)　○幸矣子之不レ遇二治世之君一也(陳壽昌曰く、言ふ心は之に遇はゞ必ず彼に笑はれんと。)　○白鶂之相視、眸子不レ運而風化云云(又曰く、鶂は水鳥なり。眸子不レ運とは睛を定めて注視するなりと。郭注に「鶂は眸子を以て相視、蟲は鳴聲を以て相應じ、倶に合を待たずして便ち子を生む、故に風化と曰ふ。」)　○類自爲二雌雄一故風化(類は釋文に引く山海經によれば獸の名。或は云ふ、同類なりと。今釋文に從ふ。)　○烏鵲孺(口義に「孺は交尾なり。」)　○魚傅レ沫(又「相濡ほすに沫を以てして子を生むなり。」)　○細要者化(要は腰なり、細要とは蜂の類。成疏に「蜂は桑虫を取り祝して已の子と爲す」と。)　○有レ弟而兄啼(口義に「兄弟同母なれば必ず乳絕へて後に生ず、兄乳を得ずして後に弟あり。此の句下し得て尤も奇絕なり。」)　○與レ化爲レ人(人は友なり、既に上篇に見ゆ、)

に履ならんや。夫れ白鶂の相視る、眸子動かずして風化し、蟲は雄上風に鳴き、雌下風に應じて風化し、類は自ら雌雄を爲すが故に風化す。性は易ふべからず、命は變ずべからず、時は止むべからず、道は壅ぐべからず。苟くも道を得れば自りて不可なる無く、焉を失ふものは、自りて可なる無しと。孔子出でざること三月。復た見えて曰く、丘之を得たり。烏鵲は孺し、魚は沫を傅け、細要のものは化し、弟有つて兄啼く。久しいかな、丘の、化と人たらざることや、化と人たらずんば、安んぞ能く人を化せん。老子曰く、可なり、丘之を得たりと。

大意 人を導くには仁義道德では駄目である、自然の道を會得することを要すとなり。

通釋 孔子が又或る時老子に向つて曰ふには「私は詩書禮樂易春秋の六經を治め、自分では久しい間研究したから、書中に述べてある事柄は能く心得て居ると考へ、そこで澤山の諸侯に用ひられんことを求め、先王の道を論じ、周公召公の事蹟を明かにしたが、一君として私の說を採用するものがなかつた。人に敎を說いたり、道を明かにすることは、實に困難なものであることをツク〴〵知りました。」老子が曰ふには「貴方が世の諸侯連に用ひられなかつたのは寧ろ幸福であつた。一體六經は先王の殘した古くさき迹形であつて、之を實踐した先王の眞性其のものではない。今、貴方の言ふ所もヤハリ人の足跡の如きものに過ぎない。一體足迹と云ふものは履によつて出來るものであつて、迹は決して履そのものではない。あの白鶂といふ鳥の雌雄は眸子を動かさないで互に見つめると交接を待たずして靈感によつて子を生み、蟲類は又雄が風上で鳴き、雌が風下で之に應じて鳴けば其の氣相感じて子を生み、更に又類と云ふ獸は一身に兩性を具へて居るから、獨りで子を生むのである。かく物が生れるには種々の

難說也、道之難明邪。老子曰、幸矣、子之不遇治世之君也。夫六經、先王之陳迹也、豈其所以迹哉。今子之所言、猶迹也。夫迹、履之所出、而迹豈履哉。夫白鶂之相視、眸子不運而風化、蟲雄鳴於上風、雌應於下風而風化、類自爲雌雄、故風化。性不可易、命不可變、時不可止、道不可壅。苟得於道、無自而不可、失焉者、無自而可。孔子不出三月。復見曰、丘得之矣。烏鵲孺、魚傅沫、細要者化、有弟而兄啼。久矣夫、丘不與化爲人。不與化爲人、安能化人。老子曰、可、丘得之矣。

訓讀　孔子老聃に謂つて曰く、丘、詩書禮樂易春秋の六經を治む。自ら以爲らく、久し、其の故を熟知すと。以て奸むるもの七十二君。先王の道を論じて、周召の迹を明にすれども、一君だも鉤用する所無し。甚しいかな、人の說き難くして、道の明にし難きやと。老子曰く、幸なり、子の治世の君に遇はざるや。夫れ六經は先王の陳迹なり、豈に其れ迹とする所以ならんや。今子の言ふ所は、猶は迹のごときなり。夫れ迹は履の出す所、而も迹は豈

様であるに彼等は自ら聖人だなどゝ自惚れて居るのは恥かしいことぢやないか、彼等は之を恥かしいとは思はぬのか、實にアキれ果てた連中だ。」この話を聞いて子貢は大に驚き、落着いて立つて居ることが出來ぬ程であつた。

語釋 黄帝之治二天下一、使二民心一一云云（胡方の辯正によると、黄帝の世には民は渾沌として知識なく、其の心純一であつた、親疎を知らざるが故に其の親死するも哭せず、善惡を知らざるが故に民之を非らなかつた。之が至治の世で、三皇の時代は然うであつたが堯以下になつて之が亂された。卽ち堯以下の記事は黄帝に如かざることを言つたので、黄帝を以て五帝と並稱してはならぬ。此の說必ずしも非ではないが然し三皇五帝を併せ排するのが此の章の論旨であるから獨り黄帝の世を至治の世となすことは出來ぬ。成疏に「三皇、道を行ひ、人心淳一、獨り其の親のみを親とせず、獨り其の子のみを子とせず。故に親死して哭せざるも世俗非しらず。」至治の世に近いが、旣に有爲の跡がある。）○殺二其殺一（兩の殺字、音サイ、降なり。親疎に從つて喪服に差等をつけること。）○不レ至二乎孩一而始誰（孩は笑なり。郭注に「誰とは人を別つ意なり。未だ孩はざるに已に人を擇ぶ。」成疏にも「未だ孩笑を解せざるに已に是非を識る、分別の心、此より始まる」と。）○孕婦十月生レ子云云（成疏によれば、孕は懷孕の婦、十四ケ月にして誕す、生子を育すること兩歳にしてはじめて能く言ふと。此の說の據る所を知らずと雖も姑く之に從ふ。）○人有レ心而兵有レ順、殺レ盜非レ殺（人に私心變詐多く、兵殺を用ひざれば治まらざるに至る、故に兵はもと凶器用ふべからずと雖も逆に加ふるが故に順なりと爲し、殺はもとより道に反すと雖も盜に加ふるが故に殺に非ずと認むるに至れり。澆季の世相を寫したのである。）○人自爲レ種而天下耳（副墨に「各〻其の私を私として互に相警備す、而して天下皆然り。」種をなすとは自他の類別をなすこと。而字を於字の誤となして解する說あるも取らず。）○其作レ始有レ倫、而今乎婦レ女、何言哉（副墨に「機警の心、家室に起りて男女に施す。早く婚し少くして娶り、人道の常に循はず。夫婦は人の大始、古人始を作すや、自ら倫序あり。三十にして娶り、二十にして嫁す、幼稚の女、本より責むるに人道を以てすべからず。而るに今や然らず、機警の心、倫薄の俗、言はずして知るべきなり。」郭嵩燾に異說あり「諸子（百家）の興る、其の言皆倫要あり、而るに終に相與に諸好をなして以て人を悅ばす。」卽ち此の二句を上句に係け、儒墨等の說をなすや始めは皆倫理あれども、今や婦女の如く人を悅ばさんことを求むとなり。一說なり。）○憯二於蠣蠆之尾一（憯は毒なり、蠣蠆皆蠍の異名、サソリ。尾端に毒あり。）○鮮規之獸（釋文に「一に云ふ、小蟲なり、一に云ふ、小獸なり。」成疏には鮮規は小なる貌とあり。）○蹵々（成疏に驚悚の貌とあり。旣にしばしば出づ。）

孔子謂二老聃一曰、丘治二詩書禮樂易春秋六經一。自以爲久矣、孰知二其故一矣。以奸者七十二君。論二先王之道一而明二周召之迹一、一君無レ所二鉤用一。甚矣夫、人之

死して哭しない所に既に有爲の跡が現れて居る。次ぎに堯の政治を見るに、民に德化を施して民心をして互に親ましめたので、民に親疎の別を設ける感念が生じ、喪服の定めなどを立てゝ、其の親の喪を隆にする爲めに血緣の疎なるに從つて喪服を降殺すると云ふことになつたが、世間でも之を當然のことゝして非らなかつた。更に舜が天下を治むるや、民心をして競爭を爲さしめたから、人智が漸く進み、人自から早熟となり、古は孕むこと十四ケ月にして子を產み、子生れて二歲にして言ふと傳ふるに、今や十ケ月にして產み、生れて五ケ月にして能く言ひ、まだ善く笑はない中から誰れ彼れの見分けをするやうになり、餘りに心智を勞することがはげしくなつて、此の時分から始めて夭死をするものが出來た。更に又禹が天下を治むるや、民心をして自然のまゝに任せ置かず、矯正變易せしめたから、人に私心を生じ、兵を用ひて惡人を討伐しても之を天理に順つた行だと認められ、法を設けて盜人を殺しても殺したことにならぬと云ふことになつた。そうして人々各々自他の區別を立てゝ爭ひ、而も天下を擧げて斯くの如くなつたのである。かくて天下は大騷ぎとなり、儒墨の徒並び起り、是非の論を之れ事とすることになつた。古人が夫婦の道を定むるに、もとより倫序があつた、然るに今や其の道が亂れて少女を婦とするやうな淺間しいことが起つた。一事が萬事で、自然の道を害すること此くの如く、誠に情けないことではないか。余は更に汝に語らう、三皇五帝が天下を治めたのは、表向きは治めたことになつて居るが、實は天下を亂すことこれ程深刻なことはない。彼等の知は徒に作爲を弄して自然に從はず、上は日月の明を亂し、下は山川の精にそむき、中は四時の順をやぶり、其の害毒は蠣蠆の尾よりも激しく、小なる獸さへも、其の自然の情を保ち得るものがない。か樣な有

無恥也、子貢蹵蹵然立不安。

【訓讀】老聃曰く、小子少しく進め、余女に三王五帝の天下を治むるを語らん。黄帝の天下を治むるや、民心をして一ならしむ。民其の親死して哭せざる有るも、民非らざるなり。堯の天下を治むるや、民心をして親しましむ。民其の親の爲めに其の殺を殺すること有るも、民非らざるなり。舜の天下を治むるや、民心をして競はしむ。民の孕婦十月にして子を生み、子生れて五月にして能く言ひ、孩に至らずして始めて誰す、則ち人始めて夭有り。禹の天下を治むるや、民心をして變ぜしむ。人に心有つて、兵に順有り、盜を殺すは殺に非ず。人自ら種を爲して、天下のみ。是を以て天下大に駭き、儒墨皆起る。其の始めを作すこと倫有つて、今や女を婦とす、何をか言はんや。余女に語らん、三皇五帝の天下を治むる、名は之を治むと曰ふも、亂、焉より甚しきは莫し。三皇の知、上は日月の明を悖り、下は山川の精に睽き、中は四時の施を墮る。其の知は蠣蠆の尾よりも憯にして、鮮規の獸も、其の性命の情を安んずるを得るもの莫し、而も猶ほ自ら以て聖人と爲す。恥づべからずや、其れ恥づる無きやと。子貢蹵蹵然として立つて安んぜず。

【通釋】老子が曰ふには「若者よ、今少しく近寄れ。これから汝に三皇五帝が天下を治められたことに就いて話して見やう。さて黄帝の治は天下の民心を無爲自然のまゝに任せず、作爲によつて之を淳一に歸せしめたから民は皆親疏善惡の別を設けず、從つて其の親が死んで哭しないものがあつても之を非らなかつた。これは無爲に近いが親

○三王（王、一に皇に作る、下亦皇に作る同じ。伏犧。鼎曰く、既に堂に居すと曰ひ、又我を戒むと曰ふ。何んぞ前きに倨にして後に恭なるやと。老子の禮に拘らざる樣を寫せるか。林西仲は此の描寫を誹りて、此の言或は謙たるか、或は僞たるか、眞に謂はれなきに屬すと曰ふ。）

○其係二聲名一（成疏に令聞相係るは一なりと。係とは辯正に取りて以て己に歸すること身に結係するが如きなりとあり。つまり聖賢と云ふ聲名を身に受くる意なり。）神農、黃帝）を謂ふ。

老聃曰、小子少進、余語女三王五帝之治天下。黃帝之治天下、使民心一。民有其親死不哭、而民不非也。堯之治天下、使民心親。民有爲其親殺其殺、而民不非也。舜之治天下、使民心競。民孕婦十月生子、子生五月而能言、不至乎孩而始誰、則人始有夭矣。禹之治天下、使民心變。人有心而兵有順、殺盜非殺。人自爲種而天下耳。是以天下大駭、儒墨皆起。其作始有倫、而今乎婦女、何言哉。余語女、三皇五帝之治天下、名曰治之、而亂莫甚焉。三皇之知、上悖日月之明、下睽山川之精、中墮四時之施。其知憯於蠣蠆之尾、鮮規之獸、莫得安其性命之情者、而猶自以爲聖人。不可恥乎。其

て同じからずと謂ふと。對へて曰く、堯は舜に授け、舜は禹に授け、禹は力を用ひて、湯は兵を用ふ。文王は紂に順つて敢へて逆はず、武王は紂に逆つて肯へて順はず。故に同じからずと曰ふ。

【通釋】かくと聞いて孔子の弟子の中でも有數な子貢が曰ふには「然うして見ますると、人の中にもカタシロの如く靜かに居て動かざるも、時には龍の如く活動的であり、雷の如き大聲を發するが、時には深淵の如く沈默を守り、一たび發動する時は天地の如き偉大なる働きをなす者があるのですか。私もかくの如き老子の風采を是非觀たいものであります。」かくて子貢は遂に孔子のお聲がかりで（紹介）老子に面會して來意を告げた。老子は其の時丁度堂上で箕踞して居り、微な聲で應へて曰ふには「俺もはや年を取つて仕舞つて、若い人などの話相手にはなれぬが、汝は何を話しにやつて來たのだ。」子貢が曰ふには「元來三王五帝が天下を治めた方法は一樣ではないが、其の聖君明王と云ふ名聲を博した點は同じであります。然るに先生に於かれては之を聖人でないと申して居られるのは一體どう云ふ譯なんですか。」老子が曰ふには「若者よ、モット近寄れ。汝は何う云ふ理由で三王五帝の治が一樣でないと謂ふのか。」子貢が對へて曰ふには「堯は天下を舜に授け、舜は之を禹に授け、共に無爲にして天下を治めたが、禹になると力を用ひて之を治め、湯は兵力を用ひて天下を有ち、文王は紂に順つて敢へて逆はなかつたが、武王になると之に逆つて遂に滅ぼして仕舞つた。斯樣に天下の治め方が各〻違つて居るから同じからずと申し上げたのであります。」

【語釋】尸居而龍見云云（既に在宥篇に出づ、參照。）○以二孔子聲一（孔子の紹介でとの意。口義には「夫子の門人と稱して脩謁するなり」とあり。）○倨レ堂云云（倨は踞に同じ、しりうたげすと訓ず。秦

子）今日見二老子一ハ、其猶レ龍邪とあり。或は此の章、史記に依る後人の所作か。）○不レ能レ嗋（嗋は合なり。）

子貢曰、然則人固有下尸居而龍見、雷聲而淵默、發動如二天地一者上乎。賜亦可二得而觀一乎。遂以二孔子聲一見二老聃一。老聃方將倨レ堂而應微曰、予年運而往矣。子將何以戒レ我乎。子貢曰、夫三王五帝之治二天下一不レ同、其係二聲名一一也。而先生獨以爲レ非二聖人一、如何哉。老聃曰、小子少進、子何以謂レ不レ同。對曰、堯授レ舜、舜授レ禹、禹用レ力而湯用レ兵。文王順レ紂而不二敢逆一、武王逆レ紂而不レ肯レ順。故曰レ不レ同。

訓讀　子貢曰く、然らば則ち人固より尸居して龍見し、雷聲して淵默し、發動天地の如き者あるか。賜亦得て觀るべきかと。遂に孔子の聲を以て老聃を見る。老聃方將に堂に倨して應ずること微にして曰く、予年運りて往けり。子將に何を以て我を戒めんとするかと。子貢曰く、夫れ三王五帝の天下を治むるは、同じからざれど、其の聲名を係くるは一なり。而るに先生獨り以て聖人に非ずと爲すは如何ぞやと。老聃曰く、小子少しく進め、子何を以

而不レ能レ嗋レ予又何規二老聃一哉。

訓讀 孔子老聃を見て歸り、三日談せず。弟子問うて曰く、夫子老聃を見る、亦た何を將て規せしやと。孔子曰く、吾れ乃今、是に於てか龍を見たり。龍は合して體を成し、散じて章を成し、雲氣に乘じて陰陽に養はる。予口張つて嗋ふこと能はず。予又何ぞ老聃を規さんやと。

大意 上章に於て孔子の仁義の教を駁す。此の章に於ては更に溯つて孔子の祖述せる三王五帝を誹る。林西仲曰く、此の段、細閲するに甚だ意味なし。且つ旨、背馳多く、詞、膚淺多し、魚目、珠を混ず、何ぞ指摘を待つて而る後見はれんやと。

通釋 孔子が老子に會つて歸つたが、既に三日にもなるが、何も話さなかつたので、弟子達が尋ねて曰ふには「先生は此の度老子にお會ひになつたが、一體何事をお戒めになりましたか。」孔子が曰ふには「俺は始めて此の度龍に比すべきやうな大人物を見たよ。一體龍と云ふものは自然の氣が合して體を成し、其の氣が散じて粲然たる模樣を成すもので、雲氣に乘じて遊び、陰陽二氣に養はれて居るものである。之と同じことで實に老子と云ふ人物は變幻自在、容易に把捉することの出來ない大人格を所有し、自然に順ひ天地の道を樂む所の大人物である。俺は老子に會つて開いた口が合はぬ程驚いてしまつたから、彼を戒めるなどとは思ひも寄らぬことだ。」

語釋 亦將レ何規哉（孔子よく人を規諫す、故に亦と云ふなり。將は以なり。規は諫なり、正なり。）○乃今於レ是乎見レ龍（乃今於レ是乎とは驚きの口吻なり。龍とは老子を喩へたのである。史記老子列傳に吾(孔

げた件を搜すやうな眞似をする必要はない。元來白鳥は日々沐浴しなくとも眞白であり、烏は每日黑く染めなくとも眞黑である。されば黑は自から黑、白は自から白、各々それは自然の素質であつて、優劣を以て辨別するに足らぬ。從つて仁義は名譽であると云ふやうな觀方は白鳥の白いのが優つて居ると云ふのと同じことで、決して廣い見解となすに足らぬ。泉の水が涸れて魚がともぐ\に陸上に橫たはつた時、互に助け合はんとして口から少しばかりの濕氣や水沫を吹き出して濕し合つても何の役にも立たぬ。それよりも大きな河や廣い湖の中で我と水と一つになつて自在に泳ぎ廻るに越したことはない。卽ち區々たる仁義にかゝはらないで無爲自然の大道に順つて悠遊自適するに越したことはない。」

語釋　眯レ目（眯は物が目にはいること。）　○通昔（郭慶藩曰く「昔は猶ほ夕の如し、通昔は猶ほ通宵の如きなり。」）　○憯然（宣注に云ふ、憯は慘に同じと。サンぐ\。）　（憒二吾心一（憒は興憒。口義には吾が心に逆ふなりと解す、一說なり。）　○放レ風而動（釋文に司馬云ふ、「放は依なり、無爲の風に依りて動くなり。」と）　○總レ德而立（總は執なり、天性を守りて行くなり。立字別に意義なし、上に動と云ふ、故に立と云ふのみ。）　○傑然若下負二建鼓一而求二亡子一者上（口義に傑然は自ら高ぶる貌とあり。天道篇には偈々乎揭二仁義一、若三擊レ鼓而求二亡子一とあり、偈々は力を用ふる貌。參照。建鼓の建、意明かならず、口義に王、路鼓を寢門に建つ、建鼓は建つる所の鼓を云ふなりと。大鼓の大なるものか。）　○泉涸云云（既に大宗師篇に見ゆ、參照。）

孔子見二老聃一歸、三日不レ談。弟子問曰、夫子見二老聃一、亦將レ何規哉。孔子曰、吾乃今於レ是乎見レ龍。龍合而成レ體、散而成レ章、乘二乎雲氣一而養二乎陰陽一。予口張

爲廣。泉涸魚相與處於陸、相呴以濕、相濡以沫、不若相忘於江湖。

訓讀 孔子老聃に見えて仁義を語る。老聃曰く、夫れ糠を播いて目を眯すれば、則ち天地四方位を易ふ。蚊虻膚を噆めば、則ち通昔寐られず。夫れ仁義は憯然として乃ち吾が心を憒す。亂焉より大なるは莫し。吾子天下をして其の朴を失ふこと無からしめよ。吾子亦た風に放りて動き、徳を總べて立て。又奚ぞ傑然として建鼓を負うて亡子を求むる者の若くならんや。夫れ鵠は日〻に浴せざれど白く、烏は日〻に黔めざれども黑し。黑白の朴は、以て辯を爲すに足らず、名譽の觀は、以て廣と爲すに足らず。泉涸れて魚相與に陸に處る、相呴するに濕を以てし、相濡するに沫を以てするは、江湖に相忘るゝに若かずと。

大意 孔子の仁義の教を誹る。天道、大宗師二篇の數句を點綴して僅かに章を爲す。もとより莊叟が手筆に非ず。或は以て下章と連ねて同章となすも是に非ず。

通釋 孔子が或る時老聃に會つて仁義を語つた。老子が曰ふには「今、粉糠を振り播いて目をくらます時は、上下四方何れが何れだか方角が分らぬやうになる。又蚊や虻が肌をさすと一晩中寢られぬことがある。是れ等は一時心を亂すに過ぎないが、彼の仁義はサン〴〵吾々を興憤させ、吾々の心を此の上もなく掻き擾すものである。されば足下は仁義などを說いて天下の人々をして其の淳朴の質を失はしめないやうになさるがよい。足下自らも彼の無爲の風に依りて動き、自然の持前を執り守りて行くがよろしい。何も自ら高ぶつて大太鼓を負うて叩きながら、亡

れ、之を失ふときは悲しみ痛みて、少しも反省することなく、人の居る可からざる地たる富貴顯名などを窺ふものは是れ天の刑戮を受けた民であつて、彼の釆眞の至人とは天地の差がある。怨に報い、恩を復し、取るべきは取り、與ふべきは與へ、君を諫め、人を敎へ、生かすべきは生かし、殺すべきは殺す。此の八つの者は人を正す手段である。手段であるから之を用ふる人によつて利ともなり害ともなる。たゞ造化の自然に順つて、外物の爲めに心の塞がらない人にして之を活用することが出來る。故に古語にも人を正す者は己れ自ら正しいと曰つてある。然るに此の言を然らずと爲す者は其の心塞がり、大道に入る門が開けないで道を悟ることは出來ぬ。」

語釋　闚其所不休者（闚は窺なり、休せざる所とは人の休息安居すべからざる所にて、上に謂ふ所の逍遙之虚の反對なり。）　○唯循大變無所湮者（口義に「大變に循ふとは造化に順ふなり」とある是なり。湮は塞なり、外物の爲めに心の働きが蔽塞せらるゝこと。）　○其心以爲不然者（[illegible]谷曰く「此の言を以て然らずと爲す若き者は、其の心昏蔽、之を如何ともするなし。」）　○天門（釋文に「一に云ふ、心を謂ふなり。一に云ふ、大道なり」とあり。今後說に從ふ。）

孔子見老聃而語仁義。老聃曰、夫播糠眯目、則天地四方易位矣。蚊虻噆膚、則通昔不寐矣。夫仁義憯然乃憤吾心、亂莫大焉。吾子使天下無失其朴。吾子亦放風而動、總德而立矣。又奚傑然若負建鼓而求亡子者邪。夫鵠不日浴而白、烏不日黔而黑。黑白之朴、不足以爲辯、名譽之觀、不足以

以富爲是者、不能讓祿。以顯爲是者、不能讓名。親權者、不能與人柄。操之則慄、舍之則悲、而一無所鑒以闚其所不休者、是天之戮民也。怨恩取與、諫敎生殺、八者、正之器也。惟循大變無所湮者、爲能用之。故曰、正者正也。其心以爲不然者、天門弗開矣。

訓讀 富を以て是と爲すものは、祿を讓ること能はず。顯を以て是と爲すものは、名を讓ること能はず。權に親しむものは、人に柄を與ふること能はず。之を操れば則ち慄れ、之を舍つれば則ち悲しんで、一も鑒みる所なくして、以て其の休まざる所を闚ふものは、是れ天の戮民なり。怨恩取與、諫敎生殺、八つのものは正すの器なり。惟れ大變に循つて湮がる所無きものにして、能く之を用ふることを爲す。故に曰く、正すものは正しきなりと。其の心以て然らずと爲すものは、天門開けずと。

大意 名利に執はれた天の戮民は到底道に入ることは出來ぬ。

通釋 上に述べたのとは異なつて、今、富を以て是と思ふ者は、人に祿利を讓ることは出來ず、顯榮を以て是と考ふる者は、人に名譽を讓ることは出來ず、權勢を愛着する者は、人に權力を讓り渡すことは出來ぬ。全く名は公器であつて多く取つてはならぬと云ふことに氣が付かず、一度是等の富顯權を獲たならば、之を失はんことを怖

訓讀　名は公器なり、多く取るべからず。仁義は先王の蘧廬なり、止だ以て一宿すべくして、久しく處るべからず、覯て責多し。古の至人は道を仁に假り、宿を義に託し、以て逍遙の虛に遊び、苟簡の田に食ひ、不貸の圃に立つ。逍遙は無爲なり、苟簡は養ひ易きなり、不貸は出だすこと無きなり。古は是を采眞の遊と謂ふ。

大意　仁義に執着してはならぬ、古人の如く之を以て假りの道、假りの宿と達觀して始めて道を得ることが出來る。

通釋　かく道は容易に得がたいから名譽にあこがれ、仁義に拘はれて居るやうなことではトテモ駄目である。元來名譽といふものは天下の公共物であるから獨りで多く取つてはならぬし、又仁義と云ふものは先王の假の宿であるから、たゞ一泊する位はよいが、長く滯在して居ると、人から目を付けられて責を受けることが多い。故に古の至人は仁を以て假りの道となし、義を以て假りの宿となし、逍遙の境に悠遊し、苟簡の田に食み、不貸の圃に立つて居るのである。逍遙とは無爲無作の意、苟簡とは生を養ひ易きこと、不貸とは他に施與せぬと云ふ意味である。かくの如き境界をば古に在りては眞理把握の淸遊と謂ふのである。

語釋　名公器也、不レ可二多取一（口義に「此れは儒者の名を好むを譏るなり。」）　○覯而多レ責（樊谷曰く「名を好み、及び仁義を務むる者は、必ず衆に表見し、咎責を來し易し。」）　○蘧廬（郭注に「傳舍なり。」假りの宿。）　○遊二逍遙之虛一（遊下に於の字を脱す。虛一に墟に作る、同じ。逍遙は下文によれば無爲なり。成疏に「自得の場に逍遙し、無爲の境に彷徨す」とあり。）　食二於苟簡之田一、立二於不貸之圃一（苟簡は苟且簡略なり、卽ち恬淡の意。不貸は郭注に「己を損じて以て物の爲めにせざるなり。」以上三句は至人無欲恬淡の境界を述べたので、田と云ひ圃と云ふは別に意義あるのでない。）　○采眞之遊（眞實無假の大道を會得して悠遊自適する意。）

授するであらう。處がなかく然うは參らぬのは外でもない、元來道と云ふものは、道を受ける者が其の中心に素質を缺いて居たならば、道を聞いても心に殘らない、又人に就いて正す所の努力を缺いたならば、道を聞いても實行するまでには行かない。されば聖人は教を受けて之に就いて正すやうな努力家でないならば教を出し示さない、又教を受ける者に中心の素質がなかつたならば、聖人は強いて道を推し納れるやうなことはしない。か樣なわけであるから道は容易に得られるものでない。

語釋 五十有一而不レ聞レ道（孔子五十にして天命を知る。然るに今反つて道を聞かずと云ふは亦寓言空語なるを示す所以である。） ○南之レ沛（釋文に「司馬云ふ、老子は陳國相の人なり、相は今、苦縣に屬す、沛と相近しと。」） ○度數（口義には禮樂なりとあり。因には制度名數なりとあり。前章の禮義法度を謂ふ。） ○五年、十二年（口義に「初めより義理なし、たゞ精粗に之を求むること久しうして未だ得ざるを曰ふのみ」と。） ○中無レ主而不レ止（郭注に「心中に道を受くるの質なき時は道を聞くと雖も過ぎ去るなり。」） ○外無レ正而不レ行（因に「外に在りて、就いて正すの功なければ、道を聞くと雖も行ふことを知らざるなり。」） ○由レ中出者、不レ受ニ於外一、聖人不レ出（又云ふ「中より出づる者は聖人の道なり、外に能く受くる者あるに非ざれば出して之を示さゞるなり。此れ教ふる者を言ふ。」此の句、外無レ正而不レ行に應ず。） ○由レ外入者、無レ主ニ於中一、聖人不レ隱（又云ふ「外より入るとは學を假りて性を成す者なり、内に受くる所の資なければ、以て聖道を藏むることなきなり。此れ學ぶ者を云ふ。」呂注に「不レ隱とは推して之を納るゝ能はざるの謂なり」とあり。中無レ主而不レ止以下の數句、解說極めて多し。林西仲多く郭注に從つて說く、余も亦之に從ふ。）

名公器也、不レ可ニ多取一。仁義先王之蘧廬也、止可ニ以一宿一而不レ可ニ以久處一、覯而多レ責。古之至人、假ニ道於仁一、託ニ宿於義一、以遊ニ逍遙之虛一、食ニ於苟簡之田一、立ニ於不貸之圃一。逍遙無爲也、苟簡易レ養也、不貸無レ出也。古者謂ニ是采眞之遊一。

人に告ぐべからしめば、則ち人其の兄弟に告げざる莫からん。道をして以て人に與ふべからしめば、則ち人其の子孫に與へざる莫からん。然り而して不可なるものは他なし。中主なければ止まらず、外正なければ行はれず。中より出づるもの、外に受けざれば聖人出ださず。外より入るもの、中に主なければ、聖人隱れず。

大意　此の章、三節に分けて說く。先づ道を得ることの容易ならぬことを述ぶ。

通釋　孔子行年既に五十一歲、未だ道の奧義を聞かなかつたから、南方沛に行き老子に會つて敎を受けることになつた。老子ははる〴〵孔子が尋ねて來たので、喜んで曰ふには「これは〳〵遠方をよく御出になられた。世間の評判では貴方は北方の賢者であると云ふことだが、定めて道を悟得して居られることであらう。」孔子が曰ふには「なか〳〵、まだ悟れません。」老子曰く「貴方は如何なる方面に向つて道を求められたのか。」孔子曰く「私は始め之を禮義法度の上に於て求めたことが、五年の久しきに及びましたけれども、得ることが出來ませんでした。」老子曰く「それから更に如何なる方面に轉じて求められたか。」孔子曰く「私は更に之を陰陽消長の理法の上に於て研究したことが實に十二年の長年月に及びましたけれども、ヤハリ悟ることが出來ませんでした。か樣な次第でありますから此の度敎を仰ぐべく御訪ねしたのであります。」そこで老子が曰ふには「如何にも左樣な研究の仕方では悟れぬのも尤もである。若し道と云ふものが器物か何かのやうに外から求め得て獻上し得るものならば、臣たる者は其の君に獻上しない者はなからうし、又進呈し得るものならば、子たる者は必ず其の親に進呈するであらうし、又告げて分かるものなら、誰れでも其の兄弟に告げるであらうし、又與へることの出來るものなら、必ず其の子孫に傳

求之於度數、五年而未得也。老子曰、子又惡乎求之哉。曰、吾求之於陰陽。十有二年而未得。老子曰、然。使道而可獻、則人莫不獻之於其君。使道而可進、則人莫不進之於其親。使道而可以告人、則人莫不告其兄弟。使道而可以與人、則人莫不與其子孫。然而不可者、無他也。中無主而不止、外無正而不行。由中出者、不受於外、聖人不出。由外入者、無主於中、聖人不隱。

訓讀　孔子行年五十有一にして道を聞かず。乃ち南のかた沛に之きて、老聃を見る。老聃曰く、子來れるか。吾れ聞く、子は北方の賢者なりと。子亦道を得たるかと。孔子曰く、未だ得ざるなりと。老子曰く、子惡にか之を求めたるやと。曰く、吾れ之を度數に求む、五年にして未だ得ざるなりと。老子曰く、子又惡にか之を求めたるやと。曰く、吾れ之を陰陽に求む、十有二年にして未だ得ずと。老子曰く、然り。道をして獻ずべからしめば、則ち人之を其の君に獻せざる莫からん、道をして進むべからしめば、則ち人之を其の親に進めざる莫からん。道をして以て

由ることを明かす。孔子の遊說、些の功果なく、富人は入りて門を閉ぢ、貧人は之を去つて走る、孤影悄然魯に歸らん哉。此の一喩の中、自ら事實を含む、全文の總收として最も好適のもの。惜乎而夫子其窮哉の一句、亦文首の同句に緊應す、正に千鈞の重あり。宣穎評して曰く、此の段の骨子は、たゞ是れ一の時の字。却つて六樣の譬喩を連用して六層の剝換を作す。層卸層轉、赤城に霞起り、鮫珠盤に落つるが如く、異樣圓滑璀燦の文と爲すと。然れども其の文古香に乏しく、亦莊翁が手筆に非ず、蓋し門流作家の上乘か。

語釋　更に又から云ふ話がある。かの絕世の美女西施が、まだ其の鄕里に居た頃、癪を起して眉を顰めて居たら、一層美しく見へたので、其の村の醜婦どもが之を眞似して各ゝ胸をかゝへ、眉を顰めて西施きどりで歩いた處が、醜い上にも醜さを加へて二目と見られぬ有樣であつたので、其の村の金持は門を閉ぢて出でず、貧人は妻子を引き連れて其の村を去つたと云ふことである。彼れ等、醜婦どもはたゞ西施の面上に於て眉を顰めることの美しいことを知つて、其の美の由つて來る所を知つて居ないのだ。汝の先生も徒に古先聖王の眞似をして居るのは、丁度此の醜婦と異なる所がない。殘念ながら人から嫌はれてヒドイ目に遭ふであらう。」

通釋　矉二其里一(矉は顰、又は嚬に同じ、額を蹙めること。)　○矉之所二以美一(成疏に「所以は猶ほ由る所の如し、嚬の美なる所以は西施の好(みめよき)に出づ、かの醜人はたゞ嚬の麗雅を見として西施の妹好に由るを知らず」と。)

孔子行年五十有一而不レ聞レ道。乃南之レ沛見二老聃一。老聃曰、子來乎。吾聞子北方之賢者也。子亦得レ道乎。孔子曰、未レ得也。老子曰、子惡乎求レ之哉。曰、吾

點に存するのである。故に之を物に譬へて見るならば、丁度相梨橘柚などのやうなものであつて、其の味は互に違つて居るが而も皆人の口に適して居る。して見れば禮義法度と云ふ者は時代の推移に隨つて變通すべきものであつて、決して一道を固守すべきものでない。もう一つ譬をあげて云ふならば、今、あの猿を捕へて來て、周公の服を着せたならば、必ず嚙み切り、引き裂き、盡く捨て去つて始めて滿足するであらう。古今の人情風俗等の相違を觀るに丁度猿と周公との相違程である。

語釋　不レ矜二於同一（矜は尙なり。ホコルなり。又）

故西施病レ心而矉二其里一。其里之醜人見而美レ之、歸亦捧レ心而矉二其里一。其里之富人見レ之、堅閉レ門而不レ出。貧人見レ之、挈二妻子一而去レ之走。彼知レ美レ矉、而不レ知三矉之所二以美一。惜乎而夫子其窮哉。

訓讀　故に西施、心を病んで、其の里に矉すれば、其の里の醜人見て之を美とし、歸つて亦心を捧げて其の里に矉す。其の里の富人之を見、堅く門を閉ぢて出でず。貧人之を見、妻子を挈へて之を去つて走る。彼は矉に美なるを知つて、矉の美なる所以を知らず。惜いかな、而の夫子其れ窮せんかなと。

大意　此の一喩は最も有名である。之を以て、時宜に適せざる道を說く者は表面に拘はりて根本に着眼せざるに

を勞して卒に功を成さず。故に迹を削られ樹を伐られ身殃禍に遭へるなり。夫れ聖人の智、接濟方なく、千轉萬變機に隨ひ物に應ず。未だ此の道を知らず、故に是の禍に嬰（かゝ）るなり。」）

故夫三皇五帝之禮義法度、不矜於同而矜於治。故譬三皇五帝之禮義法度、其猶柤梨橘柚邪。其味相反而皆可於口。故禮義法度者、應時而變者也。今取猨狙而衣以周公之服、彼必齕齧挽裂盡去而後慊。觀古今之異、猶猨狙之異乎周公也。

訓讀　故に夫の三皇五帝の禮義法度は同を矜ばずして治を矜ぶ。故に譬へば三皇五帝の禮義法度は、其れ猶ほ柤梨橘柚のごときか、其の味相反して、皆口に可なり。故に禮義法度は、時に應じて變ずるものなり。今猨狙を取つて、衣するに周公の服を以てせば、彼れ必ず齕齧挽裂して盡く去つて而る後に慊らん。古今の異を觀るに、猶ほ猨狙の周公に異なるがごときなり。

大意　亦二喩を揭ぐ。柤梨橘柚の譬は先王は道は劃一を尊ばず時に應じて變ずべきを明かにす。猨狙の喩は上の意を反棹して、時に順はざれば其の弊必ず破壞毀裂に至るを述ぶ。

通釋　かの三皇五帝の禮義法度の尊い所以は型が同じであると云ふ所に在らずして、能く其の治平を致すと云ふ

今、周を魯に行はんことを蘄むるは、是れ猶ほ舟を陸に推すがごときなり。勞して功なく、身必ず殃有らん。彼は未だ夫の無方の傳ふる、物に應じて窮まらざるを知らざる者なり。且つ子獨り夫の桔槹なるものを見ざるか。之を引けば則ち俯し、之を舍けば則ち仰ぐ。彼は人の引く所、人を引くに非ざるなり。故に俯仰して罪を人に得ず。

大意 二つの譬喩を擧ぐ、舟車の譬は時宜に違ふ者の殃を受くるを述べ、桔槹の喩は時に因つて俯仰する者は咎なきを示す。要は陳迹用ふるに足らず、時に隨つて動くべきを言ふ。

通釋 もう一つ例をあげて話をして見よう、一體水上を行くには舟を用ふるに越したことはなく、陸上を行くには車を用ふるに越したことはない。然るに水行に適した舟を以て、陸を推し行らうとしたならば一生かゝつても一間も行けまい。さて古と今との違は、正に水と陸との違に相當するものであり、周に行はれた道と、魯に行ふべき道との違は、丁度舟と車との違ひ位だ。然るに今汝の先生が周の古制古道を今日の魯の國に行はんことを求むるのは是れ恰も舟を陸で推すと同じことで、勞して功なきのみならず、却つて身に殃を受くるのである。されば彼れ孔子は無限の變轉、能く物に應じ機に隨つて窮りなき變通の道を心得ない者である。更に一例をあげて見るならば、汝はあのハネツルベを見たことがあるであらう。之を引けば下がり、之を放せば上がる、凡て人の引くがまゝに任せて、決して我より人を引くのではない。故に下がるべき時には下がり、上がるべき時には上がつて、能く其の任に堪へ、人から罪を受け、取り毀たるゝことがない。

語釋 沒レ世不レ行二尋常一（沒は盡なり、終なり。八尺を尋と曰ひ、尋を倍するを常と曰ふ。）　○無方之傳云云（成疏に「方は猶ほ常の如く、傳は轉なり。言ふ心は夫子、先王の迹を執り、衰周の世に行ふも、徒らに心力

食ふことが出來ず、一足で死ぬ所であつた。これは正にあの魘はれるのに相當するものではないか。

語釋　師金（釋文に李云ふ「師は魯の太師（音樂長）、金は其の名なり」と。）○芻狗（釋文に李云ふ、芻（くさ）を結んで狗を爲る、巫祝之を用ふ。役おとしなどの祈に用ふるなり。）○篋衍（篋或は筐に作る同じ。衍は釋文に李云ふ、笥なり。何れも竹行李の如きもの。）○巾以文繡（巾は覆なり。郭慶藩は飾字の誤となす。）○蘇者云云（釋文に「李云ふ、蘇は草なり、草を取る者、得て以て炊ぐなりと。」）○眯焉（成疏に、必ず當に數々魘（おそはれること。）に遭ふべしとあり。）○聚弟子（聚一本取に作る、兪樾曰く「取字當に讀んで聚となすべし、聚取古通用」と。）○窮於商周（甕谷曰く「莊生屢〻商周に窮するの言あり、之を商周と謂ふ者、終に解すべからず、林氏以て周の都に商の舊地舊民ありとなす、其の說亦牽強に屬す。且つ夫子の歷聘、未だ嘗て周を過ぎず、然らば此れ亦寓言、必ずしも深く求むべからず」と。迹を衞に削らるゝこと亦傳に見えず。孔子しばしば衞に遊ぶ、其の何れの時なりしや知るべからず。）

夫水行莫如用舟、而陸行莫如用車。以舟之可行於水也、而求推之於陸、則沒世不行尋常。古今非水陸與、周魯非舟車與。今蘄行周於魯、是猶推舟於陸也。勞而無功、身必有殃。彼未知夫無方之傳、應物而不窮者也。且子獨不見夫桔槔者乎。引之則俯、舍之則仰。彼人之所引、非引人也。故俯仰而不得罪於人。

訓讀　夫れ水行は舟を用ふるに如くは莫く、而して陸行は車を用ふるに如くは莫し。舟の水に行くべきを以てして、之を陸に推すを求めば、則ち世を沒するまで尋常をも行かず。古今は水陸に非ずや、周魯は舟車に非ずや。

大意　本章、四節に分けて說く。師金の口に托して、今の學者の言ふ所は古昔の陳言であつて今世に用ふるに足らざることを述ぶ。全章六種の譬喩を設け、一層又一層、輾轉して章旨を明かにす、其の結構、着想正に韓子の先驅を爲すもの。而して此の一節は芻狗の譬を以て、時を過ぐるの陳迹は用ふるに足らざるを明かにす。

通釋　孔子が西の方、衞に遊んだ時、顏淵は師金と云へる人に問うて曰ふには「此の度我が先生は衞に行かれたが其の結果はどんなものでせうか。」師金が答へて曰ふには「殘念だが、汝の先生は恐らく困られることであらう。」顏淵が曰ふには「それは又何うしてです。」師金曰く「あの祭に使ふ草作りの狗がまだ神前にならべられない前は、大切に竹の行李に入れ、美しい錦繡で覆ひ、巫や祝が齋戒して取扱ふのであるが、已に神前にならべて祭が濟んで仕舞ふと、路傍に捨、て顧みられず、通行人は首や脊のかまいなく踐みつけ、草刈りは拾ひ取つて燒き付けとして仕舞ふ。之はヒドイやうだが芻狗にあつては肝心の用が濟んで居るから何んともない。然るに變人があつて再び之を拾ひ上げて竹行李に入れ、錦繡でつゝんで、其の下に遊んで居たり、寢起したりすれば、其の祟を受けて惡い夢を見るか、又はたびく魘はれることであらう。之と同じ話で今、汝の先生も、あの何百年も前に文武周公と云つたやうな先王たちが當時既に陳ね用ひた芻狗とも云ふべき禮義法度を大事さうに拾ひ上げ、多勢弟子を集めて崇め尊び、其の下に寢起して居られる變者である。故に其の祟を蒙つて、宋では樹の影で講義して居ると司馬桓魋と云ふ男に樹を伐り倒されて危い目に遭ひ、衞ではツマハヂキされて足跡まで剷られ、又商周の地ではヒドク困つて仕舞はれた。是れはあの惡夢に比すべきものではないか。又陳蔡の間では野原で圍まれて七日も火の通つたものを

其窮哉。顏淵曰、何也。師金曰、夫芻狗之未陳也、盛以篋衍、巾以文繡、尸祝齊戒以將之。及其已陳也、行者踐其首脊、蘇者取而爨之而已。將復取而盛以篋衍、巾以文繡、遊居寢臥其下、彼不得夢、必且數眯焉。今而夫子亦取先王已陳芻狗、聚弟子遊居寢臥其下。故伐樹於宋、削迹於衞、窮於商周。是非其夢邪。圍於陳蔡之閒、七日不火食、死生相與鄰。是非其眯邪。

訓讀　孔子西のかた衞に遊ぶ。顏淵、師金に問うて曰く、夫子の行を以て奚如んと爲すと。師金曰く、惜いかな而の夫子は其れ窮せん哉と。顏淵曰く、何ぞやと。金師曰く、夫れ芻狗の未だ陳ねざるや、盛るに篋衍を以てし、巾ふに文繡を以てし、尸祝齊戒して以て之を將ふ。其の已に陳ぬるに及んでや、行く者其の首脊を踐み、蘇者取つて之を爨ぐのみ。將た復た取りて盛るに篋衍を以てし、巾ふに文繡を以てし、其の下に遊居寢臥せば、彼れ夢みるを得ずば、必ず且に數〻眯せんとす。今而の夫子、亦先王の已に陳ねし芻狗を取り、弟子を聚めて其の下に遊居寢臥す。故に樹を宋に伐られ、迹を衞に削られ、商周に窮す。是れ其の夢むるに非ずや。陳蔡の閒に圍まれて、七日火食せず、死と生と相與に鄰す。是れ其の眯するに非ずや。

【訓讀】樂なるものは懼るゝに始まる。懼るゝが故に祟らる。吾れ又之に次ぐに怠るを以てす。怠るが故に遁る。之を惑ひに卒ふ。惑ふが故に愚なり。愚なるが故に道あり。道は載せて之と倶にすべきなりと。

【大意】一章の總收である。此に至つて始めて道字を出し、以て上に樂を說くは皆道に入る次第を說けることを明らかにす。林希逸曰く、前に懼怠惑を言つて未だ其の意をあらはさず。歸結の處に到つて方に愚にして以て道に入るべきを說く。この一轉尤も妙なり。蓋し人の道を求むることを須らく此くの如き境界を經歷して方に進步の處あるを言ふと。

【通釋】之を要するに予が樂を奏するには始めに先づ聞く者をして驚き懼れ、何物かに祟られて居るが如き感じを抱かしめ、次ぎに其の力及ばずして倦怠を覺え、果ては心力竭きて遁れ去らんとし、最後に聞かんと欲するも聞くに由なきが爲めに遂に疑惑に陷り、知識昏迷して愚となる、六識倶に亡びたる愚の境界に至つて始めて樂の至道を見出すことが出來、道を體得して我と道と同體一如の境に達するのである。

【語釋】懼故祟（羅氏の循本に云ふ「懼るゝ時は則ち精神之が爲めに森爽（ぞつとすること）鬼の祟りあるが若く然り、故に祟と曰ふ。」林氏の因本に祟に作りて尊なりと解す、是に非ず。）　○怠故遁（羅氏曰く「怠れば則ち心力疲竭して之を棄て去らんと欲す、故に遁と曰ふと。）　○惑故愚（又曰く「惑へば則ち知識昏迷す、故に愚と曰ふ」と。林希逸曰く「是れ意識倶に亡びて六用（眼耳鼻舌身意の六識）行はれざるの時なり」と。宣穎曰く「此くの如き五節の樂を論ずる妙文は引き來つてたゞ一箇の愚字の爲めにす」と）　○愚故道（知見は悟道の邪魔物、乃ち七竅滅し六識亡じて道を見る。宣穎曰く、「道を求むる者は一知半解、自ら用ふべきなきを見るべし」と。）　○道可ニ載而與レ之保一也（我と道と一體不二となるを云ふ。悟道の境界である。）

孔子西ノカタ遊ブ二於衞ニ一。顏淵問ウテ二師金ニ一曰ク、以テ二夫子之行ヲ一爲ス二奚ト一如。師金曰ク、惜イカナ乎而ノ夫子ハ

い。即ち見聞覺知一に自然に出で、作爲を弄することがない。之が上に謂ふ所の無方に動き窈冥に居る所の天樂とも謂ふべきものであつて、玄默の中、心自から悦樂に滿つる者である。されば樂の理、聖の徳其の旨は一であつて聖人を知らば斯に天樂を聞くことが出來やう。故に昔、有焱氏なる者があつて樂の頌を作りて「聽けども聲なく、視れども形なく、天地に充滿し、六合を苞裹す」と曰つて居る通り、其の玄妙かくの如くであるから、汝が之を聽かんと欲するも徒らに耳のみに依賴しては、之を聞き込むことは出來なくて卒に疑惑に陷つたのである。

語釋　無怠之聲(口義に、無怠は已まざるなりとあり。)　○若二混逐叢生一(副墨に、混逐は禽獸の類の如し、叢生は草木の類の如しとあり。口義には、萬物の叢生して混用して相追逐するが如しと。意同じ。)　○林樂而無レ形、布揮而不レ曳、幽昏而無レ聲(林樂、諸解多く林然として樂しむと解す、是に非ず。郭嵩燾曰く「說文に叢木を林と曰ふと、林樂とは相與に之を群樂するなり、五音繁會するも聲の從つて出づる所を辨ぜず、故に無レ形と曰ふ。揮とは振つて之を揚ぐること布の曳いて愈〻長きが若し、而も亦之を曳く者あることなし。林樂而無レ形とは其の聲聚まるなり。布揮而不レ曳とは其の聲悠なり。幽昏而無レ聲とは其の聲淡きなり。」)　○或謂二之死一云云(郭注に、物に隨つて變化すとあり。成疏に「夫れ春生じ冬死し秋實り夏榮へ、雲行き雨施し水流れ風從ふ。自然の理は日に其の變を新にし、至樂の道は豈に常主の聲あらんや。」)　○世疑レ之、稽二於聖人一(宣穎曰く「世この樂を疑はゞ何ぞ聖人に考へざる。蓋し聖人を知らば則ち樂を知らん」と。又曰く、「樂の理は聖の德と一なり」と。林西仲曰く「疑字下の惑字を生ず」と。)　○達二於情一而遂二於命一(成疏に、有物の情に通じ、自然の命に順ふとあり。或は以て遂を至ると解し、通ずと解す。亦通ず。林西仲は情を樂の情と解す。狹まし。萬物の情と解す、是なり。)　○天機不レ張而五官皆備(天が與へた五官の機能を故さらに意を用ひて使役せず、目の視、耳の聞くに任すとなり。成疏に「夫れ目は視、耳は聽き、手は把り、脚は行き、網を布き、丸を轉じ、空を飛び、地を走るは倣ふに由つて效すに非ず、之を造物に稟く。豈に意を措いて而る後よく爲さんや。」)　○天樂(自然の命なり。)　○有焱氏(焱、一に炎に作る。成疏に神農なりとあり。)　○苞裹(苞、一に包に作る。意同じ。)

樂也者、始二於懼一。懼故祟。吾又次レ之以レ怠。怠故遁。卒二之於惑一。惑故愚。愚故道。道可二載而與レ之俱一也。

謂ひ、或は之を實と謂ひ、或は之を榮と謂ふ。行流散徙して、常聲を主とせず。世之を疑はゞ聖人に稽へよ。聖なるものは情に達して命に遂ぐるなり。天機張らずして五官皆備はる。此を之れ天樂と謂ふ。言なくして心說ぶ。故に有焱氏之が頌を爲して曰く、之を聽けども其の聲を聞かず、之を視れども其の形を見ず、天地に充滿し、六極を苞裹すと。女之を聽かんと欲して接する無し。而故に惑ふなり。

大意 咸池第三奏の趣を說き、北門成が卒に聞きて惑へる理由を明かにす。宣穎曰く、其の渾沌渺茫、復た聲音を事とするに非ず、句々微に入るの至と。

通釋 咸池樂の第三奏に在つては專ら天道に循つたのであるけれども、猶ほ陰陽とか日月と云ふ如き分別の言ふべきものがあつたが最後の奏樂に至つては渾沌渺茫として之を奏するに恒久已むことなき天籟卽ち自然の命を以てしたのである。故に其の樂たる禽獸の混然として相逐ふが如く草木の叢然として茂生するが如く、樂聲一時に發して、而も其の由つて生ずる所を辨ぜず、又谷となく坑となく遍く天地に響き渡つても其の跡方を留めず、其の聲幽昏寂寥、視聽を超越して居る。之を要するに其の響き渡るや十方を窮め、而も又窈冥として其の聲を聞かない。故に之に耳を傾ける者は各々其の言を異にして、或は以て死と評し或は以て生と評し、或は以て實と評し或は以て榮と評して、一定する所がない。蓋し此の樂たる、物に應じ機に隨ひ千變萬化し、愈々出でゝ愈々玄、世の常の聲ではない。世人若し此の無聲の樂に疑ひを存するならば、彼の聖人に就いて考察をして見たがよい。乃ち聖人なる者は物情に通じ、天命に順ひ、五官各々其の職を致すに打ち任せ、自ら意を用ひて天與の機能を動かさうとしな

誤入に非ざるか。疑を存す。）　○儻然立二於四虛之道一、倚二於槁梧一而吟（口義に「四虛は卽ち太虛なり、我れ是の時に當て太虛の中に立つて、几に隱（よ）りて吟ず」とあり。槁梧は前に再出、几なり。几に隱ること齊論論にも見ゆ參照。儻然とは口義には無心の貌とあり。因て自失の貌となす。其の意略ぼ同じ。應帝王に塊然獨以レ形立の語あり。又下文と同じく吾弗レ及已、また吾與レ之虛而委蛇の語あり、此の章の着想亦應帝王壺子章と相似たり、參照。）　○委蛇故怠（委蛇の解、諸說あり。成玄英は應帝王の委蛇を解して從隨の貌と云ふ、今此の解に從ふ。林希逸は放弛（心のゆるむこと）と解し、宣穎は心遂に弛弱し、悍氣盡くと解す、亦通ず。）

吾又奏レ之以二無怠之聲一、調レ之以二自然之命一。故若二混逐叢生一、林樂而無レ形、布揮而不レ曳、幽昏而無レ聲、動二於無方一、居二於窈冥一。或謂二之死一、或謂二之生一、或謂二之實一、或謂二之榮一。行流散徙、不レ主二常聲一。世疑レ之、稽二於聖人一。聖也者、達二於情一而遂二於命一也。天機不レ張、而五官皆備。此之謂二天樂一。無レ言而心說。故有焱氏爲二之頌一曰、聽レ之不レ聞二其聲一、視レ之不レ見二其形一、充二滿天地一、苞二裹六極一。女欲レ聽レ之而無レ接焉。而故惑也。

訓讀　吾れ又之を奏するに、無怠の聲を以てし、之を調ふるに自然の命を以てす。故に混逐叢生するが若く、林樂して形無く、布揮して曳かず、幽昏にして聲無く、無方に動き、窈冥に居る。或は之を死と謂ひ、或は之を生と

是の故に鬼神も亦感應し、其の出居に安んじ、出でゝ妖をなすこと無く、日月星辰も皆其の軌道に循つて進み、運行を亂すことが無い。是れ予が樂を爲すに專ら天道に從つて、其の止むべきに至れば止み、止むべからざるに遇へば自然に放流し、少しも作爲を弄しないが爲めであらう。されば其の靈樂神韻の縹渺たる、汝が如何に之を慮らんと欲するも知る能はず、又望まんと欲するも見る能はず、逐はんと欲するも及ぶ能はず、見聞を超へ心知を絶して居る。予は此に於て儻然として自ら忘れ、四面玲瓏たる大虚の中に立ち、几に倚りて吟咏の三昧境に入る。此の神域はもとより目力心知の窺窬を容さない、目之を見んと欲するも能はず、知之を知らんと欲するも能はず、力之を逐はんと欲するも能はず、予自らも力及ばずして之を已めて仕舞つた。さて形が上の如く大虚中に溶け込めば、心も自ら物の成り行きに任せ順ふことになる。されば汝も予が神樂を聞いて到底力及ばざるが爲めに其の成り行きに打ち任せることにしたから、自から倦怠を覺えたのである。

語釋　奏レ之以二陰陽之和一、燭レ之以二日月之明一（天道に循つて奏する意、陰陽の和、日月の明と言ふは例を舉げたのに過ぎない。燭亦奏の意、下の明字に應ず、別に意あるに非ず。堯谷曰く「此に至りて更に前の一節よりも高く、漸く自然に入る、人の與るを得る所に非ず」と。）　〇不レ主二故常一（又曰く、「長短剛柔、次第に變化し、自ら一齊の律ありて、世人奏樂の法に循ふに非ず」と。口義には愈々出でゝ愈々新なりとあり。）　〇在レ谷滿レ谷、在レ阬滿レ阬、塗レ郤守レ神以レ物爲レ量（堯谷曰く「其の聲、處に隨つて遍滿す、蓋し聲の阬谷に滿つるは、皆其の往く所に從つて物と大小相稱ひ、以て剤量を爲さゞるなし。而して我は則ち其の聰明を黜ぞけ、獨り我が神を守り、初めより之が裁制を爲すに非ず」と。林希逸曰く「塗レ郤とは其の聰明を塞ぐなり、郤は隙と同じ、七竅を言ふなり、其の聰明を黜ぞけて、之を守るに神を以てし、萬物に隨つて之が剤量をなす。言ふ心は我が樂を作すや、智巧を用ひずして自然に循ふなり」と。）　〇其聲揮綽、其名高明（宣穎、曰く、「悠揚餘りありと」。秦鼎曰く「聲調閑緩、節奏分明」と。名字に就いては諸註明解なし、案ずるに歌詞を謂つて名と言ふにあらざるか 後考を待つ。）　〇鬼神守二其幽一、日月星辰行二其紀一（堯谷曰く「鬼神其の居に安んじ、出でて妖を爲すことあるなし。蓋し樂聲の美、鬼神を感ぜしむるあり。日月星辰皆其の軌に循ひ行を亂すことあるなし。亦天心に協ふことあるを言ふ。」）　〇子欲レ慮レ之云云（子字或は予字の誤となすも今姑らく舊を存す。案ずるに此の三句は下文目知云云の三句と重復す、其の何れか註文の

を爲す。其の聲揮綽、其の名高明。是の故に鬼神其の幽を守り、日月星辰其の紀を行く。吾之を有窮に止め、之を無止に流す。子、之を慮らんと欲して、知ること能はざるなり。之を望むも、見ること能はざるなり。之を逐うも、及ぶこと能はざるなり。儻然として四虚の道に立ち、槁梧に倚つて吟ず。目知は見んと欲する所に窮まり、力は逐はんと欲する所に屈し、吾れ既に及ばざるのみ。夫れ形、空虚に充つれば、乃ち委蛇に至る。女委蛇たり、故に怠る。

大意 咸池第二奏の趣を説き、北門成の之を聞いて怠りたる所以を解く。宣穎曰く、此の節、是れ中の一成なり、句々微に入る。委蛇の二字妙と。

通釋 咸池樂の第一奏に在つては之を建つるに太淸を以てしたけれども、之を奏するには猶ほ禮儀を以てしたのである。然るに第二奏に至つては更に一歩を進めて專ら天道に由つたのである。乃ち奏樂の基調を陰陽の調和とか、日月の光明と云ふ如き全く人事を離れたる純粹の自然道に置いて、樂を行つたのである。されば其の聲は短かるべきに短く、長かるべきに長く、柔かなるべきに柔かに、剛かるべきに剛く、其の音律の變化には自ら齊整統一があつて尋常平凡なる世俗の奏樂法に循はず、愈〻出で愈〻新である。且つ其の聲は隨處に遍滿し例へば谷に在つては谷に滿ち、阬に在つては阬に滿つと云ふ如く物の大少廣狹に應じて往くとして宜しからざるなく、處として遍からざるはない、然れども其の大小廣狹に應ずるには自ら智巧を用ひて能く爲すのでなくて、自らは專ら無爲の神域を守り、凡て其の劑量は物自身に打ち任せてある。されば其の聲調は悠揚迫らず其の節奏は高大分明である。

る如く、一箇の若字を用ひず、且つ吾驚之の三字を中間に挿入して隱然形容なるを知るべからざらしむ、此は是れ莊老が例の奇筆なり。林西仲曰く驚字は下の懼字を伏すと。）○一死一生、一僨一起、所常無窮、而一不可待、女故懼也（僨は仆なり。因に云ふ、死生僨起輾轉して常に窮盡するなしと。一不可待とは陳壽昌曰く「一境未だ測らざるに、一境復た轉ず、其の歸一の地を求めんと欲するも、未だ遽かに待べからず、故に一不可待と曰ふ」と。又曰く「初め至樂を聞いて但だ音容の變化、心目措くなきを覺ふ、故に悚然として神動くなり」と。）

吾又奏之以陰陽之和、燭之以日月之明。其聲能短能長、能柔能剛。變化齊一、不主故常。在谷滿谷、在阬滿阬。塗郤守神、以物爲量。其聲揮綽、其名高明。是故鬼神守其幽、日月星辰行其紀。吾止之於有窮、流之於無止。子欲慮之而不能知也。望之而不能見也。逐之而不能及也。儻然立於四虛之道、倚於槁梧而吟。目知窮乎所欲見、力屈乎所欲逐、吾既不及已。夫形充空虛、乃至委蛇。女委蛇、故怠。

訓讀　吾れ又之を奏するに陰陽の和を以てし、之を燭らすに日月の明を以てす。其の聲能く短能く長、能く柔能く剛。變化齊一、故常を主とせず。谷に在れば谷に滿ち、阬に在れば阬に滿つ。郤を塗ぎて神を守り、物を以て量

人の心に循つて之を奏し、天理に因つて其の音律を調べるのである、即ち節度に從つて之を行ひ、自然の道に依つて音調を定めるのである。之が咸池の第一奏を行ふ根本の道である。されば樂律の推移轉換するは恰も春夏秋冬の四時が順序亂れず迭に起り、萬物が其の時に循つて生ずる如く、少しも無理がなく極めて自然的である。其の音の或は高く或は低きは恰も春秋生殺の次序あるが如く、又其の聲の或は淸く或は濁れるは恰も陰陽二氣の調和あるが如くである。そして其の樂聲を流盛光大にする時は、之を聽く者、恰も蟄蟲が僅かに地上に這ひ出してまだ十分動けない時に忽ち雷霆の至るに驚くが如くである。且つ此の樂の終を求むるも尾なきが如く、其の始を求むるも首なきが如く、一音死すれば一音生じ、一聲仆るれば一聲起き、其の連續變化常に窮盡することがない。從つて其の逆に歸一する所を求めんと欲しても容易に得ることが出來ぬ。是れ汝が予の音樂を聞いて先づ心に懼れを懷いた譯である。

語釋　女殆其然哉（宣穎曰く、固より宜なり此くの如きことやと。）○奏レ之以レ人、徵レ之以レ天、行レ之以二禮義一、建レ之以二太淸一（下二句は上二句に應ず、其の意は同じ。人を以てすとは宣穎曰く、聲音の人心に本づくを言ふと。徵は音律を徵驗するなり、一本徵に作る、徵は調なり。徵に作る或は是なるが如し。禮は節文、義は裁制、音樂を爲すに節度を以て行ひ敢て亂行なきを謂ふ。太淸は口義に造化なりとあり、或は聲氣の元となす、其の意は同じ。郭注に云ふ、此に由つて之を觀れば、夫の至樂なる者は音聲の謂に非ざるを知るなり。必ず先づ天に順ひ、人に應じ、心に得て性に適ひ、然る後之を發するに聲を以てし、之を奏するに曲を以てするのみ。故に咸池の樂は必ず黃帝の化を待つて而る後成ると。宣穎曰く、「四句乃ち樂の體統なり」と。諸本多く太淸の下に夫至樂者、先應レ之以二人事一、順レ之以二天理一、行レ之以二五德一、應レ之以二自然一。然後調二理四時一、太二和萬物一。の三十五字あり。是れ宣穎等も云へる如く明かに注文の雜入せしものなれば今之を去る。案ずるに郭象此の三十五字に注せず、釋文亦音義なし。郭が原本恐らくは三十五字なし。又案ずるに林希逸本三十五字なく、又之を刪りたることを言はず。而して蘇穎濱は既に此の七句を以て注語の誤入となせしと謂へば、是れ宋時の注文の雜入なるものゝ如し、且つ天理の用語（養生主に所謂天理とは意自ら異なる）亦宋儒の臭味あり。）○文武倫經（口義に「發生は文なり、肅殺は武なり、倫經は次序なり。」宣穎は倫經を倫理經緯と解す亦通ず。文武は春秋の萬物を生殺する意。）○一盛一衰（文武倫經の句は下の一淸一濁、陰陽調和の句に對應す。鬳谷曰く、「聲の發して強くして急疾なる者を武となす、武は其の盛なる者なり、徐緩にして和平なるを文と爲す。文は其の衰ふる者なり。蓋し緩急皆秩序ありて相奪倫するなし」と。一說として存す。）○流二光其聲一（流光は流盛光大の意。）○蟄蟲始作、吾驚レ之以二雷霆一（上の流盛光大なる樂聲を形容せるなり、牧野氏も評せ

と。或は云ふ「不二自得一」とは不安の貌と、意同じ。）

帝曰、女殆其然哉。吾奏之以人、徵之以天、行之以禮義、建之以太淸。四時迭起、萬物循生。一盛一衰、文武倫經、一淸一濁、陰陽調和、流光其聲、蟄蟲始作、吾驚之以雷霆。其卒無尾、其始無首、一死一生、一僨一起、所常無窮、而一不可待。女故懼也。

訓讀 帝曰く、女殆んど其れ然らんかな。吾れ之を奏するに人を以てし、之を徵するに天を以てし、之を行るに禮義を以てし、之を建つるに太淸を以てす。四時迭ひに起り、萬物循つて生ず。一盛一衰、文武倫經し、一淸一濁、陰陽調和す。其の聲を流光にすれば、蟄蟲始めて作り、吾れ之を驚かすに雷霆を以てす。其の卒り尾なく、其の始め首なく、一死一生、一僨一起、常に窮するなき所にして、一は待つべからず。女故に懼るゝなり。

大意 以下黃帝の答であつて、先づ北門成の懼れた理由を說明す。宣穎曰く、此の節是れ第一成なり句々微に入ると。

通釋 そこで黃帝が曰はれるには「汝が吾が音樂を聞いて然うなるのも無理はない。予が咸池の音樂の第一奏は

して自ら誇るなりと、亦通ず。）　○至貴國爵并焉云云（陸西星曰く「至貴、我に在れば、則ち國爵も并はす、至富我に在れば、國財も并はす、至願我に在れば仁義も并はす。并とは兼ねて之を有するの意、以て至仁我に在る時は則ち孝悌諸凡、皆論ずる所に非ざるに喩ふ」と。陸氏は又一説をなして曰ふ、「并とは屏なり、凡そ屏去すべき者は變滅あり、道は則ち眞に藏して變ぜざる者なり、故に曰く、惟〻道は渝らずと」と。林西仲は前に從ひ、宣穎は後に從ふ。宣云ふ「并は猶ほ屏棄の如し、至貴我に在り、何ぞ爵に於てあらん、至富我に在り、何ぞ財に於てあらん、至願我に在り、何ぞ名に於てあらん。三句以て上八者の多とするに足らざるを明かす」と。又曰く、「屏ぞく可き者は皆變滅あり、道は變滅せず、此れ其の至貴なり、至富なり、至願なり」と。姑らく後說に從ふ。）

北門成問於黄帝曰、帝張咸池之樂於洞庭之野。吾始聞之懼、復聞之怠、卒聞之而惑。蕩蕩默默、乃不自得。

訓讀　北門成、黄帝に問うて曰く、帝咸池の樂を洞庭の野に張る。吾れ始めて之を聞いて懼れ、復た之を聞いて怠り、卒に之を聞いて惑ふ。蕩蕩默默として、乃ち自ら得ずと。

大意　此の章は五節より成り、音樂を借りて道體を說く。先づ北門成と云へる者が黄帝咸池の樂を聞き、始めに懼れ、次に怠り、最後に惑へる由を述ぶ。

通釋　黄帝の臣、北門成と云へる者が或る時黄帝に問うて曰ふには「帝が咸池の樂を洞庭の野に於て奏せられた際、私は始めに聞いた時は驚き懼れましたが、次に倦怠を覺え、最後には何が何だか解らなくなり、心は蕩々として定まらず、口は默々として言ふことが出來ず、どうも落着を得ませんが、何う云ふ譯なんでせうか。」

語釋　洞庭之野（宣注に云ふ、洞庭は循ほ廣漠の如しと。大湖の洞庭を指すに非ず。）　○蕩々默々、乃不自得（又云ふ、蕩々は神定まる能はず、默々は口言ふ能はず、不自得とは其の常を失へるなり。二句惑字を形容す

意識にのぼらないのは難しい。然しそれはまだ容易だが、親ばかりでない天下の人を擧げて忘れ而も自ら仁ならざるはないと云ふのは中々困難である。然しまだそれは容易であるが、天下萬民をして我が仁德を忘れしめ、帝力我に於て何かあらんと歌はしむるに至ることはなか〳〵困難である。」と曰はれて居る。全體仁と限らず至れる德と云ふものは、彼の堯舜の盛德などを遺れて爲すことなく、其の利澤は能く萬世に及びながらも、天下の萬民が之に氣づかない。それが至德の面目である、何にもコンマ以下の德を贊歎して仁よ孝よと言ふ必要はない。元來孝悌仁義忠信貞廉などの諸德は、皆自ら勉めて其の本然の德性を不自然に使役するのであつて、尙ぶに足らない。古語にも「至高の地位(道)が身に備はつて居れば國家の爵位などは棄てゝ顧みないし、至上の富(道)を有すれば社會の富などは問題にしないし、至上の願望(道)を滿たせば世俗の名譽などは何んともない」と曰はれて居る。されば國爵國財名譽などの滅し易く變じ易きに反して道は萬古に亘つて滅することなく、易ることなきもので、此の不滅不易の道こそ所謂至仁である。」

【語釋】 商(釋文に「司馬云ふ、商は宋なり」とあり、蓋し宋は殷の後、故に宋を言つて商と謂ふ。) ○虎狼仁也(成疏に「仁は親愛の迹なり、夫れ虎狼は猛獸、猶ほ相親むことを解す、萬類皆仁性あるを明かすに足る。」林西仲曰く「仁を問へば不仁なる者を擧げて以て仁と言ひ、至仁を問へば親なき者を擧げて以て至れりと言ふ。此の老の話頭、一段はなはだ情に近からざるの語を慣有す。」) ○至仁無レ親(正義に「謂はゆる親なければ、正に親まざる所なきなり。」) ○此非下過レ孝之言上也、不レ及レ孝之言也(此は至仁無親の語を指す。或は以て太宰の言を指すとなす、是に非ず。不及とは風馬牛不二相及一の意、至仁と孝とは遠くかけ離れて居るを曰ふ。陳壽昌に從へば「謂へらく、太宰未だ眞に至仁の孝に於ける、過ぐるありて及ばざるなきを知る能はずと、故に此の顚倒の說をなすなり」と。亦一說なり。) ○冥山(釋文に「司馬云ふ、北海の山名と。」) ○去レ之遠也(秦鼎曰く、至仁の孝に過ぐるの遠きに喩ふと。) ○以レ敬孝易、以レ愛孝難云(又曰く、愛より數へて至仁の階級に到る甚だ遠し、正に孝に過ぐるの故を發明すと。) ○夫德(宣注に云ふ、如上の兼忘の德を言ふと。) ○豈直太息而言二仁孝一乎哉(太息とは贊歎の聲なり。口義に太息して言ふとは嗟歎

て道は渝らずと。

大意 仁の問答より說き起し、道の不變不易にして、帝王たる者は唯當に道に順ふべきを論ず。宣穎曰く、たゞ道不レ渝の一句を取りて以て帝王たゞ當に道に順ふべきをあらはすなりと、

通釋 商即ち當時の宋に蕩と云へる宰相があつた。或る時莊子に仁の意義に就いて質問した。莊子が曰ふには「虎や狼は仁である。」太宰が「それは一體何う云ふ譯です。」莊子が更に曰ふには「虎や狼は恐ろしい獸であるが、それでも親子相親しむ以上は不仁とは云へまい。」太宰が「成程普通の仁はそれで解つた。更に御尋ねするが至極の仁は何んなものか。」莊子曰く「至極の仁は相親むことのないものである。」太宰曰く「私は親むことが無ければ愛せず、愛せなくば不孝となると云ふことを聞いて居るが、今尊公の曰はれる如く親むことのないのが至仁であると云へば、至仁は即不孝と謂つても差閊ないのか。」莊子曰く「いや〳〵、然うではない。全體至仁は極めて高尙なものであつて、孝なぞはトテモ之に較ぶれば言ふに足らないものである。私の所謂至仁無親とは至仁は孝よりも立ち勝つたものと云ふ意味でなく、孝とは風馬牛も相及ばぬと云ふ程かけ離れて居ると云ふ意味である。そも〳〵南方に旅行する者が楚の都郢まで行つて、其處から北面して冥山を望んでも見ることが出來ぬ、その譯は言ふ迄もなく冥山を相去ることが遠いからのことである。至仁と孝と相去ることも亦それ程である。されば古語にも「親を敬ふことによつて孝行するのは易いが、親を愛することによつて孝行するのは難しい。愛を以て孝行するのは易いが、親を忘れて自ら孝行であるのは難しい。親を忘れることは易いが、親をして我を忘れしめ、我が孝行が親の

遺堯舜而不爲也、利澤施於萬世、天下莫知也。豈直太息而言仁孝乎哉。夫孝悌仁義、忠信貞廉、此皆自勉以役其德者也、不足多也。故曰、至貴國爵并焉、至富國財并焉、至願名譽并焉。是以道不渝。

訓讀　商の大宰蕩、仁を莊子に問ふ。莊子曰く、虎狼は仁なりと。曰く、何の謂ぞやと。莊子曰く、父子相親しむ、何爲れぞ不仁ならんと。曰く、至仁を請問すと。莊子曰く、至仁は親しむこと無しと。大宰曰く、蕩之を聞く、親しむこと無ければ則ち愛せず、愛せざれば則ち孝ならずと。至仁を不孝と謂ふ、可ならんかと。莊子曰く、然らず。夫れ至仁は尙し。孝固より以て之を言ふに足らず。此れ孝に過ぐるの言に非ざるなり、孝に及ばざるの言なり。夫れ南行するもの郢に至り、北面して冥山を見ず。是れ何ぞや。則ち去ることの遠ければなり。故に曰く、敬を以て孝するは易く、愛を以て孝するは難し。愛を以て孝するは易くして、親を忘るゝは難し。親を忘るゝは易く、親をして我を忘れしむるは難し。親をして我を忘れしむるは易く、天下を兼ね忘るゝは難し。天下を兼ね忘るゝは易く、天下をして我を兼ね忘れしむるは難しと。夫れ德堯舜を遺れて爲さず、利澤萬世に施して、天下知ること莫し、豈に直、太息して仁孝を言はんや。夫れ孝悌仁義、忠信貞廉、此れ皆自ら勉めて以て其の德を役するものなり、多とするに足らざるなり。故に曰く、至貴は國爵を并け、至富は國財を并け、至願は名譽を并くと。是を以

し」とや丶孕に似たり、解せずして可なり。たゞ北を言ひて南を言はず、上るを言ひて下るを言はざるは省文のみ。彷徨は往來四周の貌。）　○噓吸（成疏に猶ほ吐納の如しとあり呼吸に同じ。）　○披拂（又云ふ「猶ほ扇動の如し」と。）　○巫咸祒（成疏に「巫咸は神巫なり、殷の中宗の相となる。祒は名なり。」宣穎は祒を招字の訛となす。陳壽昌は詔に通ずとなす。應帝王に季咸の名見ゆ。參照。）　○六極五常（成疏に「六極は六合を謂ふ、四方上下なり、五常は五行を謂ふ、金木水火土なり。」呂注には下文の九洛を書經洪範の九疇洛書と解するに因つて、此の六極五常を亦洪範の六極五福と解す。陸西星は五運六氣と解し、林西仲、宣穎、陳壽昌皆之に從ふ。今姑らく成疏に從ふ。）　○逆レ之則凶（凶字は上の巫字より來るか。上の治字亦吉の意。）　○九洛之事云云（上に注する如く、呂注は九洛を以て洪範の九疇洛書のことゝなす、陸西星、陸樹芝、宣穎、林西仲、陳壽昌、郭嵩燾、兪樾皆之に從ふ。成疏には「九州聚落の事なり云云」とあり、林希逸は之に從つて曰ふ「九洛は九州なり、洛は聚洛なり、洛は落と同じ、古字通用。治成德備とは言ふ心は帝王此の自然の理に順つて以て九州を治むれば功成りて德備はる。天下を照臨して人皆之を戴く。」戴字郭本載に作る、覆本、因本、宣本皆戴字に作る。今之に從ふ。）　○上皇（甕谷曰く「皇王の最上なる者を謂ふ。」）

商太宰蕩問二仁於莊子一。莊子曰、虎狼仁也。曰、何謂也。莊子曰、父子相親、何爲レ不レ仁。曰、請問二至仁一。莊子曰、至仁無レ親。太宰曰、蕩聞レ之、無レ親則不レ愛、不レ愛則不レ孝。謂二至仁不孝一可乎。莊子曰、不レ然。夫至仁尙矣。孝固不レ足二以言一レ之。此非レ過二孝之言一也、不レ及二孝之言一也。夫南行者至二於郢一、北面而不レ見二冥山一。是何也。則去之遠也。故曰、以レ敬孝易、以レ愛孝難。以レ愛孝易、而忘レ親難。忘レ親易、使二親忘一レ我難。使二親忘一レ我易、兼二忘天下一難。兼二忘天下一易、使二天下兼忘一レ我難。夫德

月は同じ道を先きを爭つて走つて居る如くに見ゆるが、此の宇宙の活動は一體誰が主となつて行り、誰が之を締めくゝり、又誰が無事安居して之を推し進めて居るのであるか。臆ふにそれは何處かに其の本源があつて已むを得ず動き出したのであらうか、そして一旦運轉し出した以上は自身の力で止まることが出來ないのであらうか。又雲が雨となるのか、雨が雲となるのか、要するに一上一下、循環して止むことがないが、これ亦誰が雲を興し雨を降らすのか、誰が無事安居して戯れ半分に之を行つて居るのであらうか。又風は北方に起つて、或は西に或は東に、或は又下より上に吹き上り四方八方にサマヨフのであるが、一體誰が吐いたり吸つたりするのか、誰が無事に居て風を煽動するであらうか。かくの如き大自然の現象は何に由つて起るか、其の本づく所畢竟如何。咸紹と云へる巫が吾が此の間に答へて曰ふには「いざ、汝に其の理由を語らう。元來天には六極とて上下四方と云ふ空間があつて其の間に木火土金水の五行が行はれて居る、之れは何物かの作爲に由るのでなくて自然にして然かるのである。帝王たる者は此の自然の道に順つて行けば治まり、之に逆へば凶である。從つて九州を治むるにも自然の理法に順へば、功成り德備はり天下を照臨して萬民自から之を推戴するのである。之をば至上の帝王と謂ふ。」

語釋 爭二於所二（循本に「日月黃道を同うす、故に所に爭ふと云ふ。」宣注又云ふ「道を同うして相逐ふ。」副墨にも「日月往來して其の間（天地）に爭馳す。」大意皆同じ。一說には所は地位なり、日月其の地位を爭ふと、今取らず。） ○居二無事一（陸西星謂へらく「此の三字最も妙、蓋し主張維綱は猶ほ有爲に涉る、無事に居れば全く漠然として爲す所なし」と。） ○機緘而不レ得レ已邪（陳壽昌曰く「其れ之をして然らしむる者あるか、凡そ物の發動する處を機と曰ひ、收束する處を緘と云ふ」と。即ち物の始終、本源の意。） ○隆施（宣穎曰く「隆は興なり雲を指す、施は雨を指す」。即ち雲を興し雨を降らすこと。） ○淫樂勸レ是（副墨に「雲雨は陰陽和氣の成す所。故に以て造化の淫樂となす」とあり。宣注、正義皆之に從ふ。稍〻淫字に拘はるに似たり。口義には「淫は放なり、樂は戯劇なり、言ふ心は何人が放意戯樂の事を爲して此の雲雨を助成す」とあり。此の解之を得たり。相州江の島邊に放樂と云ふ方言あり、意相似たり。） ○風起二北方二云云（副墨に「先づ北方を言ふものは、北方地高し、陽亢して戰ふ、故に風多

天有六極五常。帝王順之則治、逆之則凶。九洛之事、治成德備、監照下土、天下戴之。此謂上皇。

訓讀 天其れ運るか、地其れ處るか、日月其れ所に爭ふか。孰れか是を主張する、孰れか是を維綱する、孰れか無事に居り推して是を行れる。意ふに其れ機緘有りて已むことを得ざるか、意ふに其れ運轉して自ら止まること能はざるか。雲なるもの雨となるか、雨なるもの雲となるか。孰れか是を隆施する、孰れか無事に居て、淫樂して是を勸むる。風北方に起り、一西一東、上ること有つて彷徨す。孰れか是を噓吸する、孰れか無事に居て是を披拂する。敢へて問ふ何の故ぞ。巫咸祒曰く、來れ、吾れ女に語らん。天に六極五常有り。帝王之に順へば則ち治、之に逆へば則ち凶。九洛の事、治成り德備はり、下土を監照し、天下之を戴く。此を上皇と謂ふと。

大意 帝王の治は無爲自然に從ふべきを說く。但、敘述の法、極めて奇、自ら許多の問を設け、更に古人を設け爲して以て之に答へしむ、尋常の企て及ぶ所でない。宣穎評して曰く、突然として起り、參差として錯落す、疏雨の蕉に點ずるの聲の如しと。又曰く、五箇の孰字、定めて之を承當する者あらん、這箇の主人を尋ね出さば宇宙の歸依と爲す可きなりと。陸西星も亦曰く、重々造化を徵問し、人に一箇運化の主宰を求め得て、以て君道の準を立てんことを要す。數孰字、甚だ滋味ありと。

通釋 さても不思議なことだ、あの蒼々たる天は日夜の別なく運行し、漠々たる大地は萬古に亙りて靜止し、日

莊子新釋　下卷

文學士　坂井喚三　著

外篇　天運第十四

叙説　此の篇、說く所亦上の天地天道二篇の意に同じ。陸西星曰く、此の篇に論ずる所は、天地帝王の道は無爲を貴んで有爲を賤み、道德を重んじて仁義を輕んずと。

天其運乎、地其處乎、日月其爭於所乎。孰主張是、孰維綱是、孰居無事推而行是。意者其有機緘而不得已邪、意者其運轉而不能自止邪。雲者爲雨乎、雨者爲雲乎。孰隆施是、孰居無事淫樂而勸是。風起北方、一西一東、有上彷徨。孰噓吸是、孰居無事而披拂是。敢問何故。巫咸袑曰、來、吾語女。

寓言第廿七……四三九
讓王第廿八……四五五
盜跖第廿九……四九五
說劍第三十……五三七
漁父第卅一……五四九
列禦寇第卅二……五六九
天下篇第卅三……五九七

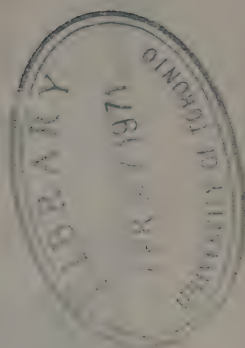
山木第二十……一六三
田子方第廿一……一九七
知北遊第廿二……二三三

雜篇

庚桑楚第廿三……二七七
徐無鬼第廿四……三一七
則陽第廿五……三七三
外物第廿六……四一三

莊子新釋 下卷 目次

外篇

天運 第十四……一
刻意 第十五……四三
繕性 第十六……五三
秋水 第十七……六五
至樂 第十八……一〇九
達生 第十九……一二九

莊子新釋
下卷
文學士
坂井喚三著

大禮記念

昭和漢文叢書